

これが土屋家の日常

らじさ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ムッツリーニ×工藤さんが好きすぎてSSに手を出してしまいました。

純情なはずの工藤さんが毎回大暴走。

途中から土屋家御一行様やら兄貴たちの彼女やらが出てきて事態は更なる混乱へ。

アルカディアで掲載していましたが、諸事情によりこちらにお邪魔いたします。

# 目次

## 1. 二人とゴンドラと遊園地

第1話 1

第2話 4

第3話 7

第4話 11

第5話 14

第6話 18

第7話 24

最終話 29

## 2. 彼と彼女と屋上ランチ

第1話 34

第2話 36

第3話 38

第4話 42

第5話 45

第6話 48

第7話 51

第8話 56

第9話 60

第10話 64

最終話 69

## 3. 風邪とカレーとファーストキス

第1話 73

第2話 76

第6話

第5話

第4話

第3話

第2話

第1話

5. 彼女とデートと理想のカップル

最終話

第8話

第7話

第6話

第5話

第4話

第3話

第2話

第1話

4. 二人とケンカとお夕飯

最終話

第9話

第8話

第7話

第6話

第5話

第4話

第3話

149

145

142

140

137

135

131

128

126

123

120

116

111

108

105

102

97

95

91

89

84

81

78

第5話	233
第4話	230
第3話	227
第2話	223
第1話	220

7. ライブとロシアと愛のボルシチ

最終話	216
第11話	213
第10話	209
第9話	205
第8話	201
第7話	197
第6話	194
第5話	191
第4話	187
第3話	183
第2話	179
第1話	175

6. 恋とケーキとキューピッド

最終話	170
第11話	165
第10話	162
第9話	159
第8話	156
第7話	152

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	8. み籤と仲間と温泉旅行	最終話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話
327	324	321	318	314	311	307	303	299	295	288	288	284	279	276	273	269	265	261	257	253	249	245	240	236

第11話

331

第12話

335

最終話

339

〜 閑話休題 〜

終わりました

344

9. 友と初恋とシエークスピーア

第1話

345

第2話

349

第3話

352

第4話

356

第5話

360

第6話

364

第7話

367

第8話

371

第9話

375

第10話

379

第11話

382

第12話

386

第13話

390

第14話

394

第15話

398

第16話

402

第17話

405

第18話

409

最終話

412

10. 伊賀と忍者と妹と

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

最終話

11. 友と戦と全校戦争

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

496 492 488 483 480 477 473 469

466 463 459 456 453 449 446 443 439 435 431 427 422 418 415



第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	12・浮気と仲間とバースデイケーキ	最終話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話
591	587	583	579	576	572	569	565	561		556	552	548	544	540	536	532	527	523	519	516	512	508	505	500

第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	13. みんなとカップルとクリスマス	最終話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話
685	681	676	672	669	665	662	657	653	649	645	641	638	635	631	628	624	620	616	612	608	603	599	595	

第15話

第16話

最終話

14. 彼と夫と花嫁修業

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

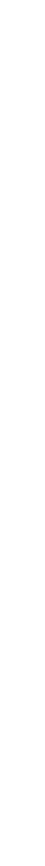
第17話

第18話

第19話

第20話

第21話



689

693

696

701

704

708

713

718

722

726

729

733

736

739

742

746

750

754

758

762

766

769

773

777

最終話

15・父と弟と日本襲来

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

第22話

第23話

781

785

789

793

796

799

803

807

810

813

817

821

824

827

831

835

839

843

846

850

854

858

862

866

第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	16・刺激とマンネリとランダムデート	最終話	第27話	第26話	第25話	第24話
959	954	951	948	945	942	938	933	929	924	919	915	911	908	904	901	897	893	889		884	881	877	873	870

第  
2  
9  
話

第  
2  
8  
話

第  
2  
7  
話

第  
2  
6  
話

第  
2  
5  
話

第  
2  
4  
話

第  
2  
3  
話

第  
2  
2  
話

第  
2  
1  
話

第  
2  
0  
話

998 995 992 986 982 977 973 969 965 962

# 1. 二人とゴンドラと遊園地 第1話

土屋康太は眠れなかった。

枕元に積み上げられた数十冊の本を眺めそのうちの一つを手に取って頁を開いてみた。「彼女を落とせる夜景のキレイな店100」。想像した何かを振り払うかのように頭を振ると布団に寝転がった。

「……明日だ、ウツ」

鼻血を吹き出すところを危うくこらえた。枕元のクーラーボックスに目をやってみる。そこには輸血パックが詰まっているはずだ。数に余裕は持たせたつもりだが油断はできない。輸血パックの枯渇はすなわち死を意味する。こんなところで使っている場合ではない。

工藤愛子は眠れなかった。

普段は部活で疲れていることもあり、ベッドに入るとすぐに寝入ってしまう彼女だったが、今晚だけは興奮して眠れそうになかった。

「……明日か、キヤアキヤア」

いつも抱いている抱き枕を体中で抱きしめて、ベッドの上を転がりまわった。美波や瑞樹や翔子はムツツリ商会でお目当ての抱き枕を手に入れているが、彼女の欲しい抱き枕だけは扱ってなかったし、事情があつて注文することもできなかった。そこで自分で写真を撮つて中学の友人に作ってもらった大事な抱き枕。視線を枕に落とししばらく睨んでいたが、急に顔が真っ赤になりました「キヤアキヤア」とベッドを転がり回る。夜がふけていく。

土屋・工藤「明日はデートかあ」

吉井明久は眠れなかった。いや、目さえ閉じればすぐにREM睡眠に入れる自信はあるのだが、眠ろうとすると左側に寄り添うように座った快活そうなスリム(美的表現)な少女が腕関節を極めてむりやり目を覚まさせるのだ。

「眠ってんじゃねえぞ明久」悪友の雄二が言う。

「いいか、翔子情報によれば、明日はムツツリーニと工藤のデートの日だ」

霧島さん情報ならば信用できるだろう。わからないのは、僕がなぜここにいるかだ。いや、僕だけじゃない、霧島さんは当然としても、秀吉、美波に姫路さんまで集められている。雄二は何をしようとしているんだろうか？

「ムツツリーニのデートはわかったけど、なんで僕たちが集められたのさ」

疑問をぶつけてみた。みんな頷いているところを見ると誰も事情を聞いてないらしい。

「お前ら、友達の初デートだぞ。成功させてやりたいとは思わないのか」

「雄二がムツツリーニのことをこんなに考えていたなんて感動したよ……で、本音は？」

「あいつらがカップルになると俺へのFFF団からの追及が少なくなる」

「さあ、みんな帰ろうか。あ、姫路さんと秀吉は遅いから送っていくよ」

「いや、ちよつと待て。つい本音が……いや、言い間違っただけだ」  
「どんな言い間違いよ」

すかさず美波がツツコむ。どうもFクラスに入ってツツコみスキルが飛躍的に伸びたみたいだ。これくらい胸の膨らみも逆に曲げられて可動域の限界まで……

「いたたた。美波ギブギブ。いきなりなにをするのさ」

「アキからよからぬオーラが漂ってきたのよ」

「オーラの気配だけで肘関節極められちゃかなわないんだけど」

「それより坂本。ムツツリーニのデートに協力してもうちにメリットないじゃない」

「ふむ、確かにメリットはないな、メリットは」

「あの〜といたします」と姫路さんが恐る恐る尋ねる。

「メリットはないがデメリットならある。もしデートが失敗すれば、



傷心のあまり最悪ムツツリ商会はツブれるな」

「やるわよ瑞樹」

「ええ、頑張りましょう美波ちゃん」

何やら美波と姫路さんの利害が一致したようだ。その時、トゥルルルルと携帯の呼び出し音が鳴った。

「……………はい……………久保。どうしたのこんな夜中に……………えっ僕の力が必要な気がした?……………大丈夫」霧島さんは僕を見つめながら話している。「……………ありがとう、じゃあ」

霧島さんは電話を切ると

「……………吉井、久保はいい人」と霧島さんは僕を見つめ続けて言った。

うん、久保君がいい人だつてのはよくわかっている。A組2位なのに要観察者の僕にでも優しくしてくれる。雄二とは、大違いだ。だが、相変わらず僕にメリットがないことは間違いはない。ここはキツパリと断ろう。ムツツリーニ?誰それ美味しいの?FFF団に通報しないだけ優しいと思つて欲しいというか通報すべきなんじゃないだろうか?

「じゃ雄二、僕は用事があるんで失礼するよ。みんなも余り遅くうろうろううう」

美波が僕の背中にまたがり僕の背骨を信じられない角度まで曲げたおした。

「なに帰ろうとしているのよ。あんたも協力しなさい」

「いや、早く帰らないと姉さんがあああああああ」

「お前はどれだけ鶏頭だ。一昨日玲さんアメリカ出発パーティーしただろ」

思い出した。姉さんがアメリカの学会に参加するというので送別会をしたんだ。確かクツキーを口に入れた瞬間に姫路さんの「あ、それ私が作ったんです。お味はどうですか?」という嬉しそうな声が出て、周囲が暗くなって気が付いたここにいたんだ。

## 第2話

それにしてもクッキー1個で2日も気絶させるなんて、姫路さんの料理の腕は着実に悪い方向に上達している。というより、2日も気絶していた僕を放っておいて、みんなが当たり前のような顔をしているのが恐ろしい。さすがはFクラスと言わざるを得ない。

「まあ、そんなことよりムッツリーニのデートだ。翔子情報によると明日10時に如月ハイランドの入口で待ち合わせだそうだ」

「如月ハイランド……どこかで聞いたことがあるような」

「……私と雄二の思い出の場所。二人が永遠の愛を誓った聖地。子供を36人産もうって契ったところ」

「待て翔子。いろいろと回想がおかしい。言っていることのほぼ80%が捏造だ」

「……雄二、酷い。お父さんは冷たいね。しょうゆ」霧島さんはお腹を撫でながら雄二を恨めしそうに見つめた。

「話が進まないので無視する。我々の使命は、2人のデートをサポートし、最終ゴールの観覧車に導くことだ」

「なんで観覧車なんですか？」と姫路さんが尋ねる。

「デートの最後に観覧車のゴンドラの中で愛を告白すると結ばれるという伝説が、ググウ」

「なんですってええ〜」興奮した美波が雄二の襟を締めあげる。

うんうん、雄二もたまには僕の苦しみを知るがいいよ。足で関節極めればもつといいけど。

「ゴホゴホ、落ち着け。そういう伝説を如月アイランドが作りたがっているという話だ」

「つまり……?」

「遊園地側が意図的に流した噂だな。だいたい最近オープンして早々にそんなに都合よくカップルができるか。まあ、信じるバカはそうはいないだろうが」

「そっだったんですかあ〜」

美波と姫路さんがガツクリと肩を落とした。そうはいないはずの

バカが身近に二人もいた。

「協力することはやぶさかではないが、誰かこの中でデートの経験がある者がいるのかのう」それまで黙っていた秀吉が口を開いた。

「……」

全員沈黙した。高二にもなつてデートのひとつも経験がないなんて何て情けない連中だろう。姉さんと美波と姫路さんの厳しい監視下に置かれている僕は別として……冷静に考えてみれば何で僕はこんな厳しい監視下に置かれているんだろう。

ちよつとシミュレーションしてみよう。監視網をかいぐつて誰かとデートして家に帰ってくる(デート内容は想像力が追い付かないので省略)。

リビングには姉さんと美波と姫路さんがいて僕を見ると姉さんが「おかえりアキくん。『デート』は楽しかったですか。じゃあ、どの指がいいか選びなさい」と優しく微笑み。美波が僕に全力でサソリ固めを決めて、叫ぶ僕の口に姫路さんが優しく「明久君、今日は『デート』でお疲れでしょう。栄養のあるごはんを作っておきましたからたくさん食べて下さいね」と料理を突っ込む。

……うん、人間つて一生デートしなくても生きていけるんじゃないかな、きつと。

「……しょうがない。経験豊富な私が教えてあげる」霧島さんが心なしか自慢気に言った。

「へえ、翔子お前デートなんかしたことあるのか」雄二が言った。

「……酷い雄二。一昨日も楽しくデートしたのに忘れたの」

「翔子、もしかしてお前のいうデートというのは、廊下で後ろからいきなりクロロホルムをかがせて気絶させて、自宅の監禁部屋に連れ込んで椅子に縛りつけることを言うのか」

「……楽しい時間だった」

「お前は国語が苦手らしいな。あれはデートではなく「拉致監禁」っていうんだ我が国では」

「……でも二人きりだった」

「二人きりを何でもデートという言葉で片付けるんじゃないやねえ」

前から思ってたんだけどもしかして霧島さんって勉強以外はFクラスでも底辺レベルなんじゃないだろうか。

「デート経験がない者ばかりが集まって話し合っているかもしれないが、あんなにいいじゃないか」と吉が提案した。

「そうだな。よし、じゃあ明日は適当に変装して……ちなみに明久、女装は止めろよ」

なんて失礼な。僕は好き好んで女装したことなど一度もないのに。なぜ姫路さんは残念そうな顔をしているんだろう。

「奴らは10時に如月ハイランドの入り口で待ち合わせだ。だから俺たちは9時半に入り口の道向かいのコンビニに集合だ……ちなみに明久、来なかつたら島田を迎えにやる」

だから雄二が何でいち僕に注意をするのかわからない。ただ僕は今日は徹夜でゲームをして、明日はゆっくり眠るつもりだっただけなのに。

「よし、じゃ今日は解散だ。ゆっくり寝ろよ」

姫路さんが何か考え込んでいた。

「姫路さんどうしたの帰ろうよ」

「え？ああ、はい。ちよつと考え事を」

僕たちは雄二の家の玄関を出た。霧島さんの姿が見えないけど、家は近くだし構わない。雄二の部屋から何か叫び声が聞こえた気がしたが、気にしないことにした。

### 第3話

帰宅した僕は、不本意ながら目覚まし時計を3個セットした。あの様子では、寝坊して9時半になった途端に美波が部屋のドアを蹴り破って乱入してくることは火をみるより明らかだからだ。普段は姉さんの邪悪なキスのおかげで無理やり起こされるのだが姉さんがない今、玄関と部屋のドアを守るにはこの方法しかない。

翌朝、9時半ちよつと前に集合場所のコンビニに着いた。変装はサングラス一つで十分だ。どうせムツツリーニも工藤さんも緊張して周囲に気を配ることなんてできないだろう。コンビニにはすでにみんな到着していた。秀吉を除いて全員がサングラスをしている。いくらなんでも安易なんじゃないだろうか？全員並んだらブルースブラザースかMIBだ。

「明久、お前の変装ってそのサングラスだけか」

「そういう雄二こそサングラスだけじゃないか。秀吉を見習いなよ。きちんと男装して、完璧な変装じゃないか」

「ワシは普段着じゃ。そもそもお主らは、いつもワシのことを男扱いをせずに……」

「あの二人はさつきからずーと何をしてるのかしら」と美波が不思議そうに言った。

遊園地の方をみると入口を真ん中にして、左端の壁の角に工藤さん、右端の壁の角にムツツリーニが身を隠すようにしていて、時々顔を出してはチラチラと入り口の方の様子を伺っている。

「いや、俺と翔子は9時前にここに着いたんだが、その頃からずーつとあの調子なんだ」と雄二が言った。

「ということは1時間前からあの謎の行動を続けているということになる。」

「わしは経験がないからわからないのじゃが、あれがデートの作法なのかの」

「多分、違うと思うんだが否定できるほどの経験と根拠がない。その時、霧島さんが言った。」

「……もしかして愛子は」

「何か心あたりがあるのか翔子」

「……前に愛子が言っていたことがある。ドラマでデートの場面があつて、男性が待っているところに、女性が駆け寄って息を弾ませながら「ごめん待たせちゃった？」と謝ったら、男性が「いや、俺も今きたところだ」とさりげなく言ったのが「カッコいいよね、キヤアキヤア」と」

キヤアキヤアが台本読むように棒読みだったのが気になるけど、なるほど工藤さんなら好きそうなパターンだ。だからムツツリーニより後に来ようと様子を伺いつつ隠れて待っていたのか。

「なるほど工藤の理由はわかった。だがムツツリーニは何だ」

「うーん、単に先に待っている工藤さんに「ふっ、待たせたな工藤愛子」ってハードボイルドを気取って、自分はそれほどデートなどしたくないとアピールしたいだけなんじゃないかな」

どうせムツツリーニのことだから、それほど深い考えがあるわけじゃないだろうFクラスだし。

「つまり、あいつら二人とも理想の待ち合わせパターンに持ち込もうと二人して1時間以上もあんな馬鹿なマネをしているというわけか」

全員 「「「くっ、くだらない」「」」」

「とにかくこのままじゃ、あいつらのデートは永遠に始まらない。下手すりゃ閉園時間まであのままだ。この際多少強引だが二人を待ち合わせ場所に連れ出す。俺たちもカップルでたまたまデートに来ていて、それぞれを偶然見かけたという設定で無理やり入り口まで連れてこよう。ムツツリーニは、俺と翔子が連れていく。工藤は……」

「わかっているよ。僕と秀吉だね」

おや、体が持ち上げられて、そのまま背後に加速度をつけて後頭部が床に叩きつけられる。うん、これは投げっぱなしジャーマンだね。「なんでカップルと言っているのに、あんたと秀吉なのよ。カップルって男と女でしょ。秀吉は秀吉じゃないの」

「だから、それを言うなら秀吉は男だからと言ってくれんかのう」

「とにかくアキはウチと愛子を引っ張りだすわよ」

姫路さんをチラツとみたら、なんか眠そうで心ここにあらずといった感じだった。

「とにかくもうすぐ10時だ。左右に別れて偶然を装って、無理やりにも入り口まであの二人を引っ張ってこい。秀吉と姫路は、後から入場してそつとついてこい」

僕と雄二達は、こちら側の歩道をぐるりと回って、二人の後ろからそれぞれ回り込んだ。二人とも入り口の方に意識を集中していたから背後を取るのには簡単だった。

「愛子、何してるの」美波が工藤さんの肩をポンと叩いた。

「ヒヤッ」と工藤さんが1mほど飛び上がった。

「そんなに驚くことないじゃない。ずいぶんオシヤレしちゃってデートかしら」

美波がニヤニヤ笑いながら尋ねたけど目が全然笑ってない。全部事情を知っているくせにこの質問。他人がデートしていることがよほど気に入らないらしい。自分も好きな人とデートすればいいのに、工藤さんがかわいそうになる。

「いついや、べつにデッ、デートってわけじゃ。ただ、遊園地に遊びに来ただけで」

「あら、そうなの。じゃ、さっさと入りましょう。入り口まで一緒に行きましょう」

「美波、ボクちよつとここで待ってなきゃいけない理由が……だから無理やり引っ張らないで」

今日の美波は容赦がない。嫌がる工藤さんを無理やり引きずって入り口方面に引っ張っていく。それにしても確かに今日の工藤さんの服装は可愛い。ピンクのキャミソールの上に薄い水色のカーデigan。ミニのスカートに白いショートソックス。これならムツツリーニもきつと……

「即死するね」

「即死するわね」

まあ、それならそれで早く帰れるから問題はない。とりあえず工藤さんを入り口まで連れていけば僕らのミッションは終了だ。

入り口近くまで行くと雄二と霧島さんに挟まれたムツツリーニが無然とした顔で立っていた。こっちはこっちで計画を邪魔されて気に入らないのだろう。だけど、二人の計画が始まるのを待っていたらいつまでたっても僕らが帰れないという事情を理解して欲しい。説明してないけど。

雄二たちの20mほど前に来たときに、工藤さんが美波の手を振りほだき姿勢を正した後、ムツツリーニの方に向かって走りだした。手前1mくらいで立ち止まり、膝に手をあてて体をかがめてから顔だけあげてこう言った。

「ハアハアハアハア。待った？」

全員 「ハアハア？」

何で水泳部のエースが20m走ったくらいで息が切れてるのかとか、待ったも何もムツツリーニが雄二達に引きずられてくるのが見えていたはずだとか、そういう事実を完全に無視して工藤さんは強引に当初のシナリオ通りにデートを進めるつもりらしい。恐るべき強者と言わざるをえない。

「……ふっ、うぬぼれるな工藤愛子。俺は偶然ここに（ブウ）」  
工藤さんの可愛い恰好を見たムツツリーニがさっそく鼻血を盛大に吹き出した。

「デート開始30秒で大量出血か。デートが6時までとして……確実に死ぬな。とりあえずムツツリーニが持っているクーラーボックスに輸血パックが入っているはずだから輸血しとけ」

たまたまそこに来た秀吉が手慣れた様子でムツツリーニに輸血をしてやる。Fクラスにいたら勉強はともかく、いらぬ技術だけはイヤというほど身につくなあ。



## 第4話

やがて輸血で息を吹き返したムツツリーニは、立ち上がって何事もなかったように工藤さんに向かって言った。

「……今日は思ったより気温が高い。のぼせてしまったようだ」  
さすがムツツリーニだ。この状況でこれだけ見え透いた嘘をここまで堂々と言い切れる男は世界に二人とはいえないだろう。それにしてもこの二人には周囲を取り巻く僕や雄二、秀吉、美波、姫路さん、霧島さんが風景にしか見えていないようだ。変装する必要はなかった気がする。

「だっ、大丈夫そうだね。じゃ行こうか。ボク切符買ってくるよ」

「……舐めるな工藤愛子。女に奢られるなど男の恥だ。昨日、偶然ウチに来た新聞屋が置いていった切符がちょうど2枚ある。これを使う」

二人は、全く僕たちに見向きもせずに入口から園内へ入っていった。待ち合わせに僕たちの手を借りたことすら記憶にないようだ。ムツツリーニはともかく工藤さんは本当にAクラスなのだろうか？ なんとというか、ある意味非常にお似合いの二人と言えなくもないような気がする。

「よし、俺たちも後を追うぞ」

「ねえ雄二、僕たちは本当にここにいる意味があるのかな」

「ウチもそう思う。なんかいい雰囲気だったし邪魔しない方がいいんじゃないの」

「いや、俺もそうしたいところなんだが……ちよつと気になることがあってな」

「気になることってなにさ」

「いや、杞憂ならそれに越したことはないが、とにかく二人をゴンドラに乗せなきゃならんのだ。無駄でも最後まで追おう。無駄に越したことはないからな」

結局、入場することになった。入場料が痛い。今月はゲームを買いすぎてピンチなのだ。

「ねえ、アキ。土屋は愛子に奢ってあげてたわよ」

美波が期待に満ちた目で僕を見ながら言った。無茶を言わないで欲しい。ウチの近所にはデートの前日に偶然訪問してきて、偶然デート場所の無料切符を人数分置いていってくれる都合のいい新聞屋なんていないのだ。

「ああ、入場券は買わないでいい。この間、コンテストで優勝した時に1日無料パスポートをもらっておいたから、これで入場する」

さすが雄二だ。自分の利害が絡んだ時には実に頼りになる。さつそく無料パスポートで入場し、二人の行方を追った。

いた!!この道は、どうやらジェットコースター「フジサン」に向かっているようだ。高さ100メートルから一気に下降するこのジェットコースターは、如月ハイランドの看板イベントの一つになっている。

「それにしても、あれはどう見てもカップルには見えんのお」

秀吉が呆れたように言った。無理もない、二人は5mくらいの歩道の端と端に別れて歩いているのだ。普通に見たら、偶然同じ方向に向かうただの無関係な通行人だ。さすがのFFF団でも、あの現場を押しさえたからと言ってムツツリーニを有罪にはできないだろう。

「ちっ、ムツツリーニもだらしねえ」

「いや、あながちムツツリーニのせいだけとは言えんようじゃが」

よく見てると、工藤さんが人波に押されてムツツリーニの方へ近づく、ムツツリーニが同じ距離だけ反対方向に離れ、ムツツリーニが人波に押されて工藤さんに近づく、工藤さんが反対方向に離れている。

「服に同極磁石でも仕込んであるんじゃないのか、あいつらは」

「……雄二、私にいい考えがある」

「翔子?あまり期待してないがとりあえず言ってみろ」

霧島さんがバックを探って何かを取り出した。

「……これ」

「これって手錠じゃねえか」

「……これなら離れたくても離れられない」

「問題は、どうすれば二人が自然にくっつけるかだな」

「……………鍵は私が持っているから大丈夫」

「これじゃとてもデートにならないし」

「……………本物だから素人では壊せない」

「だあああ、せつかく無視してやってんだからそつとしまつとけ」

「坂本、あんたたち普段何やってんの」

「ちよつとまで誤解するな。あれは翔子が勝手に持つてるだけだ」

「……………雄二のために準備しておいた」

「雄二、いつの間になんな大人の階段を」

「大人も子供も階段なんか昇っちゃいねえ」

「……………雄二がデートの時に抵抗しなければ、こんなものは必要なかった」

「いや、おぬしらしい加減に落ち着かんか。問題はあの二人じゃろう」

秀吉はいつも冷静だ。

## 第5話

僕は秀吉の冷静さに感心した。さすがに文月学園の「お嫁さんにした  
たい男生徒No.1」のタイトルを連覇しているだけのことはある。  
もやは三連覇は確定と言えよう。それにしても雄二にあんな趣味が  
あつて霧島さんとあんなことやこんなことやっていたなんて、友人と  
しては心苦しいがFFF団に報告しなくてはならない。高校生の本  
分を思い出させてやるのが本当の友情だよな。

「とにかくあの二人の距離を縮める。さっきの件であいつらに俺たち  
が全く見えていないことがわかった。かなり強引でもかまわないだ  
ろう。明久と秀吉はムツツリー二を、美波と姫路は工藤を両側から挟  
んで、道の中央に寄つて行け。適当な距離になったら真ん中の二人は  
外れて、ムツツリー二と工藤を外側から押し付けろ。あいつらが何を  
言つても無視しろ」

要するに無理やりくつつけるということだね。すでに作戦でも何  
でもないような気もするが、他にいい方法も思いつかないのでやつて  
みることにした。さっそくムツツリー二の後ろにぴったりと接近す  
る。普段のムツツリー二なら半径20メートル以内の気配を感じて  
警戒態勢に入るはずだが、今日は緊張のあまりムツツリー二は作  
動していないようだ。楽に背後を取れた。

美波と姫路さん達も配置についたようだ。よし！秀吉が左、僕が右  
側になってムツツリー二を挟み込み、そのまま道の真ん中まで誘導す  
る。

「・・・なんだ、何をやる離せ」ムツツリー二が力なく抵抗する。  
悪いが離せない。さっさとデートを済ましてもらわないとこっち  
が帰れないんだ。本当はこのまま観覧車まで誘導してやりたいくら  
いだ。

「なっなにこれ。離してよ」

向こうでは工藤さんも抵抗しているようだ。

よし、近づいてきた。秀吉がスツと外れ僕が押し込む。向こうでは  
美波が工藤さんを押し込んで、ムツツリー二と工藤さんの腕がピタリ

とくつついた。

「離せ、何を……うわ」

「なによ、やめ……きやあ」

「……」

「……」

二人が急に静かになった。

「えっと、これでいいんだよね」

「いいと思うんだけど、どうしてこんなに静かなの」

「よし、お前らよくやった」

「雄二、大丈夫かな。なんか工藤さん怒ってるんじゃない」

「大丈夫だ。二人をよく見てみる」

振り返ってみると、僕たちが離れても二人の腕はくつついたままだった。

「それだけじゃねえ。二人とも右腕と右足、左腕と左足が同時に出血している。嬉しさのあまり緊張してんだな」

嬉しさ？それはどうかな二人とも顔が引きつって脂汗を流しているんだけど。

「軍隊の行進みたいじゃのお」

「というか、いつまでくつついているつもりかしら」

「あれがデートというものですか？」

「いや、姫路あれを標準のデートだとは思わん方がいい」

「……デートというのは」

「翔子、お前のは標準どころか、どこの世界でも異常だから」

やがてフジヤマについたけど二人はぎくしゃくしたまま、コースターに乗り込んだ。

「さて、ここからなんだが……翔子、工藤はこういう絶叫系は平気か」

「……愛子は、ジェットコースターが好き」

「ふむ、じゃあ心配はいらないな」

「雄二、さつきから気になることってなんなのさ」

「いや、ジェットコースターで工藤がムツツリー二にしがみ付いたと

した……」

帰ってきたコースターのあたりが騒がしい。

「しまった。やっぱりやりやがった。秀吉バックを持ってこい」

雄二と秀吉が騒がしい方向に走っていった。……周囲は血の海だった。

「ボク、ボクそんなつもりじゃなくって。怖くてムツツリーニ君にしがみ付いたら、鼻血が噴水のようにキレイに吹き出して……」  
「ああ、慌てるな工藤。お前のせいじゃない。秀吉ムツツリーニを引きずり降ろして輸血を……そうだな4パックほど。あ、みなさん大したことありません。ちょっと恐怖のあまりにのぼせたらしくって」

周囲は血だらけだけどこれくらいならFクラスでは日常茶飯事だ、問題は無い。

「どうしよう。どうしよう」

僕たちは、すっかりパニックになっている工藤さんを落ち着かせることにした。というか工藤さんは何をうろたえているのだろう、学校では「スカートチラッ」で、これ以上の血を毎日ムツツリーニから搾り取っているというのに。

「工藤さん大丈夫だよ。ムツツリーニは暑さに弱くてすぐのぼせるのさ」と自分でも全く信じてない嘘でとりあえず慰めてみる。

「どうしよう。ボクが抱きついたせいなのかな」

どうやら僕の話の話を全く聞いていないようだ。その意味では彼女もFクラスに毒されていると言えよう。まあ、今日の工藤さんの可愛い恰好を見れば、ムツツリーニなら抱きつかれたら鼻血を出すことはもう想定範囲内というか、僕たちのできることはどれだけ被害を少なくすることしかないというか、それくらいナチュラル・ボーン・キラー・ムツツリーニである。

やがてムツツリーニが目覚まして立ち上がると、何事もなかったように言った。

「……ふっ、俺としたことが高さに目がくらんでしまった」

嘘もここまで力強く断言されると「そうなんだ」と納得させてしま

うだけの説得力がある。

「あ、そうだったんだ。てつきりボクのせいかと思って心配しちゃったよ」と工藤さんに笑みもどった。

うーん、信じる方にも問題があるような気がするんだけどなあ。まあ、二人がいいならそれでいいけど。

「じゃ、俺たちはまたデートを続けるからお前らは勝手に回れ」雄二の言葉でとりあえず撤退することにした。

「ところで翔子、工藤はジェットコースターが好きだったんじゃないかったのか」

「……愛子はジェットコースターは好き。でも苦手。隣に人がいたら抱きついてしまう」

「それを先に言え。こりやジェットコースター系は全部マークだな」

雄二がため息をついて言った。

## 第6話

「次はなんだ」

「このままだとコーヒーカップじゃな」

「ぐるぐる回るだけで怖いこともないし、対面に座るから抱きつかれる心配もない。よし、安全だな」

朝から走り通しだった僕たちはコーヒーカップに向かってのんびり歩いていった。

「きゃあー」と工藤さんの絹をさくような悲鳴が聞こえた。

「今度は何しやがった」

雄二がダッシュする。僕と秀吉も続く。現場についてみたらムツツリーニが例によつて大量出血して床に倒れていた。

「おい、ムツツリーニ、何があった。高いところでも抱きつかれたわけでもないだろ」

高いも何もコーヒーカップはまだ動いてすらない。どうやら二人が乗ったと同時にムツツリーニが鼻血を吹き出したので係員が停めていたらしい。

「はっ反則……」

「何が反則なんじゃ？」

「工藤が向かいに座ったらスカートが短すぎて、パンチラが……」  
「何だつて」

僕と雄二が思わず振り返ろうとしたその瞬間。

「ダメです。明久君にはまだ早いです」

「ゴキッ」

姫路さんが僕の首を反対方向に思いっきり180度ネジった。姫路さん、人間の首はそこまで回る構造にはなっていないと思うんだ。

「ぐおおおおお」

「……浮気は許さない」

隣りでは、雄二が霧島さんの目つぶしを受けて床を転げまわっていた。霧島さんの目つぶしは相変わらずキレがいいなあ。的確に雄二の両目をとらえている。そういった騒ぎに目もくれずに秀吉は黙々



とムツツリーニに輸血作業を行っている。うん、秀吉はいい看護師さんになれると思うよ。だから、その優しさをちよつとでいいから僕の看病に費やしてもらえないだろうか。なんか首から危険な音が聞こえてくるんだけど。

工藤さんは、顔をイチゴのように真っ赤に染めて必死にスカートの裾を引っ張っていた。どうもこの人のこういうところがよく分からない。普段はあれだけ平気にスカートをまくっているのに、なぜ今日に限ってこんなに恥ずかしがるんだろう。

とりあえずムツツリーニの輸血が終わった。すつくと立ち上がったムツツリーニは言った。

「……スカートの中に興味はない」

この男には何を言っても無駄なような気がしてきた。どんな現場を押さえられても奴は徹底的にシラを切りとおすだろう。さすが「寡黙なる聖職者《ムツツリーニ》」の称号を捧げられた男である。

「そうか、大丈夫なら俺たちはまたデートに戻るから気をつけろよ」  
冷静に考えれば、雄二もこれまでのことは全部偶然だと言い張っている。こいつも大概いい度胸をしている。もつとも工藤さんもムツツリーニも疑ってないというかハナから眼中にないというか、僕らの行動にはあまり興味がないらしいので、こういう言い訳もいらない気がする。

その後、僕たちはフードコートで休憩をしていた。時間的にそろそろお昼時間だ。ムツツリーニ達もやがてこちらへやってくるだろう。「それにしても遅いなあいつら。飯食わないつもりなのか」

「そんなことはないじゃろ。それに園内にはここしか食事できるところはないことじゃし」

「ああ、それはですね。愛子ちゃん今日はお弁当を作ってきてるんですよ」

「へえ、工藤さんって料理もできるんだ。でも何で姫路さんがそのこと知っているの?」

「はい、私が昨日電話でアドバイスしてあげたんです。デートには手作りのお弁当が一番だと……」

いやな汗が腋の下を流れていく。

「……へっへえ。それで姫路さん。アドバイスしたただけだよね」「いえ、それが愛子ちゃん自信がないっていうんで、私がちよつと手伝ったんですよ」姫路さんが少し自慢気に言った。

「「なつなんだつてえ」」

僕、雄二、秀吉が思わず椅子から立ち上がった。工藤さんの料理の腕前は知らないけど、姫路さんの料理の破壊力はよく知っている。まずい、このままでは本当の意味で最後のデートになってしまう。

「姫路、人二人の命かかっているんだ。正直に答えてくれ。お前は何かを作ったんだ？」

雄二が勤めて冷静を装って姫路さんに話しかけたが、声は誰が聞いても震えていた。

「はい、6時に愛子ちゃんの家で待ち合わせだったんですけど、愛子ちゃんハリキツちゃって、5時に起きてオカズはほとんど作っちゃってたんですよ。それで、私はおにぎりを作ろうと思ったら、それも愛子ちゃんが2個作っちゃって。結局、おにぎり1個しかお手伝いできませんでした……」

姫路さんはシヨボンとしていたが、僕たちにとっては不幸中の幸いだ。これで被害を最小限に食い止めることができる。

「それで奴らはどこで昼飯を食うと言ってた？」

「ええっと、確か丘の上の桜の公園で……」

姫路さんが答え終える前に僕たちは丘の上の公園に向かってダッシュした。後ろから姫路さんや、美波や霧島さんの声が聞こえたけどそれどころじゃない。2人の命がかっているのだ

「いいか、おにぎりは3個。姫路製は1個だ」

「つまり、確率は1/3だね」

「かなり高確率のロシアンルーレットじゃのう」

「おにぎりを奴ら、特に工藤に食わせるわけにやいかない。耐性がないからな」

「僕らが食べるしかないわけか」

「耐性があっても、あれは遠慮したいんじゃないが」

「こうなったらしかたない。確率は1/3。1個ずつ選らんで、せえ  
ので食う。誰が当たっても恨みつこなしだ」

「よし、わかった」

「わかったのじゃ」

僕たちは走った。間にあえ僕の足。僕たちが公園に駆け込んだら、  
テーブルを挟んで工藤さんとムツツリーニが座っていた。即座にF  
F団に通報したいところだが、人二人の命がかかっているのだ、僕  
も鬼じゃないのでそんなことはできない。あとで、ゆつくりと須川君  
に報告することにした。

僕たちはテーブルに駆け寄った。工藤さんはちようど弁当箱の蓋  
をあけるところで、僕たちを見つけ、真っ赤な顔でフリーズしている。  
一方、ムツツリーニは「俺は関係ない」という顔でそっぽを向いてい  
る。

「どっとうしたのかな。三人とも……」

「よう、偶然だな工藤」雄二が言った。

偶然って真つすぐこのテーブルに駆け付けたのに偶然？

「あつああ、偶然だね。三人揃って今日はどうしたの」

正気だろうかこの人は？今までであったことの記憶が飛んでいる。

「いや、いろいろあつてな。おや、それは弁当か。お前が作ったのか」  
「うっうん、あ、よかつたら君たちも食べない。いっぱいあるんだ」

冷や汗が流れる。いよいよだ。僕たちは目配せをした。

「(裏切るなよ)」

「(一人一個だね)」

「(確率は1/3。恨みつこなしじゃな)」

「おお、じゃこのおにぎりをいただくぞ」

僕たちは、それぞれおにぎりに手を伸ばした。確率は1/3。決して  
低いとは言えない確率だ。ここで僕の頭に何かが閃いた。待てよ  
？このおにぎりを誰かの口に突っ込めばどうなるだろうか？そいつ  
の確率は2/3。僕の確率は0/3になる。我ながら名案だ。

「じゃあ、いくぞ。3、2、1」雄二がカウントダウンする。

「ゼロっ！」

「くらえええ〜」

「このクソがあ〜」

僕と雄二は互いの開いた口に、それぞれが持っていたおにぎりを突っ込んだ。雄二め、何て卑怯な奴なんだ。互いに一個ずつおにぎりを食べる約束だったのに。

「てめえ明久何しやがる」

「雄二こそ僕におにぎり二個食べさせるつもりだったね」

「だいたいてめえは・・・ウグ」

雄二が口から泡を吹いてひっくり返った。間違いない姫路さんの手料理の症状だ。よかった、僕が持っていたのが当たりだったのだ。雄二の口に突っ込んだおかげで助かったんだ。やっぱり正義は勝つん・・・あれ、体が痺れて動かなくなってきた。なぜだ当たりは雄二が食べたはずなのに。

「やれやれ、お主らはいつも騒がしいのお。どれ、ワシもおにぎりをいただくとするか。パク・・・なっなぜじゃ、体が痺れて・・・う・・・うごけなく」

秀吉まで倒れてしまった。おかしい姫路さんは嘘をいう人じゃない。それならば姫路おにぎりは一個のはず。症状から言ってそれは雄二が食べたことは間違いがない。では僕と秀吉の症状は？

「くっ、工藤さん・・・」僕は、必死で意識をつなぎとめて工藤さんに声をかけた。

「うん、どうしたのかな？吉井君」

どうやら三人が倒れたことは全く気にならないらしい。明鏡止水の如しというのは、こういう心境を言うのだろうか。

「姫路さんが作ったおにぎりって一個だけだよ」

「うん、そうだよ。後の二個はボクが握ったんだよ。美味しかった？」  
よりによってこの状態の僕たちにおにぎりの感想を聞くだろうか？工藤さんが二個握ったということは、もしかしたら工藤さんって姫路さんに匹敵するほどの料理の腕前の持ち主なのか？だとすればおにぎりを食べただけでは、ムツツリー二の命が危ない。おかずも処理しなければ。

でもよく考えてみたら何で僕たちは人のデートで命をかけるハメになっっているんだろう。

「あ、でもね。ボク、オカズを作るのに忙しかったからご飯は瑞樹に炊いてもらったんだ」

なるほど。謎が解けた。雄二に比べて僕らの症状が軽いのは姫路さんが手を出したのはご飯だけだったからなんだ。でも、ご飯だけでこれだけの威力というのは、相変わらず姫路さんの料理の破壊力は凄まじい。というかご飯を炊くという過程のどこにこんな破壊力を潜ませることができんだろうか。

だんだん薄れていく意識の中で僕はそう考えていた。

## 第7話

「アキ、いいかげんに目をさましなさい」

頬を叩かれる衝撃で目をさました。ここは……ああ、そうだ僕たちはおにぎりを

食べて気絶したんだ。秀吉は？と周囲を見渡すと、秀吉の肩を姫路さんが優しくゆすって起している。いいなあ、ああいうやり方で起こされてみたかった。そうだもう一度気絶すると姫路さんが起こしてくれるかもしれない。

「まったくもうアキったら。これで起きなかつたら関節極めて激痛で起こしてやるところだったわよ」

これ以上ないくらいにハッキリ目が覚めた。すると「ビターン、ビターン」と景気のいい音が聞こえてきた。振り返えると霧島さんが、雄二の頬を力一杯往復ビンタしている。起こそうとしているようだけど、あれじゃまた気絶するんじゃないだろうか。

「痛え、何しやがる翔子」

「……よかった雄二目が覚めた」

「危うくまた気絶するところだったがな」

「どうしたのよ三人揃って気絶なんかして」

どうしたのって聞かれても、まさか姫路さんの料理で気絶していたとは言えない。

「いや、ちよつと暖かかったんで、眠気を催してな。それより二人はどこへ行った」

気が付いたらムツツリーも工藤さんも消えていた。気絶している僕たちを平気で置いていけるなんて、これじゃまるでFクラスじゃないか。悪いことは言わないから工藤さんは一刻も早くムツツリーと縁を切った方がいいと思うんだ。

「あの二人は、バイキングのところを歩いていったわよ」

「翔子、工藤は振り物系は？」

「……愛子は基本的に乗り物系は苦手」

「遊園地に何しに来てるんだ？やれやれ、いくぞ」

バイキングに着いたら案の定、座席は血で染まりムツリーニが突っ伏して倒れていた。知らない人がみたらどんな惨劇が起こったのかと思うだろう。柱の陰から家政婦が見ていてもおかしくない状況だ。

「……………こうなるのがわかっていて、なぜ乗る。秀吉頼む」

秀吉はクーラーボックスから輸血パックを取り出すと手慣れた様子で輸血を始めた。

もはや熟練の域に達している。いつでも看護師にクラスチェンジできるくらいに経験値が貯まっているに違いない。

雄二が周囲に大声で説明をした。

「ああ、( )迷惑をお掛けしました。何でもありません。この男は突発性鼻粘膜出血症という病気を患ってまして、時々大量に鼻血が出るのです。どうぞ気にしないでお楽しみ下さい」

お楽しみ下さいって言ったって座席はたつた今ここで殺人事件がありましたと言わんばかりに血まみれになっている。これで楽しめる奴はサイコパスだ。輸血が終わると、例によってムツリーニが復活した。

「……………ふっ、昼食を食べすぎてしまった」

もう、ツッコむ気にもならなかった。

その後はもう悲惨の一言だった。

おぼけ屋敷……………怖がった工藤さんに抱きつかれて出血

メリーゴーランド……………馬に乗る時の工藤さんのパンチラで出血

スワンボート……………風で船体が煽られた時に工藤さんに倒れかかられて出血

ジェットコースター……………怖がった工藤さんに抱きつかれて出血  
それはもう、遊園地のありとあらゆるところで出血輸血を繰り返し、如月ハイランドは楽しいファミリー遊園地から一転して恐怖の血だらけスプラッタ遊園地と化してしまった。

「いい加減にしやがれ、犬が縄張りの電柱にマーキングしてんじや

ねえぞ」

雄二が怒るのも無理はない。遊園地中のあらゆる乗り物を血で染めてしまったのだから、損害賠償を請求されないうちに逃げた方がいいんじゃないだろうか。

「いや、雄二それよりもじゃな」

「まだ何かあるのか？」

「もう輸血パックがないのじゃ。次に鼻血を出してももう輸血できん」

「そうか。うーん、今何時だ」

「はい、6時です」

「よし、ちよつと時間は早いゴールまで連れていこう」

雄二はそう言うのと二人に向かって歩いていった。一応、僕たちの設定は蔭から見守ってフォローするということになっていたはずなのだが。

「おい、ムツツリーニと工藤。もう時間だ」

「ええ、時間って何のこと？」

「メインイベントの時間ってことだ。いいからついてこい」

そして、踵を返すと今日のメインイベント、怪しげな伝説のある観覧車へと向かって歩きだした。

「ねえ、代表これどういうこと」工藤さんが心細げに霧島さんに尋ねる。

「……愛子、この遊園地の観覧車の伝説知ってる？」

「きつ、聞いたことはあるよ」

「……そう、だからデートにこの遊園地を選んだの？」

「そんな……そつそういう訳でもないけど」

「……私と雄二、世界中が認めて親も公認のカップルでさえ、この観覧車には乗ったことがない」

「……代表」

「……だから、愛子たちが成功すると文月学園で初めてのカップルになる」

「……でつ、でもボクは……」



「…………だから私は愛子を応援する」

「……………」

「……………」

僕たちはやがて観覧車についた。

「じゃあな。後は勝手にしろ。あ、もう輸血パックはないからな。気をつけろよ」

「愛子ちゃん…………ファイトです」

「ムツツリーニ、とりあえず今日のところはFFF団への…………ムギユ」

美波のチョークスリーパが決まった。

「いい場面でなに言ってるのよ、あんたは。あの連中に言っちゃあだめよ」

「…………愛子」霧島さんが工藤さんの手を取って言った。

「…………頑張ってる。私はいつでもあなたの味方…………でも雄二は譲らない」

「うん、全然いらない」工藤さんが即答した。

ムツツリーニと工藤さんは並んで観覧車へと歩いていった。

「さて帰るか」

「そうだね。お腹もすいちゃったし」

「そうね。ウチもお腹ペコペコ」

「何か食べていくかのう」

「うう、この時間に食べちゃうと体重が」

霧島さんがそつと雄二の後ろに忍び寄り、口と鼻をハンカチで押さえた。

「わっ、翔子なにを……………」

静かになった。見事な手際だ。

「…………雄二は疲れているみたい。私が連れて帰る」

もちろん誰も反対する、いや反対できる者はいなかった。

霧島さんは雄二をずるずるとゴンドラの方へ引きずりながら闇の中へ消えていった。

手にさっきの手錠が光っていたような気がしたが見なかったこと

に  
し  
ゆ。  
。

## 最終話

土屋君が観覧車に先に乗り込んで椅子に座ると外を眺めていた。ボクは観覧車に乗り込んだ時から、胸の鼓動が大きくなっているのを感じて、それが土屋君にバレたらと思うと顔が赤くなるのがわかった。

観覧車が頂上に近づいて来るに従って、胸の鼓動がどんどん大きくなつていくのがわかる。

「言わなきや、今言わなきや」そうだ言わなきやいけない、そうでなきやなけなしの勇気を振り絞って土屋君を無理やりデートに誘った意味がなくなってしまう。

もうこんな勇氣二度と出せない。鼓動が頂点に達した時にやっと言葉が口について出た。

「……ムツ、ムツツリーニ君、あのね。……あのね、すっ好きなの子っているのかなあ」

心臓が口から飛び出そうだ。顔が真っ赤になっているのがわかる。彼は相変わらず横を向いて外を眺めたまま黙っていた。沈黙がツライ。でもその次の言葉、とても大切な言葉が出てこない。これ以上はないくらいに空気が重くなった時に彼がボソツと口を開いた。

「……いる」

胸が張り裂けたかと思うくらいに痛くなった。口から火の玉を押し込まれたみたいに熱くなる。目の奥がジュンとして涙が出そうになったので慌てて俯いてこらえた。

「(泣いちやダメ。涙をみせたらムツツリーニ君の負担になっちゃう)」

それだけはしたくなかった。告白するって決めた時にフラれても絶対に泣かないと誓った。泣かなければ今までどおり友達でいられるはず、でも泣いたらその関係も壊れるかもしれない。それだけは絶対にいやだった。

「そっ、そっか。そうだよ。男の子だもん好きな女の子くらいいるよ」

精一杯強がってみたけれど、自分でもわかるくらいに声が震えている。ムツツリー二君もきつと気が付いているだろう。でも何も言わないのが彼の優しさなのかもしれない。

「(もういいかな。もうこれで十分じゃないかな)」

フラれちゃったという思いを噛みしめるところえきれずに涙がこぼれそうになった。

どれくらい沈黙していただろう。ボクも土屋君も次の言葉が見つからずに黙っていた。

その間、ボクはずつと抱き枕のことを考えていた。自分で写真を隠し撮りして、中学の友人に作ってもらった一番大事な宝物。部活の練習のツラさやいろいろな愚痴、そしていつかできることを夢見た告白まで黙って聞いてくれた抱き枕。

「(あれも処分しなきゃ……)」

そう思うとまた涙がこぼれそうになった。思わず顔を手でおおった時、ゴンドラに乗る時に握りしめてくれた代表の手の暖かさとかけてくれた言葉を思いだした。

「……私は愛子の味方だから」

「(そうだ、本当にこれでいいんだろうか。このまま終わってもボク後悔しないだろうか)」

ムツツリー二君に好きな子がいるのはわかった。でも、ボクの気持ちにはムツツリー二君に何一つ伝えていない。彼を好きという気持ちにケリをつけないと、ボクは前に進めない。ムツツリー二君にありのままのボクの気持ちとちゃんと伝えなきゃ。そして気持ちよくフラれたら、きつといつか新しい恋が見つかるはず。

さあ、残った勇気をかき集めて最後の言葉を伝えよう。

「……土屋君、あのね……ボクね……ボクは土屋君のことが……」  
「言うな。工藤愛子」

大きい声じゃなかったけれどハッキリとした口調で土屋君がボクの声をさえぎった。

「(どうして? どうして最後まで言わせてくれないの?)」

そんなに迷惑なんだろうか、それとも女の子をフルのが嫌なんだろう

うか。

「俺はエロ……いや、保健体育のことを考えると鼻血が出るという難病にかかっている。これがある限り女の子とは付き合えん」

外を眺めたまま土屋君が言った。

「……だが、俺はこの難病を必ず克服してみせる。その時には俺から言う。だから今は言うな……」（愛子）」

胸の鼓動がまた大きくなる。胸の痛みがいつの間になくなって、喜びであふれてくる。さつきとは違う涙が目にあふれる。最後の言葉はボクに聞こえないように小さな声で言つたつもりなんだろうけど、ちゃんと聞こえたよ。そうだよ。そういうことだよ。土屋君はそれ以上何も言わなかったけど、そう思っているんだよ。土屋君はそれ以上何も言わなかったけど、そう思っているんだよ。

「……わかった。ボク待つてるから……」  
土屋君は外を見たまま、特に訂正も否定もしなかった。それが答えなんだよね。いいんだこれで。これで十分だ。こらえきれなくなった涙が頬を伝って流れてきた。でも構わない、泣かないって誓ったのはフラれた時のことだったんだから。

ゴンドラが下に着いて係員の人ドアを開けると、土屋君は黙って降りた。ボクもそれに続いて降りると、何となくそうしたくなったので土屋君のシャツの裾をつまんでみた。土屋君はちよつと振り返つてつままれたシャツを見たけれど、何も言わずに歩き出した。ボクはシャツをつまんだまま土屋君の後ろに従って歩いた。

「なんかドナドナみたいだね」

「……乳牛というには胸囲が足りない」

「それは美波ちゃんに失礼だと思うよ」

「……お前のことだ。工藤愛子」

「見たことないくせに。じゃ見せてあげようか？」

「うっ……俺は難病と言ったはず」

「アハハ、それは病気じゃないと思うよ」

その状態のまま電車に乗ったけど、土屋君は何も言わなかった。やがてボクの家のある駅についた。

「じゃ、今日はどうもありがとう。とつても楽しかったよ」

「……何を言ってる。俺はこれから買い物にいかねばならないのだ」

「あ、そうなんだ？」

「……偶然だ」

そう言つて一緒に降りた。嬉しい。もう少し二人でいられる。改札を出てボクは尋ねた。

「お店は西口・東口どっち？」と尋ねた。

「……お前の家はどっちだ、工藤愛子」

「えっ？西口だけど」

「……奇遇だな。俺が用のある店も西口だ」

「そっか、ふふふふ……」

「……何がおかしい、工藤愛子」

「うふふ、何でもないよ。じゃ一緒に行きよう」

二人で夜の道を並んで歩いていった。ムツツリー二君は何も喋らない。ボクもその沈黙が心地よくて黙って歩いている。その方が言葉より彼の気持ち伝わる気がしたから。

「ムツツリー二君の用のある店って左の路でしょ」

「……そうだ」

「もしかしてこの角を曲がるんじゃない？」

「……よく知っている」

「で、この角から3番目の家だよね」

「……俺は店だと言ったはず」

「あ、間違えた。あそこはボクの家だった」

「……別に興味はない」

「……送ってくれてありがとう」

「……勘違いするな、工藤愛子。俺は道を間違えただけだ」

ムツツリー二君はそう言うて来た道に戻ろうとした。

「ねえ……こっ　康太」ボクは勇気を振り絞ってもう一度呼んでみた。

「……何だ」とムツツリー二君が振り返った。

「ボク、まだ今日のお礼してなかったね」

「……お礼？」

「うん、これ。ほら、チラ」

「ぼっ馬鹿、今日は……」

ムツツリーニ君はそう言いながら鼻血を噴き出して倒れた。

「えっ？どつどうしたの？……キヤア、ボク今日はミニスカートだからスパッツはいてなかったんだ。見たの？ねえ見えたの？」

ムツツリーニ君を揺さぶって聞いただしてみただけど反応はなかった。真っ赤な血の海の中でムツツリーニ君は幸せそうな顔をしていた。この幸せそうな顔は相手がボクだったからって、ちよつとウヌボれてもいいよね。

## 2. 彼と彼女と屋上ランチ 第1話

人気のなくなった放課後の中庭のベンチにその少年と少女は並んで腰をかけていた。

「ふふふ、賭けはボクの勝ちだね」

「……………不覚。まさか保体のテストでお前に負けるとは」

「じゃ、約束を守ってもらおうよ、ムツツリーニ君。ボクの命令を一つだけ何でもきくこと」

「……………そのことだが、冷静に考えてみれば賭けに勝っても俺には何のメリットもない」

「今さらそんなこと言うなんて男らしくないなあ。ムツツリーニ君が勝った時には、ボクに好きだけスカートチラツを命令できたんだよ」

「……………そんな命令はしない。というより俺が命令しなくてもお前は勝手にやっているではないか」

「スパッツ無しだよ?」

「……………」

「スカートの中なんぞに興味はない」

「回答までに随分と間があっただけど……………」

「……………気のせいだ工藤愛子」

「ああ、ボクの命令はそれ。工藤愛子じゃなくて、あっ愛子って呼ぶこと。」

「わかった?これからはボクのごことは愛子って呼んでお昼を一緒に食べるんだよ」

「……………命令は一つのはず」

「一つだよ。「愛子って呼んでお昼を一緒に食べる」。ねっ、文章一つでしょ」

「……………そうなのか?????」

「そうなのっ! 国語だっ?ボクの方が上なんだから。わかったら呼ん



でみて」

「……………」

「や・く・そ・く・！」

「……………(愛子)」

「(真つ赤) そっそれでいいよ……………こつ康太」

「……………その名で呼ぶな」

「だってボクだけ呼び捨てじゃ変じゃない」

「……………いや、それは命令には」

「あ、ボクそろそろ部活に行かなきゃ。じゃ明日ね。こつ康太」

少女はベンチから立ち上がると赤く染まった顔を見られないように勢いよく駆け出して行った。

後に取り残された少年は首をかしげてつぶやいた。

「……………何か騙されているような気がする」

## 第2話

朝、教室に入っただけでいったらムツツリーニがすでに登校して席に着いていた。でも、何だか様子がおかしい。顔色が赤くなったり青くなったりしてまるで信号機のようなようだ。

美波が寄ってきて「ねえアキ、土屋の様子おかしくない？」と囁いた。美波から見てもそう見えるらしい。

基本的にムツツリーニは、鼻血は出しても感情は表に出さない男だ。だからこそ「ムツツリーニ(寡黙なる性職者)」と呼ばれているのだ。その男があそこまで感情を揺らすとしたら原因はただ一つ……「……工藤だな」

いつの間にか雄二が傍にきてそう言った。さすが雄二、人の弱点を突く時の指摘は的確だ。

「愛子と何かあったのかしらね？」美波が首をかしげる。

「工藤と何かあったにせよ。なにゆえに顔が赤くなったり青くなったりしとるんじゃないか？」いつの間にか秀吉もやってきていた。

「うまく行ったのなら顔が赤くなるだろうし、フラれたんなら青くなるのもわかる。だが、赤くなったり青くなったりというのはなあ。うーん」人の弱みを決して見逃さない雄二でさえ想像がつかないようだ。

「うふふ、大丈夫ですよ」と姫路さんがほほ笑みながら言った。

「青くなるのはよくわかりませんが、赤くなるのはちゃんと理由がありますから」どうやら姫路さんは事情を知っているようだ。

「何よ瑞希。事情を知ってるなら教えなさいよ」美波が食い下がる。

「ふふ、秘密です。でもそのうちわかりますよ」姫路さんは楽しそうだ。

なぜだろう？姫路さんのこの笑顔を見ると、とてつもなく嫌な予感というかデジャブというか、ごく最近にこの笑顔を見た後に僕と雄二と秀吉の3人は地獄を見たような気がする。

その時、教室のドアがガラつと開いた。誰が来たのかと首をむけて見ると、話題の工藤さんだった。心なしか赤い顔をしているけど、風

邪でもひいたんだろうか？

風邪は誰かにうつせば治るといふし、Fクラスのメンバーなら誰が倒れても学園には何の影響もないといふことか。残念ながら適切な判断と言わざるをえない。さすが工藤さんはAクラスだと言いたいところだが、ツメがまだ甘い。彼女はもう一つの大事な諺を忘れてい

る。

古人曰く「馬鹿は風邪をひかない」。

自慢じゃないがFクラスは体の弱い姫路さんを除けば出席率だけは文月学園で一番なのだ。ただ、そのほとんどが補習にあてられているという問題はあるのだが。なにしろ補習をサボると鉄人との個人授業になってしまう。そんなのを受けるくらいなら40℃の熱が出たって「カイロがいらなくてラッキー」とポジティブ思想にもなるうというものだ。

だが、工藤さんは入口で誰かを探すようにキョロキョロしていた。姫路さんにでも用があるのかなと思つた時に、彼女はムツツリーニを見つけ瞳を輝かせるとんでもない爆弾を投げつけた。

「おっおはよう、こっつ康太」

「「「「「「「「「こっつこっつこ康太あ?!」「「「「「「「」

教室中が凍りついた。

### 第3話

教室が静かを通りこして呼吸の音さえ聞こえない。ショックのあまり本当に呼吸が止まっている奴が3人ほどいるみたいだが「自力蘇生」がFクラスのモットーである。頑張つて生還してきて欲しい。しかしさすがは工藤さんだ。あの鉄人ですら静めるのに苦労しているFクラスを「こうた」の3文字でここまで静めてしまうなんて。

「ねえアキ、どういうこと。愛子つてばいつの間にも土屋とそんなに親しくなったの」我に返つた美波が僕に詰め寄る。

「いや、僕に聞かれても知らないよ」僕だってビックリしているのだ。「まずいなこれは」雄二が言った。

「何がまずいのじゃ雄二」

「いや、今はあまりのショックで固まっているが、奴らが今のを黙っているわけがない」

この凍り切った教室の空気など全く意に介せず工藤さんがムツツリーニに話しかける。空気の読めなさ度合は霧島さんと同レベルだ。二人の違いは、霧島さんは雄二以外のことは気にもしないのに対して、工藤さんはムツツリーニの反応すら気にしていないことだ。さつきまで赤青点滅していたムツツリーニの顔色は真つ青になっているというのに・・・大物という言葉は彼女のためにあるに違いない。

「あ、あつあのさ。今日のお昼・・・キヤア」

工藤さんが途中まで何かを言いかけたところで、それまで硬直していたムツツリーニが動いた。盗撮の時に見せるあの人間離れしたすばやい動きで工藤さんの口を押えて廊下まで連れ出した。

「何か言いかけておつたのう」

「お昼とかいつてたわね」

「お昼・・・まさか二人でお昼食べる約束をしてたりして」

誓つて言うが、場を和ませる冗談のつもりだったのだ。だが、やつと「こ・う・た」ショックから立ち直つたFクラスのメンバーに取つてはガソリンの役を果たしてしまつたらしい。

「康太って呼び捨てかよ」

「ふざけるなよ。その上、お昼を一緒だとお」

「ひひひいひいひい、やっちゃうよお。遠慮なくやっちゃうよお」

既にバーサーカー(狂戦士)と化している奴もいる。これはちよつとマズイ状況だ。このままムッツリーニが教室に戻ってきたら、血のカーニバルが始まってしまう。とりあえず事情を確認するために、僕はドアまで近寄って耳を当て廊下の声に耳を澄ませる。

「……何しにきた工藤愛子」

「ムーツ(ふくれ面)……愛子って呼ぶ約束」

「……学校では勘弁してくれ。せめて二人きりの時だけに」

「ムー(ふくれ面)」

「……いや、だから」

「ムー(ふくれ面)」

「……(愛子)」

「うふふ、ちよつと声が小さいけど許してあげるよ。じゃあ、また後で」

「……ちよつと待て、問題が何も解決していない。何しに来た」

「お昼の約束を忘れないように確認」

「……いろいろと問題があるんだ。もうFクラスにはこないでくれ」

「かつ彼女が彼氏の教室に行くのに何の問題があるのさ」

「……彼氏にも彼女にもなった覚えはない」

これはビックリだ。いつの間に二人の関係はここまで進んでいたんだろう。しかもムッツリーニの言葉を信じれば、まだ彼氏彼女の関係じゃないのに完全に工藤さんの尻にしかれている。もし付き合うことになってもこの力関係を逆転するのは無理だろう。とりあえずFFF団、いやそれはいつでもできる。雄二達に報告しなければ。

僕はみんなのところに戻った。

「おお、明久。でムッツリーにと工藤は何だった」

「うん、「お昼を忘れないように愛子って呼ぶ約束」って」

「「はあ?」」

「明久、落ち着くのじゃ。それでは何を言っているのかさっぱりわか

らん」

えっと、何か間違えただろうか。落ち着け僕、二人が何を言っていたかを正確に思い出すんだ。

「うーんとね。そうだ「彼女が彼氏の教室に行くのに約束をした覚えはないから何の問題があるのでFクラスには来ないでくれ」だった。間違いない」

「姫路。明久の勉強の国語の時間を3倍に増やしてくれ」と雄二が姫路さんに向かって言った。

「えーつとですね」姫路さんがもう我慢できないと言った感じで嬉しそうに口を開いた。

「愛子ちゃんは土屋君とお昼を一緒にするために弁当を作ってきたんです」

脇の下をいつか感じたことのある嫌な汗が流れていく。

「何で姫路がそれを知ってるんだ」心無しか雄二の声も強ばっている。「夕べ愛子ちゃんから電話で相談されたんです。どんなオカズがいいのかって」

「へえー、愛子もやるわね。土屋と一緒に仲良くお昼を食べようってわけね」おや、美波の背中から燃え盛る赤い炎が見えるような気がするは目の錯覚だろうか。

「ところで姫路。工藤の料理をお主がまた手伝ったのかの」

さすが演劇バカの秀吉だ。声も表情も全く変えることなく何気なく一番命に係わりるところを確認した。だけど机の下の足がかすかに震えているのは惜しいところだ。

「いえ、今回はお手伝いできる時間がなかったので、お料理のレシピだけ教えておきました。うまくいけばいいですね」

姫路さんは自分のことのように喜んでる。やっぱり女の子だ。他人のことであつても恋バナは好きなんだろう。

「明久、秀吉ちよつと」雄二が呼ぶ。

「どう思う」

「いちおう大丈夫じゃないのかのう。姫路料理とはいえ姫路が直接手を下したわけじゃないことじゃし」

「姫路レシピってのが気になるんだよね。この間のおにぎりだって姫路さんが米炊いたからだし」

「米炊くだけで何であんなに破壊力があるんだよ」

「それはわからないけど、今はとりあえずムツツリーニのことを考えよう」

## 第4話

とここでさつきから聞こえてくる金槌の音がなんだろう？教室を見渡してみるとクラスメートが声も掛け合わないのに、一糸乱れぬ動きで窓を釘で打ち付けていた。

「あやつらはさつきから何をしているのじゃ？」

「ムツツリーニの処刑の準備だね。窓から逃げ出さないように釘で打ちつけているんだ」

「恐ろしいほどリンチ慣れしているな」

「しかしムツツリーニはFFF団の特別顧問じゃろう。仲間にもそう酷いことはしないんじゃないかのう」

秀吉が甘いことを言う。FFF団に仲間という概念はない。あるのは敵か怨敵かだ。怨敵を倒すためには悪魔とだって手を組むことを厭わない、それがFFF団だ。

「いや、良いこと言っているように聞こえるが、最低じゃぞおぬしら」  
「とりあえず、あそこに会長の須藤君と幹部連中が集まっているから話を聞いてきてみるよ」

教室の後ろの方で、須藤君と2人のクラスメートが深刻な顔をして話をしていた。

やはり、特別顧問のムツツリーニの処刑ともなると慎重にならざるを得ないのだろう。

「……牛を……」

「手足を……八つ裂きに」

「できるだけ……長く苦しみを……」

うん。特別顧問の肩書が何の役にも立っていないということが分かった。とりあえず、止めた方がいいんだろうな。

「ちよつと待ってよ。女の子に名前と呼ばれたくらいで処刑なんて酷すぎるよ。雄二なんて霧島さんから毎日呼び捨てて呼ばれているじゃないか」

「……ん？そうか、そうだったな。じゃ坂本も一緒に処刑をするということだ」



すまない雄二、傷口を広げてしまったようだ。雄二には事故にあつたものと諦めてもらうことにして、美波が僕のことを呼び捨てどころか「アキ」と愛称で呼んでいるところに連中の考えが及ばないうちに話題を変えよう。

「それに牛を使つて八つ裂きなんてできるわけないじゃないか。この辺には牛はいないんだよ。せめて自動車かバイクで……」

「それもそうだな。すまん明久。処刑の方法まで相談にのつてもらつて」

いけない。どんどん泥沼にハマつてしまふというか、このままでは僕がリンチの首謀者になってしまう。とりあえずここはひとまず退散しよう。

「どうだった明久」

「だめだ止められなかったよ。ところで全然関係ないけど今日の体調はどうだい雄二」

「いや、別に普通だが」

「全力疾走とかジャンプとかできそうかい」

「ああ、それくらいなら大丈夫だと思うが……一体何をした」

「僕は何もしてないけど、もしかしたら酷い目に会うかも知れないとテレビの占いでやってたんだ」

「そんなことよりムツツリーニは大丈夫かのう。クラスの雰囲気はどうだんどん剣呑になってきておるんじやが」

「そうだった。明久とりあえずムツツリーニには、鉄人と一緒に教室に入れと伝えてこい」

「坂本、そんなにムツツリーニのことが心配なの」

「友達思いなんですな坂本君って」

美波も姫路さんも何年付き合っていれば雄二の本性がわかるんだろうか。こいつは自分の利害以外で人のことを心配する奴じゃない。「そういうえば、雄二はなんでそんなにムツツリーニのことを気にしているのさ」

「ああ、実は来週にでもAクラスに試召戦争を仕掛けようと思つている。ムツツリーニの保健がなくなればキツイ」

「試召戦争？また急な話じやのう」

「お前ら、姫路に少しはいい環境で勉強させてやりたいとは思わんのか。体が弱いのにこんな劣悪な環境だなんて、俺には我慢できん」

「あの、坂本君。私のこと心配してくれるのはありがたいんですが、勝てるかどうかわからないAクラスよりもCクラスくらいで十分ですよ」

「そうだね。Aクラスに戦争挑んで負けたら今より悪い環境になるわけだし、ここは手頃なCクラスでいいんじゃないかな。Cクラス相手ならムツツリー二も必要ないだろうし」

何しろ今のFFF団を止めようとしたら、こっちの命が危ないのだ。ムツツリー二一人の犠牲で済むなら安い買い物と言えるだろう。

「バカ野郎。こんなところでずつと我慢していた姫路のためにも最高の環境のAクラスで勉強させてやろうと思わないのか、お前らは」

雄二がいつになく力説している。こいつがこんなに姫路さんのことを考えていたなんて。

「感動したよ、雄二。君がそんなに姫路さんのことを考えていたなんて……で、本音は」

「今度の試召戦争に負けたら翔子の両親に挨拶に行くことになった」  
「さ、そろそろ授業だから席につきようか、みんな」

どうせこんなことだろうと思っていた。だいたい雄二もそろそろ現実をちゃんと見つめるべきだ。Aクラスに勝とうが負けようが、霧島さんが両親に会わせると言ったらどんな手段を使っても会わせるに決まっているのに。

ガラッとドアが開いた。FFF団の連中が今にも飛びかかろうとしたところに現れたのは、担任の鉄人だった。ムツツリー二はその後ろから静かに教室に入ってきて自分の席についた。さすがのFFF団も鉄人の目の前で手を出すわけにはいかない。授業が開始された。

誰かが小声でつぶやくお経がとても耳障りだ。

## 第5話

普段はだらけた雰囲気さえ漂う授業だけど、今日に限っては活気というか殺気に満ちていた。いつもと違って静寂に包まれていたのだけど、不穏な空気は隠せない。授業をしていた鉄人も気がついたのか、教科書から目を離すと教室を見渡した。

「お前ら今日はどうしたんだ？」

「学習意欲に目覚めたんです」

「勉強って楽しいですね」

「早く殺っちゃ、いやテストがこないかと楽しみで」

クラスのみんなが間髪入れずに抜群のチームワークで大嘘を答える。

「そういう冗談はともかく、あまり問題を起こすんじゃないぞ」みんなの返事を全く無視して鉄人が答えた。信じないなら聞かないで欲しい。

「ん、土屋どうした？随分顔色が悪いぞ。仮病じゃないようだし、体調が悪いなら保健室へ行つてこい」

大丈夫じゃないのは、鉄人の方じゃないだろうか。入学してこのかたこんな優しい言葉を聞いたことがない。

「大丈夫です」

「僕らが看病します。墓場まで」

「この程度は体調が悪いうちには入りません。まだ致命傷じゃありませんから」

「万が一の時には僕らがキツチリとあの世まで送り届けます」

途端に教室中から声がかかる。ところどころ不穏な単語が聞こえるものの、全体としてはムツツリーニを心配しているようにも見える。だが、本音はここで保健室に行かれてはムツツリーニを逃がしてしまうことを心配しているだけなのだ。みんなの勢いに気圧されて鉄人も「そっそうか、あんまり無理するなよ」と授業に戻った。

授業終了まであと少しだ。気の早い奴はカウントダウンを始めている。みんなすぐに飛びかかれるように体勢を取っている。

「5、4、3、2、1」そして「ゼロ」の音が聞こえると同時に授業終了のチャイムが鳴り全員がムツツリー二に襲いかかろうとしたその瞬間、ガラッと大きな音を立てて入口のドアが開けられ

「ねえ、こっつ康太。ボク数学の教科書忘れちゃったから貸してくれる」  
工藤さんの声が教室中に響いた。再び、硬直するFクラスメンバー。ムツツリー二が教科書を持って、工藤さんの手を引いて廊下に連れ出した。

再度、状況を把握するために僕はドアに耳をつけて廊下の声を聞いた。

「……Fクラスには来るなと言ったはず」

「だって教科書忘れちゃったんだもん」

「……ほら。とにかくお前がFクラスに来るたびに俺の命が危なくなる」

「ありがとう。じゃ、後で返すね」

「……待て、工藤愛子。お前は俺の話を聞いているのか」

「ムー（ふくれ面）」

「……いや、すまん。愛子、頼むから俺の話を聞いてくれ」

「うふふ、いいかげんに彼女の名前を呼ぶことくらい慣れなよ」

「……いや、だから彼女ではないと。……そうではなくてだな」

「あ、休み時間終わっちゃうから、もう行くね」

「……だから俺の話を聞けと……」

雄二、秀吉、美波、姫路さんが、僕の方を心配そうに見ていた。

「あんまり期待していないが、何の話だった」

いつもいつも何て失礼な男なんだろう。これでも僕は同じ失敗はできるだけしないつもり男だ。ちゃんと話を聞いてある。

「ふふふ、あまり僕を甘く見ない方がいいよ雄二。今度はバッチリだよ」

「すごい自信じゃな。で、あの二人は何の話をしておったのじゃ」

「さあ、思いだしてみよう。確か最初は「Fクラスに来るな」だったはず。うん、いい調子だ。」

「うん「Fクラスに来ると後で返すから、俺の話を聞いて彼女の名前く

らい彼女じゃないから休み時間が終わっちゃう」だったよ」

あれ、みんなが頭を抱えている。雄二が姫路さんに言った。

「すまん、姫路。さつき国語の時間を3倍にしろと言ったのは忘れてくれ。ありったけの勉強時間を国語に叩き込め」

「あんまり自信はありませんが、できるだけ頑張ります」

「うちの古典の方がまだマシだわ」

ありのままに報告したのにこの扱いは酷くないだろうか。僕が一体何をしたというんだ。ところで今気がついたのだが工藤さんってチャイムが鳴ると同時に教室に飛び込んできたよね。AクラスからFクラスまで走っても2分はかかるはずなのに、彼女は一体どうやってそんなマネができたんだろう。僕は雄二に尋ねてみた。

「翔子も時々とんでもない真似をするんで質問したことがある。返ってきたのは「恋する女の子に不可能はない」という答えだった」

雄二はどこか遠い目をして答えた。霧島さんが言うтусごく重みのあるセリフだ。色んな意味で尋常じゃない行動を見ているだけに説得力がハンパではない。

さて、どうやら再度フリーズしたFFF団が目を覚ましたようだ。

「くそお、逃げられちゃった」

「どうせ授業で戻ってくる。今度は逃がしやしねえぜ」

「ねえ、まだなのまだ殺っちゃいけないの」

殺気レベルが1UPしたようだ。車の八つ裂きだけではすまないかも知れない。

ムツツリー二は次の授業が始まる直前に先生と一緒に戻ってきた。

## 第6話

1時間目よりもパワーアップした殺気の中で、ムツツリーニの顔もますます青ざめていった。奴も特別顧問として数々の処刑に立ち会ってきた男だ。FFF団の恐ろしさは身に染みているに違いない。全員が授業を聞くふりをしてムツツリーニを睨みつけている。そしてまた運命のカウントダウンが始まった。

「5、4、3、2、1」そして「ゼロ」。

ガラっ「ねえ、こつ康太。教科書ありがとう助かったよ。あつ、あの良かったら今度ボクの家で数学の勉強よ……キヤア」ムツツリーニが工藤さんの口をふさいで廊下へ連れ出す。FFF団は例によつて全員またフリーズしている。どうでもいいが、この連中人一倍スケベな割には女の子に耐性がなさすぎるのじゃないだろうか？Fクラスにだつて姫路さんや秀吉という立派な女の子がいて腕を取られて両足が関節を逆の方向に……

「ギヤア……美波、イタイイタイ。その関節はそつちの方向には曲がらないってば」

「あんた今、何か失礼なこと考えていたわね」

「そんなことないよ。イタタタタタ」

「あるのよ。誰が女じゃないのよ」

「そんなこと思つてないって。ただ、Fクラスにだつて姫路さんや秀吉という立派な女の子がいると、ギヤアアアアア」

「やつぱり、そんなこと考えていたのね。あと何cm曲げると腕つて折れるのかしら」

「おぬしらいいかげんにせい。とりあえず今はムツツリーニのことじゃ。あと、わしは男じゃ」

美波はシブシブと腕を話した。おかしいこの国は自由主義国家で言論の自由が保証されていると鉄人が授業で言っていたはずなのに、僕は家でも学校でも自由に自分の気持ちを喋ることができない。

「じゃ、また僕が会話を聞いてくるよ」

「いや、明久行かんでいい。どうせ大した話はしていないだろうし、お

前から話を聞くと余計混乱してくる」

「じゃ、坂本は状況がわかっているの」

「翔子からの情報と今の現状、そして姫路の話からおおよそわかった」  
「どうなっているんじや結局」

「まず、翔子情報だがムツツリー二と工藤は、この間のテストで保健の科目の勝負をして負けた方は

勝った方の言うことを1つだけ何でも聞くといい賭けをして工藤が勝ったらしい」

「「ふむふむ」」

「それで工藤の条件というのが、自分のことを「愛子」って呼ぶこととお昼と一緒に食べることであったらしい」

「でも、それだと条件は2つになるんじやないですか？」

「ボクのことを愛子って呼んで、お昼と一緒に食べること」。ほら、文書にすれば一つだよ」と丸め込んだらしい」

「清々しいくらいにアホじやのう」

「完全無欠のバカね」

「愛子ちゃんすごいですね」

「え？今の話にか何かおかしいところがあった？」

「どうしてだろう、みんなが僕をかわいそうなものを見る目で見ている。」

「姫路、さっきの話だが休み時間にも国語を教えてやれ」

「僕が口を開くたびに国語の勉強時間が増えていく。おかしいなあ本当に一つの文なはずなのに。」

「でも、愛子もそこまでするんだったら、いつそ「彼女」にしてつて言えばいいのに」

「僕は慌てて美波の口を抑えた。「彼女」という言葉に反応して力つきてた連中が蘇生しかけた。ふう、危ないところだった。」

「ダメだよ美波。それは連中を地獄の底から呼び戻す禁断の呪文だ」

「ゾンビみたいな連中ね」

「まあ、工藤もああ見えて根は純情だから、自分の口からは直接は言えないんだろう」

いや、どう考えても普通に「彼女にして」って言った方が、マシな行動を取っているような気がするんだが。第一、ムツツリーニの命が風前の灯火になってしまっている。このままでは、彼女になれないまま未亡人になることは必至だ。

「とりあえずお昼までは、この調子だろう。問題はお昼をどこで食べるかだが、ムツツリーニの性格から言って人気のないところだろう。そうすると……屋上だな」

先生が入ってきて、ムツツリーニがその後が続く。そして授業が始まる。お経の声が輪唱のように教室に響き渡って気が滅入るつたらありやしない。

「5、4、3、2、1」そして「ゼロ」

「やれえええ〜」

ガラっ「ねえ、こっ康太。おかずは何が好……キャア」

ムツツリーニが工藤さんを連れ出しFFF団がフリーズする。この光景もそろそろ見慣れてしまった。どうでもいいが工藤さんはチャンと授業を受けているんだらうか？毎回、終業チャイムと同時に教室に飛び込んでくるんだけど。

数分して先生が入ってきて、ムツツリーニが席につく。もはや教室の雰囲気は殺気どころか、瘴気と呼んだ方がふさわしいものになっていた。小鳥が僕らの教室の上空を飛んだならその毒気に当てられて落ちることだろう。教室の中にはお経だけでなく、「エコエコアザラク、エコエコザメラク」という呪いの呪文まで聞こえてくるようになった。何しろ次は、メインイベントのお弁当の時間だ。FFF団としては、何としても阻止したいところだろう。

「人の幸せは許さない」がFFF団の方針なのだ。何て性根の腐った連中なんだろう。



## 第7話

そしてまた始まるカウントダウン。「5、4、3、2、1」そして「ゼロ」。

だが誰も動き出さず教室の入り口のドアを見つめている。いつもはこのタイミングで工藤さんが飛び込んできてフリーズさせるからだ。ドアは開かなかった。

「へへへ、奇跡は3度は起きなかったようだな」

さすがFクラスだ。算数すら危ない。3度ではなく4度なのだが、そんなことをツッコんだらこっちの命が危なくなるので、もちろん黙っている。

「ムツツリーニ、いや裏切りものにそんな名称はふさわしくないな、土屋。FFF団の掟を忘れたとは言わせないぞ」

「ねえまーだー、まだやっちゃだめ。もういいでしょ」

ムツツリーニは黙って立っていた。だが、僕にはわかる。奴は戦う気だ、闘気が全身にみなぎっている。

「お前の罪は宣告するまでもないな。残念だよ……やれ!!」

須川君がかけ声をかけると同時に四方から敵が襲いかかってきた。一瞬遅れた右側の敵の方へ動くと、その目前で横へスライドした。速い。そのまま入り口へ突進したムツツリーニに向かって入り口を固めていた二人が力一杯バットを振り下ろした。

恐ろしいことに何のためらいもなく頭を狙ってフルスイングしている。

「当たる」と思った瞬間にバットが空を切った。「ぎっ残像？」どれだけ速く動けば残像など残せるのだろうか。ムツツリーニという男の恐ろしさを改めて思い知らされた。というか、この能力を盗写や盗聴なんぞに使っていいんだらうか？なんかもう国家的損失という言葉葉さえ浮かんできた。

ムツツリーニはそのままドアを開けると廊下をかけていった。

「くそ、追え逃がすな。楽しいランチなんぞやらせてたまるか」

「「「うおおおおお」」」

4回に渡ってムッツリーニと工藤さんのイチャイチャを見せつけられた男たちの怒りはもはや止められない、というか止める必要を全く感じない。

「さて、お前ら。闇雲に追っても無駄だ」雄二が叫んだ。

「何だ、坂本。お前心あたりがあるのか」須川君が気色ばんで訪ねた。

「ああ、奴らも馬鹿じゃない。お前らが追ってくることでくらい考えているだろう。だから、もつとも想像しにくいところで昼を取るはずだ」

「想像しにくいところ」

「ああ、つまり……3年A組だ」雄二は何を言い出すんだろうか。

「あそこはお前、俺たちの宿敵じゃねえか」

「だからだよ。いくら敵だからって、普通に弁当食べている奴に手をかけることはないだろう。ましてや、そこに逃げ込んでいるなんて思いもしないと考えるだろう」

「なるほど、ムッツリーニのやりそうなことだ」

須川君はすでに憤怒の鬼と化しているクラスのメンバーに対して芝居がかった口調で檄を飛ばした。

「おのおの方、敵は3年A組にあり。我らこれより修羅に入る。仏と会うては仏を斬り！鬼と会うては鬼を斬る！情を捨てよ！！ただ一駆けに攻め入れ！！めぎすはムッツリーニの首ただ一つ。我に続けええええええ」

「「「「「おおおおおおおおおお」」」」」

一陣の風が吹き去り。後には静寂だけが残された。

「ねえ、雄二。お昼の場所なんて教えちゃってよかったの」

「ああ？バカかお前。ムッツリーニたちが3年A組なんかで昼飯喰うわけないだろうが」

「じゃ、どうして3年A組だなんて言ったのさ」

「あいつらも言ってただろう。あそこは俺達の宿敵だからな。悪くても戦力の半分、うまくすりゃ3分の2くらいは減らしてくれるだろう」

さすが雄二だ。クラスメイトの命など屁とも思っていない。だけ

ど来週A組と試召戦争するって言ってなかったっけ？

「なに、体の丈夫さだけが取り柄の連中だ。2日もすれば復活する」

「相変わらず外道じゃなおぬしは」

「それよりムツツリーニだ。普通の弁当ならどうでもいいが、レシピが気になる」

「……愛子が料理？」

「うわ、翔子いつの間に現れやがった」

「……ちよつと気になるから私も行く」

「相変わらず人の話を聞いてないな。勝手にしろ。ところで姫路。どんなレシピを教えたんだ」

「えーと、豚肉のシヨウガ焼きと卵焼きとグリーンサラダです」

「それはレシピが必要なほどの料理なのかのう」

「とにかく、たぶん屋上にいるはずだから屋上に行くぞ」

僕、雄二、秀吉、美波、姫路さん、霧島さんは屋上に向かった。

ドアを開くとベンチに座っていた二人が目にはいったところで、僕らとはまさにランチボックスの蓋を開けようとしていたところで、僕らと目があって顔を真っ赤にしてフリーズした。どうもこの人の恥ずかしがるポイントがどうしてもわからない。廊下で「彼女だ」と大騒ぎできるくせに、なぜ弁当を作ってきたことを見られるのがそんなに恥ずかしいのだろうか？

「やあ、工藤偶然だな」もう偶然と言えば何でもありだなこの学園は。

「ああ、ぐっ偶然だね。どうしたのみんなして」

「いや、食後の腹ごなしに散歩してたんだ。これから食事か」

「うっうん、偶然康太……ムツツリーニ君と会ったんで、ちよつとボクのお弁当を分けてあげようかと思って」

工藤さんがムツツリーニ並に嘘をつけるようになってる。ご両親は手遅れにならないうちに彼女を転校させた方がいいと思うんだが。

「ふーん、そりや羨ましい。どれどれどんなおかず何だ」雄二がさりげなくおかずをチェックする。

「どうだった」

「ハンバーグと鶏の唐揚げとポテトフライだった」

「姫路メニユーじゃない」

「なあ、工藤。姫路からメニユーならったんじゃなかったっけ」

「(真っ赤)うっうん。ボクあんまり料理に自信がないから、料理が得意だっという瑞希から教わったんだ」

「それにしてもメニユーが全然違うようだが」

「うん、瑞希のレシピの調味料が手に入らなくて」

「調味料？そんな難しい調味料なんて使うメニユーだったか」

「うーん、バルサミコ酢作るのにバルサンと酢酸とか、サラダの色止めにシアン化カリウムとか、卵焼きの塩味付けに水酸化ナトリウムとか・・・ちよつとー日じゃ手に入らなくて」

「シアン化カリウム・・・そんなの使ってたのか」

「それよりバルサンは調味料じゃなからうに」

「おや、雄二と秀吉の顔色が真っ青になっている。なにか問題があったのだろうか？化学調味料は体に悪いということかな」

「とつとりあえず、そんなのは使つてないんだろうな」

「うん、手に入らなかつたから普通に作つたよ。よかつたら味見してみる。ちよつと自信があるんだ」

「じゃ、凶々しいようじゃがちよつとご相伴にあずかろうかのう」

「僕はハンバーグ、雄二は鶏の唐揚げ、秀吉はポテトフライをつまむと口に入れた。」

「二・・・二・・・二・・・二・・・二・・・二」

「あつ、味はどうかかなあ？」と工藤さんが訪ねる。

「いや、何というかこれは、オブライトに五重くらいにくるんで耳ざわりよく表現すると」

「殺 人 的 に 不 味 い」

「一体、普通の食材と調味料を使つてどうやったらこんな味が出せるんだろうと逆に感心してしまうほど不味いのだ。姫路さんの料理をストレージハンマーの一撃とすれば、工藤さんの料理は歯がさびて切れなくなったノコギリで首を切られているようなものだ。」

「ヤバい、このまま口の中に入れていては危険だ。はやく飲み込まな」

ければと思つて飲もうとするのだが、喉が拒否する。ええい、邪魔をするな僕の喉。やばい口の中がピリピリしてきた。思い切り力を入れて喉に押し込み手で喉をしめて胃に落とし込んだ。

ふー危ないところだった。姫路さんの料理は速効性だが、工藤さんの料理は遅効性らしい。秀吉は割と難なく飲み込めたようだが、鶏の唐揚げを選んだ雄二はだいぶ苦戦をしているようだ。顔色がだんだん青くなってきた。ちようどいいから工藤さんの料理の破壊力を観察しようと思つたら、やっと思込み終わつたらしい。運のいい奴だ。

「で、どうだったかなボクの料理は」追い打ちをかけるように工藤さんが恐ろしいことを尋ねてきた。

「うーん、とても個人的でいいんじゃないかな」嘘は言つてないぞ。

「よそでは喰えん味じゃな」秀吉はそつがない。

「とりあえずムツツリーニ専用にしとけ」さすが雄二だ、妥協がない。

## 第8話

「じゃ取りあえず問題は（ムツツリーニ以外）ないようだし、教室に戻るか」

「……実は愛子は料理が苦手。調理実習でも失敗ばかりしてる」「そういうことは先に聞きたかったのじゃ」

「致命傷じゃないからいいんじゃないかな」

といいながら階段に向かって歩きだすと、階段から「ドドドドドド」と地を揺るがすような音がした。

「もう、ここしか残ってねえ」

「野郎、致命傷だけで許してやろうと思ったがもう許さねえぞ」

「ひゃひゃひゃひゃ、血がみれるよお」

いけない。FFF団の生き残りだ。3年A組との戦いを生き残ってきたらしい。あつという間に屋上に10人ほどが並んだ。もはや言葉が通じる状態じゃない。

「坂本お、よくも騙してくれたな。おかげで半分殺られたぜ」

「こうなったらお前もターゲットだ。前々から霧島さんと仲がいいのが気にいらなかったんだ」

えーつと、冷静に考えてみよう。FFF団のターゲットはムツツリーニと雄ニだから、僕らは関係がないとも言える。

「じゃ、雄ニ気をつけてね。秀吉、姫路さん、美波。危ないから脇に寄ってよう」

「明久君怖いです」と姫路さんが僕の腕に抱きついた。なにやら恐ろしく柔らかいものが腕に押しつけられる。それを見た美波も負けじと「アキ、ウチ怖い」と棒読みの台詞で反対側の腕に抱きついた。まな板を押しつけられる感触がする。いや、よりにもよってこの状況このタイミングでなんてことをしてくれるんだ二人とも。

「明久あ、てめえもかあ。女二人もハベらしやがって」

「ちよつと待ってよ。それは誤解だよ。ハベらしている女性は一人……グギユウ」美波のチョークスリーパーが決まる。

「もう、こうなったら一人も二人も関係あるか。みんなやつちまえ」

恐ろしい殺気だ。この気迫の10分の1でも勉強に回せば楽にAクラスに行けるというのに惜しい話だ。FFF団がジリジリと間合いを詰める。僕たちがジリジリと押されて後ろに下がり、やがて金網に押しつけられた。

ムツツリーニが寄り添っている工藤さんに囁いた。

「……連中は俺が食い止める。その間にお前は逃げろ愛子」  
「危ないよ」

「……俺なら何とかなる。理性は失っているとはいえ奴らも女には手を出さないはず」

「ふーん、女の子には手を出さないのか」

「……だから逃げろ。俺が食い止めている間に」

工藤さんにムツツリーニに向かってひまわりのような笑顔でニコつと笑ってこういった。

「じゃ、ボクが康太を守ってあげる」

「……何を馬鹿なことを言っている。逃げる奴には手をださないが向かってくる奴にはそうじゃない。あぶないからやめろ」

「ふふふ、ボクの必殺技見せてあげるよ」

工藤さんは、自信満々に一步踏み出すとFFF団に向かってこういった。

「Fクラスの諸君、ボクに注目。これからいいものをお目にかけます」  
ジリジリと間合いをつめてきた奴らは、工藤さんの気迫に押されて歩みを止めじっと見つめた。

「では」というと工藤さんはスカートの前端を掴み思いっきりまくりあげた。

「ううううう」

「おおおおお」

「ひやあああ」

FFF団は太陽を浴びた吸血鬼のように力を無くしたように全員崩れ落ちていった。

「……あ、愛子お前」

「ん？どうしたのかな、康太？」

「……いくら何でも何をするんだ」

「康太も見たいの？じゃ、ほら」

そういうと工藤さんはさっきと同じようにスカートをまくった。その瞬間、「だめです、明久君」という声とともに僕の首が捻られ、雄二の断末魔の声が響いた「……浮気は許さない」。

「あははは、ごめんね。今日は部活だから下から水着はいてたんだ」  
「……はっ鼻血が」

「本当にFクラスの男の子達って純情だよ。これだけで倒されちゃうんだから」

「いや、クラスは関係ないと思うんじやが」

「ボクの水着どうだった康太」

「……どうだったも何も下の方しか見えない」

「あ、そうか。じゃ今日の放課後にプールに来てよ。撮影会させてあげる。彼女の写真ほいでしょ」

「……いい加減に人の話を聞け。彼女じゃないし、写真にも興味ない」

「照れなくていいよ。売らないならいくらでも取っていいから。じゃ、約束だよ」

そういうと工藤さんは階段を駆け下りていった。

「……俺は約束したのか？」

「よくわからんが、そういうことになるんじやないかの」

「まあ、せっかくのお誘いだ行ってやれよ」

「愛子があんだけ言うんだから」

「愛子ちゃん、ああ言いながらきつと楽しみにしてますよ」

「……明久はどう思う」

ムツツリーニが助けを求めるように、僕に答えを求めた。

「うーん、写真のことはよく分からないけど、せっかく作ってくれたんだからお弁当は全部食べた方がいいんじゃないかな」

よく考えれば工藤さんの弁当は僕と雄二と秀吉しか食べてないじゃないか。これでは不公平だ。

「……それもそうだ」ムツツリーニが箸を取った。



「ああ、もう時間がないから一気にかっこめよ」

「・・・そうか」

「じゃ、僕たちは行くから」

そう言っ僕たちは階段へと向かった。背中の方からムツツリー  
ニの叫び声が聞こえた。

## 第9話

放課後、僕たちはプールにいた。

「で?」

「で、とは?」

「何で僕たちまでここにいるのさ」

「しようがないだろ。翔子がみんなで行くべきって言ってるんだから」

「しようがないのは坂本家の事情だ。夫婦の問題は夫婦で解決して欲しい。」

「……本当にいい迷惑だ。俺は愛子の写真など興味がないのに」  
ムツツリーニがブツブツ文句を言いながらもイヤにテキパキと撮影の準備をしている。僕らの前でも工藤さんのことを「愛子」と呼ぶようになってきていることには、どうやら気が付いていないようだ。工藤さんの調教の賜物と言えるだろう。

「ねえ、土屋。愛子が来るまで暇だからウチたちも撮ってよ」

美波の一声で僕たちの撮影会になってしまった。両腕を姫路さんと美波を取られた僕。なぜか女豹のポーズの秀吉。逃げだそうとして霧島さんにアイアンクロウを喰らっている雄二。その他いろんな写真を撮ってキヤアキヤアと遊んでいるところに声がした。

「おまたせ。どっとうかな」

紺色に脇に白のラインが入った競泳水着を着た工藤さんが頬を少し赤く染めて立っていた。全体的にスリムだけど手足が長くて、顔が小さくモデルのようだ。胸が美波と同じ程度というのがやや惜しまれるけど。

「うわあ、愛子ちゃんステキです」

「そつ、そつかな」

工藤さんの競泳水着姿を見るのは初めてだけど、何というか健康美というか健康的な色気というかそんなものが感じられてまったくいやらしさを感じない。これならムツツリーニも大丈夫……と思つて奴の方を見たら一生懸命鼻にティッシュを詰めていた。さすがは

ムツツリーニだ。女の子を見る目は常に公平らしい。

「じゃボクちよつと一泳ぎするね」

「え、愛子。撮影があるのに泳ぐの？」

「わかってないなあ美波。濡れている方が色気が出るんだよ」

工藤さんもさすがと言わざるを得ない。いつものスカートチラと中身が全く変わっていない。せつかく健康美を誉めた僕の感動を返して欲しい。というか、この二人はあらゆる意味でお似合いだと思っただけどなあ。工藤さんはプールに飛び込むとクロールでグングンと泳ぎ出した。速い。素人目にもかなり早く見える。

「ねえ、霧島さん？」

「……なに？吉井」

「工藤さんの泳ぎって随分早くない？」

「……そうね。愛子はまともに行けばインターハイにも出れたはず」

「じゃ、何で文月学園なんかにいるのさ。言っちゃ悪いけど、うちの水泳部って同好会みたいなもんだし」

「……それは愛子に聞けばいい。私が言うべきことじゃない」

霧島さんは事情を知っているようだったが、何も言わずに工藤さんの泳ぎを見つめていた。工藤さんはプールを3往復ほどするとプールの縁に手をかけて「よいしょ」と体を持ち上げた。

その瞬間「カシヤツ」とシャッターの音がした。工藤さんは満身の笑みで「アハハ、さすが康太。シャッターチャンスを逃さないね」と言った。

「……俺はプロだ。気が進まなくても受けた仕事には全力を尽くす」

「ふーっ、ちよつと疲れたから撮影の前に休憩ね」と工藤さんはベンチに座った。

「ねえ、工藤さんちよつと聞いてもいいかな」

「ん、何かな吉井君」

「こんなに泳ぎが早いんだったら文月学園なんかよりもっといい学校に行った方がよかつたんじゃないの？」

「うーん、ボクは小学校から水泳やっていたし、中学じゃ県の大会でも優勝したこともあったから、こっちに転校する時にいろんな高校から誘いはあったよ」

「じゃなんで、こんな弱小の文月学園なんかに」

「ボクは水泳は好きだけど、他にも好きなものがたくさんあるんだ。勉強も好きだし、友達とお喋りしたりバカ騒ぎしたりするのも好き」

そこで工藤さんは言葉を区切って顔を赤らめてこう言った。

「そっそれに男の子と恋もしてみたいなあなんてキヤア」。僕の背中をバンバン叩く。

「それはわかったけど、よりによって何でこんな学園に？」正直言っただけうちの学園は実験校ということ、とてもマトモとは言えない。

「うーん」工藤さんはちよつと逡巡してから意を決したように口を開いた。

「転校前にこの辺の学校見学に来たんだ。そして帰る時に駅の 에스카レーターでミニスカートの女の子の後ろに腹ばいになってカメラを構えている男の子がいたの」

情景が現実のように目に浮かぶ。恐らく誰だったかも。

「もちろん痴漢だと思ったんだよ。でも、その男の子は凄い真剣で、何かそういう撮影なのかと思っちゃった。ミニスカートの女の子も気が付いていたんだけど、男の子のあまりの真剣さに「邪魔しちやいない」と思ったらしくって、特に騒ぎもしなかったなあ」

そういうもんなのだろうか。確かにムツツリーニの盗撮は神の技と呼ばれているが。

「で、撮影が終わった時にその男の子は「ふうー」と息を吐いて、満足のいく仕事ができたっていういい笑顔を見せたんだ。で、よく見たら制服が文月学園のものでね。ああ、この学校に行けばこんな楽しいことが見つけられるんだと思ったの。それがボクがここに転向してきた理由」

学園生活で見つけた楽しいこととやらが盗撮ではご両親もさぞや悲しむと思うのだが。

「で、その男の子には会えたの」ちよつとイジワルして聞いてみた。途

端に工藤さんは母のように顔を真っ赤にして「どっどうかなあ。ちよつとわかんないや。あ、そろそろ撮影しよう」と走り出した。

## 第10話

工藤さんはキヤアキヤア言っているみんなの輪に加わった。

「ねえボクも混ぜてよ」

「そうね。土屋。愛子も入れて写真を撮りなさい」

ムツツリーニは文句も言わずに写真をパチパチ撮っていた。こういうところはさすがにプロだ。鼻に詰めているティツシユさえなければ。それから個人撮影に移った。どうせならこの際とばかりに女の子との2ショットを取りまくった。僕と姫路さん、僕と霧島さん、僕と工藤さん、僕と秀吉……は5枚ほど撮ってもらった。

ふー、こんなもんか満足満足。おや、僕の足に足が絡みつきもう一方の足が首の後ろに回されて身体が思い切り捻られて見事なコブラツイストが……イタタタタタ。

「美波ギブギブ。何するのさ」

「何するのさじゃないわよ。ウチとの写真がまだじゃない」

「いや、だってここにはオラウータンがいないし、美波が撮りたい相手がないから」

「あんたまだあの話信じていたの。いいからウチと写真を撮りなさい」

「いや、もうすでにムツツリーニが撮っているよ」

奴がこのシャッターチャンスを逃す訳がない。僕が死んだら立派な証拠写真になるだろう。

「こら、土屋。こんな写真じゃなくてちゃんとした写真撮りなさいよ」  
美波の強い希望で写真が撮り直されることになった。美波が僕の左に寄り添い腕を取っている。だが、見る人が見ればさりげなく関節を決めていることがわかるだろう。逃げだそうとした瞬間に僕の関節はヘシ折れるハメになる。身動きすらとれやしない。

「そろそろ工藤の撮影会をしたらどうかのう」と秀吉が提案した。

あやうく当初の目的を忘れるところだった。目的は工藤さんの撮影会だった。

「え、えへへへ。ボクの撮影会かあ。照れるなあ」

いや、そもそも工藤さんが提案した撮影会なのだ、照れるもへったくれもないと思うのだが、これが乙女心という奴だろうか。

「じゃ、まず飛び込み台に座れ」パシヤパシヤパシヤ。

「床に膝を抱えて座れ。もう少し顔を上げて」パシヤパシヤパシヤ。

「寝っころがって視線をカメラに」パシヤパシヤパシヤ。

なんだかんだ言ってもムツツリーニはプロだ。だんだん目が真剣みを帯びてきた。最初は照れていた工藤さんもムツツリーニの熱意に押されて真剣な顔で指示されたポーズを取る。でも思ったよりもムツツリーニにしてはエロポーズがない。奴のことだからここぞとばかりにエロポーズを指定して、ムツツリ商会で販売するものと思っていたのに。だけど、工藤さんにはエロポーズは似合わないよなあ。その辺は、ムツツリーニもやはりプロなのだろう。

「……よし、これで終わりだ」

「えっ、ボクこっ康太と一緒に写真撮りたいなあ」

「……お断りだ。愛子……工藤愛子」

「そんなこと言わずに一緒に撮ろうよ。吉井君カメラお願い」

工藤さんがムツツリーニの腕を掴んで食い下がる。僕がカメラを受け取ろうと近寄った時だ。

「……離せ、愛子」とムツツリーニが腕を振りほどいたはずみで、

工藤さんを突き飛ばしてしまった。

「……」

「……」

「……」

「……」

あまりのことにみんな黙ってしまった。

「女の子に何しやがるこのやろう」雄二が激怒してムツツリーニに詰め寄った。

僕は慌てて雄二を押さえながら「雄二落ち着きなよ。ムツツリーニだってわざとやったわけじゃないんだから」と言った。

工藤さんが立ち上がって明らかに作り笑いとわかる声で「びっくりしたなあ。康太も彼女だからって照れなくてもいいのに」と言った。

「……彼女じゃない」ムツツリーニが気まずそうに言った。その瞬間、工藤さんが今まで見せたことのない大声で叫んだ。

「彼女だもん。ボッボクは康太の彼女だもん。名前で呼び合っているし、お昼だって一緒に食べたし、遊園地でデートだってしたもん」

最後の方は泣き声になっていた。

「康太がゴンドラの中でボクに待つてろと言ってくれた時には、とても嬉しかった。だから、ボクは待つたんだもん。1ヶ月も待つたんだもん……ずっとずっと待つてたんだもん」

「……いや、あれはそういう意味ではない」

「1ヶ月待つたからもういいかなと思って……そっ、そう思ったから勇気を出して」

工藤さんはだいぶ興奮しているみたいだ。取り乱しているようにも見える。どうしたらいいんだろうか。

「……愛子、落ち着いて」霧島さんが工藤さんの肩をつかんで言った。

「待つてたんだもん。だからボク、かつ彼女だもん……グス」

「……愛子」

「ずるいよ、今さら。彼女じゃないなんて……ずるいよー!」

パシッと軽い音が響いた。霧島さんが工藤さんの頬を叩いた音だった。みんなビツクリしている。工藤さんもビツクリして泣くのを止めた。

「……愛子のことは私が一番よく知っている。優しいところも恥ずかしがり屋のところも純情なところもそして一途なところも」

「代表、ぼッボク」

「……愛子の気持ちはすばらしいと思う。だけどそれを相手に押しつけちゃダメ」

「ちよつと待て翔子、よりによってお前がその口で言いやがるか」と雄二が叫んだ。

「……雄二、うるさい」

「ぐおおおおお」

磨きぬかれた霧島さんの目つぶしが雄二の目を貫いた。うーん、今



のは霧島さんが正しいと思うよ。

「……吉井、うるさいから雄二が邪魔しないように黙らせておいて」

「わかった。美波頼む」A組に霧島さんがいるならば、F組には美波がいる。

「わかったわ」美波が雄二に見事な腕ひしぎ逆十字を極めた。

「……騒いだら折っていい。腕2本までなら許すから」

僕の記憶では、人間って腕は2本しかないはずなのだが。

「……とにかく愛子。あなたの気持ちも勇気も認める。でも、相手には相手の気持ちがある。自分がいくら好きでも自分の気持ちを押しつけちゃだめ」

工藤さんはうつむいて「エグエグ」とえずいている。

「……そして土屋」急に矛先が向いたムツツリー二はビクつとした。

「……あなたの気持ちも分からないではない。でも、あなたは愛子の気持ちを知っていたはず」

そしてムツツリー二を見つめるとまた言葉を続けた。

「……愛子には愛子の気持ちがあるように、あなたにはあなたの気持ちがある。私はAクラスの代表だから愛子の味方。でも、だからといってあなたに無理矢理愛子を受け入れるとは言わない。あなたはあるあなたの気持ちのままにすればいいと思う。だけど、愛子の気持ちを知りながら、自分の気持ちをぼかすのは私は許せない。あなたが受け入れるにせよ受け入れないにせよ態度はハッキリさせるべき」

「俺の気持ちを聞いたことが……ギヤア」

雄二が何かを叫びかけたが、美波が関節を締め上げて黙らせた。雄二はいいかげんに学習すべきだと思う。

そして霧島さんは工藤さんとムツツリー二を呼び寄せて諭すように言った。

「……二人とも。これ以上どうしろと私には言えない。だけど2人でキチンと話あってみるべきだと思う。見栄とか恥ずかしさとかカッコつけとか全部捨てて、本当の気持ちで話し合ってみるべき。そ

うすれば結果はどうであれ気持ちにはスッキリするはず」

そしてゆつくりと僕たちの方に戻ってきて

「……みんな帰ろう。あとはどうなろうと2人だけの問題。私たちができることは何もない」と言った。

僕たちは、霧島さんにうながされるままにムツツリーニと工藤さんを残してプールを後にしようとした。

「……待て、明久」

ムツツリーニが僕に声をかけた。もしかして立ち会い人になれとでも言い出すのだろうか？やだなあ、そんなものになつてムツツリーニが工藤さんを振った時に恨まれるのは僕じゃないか。ヘタしたら刺されてしまう。ここはキツパリ断ろう。

「……このカメラで俺を1枚撮ってくれ」

「断る!!!」間髪入れず断った。よし、帰ろう。

「……いや、ちよつと待て。シャツターを押すだけだ」

「だからそんなことをして恨まれて、刺されるのは僕じゃないか」

「……何を言っているのかよくわからないんだが」

「だから立ち会い人は断ると」

「……そんなものはお願いしていない。写真を撮ってくれ」

「それならそうと最初から言つてよ」

「……最初からそれ以外言つてないのだが」

全く、紛らわしいことを言う男だ。僕はカメラを受け取ると写真を一枚撮ってやった。みんなのところに戻る時に振り返ると二人は床に座って話しあっていた。

## 最終話

それから何日かたった。

あの日のことをムツツリーニが口に出すことはなかったし、僕らも何も聞かなかった。ただ、結果として工藤さんがあの日以来Fクラスに姿を見せることはなくなった。その他にはFクラスに、屋上で工藤さんのスカート捲り攻撃を受けた連中を中心として「工藤さんファンクラブ」が結成されたこと。こいつらは将来絶対に高い絵を買わされるはめになるだろう。僕たちのムツツリーニへの気の使い方は半端じゃなかった。自分たちの中でも話題に出さないことはもちろん教室でも

「昨日の工藤の先発が……」と言った奴を雄二が張り倒し、「スバルの駆動輪が……」と言った奴は、美波がコブラツイストで黙らせた。

ムツツリーニはそういう僕たちの苦勞を知っているのかいないのか、いつもと変わらぬマイペースだった。

一度だけ教室移動の時に、優子さんと歩いてくる工藤さんとすれちがったことがあった。かなり気まずい雰囲気になるのかと覚悟していたが、ムツツリーニも工藤さんも普通の態度だった。一瞬、工藤さんがチラッとムツツリーニを見たような気がしたが心なしか微笑んでいたようだったのは気のせいだろうか？

それから更に1週間ほどしてみんなでムツツリーニの家に集まった。撮影会の時にみんなで写した写真ができあがったというので鑑賞会をすることにしたのだ。かなりの数の写真があったのでみんながワイワイと盛り上がっていた。雄二が何かに気がついてムツツリーニに尋ねた。

「おい、ムツツリーニ。この写真ってなんで工藤の写真が一枚もないんだ？あんなに撮ってただろう」

空気が凍りついた。相変わらず恐ろしい男だ雄二。みんな気がついていないのに気をつかって触れなかった話題をえぐり出してくる。

「……全部、工藤愛子に送った。俺が持っていてもしようがない」

「そうか……」

霧島さんを連れてくるんだった。雄二を放し飼いにしているとはいえないというのを忘れていた。話題を変えよう。

「そういえば、僕が最後に撮ったムッツリーニの写真もなかったね」

「……ピントが悪かったので処分した」

「オートフォーカスだね、あのカメラ？」

「……不思議なこともある」

「まあ、捨てちゃったんじゃないけど」

「……何か飲み物を持ってくる。おとなしくしていてくれ」

と言ってムッツリーニが階下へ降りていった。

「おとなしくしろということは……」

「何か見られては困るものがあるということじゃのう」

「エロ本をあいつは読めないし、何があるというんだ」

「じゃ、とりあえず家捜しを……」

ご期待には応えねばならない。ぼくらはさっそく家捜しを始めた。とは言っても普通の高校生がお宝にしているようなものはムッツリーニは触れることもできないので探す範囲は限られている。

「ないなあ」

「なにかありそうな口ぶりじゃったのじゃが」

「だいたいあいつのお宝というのが想像できん」

ふと、机に目をやってみると机の右端にペン立てで隠すように裏返された写真立てがあった。何で写真立てを裏返してあるんだろうと、僕は何気なく手にとって表に返してみた。

「あつ」

「どうしたのじゃ明久」

「何かあったのか明久」

「大丈夫ですか明久君」

「アキ何なのよ」

みんなが一斉に尋ねてくる。僕は黙って写真立てをみんなに見せた。そこには、競泳用水着姿のショートカットの女の子が泣き笑いの顔で写っていた。

「「「あつ」」」」

その時に階段から音がしたので、僕は慌てて写真立てを元に戻し、みんなは自分の席に戻った。

「……飲み物を持ってきた……何かあつたのか」

「いや、別に何もないけどさ。水着姿っていいよなあムツツリーニ」

「……白いビキニはいいと思う」

「いやいや、競泳用水着なんて最高じゃねえか？」

「……あまり好みじゃない」

「ふーん、そう。でも女の子はショートカットが一番だよね」

「……ロングの方が色気がある」

「ほほう、でも泣き笑い顔なぞそそるのう」

「……被写体としては笑顔でないで困る」

一から十まで好みと違う女の子の写真写真立てに入れて飾つてあるというのはどういうものだろうか。

「ちよつと、あんたたち止めなさい。また翔子に怒られるわよ」

「そうです。人の恋路を邪魔する奴はといます。これ以上何か言い出さないうちにお邪魔しましょう」

「……恋路というのがよくわからないが」

「いいんです。土屋君お邪魔しました」

僕たちは姫路さんと美波に首ねっこをつままれるようにして外に追い出された。

「もう、あの二人はデリケートなんだから外野から口を挟んじやいけないんですよ」

「翔子も言つてたじゃない。とにかく見守つてやればいいんだからね。わかった」

まあ、二人がうまくいつて欲しいのは僕たちも同じ気持ちだ。僕たちはムツツリーニ家を後にした。

机の前の椅子の上にあぐらで座り、腕で抱き枕を抱きしめながら机の上の写真立てに入った写真を眺めるのが、このところの少女の習慣だった。

「うへへへ」顔がにやけてくるのにも構わず飽きずにと写真を眺めている。

自分の部屋なので誰もいないのは分かっていたが、念のために周囲を見渡して確認すると、顔を真っ赤にして目を閉じ、唇を少しとがらせて少しずつ写真に近づけていった。

写真まであと1cmのところまで唇が止まるとしばらく固まり「だめだあキヤア」と言ってベットに飛び込んで転げ回るのも毎日のことだった。

吉井明久はベッドに横になっていた。友人が大切に持っていた今日の写真は彼に取っても衝撃だった。友人とともに過ごした日々が頭に浮かぶ。FFF団での容赦のない追求、試召戦争での裏切り……Etc.。その友人に彼女ができたのである。何かをやりやうが、彼にできることは限られている。

「僕にできることはこれくらいしかないけど」彼は机の上の携帯を手にとると番号をプッシュした。

「……あ、もしも須川君。明日ムツツリーニの家に行つて机の右端の写真立てを見てみるといいよ。じゃ」

よし、心の憂いはなくなつた。これでゆっくり眠れそうだ。

### 3. 風邪とカレーとファーストキス 第1話

「土屋は今日も休みか」鉄人が出席を取るとムッツリーニの席を見ながら言った。

「仮病を使う奴じゃないし3日も休むなんてだいぶ悪いんだな。まあ、お前らは心配いらんと思うが、体だけは気をつけろよ。お前から丈夫さを取ったら生きている意義がなくなるからな」実に失礼なことを言う。

だが、ムッツリーニが3日も休んでいるというのは、ある意味非常事態である。何しろその間に学校で行われた女子の体育の授業は両手では足りないのだ。ムッツリーニが決して学校を休まない理由はそこにある。

「確かに風邪にしては長引いておるのお」

「だいたい何で今頃、風邪なんかひいてるんだあいつは」

「なんか時間割間違えて女子更衣室の窓に雨の中2時間張り付いていたらしいよ」

「その根性をもう少し別なことに活かせないのかしらね」

恐ろしいことに誰も女子更衣室を盗撮しようとしたという行為について話題にすらしない。

それくらいムッツリーニと盗撮とは切っても切れない関係なのだ。

「でも、愛子ちゃんが心配して教室を覗きに来てもいいと思うんですけど」

そうか、ムッツリーニが学校を休んでいるというのにあの工藤さんが大騒ぎしないわけがない。もう別れたんだろうか？

「そりゃないな。今でもしよつちゆう翔子に料理のこととか聞いてくるらしいし」

僕の脳裏に嫌な記憶が蘇ってくる。二人がまだ付き合う前(といっても公式的にはまだ付き合っていることにはなっていないが)に、工藤さんがムッツリーニのために作ってきたお弁当をちよつとだ

けつまんだことがあったが、ある意味日本語の語彙では表現できない味だった。あれから色々努力しているようだが、果たして上達しているのだろうか？

世の中には努力すればするほど料理の威力が増す人がいることだし、と姫路さんの方をチラッとみた。

「まあ、乙女心という奴じゃろう。彼氏の教室に来るのが気恥ずかしいんじゃない？」と秀吉が言う。うん、秀吉がそういうなら間違いないだろう。この学校で秀吉くらい乙女心を持った生徒はいないんだから。

「とりあえず、今日みんなで土屋君の家にお見舞いに行きませんか？先生からいろいろとパンフレットも預かっているんです」と姫路さんが言った。

「そうね。あんなバカでも3日も休むと気になるしね」と美波が言う。

そして僕たちはムツツリーニの家に向かうことになった。

途中、見舞いの品は何がいいかについて激論を戦わせた。僕と雄二は「大人の階段を昇るための参考書がいい」と主張し美波に関節決められて提案を取り下げ、秀吉は水分が足りてないだろうからとスポーツドリンクを、姫路さんは「私が食べれないぶんもぜひ土屋君に」とケーキを強硬に主張し、美波は退屈だろうからと「ヴォルク・ハン関節技Best」を提案した。「これはウチのバイブルなのよ」とない胸を張りながらDVDを差し出す美波の迫力に、誰も反対することができず結局お見舞いの品は「ヴォルク・ハン」のDVDに決まった。ところで誰なんだろうこの人は？

「確かこっちだったな」と雄二が言った。

「……そう、その角を右」いつの間にか雄二の横に寄り添うように歩いていた霧島さんが答える。

「うわ、翔子。いつの間に現れやがった」

「……一緒に帰ってくれなかった雄二にお仕置きをしようと追っかけてきた。とりあえずお仕置きは後回しにしてあげる。今は土屋のお見舞いが優先」

追っかけてきたって気配も音も姿さえ感じなかったんだけど。こ



れが「恋する女の子に不可能はない」って奴だろうか。

やがて僕たちはムツツリーニの家に立っていた。

「来たのはいいいけどムツツリーニが寝ていたら誰もでないんじゃないか？」

「先に連絡を入れておくべきだったのお」

「とりあえず呼んでみましょう。お母さんがいるかも知れないし」と美波がチャイムを押した。

家の中でチャイムの音がしている。しばらく間があつて誰かが駆けてくる音がした。

そして「はい、今出ます」という女の子の音がした。

「今、女の子の音がしなかったか？」

「妹さんでしょうか」

「いや、ムツツリーニは男兄弟ばかりなはずじゃ」

「お母さんにしては声が若かったわね」

「それよりどこかで聞き覚えのある声だったんだけど……」

そして「お待たせしました」とドアが元気良く開かれた先には、制服の上にピンクのエプロンをつけた工藤さんが立っていた。

空気が凍った……………

## 第2話

工藤さんはドアノブを握ったまま、たつぷり10秒はフリーズしていた。

その間に顔がたちまちイチゴのように真っ赤に染まっていった。

「やっやあ、みんな。偶然だね」工藤さんがやつのことで声を振り絞って言った。

「偶然と言えば偶然だが何してんだ、工藤」

「・・・このところ終業チャイムと同時に消えると思ったけど」

「愛子、いつの間に・・・」

「愛子ちゃん、そのエプロン凄くかわいいです」

いや、姫路さん。ツツコむべきところはそこじゃないと思うんだ。

その時、奥から「おーい、愛ちゃん。お客さん誰？」と声がした。

「「「あつ愛ちゃん？」」」

背の高い男性が玄関に現れた。確かこの人はムツツリーニの2番目のお兄さんだ。

「あ、康太の友達か。愛ちゃん玄関じゃなんだから上がってもらったら？」

「そつそうですね。じゃ、みんな遠慮なく上がってこつちきて」と言つて工藤さんは奥へ消えて行った。

「あれはどういうことだ」

「恐ろしい位に馴染んでいるのお」

「愛子ちゃん、なんかイキイキしてます」

「・・・私と雄二をみているみたい」

「うん、それは確実に気のせいだ。ムツツリーニは拉致監禁はされていないからな」

「まさかもう結婚したわけじゃないよね」

「そんなこと許され・・・いや、ある訳ないじゃない!!」

何でだろう。時々、美波の背景に燃え盛る炎が見えるんだけど。

「そんなことより愛ちゃんって何よ。愛ちゃんって」

「工藤さんの名前の愛子の愛称だろうね」

おや、美波の腕が僕の首と股間に回されて、そのまま首の後ろに僕の体が持ち上げられて

脊椎が限界まで曲げられる。うん、これはアルゼンチン・バックブリーカーだね・・・なんて

冷静に解説している場合じゃない。

「いたたた。ギブギブ。何するのさ」

「ウチが聞いているのは、何で愛子が土屋のお兄さんから愛ちゃんなんて呼ばれているのかなのよ」

「そんなこと僕に聞かれても知らないよ」それより、そろそろ離してくれないと背骨が90度近くまで曲がりそうなんだけど。

美波は僕を床に放り投げた。いったい僕が何をしたというんだろう。

「まあ、玄関でこうしていてもしょうがない上がろうか」

僕たちは工藤さんの後に続いてリビングへと入っていった。

「康太なんかのお見舞いにもきてもらってすまなかつたね」

「ムツツ：いや土屋君が風邪で三日も休むなんて珍しいものですか」

「風邪で三日：いや、確かに三日休んではいるんだが…」

お兄さんは何とも形容し難い表情で言った。

「何かあったんですか？」姫路さんが心配そうに尋ねた。

「いや、何にもないよ。風邪だよ風邪」お兄さんが額に冷や汗をにじませながら答えた。

どうもこの兄弟は嘘を堂々とつく割には隠すのが苦手なようだ。

その時工藤さんがリビングに入ってきてお兄さんに向かって言った。

「あ、お兄さん。康太のおかゆ作ったらすぐに夕食の支度しますから」

「えっ？」お兄さんの動きが止まった。

### 第3話

「ははは、何を言うんだ愛ちゃん。弟の彼女にそんなことさせられるわけないじゃないか。」

お袋ももうすぐ帰ってくるし、俺たちに気をつかわなくていいんだよ」声が震えていた。

この反応をみるとお兄さんは既に工藤さんの「あの」料理を食べた経験があるようだ。

「あ、でも裕ちゃんは今日遅くなるからみんなの食事お願いねって、昨日頼まれちゃったんですけど」

「・・・あの、ババア。ちよつとゴメンね愛ちゃん。お袋叱つておくから」

お兄さんは部屋の隅に行くと携帯を取り出し凄いい勢いでボタンをプッシュした。

「・・・ババアてめえ何してやがる。早く帰ってきて晩飯を・・・無理？何でだ。ハアツ今札幌にいる？」

あんた何してるんだ。えっ、SWAPのコンサート？いい歳してアイドルの追っかけなんかしてんじゃねえよ。

晩飯どうすんだよ。愛ちゃんにお願い・・・いや、それを問題にしてんだよ。

そりや、愛ちゃんはとつてもいい子だけど、あの料理だけはいくら何でも（小声で聞こえなかった）。

愛ちゃん泣かすなって泣きたいのはこつちだ。えっ、キモタクがそろそろ部屋に戻ってくるから切る？

あんた一体何をしてんだ？ちよつと待てババア俺の話を・・・」よく話が聞こえなかったが、ムツツリーニの才能がお母さん譲りだというのがなんとなく分かった。

お兄さんの顔色がこころなしに青くなっているのは気のせいじゃないことは、

あの屋上ランチで地獄をみた僕たちがよく知っている。

工藤さんの料理は何と言うか、姫路さんとは別の意味で個性的なの

だ。

「あ、お腹空いているなら、すぐに・・・」

「大丈夫!!」お兄さんは間髪入れず力強く断言した。

「俺は全然お腹空いていないから、愛ちゃんは愛しい康太の食事の準備を最優先してくれ」

何か良いこと言ってるようだけど、今確実に病気の弟を生贄にしたぞ、この人。

「親父が帰ってくるまでまだ時間があるからゆっくりでいいよ」

「あの、圭君は今日接待で遅くなるから、残念だけど晩御飯はいらな  
いって」

「接待い〜?」

「はい、買い物前に圭君から電話があつてボクがでたら「おお、今日も  
愛ちゃんが来てるのかあ。」

じゃ、おじさん残業無しで速攻で帰らなきゃな、ワハハ」って言っ  
てたんですけど。

「晩御飯、圭君の好きなもの作りますから、何がいいですかって聞いた  
ら、しばらく沈黙があつて、

おどおどした声で「・・・あっちゃく、忘れてたわ。今日は大事な  
接待があつたんだ。」

愛ちゃんごめん今日は遅くなるから晩御飯はいらないわ。外で食  
べてくるからくれぐれも

僕の分なんか作らなくていいからね。じゃあ」と言つてすぐに電話  
切っちゃいました。」

再び、お兄さんの顔が険しくなった。

「愛ちゃん、ちよつとごめんね」というと、また部屋の隅に行くと携帯  
をプッシュした。

「・・・おい、親父あんた何してんだ。接待? 経理部が誰を接待すんだ  
よ。」

愛ちゃんが料理を作るからつて逃げてんじゃねえよ。とつとと  
帰つて来い。このままじゃ

一人分が増えるじゃねえか。日頃家族は助け合うことが必要だつ

て言っただけだ。

えっ？もう一つの家訓に自助努力がある？嘘つくな。今、作っただろう。大体あれは努力

してどうなるもんでも・・・おい、もしもし、もしもし・・・」

何やらいろいろと大変そうだけど、どうもこの家族は仲がいいように見えて基本的なところで

Fクラスに似ているような気がする。自分が助かるためには、平気で仲間を売るところなんかそっくりだ。

「はあく」お兄さんは魂が抜けたような様子でフラフラとソファアに座り込んで頭を抱えた。

「俺と兄貴だけかよ」

「あ、いえお兄さんは・・・」事情を全く理解していない工藤さんが明るく言った。

「あつ兄貴まで何かあったのか？」既に顔面が蒼白になっているけど大丈夫だろうかこの人。

「いえ、何かあったという訳じゃないんですけど、ボクが食材の入った買い物袋下げて帰った時に会ったんですけど、

「俺はしばらく旅に出る」って言って玄関から出て行っちゃいました。」

「・・・兄弟の縁を切つてやる」お兄さんはそう言うのがやつのようだった。

姫路さんの料理は食べた人間の命を危なくするだけだが、工藤さんは料理をするというだけで

一つの家を崩壊させてしまった。さすがは工藤さんと言わざるを得ない。

## 第4話

「あつあの、ボクちよつと康太の様子見てきます」

なぜか魂が抜けたようになってしまったお兄さんを見かねたのか  
工藤さんはそう言つて階段を駆け上がった。いった

お兄さんは力なくソファーに座り込むと小声でブツブツ言い始め  
た。

「あの料理を俺一人で・・・どう考えても絶対無理だ。だが、食べない  
と愛ちゃんが・・・」

そうだ、康太に全部押し付ければ、そもそもあいつの彼女の手料理  
なんだし・・・」

お兄さんの思考が何やら人間として進んではいけない方向に走り  
だしたようだ。

「ねえアキ、土屋のお兄さんの様子が変わらない？」と美波がいう。  
無理もない。美波たちは工藤さんの料理の破壊力を知らないのだ。

しかし僕たちも前に食べたことはあるけど確かに殺人的に不味  
かったけど家庭崩壊まで

引き起こすほどの料理だっただろうか？

「工藤は努力したんだろうな」雄二が言う。

「努力したのなら上達して美味しい料理が作れるようになるんじゃない  
のかな」

「明久、上達にはいい方向の上達と悪い方向の上達があるんだ」雄二が  
姫路さんの方をチラッと見た。

なるほど、確かに姫路さんの料理も彼女の努力に比例して破壊力を  
増しており、

今や兵器と呼べるレベルにまで達している。

「つまり工藤の料理は努力の結果あれから更に不味くなっているとい  
うことかの」

「ああ、この家の人間の怯え具合をみているとそう判断せざるを得な  
いな」

屋上ランチの時ですら殺人的に不味かったというのに、あれから研

鑽を積んで更に不味くなっているなんて、

もう日本語の語彙では表現できる言葉がないじゃないか。

「ねえ雄二、ムツツリー二の顔みて、さっさと帰った方がいいんじゃないかな」

「奇遇だな。俺もそんな予感がしていたところだ」

「じゃあ土屋君をお見舞いしましょう」

「あのくお兄さん、僕たちムツツ、いや康太君の様子見て帰りますので」

雄二が、まだブツブツ言っているお兄さんに声をかけた。

お兄さんは、初めて僕たちの存在に気が付いたかのようにうつろな顔を向けたが、

突然何かを思いついたように立ちあがり雄二の肩を両手で掴んだ。

「そうだ君たちがいたんだ。えーつと・・・」

「坂本です」

「そうか、坂本君。確認するが君たちは康太の友達だね」

「えーと、何ていうか・・・」質問の真意を測りかねて雄二が口ごもる。

「ト・モ・ダ・チだね」両肩がギューっと力いっぱい掴まれる。

「イテテ、はい友達です」

「うむ、友達と言えば一蓮托生、一心同体だ」

いや、実際のところ僕たちの友人関係はというと、敵対九割・険悪一割といったものなのだが、

目が血走っているお兄さんにそう告げる勇氣はない。

「詳しい事情は話せないが、今康太にはある危険がせまっている。実は風邪は1日で治っていたんだが、

愛ちゃんのおかゆのお蔭で更に2日休むハメになってしまった」

いや、お兄さん。興奮のあまり話せない事情を全部話してるんですけど。

「で、今日康太に更なる危険が迫っている。よりにもよってお袋が家族の食事を作るよう

に愛ちゃんにお願いするという暴挙にでた。それを聞いた親父も兄貴も逃げ出した。この



ままでは康太が一人で家族全員分を食べるハメになる。」

ようするに、工藤さんがムツツリー二の食事を作っているうちは笑ってみていたが、

自分たちに矛先が向いたとたんに逃げ出したわけかこの家族は。

FFF団以上の外道さと言えよう。

「いや、お兄さんが食べればいいんじゃない？」

「ぜひ、そうしたいところだが俺はこれから大学の補習授業がある」

「二補習授業くお？」

「二」大学にも補習授業があるなんて知らなかった。

「あのお兄さんって確かT大でしたよね？」と姫路さんが恐る恐る尋ねる。

T大と言えば確か日本一の大学だったはずなのだけど。

「ああ、だけど俺は恥ずかしながらFクラスなんだ」

大学もクラス制とは知らなかった。でもT大のFクラスというのは、頭がいいのか悪いのか判断に苦しむところだ。

「という訳で俺はこれから大学に行かねばならない。だけどせっかくの愛ちやんの手料理を無駄にしたら愛ちやんが悲しむ。」

「というわけで、君たちがぜひ晩御飯を食べて行ってくれ」

「いや、俺たちは……」

「頼むぞ。し・ん・ゆ・う……」再び雄二の肩が締め付けられる。

いつの間にか友人から親友にグレードアップしている。

「イテテ、分かりました」

「よし、お、いかん。こんな時間だ補習に遅刻してしまう」

お兄さんはそのまま玄関から飛び出していった。

「T大学にもFクラスがあるなんて知らなかったよ」

「それよりお兄さん、カバンも持たずに飛び出していたわよ」

「そんなわけあるか。ありや俺たちに押し付けて逃げたんだ」

雄二が肩をさすりながら忌ま忌しげにつぶやいた。

## 第5話

「しょうがない、少しはムツツリーニの顔でも拝んでやるか」

もともと僕たちはムツツリーニのお見舞いに来ていたはずだったのだが、いつのまにか命をかけたミツシヨンを任されてしまっている。

どうせムツツリーニと工藤さんしかいないのだ、ノックもなしにドアをあける。

見られて困ることをしていたとしたら・・・もう僕たちはムツツリーニの顔を拝むことはできなくなってしまうだろう。FFF団の手は長いのだ。

雄二がドアを勢い良く開けると、ピンクのエプロンに手ぬぐいを姉さんかぶりになっていた工藤さんが掃除をしていた。ちよつと可愛い格好だ。

「あつ」工藤さんが再びフリーズして顔を真っ赤にした。もうこの人のことを不思議に思うのはよそう。多分人とは違う価値観で恥ずかしいという感情があるんだろう。

「やつ、やあ偶然だねみんな」

「偶然も何もさつき下であつただろうに。ムツツリーニの様子を見に行つたんじゃないのかの」

「うん、そういういえばここ数日掃除してなかったの思い出したからちよつと掃除を」

「なるほど、で、ちよつと聞きたいんだがムツツリーニはなぜベットに縛り付けられて、猿ぐつわをカマされているんだ？」

「康太は照れ屋だから、食事の時間になると逃げ出そうとするんだよね。その予防。猿ぐつわは、掃除を始めると「あつちは触るな。こつちは開けるな」とうるさいから黙らせるため。エッチな本は全部探しだしたから今更恥ずかしがることなんかないのに」

盗聴器を全て発見する工藤さんのスキルで捜索されたら隠し通すのは不可能だろう。

男としてムツツリーニに同情を禁じ得ない。

「ダメですよ。愛子ちゃん。男の子には触れて欲しくないものがあるんです。そういうところは勝手に触っちゃダメなんです」

姫路さんが珍しく真面目な顔で主張した。うんうん、さすが姫路さんだ男心をよく理解している。

「そう言ったって掃除してたら見つかつちやうんだもん」工藤さんが抗議する。

「あれ、掃除しちやいけない場所のお宝地図って土屋君から貰ってないんですか？」

姫路さんが不可解なことを言いだした。

「瑞希、そのお宝地図ってなんのこと？」

「はい、えーつとこれなんですけど」

姫路さんは財布の中から折りたたんだ紙を大切に取り出してみんなに見せる。

「部屋の見取り図のようじゃのう。アキくんお宝地図と書いておるが」

「所々にマル秘マークがついていて注釈が書いてあるな」

どれどれ僕も見せてもらおう。うん、部屋の見取り図のようだ。窓際にベットがあつて壁際がクローゼット、その隣が本棚か。僕の部屋の間取りにそっくりだ。

マル秘マークは本棚の左端に一つで注釈が「世界史の参考書のカバー、タイトルはいけない女教師」ああ、あの本は名作だよな。

ベットの足元にも注釈があるね。「ベット下の漫画本の一番下、タイトルはセーラ服であんなことこんなこと」どうもこの部屋の住民は僕と好みが似ているようだ。いい友だちになれるかもしれない。あとは、机にマークがしてあつて矢印で「It's New!」と書かれている「2番目の引き出しの隠し底、タイトルは巨乳女子校生夜のご奉仕」これは僕も一昨日買ったばかりだね……………もしかしてこれは、僕の部屋のことじゃないだろうか。

「ひっ姫路さん。これってもしかして僕の部屋のお宝の……………」

「はい、玲さんが、明久君の部屋を掃除する時には、そこには触れないであげてねつてくれたんです」

「いや、そんな可能性もうないだろうし、これは返してもらおうよ」

「はっはい、それはいいんですけど」

「何か問題があるのかな」

「それ、玲さんのブログで公開されていますよ。バックナンバーまで含めて」

「バツ、バックナンバー？」

「はい、それVer. 2. 23ですけど、明久くんが新しい本買ったの2月22日ですよ。だから2月23日にバージョンアップして引き出しの本に「It's New!」ってついているんです」

ブログっていつの間は何をしてくれているんだあの人は。

僕が大人になる参考書を買うたびにバージョンアップされてブログで日本中に発信するなんて。

僕はムツツリーニのコンピュータを立ち上げた。あ、パスワードがかけてられている。

すると工藤さんが恥ずかしそうに「パスワードは A i k o K u d o」だよと答えた。

思いつきりツツコみたいところだが、今はそれどころじゃない。

「姫路さんブログの名前は？」

「えーと、確か「アキくんのお部屋」です」

ググる先生に教えを乞う。すぐにそのブログは現れた。

「どうやら人気ブログらしいの。カウンターが100万を越えておる」

それより何より何で表紙が文化祭の時の僕の女装写真なんだろう。

「姫路さん、お宝地図はどこ」

「アキくんの宝箱ってページです」

クリックしてみる。リスト一覧がズラーつと100リンク位でてきた。

「ふむ、僕はこんなに大人への参考書を買っていたのか」

というか、これだけ買ったのを姉さんは全部マークしていたのか。

いつの間にこんなことをとつかほぼ毎日更新しているところもあるぞ。

多分仕送りで懐が暖かかった頃だね……なんて懐古にふけている場合じゃない。

姉さんにいって早急にこれを削除してもらわないと僕の買った大人の参考書がほぼリアルタイムで日本中のお茶の間にお届けされてしまう。

「これは何かのう」と秀吉が僕からマウスを奪って「アキ君の写真室」というリンクをクリックする。

出てきたのは……セーラ服、ワンピース、ゴスロリ、バニーガール、メイド服などを着た僕の姿だった。こんな写真取った覚えはない。よく見ると写真の僕は全部寝ている。どうやら姉さんが寝ている僕に着せ替えさせて写真を撮っていたようだ。

「いや、ここまでされて起きないお主にも問題があると思うんじやが」「僕もうお嫁に行けない……」泣き崩れる僕に雄二が慰めるように行った。

「いや、明久ここをよく見ろ。あの写真はどうやらサンプルらしい。本物は下の方で販売されているようだ」

「販売か、よかった。あんなの買う奴はそんなにいないよね」

「……いや、それが。6枚一組でランダムに入っていて。コンプリートするには、だいたい50組くらい買う必要がある上にレア写真まであるらしい」

「どこのアイドル商法並みじゃない」

「恐ろしいことに売り切れ御礼まででている。第二期に乞うご期待だ」と

「姉さん、最近金回りがいいと思ったらこんなことを」

「まあ、ここで騒いでもブログは止められないんだから、うちで玲さんと話あっておけ」

それは雄二のいう通りだろう。とりあえずこの問題はうちに帰るまで忘れよう。

「ん？下の方に統計資料集なんてやけに真面目そうなリンクがあるね」

「えっとそれはですね……」



## 第6話

「ちよつちよつと待つてよ。普通に参考書を買えば今はFカップくらいが普通なんだってば」。

僕は必死に美波を説得する。何しろ目が本気なのだ。

「だから、Bカップ以下はマニア向けというか特殊用途というか・・・ギヤア」

どうやら説得の言葉を間違つてしまったようだ締め付けが厳しくなる。

「ウチの胸はマニア受けしかしなないっていうの？」

「いや、そうじゃなくて、ほら昔の偉い人の言葉にもあるだろう「貧乳は希少価値だ。ステータスだ」って、

だから美波ももつと自信を持つて・・・イタタタ」肘は既に可動域の限界を超えてしまつてゐる。

「誰が貧乳なのよ。誰が・・・」

これでも納得してくれないらしい。あとはえーつと「胸の大きさが決定的な戦力差ではないということを教えてやる」

いや、美波の場合小さい方が確実に戦力は大きいから逆効果だ。

「胸なんて飾りです。エロい人には分かんのですよ」

・・・いろいろな意味で逆効果のような気がする。というか僕へのダメージの方が大きいじゃないか。

肘からミシミシという嫌な音がしました。ヤバい限界かと思つた時に工藤さんが声をかけてくれた。

「美波その辺にしてあげなよ」

「何よ愛子。この巨乳好きのスケベの肩もつの？だいたいあんただつて

ウチと同じぐらいの胸なんだから、あんたも侮辱されているのよ」  
「ボクは別に吉井君が巨乳好きだつて構わないし、それにこつ康太はボクくらいなの

胸が好きだからいいんだもん」

「あつ愛子いつ見せたの」美波が驚いて力を緩めたところで脱出した。

「あ、べつ別に直接見せたわけじゃなくて、この前一緒に帰った時に、にわか雨に降られちゃって、

その時雨に濡れてブラウスが透けちゃってブラが見えたの。それを見た康太が鼻血出しちゃって。

それってボクくらいの胸が好きってことだよな」

工藤さんは恥ずかしそうに、でもどこか得意げな顔でそう言った。

工藤さん、助けてもらったところ悪いんだけど、その状況なら相手が爆乳でも巨乳でも普通乳でも

貧乳でも微乳でも無乳でも、ムツツリー二なら分け隔てなく鼻血を出すと思うんだ。

その意味ではムツツリー二はあらゆる女の子に平等だ。

どうも工藤さんはポジティブに思い込みが強い女の子らしい。

「工藤取り込み中のところ悪いんだがな」雄二が工藤さんに話しかける。

「ん、どうしたの坂本君」

「お兄さんが急に大学に行くことになったんで、晩飯は明久に食わせてやってくれと」

何を言いだすんだこの男は、鬼畜だと思っていたがここまで鬼畜だったとは。

「ははは、何を言いだすのさ雄二。お兄さんはいつもコンビ二弁当を食べている雄二に工藤さんの手料理を食べてもらいたいと言ったじゃないか」

「こいつ人を売りやがった。うちのババアの食事がマトモならコンビ二弁当なんて食わずにすむんだ」

「無駄に向上心のある姉さんの料理を食べさせられる僕の身になってみる」

「いや、落ち着けおぬしら。いつの間にか工藤の手料理を食べたい方向に話がいっとるぞ」

僕たちの醜いやりとりを聞いていた工藤さんは、明るく宣言した。

「そういうことなら大丈夫。今日はカレーだから何人増えてもオツケーだよ」



## 第7話

数分後、なぜか僕たちはリビングのテーブルに正座で並んで座っていた。

押し黙って脂汗を流している男性陣とは対照的に女性陣はキヤアキヤアと嬉しそうだ。

ふふふ、もうすぐ地獄をみるハメになるというのに幸せな連中だ。何て人の不幸を笑っている場合じゃない。

同じ不幸が僕の身の上にも降りかかってくるんだから。

「やっぱり私も愛子ちゃんのお手伝いに・・・」姫路さんがとんでもないことを言い出す。

「待つんだ姫路さん、早まつちやいけない」ただでさえインパクトのある工藤さんの料理に致命力という痛恨の一撃が加わってしまう。

「えっどうしてですか明久君」

「いや、ほらせっかく工藤さんが土屋家のために手作りしてくれた料理を部外者が手を出したら工藤さんの愛情が水の泡になっちゃうだろう」

よく考えてみたらここに土屋家の人間は一人もいないじゃないか。なんで、全く無関係の

僕たちがこんな苦しみを味わなければならないんだろう。やり場のない怒りが湧いてくる。

台所から工藤さんの楽しそうな鼻歌が聞こえてくる。どこかで聞いたことのあるメロディだが思い出せない。

「ワグナーか」

「ワルキューレの騎行じゃなあれは」

「あいつはどこを爆撃するつもりなんだ」

思い出した。「地獄の黙示録」で爆撃するヘリコプターがBGMにかけていた音楽だ。

無意識に歌っているんだろうけど、無意識ほど本音が出てくるとい  
うし・・・

そうこうしている間に「出来たよ」という声が出て、工藤さんが

リビングに料理を運んできた。僕たちの前にそれぞれ皿を並べる。

何やら真つ黒い物体がご飯の上にかかっている。

「あく、工藤。念のために尋ねるがこれは何だ」雄二が躊躇なく尋ねる。

「え？坂本君、カレーって食べたことないの？シーフードカレーだよ」  
「そっそうかカレーだったか。薄々そうじゃないかとは思ってたんだが、ところでこのいっぱい入っている黒い豆は何だ？」

「坂本君、何も知らないんだなあ。カレーには隠し味でコーヒーを入れるんだよ」

工藤さんはどうだとばかりに胸をはった。

工藤さん、隠し味にコーヒーを入れる、それは正しい。正しいんだけど隠し味にコーヒー豆を入れる人はいないと思うんだ。

「ダメですよ、愛子ちゃん。コーヒーはちゃんと挽いた豆を使わないと食べにくいですよ」

いや、姫路さん。そういう問題じゃないと思うんだ。

とりあえず、この二人を一緒に料理させてはいけないことがよくわかった。

クッキーを作っているうちにイエローケーキくらい作りかねない。

「それはそうと、なんでこのカレー泡立っているの」

「吉井君も何も知らないんだね。コーラも隠し味になるんだよ。炭酸が飛ぶのがもったいないから、できあがり直前に2Lほど入れたいんだ」

僕の方をみて勝ち誇った顔をされても対処に困るんだけどなあ。

「隠し味どころか目一杯自己主張してるぞおい」

思わずといった感じで雄二がツツコんだ。

「ところで工藤よ」

「何かな木下君」

「シーフードカレーとか言っておったのう」

「そっだよ」

「もしかしてシーフードというのは、この干物のことか？」

秀吉は箸で干物を一匹取り上げて目の前にかざした。ご丁寧にも

各人の皿に干物が一匹ずつ入っている。

「そうだよ。魚だし」

「干物をシーフードの範疇に入れる奴はおらんと思うのじゃが、普通に魚やイカを使えばよからうに」

「だって……」工藤さんは言いよんだ。

「ん、どうしたんじゃ」

「だって、生の魚って触るの怖いんだもの」

「そこまでシーフードカレーにこだわる必要はあるまい。普通のカレーで十分じゃろう」

「普通のカレーよりシーフードカレーの方がかっこいいじゃない」

「かっこいい」という理由だけで、干物入のカレーを食べさせられる僕たちの身になって欲しい。

ここまでくると女性陣も事態の異常さに気がついたらしい。

「とりあえずご馳走になるか」と雄二がヤケクソ気味に一口口に入れた。

しょうがないと僕も後に続いた

………おや、意識が飛んでいたみたいだ。

どれぐらい時間が過ぎたんだろう。時計を確認すると30秒は意識が飛んでいたみたいだ。

どうやら他のみんなも同じだったらしくキョトンとした顔をしている。

工藤さん一人がニコニコして「どう？美味しいかな」と恐ろしいことを聞いてくる。

「一段と腕を（いろんな意味で）上げたのう」秀吉がソツなく答える。

「これはもう世界レベルだよな」嘘はついてない

「とりあえず、あの2番目の兄貴にたつぷり食わせておけ」裕二は恨みを忘れていないようだ。

女性陣はまだ魂がこの世に帰ってきていないようで誰も答えない。

「そういえば工藤、ムツツリーニの食事はいいのか」雄二が言った。

「あ、そういえば食事の時間だ。ごめんねみんな。ボク康太に食事さ

せてくる」

そうして工藤さんはリビングから出て行った。

## 第8話

雄二はしばらくドアの付近で様子を伺っていたが、工藤さんが階段を昇っていったのを確認すると「よし、行ったな」と呟いて、「すぐに戻る」と言つて玄関に向かった。

「雄二まさか一人だけ逃げるつもりじゃ」と僕が咎めると、

「馬鹿野郎、俺を信用しろ」と全く持つて信用のないセリフを吐いた。

入学以来のこの男の行状を思い出してみても信用なんて成分は1mgたりとも見いだせない。

「お前らだけならともかく、翔子までいるんだ逃げ出したらどんな目にあうか」

それは裏を返せば霧島さんがいなかったら逃げ出すという意味じゃないだろうか？

一体、どの口から「信用しろ」なんてセリフがでてくるんだ、この男は。

「とにかくすぐに戻ってくる。工藤が戻ってくる前にカタをつけないと」そう言つて雄二は外へ出て行った。

僕たちはというと、工藤さんの自称シーフードカレーを前にして全員黙りこんでいた。

「アキ、せっかく愛子が作ってくれたんだから、さっさと食べなさいよ」美波が無茶を言う。

「そんな紐無しバンジーをするようなマネを要求しないでよ。そういえば秀吉はカレーが好きだったよね」

「おぬしはこれをカレーの範疇にいれるのか？それより姫路は好き嫌いが無いと言っていたのう」

「食べ物なら、好き嫌いはないんですけど」

工藤さんのカレーは、とうとう食べ物のカテゴリーから外されてしまったようだ。

そういえば、そもそも工藤さんはAクラスなんだから、ここはAクラス代表の霧島さんが責任をとるべきではないだろうか？

僕は霧島さんに声をかけてみた。

「ねえ、霧島さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「霧島さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「霧島さん大丈夫？」

「・・・・・・・・何？吉井。土屋の家はその角を右」

だいぶ記憶が巻き戻っているようだ。このカレーを全部食べたなら前世の記憶までさかのぼれるんじゃないだろうか？

僕たちが醜い押し付け合いをしている間に、雄二が両手の袋いっばいにミネラルウォーターのペットボトルを下げて戻ってきた。

「お帰り雄二。水をそんなにどうしたの」

「どうしたもこうしたも、一口食うたびにトリップしてたんじゃ、いつ喰い終わるかわからん。工藤がムツツリーニに飯を食わせている間にこれで流し込む」

そう言っつて雄二はペットボトルの水を全員に配った。

「いいか、口の中にカレーを5秒以上いれておくな。噛むな。とにかく口に入れたら水で喉に流し込め」

「この干物はどうするのさ」

「水を5口ほど飲んで、とにかくムリヤリ流し込め」

恐ろしいムチャを言う。

「とにかく時間が無い。工藤が戻ってくる前に片付けろ」

僕たちはいっせいに食事、いや作業に取り掛かった。

## 第9話

そこからはもう大騒ぎだった。

「このコーヒー豆固い」

「噛むな。水で流しこめ」

「いくら何でも干物は無理じゃろう」

「仕方ない。細かくほぐしてから呑み込め。できるだけカレーと接触させるな」

「・・・雄二、もう目が見えない。私が死んだら桜の木の下に・・・でも再婚は許さない」

「普通そういう時には、私のことは忘れて新しい人と幸せになってねと言うんだぞ。それに再婚以前に初婚もまだだ」

姫路さんの体がスプーンを握ったまま傾いて行くのを慌てて支えてやった。

「姫路さん、しっかり」

「あれ、明久君がいる。じゃあ私は天国に？」

「姫路さん気をしっかり持つんだ。ここは天国じゃない、ほら美波もいるじゃないか。それより、カレーを5秒以上口にに入れていちやいけない。すぐに水で飲みこむんだ」

誰かが「メディック！メディック！」と叫んでいる。かなり錯乱しているようだ。

もはや食事というよりは戦闘だ。

・・・10分後、阿鼻叫喚の大騒ぎとペットボトルを12本空にして僕たちの戦いは終わった。

美波は食卓に突っ伏してる。姫路さんは蒼白の顔色をしている。

雄二は床に倒れているし、霧島さんに至ってはお腹をさすりながら「しようゆ、お母さん頑張ったよ」と子供に何やら報告している。でも、解剖学的に言えばしようゆちゃんのすぐ隣にあの劇物を送り込んだわけだから、児童、いや胎児虐待なんじゃないだろうか。

雄二に言ったら「なあに、かえって免疫がつく」とか言いそうだが、あのカレーは免疫程度じゃ太刀打ちできないと思うんだ。

僕たちが激戦の後で茫然としていると、工藤さんがムツツリー二に食事を食べさせて戻ってきた。

「あれ、もう食べ終わっちゃったの？早いんだね」

いや、あなたが戻ってくる前に食べ終えようと死にもの狂いで頑張ったんですとは、とても言えない。

「木下君、おかわりは？」

秀吉が、チワワのような潤んだ瞳で必死に首を振る。

「そっか、吉井君はまだ食べたりなさそうだね」

どこをどう取ればそう見えるんだ。今でさえ致死量ギリギリだというのに。

「ははは、何を言うのさ工藤さん。これだけの人数でご馳走になったんだから、もう残ってないでしょう」

「ウウン大丈夫だよ。大鍋で作ったからあと3日分タップリあるよ」

工藤さんが晩御飯を作ると聞いて逃げ出したお父さんやお兄さんの小細工など一撃で吹き飛ばしてしまった。さすが工藤さんと言わざるを得ない。

逃げ切ったと思って安心して帰ってきた彼らが、このカレーを見つけた時の絶望した顔が目には浮かぶようだ。

僕らも苦しんだんだ、たつぷりと3日分は苦しむがいいよ。

「いや、僕もお腹いっぱい。それよりも工藤さんも食べなよ」

よく考えたら一番の戦犯は工藤さんじゃないか。自分で作ったものを食べてみて自分がどれだけ恐ろしいものを作り出してしまったのか、しっかりと反省してもらいたい。

「そうだね。じゃボクもいただくね」

工藤さんは台所に行つて自分の分のカレーを皿に入れて運んでくると、食卓に向かった。

「じゃあ、いただきます」

全員が固唾を飲んで見守る中で、カレーをスプーンですくうと一口に運んだ。

すまない工藤さん、残酷なようだけどこれも君のためなんだ。姫路さんのように手遅れになる前に自分の腕を知っておこうよ。



「……………」工藤さんが黙ってしまった。  
しまったな、いくら工藤さんのためとは言えちよつとやりすぎてしまっただろうか。

好意とは言え、彼氏の家族にこんなもの食べさせようとしていたと知ったらやつぱり

女の子としてはショックを受けるよね。もう少しソフトなアプローチをとるべきだっただろうか。

「工藤さん、あのさ……」

「……………凄く美味しくてきてる」

「……………」

全員一斉に叫んだ。一瞬、聴覚にカレーの影響が残っているための幻聴かとも思ったのだが、

全員が叫んだということは全員同じ言葉を聞いたのだ「このカレーが美味しい」と。

「工藤さん、このカレーが本当に美味しいの？いや、美味しかったけど」

「工藤、疲れのせいで味覚が変わつたらんか？カレーは美味かったが」

「愛子、本当に大丈夫なの。私は平気だったけど」

「愛子ちゃん、なんでもないです」

「…………愛子、頑張ったのは知ってるから正直に言って。私は美味しいと思っただけ」

「えーつと、みんな何をいつてるのかな??？」

工藤さんはわけがわからないという顔で答えた。

僕たちが知りたいのはただ一つだけ「工藤さんがこのカレーを本当に美味しいと思っているのか」ということなのだ。

どう言えば彼女を傷つけずに聞き出すことができるだろう？

「いや、そんなに美味しくできたのかなと思ってな？」雄二がさりげなく聞いた。さすがに腹黒さでは学園一と異名を僕から取っている男だ。

「うん、生涯一の出来だね。これなら圭君や裕ちゃんも満足してくれ

ると思う」工藤さんが得意げに言った。

「さつきから気になってたんだが、圭君とか裕ちゃんって誰だ？」

すると工藤さんは、たちまち真っ赤になった。

まあ、この人の恥ずかしがるポイントはどうせ理解できないからどうでもいい気がするんだけど。

「・・・こつ康太のお父さんとお母さんだよ」

「お前、仮にも彼氏の両親をそんな呼び方しているのか」

これはビックリだ。工藤さんがフレンドリーだとは知っていたけど、ここまでフレンドリーだったとは。

「ちつ違うんだよ。初めて康太の家に遊びに来た時にお父さんとお母さんが凄く喜こんじゃって、

「僕は娘が欲しかったんだ、ハハハ」とか、「あらお父さん、愛ちゃんがお嫁に来れば娘ですよ」とか・・・」

「かなり舞い上がっておったわけじゃな」

「それでボクが、つい「康太」って呼んじゃったら、お父さんが「親子に後れをとるわけにはいかな」

愛ちゃん、これからは僕のことを圭太いや圭君と呼びなさい」って言って、そしたらお母さんも

「あら、お父さんだけズルいわ。じゃ愛ちゃん、私のことは裕ちゃんって呼んでね」って。

それ以来、圭君と裕ちゃんって呼んでるの」

「二二」のろけかあ」「二二」人のろけ話がここまで聞いてて楽しくないとは思わなかった。

工藤さんは更に顔を真っ赤にして「べつ別にボクが話したかったわけじゃないもん」と小さくツブやいた。

「・・・雄二」

「ん？何だ」

「・・・私と雄二は、学校公認のノーカップル」

「学校公認にもカップルにもなった覚えはないが、それがどうかしたか」

「・・・だから愛子たちに負けるわけにはいかない」

「言っていることがよくわからんのだが」

「・・・雄二も私のお父様のことを権ちゃんと呼ぶべき」

「お前の親父を」

「・・・そう」

「霧島グループの総帥で、見た目がヤクザの総長みたいなあの親父を

「権ちゃん」と呼べと？」

「・・・そう」

「翔子いいことを教えてやる。そんなマネしたら翌日には俺は確実に東京湾に浮かんでる」

「・・・そんなことはない」

「そうなのか？」

「・・・そういう時は浮かんでこないように重りをつけるから、ちゃんと沈む」

「浮かぶとか沈むとかを問題にしてるんじゃないやねえんだよ」

雄二と霧島さんは、相変わらずかみ合っているんだかいらないんだか、よく分からない会話を繰り返していた。

そんな会話はどこ吹く風と工藤さんは本当に幸せそうにカレーをパクついていた。

でも工藤さんの料理の謎が解けた。この人はつまり

「壮絶な味音痴」

だったのだ。

## 最終話

食器を洗い終わった少女は、リビングの片付けを始めた。やがてそれも終わるとソファアールに腰をおろした。

友人はみんな帰り、家族は誰もいない。家の中が怖いくらいに静かだ。

そうだった、今この家には自分と少年だけだったのだ。その事実を改めて考えると顔が赤くなってきた。

「もう8時か、そろそろ帰らなきゃ」名残惜しそうにつぶやいてみる。「じゃ、康太の様子を見てから帰ろう」と独り言をいうと、ソファアールから腰を上げて階段を昇って少年の部屋へ向かった。

ドアをノックする。返事はなかった。寝ているのだろう。

「康太入るよ」一応声をかけてからドアを開けて部屋に入った。やはり少年は寝ているようだった。

机の椅子に腰かけて寝ている少年を眺める。

「どうしようかな。寝ているのをワザワザ起こして「ボク帰るから」っていうのも可哀そうだしなあ。書置きしておこうかな」

そういうと机の筆立てからペンを取り出そうとして、その後ろにある写真立てが目につき手に取ってみた。

「この写真イヤなだけどなあ」

それはかつて少女と少年がケンカした後、二人の付き合い方のルールを決めて仲直りした時に撮った写真。

プールの側で泣き笑いしている水着姿の自分の写真だ。泣き笑いの顔が恥ずかしくて何度も別の写真に変えてくれとお願いしたり、

自分的にお気に入り写真を代わりとして持ってきたりしたのだが、少年はガンとしてこの写真にこだわって変えてくれない。

「何がいいんだろ」机に顔に乗せて写真立ての中の泣き笑いの自分とにらめっこした。

自分としては可愛く写ってないのであまり好きな写真じゃないけど、少年がこの写真に

こだわって大事にしてくれているというのが、理由はわからないが

とても嬉しい。

少年の方を見てみる。まだ寝ているようだ。ベッドに近寄り少年の顔の側に肘をついて

顔を覗き込むように見つめてみる。

このところ寝る前に毎日30分は少年の写真を眺めたり、話しかけたりしているが、やはり生は違う。

思わず「うへへへ」と笑い声がこぼれてしまう。

どれくらいの間時間そうしていただろう。少年を見つめる少女の中にある考えが浮かび、浮かんでは打消し、そしてまた浮かぶのだった。「・・・康太、起きてる？」様子を伺うかのようにそっと聞いてみる。返事がないところをみるとまだ寝ているのだろう。

「・・・寝ていたら襲っちゃうよ」そう言っただけ少女は顔を真っ赤にした。だが、やはり返事はなかった。

少女は顔を真っ赤にしたまま立ち上がると、「そろそろ、帰らなくちゃ」と独り言を言った。

「あ、でも帰る前に康太の熱計らなきや」といいながら入口の方に向かい、なぜか部屋の電気を消した。

電気が消えても街灯の明かりでわずかながら部屋の中は照らされている。少女は再び少年の枕元に戻ると

「正確に熱を計るにはおでことおでこを合わせて計るのが、いつ一番いいんだよね。体温計がないから、

しつしようがないんだもん」と誰に聞かせるつもりなのか、独り言にしては大きな声で言った。

「こつ康太、熱を計るよ？」念を押すように確認した。そして返事がないのを確かめると、そっと額と額をくっつけた。

どれくらいの間時間そうしていただろう？少女は意を決するかのようにならば「うん」というと

・・・街灯の薄明りの中で二人の影が重なった。

少年は静かに目を開いた。家の中は静かだった。どうやら誰もいないようだ。

愛子が来ていたが、いなくなっているところを見ると、自分が寝ている時に帰ったのだろう。

今、何時だろうか？

その時、少年は自分の唇に甘い違和感がするのを感じた。唇を舌で舐めてみた。なぜか微かにカレーの味がした。

「キヤアキヤア」少女は抱き枕を抱きしめながらベッドの上をかれこれ2時間あまりころげ回っていた。恐らく今夜は眠れないだろう。

翌日の土屋家の食卓には、3人の男が沈痛な面持ちで腰かけていた

「親父、これはもしかして」

「想像の通りだ」

「やっぱり愛ちゃんのか」

「なんでまだあるんだ」

「カレーを3日分作ってくれたらしい」

「そんなに作ったのか」

「母さんが3日留守にするとお願いしたらしい」

「あのババア、てめえは気楽にアイドルの追っかけなんかしてやがるくせに」

「事ここに至ってはしようがない覚悟を決めよう」

「俺はいやだ、まだ死にたくない」

「落ち着け。土屋家家訓改定三版の第一条は何だ」

「……愛ちゃんを泣かせてはいけない」

「我らに万一があっても、康太が残っている。土屋家は康太が守るだろう」

「へへへ、そうだな。じゃ、みんなで一緒に愛ちゃんのカレーを食べようぜ。そして見事に散ってみせようじゃないか」

悲壮な決意の夕食が始まろうとしていた。

## 4. 二人とケンカとお夕飯 第1話

「おい康太、とつとと起きろ」

深い眠りの中からいきなりたたき起こされた。

「……何だ、いきなり」

「何だじゃねえ、非常事態だ」

「……非常事態？」

この兄は、朝っぱらから人を叩き起こしておきながら一体何を言いだすのだろうか。

「寝ぼけてんじゃねえ。愛ちゃんがお前を迎えにきてんだ。それだけならまだしも、お袋が朝飯作ってるのを手伝うと言ってる。」

今、親父が必死に阻止しているところだ、とつと起きて愛ちゃんを止めろ」

間違はなく土屋家始まって以来の非常事態だった。

慌てて制服に着替えて階下に降りると、父親が台所の前にさりげなく立ちはだかって少女の侵入をブロックしていた。

「いやあ、愛ちゃん。康太を迎えに来てくれただけでも申し訳ないのに、この上朝食まで作ってもらったら土屋家に呪いが振りかかっちゃうよ」

そこは普通バチが当たるといふんじゃないだろうかと少年は思った。

「そうよ、愛ちゃん。リビングでゆっくりしていて頂戴」母親も何気ないといった調子で言ったが、作業スピードが普段の3倍速になっている。

どうやら少女に手を出す隙を与えないつもりのようなようだ。

「……何をしている。愛子」

「あ、おはよう康太」

「……いいかげんに俺の話聞く癖をつけろ。朝っぱらから人の家で何をしているのかと聞いている」

「うん、朝ご飯を作るお手伝いをしようと思って」

「……………それ以前に何でこんな朝早くから家にいるんだ？」

「……………それは……………いつ、一緒に登校しようかなって思って」頬を赤く染めて少女が答えた。

「……………そんな約束をした覚えはない」

「うん、ボクにもないけど、今朝ふと思いついたんだ」

少女は顔を更に真っ赤にして呟くような小声で言った。

確かに少年の家は少女の通学路から途中を少し外れたところにあるのだが、

この時間に来たということは遅くても6時半には家を出なくてはならないはずだ。

とても、ふと思いついてできることではない。

「……………そうか、ふと思いついたのか」

「ウン、そうだよ」彼女はひまわりのような笑顔で、堂々と嘘をついた。

どうも我が家の家風に妙な具合に馴染んでしまっているようだ。

「……………で、本当はどうしてだ？」

「昨日見たドラマで彼氏と彼女と一緒に登校してるの見てああいうのいいなあと思って……………」と即答して頬を赤らめた。

素直なんだか馬鹿なんだか、よく分からない。Fクラスの連中との接触は控えさせた方がいいのかも知れない。

彼女は夕飯の時には、何度も遊びに来たことがある。その度ごとに夕食の手伝いをすると言いだすのだが、

その都度兄が「愛ちゃん、愛ちゃん。この対戦ゲームしようよ」とか父が「愛ちゃん、晩酌の相手してくれないかなあ。僕は娘のお酌で飲むのが夢だったんだ」と

少女の注意を引いて台所侵入を阻止してきたのだが、さすがに朝っぱらからゲームや酒を飲むわけにはいかない。

父親が目で「何とか止めろ」とアイコンタクトしてくる。

「……………愛子、悪いがお茶を淹れてくれないか」少年の朝はいつもコーヒーなのだが、以前にコーヒーをお願いしたら、

コーヒー豆をそのままコーヒーメーカーに入れた経験がある。



それに懲りて次は紅茶をお願いしたら、紅茶の葉をわざわざパックから取り出してカップに入れてくれた。

どうもパックを紅茶葉の包装だと思っただけらしい。

そこで今日は日本茶をオーダーしてみたのだが、これでだめなら後はカルピスくらいしかお願いできるものはなくなってしまう。

「えっ、康太お茶が飲みたいの？しよがないなあ。ボツ、ボクが入れてあげるよ。圭君お茶淹れていいですか」少女は嬉しそうに言った。

「おお、もちろんいいとも。おい、母さん。愛ちゃんがお茶を淹れたいそうさ。通すぞ」父親がまるで関所の番人のように台所の母親に声をかけた。

「えーと、今ならOKよ」母親が答えた。

「じゃ、愛ちゃん悪いね。くれぐれもお茶だけ頼むよ」

父親のやや意味を含ませた言葉を、少女は別に不思議がる様子もなく台所へ入っていった。

しばらくすると台所から母親のやや焦った様子の声が聞こえてきた。

「あ、あの、何しているのかしら？愛ちゃん」

「はい、康太にお茶を淹れているんです」答える声は、嬉しげだ。

「あ、そっそうだったの。康太のお茶を・・・でもお茶つ葉を茶碗に半分も入れなくても。」

「いえ、お茶の淹れ方なんて家庭によって違うものね。些細なことだわ」

不穏な会話が聞こえてくる。お茶なんて日本全国、淹れ方などそうは変わらないはずなのだが、一体どんな器用な淹れ方をしているのだろうか？

## 第2話

「……………でっ?」少女が運んできてくれた茶碗を凝視しながら少年は言った。

「でって?」悪びれずに少女も答えた。

「……………俺はお茶をお願いしたはずだが、これはなんだ?」

「お茶だよ」自ら省みることなど何もないという確信に満ちた笑顔で少女は答えた。

「……………愛子、お前のその自信がどこから湧いてくるのかわからないが、我が国ではこれをお茶とは呼ばずお茶っ葉と言う」茶碗一杯に茶葉が膨らんで盛り上がっていた。一見するとまるで「〇研のふえるワカメちゃん」だ。

「大丈夫だよ、ほらこうすれば」と少女は一緒に持ってきたお箸で茶碗から開いたお茶の葉を取り除いていく。

タップリお湯を含んだ茶葉を取り除いたせいで容量が1/3になつてしまった煮しめたような茶色の液体がそこに残った。

「はい、お茶」

「……………お茶ってお前これは」そこにあるのは見たこともない色をした液体。掃除の雑巾の絞り汁のような液体だった。

「お茶。せつかく康太のために入れたんだから飲んで」とてつもない要求を少女はニコやかに伝えた。

「……………一つ聞きたいのだが、お前の家ではいつもこういう淹れ方をしているのか?」

「ううん、うちは過保護だから何もやらせてくれないんだよね」

それは過保護だからではなく防衛反応なんじゃないかと思つたが、もちろん黙っておいた。

「……………愛子」

「うん、何かな康太?」

「……………つかぬことを聞くが、お前はカルピスを飲んだことがあるか」

「え、それくらいあるに決まつてるじゃん……………でも」

冷や汗が流れる。まさかカルピスですら危ないのか。こうなったらミネラルウォーターくらいしか任せられるものがない。

「カルピスよりもフルーツカルピスが好きかな」

「……そんなことを聞いているんじゃない」

とりあえずカルピスは保留にしておこう。

そうこうしているうちに母親が朝食を運んできて食卓に並べた。普段の3倍速で動いたといっても火加減はそんな空気なぞ読んでくれず、

火力が3倍にはなったわけではないので揚げ物・焼き物共に生焼けになっていて正直食べたものではなかったのだが、

そんな些細なことなど「命の前にはひとえに風の前の塵に同じ」と古典の授業でならった記憶がある。

「あ、愛ちゃんも食べていつてね」と母親が愛子の分もよそう。

「わあ、これ凄く美味しいです」と少女はあくまでもニコヤカだ。

「（これをウマイというその舌がそもそも問題なんだ）」と小さな声で少年がツブやく。

「うん、康太何か言った？ほらこの唐揚げなんかレアで美味しいよ」

少女は常にポジティブである。それは普通「生焼け」というのだが訂正する気力もない。

「わあ、この野菜炒めの人参なんかポリポリで、いわゆるアルデンテって奴ですね。素材の味を活かしてるんだあ。勉強になるなあ」

少年は頭を抱えた。これでまた一つ少女のレシピに間違った知識が記載されてしまった。

腐ってもAクラス。記憶したことは忘れないのだ。おそらくこれからずっとアルデンテの野菜炒めを食わされるはめになるのだろう。

恐ろしいことに彼女は皮肉で言っているのではなく、本気で感心しているのだ。それがわかっていいるから母親も引きつった笑顔しか返せない。

「それはそうと早く行かないと遅刻するわよ。はい、康太お弁当」

「康太のお弁当は、いつも裕ちゃんが作ってるんですか？」

嫌な予感がする。母も不穏な流れを感じたのだろう。言葉が言い

よどむ。

「そつそうだけど、みんなの分も一緒だから大した手間じゃないのよ  
愛ちゃん」

「でっでも一人分だけでも少なくなると裕ちゃんが楽になりますよ  
ね」

その少なくなる一人分はどうなるんだろうなどと自分の頭が現実  
逃避をはじめると。

わかつてはいるが認めたくない事実を少女は言い出すに違いない  
という確信がある。

「じゃ、じゃあ。今度からボクが康太のお弁当を作ってきます」

やっぱりそうきたか。少年は父と兄に救いを求めるように視線を  
送ってみた。

だが、兄は一生懸命テレビを凝視し、父は顔をくつつけるようにし  
て新聞を読んでいた。

まるで「今の発言は聞いてませんよ」とアピールするかのよう  
に。だが、その震える足が全てを物語っていた。

二人の了見はわかっている。ここでヘタに発言すると「じゃあ圭君  
（お兄さん）の分も一緒に作ります」と言われるのを恐れているのだ。

「まあ。そういうことは家族会議で決めるとして、そろそろ時間だか  
ら言っつてらっしゃい」たかが弁当がエライ大事になってしまった。そ  
れはともあれ救われたことに変わりはない。

「……………じゃ、行ってくる」

「裕ちゃん、ごちそうさまでした」

二人は揃って玄関をでた。

### 第3話

両親と兄に見送られるようにして二人は玄関を出た。なぜか三人から安堵の雰囲気 が漂ってきたのが気になったのだけど、それでも家族公認の彼女と認められているようでとても嬉しかった。

「へへへ、みんなに見送られちゃったね」

「……ああ、確実に送り出したかったんだろ うな」

「どういう意味かな？」

「……深い意味はない気にするな。それよりも余り俺にくつつくな」

「そんなにくつついてないじゃない」

「……いや、腕が……」

「時々、当たるだけでしょ。康太エロすぎ」

「……そういう問題ではない。はっ鼻血が（ブシユ）」

豆腐屋の店先で盛大に鼻血を噴き出してしまった。

「おう、康ちゃん。今日も元気がいいねえ」店の店主が声をかけてきた。

元気さのバロメーターに鼻血の出血を目安にされる奴はそうはいないと思う。

「あ、おじさん、すいません。すぐに掃除しますから」少女が慌てて謝った。

「ああ、いいよ愛ちゃん。後で流しておくから。それより康ちゃんに輸血してやりな」

そう言われて少女は俺のカバンから輸血パックを取り出し、手慣れた調子で輸血を始めた。

いつしか彼女も血を見ても動揺しなくなっていた。それはそうだろう、毎日毎日スカートチラッでこれ以上の血を少年から絞り出しているのだから。

「あらあら、また康ちゃんが鼻血かい。愛ちゃんが迫ったのかい」奥からオバちゃんも出てきた。

「やだなあ、オバちゃん。ボクそんなことしませんよ」

「そうだよねえ。大方ちよつと肩が触れた位なんだろうけど、愛ちゃんも将来大変だねえ。これじゃキスもできやしない」

「えっえっええ。キツ、キスってボクたちそんな……」少女が顔を真っ赤にして、両手をパタパタして否定している。

どうせ冗談なんだから受け流せばいいものを何でこんなに必死に否定しているんだろう。

この間からキスとかカレーという言葉に異常に反応するようになっていたが何かあったのだろうか？

それよりこの女はいつの間にもうちの近所の商店にここまで馴染んでいるんだろう？二人でこちら辺の店に買い物に来たことは一度もないはずなのだが。

これではそのうち結婚ということが既成事実として広まりかねない。

「ハハハ、康ちゃんからの行動を待ってたらいつまでたつても先にすすめないよ。オバちゃんが認めるから、愛ちゃんから押し倒しちまいな。多少鼻血出したって人間1/3までは大丈夫らしいから」

赤の他人に太鼓判を押されてしまった。

「あ、っいえ、ボクはその……」

「愛ちゃんも純情だからなあ。まあ、何かあったらオジちゃんのところに相談にきな」

子供の頃からこの豆腐屋に買い物に来ているが、こんなにフレンドリーだっただろうか？

というか愛子がうちに遊びに来るようになってからまだ一月なのに、ここまで信頼されているというのは、この女は何をしてるんだろうか？

いつまでも豆腐屋に関わっていたら遅刻してしまう。この様子ではこの先にある八百屋・魚屋・肉屋……etcの全ての店で引つかりかねない。

すばやく商店街を抜けて普通の道にでる。

「もうすぐ三年だけど康太は進路は決めたの？」

「……いや、まだ決めていない」

「ぼつボク、康太と同じ大学行きたいなあなんて・・・」

「・・・俺は大学に行けるほど成績はよくない」

「じゃ、どうするの？就職？」

「・・・この間、スカウトの人が家に来た」

「凄いな。どこ」

「・・・よく分からないが、内閣調査室というところと陸幕2部というところだ」

「へえ、聞いたことない会社だね」

「いや、公務員らしい」

「康太が公務員ってイメージじゃないね」

「・・・親が話していたからよくわからない。最後に呼ばれて体格のいい男に「おお、君が康太君か、ところでつかぬことを聞くが朝鮮語と中国語とロシア語と何が得意かね」と質問された。「どれもわかりません」と答えたら、「ふむ、常に最前線にいたいというわけか結構結構」と笑っていたんだが、あれはどういう意味だったんだろう」

「役所の通訳の仕事かな？」

どちらにしろこの少年は公務員で事務仕事をしているイメージじゃないなと少女は思った。

「そういえばさ。昨日、上のお兄さん久しぶりに見たけど今までどうしてたの」

「・・・ああ、なんかバンドのツアーだったらしい」

「ツアーってどっか旅行行ってたんだ。どちらにしても下のお兄さんがT大ということは、上のお兄さんも頭いいんだろうなあ」

「・・・いや、上のお兄貴は高校中退だ。バンドをやって高校を辞めた」

「ええ、圭君や裕ちゃんは反対しなかったの？」

「・・・うちの親は何か一つ抜きんでていればいいという主義だ。下の兄貴がT大に行ったのは勉強ができたからというだけだ。上の兄貴はバンドの才能があったということだ」

「ふーん、で何てバンドなの？あんまりお客さんが少なかったらかわいそうだから、今度コンサートを見に行つてあげようかな」

「……あまりよく知らないがタコ&ライスとかいうバンドらしい」「ええっ!!それってインディーズの超有名なバンドで、ボクの好きな忍者アニメの「Chickuwa」の主題歌も歌っているビジュアル系のバンドじゃない」

「……そうなのかな?」

「そうなのじゃないよ。インディーズなのにコリコンでアルバムが5枚連続一位の記録を作ったんだよ」

「……何でそんなに詳しいんだ」

「だってボク大ファンで、ああお兄さんにリーダーのShuのサインももらえないかなあ」

「……いや、そのShuが兄貴なんだが」

「ええええええ、だって似ても似つかないじゃない」

「……まあ、一応ビジュアル系とやらだから化粧すれば分からないだろう」

「ああ、今度絶対に料理作りについてお兄さんにボクの手料理を食べてもらおうんだ」

「……いや、ファンというのならそれは止めておけ」

興奮さめやらぬ少女は、タコ&ライスが如何に素晴らしいかを手を振り回して力説したが、

音楽に興味のない少年は聞き流していた。いくら大スターでも所詮は兄貴なのだ。

いろんなところを見てきてるので、そこまで熱中する少女の気持ちがか全く理解できない。

「どうか以前に兄貴のだからしないところを少女もたくさん見てきたはずなのだ。」

「でも、康太たち兄弟はお兄さんのバンド活動にまったく興味ないの」「……基本的に俺たちには関係ないからな。あ、でも下の兄貴は

恩恵を受けているようだ」

「どんな恩恵?」

「合コンでShuの弟というとてもモテるらしい。「また女の子の電話番号ゲットしたぜ」といつも自慢している」



「ごっつ、合コンなんて許さないんだからね。康太にはボクがいるんだから」

興奮した少女が少年の胸ぐらをつかみ上げた。

「……おっ落ち着け愛子。俺が合コンするなんて一言も言っていない」

「合コンで女の子の電話番号ゲットしてあんなことやこんなことなんて……許さない。」

ボクだってまだキスくらいし……、何もしてないのにそんなの絶対に許さないんだから。

今日から康太の朝夕と康太の携帯チェックするから」

涙ぐみながら訴える。どうやら頭の中では少年が合コンで他の女の子と仲良くなっている映像が浮かんでいるようだ。

「……いや、だから人の話を聞け。下の兄貴にしる電話番号をゲットしただけで誰にもかけていない。女の子と話をすると思惟しただけで鼻血を出す奴だ。発展するワケがない。単なる電話番号コレクターだ」

しかし、興奮しきった少女には通じなかった。涙で目を真っ赤にしながら

「そんなに合コンしたいなら勝手にすればいいじゃない。もう知らない。ボク先に行くから」と言つて駆け出していつてしまった。

後に残された少年はポツリとツブやいた。

「……頼むから俺の話を聞いてくれ」

## 第4話

吉井明久が登校してきた時、教室はリフォームの真っ最中だった。「えーっと、これはいつものあれかな?」

「毎度のことながら一糸乱れぬ動きじやのう」と秀吉が感心したように言う。

「で、今日の対象者は誰だ?」と雄二ものんびりと言った。僕たちに目もくれないところを見ると、今日のFFF団のターゲットは僕たちではないようだ。

「ふむ、しかし別段教室に変わった様子はないようじゃが」

そこに団長の須藤君が通りかかったので尋ねてみた。

「ああ、今日の異教徒は土屋だ」と須藤君は忌々しげに答えた。

「ムツツリーニたつて今日はまだ来てないじゃないか?」

昨日に何かあったなら昨日のうちにカタをつけているはずだ。処刑を翌日に伸ばすなんてそんな我慢の聞く連中じゃない。犬の方がまだ「待て」がきくくらいだ。

「ふふふ、奴は今朝工藤と一緒に登校したらしい。早飛脚が知らせてきた」

「お前らの通信手段はどうなつてんだ?」雄二が呆れたように言った。「やつの工藤への接近はこのところ目に余るものがあるからな。FFF団の恐ろしさを骨身に叩き込んでやる」

いや、接近というか巻き込んでいるのはいつも工藤さんの方で、ムツツリーニはどちらかというと一方的に被害にあっているだけなんだが、

連中にとつてはどうでもいいことなのだろう。FFF団は結果しか評価しないというと聞こえがいいが、要するに他人の幸せは許さないのがFFF団なのだ。

まさに修羅である。奴らだったら仏だろうが神だろうが女の子を連れていたら何のためらいもなく叩き切ることだろう。

だが、僕だつて美波がベタベタしてくることがあるが懲罰の対象になつたことはない、ということつまり

「……おや、首筋に冷たいものが押し当てられている。うん、これはカッターだね。」

「アキ、何かいいたいことがあるなら最後に聞くだけは聞いてあげてよ。」

「やあ、おはよう美波。朝っぱらから首筋にカッターの刃を押し当てるとするのはドイツ流の挨拶なのかな」

「教室に入ってきたら、あんたからよからぬ考えの波動が感じられたのよ」

「本当にFクラスにしていると学力は上がらないどころか下がる一方なのに、知らない技能は嫌と言うほど身につけてしまう。」

「いや、そんなもんで殺されちゃ割に合わないんだけど。危ないからそのカッターをしまつてくれるかな」

「仕方ないわね。ところでこれは何の騒ぎ」  
「いつものアレだよ」

「またなの。本当に飽きない連中ね。で、今日のターゲットは誰なの」  
「どうやらムツツリーニが工藤さんと一緒に登校したらしいんだ」

「え？愛子ならさつき目を真つ赤にして教室に走っていったわよ」  
「ムツツリーニは？」

「見てないけど……そろそろ始業だし、来るんじゃないの」  
「一緒に登校というのはガセネタじゃったのかの」

「その時、教室のドアが開いてムツツリーニが入ってきた。」  
「やあ、おはようムツツリー……」恐ろしい程の不機嫌オーラが出ている。声をかけるのとはばかられるぐらいだ。

「だが空気を読めない奴はどこにでもいる。須藤君がムツツリーニに近寄って処刑を宣言しようとした。」

「待ってたぜ土屋。お前最近工藤と」

「……うるさい」ムツツリーニが大きな声ではないが、ハッキリと叫んだ。

「……いや、だから工藤」  
「……俺の前でその名前を口に出すな」

「えーと、あれはどういうことかな」

「大方、工藤とケンカでもしたんだろう」

「あの二人のケンカの原因というのが想像つかんのう」

「大丈夫でしょうかあの二人。別れるなんてことには……」

「まあ、それも青春よ」

美波の背中が今日は天使の羽になっている。なんて楽しそうなんだ。

「心配するな。どうせ大した理由じゃないだろう。夫婦喧嘩は犬も食わないといつてな」

「お主が言うと言得力があるのう」

「まあ、雄二たちの場合はケンカというよりも霧島さんの一方的な虐殺だけどね」

「坂本君に選択権はありませんしね」

「ケンカになりようがないわね」

「ちよつと待てお前ら。俺のことはいいからムツツリー二のことを心配してやれ」

さつき心配ないといった口からこのセリフが出てくる男だ。本当に信用できない男だ。

ムツツリー二と須藤君はまだ対峙していた。

「まつまあ、そのゴニョゴニョさんとお前が一緒に登校してきたという報告があつてな。FFF団の規約によりお前の処刑判決が下つたんだ」

「……今日の俺に構うな。手加減できない」

「こつちは20人もいるんだ。やれるものならやってみる」

「……俺一人でも半分は殺れる。が、今日の俺は機嫌が悪い。やるというのなら徹底的に相手をする」

そういうとムツツリー二は胸に手をいれると小型のマイクのようなものを取り出した。

「何だそりや武器か？飛び道具とは卑怯じゃねえか」

たった一人を釘バットやボールを持った20人で取り囲んだ連中の言うセリフではないと思うのだが、さすがFFF団だ。

「……このマイクは全校放送に直結している。これで「ムツツリ

商会はFFF団の妨害により閉店する」と放送したらどうなるかな」「どつどうなるんだよ」須藤君が気圧されていった。

「……ムツツリ商会は、全校生徒の8割だけでなく教職員のほとんどを顧客に抱えている。それがFFF団によってツブされたとなったら、お前たちは全校を敵に回すことになる」

FFF団に動揺が走った。というか彼らのほとんどもムツツリ商会の大口客なのだ。まず、困るのは連中のはずなのだ。

「……それだけじゃない」

「まっまだあるのか」

「……ムツツリ商会には女性客も多い。なくなったらお前らは全校の女生徒から相手されなくなるだろう」

ムツツリーニの逆審判だった。全校女生徒に相手されなくなるということがよほど彼らにはこたえたのだろう。

「おい、そりやまずいだろう」

「このままじゃ、彼女無しのまま高校生活が終わっちまうぞ」

「それだけは避けたい」

「何しろ全校女生徒に相手されないというのが一番マズい」

冷静に考えてみれば、今までだって全く相手にされていなかったのだから、今更「相手されなくなるぞ」と改めて宣言されたからと言って何かが変わるわけではないのだが、彼らは未来の可能性を捨てきれないようだ。

「……わかったら大人しく席につけ。俺は別に戦いたいわけじゃない」

ムツツリーニはそういうと静かに自分の席について、机に肘をつけて外を眺めていた。

## 第5話

やがてお昼の時間になった。いつもならムツツリーニは工藤さんとお昼を食べる（そして必ず真っ青になって帰ってくる）ので教室にはいないのだが、

今日は僕らと食べるつもりのようなのだ。これは本格的にケンカしたんだろうか？

僕の机の向いに腰を下ろすと弁当の蓋を開けた。その時、ドアが開いて工藤さんの姿が見えた。

「ムツツリーニ、工藤さんが来たんだけど」僕はムツツリーニに囁いた。

「・・・そうか」ムツツリーニは目もくれずに食事を始めた。

工藤さんは僕のところにくると

「吉井君、悪いけど席を譲ってくれるかな」と言った。

「明久、そのままでもいい」ムツツリーニが工藤さんに目もくれずに言った。

えーっと、ドラゴンの吠え声とチワワの鳴き声を比べると・・・僕は一瞬の躊躇もなく工藤さんに席を譲って雄二たちのところに行こうとした。

「吉井君、ここにいてくれるかな」

「明久、ここにいてくれ」

二人が同時に言った。いかげんにして欲しい。ケンカするのは構わないけど僕を巻き込まないで欲しい。

霧島さんと雄二のケンカなら率先して霧島さんの味方をして雄二をボコるところだが、

この2人の場合どちらの味方をして後で被害を被るのは僕なのだ。

工藤さんが席についてお弁当を開けて食べた。

「・・・何しにきた工藤愛子」

「お昼一緒に食べるのは約束だから。あと、工藤愛子じゃなくて愛子」

「・・・お前が何を怒っているのかわからない」

「別に怒ってないもん」

「……勝手に怒られても意味がわからない」

「ボク、謝らないから」

「……誰もそんなことは言っていない」

ちよつとタイムタイム。僕の方が胸が苦しくなってきた。雄二たちの方を向いて助けを求めようとしたら

……何てことでしょう、雄二、秀吉、美波に姫路さんまで、僕たちに背をむけてお昼を食べている。

心の底から関わりになりたくありませんというシグナルを出しているじゃありませんか。

果たしてこいつらを本当に友人と呼んでいいんだらうか？

これ以上この場にいたら酸欠の危険性がある。とりあえず雰囲気のを和らげなければ。

「えーつとさ工藤さん、何かあったのかな。僕でよかったら相談にのるけど」

「康太に聞いてくれるかな吉井君」うん、取りつくしまもないという言葉の用例を学習できたと前向きに捉えよう。

「ねえ、ムツツリー二。とりあえず工藤さんに謝った方がいいんじゃないかな」

「俺は何もしていない」

さて、そろそろ楽しい昼食タイムも終わりにしようかな。一口も食べないけど。

工藤さんは食事が終わるときさつさと教室を出て行った。ムツツリー二は自分の席に戻って午前中と同じように外を眺めていた。

「明久、どうだった」

「かなり険悪な雰囲気じゃったのう」

「別れちゃうんでしよるか」姫路さんは涙ぐんでいる。

「青春っていろいろあるわね」美波の背中の中の天使の羽がパタパタと嬉しそうにはためいている。

「みんなよくも友達を見捨ててくれたね」僕がああ2人の間に挟まれてどんな思いをしたか。

「何を言うんだ明久」雄二が諭すようにいう。

「友達なら見捨てないぞ」

「そうか、そうだよね。友達なら見捨てないよね。……えーと、じゃあ僕は……」

「友達ではないということじゃな」

僕は瞬間的に雄二に回し蹴りを叩き込んだ。「お前とは前から勝負をつけないといけないと思ってたんだ、雄二」

「へ、返り討ちにしてやるぜ明久」蹴りをブロックして掌底を放つ雄二。ステップバックしてそれをかわす。

「ほほう随分、元気が余っているようじゃないか。その元気を補習に使ってみるか？」

頭の上から聞きたくもない声がする。

「鉄人」

「鉄人」

間髪入れず拳が僕らの脳天に叩きこまれた。

「何度西村先生と呼べと教えたら覚えるんだ。犬でもこれだけ仕込んだら、

チンチンくらいはできるようになるというのにお前らときたら。さっさと席につけ授業を始めるぞ」

相変わらず容赦のない体罰だ。体罰禁止が児童の福祉条例か何かで決まっていたはずなのに、

鉄人は法律を軽く超越してしまう。

恐るべき身体能力と言わざるを得ない。



## 第6話

いろいろあったけれど6時限も無事に終わった。僕たちが帰ろうとした時

ドアが大きな音をたてて開け放たれると、そこには霧島さんが立っていた。

「……………土屋、少し話がある、付き合って」

「……………今日は疲れたから帰りたいんだが」

「……………いいから付き合って」

そういうと問答無用といった感じで、踵を返して歩きだした。ムツツリーニも仕方なくついて行った。

「マズいな。翔子の奴マジギレしてるぞ」

「いつもと同じ無表情にしか見えなかったのじゃが」

「いや、あれはマジギレしてる。俺にはわかる」

「さすがに夫婦だけあって、妻のちよつとした様子の違いまでわかるんだね」

「誰が夫婦だ。幼馴染で長年見てきたからわかるんだよ。実は俺も一度だけマジギレさせたことがある」

「あの翔子をキレさせたなんてどんな非道なことをしたのよ」

「事故だったんだ。ある日、翔子の所へ駆け寄った俺は小石につまづいてしまった。」

倒れながら反射的に手を伸ばすと何かが手に触れて、思わず俺は掴んでしまった。で、そのままズルズルと……………

まさか掴んだのが翔子のパンツだったとは……………一生の不覚だ」

「で、キレた翔子ちゃんは、どうしたんですか」

「知らん」

「「はあ？」」

「覚えてないんだ。気が付いたら自分の部屋で寝っていて、3日が経っていた」

「何やら想像を絶することがあったようじゃの」

「思い返せば翔子が俺と結婚すると言いだしたのは、あの日からだっ

たような気がする。あの日、転びさえしなければ……」

雄二が遠い目をして言った。いや、雄二の回想に付き合っている場合じゃない。

「こんなことしてる場合じゃないよ。二人を追わなくちゃ」

僕たちは慌てて二人を追った。

霧島さんとムツツリーニは、人気のない校舎裏までくると霧島さんがこちらに向き直ってムツツリーニに言った。

「……私はAクラスの代表だからクラスメートを守る義務がある。ううん、それだけじゃない。

愛子は私の親友だから、愛子のことは私が一番良く知っている。愛子の力になってあげたい。

その愛子が今朝泣きながら登校してきた。原因は土屋、あなたしか考えられない。

今朝なにかあったのか全部正直に話して」

静かだけど有無を言わさぬ口調だった。うーん、Fクラスの代表に聞かせてやりたいセリフだ。

ムツツリーニは初めは嫌がっていたが、霧島さんの気迫に押されてポツリポツリと今朝のことを語りだした。

上のお兄さんが大人気のインディーズバンドのリーダーであること。

下のお兄さんがそれを利用して合コンで女の子の電話番号をゲット(だけ)していること。

工藤さんが合コンという単語で怒りだしたこと等々。

だけど僕たちが聞いてもなぜ工藤さんが怒りだしたのかサツパリわからない。

うちの女性陣だけでなく学園一の乙女心の持ち主と定評を取る秀吉ですら首を傾げている。

「……話は分かった。土屋、やっぱりあなたが悪い」

「ごめん、霧島さん。ムツツリーニをかばうわけじゃないけど、僕にもなぜ工藤さんが怒ったのかわからないんだ」

霧島さんは、やれやれといった感じのため息をついた。

「……あなた達は、愛子のことをただのエロ好きの下ネタ親父女子高生と思っているようだけど」

「いや、ちよつと待て。エロいとは思っていたが、いくら何でもそこまですっぢゃいないぞ」

「愛子もすごい言われようだね」

「私が一番知っているのと断言した人間の評価がそれでは、工藤もうかばれんのお」

僕たちが工藤さんをどう思っているかよりも、霧島さんが工藤さんをどう思っているかの方が問題なんじゃないだろうか？

## 第7話

「……………愛子は実はとても純情」

「すげえな、堂々の無視かよ」

まあ、工藤さんが純情ということに異存はない。ただ、その純情ポイントが人とは大きくかけ離れているような気はするけれど。

「……………本当の愛子は、純情で恥ずかしがり屋で人見知りの女の子。今の愛子はペルソナ。こうありたいという自分を演じているだけ」

「演じてるつつてもそれ以外の工藤を見たことないしな」

「……………そう、もう愛子自身にもわからないと思う。でも土屋、あなたは本当の愛子を瞬間でもみたことがあるはず」

名指しされたムツツリーニは考えこんでいた。

「……………人間の本质はそうは変わらない。愛子はそんなに強い女の子じゃない。ただ強く見せようとしているだけ」

「何か分かる気がします。愛子ちゃんって実はとてもロマンチストなんですすよね」姫路さんが同意した。

「……………土屋、あなた愛子に好きと言ったことある？愛子を彼女だと言ったことある？」

その確信もないのに愛子はそれを信じようとしてきた。もういっぱいいっぱいなの。

そんな時に長男がスターで、二男がそれを利用して女の子の電話番号をゲットしてる

なんて話きかされたら土屋もそうなるんじゃないかと考えるのは自然。そうなった時、今の愛子にはすがりつくものがないにもない」

「……………俺は合コンなぞしない」

「……………そうかも知れないし違うかも知れない。そんなことはどっちでもいい。」

愛子にすぎるものがないという事実は変わらない」

霧島さんの目はどこまでも真剣だった。この人は本当に工藤さんのことが好きなんだなあ。

「……………ねえ、どうして愛子に言ってあげないの？もし面子とかテ

レとかで言えない程度の好意しかないのだったら……」

霧島さんは、ここで一度言葉を切ってムツツリー二を見つめると言葉が続けた。

「……今のうちに愛子と別れて欲しい」

「おい、翔子。いくらなんでもそりや言いすぎだ。ムツツリー二だっているいろいろ考えて……」見かねて雄二が止めに入った。

「……雄二は黙ってて。私はどこまでも愛子の味方。土屋の気持ちなんてどうでもいい。」

本当に愛子のためにならないと思つたら、どんな手段を使つてでも別れさせてた」

霧島さんがそう決めたのなら本当にそうしていただろう。

そうしなかつたという事は、ムツツリー二になら工藤さんを任せられると思つたんだらう。

そこに起きたのが今朝の事件だ。霧島さんがマジギレするのも無理はないかも知れない。

ごめんムツツリー二、友達だけとかばえないよ。

「……土屋……あなたなら本当の愛子をわかつてくれると思つた。ううん、今でもそう思っている。」

愛子は……愛子は……とてもいい子なの。だからお願い」

そういうと霧島さんは、ムツツリー二に頭を下げた。

「……だが、どうすればいいんだ」

ムツツリー二が途方にくれたという感じで言った。

「……土屋に最後のチャンスをあげる」

霧島さんはムツツリー二を見つめながら相変わらず無表情でいった。

## 第8話

数分後、僕たちは西校舎裏の陰にいた。

「あのく、霧島さん。何でこんなところに」

「みんなにお願いがある。これから先、どんなことがあっても土屋に声をかけないで」

霧島さんは、みなを見わたし反論は許さないという威圧感をもって全員に伝えた。

「翔子、これはどういう・・・」

「しっ、来た」と小さく霧島さんが答えた。

校舎の反対側から女の子がキョロキョロと落ち着かない感じでやってきた。

快活そうなショートカットの女の子だ。

「何で愛子ちゃんがこんなところに？」姫路さんが不思議そうにツブやいた。

霧島さんは何も答えず、工藤さんをジッと見つめていた。

ムツツリーニも黙って見つめるだけだった。

「工藤は、こんなところで何をしておるんじやろうな？」

「誰かを待ってるみたいですね」

「誰かってだれさ」

「どうやらその相手が現れたようだぞ」

背が高い男生徒のようだ。

「誰よ、あれ？」

「ありや、Bクラスの大久保だな。割とイケメンでバスケット部のエースだから女生徒にも人気がある」雄二が忌々しげに言った。

うん、その説明だけで僕の「生涯の敵リスト」のトップを飾るに相応しい人材であることが分かった。

「雄二、よく知ってるね」

「ああ、同じ中学だったからな。もつとも女をとつかえひつかえするわ。下級生はコキ使うわで、俺とは相性が合わなかったけどな」

雄二は、腹黒で陰険で姑息で鬼畜で裏切者の全く信用がおけない奴

だが僅かに残っている正義感が奴とは合わなかったのだろう。

「でも、そんな人がなんで愛子ちゃんを待ち合わせなんか」姫路さんが言った。

「実は愛子は、大久保に交際を申し込まれた。返事をためらっていると迷っていると思っただのか」

一週間後に返事が欲しいと言ってきた。それが今日」

霧島さんは、相変わらず工藤さんを見つめながら言った。

ムツツリーニはズーと押し黙っていた。

「やあ、待たせちゃったみたいだね。ゴメンゴメン」

「あつ、いやボクは……」

「いや、答えは分かっているんだけど、やっぱり不安なのかと思ってさ。一週間時間をあげただけで」

「すごい自信じゃな」と秀吉が呆れたように言う。

「須川君に連絡してFFF団の非常招集を……」

「止めとけ明久」

「どうしてさ、雄二。こんな時に動かなくて何のためのFFF団なかさ」

「いや、多分あいつの思惑通りにはいかんだろう」雄二はニヤッと笑った。

「あの、ボク今日は実は……」

「わかるよ。男の子と付き合うのが初めてで緊張しているんだろう」

「いえ、そうじゃなくて……何ていうか」

「そんなに堅苦しく考えずに、遊びだと思って付き合ってみようよ」

「あくもうイライラする。ちよつと行って関節折ってくる」

「止めなよ、美波」

「何よアキ。愛子が困ってるじゃない?」

「いや、それはそうなんだけど……」

工藤さんは確かに俯いて困った表情をしているけど、それはぼくらがいつも見ているムツツリーニ絡みの

「嬉し恥ずかし」の困った表情ではなくて、「どうしたらいいのかなあ」っていう感じの困った表情なんだ。

あれなら工藤さんは自力で乗り越えられるだろう。いざとなった  
ら頬の一発くらいは張り倒すかもしれない。



## 最終話

「これからカラオケでも行つて、もつとお互いのこと知り合おうよ」大久保はそういうと工藤さんの腰に手を回した。

「えっ、キヤア止めて」

その時ムツツリーニが静かに立ち上がって二人の方に向かって歩きました。自分の方にムツツリーニが来るのに気が付いた工藤さんは、大久保を押しのと、顔を真っ赤にして

「ちつ違うんだよ、康太。これはなんでもないの」と叫ぶように言つた。

「……………いい」

「えっ?」

「……………何も言わなくていい」

「……………そつそれってどういう意味なの。ぼつボク、言い訳もさせてもらえないの」

工藤さんは俯くと涙声でつぶやくように言った

「……………言い訳は必要ないという意味だ」

「そつそうだよね。ボク最低だよね。康太に内緒で他の男の子と会つていて、それを康太に見つかつちやつたんだから。……………ボクたちこれで終わつちやうだろうけど、きつきつとそうなんだろうけど、でも最後にこれだけは聞いておいてほしいの」

「……………」

「……………あつあのね、康太。言い訳だと思ふかもしれないけど、先週大久保君から告白受けた時に、すぐに康太に相談しようと思つたの。でつでもね、ボクまだ康太から好きつて言つてもらつたことも、彼女だつて言つてもらつたこともなくてね。とても不安だつたの」

工藤さんの声はもう泣き声になっている。姫路さんも美波ももらい泣きしている。秀吉をみると二人を凝視はしてたけど別に泣いてはいなかった。秀吉の乙女心には響かないのだろう。

「あのバカ。工藤があそこまで言つているのに。ちよつと一発殴つてくる」雄二が飛び出そうとした。

「ダメ、雄二。ここは土屋にまかせて」と霧島さんが止めていた。  
「もし康太に相談して康太の口から「大久保君のところに行けよ」って  
言われたら、

ボク耐え切れなくて絶対に壊れちゃうって思ったの。だから、だから……ボク怖くて相談できなかつたんだ。隠そうとしたわけじゃないよ。自分だけで解決すれば、またいつものボクたちに戻れるって思ったの。だから今日、自分だけでここにきたの。でも康太に見つかるなんて……最低だよ。最低だよねボク。康太に内緒にしようとしたバチが当たつたんだ。ゴメンね。ゴメンね。ゴメ……」

とうとう工藤さんは本格的に泣き出してしまった。ムツツリーニはしばらく工藤さんを黙って見た後でわざとらしく大きなため息をついた。

「……なあ……愛子」

工藤さんの肩がビクつと震えた。

「……俺はあと何十回お前に同じことを言わなければならないんだ？」

「えっ？」

思いもかけない言葉をかけられて工藤さんが涙でグシャグシャになった顔をあげた。

「……俺はお前にいつも言っている「俺の話を聞け」と」

「それって？」

「……俺は別れるとも終わりとも言った覚えはないし、言い訳は聞きたくないと言った覚えもない。言い訳など必要ないと言つたんだ」

「どっどっという意味？」

「……そのままの意味だ。この場面をみればどういう状況なのかはすぐにわかるし、その状況でお前がどう答えるかも知ってる」

「ボクを信じてくれるの」

「……信じてるんじゃない、知ってるんだ」ムツツリーニは静かにキツパリと断言した。

「おい、邪魔するなよ」大久保がイラだったように声をかけた。

そりや自分が女の子を口説いていたら、突然現れた奴がその子とい  
い雰囲気になったら腹立つよね。虫は好かない奴だけど、気持ちはわ  
かる。

「お前Fクラスの三馬鹿の土屋だな」

「あいつ、雄二と秀吉になんて失礼なこというんだ」

「三馬鹿といえはお前と秀吉とムツツリーニに決まってだろうが」

「まあ、アキは絶対に入るわよね」

「そんなことないよ。このところ成績がよくなってきたとお茶の間で  
もご好評を・・・」

「お主らいいかげんにせい。ムツツリーニの声が聞こえん」

「・・・それがどうかしたか」

「いきなり現れて人の告白邪魔しやがって。お前工藤とどういう関係  
なんだ」

ここにいる全員が唾をのみ込む音が聞こえた。霧島さんに目をや  
ると顔はいつもの無表情のまま爪が手のひらに喰い込むほど拳を握  
りしめている。

ムツツリーニは工藤さんにチラリと視線を走らせた。工藤さんは  
死刑判決を待つ被告のように俯いて唇を噛み締めていた。

「・・・愛子か。ここにいる工藤愛子は、俺が一番好きな女で大切  
な彼女だ」

「えええええー!!」工藤さんが大声で叫んだ。

「・・・なんで大久保じゃなくて、お前が驚いているのか意味が分  
からんのだが」

「だって初めて「好き」って言ってくれたんだもん。ねえねえ、もう一  
回言って」

「・・・好きな女で彼女だ」

「ワンモア」

「・・・彼女だ」

「もっと大きな声で」

「・・・彼女だ」

「もう一声」

「……いい場面なんだ。頼むから邪魔しないでくれ」

大久保君（可哀そうなので君付けにした）は、アツケにとられてこの夫婦漫才を眺めていた。

「……ごほん、じゃあ悪いが愛子はこれから用があるんで連れていくぞ」

「えっ、用ってなに？」

「……忘れたのか。兄貴がツアーから帰ってきたら手料理をご馳走してやる約束」

「ええ、いいの？ごめんね大久保君。ボクはこっ　康太の彼女だから、君の彼女にはなれないんだ」

後に取り残された少年は「なんだったんだ？」と大きな独り言をつぶやいた。

霧島さんはこころなしに微笑んでいるように見えた。というかFクラス代表の雄二よりもAクラス代表の霧島さんの方がムツツリーニを信用していたというのはいかがなものか。

数時間後、少年はリビングの床に正座させられていた。

「とりあえず、何をどうすればあなるのか言い訳を聞こうか、康太」

「康太、お父さんは勉強はできなくてもいいから人に迷惑をかけない人間になれと教えてきたはずだ」

「ツアーから久しぶりに家に帰ってくるなり大したもてなしだなおい、康太」

緊迫した雰囲気のリビングとは対称的に台所から楽しそうな鼻歌が聞こえてきた。

「愛ちゃん、愛ちゃん。凄く嬉しいことがあったのは分かったから、お願いだから包丁を振り回すのは止めて、キヤア」

長かった一日はまだ終わらない。

## 5. 彼女とデートと理想のカップル 第1話

少女はソファに座った少年を見下ろしながら、もう20分近くも熱弁をふるっていた。

「……………どうもお前の言ってることがよくわからないんだが」

「もう、頭悪いなあ康太は」

「……………いや、これは頭の良し悪しとは関係ないと思う」

「じゃあ、要約してあげるからよく聞いてね」

「……………要約できるなら20分も演説する必要はなかったのでは？」

「男のくせに細かいなあ。いい？ボクたちはもう彼氏彼女なんだよ」

「……………そういうことになるんだろうな」

「なるの！自分で大久保君にあんなにハッキリと断言しておいて、今さらトボけようたってダメなんだよ」

あの西校舎裏での出来事以来、この少女はなぜか妙に強気なのである。

「……………いや、トボけるつもりはないが」

「正式に彼氏彼女の関係になった以上、ボクたちは立派なカップルとしての行動を取るべきだと思うの」

「……………お前はなにと戦っているんだ？」

「だけど悲しいことにボクも康太もこれまでに異性と付き合った経験が全くない初心者同士」

「……………そこは認めよう」

「あ、ちなみにボクは水泳で忙しかったから男の子と付き合う時間がなかっただけで、モテなかった訳じゃないからね」

「……………なぜそこを強調する？」

「だから誰かをお手本にして、見習うべきだと思うわけ。ここまではいいっつー」

「……………まあ、そこまではいいとしよう、だが……………」

「じゃ、何が問題なのさ」

「……だからなんで、そのお手本がよりにもよって雄二たちなんだ？」少年は頭を抱えた。

「だって代表と坂本君って理想のカップルじゃない」

「……理想のカップル？一体誰のことを言ってる」

「代表たちだってば」

二人の姿を思い出してみる。お仕置きと称して雄二の顔面に爪を喰い込ませている霧島翔子。

気絶した雄二を起こそうと力いっぱいビンタをしている霧島翔子。

クロロホルムで気絶させた雄二を引きずっていく霧島翔子

……理想のカップルどころかカップルと呼ぶのもはばかられるような光景しか思い出せない。

「……とりあえず、何であの二人を理想のカップルだと思ったんだ？」

「だって……」

少女は少し頬を赤く染めて恥ずかしそうに言った。

「代表は、凄く綺麗で頭もよくて優しいし、スタイルもよくて胸なんかFカップもあるんだよ。凄いやねFカップだよ」

少年は眉間を揉みながら言った。

「……愛子」

「うん、何？」

「……お前が霧島を好きなことはよくわかった」

「わかってくれた？」

「……だが、今言ったことは理想のカップルとは何の関係もない」

「そんなことないよ」

「……伝わってきたのは、Fカップが羨ましいという熱意だけ……ウゴ」

少女が思わず放った右ストレートが、少年の顔面にクリーンヒットした。

## 第2話

翌朝、二人は霧島家の門の近くの電柱に身を潜めていた。

「……で、俺たちはここで何をやってるのだ？」不本意そうに少年が尋ねた。

「いまさら何を言ってるのかなあ。昨日、理想のカップルを観察するって決めたじゃない。」

今から代表と坂本君の行動を夜までボクたち二人で観察するんだよ」

「お前が決めたただけだ」と思わずツっこみそうになった。

少女が一方的に宣言しただけで、話し合いで決めたわけではない。最近気が付いたのだが、この少女はとにかく思い込みが激しい。

それだけでなく、とても頑固な上にそもそも少年の話の話を全く聞かない。

これで話し合いをしたと主張するのだから大したものである。

「あ、代表が出てきた。今日も綺麗だなあ」

「……雄二の家の方に向かってる」

2人はそつと後をつけた。ターゲットの少女は一軒の家の玄関に立つとチャイムも鳴らさずにドアを開けて家の中に消えていった。

「すごいね。自分の家みたいにしてる」

「……いや、あれは二人が幼馴染だからできることだ。おまえが見習おうとしても無駄だ」

「えっ、できるよっ..」

「……何を言ってる?」

「この前、裕ちゃんか」「いつでも遠慮なく勝手に入ってきてね」って、家の合い鍵くれたもん」

「……何をしてくれてるんだ、お袋は」

二人でスツタもんだしていると、突然「ぎゃあー」という叫び声が聞こえてきた。

「あれって坂本君の声だね。どうしたんだろう?」

「……恐らくは」

「バカやろう翔子。朝起こすのにいきなりエビ固めする奴があるか」

「……朝起こすのにはエビ固めで起こすのか……康太、エビ固めって何?」

「……知らん」嫌な予感がしたので誤魔化した。

「康太も知らないのか。後で美波にでも聞こうつと」

エビ固めを知らないと言いながら、なんでそうピンポイントにプロレス技のエキスパートの名前が出てくるのかまったく理解できない。

しばらく待っていると翔子が玄関のドアを開けて出てきた……左手で雄二を引きずりながら。

「……じゃあ、オバさま。行ってきます」

「毎朝、悪いわね翔子ちゃん」

「……夫を起すのは、妻の勤め」

そう言うのと雄二を引きずりながら歩き出した。

「坂本君が起きれなかったから、ああやって運んであげてるんだね。さすが代表優しいなあ」

「……その無駄に前向きな評価を何とかしろ。あれは霧島に気絶させられただけだ」

「そんなことあるわけないじゃない。代表はお淑やかなお嬢さまなんだよ」

お淑やかなお嬢さまは、彼氏を起すのにいきなりエビ固めはしないと云いそうになったが、

よく考えれば翔子がああいう態度をみせるのは雄二の前だけである。普段の自分を隠しているとまでは言わないが

他の人間は全く眼中にないから大人しくしているだけだろう。もつとも、雄二の周りにいる自分は嫌でも翔子の恐ろしさを見せつけられることになっているのだが。

100mほど引きずっていると、雄二が目をさました。

「てめえ翔子、毎朝毎朝何しやがる」

「……雄二は本当に寝起きが悪い」

「寝起きが悪いんじゃないやねえ。起きた後でお前に気絶させられてるんだ」



「……そんなことでは結婚してからが心配」

「人の言うことをマルつと無視しやがったな。お前が起こしにこないりや、普通に起きて登校できるんだよ」

「……それはできない」

「なんでだ」

「……夫を優しく起こすのは妻の勤め」

「優しさなんぞ1mgも感じたことはねえぞ」

「……時には厳しくするのも愛情」

「さすが代表。深いなあ……」

「……愛子、言っておくがあれをやるために朝から家に侵入するんじゃないぞ」

ギクつとして慌てて少女は言った。

「やだなあ康太。そっそんなことするわけないじゃない……」

「……（絶対するつもりだったな）」

どうやら部屋のセキュリティを強化する必要があるようだ。

やがて彼らは学校に到着した。

### 第3話

幸いなことにそれ以上なにが起きることはなかった。

もしあの二人が腕を組んで登校なんてことをしたら、少女の来襲を避けるために

少年は登校時間を朝5時にしなければならなくなるところだった。ターゲットの二人は玄関で別れてそれぞれの教室に向かった。

「じゃ、康太また後で」少女がヒソヒソ声で言った。

「……まだやるつもりなのか」

「当たり前じゃない。まだ始まったばかりだよ」

「……俺はもう一日分疲れたのだが」

……と言った時には少女の姿は既に消えていた。

「……理想のカップルよりも先に、人の話をちゃんと聞ける普通のカップルを目指して欲しいのだが」

少年は独り言をつぶやいた。

教室に入っていくと雄二が机に突っ伏していた。朝の騒ぎで自分のエネルギーを使い果たしてしまったらしい。

その無防備な姿を見ていると理不尽な怒りが湧いてきた。

そもそもこいつがもつとマトモに霧島と付き合ってたなら、自分がこんなに苦労することはなかっただろう。

冷静に考えれば完全な八つ当たりなのだが、FFF団特別顧問の肩書は伊達ではない。

この程度の八つ当たりは理不尽のうちにも入らない。

雄二の机を軽く蹴った。

「はあ、なっ何だ?…ムツツリーニじゃねえか。どうしたんだ一体」  
「……もつとしっかりしろ」

そう言うとうちの席についた。

「??何を言ってるんだ、あいつは?」

「機嫌悪いみたいだね」

「まあ、ムツツリーニが感情を揺らすとしたら原因は一つしかあるまい」

「工藤か？だが、あいつが工藤とケンカしたとして何でおれが「しつかりしろ」と怒鳴られなきやならんのだ？」

「工藤さんが雄二のだらしなきに怒り心頭とか？」

「アホ、工藤にとつちやムツツリーニ以外の男子は全部石ころだ」

「霧島さんと雄二みたいなものだね」

「ちよつと違うな。翔子にとつちや俺も石ころだ」

否定してあげたいのだが、否定できる根拠が何一つないことに気がついた。

だが、ここは友人として慰めの言葉の一つもかけてやるべきだろう。

「そんなことはないと思うよ、雄二」

「そうか？」

「うん、僕らは別に霧島さんに酷い目にあつてる訳じゃないから。それを考えると雄二は石ころ以下なんじゃないかなあ」

ただ一人酷い目にあつてるのが雄二なのだから、あながち間違つてはいないだろう。

「てめえ、明久なんてこと言いやがる」

「何で怒るのさ、雄二」

まったく、人の心遣いが分からない奴だ。

その時、鉄人が入ってきて事態はウヤムヤになってしまった。

## 第4話

それやこれやでお昼休みになった。

みんなが僕の机の周りに集まってくると、霧島さんが教室にやってきた。

「どうした翔子」

「……………今日は、ここでお昼を食いたい」

「そうか、遠慮なく座れ。じゃ、俺は学食でカレーを食って来……グワア」

「……………今のは、いくら温厚な私でも許せない」

霧島さんが右手を雄二の顔面に食い込ませて体ごと持ち上げた。相変わらずホレボレするようなアイアンクロード。

「……………(康太、康太)」

ん？小さな声が聞こえる。入口を見ると工藤さんがドアから顔だけ出して小声で一生懸命ムツツリーニに呼びかけている。

僕はもうこの人の行動に驚いたり不思議に思ったりすることはとつくに止めている。

どうせ理由を聞いたって理解できないのだ、最初からそういうことを考えない方が楽でいい。

「ねえ、ムツツリーニ。何か工藤さんが来ているみたいだけど」

「……………え？あいつは何をしているんだ？」

「(康太、早くこっち来て)」

「ムツツリーニ。なんか呼んでいるみたいだよ」

ムツツリーニは首を傾げながら入口に向かった。

「……………お前は一体何をしているんだ、愛子」

「理想のカップルの観察に決まっているじゃん」

「……………まだ、諦めてなかったのか。で、何で俺は呼ばれたんだ？」

「康太も一緒に観察しなきゃ意味ないでしょ」

「……………観察って、俺はお前に呼ばれるまであの場にいたんだぞ」

「ふつ二人で一緒に観察することが大事なの。さあ早く、康太もドアから顔を出して。バレないように気をつけてね」

「……この状況でバレないのは難しいと思うのだが」

なんか今度はムツツリーニまで、ドアから顔だけ出して教室の中を伺っている。一体あの二人は何のつもりなんだろうか？

「ぐおおお、離せ、翔子……」

「……今日は雄二の分もお弁当を作ってきた。一緒に食べてくれる？」

「さてと。あ、秀吉のお弁当美味しそうだね」

「そういう明久のも豪華じゃのう」

「いや、昨日の残りを詰めただけだよ」

「まあ、そういうワシも似たようなもんじゃが」

「ぐおおお、貴様、翔子おお」

「……一緒に・食・べ・て・く・れ・る？」

「でも、秀吉の弁当って時々とても質素な時があるよね。漬物盛り合わせとか」

「姉上と交代で作っておるからな。姉上はまああれじゃし」

「ちよつと、あんたたち。ほのぼのランチタイムしてるけど大丈夫なの？」

「え？」

おかしなことを言う美波だ。僕は周囲を見渡してみた。

いつもと変わることのないFクラスの風景じゃないか。一体、美波は何を心配しているのだろうか？

「何かあったの、美波」

「何かあったじゃないわよ。アキの横で坂本の額からミシミシって音がしているわよ」

雄二？ああ、そういうえば霧島さんにアイアンクローされていたね。あまりに見慣れた風景だったので気にも留めなかったよ。

「ハハハ、心配いらないよ。骨は折れた部分が一番強くなるっていうじゃないか」

「折れること前提なのね」

「ねえ、康太？」

「……何だ」

「代表は、何をしているのかな？」

雄二に無理やり言うことをきかせるためにアイアンクローを極めているとは絶対に言えない。

そんな方法を知れば、この少女は絶対に実行してくる。

「……雄二が頭痛なので、霧島がこめかみをマッサージしているんだな」

「ふーん、でも坂本君随分苦しそうだよ」

「……酷い頭痛なんだろう」

「じつじゃあ、康太が頭痛の時は、ボクがああやってマッサージしてあげるね」

「……ああ、頼むぞ」

「うん、ボクに任せて」

少年は、鎮痛剤をカバンに常備しておこうと決意した。

「ぐぐぐぐ……」

「……雄二」

「ぐぐぐ、何だ」

「……握力には自信がある。そろそろ肩も暖まったから本気を出す」

「どこのピッチャーだ、お前は」

さすがは雄二だ。この状態でもツツコめるところには律儀にツツコんでくる。

まあ霧島さんがボケ倒すので自然にツツコミスキルが上達したとも言えるが。

ピッチャーを育てるのはキャッチャーと言われているが、ツツコミを育てるのはボケということだね。

「……ちなみに」

「なっ、何だ」

「……私はこの間の体力測定で、握力計を壊してしまった」

「そろそろ昼飯にしようか、翔子」

「……わかってくれてなにより」

## 第5話

「夫婦コントはもう終わったの、雄二」

「夫婦じゃねえし、コントでもねえ」

「坂本君と翔子ちゃんはいつも仲良しで羨ましいです」

「・・・そんなことはない（ポツ）」

「姫路、悪いことは言わんから眼科へ行つて来い。翔子、お前もテレるような行動じゃねえ」

「まあ、それより早く食事をした方がいいと思うがのう、雄二」

「ち、しようがねえ。・・・翔子、箸がないぞ」

「・・・箸はここにある」

「そりや、お前の箸だろう。俺の箸はどこだ」

「・・・箸はこれしかない」

「フォークで食えつてののか」

「・・・そんなものは持つてきていない」

「じゃ、スプーンか」

「・・・それでは食事ができない」

「まさか俺に手で食えと」

「雄二、いいかげんに現実と向き合いなよ」

「現実？現実つてなんだ」

「霧島が弁当を二つ持つてきてるのに、箸が一膳しかないとになったら答えは一つしかあるまいに」

「あー、あー。聞こえない。俺には何も見えない」

雄二は両手で耳をふさいで、叫びだした。馬鹿な男だ。

そんなことで霧島さんから逃れられると思っっているのだろうか。

霧島さんは、鳥の唐揚げを箸でつまむと雄二の口元まで運んだ。

「・・・はい、雄二。あーん」

「これは夢だ。現実の俺は、今ベッドの上で寝ているはずだ」

「・・・雄二、口を開けて」

「もうすぐ朝だ。そうしたらこの悪夢から逃れられる」

「・・・雄二、お食事」

「耐えろ。耐えるんだ、俺」

霧島さんは、箸を置くと雄二の後ろに回り……見事なチョークスリーパを決めた。

「ぐうう、止めろ、翔子」

「……早く食事して、雄二」

「ねえ、康太。今度は何を始めたの？」

「……首のマッサージだろうな。雄二は肩こりだから」

墓穴を掘っている気がしないでもないが、とりあえずは眼前の危機から逃れることが最優先だ。

「なにも食事の途中でやらなくてもいいと思うんだけど」

「……痛みが我慢できなかつたんだろう」

霧島も言い訳を考えるこちらの身になって、少しは考えて行動して欲しいと心から思う。

「ぐうう、バカ。むっ胸が背中に……」

少女は少し顔を赤らめると両手で自分の胸をサラッと撫でた。

「パツ、パツトを3枚、ううん4枚入れれば何とか……」

「……そういう聞いてて哀しくなるような悪巧みは一人で行うにしてくれ。」

というか、いきなりパツト4枚入れて胸が大きくなったら、俺より先にAクラスが大騒ぎになるだろう」

「大丈夫だよ。Aクラスみんなは優しいから見てもないフリしてくれるよ」

「……なんで最初から計画がバレることが前提になっているのだ。それにそれは可哀想な子扱いさされているだけだ」

「ぐぐぐ、息が……」

「……雄二、早くしないと昼休みが終わる」

「ねえ、霧島さん？」

「……なに？吉井。止めても無駄。雄二にはお仕置きが必要」

「いや、止める気は全くないんだけどさ。雄二のお弁当の唐揚げが美味しそうだから、

僕のトンカツと交換してくれないかなと思って」



「……1個だけならいい」

「ありがとう」

「相変わらず、鬼畜じゃなお主は」

「あんたよくあの状況でオカズの交換なんか言い出せるわね」

「はて？ 僕の行動のどこかに何か問題があっただろうか？」

雄二と唐揚げだったら僕は何の迷いもなく唐揚げを選ぶというだけの話じゃないか。

「ハハハ、何を言ってるのさ二人とも。Fクラスだったら、雄二と唐揚げが

車に引かれそうになったら迷わず唐揚げを助けるに決まっているじゃないか」

「いや、そこをFクラスでくくられても困るのじゃが」

「あんた達と一緒にしないでよね」

なんて強欲な二人だろう。

「わかったよ。トンカツと雄二ならトンカツを選ぶと言いたいわけだね」

「いや、そういう問題じゃないと言っておるのじゃ」

「本物の人非人ね、あんたは」

なぜこんなに身に覚えのない非難を受けなければならないのだろう。

どうやら雄二を助けられないことがお気に召さないようだ。

えーっと、雄二の方を選ぶシチュエーションというと……

「何を言うのかなあ二人して。僕だって梅干しと雄二だったら、5分くらい考えた上で雄二を助けるよ……多分。」

「それでは雄二は既に車に引かれておらうに」

「5分も考えた上に多分って、あんたどれくらい坂本を助けたくないのよ」

「坂本君って梅干しくらいの価値しかないんですね」

そりゃ、姫路さんや工藤さんの料理と雄二だったら、速攻で雄二を助けると言いたいけれど、

まさか本人を目の前にして言うわけにもいかない。

「それより霧島よ、いいかげんにせんと雄二が死ぬぞい」

「……まだ大丈夫……なはず」

「自信がないのか。でも昼休み終わっちゃうよ」

「……仕方ない、これくらいにしてあげる」

「坂本の命よりも昼休み終わることの方が重要なわけね」

霧島さんは再び箸を取ると唐揚げを雄二の口元に運んだ。

「……はい、雄二。あーん」

雄二はもはや抵抗する気力もないのか、大人しく唐揚げを口にしました。

「あれが理想のカップルなんだね」

「……いや、愛子ちよつと待て。あれはかなり特殊例だ。参考に  
はならない」

少年の必死の説得を、当然のごとくナチュラルに聞き流して、少女は言った。

「はっ恥ずかしいけど、ボク頑張るよ」

「……頑張らなくていい。というか俺の話聞いてくれ」

その時、昼休みの終了を告げるチャイムがなった。

「あ、お昼休み終わっちゃった。代表にバレル前にボク教室に戻るね」と少女は言い残して駆けていった。

「……俺はこのセリフを言い続けなければならないのか？」

一人取り残された少年は、茫然としてつぶやいた。

## 第6話

放課後、少年は帰り支度をしている友人に近寄り話しかけた。

「……雄二」

「ん？何だ」

「……頼みがある」

「お前が俺に頼みごととは珍しいな。金ならないが」

「……そんなことではない。今日はまっすぐ帰ってくれ」

「別に頼まれなくてもそのつもりだが」

「……霧島翔子に捕まらずに」

「いきなり難易度がハネ上がったな。何かあったのか」

「……何も聞かないでくれ」

「何か知らんが分かった。俺としても翔子とは一緒に帰りたくはないからな」

「……よろしく頼む」

「おお、大船に乗ったつもりでまかせておけ。必ず翔子から逃げ切ってみせるぜ」

放課後、少女は帰り支度をしている友人に近寄り話しかけた。

「代表……」

「……どうしたの、愛子」

「お願いがあるの」

「……あなたが私にお願いって珍しい。なに？」

「今日は坂本君と一緒に帰って欲しいの」

「……頼まれなくてもそのつもり」

「絶対にお願ひ」

「……わかった、どんな手段を使ってもそうする。何かあったの？」

「ううん、大したことじゃないから気にしないで」

「……何だか知らないけど分かった。一緒に帰ってくれなければ雄二をお仕置きするだけ」

「よろしくお願ひ」

「……わかった。今日は気合を入れてお仕置きしてみせる」

「いや、そっちのお願いじゃなくて一緒に帰る方をお願い」

20分後……

「……どうしてこうなる」

「よくわかんないけど、たぶん坂本君が代表から逃げようとしたからじゃないかな？」

二人の50m先には、翔子にクロロホルムをかがされて昏睡した雄二が翔子に引きずられていた。

あの「まかせておけ」という太鼓判はいつたいなんだったのか。

よく考えてみれば試召戦争でも、この男が大丈夫と言って大丈夫だった試しがなかったことを今更ながらに思い出した。

「……どうする？雄二はこのまま引きずられて家に帰るだけだぞ」

「うん、今日はこれ以上参考になることもなさそうだし、ボク達も帰ろうか」

少年と少女は、帰路についた。

「……家に帰るんじゃないのか？」

「何いってんのさ康太、帰ってきたじゃない」

「……ここは俺の家だ。何でお前までここにいる」

「あのね康太。観察だけじゃだめなの。ちゃんとデータを整理しなきゃお手本として使えないんだよ」

少女は出来の悪い教え子を教え諭す教師のような口ぶりで言った。

「……なんでそんなに上から目線なんだ？」

少年は今日一日の雄二たちの行動を思い出してみた。エビ固め、引きずり、アイアンクロー……

何一つ理想のカップルとして参考になるような行動はなかったように思うのだが。

「……整理もなにも今日一日、何一つ参考となるようなものはなかったはずだが」

「康太は観察力なさすぎ。ボクなんか多すぎてメモしたくらいなのに」

「……とりあえず、そのメモを読みあげてみる」

「じゃ、特別に聞かせてあげるね」

「……特別について、二人で一緒に観察するのが大事と言ってた気がするが」

少年の抗議を少女は春のそよ風のように聞き流した。

「理想のカップルへの道、その1。エビ固めで起こすべし」

「……初っ端からそれか」

「人の話はちゃんと聞いて、康太」

「……それは俺がお前に何十回も言ってきたセリフだ」

「理想のカップルへの道、その2。寝てたら引きずるべし」

「……ちよつと、そのメモ見せてみる」

「あ、ちよつとダツメダメ」

「……アイアンクロー、チョークスリーパー。お弁当あーん、ク

ロ口ホルム、帰りも引きずる。これが理想のカップルだと？」

「代表たちって本当に仲がいいよね」

「……普通に読めば、リンチのメニューにしか見えないのだが」

「お弁当あーんがあるじゃない」

「……それだけか。このチョークスリーパーのところの（注）って

何だ？」

「それはちよつと恥ずかしくて書けなかったんだけど」

「……そんな恥ずかしいことやっていたか？」

「むっ、胸を背中に押し付けるの」

「……愛子」

「うん、何？」

「……あれは霧島の胸が大きいから当たっていただけで、故意に押し付けていたわけではない。

だから、お前がそんな心配をする必要はな……オゴウ」

二回目のストレートが、再び少年の顔面にヒットした。

## 第7話

土曜日もし日付が変わろうとする頃、少年の携帯にメールが届いた。

「……愛子からか。こんな時間に何の用なんだ、あいつは」

メールを開くと「明日、観察。〇〇駅東口10時、時間厳守」とだけ書かれていた。

「……何の暗号だ、これは？」

何だかよくわからないが、〇〇駅東口に10時に来いと言っているようだ。こつちの都合などお構いなしだ。

もっとも電話で伝えられたとしても少年の言うことなど聞く耳を持っていないのだから同じと言えば同じなのだが。

「やれやれ」どうやら明日するはずだった商品の整理は諦めなければならぬようだ。

部屋の電気を消してベッドに横になった。

「……で、人に時間厳守と言っておきながら、何をしているんだ、あいつは？」

すでに時計の針は10時15分を指している。もしかして集合場所を間違ったのかと思い、メールを確認しようとした時に少女の声がした。

「ゴメン。待った？」

「……待った？じゃない。人に時間厳守とメールしておきながら何をしている」

「だって、デートの時は男の子が先にきて待ってるもんなんだよ」

「……そういうものなのか？」

「うん、大体のドラマでそうなってるの」

なんだか、いろいろと妙なこだわりを持つてる娘だ。きっとこれもその一つなのだろう。

「……しかし、俺が本当に遅れてきたら意味がない」

「あ、それは大丈夫。ボク10時前からあそこの柱の陰で、康太が来るかどうかずっと見張ってたから」

「……お前、俺より先に着いてたのか？それならここにいれば良かったんじゃないか？」

「だから男の子が待つて、女の子は後から来て「ゴメンね。待つた」って言うものなの」

「どうやらそこはどうしても譲れないポイントらしい。」

少年は諦めて改めて少女の格好を眺めてみた。

ピンクのキャミソールの上に薄い水色のカーディガン。ミニのスカートに白いショートソックスに肩掛けポーチ。

意識したのか偶然なのか、二人が初めてデートした時と同じ格好だった。

「なに？どうしたの。ボクのアマリの可愛さに惚れ直しちゃった？」

「そう言う少女は顔を真っ赤に染めてうつむいた。」

「……そこまで照れるなら最初から言うな。俺はただ遊園地の時と同じ格好だなど思っただけだ」

「えっ？」少女は驚いたように声を上げた。

「……どうした？」

「康太、気が付いてくれたんだ。絶対忘れていると思っっていたのに……」

「……まあ、何となく」

「そっか、そうか。ふふふ」少女が目に見えて上機嫌になった。

「……どうかしたのか？」

「ふふふ、何でもないよ。さあ、行こう」

「……少しは説明しろ。今日は何があるんだ」

「ええ、メールに書いたじゃない」

「……あんな暗号文でわかる奴はいない」

少年は知らなかった。最初に少女が書いたメールが容量いっぱい使ったフアンシーな文面であったことを。

自分の文書を読み返した少女が、あまりの恥ずかしさに推敲を重ね恥ずかしい単語を

削りに削ったあげくにあの暗号メールになってしまったことを。

「……察しが悪いなあ。代表たちが今日デートするの。だからボ

クたちは後を付けて観察するわけ」

「……デートに理想のカップルも何も無いと思うんだが」

「いちいちうるさいなあ康太は。さあ、行くよ」

連れてこられたのはケーキ屋の前だった。

「……ここは何だ？」

「えっ？ケーキ屋だよ」

「……お前は俺をかなりのバカと誤っているようだな。そうじゃなくて何でここに来たんだと聞いている」

「ここはAクラスの女子の間で一番人気のケーキ屋さん。代表もずっと食べてみたいって言ってたから今日はここに來てるの。」

本当はボクも食べたいんだけど、店が小さいから隠れる場所がなくってしょうがないから外で待つ。

デートに使える店だから康太も覚えておくといいよ」

それは遠まわしにデートでここに連れてこいと要求しているのではないかと少年は思ったが、黙っていた。

「じゃ、代表たちが出てくるのを向かいのコンビニから見張ってようよ」少女はそういうと道を渡ってコンビニへ入って行った。

「……もしもし、愛子さん」

「何かな？康太くん」

「……立ち読みするならせめてファッション雑誌とかにしてくれ」  
「そんなの面白くも何ともないじゃない」

「……それは女子高生の発言としてはかなり問題があると思うんだが、

だからと言って女子高生がジャンポを立ち読みして大笑いするのはどうかと思うぞ」

「だって今週の金魂はスゴく面白いんだよ。ほら」

「……毎週、読んでいるのか」

「自慢じゃないけど単行本は全巻もってるよ」

「……確かに全然自慢にはならんが」

「今週号はね、金さんが……」

「……いや、解説はいい。ゆっくり楽しんでくれ」



ふと、窓の外に目を向けると雄二と霧島が店の外に立っていた。

## 第8話

「…………おい、愛子。二人が出てきた。いくぞ」

「ちよつ、ちよつとあと少しで読み終わるから、ちよつとだけ待って」  
「…………お前は一体何のために俺を呼び出したんだ？」

まだ漫画に未練タラタラな少女を引きずり出すようにして二人の後を追った。

二人は歩きながら何やら言い争いをしている様子だったが、翔子が雄二の腕を組むと大人しくなった。

一見軽く腕を組んだだけのように見えるのだが、翔子は巧妙に雄二の肘関節を極めていた。

少しでも抵抗すると肘が折られることだろう。おかげで雄二は身動きがとれなくなったのである。

「…………愛子、いくらなんでもあれは」少年はあわてて少女の方を見た。

「…………」少女も耳まで真っ赤にして焦りまくっていた。

「…………あれは、ちよつと無理じゃないか？」

「そっそうだね。腕を組むなんて、初心者にはハードルが高すぎるね」

「…………じゃ、とりあえず、あれは無しということぞ」

「うっうん、今日はそれでいいよ」

いつかデートにも慣れたら代表たちのように自然に腕を組めるようになるだろう。

その時、初デートのことを思い出した。あの時は確か…………

「そっその代わり、こうしていいかな？」そう言っただけ少年のシャツの裾をつまんだ。

「…………追うぞ」少年は特に否定もせずと言った。

「ドナドナみたいだね」遊園地の時と同じセリフを言ってみた。

「…………そこにツツコンだら、またパンチが飛んでくる」

「あつあれは反射だから、しようがないんだもん」

「…………反射だけであれだけ正確に顔面に打ち込めるなら、お前は世界を狙える」

30mほど間を空けて二人の後を追った。

やがて彼らは映画館についた。どうやら映画を観るようだ。

「映画を観るみたいだね。康太、ボクたちも行こう」

「……それはいいが、お前はいいのか、これ？」

「えっ？」そう言われて初めて少女は映画の看板を見上げた。

「エルム街の金曜日 Part3」

そこに書かれていたのは、超有名なオカルトホラー大作だった。

少女は口を開けて看板を見上げたままフリーズしていた。

「……オカルト物は苦手だったのではないか？」

「……」

「……遊園地のオバケ屋敷でも、最初から最後まで俺に抱きついたらまだっつし」

「……」

「……夜に物音がして寝むれなくなったと言ってたし」

「……」

「……兄貴が聞いてきたオカルト話をしてくれた時も耳を塞ぎっぱなしだったし」

「……なっなにを言うのかなあ康太。こっこんなのボクへっ平気だよ。さっさあ行こう」

「……愛子」

「……なっなに？」

「……手と足が一緒に出てるんだが」

「……ギャグだね」

「……誰に言い聞かせているんだ？別に無理して観なくても外で待つてればいいではないか」

「それじゃ、理想のカップルが映画館で何をするのか分からないじゃない」

「……映画館で映画を観る以外に何ができるのかを聞いてみたいんだが」

「うっうるさいなあ。とにかく観るの」

少女は強行突破せんばかりの勢いで入口に向かって歩き出した。

「……ちよつと待て、切符を買ってくる」  
少年は慌てて少女の首根っこを掴まえて言った。

## 第9話

切符を買って入場すると館内は適度な混雑具合で雄二たちにバレることなく首尾よく5列真後ろの席に座ることができた。

「……何とかうまく雄二たちの後ろに座れたな、愛子っておい」  
「もっもう終わった?」

少女は固く目を閉じ、両手で耳を塞いでいた。

「……座ってからまだ10秒もたつてないぞ。終わるどころか始まってもいない」

「なんでこんなに長いのか」

「……これで終わりなら観客が暴動を起こす。だから外で待とうと言ったのだ」

「だってそれじゃ理想のカップルになれないもん」

「……熱意は買うが、努力の方向性が激しく間違っている気がするんだが」

その時、開場を知らせるブザーが鳴った。

「キヤア〜〜」

「……大丈夫だ。あれは上演の合図だ」

「しっ知ってるもん。急だったから驚いただけだもん」

「……なぜそこで意地をはる?」

徐々に館内の照明が落ちて暗くなってゆく。

「キヤア、暗いのダメ。明かりつけて、早く早く」

「……お前は映画というものを理解しているのか?」

やがて音楽が館内に流れてきた。

「イヤア〜、もうイヤア」少女は思わず隣の少年に固く目を閉じたまま抱きついた。

「……ちよつと待て愛子。それはヤバい。ちよつと離れろ」

だが恐怖にかられた少女は、なおいつそう抱きついてきた。

「……ヤバい、このままでは鼻血が」

少年は抱きつかれていない方の手でポケットからティッシュを取  
り出すと、片手でよじって両方の鼻に急いで詰めた。

「……雄二」

「何だ」

「……後ろの席のカップルがうるさい」

「女の子がだいぶ怖がりなようだな。上映するのがホラー映画とは言え、ピザのCMで叫んでやがる。」

どこかで聞き覚えのある声なんだがって、ちよつと待て翔子、その手はなんだ?」

「……浮気は許さない」

「お前の浮気の範囲はどれだけ広いんだ。ただ、聞いたことがある声だというだけだ」

「……怖がる方が可愛い?」

「まあ、女の子らしいっちゃあらしいだろう」

「……キヤア（棒読み）」と言うと、翔子は雄二の肩にコテンと頭をのせた。

「念のために聞くが、何のつもりだ、翔子」

「……可愛い?」

「無表情で叫ばれても不気味なだけ：グワア」翔子のアイアンクローが決まった。

「……雄二は私をもつと肯定的に評価すべき」

「今の行動のどこに肯定的な要素があつたと」

「……愛があればわかるはず」

「そんなもの無いからわからなかつ……グオオ」

「……握力には自信がある」

その時CMが終わり、おどろおどろしい映画のテーマ曲が流れだした。後ろのカップルの悲鳴が大きくなった。

「……チツ」そういうと翔子は手を放した。

「こいつ、チツって言いやがった」

「……雄二、うるさい。映画が始まる」文月学園2年主席の霧島翔子は、大のホラー映画ファンであった。

2時間後、フラフラになった二人はよろめくように外に出てきた。「いつ意外と平気なもんだね」

「……お前のその根拠のない前向きさは称賛に値する。だが、お前は1秒たりとも画面を見てなかっただろう」

「こっ康太だつて怖くてそんなに鼻血を出してるとじゃない」と少年が両手いっぱい抱えている血に染まったティッシュを指差した。

「……なぜ、そこで対抗するのだ？この鼻血は映画とは関係ない。ほぼ100%お前のせいだ」

「ボクが何したっていうのさ」

「……映画の間中、目をつぶつてずっと俺に抱きついていただけろう。おかげで俺は5分ごとに鼻のティッシュを詰め替えるハメになった」

「ふふふ。つまり、ボクの色気にあてられちゃったんだね」

「……その自信はどこから湧いてくるんだ。まあいい、さつさと雄二たちを追おう」

30mほど先にターゲットを発見したので、そちらに向かって歩き出した。

「ふふ、そうか。康太はボクに色気を感じちゃったんだ」

後ろの方でなにやら盛大なカン違いをした少女が嬉しそうに独りごとをつぶやいていたが、放置することにした。

## 第10話

「……………何か建物に入っただろ」

「ああ、ここは最近できたショッピングモールだね。いろんなお店があるんだよ。」

幸いなことにターゲットはエスカレーターを使ってくれたので尾行は楽だった。

どうやら目的の場所があるらしくズンズンと進んでいき、一つの店に入っただけだった。

「……………おい、愛子ここは」

「ジュエリーショップだね」

「……………あいつらは堂々と入っただけだな。高校生が入っていいものなのか」

「とりあえず大丈夫なんじゃないかな。入ってみようよ」

店内は結構広いので見つかる心配はなかったが、自分たちが店内の雰囲気にごくわれないことおびただしい。

幸い入口付近は安めのアクセサリー類だったので、高校生カップルが見ていると咎められることはない。

雄二たちを探してみると店の奥のひとときわ豪華なエリアにいた。

「……………雄二、これ」

「これがどうかしたか」

「……………私、結婚指輪にこれが欲しいの」

「ほう、随分豪華な指輪だな」

「……………お気に入り」

「お前と結婚する奴に同情す……………グワア」

「……………私は雄二以外の男性と結婚するつもりはない。誰が望もうと望むまいと」

「グググ、あまり決めつけない方がいいと……………」

「……………雄二も私以外の女性と結婚させるつもりはない。雄二が望もうと望むまいと」

「俺に選択権はないのか」



「ねえ、康太」

「……何だ」

「代表がまた坂本君に頭痛マツサージをしてあげてる」

「……雄二は頭痛持ちだからな」

「なんかところかまわずだね？」

「……頭痛はツラいらしい」

「やっぱり代表は優しいね」

大概の場合、頭痛のタネが霧島本人であることは黙っておこう。

「……ところでお前は何をしているんだ」

「これ見て、へへへ」を言っ指にはめた指輪を見せびらかした。

「……指輪か。お前はあまりアクセサリーのたぐいに興味はないと思っっていたが」

「うん、そんなに興味はないんだけどね。これだけは別なんだ」

「……何か意味があるのか？」

「ほら、キレイな青でしょ？ラピスラズリって言っ幸せを呼ぶ石なんだって。」

小さい頃から初めてのデートの時に、この石の指輪を贈ってもらっのが夢だっただ」

「……だが、俺たちの初デートは終わっってしまったるが」

「うん、だからいいの。夢は所詮夢だっただなあって。こんなものより、

康太と一緒にいられることの方がしつ、イテッ幸せだと思っから」

「……せつかくのいいセリフなのに噛むな」

「ところで翔子」

「……何、雄二」

「ちよつと聞きたいんだが、この指輪についている値札の単位はジンバブエドルか？」

「……雄二は常識がなさすぎ。日本で売っているんだから円に決まっっている」

「ほほう、円だっただか。俺も薄々そうじゃないかと思っっていたんだ

が、ところでお前はいつ結婚する予定なんだ？」

「……今すぐにでもと言いたいけど、雄二が泣いて嫌がるから卒業したらすぐということまで妥協しておいてあげる。

夫を立てるのも妻の役目」

「卒業してすぐか。で、俺たちの卒業まであとどれくらいあるんだ？」

「……約1年半。正確には567日と14時間28分」

「正確すぎるわ。どれだけ楽しみにしているんだ、お前は」

「……その日が待ちきれない。ちなみに「しょうゆ」の誕生日までと……」

「いや、それはいい。ところでちよつとした疑問なんだが、どうやったら一介の高校生が567日で3000万円の

結婚指輪を買えるようになるんだ。腎臓・肝臓と内蔵丸ごとセットで売っても全然足りんぞ」

「……そこは愛で」

「違うからな。なんでも愛の一言で解決できるほど世間は甘くないからな」

「代表たち楽しそうだね」

「……俺にはどう見ても言い争いをしているようにしか見えんだが」

「ケンカするほど仲がいいって言うじゃない」

「……要するにお前にもケンカに見えているということではないか」

「あ、またマツサージだ。坂本君も頭痛持ちで大変だね」

「……ちよつと聞きたいのだが、お前はまだあれを理想のカップルだと思っているのか？」

「もちろんだよ。本当にお互いに好きあってないとああはできないよ」

「……霧島の一方的な攻撃だから、雄二の好き嫌いはあまり関係ないと思うんだが」

## 第11話

「…………じゃ雄二、次のお店に付き合って」

「もういいかげんに帰りたいんだが」

「…………おい、愛子。二人がこっち来るぞ」

「入口から出て隠れよう」

ターゲットは次の店に向けて歩きだした。翔子が例によって肘関節を極めて雄二に寄り添っていたのは言うまでもない。

二人はやがてカラフルな店の前に到着した。

「おい、ちよつと待て翔子。俺にここに一緒に入れというのか」

「…………仲良し夫婦なら当然」

「夫婦じゃねえというツツコミ以前に、お前ここランジェリーショップじゃねえか」

「…………夫の好みの下着を着るのは妻の務め」

「そんな務めはいらん」

「…………雄二は下着無しが好み？それなら明日からノーブラノーパンで…………」

「そういう意味じゃねえ。下着くらい自分で選べ」

「…………自分で選んでも雄二の好みかどうかの確認がいる」

「そんな確認はいらん……グオ」

瞬速の動きで少女の右手が少年の喉に食い込んだ。

「…………雄二はテレ屋さん。私の下着姿を見たくないなんてことがあるはずがないのに」

そう言いながら少年をランジェリーショップの奥へと引きずりこんで行った。

「…………おい」

「…………(真っ赤)」

「…………おい、愛子」

「…………どっどうしたの康太」

「…………どうしたのじゃない。ここにも俺を連れていくつもりか？」

「…………こっ康太は行きたいの？」

「……………店に一步足を踏み込んだだけで出血死できる自信はある」  
「……………そ、そこまでなの？」

「……………それだけならまだしも、吹き出した鼻血で周囲の下着を汚して買取させられる可能性がある。」

よくわからないが高いのではないのか？こういう店の下着って」

「……………物によっては数万すると思う」

「……………頼む、ここは、ここだけは勘弁してくれ」

「……………ボクもちよつと抵抗あるけど。ここら辺が理想のカップルとの壁なのかな」

「……………お前の理想というのがどんなものなの想像もつかないが、全く関係ないと思う」

「じゃ、とりあえず向かいのファーストフードで代表たちが出てくるの待ってようか」

二人はファーストフードの窓際に座って、ランジェリーショップの入口を見張ることにした。

「……………そういえば」

「ん、なに？」

「……………この店のトイレはどこだ」

「モールの中のお店だからトイレは共通で外にあると思うよ」

「……………ちよつと行ってくる」

少年はそう言い残して店の外に出ると、トイレではなく先ほど来た道に戻って行った。

「遅いよ。一体どこまで行っていたのさ」

「……………トイレの場所がわからなかったのだ」

その時、ランジェリーショップの入口が騒がしくなり雄二がちよつと姿を見せたかと思うと不自然にのけぞって再び店の奥に姿を消した。

「今のは、坂本君だったよね？」

「……………ああ、雄二だったな」

「その後ろに代表がいたよね……………」

「……………おそらく試着している隙に、雄二が逃げ出そうとしたのを

霧島が追っかけて捕まえたのだろう」

「……………でも、代表下着姿だったよ」

「……………霧島は雄二以外には眼中にないから気にならんのだろう」

「スゴい愛だね」

「そういうのを愛と呼ぶのは、お前くらいだ」

羨ましそうに少女が言った。

「代表どんな下着買ったのかな。大人っぽい奴なんだろうなあ。スタイルがいいから何でも似合いそうだよね」

「……………頼むから下着、下着と大声で言わんでくれ」

「ねえ、康太」

「……………何だ？」

「……………ボつボクの下着姿って見たい？」

「ブーーーーっ」

少年は飲んでいたコーラをテーブルいっぱいに吹き出した。

「……………おっお前は、いきなり何を」

「もう、汚いなあ」

「……………そんなことはどうでもいい。いきなり何を言い出すんだお前は」

「だって、男の子ってそういうの見たいんでしょ？」

「……………俺はそんなことにはきよふみふあない」

一生懸命ティッシュを鼻に詰めながら少年は答えた。

「うん、答えはよくわかった」

「……………ふおんなことふあ一言もいってふあい」

「その状態でシラを切れるってのもスゴいよね」

何を選んでいるのか雄二たちが一向に出てくる気配がない。少年はふと思いついたように言った。

「……………愛子」

「なに？」

「……………今のうちにトイレに行っておけ」

「え？別にそんなに行きたくないよ」

「……………雄二たちがこれからどこに行くかわからない。行けるうち

に済ませておくのが、尾行の鉄則だ」

「それもそうだね。じゃ、ちよつと行つてくる」

「…… バッグは見ていてやるから置いていけ」

「えっ? いいよ別に、そんなに邪魔にならないし」

「…… 何があるかわからん。邪魔になるかも知れないから置いていけと言っている」

「よくわからないけど、そこまで言うならお願いね。じゃ行つてくる」  
少女が外に消えたのを確認すると、少年はバックを手に取つて口を開けた。

更に数十分がたった。

「…… 女にとつて下着というのはそんなに大事なもののか? どれだけ時間がかかっているんだ」

「うーん、そうでもないんだけど、もしかしたら…… サイズがなのかも……」

「…… なぜ、お前が落ち込む?」

「ボクくらいのサイズだと店頭の商品がたくさんあるから5分くらいで決められるんだけど、

代表はFカップだから在庫がなくて探すのに時間がかかっているのかも……」

「…… そんな理由で落ち込まれても慰めようがないんだが。

お前のサイズは在庫が豊富でよかったなどでも言えばいいのか? …… 待て、その握りしめた拳をゆるめろ」

やがてターゲットがやつと店から出てきた。心なしか雄二がゲツソリとしている。

「…… 出てきた。追うぞ」

「何のかんの言つてノリノリだね」

「…… 俺はプロだ。請け負った仕事には全力を尽くす」

「いつからカップルつけ回すプロになったのさ」

数時間後……

「ねえ、康太。坂本君つてもしかして脳腫瘍かなんかじゃないのかな?」

「…………いや、そんな話は聞いたことはないが、なぜそう思う」  
「だって、代表があんなにしよつちゆう頭痛マッサージしてあげてるんだよ。何か悪い病気なんじゃない?」

言われてみればこの数時間、雄二は行く先々で霧島の逆鱗に触れア  
イアンクローをくらっている。

いいかげんに学習しろと言いたくなる。

「…………気にするな。肩こりから来る頭痛だ。心配はない。今後も  
あのマッサージを見ると思うが、余計な気は回すな」

「???何のことがよくわからないけど、心配ないならいいけど」

「…………しかし、この方向は駅の方だな。今日のデートは終わった  
ようだ」

「そっか、結構遅くなつちやたしボクたちも帰ろうか」

## 最終話

帰りは同じ方向なので一緒の電車に乗った。

「……………で、結局今日の成果はどうだったのだ？」

正直よくわからなくなった。代表は相変わらず綺麗で優しくて頭がいい上にスタイル抜群で、自分とはあまりにも違いすぎるのだ。

「よくわかんない。ボクと違いすぎちゃって」

やがて電車が少年の最寄駅に停まったが、少年は降りる気配がなかった。

「康太。駅に着いたよ」

「……………うん？ああ」

それでも降りようとはしない。ドアが閉まって電車が動き出す。たぶんボクを家まで送ってくれるつもりなのだろう。

(康太は、こういう時でも何にも言わないんだよね)。テレ屋なんだかぶつきら棒なんだか。

おかしくなつてクスツと笑ってしまった。

「……………何がおかしい」

「べつに。どう、今日は楽しかった？」

「……………楽しいも何も雄二たちを付け回してただけだ」

「ボクは一日康太といわれたからとても楽しかったんだけど……………」

「……………別に楽しくなかったとは言ってない」

本当に素直じゃない。だけどとても分かりやすい。

少女の最寄駅に着いた。当然のように二人で一緒に降りた。

「今日もここで買い物があるのかな？」笑いをこらえながら言ってみた。

「……………ああ、まあそんなもんだ」少年は誤魔化すように言った。

二人で少女への家の道を並んで歩く。「手を繋げたらな」と思ったが、そんな勇気は二人とも持ってない。

こういうところが、理想のカップルとの違いなんだろうなあと思っ  
た。

「……………いいと思うぞ」



ふいに、少年がつぶやくように言った。

「え？ごめん康太。よく聞こえなかった」

「……無理しないでいいと思うぞ」

何のことを言ってるんだらう。無理ってなに？ボクは何か無理してるの？

「ボク別に何も無理してないよ」

「……そうか？では霧島を見習おうとしなくてもいいのではないか？」

「だって、代表はボクの理想の人だし……」

「……それはいい。お前が霧島が好きで、霧島のいろいろなところに憧れる気持ちはよくわかる」

「いろいろなところってというのが引つかかるんだけど？」

「……そこに引つかかるな。お前が霧島に憧れていたとしても、

カップルとしての霧島と雄二のようになろうとするのは違うんじゃないか？」

「……」

「……お前はどうかやっても霧島にはなれんし、霧島だってお前にはなれん。

それなのにカップルとしての霧島を理想としてそれに近づこうとするのはちよつと違うんじゃないか？」

「……じゃ、じゃあどうすればいいのさ。ボクたち初心者なんだよ」

「……普通のお前と俺でいいじゃないか。普通に話して、普通にデートして、結果としてそれが楽しければ、

理想のカップルなんじゃないかな。俺たちは、誰かに自慢するため「デートをしているわけじゃない。何を焦っている」

「だって、ボクたちあと1年ちよいで卒業なんだよ。だから……」

「……時間はまだある。焦る必要はない。それに高校生活だけで終わるわけじゃない……」

「……え、それって」

「……」

康太はそれ以上何も言わずに黙って歩いていった。たぶん顔は真っ赤になっっていることだろう。

ボクは、心が軽くなつていくのを感じた。そうだよな。

高校を卒業したつてボクたちの時間はまだまだ続いて行くんだよね。卒業しても……そしてできればその後の人生も……。

ボクたちは黙って歩いていた。康太とだったら黙ってたつて気持ちがいいのはなぜだろう。

やがてボクの家の前についた。

「あの、ありがとうここまででいいよ」

「……ああ、じゃまた明日な」

「うん、康太。今日はありがとう」

「……礼には及ばん」

少年は踵を返して駅の方向に向かって歩きだしたが、少し進んでから少女の方を振り返り、さも思い出したという感じで言った。

「……そう言えば愛子」

「ん？何」

「……俺たちのデートは今日で2回目だったな」

「そうだね。1回目が遊園地で、2回目が今日だね」

少年がいきなり何を言い出したのか理解できなかった。

「……それでは、今日が正式に付き合い始めてから初めてのデートということになる」

「……えーつと、そういえばそういうことになるのかな。それがどうかしたの？」

「……いや、それがわかっていればいいんだ。じゃあな」

少年をそれだけを言うつと再び踵を返して駅への道に戻っていった。

「……変な康太。なにが言いたかつたんだろう」

不思議に思いながら家に入り、自室へと戻った。

「ああ、今日は疲れたなあ」といいながらバッグを机の上に放り投げた。

「コトツ」つと小さな音がした。

「あれ？何の音だろ。何か硬いもの入つてたっけ」

バッグを手を取って中を開けてみた。記憶にない箱が入っていた。「なんだろうこれ？」

自分のものではない。キレイにラッピングされた小さな箱だ。包装紙をそつと剥がしてみる。

指輪の箱だった。胸の高まりを感じた。おそろおそろるゆつくりと蓋を開けてみた。

中に入っていたのは想像通りのものだった。自分の言ったセリフが蘇ってくる。

「・・・小さい頃から初めてのデートの時に、この石の指輪を贈ってもらうのが夢だったんだ」

指輪を手に取りそつと左手の薬指にハマてみる。サイズはピッタリだ。これは確かにあのジュエリーショップで自分が見ていた指輪だ。

たぶんファーストフードでトイレに行くと言って出て行った時に店に戻って買ってきてくれたのだろう。

指にハマたまま、ためすがえす眺めてみた。ハッと気がついてバッグをあさってみた。

やはりカードが一枚入っていた。ドキドキしながらカードを開いてみると、そこには几帳面な字でこう書かれていた。

「1回目」

鼻の奥がツンとして泣きたくなった。

「そうだよね。ボクたちには今日が最初のデートだったんだもんね。」

初めてのデートでこの指輪をもらうのがボクの夢だったものね」

嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい・・・何回言葉にしても、この気持ちを言い表すことなんてできっこない。

一度は仕方がないと諦めた夢を彼は取り戻してくれた。嬉しい。嬉しい。嬉しい・・・

そうか、理想のカップルなんて探す必要なんてないんだ。康太の言った言葉の意味が理解できた気がする。

ボクたちが自分の理想のカップルになればいいんだよね。時間だつてたくさんあるものね。

ボクたちはまだ始まったばかりで、これからいろいろケンカもするだろうけど、

それでも少しずつお互いを分かり合えればいつか理想のカップルになれるよね。

少女は、この喜びを少年に伝えようと早速メールをした。電話だと泣いてしまいそうだったから。

「ありがとう、とても嬉しい。明日、学校でみんなに見せびらかすよ」  
しばらくして少年から返信があった。

「……お願いだからそれだけは止めてくれ。いろいろとマズいんだ」

これはどういう意味だろう。なぜ、隠す必要があるんだろうか？  
少々憤慨しながら再度メールを送信した。

「絶対やだ。必ず指輪していく」

そして、少年から連絡がこないように携帯の電源を切った。

「ふふふ、さあ寝よう。早く明日にならないかな」

いつものように抱き枕を抱きしめながら左手の薬指にハメた指輪をいつまでも嬉しそうに眺めていた。

深夜、少年は戦いの準備に追われていた。

「……スタンガン、特殊警棒、マキビシ、煙幕弾。これだけでは足りない。明日はFクラス全員と

下手をすれば他クラスの連中も敵に回るかも知れない。装備にゆとりを持たさなければ……」

少年の長い1日は続くのだった。

## 6. 恋とケーキとキューピッド 第1話

いつものように二人で下校している時に、突然少女が言いだした。「ねえ康太、代表から桜町に美味しいケーキ屋さんがあったって聞いたんだけど、これから食べに行かない？」

「……………ケーキか。当分ケーキは見たくないんだが」顔を曇らせて少年が答えた。それを聞くと少女は険しい顔つきになつた。

「何それ。まさかボク以外の女の子とケーキ食べ歩きとかしてるの？」

興奮した少女は少年の胸ぐらを締め上げた。

「……………待て、落ち着け。事情があるんだ」

「事情って何？まつまさか二股かけてるとか」

「……………いいかげん、そこから離れる。家に来ればわかる」

少年は怒り狂った少女を必死でなだめた。

「えーっと、これは何かかな？」

「……………見ての通り、ケーキの箱だが」

「それはわかるんだけど、何でこんなにいっぱいあるの？」

少女が驚くのも無理はなかった。リビングのテーブル一面にケーキの箱が並んでいたのだ。

「……………それはだな」

その時、玄関が開く音がした。

「お、康太帰っているのか。ケーキ買ってきてやったぞ」

少年はウンザリとした顔で言った。

「……………原因が帰ってきた」

リビングに下の兄である陽太が顔を見せた。手にはケーキの箱をブラ下げている。

「あ、愛ちゃんも来てたのか。ケーキ食べる？愛ちゃん」

「あ、はい。いただきます」

「じゃ、ケーキ買ってくるね」

「えっ？ケーキなら手に持つてるんじゃないや・・・」

「イヤ、愛ちゃんにこんな古いケーキなんか食べさせるわけにはいかないよ。すぐに新鮮なケーキ買ってくるから」

兄はそう言い残すと、飛び出すように外に出て行った。

「ねえ康太」

「・・・何だ？」

「新鮮なケーキって何？」

「・・・俺に聞くな」

「ふむふむ、大体の事情はわかったよ」手近にあった箱からモンブランを取り出すと手づかみで食べながら少女は言った。

「でも、このケーキおいしいね」

「・・・相談にのるか、ケーキを食うかのどちらかにしてくれ」

「でも本当に美味しいんだよ、このケーキ」

「・・・よかったらここにがあるケーキ全部持って帰ってくれ。ここ1週間ケーキ付けで家族全員もうケーキにはウンザリしているんだ」  
「え、いいの？いや、問題はそこじゃなくて、つまりは陽太君がそのケーキ屋の女の子に恋したというわけだね」

「・・・恋というか、下手すればストーカー一歩手前だな。酷い時には1日3回ケーキを買ってくる」

「それで少しは進展しているの？」

「・・・あの男が女性に声をかけられるはずがない。会計の時でも目を伏せているはずだ」

「そんなに女性苦手なの？今までの彼女とはどうしてたんだろう」

「・・・ふ、奴は今まで女性と付き合ったことがない」

「えーっ？陽太君って、T大で頭はいいし、背が高くてあんなにハンサムなのに」

「・・・高校時代は「車庫に入れっぱなしのフェラーリ」の異名を取っていた」

「それはいいあだ名なのかな？」

「・・・多分、無駄に高スペックという意味だと思うんだが、車庫

に入ったままじゃ原付にも勝てん」

「大学に入っても彼女できなかったの？」

「……大学に入った時には、これで俺もキャンパスライフを満喫するぜとかはしゃいでいたが」

「そうだね。同じ選択だったら女の子との距離も近くなるしね」

「……だが、入学したのは物理学科だ。同級生に女性は一人だけと言っていた」

「でも、サークルがあるじゃない。大学生活の花はやっぱりサークルでしょう」

「……しかし、奴が入ったのは「男声合唱部」だ」

「本当に彼女作る気あるの？」

「どう考えても女性を避けているようにしか見えない。」

「……それで大学では新たなあだ名がついたらしい」  
「ふむふむ」

「……最近、友人たちから「撒き餌」と呼ばれているとのことだ」

「どういう意味？」

「……奴が合コンに参加すると言うと、女性の参加率がいらいらい」

「女の子を集める餌なわけだね」

「……本人は合コンで女の子の電話番号をゲットしたぜと俺たちに自慢しているが、」

「奴が女の子に電話できるわけがないので単なる電話番号コレクターになっっている」

「陽太君いい人なのになあ」

「……とにかくそのケーキ屋の女の子にフラれるなりダメになるなり警察に通報されるなりしてくれんと、家族全員糖尿になる」

「ウマく行っくつていう選択肢は全く考えてないところがスゴいよね。よし、ほかならぬ陽太君のためだ、ボクが協力してあげる」

「……いや、ちよつと待て愛子。お前が張りきると大概口くなくとにならん」

「ふふふ、何をいうのさ康太。中学時代は友達からタイタニック愛子と呼ばれて頼られていたボクだよ。」

大船に乗ったつもりで任せておいて」

「……確かに大船だが、それは沈没するという意味ではないのか？」



## 第2話

そこへ話題の主が息を切らして帰ってきた。

「愛ちゃんお待たせ。新鮮なケーキを買ってきたよ」

「あ、ありがとうございます。わざわざすみませんでした」

受け取った箱を開けてみると、ケーキが10個入っていた。

「あ、お兄さん。みんなまだ帰ってきてませんよ」

「ははは、何言っているのさ、愛ちゃん。女の子は甘いもの好きなんだろう？これくらいは大丈夫だよ」

「はあ、じゃお兄さんはどれがいいですか？」

「……えーっと、俺は甘いもの苦手なんだ。それ全部愛ちゃん用だよ」

「甘いもの苦手なのにこんなに毎日毎日大量のケーキを買ってきてるんですか……」

うーん、これはどう考えればいいんだろう、感心すべきか呆れるべきか少女は悩んだ。

そういえばと少女は思い出し、突然表情を変えて兄へ言った。

「それはそうと陽太君、ちよつとそこへ座って下さい」

「えっ、急に厳しい顔してどうしたの愛ちゃん」

「いいから、さっさと座る」

「……キヤラが変わっているぞ、愛子」

「ついでだから康太も座って」

「おい、康太。愛ちゃんどうしたんだ？」

「……いや、よく分からん。急に変貌した」

少女は、ソファアに座った二人を眺めると腰に両手を当てて説教を始めた。

「だいたいの話は、康太から聞きました。ボクは情けないです。大好きな陽太君がそんなヘタレだっただなんて」

「(お前、一体何を話したんだよ康太)」

「(いや、兄貴がケーキを毎日買ってくる理由をちよつと)」

「(そんだけであんなに変貌するか？何かがのり移ったとしか思え

ん」

「(モンブラン食ってたが、酒でも入ってたかもしれん)」

「はい、そこ。勝手に喋らないでちゃんとボクの話の話を聞く。今時、女の子の一人や二人

デートに誘えないようでは立派な男の子とは言えません。

あ、康太にはもうボクという立派な彼女がいるから他の女の子を誘っっちゃダメなんだよ」

「…………お前の言うことはいちいち矛盾しているんだが」

「そもそもの問題点は、土屋兄弟が女心に疎いところにあるとボクは思うのです。

そこで、恋愛のエキスパートのボクが二人に女心を教えてあげようと思います」

「…………いや、お前だつて俺が初めての彼氏で、デートだつてまだ2回しか経験がないのでは」

もちろん少年の言うことなど当然のようにスルーした。

「というこで、明日から「工藤愛子プレゼンツ女心講座」を開いて陽太君を

恋愛のエキスパートにしてあげますから、ぜひ参加して下さい」  
「…………イヤな予感はしてたんだ…………」

なぜかこの家の兄弟は、この少女に逆らえない遺伝子を持っているらしい。

翌日、兄弟は二人並んでソファアに座つて、講義の始まりを待っていた。

「お待ちせしました。では講義を始めます」

「…………その前に聞きたいことがあるんだが」

「質問は手をあげてから。何ですか？土屋康太君」

「…………いちいち土屋をつけるな。それより、その眼鏡と白衣はどこから持ってきた？」

「あ、これ？今日、二人に講義をするつていつたら代表が「女教師プレイにはこれが必需品」つて言つて貸してくれたんだよ。似合う？」

「……女教師プレイって、雄二たちは普段なにをしているんだ」「さあ？代表が坂本君に勉強教えてあげているんじゃないかなあ？そんなことより講義を始めます」

そういうと伊達眼鏡をクイッと持ち上げ、得意げに講義を始めた「まず、ヒトにはX染色体とY染色体の2種類の性染色体があり、XX染色体を持つものを女性と言います」

「……ちよつと待て愛子。そんなところから始めるつもりか？」「いちいちウルサイなあ康太は、これは基礎だよ」

「……基礎すぎるだろ。東大予備校に通ったら授業が足し算から始まったようなもんだ。もつと実践的なことはないのか」

「ワガママだなあ。ボクが昨日一生懸命講義ノートを作ったのに」

「……お前の感性がおかしすぎる」

「じゃあ、もつと実践的なやつにするね。えーつと、ネットや携帯などで出会い系サイトというのがありますが、

相手は大抵サクラな上に、後で高額な利用料を取られたりしますの  
で利用してはいけません」

「……女心とはまったく関係ない上に、そもそもお前はどこからその知識を得たのだ？」

「ん？この間、康太から没収した日本に書いてあったんだよ」

「……読んだのか」

「うん、康太はどんなのが好きなのかなあとと思って。でも、男の子ってなんでヌードなんか見たがるのかな」

ボクなんか部活で部員みんなの裸見てるけど、別に何とも思わない  
んだけど」

「……そこで何か思うと別な問題が生じると思うんだが」  
黙って少年と少女のやり取りを見ていた兄が口を挟んだ。

「あのく愛ちゃん。そこら辺の話は後で康太とゆつくり話し合っても  
らうとして、

女心についてそろそろ解説してくれるかな」

「えっ？女心？……うーん」

「(おい、「女心講座」で女心を質問したら、考えこんじゃったぞ)」

「(……そもそもこいつの場合、自分が女という自覚があるのかさえ怪しいんだが)」

しばらく考え込んだ後、大発見をしたという感じで少女が言った。

「あ、女の子はケーキが好きです」

「ケーキ屋に勤めていてケーキが嫌いな女の子は少ないと思うよ、愛ちゃん」

「……それは女心じゃなくて、ただの食い気だ」

「えー、そっかなあ……うーん」

「(また、考え込んだじゃってるぞ)」

「(……こうなるのが予想できたのに、なんで兄貴が真っ直ぐ帰ってきて素直に講義を受けているのかの方が理解できんのだが)」

これだとばかりに手を打って胸を張って少女は答えた。

「女の子は、好きな男の子と一緒にいるのが好きですね」

「いや、だからね愛ちゃん。そこにたどり着くにはどうすればいいのかを教えてもらいたいわけだ」

「……兄貴、こいつにそんな高度な質問をしても無駄だ」

「だから彼女に陽太君を好きになってもらえばいいんですよ」

「それを一番悩んでいるんだけど……」

「そこは努力ですね」

「いや、一番肝心なことを丸投げされても……」

「……伊達にタイタニックと呼ばれてないな」

「(おい、康太。いつまでこれに付き合わなけりやならんのだ)」

「(……俺には止めきれない。愛子が飽きるまでガマンしてくれ)」

不毛な「工藤愛子プレゼンツ女心講座」は、その後2時間続いた。

### 第3話

翌日、いつものように二人で下校した。

「陽太君、うまく行ったかなあ」

「……………なぜ、うまく行くと思えるのかが理解できん」

「だって昨日、2時間も「女心講座」をやったんだよ。きつとうまく行くよ」

「……………お前のその自信がどこから湧いてくるのかわからん。

2時間のうち1時間半はケーキについて話してただけではないか」  
少女は処置なしと言ったように頭を振った。

「はくあ、本当に康太はわかってないなあ。陽太君がケーキを食べれないから教えてあげたんだよ。

毎日あんだだけケーキ買ってるのに食べたことがないなんて不自然でしょ。

彼女に「この店のストロベリータルトは、甘さ控えめで本当に美味しいですね」

とか言って話かけるきつかけになるじゃん」

「……………だが、そこから美味しいイタ飯屋だの日本全国の美味しいものだの日本の秘湯だのに話を広げる必要はあったのか？」

「うつつうるさいなあ。上手くいったら初デートする時に使える情報だよ」

「……………初デートを山形の山奥の混浴露天風呂に誘う男はいないと思うんだが」

「やったら記録に残るよね」

「……………お前は、ヒトの兄貴を何に挑戦させるつもりなんだ？」

いつものよう微妙にかみ合わない会話をしながらもうすぐ家に着くという頃に、ふいに少年がツブやいた。

「……………そういえば、この角を曲がったところだな。例のケーキ屋は」

「陽太君の好きな人が働いているケーキ屋さん？」

「……………ああ、家のわりと近くなんだ……………待て、愛子」

角を曲がるのとほぼ同時に少年が少女を引き留めて角に身を隠した。

「なに?どうしたの?」

「……顔だけ出してケーキ屋の道向かいの電柱の陰をってみろ」

「何を言ってるの?……何か電柱に隠れている人がいるね。不審者?」

「……否定はできんがよく見てみる」

「ボク、不審者に知り合いはいない……いたみたいだね。あれは陽太君?」

「……うむ、兄貴のようだ」

「何してるの?」

「……いや、俺に聞かれても困るんだが。どうやら隠れてるつもりらしい」

「何で隠れるの?」

「……いや、だから俺に聞かれても困ると言っている」

「兄弟なのにわからないの?」

「……お前は、兄弟をどんなもんだと思っているんだ?」

やがて兄は行動を起こした。電柱の陰から出てくるとケーキ屋へ入って行き、5分ほどしてケーキの箱を手にすると家の方へと歩いていった。

「行こう、康太」

「……どこへ行くのだ」

「あの行動の謎を解くんだよ」

「……解くって兄貴に問い詰めるのか?」

「違うの。とにかくついてきて」

「……ちよつと待て愛子。お前の行動は大概ロクなことにならないと……」

少年の発言に耳を傾けるといふ選択肢など初めから持っていない少女は速足で歩きだし、ケーキ屋へと飛び込んだ。

その店はピンクのパステルカラーを中心とした内装の店づくりで、店舗の半分が喫茶コーナーになっていた。

二人がテーブルの一つに向かいあつて腰かけると、ウエイトレスが水とメニューを運んできた。

「……………どうするつもりだ、愛子」

「陽太君の好きな人突き止めるんだよ」

「……………どうやって」

「大丈夫、作戦があるの」

「……………念のために聞くが、どんな作戦だ？」

「あのね、お店の人に聞くの」

「……………何て聞くんだ」

「えーっと、今ケーキ買っていった男の人が好きな人がこの店で働いているんですが、誰ですかって」

「……………それは既に作戦でもなんでもない。ただの行き当たりばつたりだ。お前は本当にAクラスなのか？」

「どうもこの娘といい霧島といい、Aクラスの上位なのが信じられない。」

文月学園はカリキュラムに「一般常識」という教科を取り入れるべきじゃないだろうか。

とりあえず、そのせいで兄の淡い恋が終わってしまったては目も当てられない。

「……………いいか、愛子。ここは奢ってやるから何もせずに帰ろう」

「えー、どうしてさ」

「……………お前の作戦が無謀すぎるからだ」

「前にも言ったと思うけど、ボクは、中学時代はタイタニツ……………」

「……………教えておいてやるが、それは誉め言葉じゃないぞ。頼む、

ここは俺の言うことを聞いてくれ」

少年が必死に懇願している間、少女はメニュー選びに没頭していた。

「で、何にするの？ボクはアップルティーね」

「……………俺はアメリカンでいい」

二人ともケーキは食べ飽きていたので、飲み物だけにした。

少女はウエイトレスの方に手を振って、「すみませーん。アップル

「ティーとアメリカンください」と言った。



## 第4話

やがて背の高い胸の大きなウエイトレスがこちらへやってきた。

「すごいね。見てよ康太、代表ほどじゃないけど結構胸大きいよ」

「……………」

「なんで無視するの？」

「……………毘か？」

「何でボクが毘かけるのさ。言っておくけど康太が考えているほど、ボクは胸にコンプレックスを持ってないんだよ」

「……………人の顔面に2発もストレートを叩き込んだ奴が言っているセリフではない」

「あつあれは反射だから仕方ないんだってば」

「……………未遂に終わった3発目は、明らかに意思がこもっていたが、そこへウエイトレスがやってきた。

「ご注文はお決まりですか」

「あ、ボクはアップルティーと、こつちにはアメリカンを」

「かしこまりました。メニューをお下げいたします」

ウエイトレスは厨房に戻ると、すぐに飲み物を持ってやってきた。

アップルティーを少女の前に、アメリカンを少年の前に置くと

「ごゆつくりどうぞ」と一礼して戻ろうとしたところに少女が声をかけた。

「あ、ちよつとちよつとお姉さん」

「……………止める愛子」

「はい、何でしょうかお客様」

「あの、ちよつと聞きたいんですけど、ボクたちがここに入る前に背の高い人がケーキ買っていききましたよね」

「えっ？ああ、ハンサム君のことね」

「(今までの中で一番いいあだ名だね)」

「(……………というか何であだ名なんかついてるんだ?)」

「ええ、あの人よく来るんですか？」

「あの人ねえ、ふふふ」

ウエイトレスは意味ありげに微笑んだ。

「あなたたちすぐ後に入ってきたんだつたら見たでしょ。あの人、あそここの電柱に隠れてなかった?」

「ええ、何してたんですかね」

「今、レジのところ長い黒髪の女の子がいるでしょ。あの子由美ちゃんっていうんだけど、ハンサム君は由美ちゃんが好きなのよ。」

うちのレジは交代制なんだけど、由美ちゃんがレジに入るまであそこで待っているってわけ。

「だけどやっぱり恥ずかしいみたいで電柱の陰に隠れているつもりらしいんだけど、バレバレなのよ。かわいいわね、ふふふ」

「それってストーカーなんじゃ?」

「……話を積極的に悪い方向に持っていないかなくてくれ」

「うん、私たちも最初はそう思ったんだけど、別に誰の跡つけるわけじゃなし、お店で話かけるわけじゃなし、

由美ちゃんが話かけたら、真っ赤になって動揺しちゃって店中にお釣バラまいちやつたりするのよ。」

「それで単に女性に慣れていない恥ずかしがり屋ということが全員一致で決まったわ」

「(中・高・大と安定した評価を得ているね)」

「(……一体何をしているんだ、兄貴は)」

「最近じゃ面白いから、みんなで「ハンサム君がいつ由美ちゃんに告白するか」という賭けまで始まっちゃったわ。」

「あなた達も参加する?ちなみに一番人気は「告白できない」で1.2倍ね」

「(ある意味すごい信頼感だね)」

「(……俺でもそこに賭ける)」

「悪い人じゃないから、もし見かけても知らないふりしてあげてね、ふふふ」

ウエイトレスのお姉さんは軽くウィンクして厨房に戻っていった。

「お店の保護対象になっちゃっているね」

「……というか、完全に可哀想な子扱いだろうあれは」

「じゃ、次の手段だね」

「……待て、これ以上何をするつもりだ」

「ここまで来たら本人に確認するしかないでしょ」

「……そんなことをしないでいい。何かあったら俺は兄貴に殺される」

「大丈夫、安心して全部ボクに任せておきなよ」

「……お前だから心配しているんだ」

少女は義務と権利のように少年の言うことを無視してレジに向かって叫んだ。

「すいませくん、由美ちゃんさん。ちょっとお願いします」

少年は頭を抱えた。

やがてレジの方から、やや小柄な今時珍しい染めていない長い黒髪、大きな瞳、ナチュラルに微笑んだホワホワした雰囲気的女性がやってきた。

「はい、私が由美子ですが、何かございましたか」

「(陽太君、なかなかセンスいいね)」

「(……あいつは大人しそうな女性が好きなんだ)」

「……あの？お客様」

「あ、ごめんなさい。ボク愛子つていいいます。初めまして」

「はっはあ、由美子です。初めまして」

「あの？ハンサム君つて知ってますよね？」

その名前を聞いた時に、女性の頬が少し赤くなったように見えた。

「ええ、よくケーキをたくさん買ってくださるお客様ですね」

「どう思います？」

「(……いくら何でもストレート過ぎるだろう)」

「えーっと、とてもケーキが好きなんなんだなあ」と

「いついや、そうじゃなくてですね。あのハンサム君に関してお店で賭けが行われているそうじゃないですか。」

そのことについてどう思うのかわかってことなんですけど」

女性はやや首を傾けて考えてから答えた。

「賭け事はいけないんじゃないかと思えますね」

「(ねえ、康太。ボクの日本語おかしいのかなあ？話が全然通じないんだけど)」

「(……おかしいと言えば全部おかしい。けどこの人も大概天然だ)」

「(こうなったら最後の手段だね)」

「(……待て、愛子。これ以上暴走するな。本当に兄貴に殺される)」

「実はですね。ボクはあのハンサム君の妹なんです」

「(えっ?)」

女性は手に持っていたトレーを床に落とし、少年はテーブルに突っ伏した。

## 第5話

少女は少しの逡巡も見せずにはキハキと答えた。

「はい、ボクは土屋愛子、愛ちゃんって呼ばれてます。兄は土屋陽太つていいます」

「……ああ、そうなの愛ちゃん。私は、三宮由美子。由美ちゃん  
でいいわ」

「そして、こっちにいるのが……」

「……俺まで巻き込むな。通りすがりの少年Aでいい」

「早く自己紹介しなよ」

早くと言われても愛子が陽太の妹と言った以上、土屋を名乗るわけにはいかない。仕方なく少年は言った。

「……工藤康太です。よろしく」

「工藤康太君。康太君でいいかしら」

「ボクは康太と呼んでます」

「……この際、それはどうでもいい」

「えーっと、お二人の関係は?……」

少年は当然の如く友達と言いつつになつたが、少女の目が細められ「わかっているだろうな」と威圧してきたので、渋々答えた。

「……付き合ってます」

「彼女なんです、ボク」少女が待つてましたとばかりに笑顔で答えた。

「……まさか、これが言いたいためにわざわざ由美子さんと呼んだんじゃないだろうな」

「まあ、そうなのいいわね」

「由美ちゃんは、彼氏はいないんですか?」

「ふふ、残念ながら小学校から大学まで女子校だったので、男の方と知り合う機会がなくなつて」

少女は小声で「(よしっ)」と言つて、小さくガッツポーズをした。

「ええ、そんなキレイなのにもつたないですよ」

「ありがとう、そんな風に言われたのは初めてよ」

「そこでボクにいい考えがあります」

少年の背筋に冷たいものが走った。少女のいう「いい考え」が、少年というより土屋家にとって「いい考え」であつたためしかなかったからである。

「……ああ、愛子。これ以上由美子さんの仕事のお邪魔をしても悪いから帰ろうか」

「あら、今は他にお客さんもないから全然大丈夫よ」

女性が言った。いや、そっちが大丈夫でもこっちが大丈夫じゃないんですと叫びたくなつた。

「そうだよ康太、邪魔しないで」

いや、邪魔しなければ土屋家に血の雨（主に康太の）が振ることは必至なのだ。

「ボクの兄の陽太君とデートしましょう由美ちゃん」

「……陽太さん？」

「はい、陽太君は由美子さんのことが大好きなんです。もう朝から晩まで由美子さんのことを考えていて勉強も手につかない状態で、最近では……」

「……ちよつと待て、愛子。興奮して話がどんどん大きくなつて行っている」

「ええと……」女性が少し困つたような顔をしていた。

「それとも誰か、お付き合いしている人がいるんですか？」少女が畳み掛ける。

「いいえ、さつきも言った通りいないのだけど」

「それなら誰か好きな人がいるとか？」

「……ええと、いるようないような」女性は少し頬を染めて答えた。

「でもお付き合いしていないなら問題ないですよね」少女は逃がさない。

「……おい、愛子。いい加減にしろ。由美子さん困っているじゃないか」

「何か困ることがあるんですか？」

「困るといふか……実は私デートしたことないからどうすればいいかわからないの」

女性は真つ赤になってうつむいた。

「なんだあ。そんなことですか」

「それに……」女性はモジモジしながら恥ずかしそうに言った。

「こういうのって、最初は文通と交換日記から始めるべきなんじゃないかしら」

「今の時代ならせめてメル友くらいからにしましょうよ」

「……天然記念物だな」

少女はこれで問題解決とばかりに晴れ晴れと言った。

「問題は解決ですね。21世紀にもなって文通や交換日記なんてもう犯罪の域です。」

そんなことやってたらデートにこぎつけるまでに10年はかかってしまいますから」

「でも、やっぱり全く何もわからないのにいきなりデートなんて不安だわ」

「由美ちゃん、そのためにボクたちがいるんです」

「何か方法があるの？」女性が不安そうに少女を見つめた。

「ベテランのボクたちと一緒にWデートしましょう。それならオーケーですよ。じゃ、今週の土曜日、〇〇駅の東改札口で10時に待ち合わせということでしょうか。」

あ、普通の格好でいいですよ。完璧なデートプランをボクたちが立ててきますから」

「でも……陽太さんにご迷惑じゃないかしら」心無しか頬が赤く染まって見える。

少女は薄い胸をたたいて堂々と言い放った。

「大丈夫!!このタイタニック愛子に任せて」

「……だからそれは沈没船の名前だと何度言えば」

## 第6話

「ということでも陽太君、デートします」家に着くなり少女は満面の笑顔で兄に向けて言い放った。

青年はソファアに座ってマグカップを持ったまま動きを止めた。

「……………(キョトン)」

「……………(ニコニコ)」

「……………(キョトン)」

「……………(ニコニコ)」

「……………えーっと愛ちゃん」

「はい、何ですか？」

「愛ちゃんたちがデートするからって、いちいち僕に断らなくていいんだよ」

「いや、そういうことじゃなくて、陽太君もデートするんです」

「……………(キョトン)」

「……………(ニコニコ)」

「……………僕が愛ちゃんたちのデートについていくの？」

「そうじゃないんです。なんでここの兄弟は揃いも揃って物わかりが悪いのかなあ？」

「……………落ち着け愛子。前置きもなく、いきなり「ということ」から話を始めても誰も理解できん」

「そうかなあ。えーっとですね、ボクたちと陽太君がWデートをするんです」

「つまり、愛ちゃんの友達を紹介してくれるってこと？」

「えっ？陽太君、女子高生紹介して欲しいんですか？うーん、今紹介できるのは優子くらいかなあ」

「……………頼むから、これ以上話をややこしくしないでくれ」

「そうだった。違うんです。デートの相手は由美子ちゃんです」

「由美子ちゃんって友達なの？うーん、正直言って高校生はあまりなあ」

「いや、だからボクの友達じゃなくて、陽太君が好きなケーキ屋の由美



子ちゃんです」

青年の動きが止まった。

「……………(T 大脳計算中)」

「……………(ニコニコ)」

「……………(T 大脳計算中)」

「……………(ニコニコ)」

「……………(チーン)……………えええー!!」

青年は、驚きのあまり持っていたマグカップを落としてしまい、熱いコーヒーがズボンにかかって

「アチアチアチ」と立ち上がった瞬間にテーブルに膝をしたたかに打ちつけ、

「痛い」とかがもうとしてこぼしたコーヒーに足を滑らせて床に後頭部をぶつけてしまった。

その様子を少女は腕組みしながら見守っていた。

「うーん、人間って動揺すると本当にコントみたいなことするんだね」

「……………落ち着いている場合か。今、凄い音したぞ」

「落ち着けて言ったり、落ち着くなつて言ったり。康太はワガママすぎ、ボクどうすりゃいいのさ」

「……………お前の場合落ち着くべき時に興奮したり、急ぐべき時に落ち着いているのが問題なのだ」

倒れた兄をそっちのけで言い争いが始まった。

「お前ら、痴話ゲンカよりも倒れた兄を助け起こすのが先じゃないのか」

いつの間にか立ち上がった青年が後頭部をさすりながら言った。

「愛ちゃん、ちよつと康太を借りていいかな」と言った。

「いいですよ。ボクこのケーキ食べながら待ってていいですか」空気を全く読まずに少女は明るく答えた。

「ああ、好きなだけ食べていいよ」青年は答えると少年の首をヘッドロックで締め上げ、

「康太君、お兄さんちよつと聞きたいことがあるんだ。ちよつと付き合ってくれるかな?」と部屋の隅へ引きずって言った。

「何がどうしてどうなっている？わかるように説明しろ」

「……ぐぐぐ、愛子が言った通りだ」

「バカやろう。愛ちゃんの日本語にゃあ通訳が必要なんだよ。何がどうなってるのかさっぱりわからん」

「……愛子が暴走した」

「そりやいつものことだろうが」

「……いや、それがいつもより張りきって……」というと、ケーキ屋での出来事を全部話した。

さすがにかわいそうだったので賭けのことは黙っておいたが。

「ということは何か、俺が由美子さんを好きだったことが彼女にバレたってことか……」

「……いや、バレたというよりも」

「バレてないのか？」

「……むしろ積極的にアピールしていたという方が適切かもしれない」

「……終わった」

陽太は床に手をつけて力なくうなだれた。

## 第7話

青年はヨロヨロとソファに倒れ込むように座ると膝の間に頭を抱えこんだ。

「どおふいたんでふか？よふおたふん」

「……この緊迫した場面でキーキ喰いながら喋るな。お前の暴走のお蔭で落ち込んでしまったんだ」

「えー、落ち込む要素なんてどこにもないじゃん。Wデートまで約束してきたんだよ」

少女は青年の前にしやがみ込むと両手を握って言った。

「なにが悪いんですか？せっかくボクが由美子さんを説得してデートの約束してきたのに」

青年は顔をあげると虚ろな目で言った。

「デートってのは、まだ早いんじゃないかな。最初は文通か交換日記くらいから始めて……」

「同じこと言ってるね」

「……ある意味とつてもお似合いかもしれん」

「俺、デートってしたことないんだ。なにをすればいいのかわからない」

「だからWデートにしたんじゃないですか。ベテランのボクがフオローしますよ」

「……2回のデート経験でベテランを名乗れる神経は、見上げたもんだ」

「康太うるさい。初心者を不安にしないで」

「大丈夫なのか」

「そのためのボクたちです」

「……エヴァとは懐かしい」

「あ、わかってくれた？」

「……うむ、ハマったもんだ」

「ボクなんかレイになりたくて髪に青絵具塗ったらお母さんに怒られちゃって……」

「お前たちは本当に俺を慰めるつもりがあるのか？」

青年は更に深く頭を埋めてしまった。

「無理だ。どう考えてもやっぱ無理だ」

「無理じゃないですよ。由美ちゃんは陽太君が自分を好きだっていうのが分かった上でデートを受けてくれたんですよ。」

女の子は嫌いな相手とは絶対にデートなんてしませんよ。絶対いけません」

「俺、自信がないんだよ。絶対デートなんて無理だって」

「だって陽太君だって、一生独身でいるつもりじゃないんだよね？」

どうせいつかは出さなきゃいけない勇気だったら、ここで出そうよ」

「そうかもしれないけど、今の俺なんかじゃ絶対無理だよ。愛ちゃん」

少女はスクツと立ち上がると青年に言い聞かせるように言った。

「しようがないなあ。そこまで言うならボクの座右の銘を教えてあげるよ。」

ボクは挫折から何回もこの言葉で立ち直ってきたんだ」

これまでとは違う少女の真摯な雰囲気とうたれたのか青年も顔を上げた。

この少女を何度も挫折から立ち直らせた名言とは、果たしていかほどの力をもっているのか？

「それはね……」

青年の喉がごくりと鳴った。

「あきらめたらそこで試合終了ですよ」

「はいっ？」

「……ほう、金魂だけでなく、Slim Dunkも押さえてたのか」

「このセリフ、いつか使ってみたかったんだよね」

「……漫画とアニメしかないのか」

「失礼だな。ちゃんと小説も読んでいるよ」

「……ほう、何を読んでいるのだ？」

「えつとね、一番好きなのは「バカとテストと召喚……」」

「……待て、それ以上言わんでいい」

「えっ、どうしてさ？」

「……いろいろと大人の事情というのがあるのだ」

「大人の事情ってなにさ」

「……2つの世界線が交わり深刻なタイムパラドックスが起きる可能性がある」

そのセリフを聞いた青年の肩がピクツと揺れ、ソファーに座ったままブツブツと呟きだした。

「やってやる。これがステインズ・ゲートの選択というのならな」

「……兄貴も見ていたのか」

「ねえ何の話？」

「……気にするなクリステイナ」

「テイナでもなければ助手でもない」

「……結局、お前も見ていたのではないか」

「名作だよ、Stains; Gate」

「本当に悩んでるのか」というツツコみは受け付けない。

「あ、それからですね」少女は言った。

「まだ、なにかあるのか」青年は怯えたように尋ねた。

「ボクと陽太君は兄妹ということになってますんで、そのつもりでよろしく」

「はあ？何でそんなことに」

「作戦上必要だったんですよ」

「……嘘つけ。単に勢いで口から出ただけだろう」

「そんなことないもん。由美子さんが単独デートを渋ることを見越して、兄妹カップルでのWデートに持ち込む作戦だったの。」

作戦成功してWデートできることになったじゃん」

「……ほほう、作戦だと」

「そっそうだよ……」

「……では、由美子さんが兄貴との単独デートを受けていたらどうするつもりだったのだ」

「……その可能性は全然考えてなかったなあ」

「(グサツ)・・・うううう」

「・・・上手くいって付き合うことになって家になんてきたら、妹はいなくて妹の彼氏がいることになってたんだぞ」

「うるさいなあ康太は、大体由美子さんが陽太君との単独デートを受けてくれるわけないじゃん」

「(ズキツ)・・・ぐおおお」

「どうしたんですか？陽太君」少女は不思議そうに尋ねた。

泣きそうな顔をして青年がツブやいた。

「お前ら、頼むからもう少し俺をいたわってくれ」

## 第8話

〇〇駅東口改札付近、一人の少女と女性が柱の陰に身を隠していた。

「あの、愛ちゃん。私たち一体何をしているのかしら？」

「あのですね、由美ちゃん。デートでは男性が先に待っていて、女性は後からきて「ごめん、待った」っていうのがルールなんです。

「だけど男性がいつ来るかわからない。そこで約束の時間前に近くに潜んで男性が来るのを見張るわけです」

「そういうルールがあるのね。勉強になるわ」

その時、少女は頭を後ろから小突かれた。

「……こんなことだろうと思った。お前の妙なこだわりを由美子さんにまで伝染させるんじゃない」

「痛いなあ。何するのさ康太。何でこんなところにいるの？ さっさと待ち合わせ場所で待ってなよ」

少年は声を潜めて、離れたところに立ってあらぬ方向を見ている青年を顎でさしながら言った。

「……あれのお蔭で1時間も前に到着したのだ」

「(なんでそんなに早く)」

「(……昨夜は大変だったのだ。30分置きに俺の部屋にやってきて、「服はこれでいいのか」とか

「ハンカチは3枚でいいか」とか「目覚ましを5個買ってきたが、寝過ぎしたらどうしよう」とか」

「(かなり舞い上がったんだね)」

「(……遠足前の小学生状態だ。終いには「おやつは300円まで、バナナはおやつに入りません」

「と言って部屋から追い出したら、今度は朝6時に叩き起こされた。」

「(陽太君って今までどれくらいモテなかったんだろう?)」

「(で、「遅刻する遅刻する」と大慌てで、出てきて朝9時にここについたわけだ)」

「(同じ初デートでも、中学生の方がずっと落ち着いているような気が





「・・・・・・・・おい、愛子」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おい、愛子。これはなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

看板には

「全米N°. 1大ヒットホラー 日本映画のリメイク」

「呪ング」

と大きく書かれていた。

入口のポスターには「愛と青春の旅姿 来週より堂々公開」と書かれていて、ところを見ると、

公開日を1週間違えてしまったらしい。

「・・・・・・・・おい、愛子」

「なっ何かな、康太君」

「・・・・・・・・何かなじゃない。これどうするつもりだ？この辺他に映画館はないぞ」

「わっわわわっているよ。陽太君と由美ちゃんだけ観てもらってボクたちは外で待つてよう」

「・・・・・・・・それじゃダメなんだよ」

「(どっどうしてさ)」

「・・・・・・・・兄貴はお前レベルの怖がりなんだ」

少女がそつと青年を見てみると、確かに顔面が蒼白になって硬直したままポスターから目を外せないでいる。

「ごほん、ちよつとした手違いがあります、別な映画館にいきましょう」  
でちよつと遠くなりますけど、別な映画館にいきましょう」

その時、由美子が思いがけないことを言い出した。

「あら、これでいいじゃない愛ちゃん。面白そうだわこれ」

「「えええー」」

「・・・・・・・・どうするんだ、おい」

「(こっとなったら最後の手段だね)」

「わかりました。由美ちゃんの希望でこの映画を見ることにします。ただ、お二人のお邪魔をするのも悪いので、

あとはお若い方だけでということ、ボクと康太は向かいのファーストフードで映画が終わるまで待っています」

「(……こいつ、兄貴を切り捨てやがった)」

いつの間にやらFFF団の精神まで会得している少女なのであった。

「あら、いいじゃない。愛ちゃん達も一緒に観ましょうよ。今日はデートの作法を教えてくださいよ」

青年もガシッと少女の肩を掴み、青い顔をしながら言った。

「逃げようなん、いやそんな遠慮はいらないよ、愛子。さあ、「妹」よ。この兄と一緒に仲良く映画を観ようじゃないか」

そういつてキヤアキヤア叫ぶ少女を引きずりながら、映画館に入っていた。

少年は「……やれやれ」と言いながら後に続いた。

館内は割と空いたので、真ん中あたりに由美子、陽太、愛子、康太の順で座った。陽太と愛子は、既に抱き合いながらキヤアキヤア騒いでいた。

やや、呆れ顔の由美子と目が会った。苦笑いしながら「本当に似た者、兄妹なのね」と呟いた。康太も苦笑いして相槌をうつしかなかった。

数時間後、4人は映画館から出てきた。陽太と愛子は支えあうようにフラフラしながら歩いている。

「面白かったわね」由美子が微笑みながら言った。

「そっそうでしたね」陽太が息も絶えだえに答えた。

愛子は返事もする気力もないらしい。

## 第9話

「さて、愛ちゃん。次はどこに連れて行ってくれるのかしら？」

「えーっと、もうお昼すぎちゃったので美味しいイタリアンのお店に行きましよう」

「・・・今度は、回転寿司の店に変わっていたというオチじゃないだろうな」

「うるさいよ、康太」

当然だがイタリアンの店はちゃんとあった。もうお昼を過ぎた時間帯ということで店は空いていた。

それぞれ注文をすませると、会話が途切れた。

「(康太、話を盛り上げなよ)」

「(・・・無茶いな)」

そんな雰囲気を読んだのか、由美子が楽しそうに話しだした。

「陽太さんも愛ちゃんもオカルト系がダメなのね」

「そうなんですよ。ボク怖いの手で」

「でも、現実はそんなに怖いことってないのよ」

「由美ちゃん、何か経験あるの？」

「私も兄もオカルトが好きで、一度は経験したいと思って二人でいろんな心霊スポットに

出かけたりしているんだけど、一度も怖い経験してたことないの」

「そんなことしているんですか？勇氣あるなあ」

「この間も子供の幽霊が出るっていう廃病院に行ったんだけど何も出なかったわ」

「スゴいなあ」

「ただ、帰りに車に乗って走ってたら、兄が「あれっ」ていうの」

「なっ何があったんですか？」

「気がつかなかったんだけど、車のリアガラスにいっぱい子供の泥手形がついてたの」

「二・・・二」

「近所の子供のイタズラだろうって兄は言ってたんだけど、夜中の2時に子供を外に出すなんて親御さんに問題あるわよねえ」

「……………」

「スタンドで拭いてもらおうとしたら、スタンドの人に「すみません、お客さん。」

「この手形、車の内側からついているみたいです」って言われちゃって」

「そっそれでどうしたんですか」

「もちろん兄を怒ったわ。貴重品がなかったからいいけど車の鍵をかけ忘れるから子供が入り込んでこんなイタズラするんだって。」

「兄はちゃんと鍵はかけたって言い訳してたけど、鍵かけてたら車に入れないものね」

「……………」

「まあ、噂なんてこんなものよね。だから愛ちゃん、オカルトなんてそんなに怖がる必要ってないのよ。」

「なんだつたら今度私と一緒に心霊スポットに行きましょう。そういうのがないってわかるから」

少女は涙目で首を一生懸命横に振った。

「(おい康太、これ冗談だよな)」

「(…………ケーキ屋での会話から判断すると100%本気だ)」

「(幽霊も災難だな。この様子じゃ心霊スポットで血塗れの幽霊みたら救急車呼びかねんな)」

その時に注文が届いたのは天の助けだった。

「しばらく無言で食べていたが、それではマズいと思ったのか少女が話題を振った。」

「そういえば、由美ちゃん。何か音楽とか聞くんですか?」

「インディーズだけど、大好きなバンドがあるの」

「へえ、ボクもスゴく好きなバンドがあるんですよ。何てバンドですか」

「知っているかな。タコ&ライスっていうバンドなんだけど」

「ゴホンゴホン」

「どうしたんですか二人とも」

「あ、大丈夫です。ちよつとむせちやつて」

「陽太さんはタコ&ライスってバンドごぞんじ？」

「いやあ、僕はあまり音楽詳しくないので。すみません。ははは」

「(おい、タコ&ライスって兄貴のバンドだよな)」

「(・・・どうもそうらしい)」

「すごい。ボクも好きなんですよ。特にボーカルのShuが大好きで」

「ええ、愛ちゃんもShuが好きなの。私も大好きなの、趣味があうわね」

「ゴゴゴゴゴゴゴ」

「本当に大丈夫ですか？」

「いやあ、水が気管に入っちゃつて。すいません話の腰おっちゃつて」

「(・・・Shuって兄貴のことだろう?)」

「(・・・多分)」

「もう、あの耽美的で生活感のない雰囲気がいいんですよ」

「そう。もうバラの露だけ飲んで生きているという感じよね」

「(この二人は誰の話をしているんだ? いつも丼で飯を3杯食うんで、お袋から食費2倍にされたあいつのことか?)」

「(・・・どうもそうらしいんだが)」

「歌も感情があふれて気持ちまで伝わってきますよね」

「わかるわ、愛ちゃん。心を余すことなく表現できる、まるで歌うために生まれてきたような人よね」

「(もう一度聞くんが、バンド組んだ時あまりのリズム感のなさにメンバー全員から

「てめーは歌でも歌ってる」とケリいれられていたあいつの話か?)」

「(・・・カスタネットまで失格になって危うくトライアングル担当になりそうになっていた)」

「なんかいろいろなバンドのボーカルの素晴らしいところを取り入れたって感じで、研究しているってのがわかるんですよ」

「そうなの。それでいてパクリというんじゃないで、いいところの



## 第10話

食事の後は、由美子のリクエストでシティホテルのラウンジでお茶をすることにした。

落ち着いた雰囲気はさすがに一流ホテルだ。

「由美ちゃん、慣れているね。さすが大人だね」

「ふふふ、昔から家族でくることが多かったの。母がここのフルーツオムレットが好きなので」

由美子はふと思いついたように「今日はピアノの方お休みなのかしら」と言った。

ラウンジの真ん中にグランドピアノがおいてあり、いつもはBGMとしてピアノの生演奏が流れているのだという。

「ピアノを見たら久しぶりにちよつと弾きたくなっちゃった。ちよつと失礼していいかしら？」

由美子はそういうと店員に何か話しかけピアノの前に座った。一度目をつぶると手を鍵盤の上に滑らせた。

「ポロンポロン」と感傷的な旋律が流れてくる。

「シヨパンのノクターンだね」少女が得意げに答える。

「……お前がクラシックを知っているとは意外だ」

「ふふふ、康太。あまりボクを馬鹿にしてもらっちゃ困るなあ。女の子はシヨパンが好きなんだよ

「……という記事を雑誌で読んだからCDを買ってきて聞いたんだけど、クラシックってあまり面白くないね」

「……理由もオチも実にお前らしい」

「……これは、ちよつと」青年の顔が引き締まった。

「どうしたの、陽太君。由美ちゃんあまり上手くないの？」

「いや、逆だ。上手すぎる。ちよつとピアノを習ってたっていうレベルじゃない」

やがて曲調が一変して嵐を思わせるような曲になった。

「ふむふむ」

「……わかるのか愛子」

「シヨパンじゃないということだけはわかる」

「……お前の基準はシヨパンかそうじゃないかしかないのか」

青年の顔がさらに引き締まった。

「どうしたの、陽太君」

「冗談じゃない……」

「え？」

「これはラフマニノフのピアノ協奏曲第3番カデンツアだ。長い間演奏不可能と言われてきた難曲だ」

「ふむ、なるほどラフマニノフか」

「……知っているのか、愛子？」

「いや、全然。名前が難しいから多分難しい曲なんだろうなあくらいはわかったけど」

「……うむ、実にシンプルな回答だ。単細胞という言葉はお前のためにあるに違いない」

「わかりやすく言えば、そんじよそこらの奴に弾ける曲じゃないということだ」

やがて彼女がピアノを弾き終わると、いつのまにかピアノに聞き惚れていたラウンジの客たちが一斉に拍手をした。

由美子はやや恥ずかしそうに礼をするとテーブルへ戻ってきた。

「ごめんなさいね。久しぶりにピアノを見たもんだから嬉しくて」

「すごいなあ由美ちゃん。シヨパンのノクターンが弾けるなんて」

「……お前はシヨパンと言いたいだけだろう」

「ううん、久しぶりだとやっぱり指が全然動かなくて」

「そんなことはないです。僕はカデンツアを生で聞いたのは、初めてです。というより由美子さん。」

どれだけピアノやっていたんですか？ラフマニノフなんてちよつとカジツたくらいじゃ弾ける曲じゃありませんよ」

すると由美子は恥ずかしそうに言った。

「ピアノは小さい頃から、有名な先生についてやっていたんです。これでも高校2年の時には、

全日本コンクールで2位にもなったことがあるんですよ」



「ええ、由美ちゃんすごい」愛子も水泳をやっていて全国大会寸前だったのだから、全日本で二位の凄さというのがわかるのだろう。

「ありえない」

「え？あれじゃ2位に入れないってことなの、陽太君？とても上手いように聞こえたんだけど」

「違うんだ愛ちゃん。全日本コンクールって言っても所詮は学生のコンクールだろう？」

今日の演奏を聞いた限り、由美子さんが1位になれないはずがないんだ」

「陽太さん、随分くわしいんですね」

「ピアノは好きなんです」

「実をいうとね。コンクールの時にわざと数カ所間違って弾いたの」

そういうと由美子は、いたずらが見つかった子供のように舌をぺろっと出してみせた。

「ええ、どうして？」

「両親やピアノの先生が、どうしても音大に行けっとうるさくて。でも私は音大に行く気は全然なかったの、

下手に1位なんか取ったら断りきれなくなると思ったからちよつとだけ。

4位くらいだろうと思っていたんだけど2位になっちゃった。お蔭で説得に手間取っちゃったけど」

由美子はいたずらが成功した子供のようには笑った。

「もったいないなあ。ボクだったら絶対に音大に行くのに」

「うーん、ピアノは好きだけど、もっと好きで小さい頃からの夢があったから」

「あれだけのピアノを捨ててまで、叶えたい夢ってなんですか？」

「わたしね……」

そういうと由美子は、恥ずかしそうに頬を染めてうつむいた。

「小さな頃からケーキ屋さんになりたかったの」

「ケーキ屋になるためにピアノニストの夢を捨てたんですか？」

「ううん、別に捨てたわけじゃないの。私はピアノを弾くことが好き

なだけで、それは大観衆の前で弾くのも、家で一人で弾くのも違いはないの。

「ただ、ケーキ屋さんは自分が作ったケーキを食べたお客さんが喜んでくれるでしょ。」

その顔を見たり、想像したりするのが大好きなの。だからケーキ屋さんになりたかったの。

両親やピアノの先生は音大に行けってともうるさかったけど、私は絶対にケーキ屋さんになりたかった。だから音大は受けずに小妻女子大の栄養学科に入ってケーキ作りの勉強をしているの。

今のバイトも将来、自分のお店を持った時の勉強のつもりでやっているんです」

「すごいですね。そこまで考えているなんて」と陽太は感心したように言った。

「あら、陽太さんは違うの？いい大学入っているのに」と由美子は言った。

「いや、僕は単に勉強ができたから入っただけです。別に将来何したいとかじゃないです。」

うちの兄は高校を中退してまで自分の好きな道に進んで今やっと陽の目を見ようとしています。

でも、僕にはまだ何もないんです」

由美子は、子供をいとおしむような目で青年を見つめていった。

「それじゃ、まだ見つかってないだけですよ。絶対に見つかります」

言い聞かすようにもう一度言った。

「絶対に見つかります」

「……見つかりますから」

## 第11話

「じゃ、愛ちゃん。そろそろいい時間だし今日は解散かな」

「なに言っているのさ陽太君。最後の締めが残ってるんだよ」

「締めつてなあに、愛ちゃん」

「……ロクなことを言わないような気がする」

少女は一同の前に立って宣言した

「最後の締めは……タコ焼きです」

「「タコ焼き??」」

皆の疑問を気にかける様子もなく、少女は2駅ほど離れた公園まで一同を案内した。

公園の中に入っていくと土手の下で屋台を出しているタコ焼き屋へと向かった。

「愛ちゃん、タコ焼きだったら、さっきの街にもあったのに」

「そんなに美味しいタコ焼き屋さんなの？愛ちゃん」

「さあ、どうでしょう？ボクも食べたことがないんで」

「……じゃあ、どうしてこんなところまで引っ張ってきたんだ、お前は」

「うるさいなあ康太は、いろいろ理由があるんだよ」

一同は、2舟のタコ焼きを買ってみんなで分けて食べた。

「これは……」

「ふつうのタコ焼きだわね」

「……どちらかというとマズ目のタコ焼きのような」

「愛ちゃん、このタコ焼きに何の意味があるの？」

「え、タコ焼きはタコ焼きですよ？」

「……では、お前は何のためにここまで連れてきたのだ」

「本命はね……」少女は一同の前に立つと、背後の土手を昇る階段を指して言った。

「じゃーん、これだよ」

「「??」」

相変わらず意味不明の少女の説明に一同は首を捻った。

「……とりあえず、説明しろ」

「え？康太。この階段が見えないの」

「……階段は見える。お前が何を言いたいのかがさっぱり見えな  
い」

「本当にもの分かり悪いなあ康太は」

「……俺だけじゃなくて誰も理解できてないではないか」

「では皆さん、ボクの後についてきて下さい」と言っ、少女は階段を  
登り始めた。

3人は黙って後をついていった。

階段を上り詰めるとそこはちよつとした広場になっており、街全体  
が夕焼けに染まっているのが見えた。

少女は広場の端の手すりの前まで進むと、こちらを振り返り両手を  
広げて得意げに言った。

「どうですかこの風景。とても綺麗でしょ」

「わあ、本当ね。街が赤く染まっとても綺麗だわ」

「こんな場所もあつたんだな。夜景も綺麗そうだ」

「……タコ焼きに何の意味もないではないか」

「康太、さつきからうるさい。本当に細かいんだから」

「それだけじゃないんです」少女は更に得意げに付け加えた。

「ここで告白したカップルはずつと幸せになれるという噂があつたり  
なかつたり」

「……どっちなのだ？」

「いや、友達に初めてここに連れてきてもらった時に「ここで告白され  
たら、ずつと幸せになれるそうだなあ」って思ったのね。

でも、その後そんな話も聞かないから「ないのかなあ」って」

「……あつたりなかつたりではなくて、お前が勝手に思い込んで  
いるだけだ」

「ええ、でもそんな雰囲気のところでしょ」

「ふふ、愛ちゃんのいうとおりね。私もそう思うわ」女性がほほ笑み  
ながら言った。

「由美ちゃんもそう思うでしょう？」

「そうね、こんな場所で告白されたら一生の思い出に残るわよね」

その言葉を聞いているのかいないのか青年はじつと夕焼けの街を見つめていた。

「じゃボクたちは、そろそろ行くね」少女が言った。

「えっ？」と二人が叫んだ。

「帰るのなら一緒に帰りましょう、愛ちゃん」

「そうだよ。僕たちだけ残ったってやることないし」

「ダメだよ。二人はこれからデートの締めをしなくちゃ」

「締め？」

「そう、映画みたり、食事したりの手伝いはいくらでもできるよ。」

でも最後のハードルは、由美ちゃんと陽太君自身で越えるしかないの。

二人とも今まで異性とお付き合いしたことがないからとても高いハードルに見えるのはわかるよ。

ボクと康太だってそうだったもん。でもボクたちは越えたよ。

一人じゃ無理だったかもしれないけど康太と二人でちゃんと越えたもん。

だから由美ちゃんと陽太君も大丈夫だよ。これ以上ボクが手伝えることはないの。

あとは二人の問題だから」

少女はそういうと由美子の側に行き「頑張ってあげて」と耳うちした。

ついで陽太の側に行き「どうせいつかは出さなきゃいけない勇敢なんだよ」と耳うちした。

そうして「じゃ頑張ってるね」というと「康太、行こう」と言って石段を降りて行った。

## 最終話

「本当、台風みたいな子ね」由美子はクスクス笑ってそう言った。

「すいません、本当に騒がしい奴で」

「いえ、私愛ちゃん大好きよ」

「そう言っただけだと助かります」

長い間二人並んで街並みを眺めていたが、陽太は心の中で激しく葛藤していた。

「(言え・・・駄目だ・・・今、言わないでいつ言うんだ・・・無理だ)」

突然由美子がクスクスと笑って言った。

「でも愛ちゃんも陽太さんも真面目そうな顔して、嘘つきなんですね」

青年は激しく動揺した。

「え、僕は嘘など・・・」

「ふふふ、ほらまた嘘ついた」

「そつそれはどういう意味ですか？」

「だって愛ちゃんは、陽太さんの妹さんじゃないでしょ」

「え、それは・・・」

「康太君が弟さんで、愛ちゃんはその彼女よね」

「どうしてわかったんですか？」

「どうしても何も陽太さんと康太君ってそっくりじゃない。愛ちゃんが自分は妹だって言い出した時にはビックリしたわ、ふふふ」

「すいません騙すつもりはなかったんですが・・・」

「ううん、何か面白そうだから私も黙って聞いてたんだけど」

「最初から全部知ってたんですか」

「愛ちゃんなりの考えがあったんでしょうけど、でももう嘘はつかないでくださいね」

「はっはい、二度と絶対につきません」

「ふふふ、ありがとう」

由美子が意図したことだったのだろうか、その会話のお蔭で少しリラククスできた。

陽太は由美子に向き直って言った。

「あつあの、由美子さん」

「はい、なんででしょうか？」

「ぼつ、僕はあなたにお話ししたいことがあります。聞いていただけないでしょうか？」

「はい、喜んで伺います」

「ぼつ、僕は……」ここで陽太の言葉が詰まった。次の言葉が出てこない。頭の中が真っ白になった。

「僕は……僕は」主観的にかなり長い時間が経ったように思えた。

「陽太さん」由美子の包み込むような優しい声が聞こえた。

「お祈りするように手を前で組んでいただけませんか？」

「??」由美子の意図が分からないまま言われるとおりに掌をお祈りするように前で組んだ。

「わっ、私これから、今までの人生の中で一番の勇気を出しますね」

そう言うとき青年の掌を外側から包み込むと

「……頑張って」と震える声で言った。

陽太の手を包み込んだ掌は少し汗ばみわずかに震えていた。それは彼女が人生一番の勇気を出しているということが嘘ではないことを示していた。

「(ちくしよう、ちくしよう、ちくしよう……女の子がここまでしてくれているのに、俺はなにもできない弱虫だ)」

また沈黙の時間が流れた。

女性がおずおずと言った。

「あの……陽太さん。わっ私、もつと勇気出さなければいけませんか？」

声は半分泣き声になっていた。

青年の中の何かが壊れた。

「(だめだ……彼女はこんなに勇気があるのに、俺ときたら……俺じゃ彼女にふさわしくない)」

「あの……」そう告げようとした時だった。青年の携帯から「天国と地獄」のメロディ鳴り響いた。

さつき別れた少女からのメールの着信音だ。こんな時になんだろ

う？緊急でなにかあったんだらうか？

「あの、ちよつとすいません。愛ちゃんからみたいで」そういうと手を放してメールを開いた。

メールには一行だけ

「諦めたらそこで試合終了だよ From エンジェル」

と書かれていた。

「(試合終了、試合終了……諦めたらそこで試合終了)」

試合終了？冗談じゃない、まだ試合は始まってもないじゃないか。心の中に力が湧いてくるのを感じた。

青年は女性の方に向き直ると言った。

「由美子さん。さっきの僕みたいにお祈りの手をしてくれますか？」

女性がおずおずと手を組むと、その外側から自分の手で包み込んだ。

「由美子さんがこれ以上勇気を出す必要はありません。これからは必要ならば僕が出します。」

聞いて下さい。僕はずっとあなたのことが……」

30分後、二人は手をつないで階段を降りてきた。

「暗いから足元に気をつけて、しっかり手を握ってください」

「はい、ありがとうございます」

「あ、そうだ忘れてた。ちよつとメールを打たせて下さい」

そういうと、青年は手早くメールを打って送信した。

「どなたにですかって聞いちゃ悪いかしら？」

「可愛い妹にです」

「あら、もう嘘はつかないって約束してくれたんじゃないかと思ったら、ふふふ」

「嘘じゃないですよ。将来の義妹ですから」

そのころ康太の部屋では、少女が携帯を睨んで悩んでいた。

「……何を唸っている？」

「陽太君からの返事なんだけど、これってウマく行ったのかな駄目だったのかな？」

「……何て書いてあるのだ？」



「愛ちゃん、そういう時はエンジェルじゃなくてキューピッドっていいんだよ」って」

「……何の暗号だ？それは」

「いや、よくわかんない」

「……まあ、そろそろ帰ってくるからゆっくり慰めてやればいい」  
「既にフラれる前提なんだね」

「あ、そういえば康太、この家って体重計ってあったっけ？」

「……風呂場の脱衣所にあるが、どうかしたか？」

「このところ陽太君の恋愛騒動で部活サボっちゃってるから、体重測定してないんだよね。」

家の体重計が壊れているから、ちよつと体重計らせてもらおうかなって」

「……勝手に行って計ってこい」

「盗撮しないでね」

「……そんなマニアはいない」

少女がトントントンと階段を降りてしばらくすると、「キヤアアアアア」という叫び声が脱衣所から聞こえてきた。

慌てて駆け付けると少女が目につばいの涙を浮かべていた。

「……どうした愛子、何があった。大丈夫か？」

「どうしよう、康太。ボク、ボク……」と言って少年に抱きついた。

「……ちよつと待て、愛子。落ち着け。一体何があったんだ」

「ボク、ボク。体重が5kgも増えちゃってる」

「……まあ、このところ部活サボってケーキ喰いまくってたからな。しかし、その増えた肉はどこに付いてるんだ？」

「何かひっかかる言い方だけど我慢してあげる。もうケーキ食べない。明日から10km泳ぐ」

その時、世界一幸せな男が帰ってきた。

「ただいま、愛ちゃんのメールのお蔭で上手くいったよ。お礼にケーキ20個買ってきたから好きなだけ食べて〜」

この日から2週間、陽太は愛子に口をきいてもらえなかった。

## 7. ライブとロシアと愛のボルシチ 第1話

召喚システムは世界中で研究されている。つまり文月学園のような実験校が世界中にあるということだ。

単独で研究しているは効率が悪いということもあって、ほとんどの学園が姉妹校として交換留学生だの文化・スポーツ交流だのを行っている。

今日はそのスポーツ交流の日。愛子は水泳の代表として出場し、当然ながら決勝まで残った。

決勝の相手はタイム的にもおそらく右隣りのコースのロシア代表アンナ・カリーニンになるだろう。

視線を向けてみると175cmのスラツとした体形とGカップはあると思われる大きなバスト。

小さな頭に妖精のような顔立ちの美人だ。ほとんど無表情だが、それも神秘的な美しさを際立たせている。

「ふわー、本当にこんなお人形みたいな娘がいるんだね」と思わず呟いてしまった。

観客席に目を向けてみた。Aクラスのみんなが口々に自分を応援してくれているのが見えた。

普段は物静かな翔子まで立ち上がって手を振っている、あいかわらず無表情なのが気になるけど。

「康太は応援してくれているかな？」とFクラスに目を移してみると、予想通りというか少年の姿は見あたらなかった。

会場のどこかに身を潜めて盗撮をしているに違いない。後でカメラを取り上げて自分以外の女の子の写真を削除しなくては。

「それにしても……」Fクラスの男生徒のほとんどは、アンナを応援している。なんて自分の欲望に忠実な連中なんだろう。

「でも、美波は随分一生懸命にボクを応援してくれてるみたいだけども？」最前列で「打倒G」の鉢巻を締め、

日の丸を振りながら、気がふれたように叫んでいる。

「・・・ボクの応援というより、ピンポイントでアンナちゃんに恨みがあるようだけど、何があったんだろう?」

それが何かはわからないが何やら鬼気迫るものを感じる。

「On your marks」の声がかかる。選手たちが飛び込み台の上にあがる。

「Get set」上体をかがめる。いつもこの瞬間が一番緊張する。集中力が高まり周囲の音が聞こえなくなってくる。

「Go」ピストルの音が響き、選手たちが一斉に水に飛び込んだ。

放課後、人気のない教室で少年と少女は向き合って座っていた。

少女は明らかに不機嫌な様子だった。

「それで?」指で机をトントンと叩きながら少年に言った。

「・・・それでとは?」少年は小さくなって答えた。

「盗撮したのはこれで全部かって聞いているの」

「・・・はい、そうです」

「まったく自分の彼女が頑張って優勝したっていうのに、こんなことばかり」

「・・・おめでとうございます」

「えっ?ああ、ありがとう。これを機に康太も少しボクを見直すといいよ・・・ってそうじゃなくて」少女は机をドンと叩いた。

「盗撮はしようがないとして」

「・・・そこはいいのか?」

「200枚以上も盗撮しておきながらボクが5枚しか写ってないってのはどういうことなのさ」

「・・・問題はそこなのか」

「それだけならまだしも、アンナちゃんの写真は100枚以上あるし、他の国の子の写真だって10枚以上あるし、

ボクの写真が一番少ないなんて彼女としてのプライドはズタズタだよ」

「・・・それはつまり、需要と供給の関係というか・・・」

「ボクの写真は売れないっていうの?」

「……いや、そうじゃなくて彼女の写真は売りたいくないというか」  
その言葉を聞くと少女の顔はみるみるうちに真っ赤になった。

「……そっ、そっか。そうだよ。大好きで大切な彼女の写真だもん。  
いくらお金を積まれても売りたいくないよね」

「……いや、誰もそこまでは言っていないが」  
「わかった。じゃ帰ろう」

そう言って機嫌良さげに立ちあがると、二人は玄関へと向かった。  
靴を履きかえてると、突然少女が言った。

「あれっ?」

「……どうした?」

「よく考えたらさっきの説明は、アンナちゃんの写真が多いこと、説明にはなってるけど、

ボクの写真が少ないことの説明にはなっていないじゃん。

ボクの写真が何十枚あっても康太が持っていればいいだけでしょ」

「……気づかれたか」

バトルの第二弾が始まった。

## 第2話

口論（愛子9・康太1）をしながら歩いてみると、トランクを持ってホテルの階段に座って途方にくれた様子の外人の少女が見えた。

「あの外人さん、何か困ってるみたいだね」

「……それはそうだが、あれはアンナ・カリーニンではないか？」  
「えっ？」

よく見ると座っているのが身長はわからなかったが、

スラリと伸びた手足と何より特徴的な銀髪は彼女のものだった。

「どうしたんだろう。ちよつと声かけてみようよ」

「……それはいいがお前ロシア語喋れるのか？」

「……ロシア人だって英語ぐらい習うんじゃないかな？」

「……ほほう、お前が英語話せるとは初耳だ」

「美波に電話してきてもらおうか？」

「……島田が喋れるのはドイツ語だ」

「でも日本より近いからまだ通じるんじゃないかな？」

「……近けりや通じるってものではない」

「諦めたらそこで試合は終了だよ」

「……何でもかんでもそれで上手くいくと思うなよ」

「とにかく行くよ」

少女はそう宣言し、外人の少女へと近づいて行った。

「アーっ、ミス カリーニン、アイム アイコ・クドー。ハウアーユー」

「……自己紹介してどうする」

「うるさいなあ、挨拶は大事なの」

「……Нуждающийся. Помогите」

「康太……何だ」

「……何だ」

「手を出してみて……」

「……???こうか？」

少女は自分の掌を少年の掌に打ち付けると

「タッチ。愛しの彼女にいいところを見せるチャンスだよ」と言っ

少年の背中に隠れた。

「……おっお前という女は……」

その時、銀髪の美少女が恐る恐る口をひらいた。

「あのく、よかつたらワタシ日本語喋りまシヨウカ？」

「あれ？康太、ボク急にロシア語が分かるようになったみたい」

「……うむ、奇遇だな俺もだ。ただしアンナさんが日本語を話してくれたからだが」

「えーアンナちゃん、日本語喋れるの？」

「えーつと、あなたは優勝した6コースのミス・クドーでしたネ。あと少しで勝てたのに悔しいデス」

「愛子でいいよ。それよりこんなところでなにしてたの？」

ロシア少女が語るところによれば、財布もパスポートもカードも入ったバッグを落としてしまったのだとか。

警察には届けたものの発見には早くても数日かかるだろうと言われ、

とりあえず服に入っていた小銭をかき集めて二千円近く。

ホテル代も払えないのでチェックアウトして公園で野宿でもしようかと考えていたという。

「アンナちゃんって完璧超人に見えるのに結構ドジなんだね」

「……まあ、超人でも財布くらい落とすだろう」

その時、「きゆるるる」と小さな音がしてアンナの顔が無表情なまま真っ赤になった。

「今の音、もしかしてアンナちゃんのお腹の……」

「ハイ、すみません。お昼からなにも食べてないノデ」

「……ほつとくわけにもいかな。ファミレスくらいなら奢ってやるから付いてこい」

「ジャ、アーンナ。レッツ タベール ゴハーンね」

「……落ち着け、アンナは日本語を喋れるし、お前のは99%が日本語だ。普通に喋れ」

3人は近くのファミレスへと向かった。

少年と少女はドリンクバーをロシア少女はハンバーグセットを

注文した。

「・・・どうもすいません。このご恩はお二人がロシアに来て、のたれ死にしそうになった時に必ずかえしマス」

「随分範囲の狭い恩返しだね」

「・・・一生、ロシアに行くことはないと思うから気にするな」

やがて注文のハンバーグセットがジュウジュウと音を立ててアンナの前に置かれた。

ロシアン少女は「ごくり」と唾をのむと、「アノ？これ食べていいでスカ」と聞いた。

「ああ、お腹空いてるよね。遠慮なくどうぞ」と言った瞬間ハンバーグの1/3が口の中に消えた。

「・・・今、どうやったの？」

「・・・バツバカな。俺に見切れなかっただど？」

少女は妖精のような風貌に似合わず早食いで、常人では皿の上になイフとフォークの残像しか見えない。

あつと言う間に食事が終わった。

「ありがとうございます。助かりまシタ」

「アンナちゃん、飲み物もあるよ。何がいい？」

「それでは、コーヒーをお願いしマス」

「はい、どうぞ。それにしてもアンナちゃん日本語上手いね。学校で習っているの？」

「いえ、独学デス。ワタシ日本のマンガやアニメが大好きで、ちゃんと日本語でみたくて」

「ふえ〜執念だね」

このスーパーパーモデル級の美少女が漫画やアニメに夢中になっているのが想像できない。

「デモ一番の理由は・・・」という少女は頬を赤く染めてはにかんだ。

「・・・初めて表情が変わったな」

「なんだろう、好きな男の子がアニメ好きで話題を合わすためとかかな？」

「ビジュアル系の好きなバンドがいるんデス。それで歌詞を理解したくて日本語がんばりまシタ」

少年は嫌な予感がした。いやいやビジュアル系といってもたたくさんある。そうそう偶然は続かないはずだ。

「へえ、ボクも好きなインディーズで好きなバンドがいるよ」

「本当デスか？偶然デス」

神様、これ以上厄介のタネを我が家に持ち込まないでくださいと少年は祈った。

「うん。タコ&ライスってグループなんだけど、ロシアじゃ知らないかな？」

「キヤアー、それデス私の好きなバンド。ボーカルのShuがとってもとっても好きデス」

少年は、無神論者として一生を生きていくことを固く誓った。



### 第3話

「アンナちゃんは、そんなにShuが好きなんだ？」

「ハイ、初めて見た時に雷に撃たれたようになって、ああワタシはこの人と結婚するんだと思いまシタ」

「そっそこまでなの？」

「運命デス」

「でもほらビジュアル系だから化粧とか落とさないとイメージがだいぶ違うんじゃないかなあ？」

少女はShuである少年の兄の姿を想い浮かべて言った。

少女自身未だにShuと兄が結びついていないのだ。

「そんなことはありません。Shuが素顔で道を歩いていても見つけられる自信はありマス」

「すっ凄い自信だね・・・」

「ダー、You Tuboの動画を2000回以上見ましたカラ、いまや骨格だけでわかるようになりまシタ」

「・・・立派な検死官になれる」

「愛のカデス」

「・・・霧島と同じ匂いがするんだが」

「まったくもう、康太は胸にしか興味がないの？」

「・・・一文字もそんなことは言っていないんだが？性格の話だ」

「ところでアンナちゃん、これからどうするの？」

「本当は土曜日まで日本にいてタコ&ライスのライブを観てからロシアに帰るつもりでシタが」

「早めに帰るしかありません。今日はとりあえず雨も降っていないので野宿しようカナと。」

「近くにいい公園ありませんか？」

「ダメだよそんなの。女の子が野宿なんて危ないよ」

「デモ他に方法が・・・」

「大丈夫。ボクに任せて」と少女は薄い胸を叩いて言った。

「・・・何でこうなるのだ？」30分後、3人は土屋家の前に立つ

ていた。

「えっ？だってボクの家は遠いし狭いから。康太の家だったら客間もあるし」

「アンナちゃんが泊まっても問題ないかなあと」

「……」「かなあと」じゃない。なんでお前はいちいち我が家に問題を持ち込みたがるのだ。

家には年頃の兄弟が3人もいるんだぞ。大問題だろうが」

「……」「何が問題なの？」心から不思議そうに少女が聞いた。

「……」「いろいろ問題だろうが」

「なに言ってるかなあ。そこで問題起こせるような連中だったら、今までに彼女の10人や20人できてるって。

あんまりバカな冗談言っていないで、さっさと行くよ」

まったく歯牙にもかけてはいなかった。

「……」「待てというのに、親父やお袋には何て説明するのだ？」

「圭君や裕ちゃんだったら、ボクがお願いすればすぐ聞いてくれるから大丈夫だよ」

「……」

悔しいことに確かに両親は、3兄弟よりもこの少女を遥かに信頼しているのだ。

「……」「ちよつと待て」

「くだいなあ康太は、一体何なのさ」

「……」「兄貴がShuということは、アンナには内緒にしておいてくれ。いろいろ問題が起きそうな気がする」

「(それもそうだね。夢が破れるのも可哀そうだしね。わかったよ)」

二人のやりとりを聞いてたロシアン少女は不安げに言った。

「あの、ご迷惑のようでしたら、やっぱり私は野宿でも……」

「ははは、何を言うのさアンナちゃん。小さい家だけど遠慮せずにごうぞう」

「……」「俺の家だ」

玄関のドアを開けて「ただいま」と言った。廊下にジャージ姿の長男の颯太が立っていた。

「おお、お前ら遅かったな。今、由美子さんも来て・・・ドワア」  
颯太を見ると同時にアンナが大声で「Shu」と叫んで飛びついて  
いた。

## 第4話

「なるほど、大体の話はわかった」颯太は苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「困っているのを見捨てるわけにもいかんだろう……。だが、この娘はいったいなんなんだ？ええい、いいかげんに離れろ」

両手で颯太の顔をつかまえてキスをしようとしているアンナの顔を引きはがし、片足でアンナの体を押しつけていた。

「……何と言えればいいか」

「Shuのファンなんです」

「ニエツト、愛子。私はShuの妻になるノ。運命の定めでここで会えたノヨ」

「いったい、この娘は何をいつているんだ？話がさっぱり見えんのだが」

「ねえ、陽太君」

「なつなにな、由美ちゃん？」

「あの4人は何の話をしているのかしら？Shuってタコ&ライスのShuのこと？」

「……どうやらそうらしいね。ハハハ」

「あの外人の女の子Shuのファンみたいだけど、なんでお兄さんに抱きついてるの？」

「……まあ、よんどころなき事情があるというか、青春のほとばしりというか」

「お前らこの娘に俺がShuだと教えたのか」

「……教えないでおこうと愛子と相談した矢先に兄貴を見たら飛びかかってっつた」

「自分でいうのもなんだが、今の俺をみてよくShuだとわかったな？」

「化粧落としても、顔の骨格見ればわかるそうです」

「日本のコアなファンにだっていねえぞ、そんな奴」

「手だけ見てもわかりマスね」

「どんだけストーカーだ、お前は」

「愛のなせる業デス」

「キレイにまとめんじゃねえ」

「お兄さん「俺がShu」って言ってるけど本当なの？」

「まあ、そうだと言えないこともないような気がすることは否定できない」

「どっちなの？」

「そうです」

「どっどうして教えてくれなかったの？私大ファンなのに」

「兄がShuはバンドの時の別人格で、プライベートでは颯太だと」

「どういう意味？」

「Shuの時は全ての行動はファンがShuに望むものを演じているだけで、本当の自分じゃないと」

「だから颯太でいるときはShuを一切自分や周囲から消すんだと」  
「そうだったの。だからいつも無理してジャージなんか着たり演歌なんか歌ってたのね」

「いや、あれは普通に兄貴が好きただけなんだけど・・・」

「おい、ロシアン娘。頼むからいい加減離れてくれ・・・」

「Shuが私をお嫁さんにしてくれると約束してくれたら離れます」

「出会って1分でそんな約束できるか」

「・・・おい、愛子。アナに何か憑りついてるんじゃないのか？最初とイメージが違いすぎるぞ」

「うーん、恋する女の子の思いがなせる業というか、恋する女の子に不可能はないというか・・・」

「・・・落ち着いている場合か、何とかしろ」

「何とかしろって言われてもなあ。どうしたらいいものやら。代表に電話して聞いてみようか？」

「・・・それだけは止めとけ。事態は確実に悪い方向に進行する」

「(だいたい颯太君もキスの一つや二つやってあげりやいいのに。外国じゃ挨拶がわりなんだし)」

「(・・・確実に2日は意識不明になるぞ)」

「(どんだけ女の子に弱いのか。それでよくビジュアル系バンドなんかやる気になったよね)」

「(……いや、最初の動機は「バンドやって女の子にモテるぜ」だったのだが)」

「(不純だけど、まあありがちな理由だよ)」

「(……いざ人気が出ると、メンバー全員思ってた以上に女の子に弱いことがわかり)」

「(それは、最初に気がついておこうよ)」

「(……今は「硬派なビジュアル系を目指すぜ」とホザいている)」

「(音楽性はどうでもいいんだね。でも「硬派なビジュアル系」って難しいコンセプトだよ)」

兄は再び唇を寄せてきた少女の顔を両手で遠ざけながら、疲れ果てた様子で言った。

「わかった、お前の言うことはよくわかった。だからここはお互い妥協しよう。」

まずはお互いをよく知るために友達から始めよう、つな

「友達……デスか？」

「そうだ。友達から始めて、ご近所さん、顔見知り、同僚、ガールフレンド、恋人、許嫁、婚約者、夫婦と関係を深めて行こうじゃないか」

「なるほど、それが日本のやり方デスか」

「そうだ、ジャパニーズ・トラディショナル・スタイルだ」

「(友達からご近所さん、顔見知り、同僚じゃ、明らかに関係が後退してるよね?)」

「(……全部クリアするのに何年かかるんだ?)」

「(でも「まずは友達から」って25歳の男性が、女子高生に迫られていうセリフじゃないよね?)」

「(……文通・交換日記と言わなかったただ陽太より年上だと誉めてやれ)」

## 第5話

「一体何を騒いでいるのかしら。ご近所様にご迷惑よ。あら？」

母が部屋に入ってきた。見慣れぬ銀髪の外国人少女が息子に迫っているのを見て目を丸くしている。

「あ、裕ちゃん、実はですね……」

「ふむふむ、あらまあ颯太のお嫁さんになるために、わざわざロシアから。それは大変だったわねえ」

「ちよつと待てババア。一番肝心なことスルーしといて、なんでどうでもいいことにフォーカス当てていやがる……グワ」

母が投げたスリッパが、狙いたがわず眉間に命中した。

「あらあら、床が滑っちゃったわ」

「なんで床が滑って手に持ったスリッパが飛んでくる……グエ」

もう一つのスリッパが炸裂した。

「そろそろ掃除しないと転んじやうわねえ」母は涼しい顔で言った。

「(颯太君もなかなか学習しないね……)」

「(……お蔭で一番痛い目にあっているんだが)」

「まあ、それはそれとしてとりあえずアンナちゃんは帰国するまで家に泊まりなさい。

遠慮はいらないわ。お嫁さんになる方ですもの」

「ババア、何を勝手に決めてやがる。少しは息子の意見も聞け」

「あら、サイドボードの花瓶にもほこりが溜まっているわね。滑っちゃいそうだわ……」

「いやだなあ、ちよつと意見を言っただけじゃないですか。お母様」

「颯ちゃん、いいこと教えてあげるわ」母親は兄に近づくと胸ぐらをつかみ上げた。

「あんたたち5馬鹿が、高校中退してバンドするって言った時、私たち「お母様会」が反対しなかったのはなぜだと思う？」

「ねえ、陽太君。5馬鹿って誰のこと」

「ああ、タコ&ライスのメンバーのことです。兄貴を含めてあいつら5人は幼稚園から高校まで同級生の幼馴染でした。」

頭のレベルから女性に弱いところまでそっくりです」

「じゃ「お母様会」ってのは？」

「メンバーの母親達です。5人とも仲が良くて、連絡網作って始終電話しています。」

昔から兄貴たちが悪さすると連絡網で全母親に連絡が行き、全ての家で全員がぶっ飛ばされました。

1回の悪さで5回殴られるんだから、割に合いません。おかげであいつらは品行方正でした。

我が家を含めた全家庭の最高意思決定機関です。親父達といえど逆らえない」

「さっさあ、なぜでしょう？お母様……」

「人一倍スケベなくせに女の子が苦手で声もかけきれないヘタレなアントラたち5人じゃこのまま高校卒業しても事情は変わらない、ならばいつそのことバンドでもやらせて当たれば女の子にモテるようになるんじゃないかと思ったのよ。」

大穴だったけどバンドが人気になって、やっと彼女を連れてくるか孫が見られるかとお母様方はみんな喜んでたというのに、今にいたるも5馬鹿の誰一人として恋人・彼女はおろか茶飲み友達の一人も連れてこないというのは一体どういう見かしら？

いいかげん私たちの忍耐力にも限界というのがあるのよ」

「(伝説のインディーズバンド誕生の裏にはこんな秘話があったんだね)」

「(……ある意味秘話だが、情なさすぎて公開もできん)」

「ということであなたが何と言おうと、私はアンナちゃんの味方です。もし、アンナちゃんを邪険にしたら……ふふふ」

「どっどうなるんでしょうか、お母様」

「まあ、関東には身の置き所はなくなるとっておいてね」そういうとニッコリと微笑んだ。

「お兄さん随分弱気になっちゃったね、陽太君」

「うーん、小さい頃からお母様会の5人にメンバー全員ボテクリ回されてきたから、トラウマになって逆らえないんだろうね」



母は兄から手を離してロシアン少女に言った。

「アンナちゃん、お部屋に案内するから荷物を持ってついてらっしゃい。あ、愛ちゃんも一緒にね」

「ハイ、ありがとうございます」

「えっ？ボクもですか？」

3人が客間に着くと「アンナちゃん、このお部屋を遠慮なく使ってください。あ、そうそう。外国で一人では不安だろうから愛ちゃんも今日は一緒に泊まってあげなさいな」

「え、ボクもですか？」

「そう、康太の家に泊まるのなんかイヤというんじゃないし」と言つて軽くウインクしてみせた。

「いえ、でもボク着替え持つて来てないし」

「あら、そんなの愛ちゃんが初めて家に来た日の翌日には買っておいたわ。どうせ必要になると思つて」

彼氏の家で着替えが必要となる状況というのはどういう状況なんだろうかと少女は悩んだ。

なし崩しに泊まることになってしまったので、家に電話すると裕ちゃんが代わつてというので、

代わつたらしばらく笑つて話したあとで「了承がとれたわ」と言つて電話を返してくれた。

## 第6話

しばらくしたらご飯に呼ばれた。由美ちゃんもいたので結構な人数だったが、圭君は上機嫌だった。

「いやあ、息子たち全員のお嫁さんと一緒に食事ができるなんて幸せだなあ」

「「嫁じゃない!!」」

それを聞いてボクと由美ちゃんは、顔を真っ赤にしてうつむいたけど、

アンナちゃんはまだ日本語が完全じゃないのか「このフライおいしいデス」と唐揚げをパクついていた。

あれだけたくさん食べてるのに、あんなに細いなんて反則だよな。

いや、部分的に集まっているのか?ムムムム……

ボクはアンナちゃんの胸を覗みながら考えてた。

「あつ、あの愛ちゃん。茶碗持ちながら何を唸っているのかしら?」

「……考えていることは、だいたい想像がつく。愛子、無駄な考えは止めて、さっさとメシを食え」

お風呂をもらって部屋に戻ると布団が敷かれていた。

「アンナちゃん、布団しかないの?ごめんなさいね。もし、どうしてもベッドで寝たくなったら……こっちへいらっしやい」

「??」

裕ちゃんは廊下へ出ると奥の部屋の前にボクたちを連れて行き、

「ここが颯太の部屋でベッドもあるわ。夜中に襲っちゃいなさい。愛ちゃんは案内いらないわね」と言った。

裕ちゃんのことだから、きつと本気なんだろうなあ。

裕ちゃんは「じゃ二人とも頑張つてね」と言い残して階段を降りていった。

ボクたちは何を頑張ればいんだらう?

「もう遅いし寝ようか?」

「ハイ」

ボクたちはそれぞれ布団にもぐりこんだ。

「これが布団デスか。漫画ではよく見たケド、寝るのは初めてデス」

「そっか、アンナちゃん漫画好きだったよね。何が好きなの」

「たくさんありますケド、デス・ブックが一番好きデス」

「えー、アンナちゃんもデス・ブック好きなの？ボクも大好きなんだ。夜神曰ってカッコいいよね」

「ワタシはRの方が好きデス。日みたいに子供っぽくないし」

「(ムツ)日のどこが子供っぽいのさ。お菓子ばかり食べてるRの方が、よっぽど子供だね」

「(ムツ)あれは不幸な子供時代の幸せを取り戻そうとする無意識の行動なんデス。

神になろうとする日の方が幼稚デス」

「絶対的な善になろうとするために殺人を犯すというアンビバレンツがいいんじゃない。」

Rみたいに根暗じゃないし」

いつしか僕たちは半身を起して怒鳴りあっていた。

・・・30分後、ボクとアンナちゃんは布団の上に正座させられていた。

「・・・もう一度、確認するぞ」

眉間を揉みながら康太が言った。

「・・・二人ともデス・ブックが好きで、それで夜神日とRのどっちがカッコいいかでケンカになった、とこういう訳だな」

「違うんだよ、康太。アンナちゃんが日を子供っぽいつてバカにしたんだよ」

「愛子がRをバカにしたからデス」

「最初にバカにしたのは・・・痛い」

「・・・痛いデス。父さんにもぶたれたことがないのに」

ボクたち二人はゲンコをもらった。

「・・・夜中に大ゲンカするほどのことか。静かに寝ろ」

そういうと康太は頭を振りながら部屋を出て行った。

「しよがない寝ようか、アンナちゃん」二人は再び布団にもぐりこんだ。

気疲れもあったのだろうか。アンナちゃんはすぐに寝息を立ててしまった。

「アンナちゃん、もう寝た？」返事はなかった。

ロシアン少女の方を向いてみると、豊かな胸が布団を押し上げていた。

「そーいや、大会の時から気になってたんだよね」少女は布団からでると、にじり膝でロシアン少女に近づいていった。

起きないように静かに布団をお腹の辺りまでめくると、胸の側に胡坐をかいて座った。

「うーん、こーやって近くで改めて見ると壮大な眺めだなあ。なに食べればこんなに大きくなるんだろう？」

若さゆえかアンナのバストは仰向けになっても横崩れせず、そのまま前に突き出した形を保っていた。

少女は人差し指でアンナのバストをツンツンとつついてみた。

「うーん、これはなかなか」少女はほとんど親父と化していた。

代表のバストも触らせてもらったことがあるけど、柔らかかった。

それに比べるとアンナのバストは固柔らかい弾力性があった。

「そーだー」というと部屋を出て少年の部屋へと向かった。

ドアを数回ノックし「康太、起きてる？」と声をかけた。

すぐに少年が顔を出し「……何だ？何かあったのか？」と聞いた。

「ちよつとボクたちの部屋に来て」

「……一体どうした」

「いいからいいから」

部屋に入るとアンナの枕元に立って両手を広げた。

「じゃーんー！」

「……」

「あれ、リアクションが薄いね？」

「……薄いも何もなんのことやら意味がわからんのだが？」

「あいかわらずニブいなあ。じゃこれならどう？」

少女はアンナの胸の横に片膝をつき、胸を紹介するように再び両手

を広げて

「じゃくん！」と言った。

「……………アンナが寝てるだけではないのか？」

「違うよ。これだよこれ」

少女は再び人差し指で、ロシアン少女の豊満なバストをツンツンとつついた。

「ほら、スゴイ弾力なんだよ。もう二度とこんなチャンスはないだろうから、

康太にもつつかしてあげようと思っ……………イタツ。何すんのさ」  
「……………何すんのさじゃない。どこの世界に彼氏によその女の胸をつつかそうとする彼女がいるのだ」

「康太、人の頭をポンポン叩きすぎ。それってDVっていうんだよ」  
「……………世間じゃ普通は躰とよんでいる。くだらないこと考えてないでさっさと寝ろ」

少年は憤慨して出て行った。だが少女は布団の上であぐらをかいてニヤニヤしていた。

「アンナちゃんの巨乳に目もくれなかったということは、やっぱり康太はボクくらいの胸が好きということなんだね」

あいかわらずポジティブに前向きに大きな勘違いをする少女であった。

## 第7話

翌朝、「愛ちゃん、愛ちゃん。助けてくれ」という叫び声で叩き起こされた。

「えっ、何？何があつたの？」と周囲を見回すと、アンナの布団がもぬけの殻になっていた。

「まさか本当に夜這いに行つたんじゃないよね」廊下に出ると康太も部屋から出て来た。

二人で颯太君の部屋に行き、ドアをノックして「颯太君、入るよ」と声をかけてからドアを開けた。

そこで見たものは、ベッドの上で直立不動の姿勢になって「助けてくれ」と叫んでいる颯太と

颯太の左腕を豊かなバストが崩れるくらいに強く両腕で抱え込み、左腿を青年の腰に絡めるようにして

スヤスヤと寝息を立てているアンナの姿だった。

「早くこいつを引きはがしてくれ。腕に胸が、胸が」

「うーん、せつかくだからもう少し楽しませてもらったらどうですか？」

「そんなこと言ってる場合じゃないんだ」

「でも、据え膳喰わぬは男の恥って言いますし・・・」

「・・・念のために聞くが、お前はあの諺の意味を知っているのか？」

「ううん。たぶん出されたご飯を全部食べきれないようじゃ男の恥ていう意味じゃないかな？」

「国語の勉強は後にして、とにかくこいつを何とかしてくれ」

「わかりました。アンナちゃん、起きなよ。このベッドはシングルだから2人で寝ると狭くて颯太君に迷惑だよ」

「いや、愛ちゃん。問題はそんなことじゃあないんだ。一緒に寝てるっていうのが問題であってね」

「あ、そうなんですか？アンナちゃん。アンナちゃん、起きて」

何回か声をかけるとアンナが半目を開いた。そして顔を横に向け

て颯太を見つけ

「……………Shu?……………」と呟いて、青年の唇に自分の唇を重ねた。

颯太の動きが完全に止まった。

「あ、颯太君が死んだ……………」

「……………これくらいで死ぬか。気絶しているだけだ」

「それもどうかと思うんだけど。とりあえずアンナちゃんをベッドから降ろそう。アンナちゃん、ベッドから降りて」

「スウスウスウ……………」

「ねえ、寝てるよ。さっきのは寝ぼけていただけだったみたい」

「……………どうするんだ?」

「いつそ二人ともこのまま寝かせておくってのはどうかな?」

「……………お前、面倒くさくなってるだろう?」

それから苦労して二人を引き離れた。

「あらまあ、さっそく実行したのね。アンナちゃん」

「ババア、てめえの入れ知恵か……………落ち着いて下さい、お母様。いくら何でも味噌汁を投げると言うのは危険だと思っんです」

「イエ、夜中にトイレに行ったら本当に寝ぼけて部屋を間違えてしま  
いまシタ」

「なんでピンポイントで俺の部屋に間違えるんだよ。陽太の部屋でも  
康太の部屋でもいいじゃねえか」

「……………俺たちまで巻き込むな」

「ご飯をよそいながら裕ちゃんが言った。

「でもね、アンナちゃん。寝ぼけてキスしたっていうのは、オバさん感  
心しないわ」

「スママセン……………」アンナちゃんは、顔を真っ赤に染めてうつむ  
いてしまった。

「ファーストキスだったの?」

「ハイ……………」アンナちゃんは、更に体を縮こまらせて小さな声で  
言った。

「女の子にとってファーストキスっていうのは、とても大事なものよ。

一生の思い出になるの。愛ちゃんだってそうだったでしょ？」

「はい、ボクの場合・・・いえ、ボクもまだ経験ないからよくわかりません」

「・・・なんでそんなに顔が真っ赤になっているのさ？」

「康太、うるさい。ほら、さつさと朝ご飯たべなよ」

「だから今朝のことはノーカウントということにしてあげる。今度はちゃんとしたファーストキスをするのよ」

「ハイ！」アンナちゃんの表情が明るくなった。

「ということで颯太。ちゃんとアンナちゃんに協力してあげるのよ」

「何をどう協力するんだよ・・・」

「・・・ファーストキスというのは、そういう扱いでいいのか？」

「さあ？でもアンナちゃんが納得しているから、いいんじゃないかな？」

？

授業が終わった。アンナが待っているので2人は寄り道もせずにも真っ直ぐ帰った。

「ねえ、康太。あれアンナちゃんと颯太君じゃないかなあ？」

商店街を仲良く歩いている二人のカップル。何しろアンナの際立ったスタイルと銀髪は目立つので後ろ姿でもすぐにわかるのだ。

二人は途中お店に立ち寄りながら口論したり、結局は颯太が荷物を持ってやるということを知りかえして商店街を進んでいた。

「・・・どうみても新婚カップルだな」

「そういえば、ボク不思議だったんだけど颯太君って女性恐怖症だよね」

「・・・まあ、兄貴に限らず、あのバンドのメンバーは全員そうなんだが」

「だけど、なんでアンナちゃんとはケンカしたり、普通に喋れるの？」

「・・・俺の想像なんだが・・・」

「ふむふむ」

「・・・アンナが美人すぎてリミッターが振り切れて、一周回って普通になっただけではないかと」



「つまり……どういうこと？」

「……ほとんど男と変わらない程度にしか認識していないのではないか？」

「ボクたちの子供召喚獣みたいな感じ？」

「……あれを思い出させるな」

「でも今朝キスされたら失神したよね。あれはなんで？」

「……頭はそう認識しても身体がついてきていなかったのだから。だから、防御反応で失神したのだと思う」

「ずいぶんややこしい女性嫌いなんだね」

「……このままだと鉢合わせになるな。ゲーセンで少し時間をツブそう」

「ふふふ、いいのかな。これでも中学時代はストリートファイター愛子と呼ばれ……」

「……お前にはいくつ通り名があるんだ」

「明日から試験休みだし、たっぷり可愛がつてあげるよ」

「……お前の自信に根拠があつた試しがないんだが」

1時間ほどして家に帰ってきた。どうやら颯太とアンナの二人はまだ帰ってきてないようだ。

「あ、由美ちゃんも来てたんだ」

「毎日じゃ図々しいかなと思つただけど……」

「そんなことないよ。圭君も喜ぶよ」

「……人の親の気持ちまで代弁するな」

「本当は、お兄さんがShuって聞いて興味がいちやつたの」

「うーん、あんまり期待しない方がいいよ。ボクなんて未だに颯太君とShuが結びつかないもの」

そんな話をしていたらアンナと颯太君が帰ってきた。

「どんだけ買い物するつもりだお前は」

「ロシアじゃこれくらいは普通デス」

「人に大荷物持たして言うセリフか」

「Shuは夫の自覚が足りません」

「そんなもんになつたつもりもないのに自覚なんぞ持てるか」

「あらあら仲が良いこと」裕ちゃんが台所から出てきて言った。  
「どこをどう見りや仲よく見えるんだ」  
「それはそうとアンナちゃんのバッグは見つかったの？」  
「ハイ、警察に届いてまシタ。中身も全部入ってまシタ」  
「それは良かったわねえ。じゃ、アンナちゃん、颯太たちのライブを見にいけるわね」  
「ハイ」アンナちゃんが頬を染めて嬉しそうに言った。  
「だから今日はお礼にロシア料理をご馳走しマス」  
「ほう、ロシア料理」  
「……知っているのか、愛子」  
「康太はいつも僕を軽く見てるね。料理が得意なボクとしては、ロシア料理くらい守備範囲だよ」  
「……恐ろしく身の程知らずの言葉が聞こえた気がするが、そこまでいうならロシア料理をいくつかあげてみる」  
「……ふふふ、ボクに惚れ直すといいよ。まず、ボルシチ、ピロシキ、ビーフストロガノフ、そしてマトリョーシカ」  
「……ちゃんとオチをつけるところが実にお前らしい」  
「オチ？何のこと」  
「……いや、わからなければいい。自宅でマトリョーシカを堪能してくれ」  
「ところでアンナちゃん。今日は何をご馳走してくれるの？」  
「ボルシチです、愛子。私のお母さんの得意料理でシタ」

## 第8話

その晩の土屋家は賑わいだった。両親に3兄弟、由美子に愛子にアンナの8人だ。

アンナは台所でボルシチを作っている。

他のメンバーはガヤガヤと楽しそうに談笑していた。ふと少女が言った。

「アンナちゃん大変そうだね。ボク手伝ってきます」

リビングが一瞬にして「シン・・・」となった次の瞬間。

「なっ何を言うんだ愛ちゃん。アンナのお礼の気持ちなんだから、アンナだけで作らせてあげなきゃ」

「そういえば愛ちゃん。新しいゲームを買ったんだ。対戦しようよ」

「・・・食事前に宿題をすまそう。愛子教えてくれ」

「愛ちゃん、オジさん晩酌したいなあ。ビール注いでくれないかなあ」  
「愛ちゃん。そういえば飲み物が切れていたの。悪いんだけど買ってきてくれないかしら」

という怒涛の音が家族中から浴びせられた。

「えーっと、よくわからないけどアンナちゃんの手伝いをしない方がいいってことですかね。」

そうですよね。お礼の気持ちなんだから人の手を借りちや意味ないですものね」

しばらくして陽太が言った「それにしても遅いなあ。勝手が違って戸惑っているのかも」

知らないから、悪いけど由美ちゃんちよつと手伝ってあげてくれる？」

「はい」と言つて由美子が台所に向かった。

「あれっ？」

周囲を見ても誰も反応していない。自分に対する嵐のような反応とは大違いだ？

少女の胸に何か納得できない気持ちが残った。

「できまシタ」アンナが皿を運んできて、それぞれの前に置いた。

由美子が首をひねりながら台所から出てきた。

「由美ちゃん、どうしたの？」

「あ、愛ちゃん。いえ、別になんでもないの」由美子は言葉を濁した。圭ちゃんが「いやあ、これはおいし・そう・だ・：・：・なあ・：・：・：・：・」と言った。

後半は声が小さくて聞こえなかったけど。

「おい、陽太。俺はボルシチなんて食うのは初めてだが、本当にこんなもんなのか？」

アンナちゃんのボルシチは、黒に近いこげ茶色をしていた。

「いや、普通赤っぽいはずなんだが・：・何でこんな色してるんだろ(う?)」

「(・：・：・とてつもなく嫌な予感がするんだが)」

そういうとみんながボクの方を見た。

「なんでみんなボクを見るのかな？」

「(・：・：・まさか愛子の同類か?)」

「(こんな狭い範囲にあんな特殊能力の持ち主が二人も現れるか?)」

「(見た目は悪いが、意外と味はいいかもしれんぞ。可能性は限りなく低い)」

「じゃ、とりあえずいただきますしよう。アンナちゃん、本当にありがとうね」

と母が意を決したように言った。

「」「」「うっ・：・：」「」「」

「どうでショウか」アンナが恐る恐る尋ねた。

「うーん、これまでに食べたことのない味だね・：・」

「なかなか刺激的ね・：・：・」

「やっぱり和食とは違うなあ・：・：・」

「ロシア人がウオツカばかり飲んでる理由がわかったよ・：・：・」

「・：・：・愛子といい友人になれそうだ」

後半は料理の感想ですらなかった。

「ほんと美味しいよこれ、アンナちゃん」とボクは言っパクパク食べた。

「あの、愛ちゃん。あんまり無理しない方が・・・」

「え、裕ちゃん。無理ってなんですか。なんかこれ、どこか懐かしい味するじゃないですか」

アンナはそれぞれの感想を聞いて、ホツとしたようだった。

その時、由美子がおずおずと尋ねた。

「あの、アンナちゃん。このボルシチって一般的なものとちよつと違うように見えるの。」

ロシアのどこかの地方のものかしら?」

「イエ、これは母のレシピデス」

「ああ、お母様から教わったのね」

「イエ、母は私が小さい時に死んで顔も覚えてません」

「じゃあ、これは?」

「父から教わりまシタ。私に取つての母の味デス」

「あら、そうだったの」

「父はスペツナズという学校で教員をしていマス」

「スツ、スペツナズ?・・・」

「・・・学校?」

「(おい、スペツナズってソ連軍の特殊部隊のことだろ?)」

「(・・・確かそうだ。それを学校って無茶な嘘つく親父さんだ。信じる方もどうかと思うが)」

「ある時、アフガニスタンに転勤になって、単身赴任になってしまいまシタ」

「(単身赴任って、そりや当たり前だろうが)」

「なかなか家に帰ってこれないノデ、いつも母とケンカしてたそうデス。でも夕食は母がこのボルシチをいつも出してクレタと。」

父が美味しいと言って食べてると、母が目を丸くして驚いて「本当に美味しいの?」と言って喜んでクレタと」

「そうだったの」

「母が死んでから、いろんなお店でボルシチを食べたけどどこにもなかったの、

父は自分でレシピを研究して同じ味を作るのに成功しまシタ」

「そうなの。何か特別なものが入ってたのかしら？」

「ハイ、ココアパウダーと味噌デス」

「ココアパウダーと味噌??」

「ハイ、それが秘訣デス。母が父に作ったように、私もいつか好きな人に作ってあげたくて一生懸命練習しまシタ」

「……………」

その時、黙々と食べていた颯太が「アンナ、お代わりを頼む」と皿を差し出した。

アンナは嬉しそうに「ハイ、たくさん食べて下さい」と台所へ消えた。

「ねえ、由美ちゃん。ボルシチにココアパウダーと味噌なんて普通入れるの？」

「いえ…恐らくなんですけど、ケンカしたお父さんへの嫌がらせだったんじゃないかと」

「嫌がらせで作ったものを、美味しい美味しいと喜ばれた上に母の思いの味のままでされちまったわけか……」

「でも、お父さんの気持ちわかるなあ。本当に美味しいですよ……どうしてみんなそんな目でボクを見るんですか?」

「アンナちゃんのお母さんの供養だと思ってみないただきましよう」

全員が一斉にスプーンを取った。

遅くなったので帰ろうとして駅まで送ってくれる康太と玄関にむかった時に、颯太君に声をかけられた。

「愛ちゃん、明日からステージ練習なんだけど、よかつたら見にこない?アンナがぜひ見たいっていうんだ」

「ええ、いいんですか?絶対行きます」

「ああ、構わないよ。よかつたら由美ちゃんもくる?」

「本当ですか?感激です」

「うん、じゃ10時にライズハウスZでね。待ってるから」

## 第9話

翌日、ボクは康太と待ち合わせてタコ&ライスが練習しているライブハウスへ向かった。

「陽太君はどうしたの？」

「……由美ちゃんを迎えにいった」

「やっぱり陽太君は、優しいなあ」

「……いい迷惑だ。朝の6時には家を飛び出してった」

「ということは目覚ましは……」

「……当然、5個セットして家族中を叩き起こして、颯太にケリを入れられてた」

「あいかわらずだね」

「……アンナなど火事だと思って、枕を抱えて走り回っていた」  
「ボク、この2日でアンナちゃんのイメージがだいぶ変わっちゃったんだけど」

「……こころしい」

入口には颯太君とアンナ、陽太君と由美ちゃんが待っていた。ボクたちは6人でライブハウスに入っていった。

メンバーは既に舞台上で楽器のセッティングとかをしていたが、颯太君の姿を見つけると、「遅いぞ、颯太」と舞台上から叫んだ。

「ねえ。G u uにA t s u s h iにY o uにG o nがいるよ。ほら見て見て」

「……落ち着け。メンバーだからいるのは当たり前だ」

「何でそんなに落ち着いているのさ。伝説のバンドだよ」

「……俺にとっては単なる昔からの知り合いだ」

颯太の横に寄り添うように立っているアンナの姿に気が付くと「おい、颯太。急いでこっちきてくれ」とG u uが言った。

颯太君が舞台上に上がるとY o uが間髪入れずに足払いで舞台に転がし、その後4人で颯太君を蹴りまくった。

「ようし、これくらいでいいだろう。それじゃあ、何でお前があんな外人の美人を連れているのかの言い訳を聞こうか」

とGonnが息を切らしながら言った。

「ねえ、康太」

「……何だ」

「普通、言い訳って蹴ったりする前に聞くんじゃないのかな？」

「……昔からあいつらに理屈は通用しない。兄貴が女連れなのが気に入らなかつたから、

とりあえず蹴ってストレス発散したそれだけだ」

「FF団みたいだね」

「で、あの女は誰だ？」とAtsushiが聞いた。

その声にアンナが答えた。

「妻デス」

4人の殺気のコもった視線が一斉に颯太に向く。

「てめー、なにをデタラメいってやがるロシアン娘」颯太が慌てて叫んだ。

「デタラメじゃありません。「ファン」と書いて「つま」と読みマス」  
「勝手に日本語の語彙を増やしてるんじゃないか。だいたい「ファン」ってカタカナだろうが、ひらがなのルビふってどうする」

「じゃあ「つま」だけでいいデス」

「いいデスじゃねえ。さりげなく悪い方を残すな。お前は状況を理解しているのか？」

「じゃ、続きを始めようか」とAtsushiが冷静に言った。

「ちよつと待て、ファンを連れてきた程度で殴られてたらあいつらはどうなる」颯太は陽太と康太を指さした。

傍には由美子と愛子が立っている。

「あいつ俺たちを売りやがった」

「……昨日、愛子たちを練習に誘ったのは、こういう理由か」

「そういえば、あいつらも女連れだな」

「俺たちに対する挑戦とみた」

「しばらく見ないうちに、あの2人もエラくなったもんだ」

「陽太くん、康太くん。久しぶりだね。お兄さんたちと積もる話でもしようじゃないか」



「おい、何か呼んでるぞ」

「……昔からあいつらに君付けで呼ばれた時に、ロクな目にあつた例がないんだが」

とはいうものの4人は2人にとつても幼馴染の兄のような存在である。逆らうことはできなかつた。

舞台にあがつた2人の四方をさりげなくメンバーが取り囲み退路を断つ。まさに熟練の動きである。

「久しぶりだね。2人とも」Atsushiが優しい声で言った。

「はあ、ご無沙汰してます。兄さんたち」陽太と康太は昔から4人のことを兄さんと呼んでいた。

「じゃ、これからする尋問、いや質問に正直に答えてもらおうか」

「いやだなあ篤兄さん、僕たちは何も……」

「そんなことあ聞いちゃいねえんだよ。てめえらは俺が聞くことだけに答えてりゃいいんだ」Atsushiの口調が変わった。

「……いつもの篤兄さんに戻った」

「単刀直入に聞こう。お前らが連れている女性は彼女なのか？ハイかイエスで答えろ」

「それどっちも同じ意味じゃ。ハイっていうとどうなるんですか？」

「骨は北海道に埋めてやる。イエスだと沖縄だ。好きな方を選べ」

彼女じゃないと答えそうになった陽太だったが、由美子が不安そうにこつちを見てるのに気が付いた。

（そうだ告白した時、これからは勇氣は俺が出すって誓ったじゃないか）と思いだした。

「ハイ、僕の彼女ですけど、でもタコ&ライスの大ファンなんですよ」

「ひゅ〜、聞いたかBros.。この坊やは、俺たちのファンを奪って彼女にしたんだってよ」

「いや、彼女になった人がたまたま兄さんたちのファンだっただけで、別にファンを奪ったわけじゃ……」

「結果的に同じことなんだよ!!」

「ガキの頃、肝試しにいつてシヨンベンもらしてた陽太もエラくなつたもんだ。俺たちにケンカ売るとはな」

「というか何で人気売れっ子ミュージシャンに女性のことで僻まれないきやなんのですか？」

兄さん達には女性ファンが世界中にたくさんいるでしょうが、よりどりみどり好みの子を彼女にすればいいじゃないですか」

「なあ、陽太。お前は「絵に描いた餅」って言葉を知ってるか？」Guuが陽太の肩を抱いて言った。

「あ、はい。知ってますけど、それがなにか」

「俺たちに何万人女性ファンがいても、女が苦手で手を出せなきゃ人もいないのと一緒なんだよ!!」

「いや、そこは自分たちで解決して下さいよ」

「とりあえず、陽太は有罪だな。次は康太だ。正直に答えろ」

「……いや、あれは学校の同級生で……グワ」

康太の後頭部に客席から愛子が投げた缶コーヒーが命中した。

「なに言ってるのさ、康太は。ハッキリ、キツパリ、正々堂々と「俺の彼女だ」と言い切ってるやんなよ」と愛子が客席で大騒ぎしていた。

「おっおい、大丈夫か康太」

「あの距離から康太の頭に缶コーヒーを当てたのか」

「イチローの伝説の「レーザービーム」なみだ」

「康太が日頃どんな扱いされてるか目にかぶな」

「まあ、大変だろうが頑張れよ康太。いつかいいこともあるさ」

僻みモード全開だったメンバーに同情される少年であった。

## 第10話

「おい、いいかげんに練習するぞ。陽太と康太は舞台から降りろ」

颯太が何事もなかったかのようにメンバーに声をかけた。先ほど蹴られまくったことなど気にもしていないところを見ると、このバンドではあの程度のこととは日常茶飯事なのだろう。

「……………一体何をするんだお前は」

「なにさ。康太がボクのことをちゃんと彼女だつて言わないのが悪いんじゃない」

「……………あの状況でそんなことを言ったら、俺は確実に殺された」

「それくらいなにさ。男だつたら愛に殉じなよ」

「……………こんなアホなことに命かけられるか」

その時いきなり音楽が鳴り響き、颯太の歌声が聞こえてきた。

「あいつらの曲なんて初めて聞くけど結構いい曲だな」

「えっ、陽太君。タコ&ライスの曲聞いたことないの？こんなに売れているのに」

「……………どんなにカッコイイ曲をやっても、ガキの頃からさつきみたいなアホなことをやっているのを見てきた連中の曲だと思うと、バカバカしくなるのだ」

2曲目が始まった。一転してバラード調の曲だ。

「これも結構いい曲だな。なんて曲だ？」

「さつきのは「Rise」で、今やっているのは「For Your Voice Only」です……………だけど」

由美子が首を傾げながら言った。

「ん、どうしたの由美ちゃん。何か気に入らないの？」

「いえ、多分気のせいだと思うんですけど」そういうと、キーボードのAtsushiをジツと見つめた。

それから3曲ほど演奏すると小休憩に入った。

「どうだ陽太と康太。俺たちの演奏は」とGonが得意げに聞いた。

「いやあ、良かったですよ。でもタイトルがみんな英語だったのは

ビックリしましたけど」

「ん？俺たちが高校中退だと思つてバカにしてるのか？」

「高校中退はどうでもいいんですけど、兄さんたち中学時代から英語が苦手で「日本から出なきや英語は必要ない」とか言つて5人で英語の補習からも逃げ回つていたのでしようが」

「そーいやそんなこともあつたな。だがな陽太、時代がやつと俺たちに追いついてきたのだよ」

「どういう意味ですか？」

「世の中にはエキサイト先生という偉い先生がいらつしやつてな。無料でたちまち翻訳してくれるのだ」

「胸張つてイバれることじゃないです。プロなんだから、せめてタイトルくらい自分でつけて下さい」

その時、由美子が声をあげた。

「あの、お邪魔してすいません。ちよつとAtsushiさんにお話があるんですけど、よろしいですか」

「ん、えーつと君は陽太の彼女だったね」

「はい、由美子つていいいます。気になったことがあるので、ちよつといいですか」

「ああ、別にいいけど？」

由美子は舞台上が上がつてAtsushiの側にいくと、左腕を取つて親指で手首を押した。

「イテ、イテテ……」Atsushiは大きな叫び声をあげた。

「由美ちゃん、どうしたの？」颯太が不思議そうに聞いた。

「演奏を聞いててキーボードの左手のベースラインが不安定だったの  
で、もしやと思つたんですけれど」

「どういう意味？」Youが聞いた。

「たぶんこれ腱鞘炎です。しかも今程度の力で押して、あれだけ痛  
いっていうことは結構炎症が進んでいると思います。早く病院に  
行った方がいいと思います」

「でも、2日後にライブだからね」とAtsushiが言った。

「ヘタしたら一生キーボード弾けなくなっちゃいますよ」



「「「「「いただきま〜す」」」」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ど、どうですか？」少女は憧れのバンドのメンバーに自分の手料理を食べてもらえて緊張している様子だった。

「かつ変わった味だね。愛ちゃん、これ何が入っているのかな？」

「えーっと、それはブルーチーズですね。ボク、チーズが好きなんです」

「ブツ、ブルーチーズかぁ・・・・・・・・」

「愛ちゃん、おにぎりの中から仮面ライダーみたいなのが睨んでるんだけどこれは何？」

「ああ、それはイナゴの佃煮です。母が長野出身だからお婆ちゃんが送ってくるんです」

「イナゴ・・・・・・・・」

「（・・・・・・・・具に何が入っているのかこれ以上聞くのが怖いんだが）」  
「アンナちゃん、おにぎりどうかな？」

「おいしくないデス」

「そっかぁ、やっぱり日本人じゃないから口にあわないのかな？」

「（マズいと即答したぞ、おい）」

「（今ほど、外人に生まれたいと思っただことはなかった）」

「（・・・・・・・・しかし、愛子は日本人なら口にあうはずと絶対の自信をもっているんだが、あの自信はどこからくるんだ？）」

## 第11話

静かな昼食がなんとか終わった頃にAtsushiが左手首に包帯を巻いて戻ってきた。

「なんだ篤、その包帯は」颯太が尋ねた。

「ヤバい。思ったより重症だった。由美ちゃんが言った通り腱鞘炎で、一月は絶対に動かすなとき」Atsushiが答えた。

「ライブはどうすんだよ」Guuが言った。

「そう言われてもドクターストップじゃしようがねえ」とAtsushiが答える。

「Kees dur EnneのKenだったら、俺らの曲全部弾けたよな。奴に頼もう」Gonが思い出したように言った。

「奴は今大阪にお好み焼き喰いに行ってる」とAtsushi。

「小麦粉10kg送りつけて呼び戻せ」と颯太が叫んだ。

5人はああでもない、こうでもないと話あっていた。

「しようがねえキーボード無しでやるしかないか……」と颯太が悔しそうに言う。

「そういう訳にもいかんだろう」

「だいたいこのマヌケが腱鞘炎になんかなるから……ちよつと待て、なんで篤の腱鞘炎がわかったんだ？」

「そりゃ、由美ちゃんが俺の手首を押して……」

「いや、だから何で由美ちゃんは手首を押したんだ？」

「演奏中に篤の左手のベースラインが不安定だったからと」

「はつきり言って俺たちでも、そんなの全く気が付かなかったぞ。素人が気づくか普通？」

メンバー全員の視線が由美子に向けられた。

「これはあれだろ」

「そうだな」

颯太が由美子に近づいて猫撫で声で言った。

「あく、由美ちゃん。君はタコ&ライスのファンだと聞いたんだが……」

「はい、もう本当に大ファンです」静かにG o nが由美子の後ろを取る。

「なるほど、それは嬉しいなあ。で、曲はどれくらい知ってるの?」「もちろん全曲そらで歌えるくらいですよ」「G u uが右側の退路を断つ。

「それは凄いなあ。そんな熱心なファンの由美ちゃんに、僕たちから心ばかりのプレゼントをあげたいんだが」

「ええ、みなさんからですか光栄です」「Y o uが左側の逃げ道をさりげなくふさぐ。

「その前に聞きたいんだけど、由美ちゃんってピアノかなんかしてたでしょ」

「ええ、ちよつとだけやってましたけど」素直な由美子は疑うことなく答えた。

「ほほう「ちよつとだけ」か、それは素晴らしい……」颯太の瞳が妖しく光つたのを彼女は知らなかった。

数分後、由美子は呆然とした声で言った。

「……あのくお兄さん、すいません……私なんでこんなところに立っているんでしょうか?」

由美子はキーボードに囲まれて、事体が全く理解できずに立ち尽くしていた。

「あれ、由美ちゃんはピアノだったから、キーボードって楽器知らないのかな?」

「いえ、それは知ってますけど、問題はなぜ私がここに立っているのかという疑問が……」

「これは悪かった、俺の説明不足だった。これが俺たちから由美ちゃんへのささやかなプレゼントだ。

君は晴れてタコ&ライスのバンドメンバー006となった。おめでどう!!さあ、B r o s . 新メンバーに盛大な拍手だ」

「パチパチパチパチ」

「エエエエエエ?」由美子が絶叫した。

「そんなのささやかでもプレゼントでも何でもありません。私できま



せん。だいたい A t s u s h i さんはどうするんですか?」

「ん? 由美ちゃんは、篤がいたらやりにくいと言うのかい。それならあのマヌケはクビにするが」

「颯太君もキツい冗談いうね」

「……いや、やつらは本気だ」

「だって幼馴染で、一緒に高校中退までして頑張ってきた仲間だよ」

「……そんなことやつらには、何の価値もない。そんなものより目先の10円を選ぶ連中だ」

「よくそれで今まで一緒にバンドやれてくれたね……」

「いえ、そんなことは言っていないですけれど」

「まあまあ、とりあえず試しにやってみようじゃないか。由美ちゃんが一番好きな曲は何?」

「……R i s e ですけど」

「よし、じゃやろう。楽譜はそこにあるはずだけど……」

「暗譜で行けると思いますが」

演奏が始まった。由美ちゃんはやっぱりすごい、全く初めてなのに苦もなく合わせている。

「ストップ、ストップ」 颯太君が演奏を止めてメンバーに聞いた。

「どう思う?」

「うーん、上手いとは思うんだが……」

「音は正確だ。だがノレン」

「やっぱりか」

「あの一、颯太さん私何か間違えましたか」

「いや、正確すぎるほど正確だ。まるで楽譜読んでるみたいだ。由美ちゃんはクラシックのピアニストだったんだろ? クラシックじゃその正確さ武器になる。」

だがロックはそれじゃ駄目なんだ。例えばギターの洋介は走りがちになる。逆にベースの剛二は後ノリぎみだ、そこを由美ちゃんのキーボードのパートで折り合いつけて欲しいんだ。

右手のメロディラインは洋介よりやや遅れて、左手のベースラインは剛二をせかす感じで。初めてじゃ難しいと思うけどやってみてく

れないか?」

「わかりました……」

颯太君は自分の位置に戻りながら振り向いて言った。

「それと言い忘れていたが32分の1拍子程度、前ノリだ」

「はい」由美ちゃんの目が真剣になった。

「ふむふむ」

「……念のために聞くが、わかっているのか?」

「えっ? 1から10まで何言ってるんだかわかんないよ。とても日本語だとは思えないくらいに」

「……じゃ、なんで頷いていたのだ」

「感心してたの。颯太君って本当にShuだったんだなあって」

「……それは俺も同じ気持ちなんだが」

「こうやってても仕方ないや。ボクたちは休憩用の飲み物買いに行こうよ」

演奏が再び始まったのを背中で聞きながら、少年と少女は飲み物を買いに外へ出て行った。

## 第12話

買い物から戻ってきてても練習は続いていた。時々、颯太君や他のメンバーから由美ちゃんに指示が飛んでいただけ、

由美ちゃんは「ハイ」と答えただけできちんと一度で対応できているようだ。

「あのお、飲み物買ってきたんですけど休憩しませんか？」と声をかけた。

「うん？ありがとう愛ちゃん。よし休憩しようぜ」と颯太君がみんなに言った。

一人一人に飲み物を渡す。

「いや、由美ちゃん、スゴイね。最初はぎこちなかったけどきつちり適応してきたもんな」

「そりやそうですよ。由美ちゃんは全日本コンクール2位で、ラフマニノフだって弾けるんですよ」

「・・・なんでお前が威張っているのだ？あとラフマニノフと言いたいだけだろうがお前は」

「ラフマニノフ・・・。そりや俺たちの曲なんて幼稚園のお遊戯みたいなもんだな」

「いえ、そんなことないです。バンドにはバンドの難しさがありますから。でもピタツとあった時は、最高ですね」由美ちゃんは楽しそうだった。

「そうそう、それがバンドの良さなんだよ」

「それはそうと颯太。ライブの目玉曲決まったのかよ」Guuが言った。

「うーん、それがこれと言ったのがないんだよな」

「お前の好きな曲でいいじゃねえか」Atsushiが言う。

「本当にいいのか」颯太君が目を輝かせる。

「ダメだダメだ。こいつの好きな曲っていつたら演歌になるに決まってる。ライブがカラオケ大会になっちまう」Youが却下した。

「ネエ、Shu」アンナちゃんが言った。

「んっ何だ？ロシア娘」

「チョットマイクで歌っていいでスカ？」

「構わんが、アニソンか？」

アンナちゃんはマイクスタンドの前に立ち、お祈りするように手を組んでしばらく目を閉じると静かに歌いだした。

「Amazing Grace, how sweet the sound. That saved a wretch like me. . . . .」

「ほう、アメイジング・グレイスカ。なかなか上手いな」

「I once was blind but now am found. Was blind but now I see

☒I was Grace that taught my heart to fear. And Grace, My fears relieved.

How precious did that Grace appear. The hour I first believed.」

アンナちゃんの声はクリスタルボイスとでもいうんだろうか。そのまま天まで伸びて行きそうな透明な歌声だった。

メンバーたちも雑談を止めじつとアンナちゃんを見つめていた。

「おい颯太、これ行けんじゃないか？」 Gonが言った。

「何が行けんだよ？」

「目玉曲だよ、目玉曲」

「アホ、ラストの目玉曲にアンナのソロなんて持ってつたら暴動おきるぞ」

「いや、アンナちゃんだけに歌わせるんじゃねえよ。1番はさっきのようにソロで歌ってもらって、その後はゴスペル調でバック入れて、キーボードはそうだな、ゴスペル調のラグタイムみたいな感じにする。」

ボーカルはメインをアンナちゃんにして、お前が高音部でバックアップする感じだ。これだと間奏にそれぞれのソロも入れられるか

ら一石二鳥だ」

「アホ、アンナは素人だ」

「ワタシ、教会の聖歌隊でずっと歌ってまシタ。モスクワのコーラス大会で優勝したこともありマス」

「よし、とりあえずやってみよう。由美ちゃん今の説明でわかったかな?」

「あ、はい何となく。ラグタイムよりもブルース調の方がいいと思うんですけど」

「ああ、そのへんは任せる。フィーリングで弾いてくれ」

マイクスタンドの前で颯太君がアンナちゃんに注意を与えている。「まあ、遊びだと思ってあまり緊張するな。ソロパートが終わったら高音で俺がバックボーカルに入る、こつちで合わせるから気にするな。」

演奏が始まるとリズムが速くなるが適当にあわせろ。歌い方は変えんでいい。」

「ハイ、ワカリマシタ」

「Amazing Grace, how sweet the sound. . . .」

再び、アンナちゃんの透き通った声が会場に響く。

「. . . . The hour I first believed.」

少し間を置いてGonnの「One, Two. . .」の声と共にステイツクが打ち鳴らされ演奏が始まった。

「Through many (Many many) dangers (dangers), toils and snares (toils) and snares (toils) and snares (toils).」

We have (We we we) already come (already come)

アンナちゃんの声に絡みつくようにして颯太君の声が高音で被せられる。楽器もゴスペルの哀愁のあるがリズムミカルな演奏でドラマティックに盛り上げる。

「よし、最後のフレーズはロシア娘のアカペラソロだ。楽器を止めろ。」

そしてロシア娘の歌が終わったらフィナーレでチャカチャカチャン  
で終了だ」

「.....Than when we've first begun  
.....」

アンナちゃんの歌が終わった。そして楽器が一斉に打ち鳴らされて曲が終了した。

## 第13話

曲が終わりメンバーが口ぐちにアンナちゃんを褒め称えた。

「よし、これで行こう。ロシア娘いいな？」と颯太が言った。

「わかりませタ。内助の功デスネ」

「なぜお前は、時々日本語が通じなくなるんだ？」

「よし、アンナちゃん。これで君は晴れてバンドメンバー008だ」と

Gonが言った。

「008? 007はどうしたんでスカ？」

「007は7年後に生まれてくる」

「7年後? また妄想デスカ？」

「妄想ではない。必然だ、颯太のな」

「お前らの妙な世界観に俺を引き込むな・・・何でお前が赤い顔をしてるんだロシア娘?」

「Shuの必然は、私の必然だから」

「お前らの言ってることは、何一つ理解できんのだが・・・」

「スゴい。本物のバンドみたいだよ」と少女が言った。

「いや、俺たち一応本物のプロなんだけど、今まで何だと思ってたの、愛ちゃん」Atsushiが答える。

「タコ&ライスのパチ物だと・・・」

「それはちよつと酷いんじゃない？」

「だってロクでもない場面しか見てないし・・・」

「あれはコミュニケーションだよ」

「あれじゃ確実にチームワークにヒビが入りますよね・・・」

「大丈夫。ヒビが入っても割れる前に逃げ出すから」

「本当に、どうやって今までバンド続けて来られたんですか？」

「お前ら、ほぼ初対面でよくそこまで息のあったポケッツコミができるな」颯太が呆れたように言う。

「うん、愛ちゃんのツツコミのキレがいいから思い切りポケられる」

「素じゃなくてポケだったんですか」

「そう。こうみえても俺は日々ポケの技術を磨いているのさ。楽器の

練習時間よりも多いくらいだ」

「プロなんだから楽器の練習を最優先しましょうよ。ビジュアル系バンドにボケなんて必要ないでしょう」

「ふふふ、愛ちゃん。俺にとっちゃこんなバンドなんて踏み台だよ」

「へえ、他に夢があるんだ」

「ああ、いつかM-1のタイトルを取るんだ」

「それって夢がグレードダウンしてませんか？」

「うむ、素晴らしいツツコミだ」と呟くと、Atsushiは颯太に向かって叫んだ。

「おい、颯太。今度のMCは俺と愛ちゃんの漫談で行くぞ」

「ボク、絶対にイヤですからね」少女も負けずに叫んだ。

「何だMCじゃ不満なのか愛ちゃん。意外と野心家だな。わかった、じゃオープニングトークを・・・」

「どこでやるかじゃなくて漫談することがイヤなんです」

Atsushiは、ため息をつきながらヤレヤレと言わんばかりに首を振った。

「わかってないな、愛ちゃん。僕の兄心を」

「兄心？」

「そう、由美ちゃんはキーボード、アンナちゃんはボーカルで参加するのに、ヨメーズの中で君だけ参加しなかったら、きつと将来に禍根を残すだろう。だから愛ちゃんにも参加する機会を作ってあげようとしてるのさ」

「どうでもいいけど、そのネーミングセンス何とかありませんか。何ですかヨメーズって」

「ヨメの複数形はヨメーズで間違いないはずだが？」

「文法の話じゃなくて、センスの話をしているんです」

「嫁という点は否定しないんだね」

「否定以前の問題です」

「じゃ何か楽器が弾けるのかい？」

「そっそれは、弾けませんけど」

さっさんイングリ回されて混乱のあまり、Atsushiの意のまま



に答えていく少女であった。

一方、陽太と康太は客席に座ってポテチをつまみながら一部始終のんびりと見学していた。

「思いつきり遊ばれてるな、愛ちゃん」

「……たまにはいい薬だ」

「それにしても篤兄さんのイジリテクニクは相変わらずスゴいな」

「……あの人は昔からネチネチ責めるのが好きだった」

全くのひとごとであった。

「じゃ、やっぱり漫談だね」

「待って、待って。えーつとね……ボク、カスタネットなら弾ける」

「聞いたか、Bros。愛ちゃんはカスタネットが弾けるそうだ」Atsushiが全員に向かって叫んだ。

「「うおおお」」

「待って、待って、ちよつと待って。弾けると言っても小学生レベルなの」

「聞いたかBros。何と愛ちゃんのカスタネットは、小学生レベルもあるそうだ。拍手を送ろう」再びAtsushiが呼びかけた。

「「パチパチパチパチ」」

「なんでこのバンドは余計な時だけチームワークがいいの？」

「よし、これで愛ちゃんはタコ&ライスの2代目カスタネットだ」とAtsushiが宣言した。

「というか思いつきりバカにされてる気がするんだけど」と少女が言った。

「そんなことはないぞ、愛ちゃん。うちの初代カスタネットは、幼稚園以下のレベルだった。それに比べりや小学生レベルってのは、もはやプロも同然だ」とGuuが言った。

「あいつは10分でクビになったな」とYouが言う。

「うちの甥っ子の幼稚園生をスカウトしてこようかと真剣に考えたぜ」とGuuも応えた。

「……誰だったんですか、初代は？」と少女が尋ねるとほぼ同

時に

「「あいつだ」「」とみんなが指差した先には、アンナにボーカル指導をしている颯太がいた。

「颯太は本当に不器用で楽器は何やらしてもダメだったから、ボーカル押し付けてやった」 Atsushi が言った。

「ボーカルって花形じゃないですか。なんで誰もやらなかったんですか?」

「「だって目立って恥ずかしいじゃん」「」 全員が答えた。

「みなさん本当にバンドやってモテる気あったんですか?」 少女が呆れたように言った。

## 第14話

「でもやっぱりカスタネットなんてできません、ボク」

「そうか愛ちゃん、カスタネットはいやか」Atsushiはニヤリと笑って言った。

「ところで言い忘れていたんだが、うちのバンドにはバトルシステムというのがあつてね」

「なんですか？それ」

「颯太がリーダー権限で導入したんだが、ライブやアルバムなどの節目には、ギターならギターの奴に楽器勝負を挑んで勝ったらパートチェンジができるというものだ。」

颯太が自分がボーカルやりたくないから導入したんだが、利用しているのはあのアホだけだ」

「そんなにボーカルがイヤなんだつたらバンド辞めればいいのに」

「だが、モテたいという欲求はそれ以上に強いのだ」

「どうか今まで話を聞いてきて、誰からも音楽の話がでてこないんですけど、このバンド」

「いま、あいつはアンナちゃんの指導にかかりつきりになってるから、そのシステムの存在を忘れてるようだが、一声かければ思い出すだろうなあ。カスタネットならいい勝負になると、喜んで愛ちゃんにバトルを申し込むんじゃないかな？」

「ボクが負けたらどうなるんですか？」

「もちろん愛ちゃんにタコ&ライスの2代目ボーカルとして歌つてもらう。今度のライブだけじゃなく、ツアーやアルバムでもね。愛ちゃんが誰かに勝つて次の奴がボーカルになるまで」

「ぜっつたいムリです」

「大丈夫カスタネット勝負で勝てばいいんだよ、じゃ、颯太に声をかけよう。おーい、そ・・・」

「ちよつと待って、ちよつと待って。カスタネットやりますボク」

「いや、無理する必要はない。ボーカルで頑張るとい道もあるじゃないか」

「ダメです。ボクやります。カスタネットやらせて下さい」少女は半泣きになっていた。

「そうか、うれし泣きまでして、そんなにやりたいのなら考えてやらんでもないが」

「悲しくて泣いているんです」

「おい、颯……」

「嘘です。心の底からやりたいと思っています。ぜひボクにやらせて下さい」

「愛ちゃん、人にものを頼む時はなんていうんだっけ？」

「クツ……お願い……します……ボクにカスタネットをやらせて下さい」

「さすが篤兄さんだな。愛ちゃんを手玉に取っている」

「……というか、あのバカは別にライブに出る義務など全くないということのを完全に忘れてるな」

「そこが篤兄さんのテクニクだろう」

「……ほとんど洗脳だと思うのだが」

「だが、俺たちも仮にもプロだ。さすがに素のカスタネットで舞台上立つわけにもいかん」とGonが何やら取り出した。

「何ですか、それ？」細い板の上部を紐で結んである。

「沖繩の楽器で三板（さんぱ）という。左手の親指、人指指、中指の間に板を通して……」

「と言って、板を閉じたり右手で弾いたりして、リズムカルな音を出してみせた。」

「難しく見えるが慣れりや簡単だよ。練習してくれ」と言って少女に渡した。

「まあ、心配するな。愛ちゃんの出番はヨメーズ勢揃いの最後のアナの歌の時だけだから」

「だから、そのヨメーズってのを何とかして下さい」

少女は舞台のそでで恐る恐る三板を弾いたりして練習していた。

その間にもメンバーはコンサートの曲をやったり、アナの曲をやったりと練習は続いていた。

そして「よし、今日は終わりだ」と颯太君の声がして会場が静かになった。

「よし、帰るべ」

「腹減った」

「おい、愛ちゃん。帰るよ」

「あ、はい。今行きます」

「じゃ、明日は最終練習日だ。Atsushi、Yukiに連絡しとけよ。衣装合わせするから」

口々にそういつて一人ずつ会場を後にしていった。

ボクたちも会場を出た。

「メシでも喰って帰るか？」と颯太君が言った。

「すいません。今日はボク帰ります」とボクは答えた。

「ん？愛ちゃん、何か用事あるの？」

「いえ、この三板を練習しとかないと」

「そうか。真面目だな愛ちゃんは頑張れよ」

ボクは一人だけ、電車に乗って家に帰った。家につくとすぐにお風呂に入って三板の練習をした。簡単そうに見えて結構難しい。その日は遅くまで練習をした。

翌日、遅刻しそうになって走っていったらみんなライブハウスの入り口で待っていてくれた。

「すいません。タベ遅くまで練習していたら寝坊しちゃった」

「……遅い」

「でもちゃんと、お昼のサンドイッチは作って来たんだよ」

「……」

「どうしてみんな黙り込むのさ？」

「まっまあ、お昼のことは後で考えよう。とにかく練習だ」

ボクたちは会場に入っていたら昨日と同じように、みんな既に準備を終わっていた。知らない女の人が最前列の椅子に腰かけていた。

「誰かな？」

「……Yukiさんだな。兄貴たちの仲間だ」

「俺たちの中学時代からの同級生で、今はバンドのスタイリストとメ

イクもやってってくれる」

「えっ？ Yukiさんって、今ファッション雑誌で超売れっ子のスタ  
イリスト兼メイクアップアーティストの？」 由美ちゃんが言った。

「ああ、最近売れているらしいな。何を好き好んで無料で俺たちの仕  
事してんだか？」と颯太君が答えた。

女性が振り向いた。ものすごい美人だ。代表も美人だけど、大人の  
色気のある美人という感じだ。

「颯太、その子たちなの？」

「ああ、採寸して衣装を頼む。いつものように任せる」

「舐めないでよ。これくらい見りやわかるわ。まず、そちらの外人の  
子は身長が175cmでバストはそうね。93—Gってところね。  
こちらの黒髪のお嬢さんは、身長が158cmでバストは86Dかし  
ら。そっちのボーイッシュな子は、身長が162cmでバストは：  
ごめんなさいね、気を使うべきだったわ」

「ねえ、康太。なんでボク謝られたの？」

「……俺に聞くな。どう答えても地獄への道だ」

「もういいのか？」

「ええ、帰って衣装の準備をするわ。明日のライブ前にはちゃんと間  
に合わせるから」

「すごい美人だったね」

「……美人？」

「Yukiさんだよ。ボクあんな美人初めてみたよ」

「……お前Yukiさんは……」

「おーい、練習始めるぞ」と颯太の声がかかった。

## 第15話

「よし、午前中の練習は終わりだ。昼食にしよう」

「ああ、腹減って死にそうだ」

「何食おうかな。かつ丼2杯は行けそうだぜ」

「普通にそれくらい食ってるだろう、お前は」

「あの人、皆さんボクお昼にサンドイッチを作ってきたんですけど」

「……」

「よかったら、皆さんでどうぞ」

「よし、ライブまで時間がないんだ。昼飯抜きで練習するぞ」

「あ、ボクがサンドイッチを……」

「今日しかないんだからな、お前ら」

「……作ってきたんですけど」

「Gon、お前バストラがバラバラだったぞ」

「……お昼に食べませんか？」

「気合を入れていくぞお」

「……」

「……サンドイッチ」

「ほら、愛ちゃんも早くポジションについて」

「えっ、あ、はい。そうだ。」少女は振り向いて客席に向かって叫んだ。

「陽太君に康太。このサンドイッチを……」先ほどまで客席に座っていた二人の姿はどこにもなかった。

……三時間後

「だめだ。目が回ってきた」

「空腹で倒れるか、愛ちゃんのサンドイッチ喰って倒れるか。究極の選択だな」

「バカやろう。俺は昨日イナゴ入りのおにぎり食ったおかげで、ライブ軍団と戦う夢を見たんだぞ」

「倒れてもいいから俺はサンドイッチ喰う」

「ライブ直前で倒れられてたまるか。喰うんならライブ終わってから喰え」

「それじゃ、意味ないだろう。倒れるだけ損だ」

既に少女のサンドイッチは劇物扱いとして、メンバーの共通認識になっていた。

「つーか、颯太の奴いつまで練習させる気だ」

「アンナちゃんといちやつきたいだけじゃねえのか」

「奴のやりそうなことだな」

「殺るか?.....」

空腹のせいかメンバーの発想が危険な方向へ走り出している。

視線を感じた颯太が言った。

「お前ら、人でも殺しそうな目をしてるぞ」

「ほう、良いカンしてるじゃないか。身体で味わってみるか?」

「よくわからんがこれでリハは終わろう。明日は3時集合な」

本人の気が付かないところで、あやうく命拾いした颯太であった。

「終わったあ」少女は床に崩れるように腰を落とした。

そこに微笑みながらAtsushiが近寄ってきた。

「フー、シャアアアアア」と少女は猫のように威嚇した。

「愛ちゃん、愛ちゃん。自分が人間であることを忘れちゃいけないなあ」

「近寄らないでください。あなたの話はロクなことがないですから」

「それはひどいなあ、愛ちゃんに良いことを教えてあげようと思っていたのに」とt s u s h iが微笑みながら言った。

「なんですか?」さんざんイジリ回されてきた少女は警戒しながら言う。

「ライブの時に愛ちゃんの前にはマイクは置かない」

「それってどういうこと.....?」

「つまりマイクで音を拾わないから、観客には聞こえない。それらしい格好だけつけてくれればいいってこと」

「.....それだったら何とかなるかも、というかそれならわざわざボクが出る意味がないっていうことですよね」

「だからヨメーズとして出してあげたかったって言ってるじゃない」

「いいかげんにそのヨメーズって名称をなんとかしてください」



「音は拾わないけど、それらしく見えるように最低限は練習しといてね」と言って再び微笑んだ。

「はい、頑張ります」

その時、メンバー全員が目配せして怪しい微笑みを浮かべた事に、少女は気が付かなかつた。

そして練習最終日が終わった。

## 第16話

翌日、楽屋に入るなりYukiさんが「来たわね、ヨメーズ。とりあえず衣装に着替えて」と言った。

「あの〜Yukiさん。できればその呼び方は止めてもらえませんか？」とボクが答えた。

「あら、Atsushiがそう言っていたんだけど」

「あの人の言うことは一切無視してください」

「じゃ、何て呼ぼうかしら？ヨメーズがダメならWivesでどう」

「もうヨメーズじゃなければ、なんでもいいです」

「それより衣装を準備してきたわ。アンナちゃんはこれ。由美ちゃんはこちら。愛ちゃんはこれね。着替えた順にメイクするから急いでね」と言った。

アンナちゃんは黒のゴスロリ。由美ちゃんも黒のフレンチメイド。ボクはなぜか白のメイド服に白のズボンだった。

「うん、みんな似合うわね。じゃ由美ちゃんが一番出番が近いから、先にメイクしちやいましょう」

由美ちゃん、ボクの順にメイクが終わった。プロのメイクって凄い。由美ちゃんもボクも素顔とまったく違う。自分の顔じゃないみたいだ。

「ねえ、アンナちゃん。仮の話だけど素顔で舞台に出たとして困ることあるかしら？」

「どういう意味デスカ？」

「由美ちゃんや愛ちゃんは、日本で生活しているからバンドのメンバーってバレると困るからバレないように濃い目のメイクにしたのね。でもアンナちゃんはロシア帰っちゃやし、顔バレしても問題ないかなって思ってた。アンナちゃんって綺麗だから天使のイメージにしたいの。それだとあまり濃いメイクは合わないと思って」

「お任せします」

「わかった。腕によりをかけてやってあげる。いい素材を扱うのは職人冥利につきるわ」

「よし、これでOKね」 Yukiさんが満足げに言った。

「わあ、スゴい」ボクと由美ちゃんは歓声をあげた。もともと美人なのにメイクのお蔭で本物の天使か女神様みたいになっている。

「アンナちゃん、ロシア帰ったらモデルになりなさい。絶対にスーパーモデルになれるから」

「私はShuのお嫁さんでいいです」アンナちゃんが頬を赤らめながら言った。

「はあ？Shuって颯太のこと？アンナちゃん、あのバカに何か弱みを握られているなら相談にのるわよ」Yukiさんが真剣な声で言った。

「颯太君もすごい言われようだね」

「だって、こんな美人があのお嫁になりたいなんてありえないでしょ。ヘタすりゃ国際問題よ」Yukiさんは確信を持って断言した。

その時、Atsushiが「由美ちゃん、そろそろ本番だから舞台に頼む。愛ちゃんたちは、控室で待機ね」と伝えた。

「あつ、Atsushiさん」と由美ちゃんがAtsushiを呼び止めた。

「ん、なに？」

「アンナちゃんの歌の時のキーボードの音なんですけど、 Hammond Bの音にできませんか？」

「 Hammond B だあ、シブいね」

「ゴスペルならそっちの方がいいと思うんです」

「確かにね。じゃ、3番にプリセットしとくから」

「ありがとうございます」

たぶん日本語の会話だったと思う。

由美ちゃんは舞台の方へ行き、ボクとアンナちゃんは控室に入ってしまった。陽太君が一人で手持ちぶさたにしていた。

「あれ？康太はどうしたんですか？」

「康太は兄貴に言われてライブ中の写真をとるために会場に行った」「ボクのメイクどうですか陽太君？」

「ああ、すごくキレイになってビックリしたよ」

「由美ちゃんはもつとキレイですよ」

「あつ、えつ、そうなの。まあ、どうでもいいけど・・・ハハハ」

うーん、実に分かりやすい反応だなあ。この兄弟は平気で大嘘つくせに隠すのが致命的にヘタなんだよね。

「でも、Yukiさんってスゴイですよ。あんな美人なのに、こんな技術まで持つてるなんて」

「・・・えつ、愛ちゃん。誰が美人なんだって?」

「YukiさんですよYukiさん。ボクたちのメイクしてくれた人」

「・・・Yukiさんって男だよ」

「・・・えつ?」

「中学から兄貴たちの仲間だったって言ったじゃない。兄貴たちが高校辞める時も、Yukiさんも一緒に辞めるって大騒ぎしたんだけどYukiさんは学年でトップだったから、みんなで止めたんだ。」

その時兄貴が「バンドが売れるようになるまで5年以上かかる。だからお前は、その間に高校を卒業してその後俺たちをフォローできる仕事についてくれ。その時また一緒にやろう」って言ったんだ。だからYukiさんは、スタイリストとメイクの道に進んだんだ」

「それは良い話だと思うけど、ボツ、ボク、あの人の前で着替えちゃったんですよ。その上ボクより美人だなんて絶対に許せない」

「前半はともかくとして、後半は完全な八つ当たりじゃないのかな」

「乙女の生着替えを見たんですよ」

「そういう表現をするとかなりエロっぽいけど、Yukiさんは仕事で見飽きているからなんとも思わないよ」

「ボクが気にするんです!!」

その時、舞台のほうから音楽が流れてきて、いよいよライブが始まった。

## 第17話

時間が経つにつれボクの鼓動も激しくなっていた。アンナちゃんは無表情だからよく分からないけど多分同じ気持ちだろう。

「これはあれだね。県大会の決勝の時と同じだね」

やがてAtsushiがやってきて「二人とも次が出番だから舞台袖にスタンバイして」と告げた。ボクは手に持っていた三板をギユツと握りしめた。

最後の曲のMCを颯太君がやっている間に、ボクは自分のポジション、ドラムのGon君とキーボードの由美子さんの間に立った。

約束通りにボクの前にマイクはセットされてない。Atsushiのことだから知らんふりしてセットしているのではないかと疑っていたのだけど、あの人もそこまで鬼ではなかったようだ。

「それでは最後の曲は、少し趣向を変えてスペシャルゲスト、ロシアの歌姫アンナ・カリーニンとのタコ&ライスのコラボでお別れを。アンナ、カモン」

そういうとアンナちゃんが舞台の中央へ進み出た。観客からどよめきがあがった。

無理もない、アンナちゃんは絶世の美少女なんだから。

颯太君がセンターの位置をアンナちゃん譲った。バンドが緊張してアンナちゃんが歌いだすのを待っている。

「.....」  
「アンナちゃんが全く動かない。」

「.....」  
「やがて観客席がざわめき始めた。」

その時、颯太君がアンナちゃんに近寄り後ろから軽く抱きしめながら耳元で何かささやいた。

「お前、あがっているのか?」

「ダー、怖いデス」

「俺の嫁になるっていったプロポーズは恐くなかったのか?」

「とても恐かったデスけど、今を逃したらもうチャンスはないと思っ

て必死で頑張りますシタ」

「その恐さに比べりやこの程度の客の前で歌うのなんざ楽勝だろ。歌えるな?」

「分かりませシタ。歌いマス」

「とりあえずしばらくこうしててやる……それと、おまじないだ」  
颯太君は後ろからアンナちゃんの頬に軽くキスをした。  
きつとアンナちゃんは真っ赤になっていたに違いない。

前と同じようにアンナちゃんは、手をお祈りのように組むと目を閉じて頭をたれ、

しばらくしてから頭を上げて静かに歌い始めた。

「Amazing Grace, how sweet the sound.  
That saved a wretch like me.

I once was lost but now am found.  
Was blind but now I see.

⊠ Was Grace that taught my heart to fear.  
And Grace, My fears relieved

How precious did that Grace appear.  
The hour I first believed

「One, Two, Oen two three four」ステイックがカウントを刻む音がした。それを合図に一斉に楽器が鳴りだし、リズムが速くなる。

「Through many dangers, toils and snares.  
We have already come.

⊠ Was Grace that brought us safely thus far.  
And Grace will lead us home.

When we've been here thousand and years.  
Bright shining as t

h e s u n  
W e  
d s p r a i s e . T h a n w h e n w e  
s t b e g u n  
fir

やがて中盤に差し掛かってそれぞれのソロパートになる。

舞台の照明が消え、天井のピンスポットだけがソロ演奏者を照らす。

Gon君がシンバルを刻む音のほかはソロ楽器がそれぞれのメロディを奏でるまさに独壇場だ。

最初はギターのYou君。歪ませた独特の？の音でゴスペルのようなそうじやないような不思議なメロディを奏でた。

次がベースのGuu君。この人もチョッパ奏法という奴なんだろうか、ファンキーな音色でゴスペルを奏でるとい合ってるんだか合っていないんだかわからないソロをやってくれた。

次は由美ちゃんだね。はつきり言って一番安心して聞いていらる。教会での伴奏をリズムカルにした感じ。

最後はドラムのGon君だ。好き勝手に叩いてください。これが終われば、アンナちゃんが歌って終わりだ。

これでボクたちヨメーズ、いやちがうWivesの仕事も終わりだ。はー疲れた。

あれ？颯太君がニヤニヤしながらマイクを持ってボクのところ付近歩いてきた。

ピンスポットがいつの間にかボクだけを照らしている。颯太君のマイクがボクの三板に向けられた。

「ダメ。これじゃソロになっちゃうよ」

「そうだよ、だからテクニックを披露して」

「ヤダ、マイク近づけちゃ音拾っちゃう」

「ソロだから当たり前でしょ。演奏止めちゃだめだよ」颯太君が小声で言った。

Gonさんがシンバルをチャカチャカと小刻みに叩き、由美ちゃんが小さくバツクでメロディを奏でてくれている。

ボクは必死にリズムを途切らさないようにしながら頭の中で At  
sushi に対する懲罰プランを考えていた。どうしてくれようあ  
の男。

やがて舞台のライトが点灯し、またアンナちゃんと颯太君のデュ  
エットが始まった。

「Twas Grace that taught my hear  
t to fear. And Grace, My fears  
relieved.

How precious did that Grace a  
ppear. The hour I first believ  
ed.

Through many dangers, toils an  
d snares. We have already come.

「Twas Grace that brought us a  
fe thus far. And Grace will le  
ad us home」

そして全ての楽器が止まり、エンディングのアンナちゃんのソロ  
だ。クリスタルボイスが疲れた様子もなく澄んだ歌声を響かせる。

「When we've been here ten thous  
and years. Bright shining as t  
he sun.

We've no less days to sing Go  
d's praise. Than when we've fir  
st begun.」

よし、最後のフレーズだ。これでアンナちゃんの声が消えれば楽器  
が一齐になって終了だ。

「Than when we've first begun」  
「begun」

あれ？アンナちゃんの様子が変だ。練習ではこの辺で切れていた  
のに、音を伸ばしながら楽しそうに歌っている。

ボクたちは互いに目配せをしながら戸惑っていた。



颯太君がアンナちゃんに近寄り、アンナちゃんの声に合わせて自分の声を重ねた。

高く低く絡みついてはまた離れる。2人だけで声で遊んでいるみたいだ。

「おい」後ろ側からAtsushi君の音がする。

「締め楽器連打は無しだ。何もしなくていい。その代わり由美ちゃん、あいつらの音をよく聞いていてくれ。最後の音のコードをアルペジオにしてリタルダンドでポロロンと締めてくれ」

「わかりました」

たぶん日本語だったと思うんだよね。

舞台の上のアンナちゃんと颯太君はいつの間にか向き合ったまま歌っていた。

そして声がだんだんと小さくなって行きやがて消えていった……

由美ちゃんのキーボードが名残惜しそうな音色で「ポロロロン」と音階を奏でた。

その時、颯太君が「よくやった」と言っつてアンナちゃんを抱き寄せ。唇を重ねた。

歓声をあげるお客さんはいなかった。まるでそうすることが、本当に自然な感じだったから。

## 第18話

「……とは思わない人もどうやらいたようだ。それも身近に何人も。」

ボクと由美ちゃんはアンナちゃんに、この感動を伝えようとして駆け寄った。

「感動したよ、アンナちゃん」

「……」

「ほんとプロみたいだったわ」

「……」

「??あの、アンナちゃん大丈夫?」

アンナちゃんは魂が抜けたみたいになっていた。

「アツ、アンナちゃん、どうしたのかな?」

「私、Shuとキスした夢を見まシタ」

「いや、そんな器用な夢みないから」

「嬉しすぎて頭のヒューズが飛んじやったみたいね、ふふふ」

「じゃ、あれは現実デスか?」

「すぐに入口と出口を封鎖しろ」

「そう、現実も現実。さつきあつたことだよ」

「トイレから逃げられないように、窓のカギを針金で縛っておけ」

「Shuとファーストキスデスね」

「よし、部屋を一つずつ調べていけ。引き出しの中も調べ忘れるなよ」

「ファ、ファーストキスかはともかくキスはキスだよ」裕ちゃんのムチャ振りを信じてるよ。

「絶対逃がすなよ。目にものみせてやる」

「うるさくいい。乙女たちが愛の感動にひたっている最中に、一体なにを大騒ぎしているのや」

「いや、愛ちゃん。何でもないんだよ。ちよつと裏切者に制裁を加えようと思って」

「何のことだかよくわかんないけど、制裁加えるなら静かにやってよ」

ね」

ちようどそこへYukiさんがやって来た。

「おう、Yuki。颯太見なかったか？」

「あんたたちのことだから大体何を騒いでいるのか見当がつくけど、颯太ならライブ終了と同時に、

ステージ衣装のまま裏口から飛んで逃げたわよ」

「野郎、せっかく人が致命傷だけで勘弁してやろうと思っていたのに」  
陽太君と康太もやってきた。

「こうなってるんじゃないかと思ってたなら、やっぱりこうなってたか」

「……兄貴だって想像できなかったはずはないんだが」

「何のかんのいっても、そういうことなんだろう」

「……そうだな」

二人が何を言ってるのか分からなかったので聞いてみた。

「ねえ、二人とも何の話をしてるの？」

「兄貴の話だよ、愛ちゃん」

「そういうことってどういうこと」

「……まあ、そのうちなるようになるということだ」

由美ちゃんが笑いをこらえていたので尋ねてみた。

「由美ちゃん、意味わかった？」

「ふふふ、何となくだけど」

「どういう意味？」

「うーん、他人がとやかく言うことじゃないと思うの。本人たちにまかせましょう」

何となく仲間外れにされた気分だ。

そこへニコニコ上機嫌でAtsushiがやって来た。

「愛ちやくん、グッドニュースだよ」

「誰にとつてのグッドニュースなんですか？」ハリネズミも土下座して謝るくらいに言葉にトゲを生やして答えた。

「なんだ、機嫌が悪いなあ。大丈夫このニュースを聞けば、そんな愛ちゃんもニコニコや」

「本当にボクは聞きたくない・ん・です。あなたの言うグッドニュー

スがボクに良かったことなど一度もないですから」

Atsushiも負けていなかった。「いやあ、他のヨメーズのメンバーだけに聞かせるとグループ分裂の原因になったりするんだよね」

「ボクたちはヨメーズってグループでもないし、仲良しだからケンカもしません。皆さんと一緒にしないで下さい」

「じゃ、二人に聞かせるから、愛ちゃんはそこはかなく聞いててよ」

「はあ」ボクは不満げに言った。

「さつきレコード会社のプロデューサーと話合って、今回ライブのデキがかなりよかったので、ライブアルバムとして発売することになりました。拍手」

「……………」

「あれ？反応薄いね。じゃこれはどうかな？ジャケットの表紙は、ヨメーズの皆さんです」

その瞬間、ボクはAtsushiに飛びかかり、後ろから首を絞めていた。

「本当にこの男は。何のために今日のライブでこんなに厚いメイクをしたと思っているの？」

知り合いにバレないようにするためなのに、それを全国発売のCDのジャケットにしてどうすんのさ」

「……………待て愛子、落ち着け。本当に喉に入っている」康太がボクを引きはがした。

「離して、康太。一度だけ。一度だけでいいからこの男を締め殺させて」

「……………いや、たぶん二度目はないと思うから、止めとけ」

「康太、愛ちゃんがここまでいうんだから、一度くらいやらせてやったらどうだ？」

「……………兄さん。そんなこと言って本当に逝っちゃったらどうするんですか」

「そんな時やお前、新しいキーボード募集するしかないだろう」

「……………心配してるのは、そこなんですか」

ライブ後の方が大騒ぎだった。

## 最終話

その晩、裕ちゃんはことの外上機嫌だった。

「そうなの舞台の上でファーストキスを」

「ハイ、お母サン」アンナちゃんが頬を染めて答える。 「もう

これでアンナちゃんも愛ちゃんや由美ちゃんのようにうちのお嫁さんになったも同然ね」

「「嫁じゃない！」」

「なになの？あんなたち今時キスもまだなの、陽太、康太」

「まだだ」と陽太君が言う。

「……まだ」と康太も言う。 まあ、知らないからいいんだけどさ。「情けないわねえ。本当なのかしら。ねえ由美ちゃん、陽太とキスはまだなの？」

「えっ？ハツハイ。まだです」突然振られて由美ちゃんが声を裏返らせて答える。

「愛ちゃんは？」

「ハイ、エーッと……まだのような気がします」

「……何で毎回、お前はキスの話になると顔が赤くなるのだ？」

「うるさいよ、康太」

「一番新入りのアンナちゃんが一番キスが早いつてどういうことかしらねえ」裕ちゃんがため息をついた。

「キスキス言うな。あれは単なる演出だ」颯太君が言うと裕ちゃんの目が険しくなった。

「あんたまさか単なる演出つて理由だけで、清純な乙女のファーストキス奪ったつて言うんじゃないわよね」

「そもそもファーストキスじゃねえだろうが」

「どつちにしろファーストキスの相手はあんたじゃない」

「ぐう……」

「男なら自分がしたこと責任くらいとりなさい」

「責任も何もロシア娘は明日帰るんだぞ。どうしろつていうんだ」

「あんたがロシアに行けばいいんじゃない？」裕ちゃんは商店街に

お使いを頼むような気軽さで断言した。

「ムチャ言うな。バンドはどうするんだ」

「4馬鹿も連れてって向こうでバンドすればいいじゃない」

「アホ、あいつらが行くわけないだろう」

「あら、行くわよ。お母様会で決めればいいことですもの」

「てめえ、ババア汚ねえぞ」

「Shu、Shu」アンナちゃんが、颯太君の袖を引っ張った。

「ん？何だ、ロシア娘」

「私の家は広いカラ。5人分くらい部屋は有リマス」

「そういうことを問題にしてんじゃねえんだよ。あとShuじゃなく  
てちゃんと颯太と名前で呼べ」

「どうしてデスか？」

「お前にはShuと呼ばれたくないんだよ」

「ワカリマシタ。その代り、私のこともアンナと名前で呼んでくだサ  
イ」

「アア、わかった。疲れたから俺はもう寝る」

「おやすみなサイ。ソータ」アンナちゃんがテレながら言った。

「ああ、お前も疲れてんだから早く寝ろよ、アンナ」と言っつて颯太君は  
部屋に戻った。

「要するに、アンナちゃんに名前で呼んで欲しいってことだよね。今  
のは」とボクが言った。

「回りくどい子よねえ」裕ちゃんは苦笑いしていた。

「兄貴らしいよ」と陽太君が言った

「・・・だらしない」と康太も言う。

いや、あなた達二人も同じレベルなんだけども思ったが、黙ってお  
くことにした。

翌日の夕方、ボクたちは成田空港にいた。

アンナちゃんと颯太君は、アンナちゃんがどうしても買物をした  
いというので朝から出かけて、

直接ここで待ち合わせる事になっている。

「あ、来た来た。オーイこつちだよ」と大荷物を両手にぶら下げて疲れ果ててる颯太君となぜか顔がツヤツヤしているアンナに声をかけた。「つつ疲れた」荷物を放り出すように床に置いて颯太が言った。

「楽しかったデス」アンナが目を輝かせて言った。

「へえー、そんなに楽しかったんだ。どこに行つたの？」とボクが聞いた。

「中野と池袋と秋葉原だ」

「……だいたい想像がついた」

「まず中野でアンナがいきなりアニメの主人公の人形が飾つてあるショーケースにへばりついて、トランペットを欲しがる黒人少年状態になった。ひつぺがすのに30分もかかったぞ」

「……まあ、ありがちだ」

「次に池袋乙女ロードとかいうところに行つた。店に入ったら何か漫画売ってる店のようだったんが、女しかいなかったんで俺は外で待ってた。ありゃあ、少女漫画の店なのか？」

「……いや、そうとも言えるし違うとも言える」

「だいたい言つてることが意味不明だな。攻めだ受けだBLだとわからん」

「アンナちゃん、趣味が広いですね、ふふふ」と由美ちゃんが言った。

「由美ちゃん、今の意味がわかるの？」と陽太君が尋ねた。

「ふふふ、嗜み程度には」由美ちゃんが謎めいた微笑みで返した。

「トドメが秋葉原だ。アンナが「薄い本」を買いたいというので、書腺タワーに行つて「薄い本」という本売ってますか？」と店員に聞いたら、笑いこらえながら「当店では取り扱っておりません」と言われた」

「……まあ、そういうしかないだろうな」

「しかたがないからあつちこつちで「薄い本」売つてるところしりませんかと尋ねて、やつと売ってる店教えてもらつたよ」

「……聞かれた方も災難だ」

「で、フロアに行くと男しかいないんだわ。そいつらがアンナを見ると気まずそうに出て行ってフロアには俺とアンナだけになつてしまった」



「よくわかんないけど、スゴい営業妨害だね」

「まあ、それやこれやで買いまくった結果がこれだ」と2つの紙袋を顎でしめした。

「アンナちゃん、この荷物大丈夫なの？」

「ハイ、最初からそのつもりで荷物は少なめにしてきましたから」

「しかしあいづらの言ってるのは分からんな。アンナ見て「萌えく」と言ったり、俺見て「リア充爆発しろ」とか言ったり、

「萌え」ってのは女の子のことで、「リア充」ってのは男のことか？」

「……まあ、そんなところだ」

「それよりアンナちゃん、そろそろ登場手続きしないと」と陽太君が言った。

「ハイ、それではみなさんお世話になります。ロシアにも遊びにきてください」とアンナちゃんが言った。

「まあ、元気でな」颯太君がそっけなく言う。

「ソータも元気で」

「（何か意外とアツサリしてるね。泣いて抱きついてキスくらいするかと思ってたのに）」

「（……現実はこのまんどうだろう。お前は恋愛映画の見すぎだ）」そしてアンナちゃんは、スニーカーを引かずしながら、ゲートの向こうへ消えていった。

「なんか数日間とは言え、いなくなると寂しくなりますね」由美ちゃんが言った。

「まあ、「別れと言えば昔より、この人の世の常なるを」と言っただな」誰の言葉だそれ？」

「島崎藤村だ」

「兄貴よくそんなの知ってたな」

「小林明が歌っている。俺のレパトリーだ」

「ねえ、康太」

「……何だ？」

「薄い本って何？」

「……忘れろ」

・・・一か月後

「颯太、陽太、康太」母が呼ぶ声がした。

三人が降りてくると、玄関に段ボール箱が山と積まれていた。

「何だこれは？」

「母さんの荷物。邪魔だから客間に入れておいてちょうだい」

三人はぶつくさ言いながら、荷物を客間に運び入れた。

・・・その1週間後

食事をするからと、由美子と愛子にも召集がかかった。久しぶりに「全員」そろった食卓はとても賑やかだった。

颯太が立ちあがり右手に持った手紙を振りかざしながら言った。

「昨日、アンナから手紙が届いた」わぁーという歓声が起こった。

「颯太君、差し支えなかったら、読んでくれませんか？」

「いいとも愛ちゃん。ぜひ「全員」に聞いて欲しい」

「親愛なるソータ、お元氣デスか？私は無事にモスクワに着きまシタ。

デモ、日本にとても大きな忘れ物。心を置き忘れてきたような気がシマス。

モスクワはそろそろ寒くなってきまシタ。渡り鳥が飛んで行きマス。

彼らは日本で冬を過ごすといいマス。私も渡り鳥になれたらいいノニ。

そうすればすぐにソータの元に飛んで行くノニ。

いつかまたあえマスね。その日を楽しみに待つてマス。

アンナ・カリーニ

ン

おおーとどよめきが起こり、拍手まで起こった。

「アンナちゃん、ロマンチストね」と由美ちゃんが言った。

「乙女心だよね」とボクが言った。

「まあ、正直言つて俺も感動しなかった訳じゃない。時間と金があればロシアに行ってみようかと思ったほどだ」

「行けばいいじゃないの」と裕ちゃんが言った。

「だが一つだけ大きな疑問がある」

「なんですか？」とボクが尋ねた。

「さつきも言ったようにこの手紙が届いたのは「昨日」だ」

「ふむふむ」

「しかるにだ……」颯太君は横を向いて言った。

「なぜ、こいつが俺の横で唐揚げをパクついているんだ？」

颯太君の左の席では、銀髪の美少女が美味しそうに唐揚げをほおばっていた。

「晩ご飯の時間だからじゃないですかね？」ボクが言った。

「いや、愛ちゃん。問題は唐揚げのことじゃないんだ」

「私、交換留学生に選ばれまシタ。来週から愛子たちの同級生デス」

「じゃ、この手紙は何だ」

「それ出したの一月前デス。ロシア郵便事情悪いデス」

「それなら留学のことも知らせんか」

「2週間前にちゃんと手紙だしまシタ」

「届くの来月じゃねえか。郵便の意味わかってんのかロシア人」

「まあまあ、ということだアンナちゃんは家でホームステイすることになったから」と裕ちゃんが言った。

「ちよつと待て、そんな話聞いてねえぞ」

「そうでしょうねえ、言っていないもの」

「何で言わなかったんだ？」

「言ったら、あんた逃亡するでしょ。だから内緒にしておいたの。ビックリした？」

「呆れるほどビックリしたわ……ところでなんでお袋とアンナはツアーかなんだ？」

「だって私たちメル友ですもの」

「さあ、アンナちゃん。乙女のファーストキッスの重みを颯太に叩き込んであげてね。時間は1年もあるんだから」

そういうと裕ちゃんは、心の底から楽しそうに笑った。

「ハイ、私の作ったボルシチをいっぱい食べてもらいマス」アンナちゃ

んがにこやかに言った。  
食卓が静まりかえった  
・  
・  
・  
・  
・

## 8. み籤と仲間と温泉旅行 第1話

「よし、全員揃ったな。念のため点呼を取る、番号」

「いち」

「・・・・・・に」

「さん」

「ヨン」

「ご！」

「うむ、欠員なしだ」

「点呼なんか取らなくとも見りやわかるだろう」

「陽太、そういう油断が事故を招くんだ」

「（ねえ、康太。颯太君って温泉行ったことないの？なんか悪い薬でもやってるみたいに舞い上がっているみたいだけど）」

「（・・・・・・温泉というよりも福引で当たって行けるというのが嬉しいんだろう）」

・・・・・・一週間前

「ソータ、夕ご飯の買い物に行きまショウ」とアンナが言った。

「お前の買い物は尋常な量じゃねえんだよ。買った店から宅急便で宅配してもらえ」

「バカなこと言わないでください。荷物を持つのは夫の努めです」

「そんなもんになった覚えはないと、何百回言えば理解するんだお前は」

「・・・・・・ファーストキッス」

「うつ・・・・・・」

「ワタシの唇をムリヤリ奪いまシタ」

「寝ぼけて俺の唇を奪ったのはお前だ」

「あれは寝ぼけていたからノーカンです」

「そんな都合のいい話があるか」

「嫌がるワタシを押さえつけてムリヤリ乙女の唇を奪いまシタ」

「ちよつと待て、どれだけ話を脚色してやがる」

「そつちの方がドラマティックだとお母サンが・・・」

「あのババア・・・いいかアンナ、あいつの話は真に受けるな。買い物は付き合つてやるから、その話をよそでするんじゃないぞ」

「・・・エーツト、わかりまシタ」

「なんで目が泳いでるんだお前は。まさかもう誰かに喋つたんじやないだろうな」

「大丈夫デス。ユミコとアイコにだけデス」

「愛ちゃんは、一番喋つちやいけない部類の人間なんだよ。どんだけ明後日の方向に誤解するかわかりやしない」

「何か「アンナちゃん、大人の階段昇つちやったんだね」としみじみと言つてまシタ」

「確実に最悪な方向に誤解してるな」

「大丈夫デス。アイコももうすぐコータと一緒に大人の階段を昇れるネとフオローしましたカラ」

「そりや、フオローじゃなくてトドメさしてるだけだ」

「顔が真っ赤でシタね」

「だいたいお前は、大人の階段つて意味がわかつてるのか」  
「ファーストキスのことでシヨ？」

「もういい買い物行こう。おーい陽太、康太手伝え」

「なんで俺たちまで」と陽太がボヤク。

「・・・夫婦の問題は夫婦だけで解決すべき」康太も同調する。

「誰が夫婦だ。あいつの買い物は尋常じゃねえんだよ。1回で段ボールに3箱も買いやがる」と颯太が答える。

確かに見ているとアンナは楽しそうに商店街を飛び回るようにあつちの店こつちの店と買い回り、その度に3兄弟の持つ荷物が増えていった。

「おい、アンナ。いいかげんにしろ。これ以上は持てん」

「ソータは体力なすぎデス。パパならこれくらい一人でもてマス」

「スペツナズの教官と日本の民間人を比べるな」

「ところでソータ、お店でくれたこのカードはなんデスか？」アンナが

福引券を差し出した。

「おお、これは福引券じゃないか」颯太の目が輝いた。

「フクビキ?」

「うむ、英語で言えば Lucky Pull だな」

「いや、兄貴。それは全然違う上に、そもそも英語にする必然性が全くないんだが」陽太が思わずツッコんだ。

「よし、買い物はこれで終了だ。福引きを当てにいくぞ」颯太は福引き場に向かって意気揚々と歩きだした。

「なんで兄貴はああも福引きが好きなんだ?」

「・・・あれだけ好きな割には5等のタワシが2回当たったのが最高で、後はすべて6等のポケットティッシュなんだが」

「前世でどんだけ悪行を重ねたら、あそこまで外せるのかと思うほどのハズレ率だな」

既に颯太の手には9個のポケットティッシュが握られていた。残る回数は1回だけ。

「凄いデス、ソータ。ティッシュを9個もゲットしまシタ」アンナが心から感嘆の声をあげた。

「悪気がない分だけ破壊力のあるイヤミだな」陽太がツブやいた。

「フフフ、俺を本気にさせたようだなロシア娘」

「アンナと呼ぶ約束デス」

「そんなことはどうでもいい。俺の本気を見せてやる・・・」そういうと颯太はひざまずき祈りの言葉を唱え始めた。

「高天原に神留まり坐す 皇が親神漏岐神漏美の命以て八百万神等を神集へに集へ給ひ・・・」

「何かと思えば神頼みか」

「・・・福引きを外し続けただけで、祝詞まで覚えたのか、あの男は」

「ネエ、陽太」

「ん、何だいアンナちゃん」

「天にまします我らが父よ、み名が聖とされんことを。み国が来たらんことを・・・」

「……今度はキリスト教か」

「颯太はガラガラと何をやってたの？」

「ああ、あれは福引きと言ってあの機械を回して出てきた玉の色で景品がもらえるのさ。」

「仏説摩訶般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時……」

「……今度は仏教か。どれだけ福引きに命をかけてるのだ、この男は」

「コレを回すんデスカ？」アンナが無造作に抽選器を一回転させたところ、金色の玉がポロリところげ出てきた。

係員がカランカランと鐘を鳴らし「一等賞おめでとございます」と大声で叫んだ。

「いと尊きアツラーの御名に……えっ？」

「ソータ、綺麗な金色のボールが出まシタ。これ貰えるんデスカ？」

1等の景品は、10万円分の旅行券だった。



## 第2話

土屋3兄弟+美少女1名は、リビングで緊急会議を開催していた。「家族旅行するにしたって10万つてのは中途半端だな」

「……というか親父は今、会社の決算前で目が血走っている。家族旅行しようなんて言ったら殺されかねん」

「ババアにこの話したら「あら、ちようどいいわ。お母様会の親善旅行に使うからちようだいね」とか言われて旅行券没収されちゃうな」

「ソータ、私にいい考えがありません」

「ふむ、異なる文化で育った人間の視点からの意見を聞いてみるのもいいだろう、言ってみろ」

「いや、どう考えてもそこまで大仰な問題じゃないだろう、兄貴」

「みんなでロシアに行きまショウ。私が案内します」

「一人分にも足らんわ。お前が帰って二度と戻ってこないというなら、これ全部お前が使っているぞ」

「デモ、私はソータに嫁ぐために家を出た身ですカラ、ロシアには帰れません」

「ホンの数秒前に「みんなでロシアに行こう」と言ったのはお前だろうが。あと交換留学することを「嫁ぐ」とは言わん、我が国では」

「女三界に家なしと言います」

「一体、どこで日本語教わりや、そんな言葉覚えてくるんだ。そんな言葉よりもっと基本的な単語の意味を理解しろ。「妻」とか」

一応、颯太は女性が苦手なミュージシャンで通っているはずなのだが、不思議なことにアンナとだけは普通に接することができるようだ。

まあ、上のようなやり取りを普通の範疇に入れることができるのであればの話だが。

「兄貴、夫婦漫才はそれくらいにして真面目に考えようよ」

「夫婦じゃねえし漫才でもねえ」

「……メンバーから決めた方がいいのではないか？」

「ああ、そうだな。親父お袋がダメとなるとこの4人か」

「それじゃ、アンナちゃんが女一人でかわいそうだろう」

「そんなこと気にするタマとも思えんが……よし、それじゃ由美ちゃんと愛ちゃんも誘ってみんなで温泉でも行こう」

「えっ?」

「このままじゃ、俺一人カップルと思われるじゃねえか。お前らもカップルになれ」

「いや、泊りはどうかなあ」

「心配するな。こう見えても我々、土屋兄弟の安全性は折り紙つきだ。いかなる事故も起こらん」

「……年頃の男性として、それは胸を張れることなのか?」

「いいんだよ。とりあえず来週の土日で温泉旅行。場所は適当に探しておくから、お前たちは由美ちゃんと愛ちゃんを何としても誘ってこい」

颯太はにこやかに宣言した。

「そうスルト、私は愛子に来週土日に温泉旅行に行かないかと誘えばいいのデスね」

「……そうだ。よろしく頼む」

「愛子は恋人なんだからコータが直接聞けばいいノニ」

「……理由があつて、学校ではあいつに声をかけられないのだ。お前も学校で俺を見かけても無視してくれ」

「わかりまシタ。でもひとつ聞きたいことがあります」

「……何だ?」

「私たちなんでワザワザこんなことをしてるんデスか?」

と言つてロシアン少女は携帯を耳にあてて歩いている少年がいた。10m後方に同じように携帯を耳にあてて歩いている少年がいた。

「なんで同じ家から同じ学校に通っているノニ、並ばずに離れて歩くノ?そして話をスル時には携帯を使わないといけないんデスか?」

「……この学校には恐ろしい秘密組織があつてな。女子と一緒に登校したり話をしたりしたら命が危なくなるのだ」

「オウ、ジャパニーズ・ヤクザ?」

「……ある意味、ヤクザの方がまだ話が通じる。連中を支配して

るのは嫉妬だけだから、言い訳や理屈など全く通じん

「わかりませタ。愛子には私から話しておきマス」

「……すまんが頼む」

学校に着き二人はそれぞれのクラスであるAクラスとFクラスへと向かった。

「あ、おはようアンナちゃん。今日もキレイだね」少女は今日も元気すぎるほど元気だった。

「おはようございマス、愛子。あの来週の土日空いてマスか？」

「今のところ予定はないけどどうしたの？」

「じゃ、私と颯太と陽太と康太と由美ちゃんと愛子の6人で1泊で温泉にいきませんか？」

「どうしたの急に」

「実は私が福引きで旅行券を当てたの……」

ロシアン少女がここまで言った時には、既に少女は教室の入り口から飛び出していた。

少年が教室に着いた時には、聞きなれた金槌の音がしていた。

「……またか。今日の犠牲者は誰だ？」といいながらドアを開けて教室に入った。

「やあ、おはようムツツリーニ。爽やかな朝だね」明久がいった。

「お主、これから処刑が始まるというのに、よくそんな晴れ晴れとした顔ができるのう」と秀吉が呆れた顔で言う。

「いやあ、基本的に僕は関係ないし」

「そういう問題ではなかるうに」

「……ターゲットは誰だ？」

「どうも須川君らしいよ」

「……誰にながあっても須川にだけは何も起こらないと思っていたが」

「どうやら駅で女生徒が落としたハンカチを拾ってやろうとして手がふれたらしいぞ」

「それだけかの」

「なんか連中どんどん過激化しているな。偶然手が触れたくらいで」

ンチじゃ、彼女とお泊り旅行なんていったらどうなるんだろうなハハ  
ハ」

少年の背中を冷たい汗が流れて行き、顔がこわばれるのがハッキリわ  
かった。

その時、ドアが「ガラッ」と大きな音を立てて開かれ、少女が飛び  
込んでくるなり

「康太！来週のお泊り温泉旅行。ボク絶対参加するから！じゃあ」

と大声で叫んで、次の瞬間には消えていた

「…………あのバカ娘。よりによって最悪のタイミングで最悪の発  
言を」

「今のは、工藤かの」

「よく見えなかったけど、たぶんそうじゃないかな？」

「なんかお泊り温泉旅行がどうこうと」

「…………お前たちの聞き間違いじゃないのか」

雄二が言った。「俺たちはどうでもいいが。後ろの連中説得した方  
がいいんじゃないか？」

後ろを振り返るとFFF団の全メンバーが手に手に武器を持って  
取り囲んでいた。

須川が言った「5秒やろう。言い訳でもお祈りでも好きに使  
え…………」

### 第3話

アンナが留学してきてから帰りはいつも三人で帰るのが習慣になっっている。

「温泉楽しみだね、アンナちゃん」

「ハイ、日本の温泉楽しみデス」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「みんなで行けるのがいいよね」

「ハイ、就学旅行みたいデスね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんで康太は黙りっぱなしなのさ？服はボロボロだし」

「・・・・・・・・胸に手を当てて考えてみる」

「・・・・・・・・どれどれ」

「・・・・・・・・何でアンナの胸に手を当てているんだ？」

「いや、どうせだったらアンナちゃんの胸の方が楽しいかなって」

「・・・・・・・・」

「何でツツコまないの？」

「・・・・・・・・その手のボケにツツコむのは死亡フラッグだからだ」

「やだなあ、誰もそんなヤボなことしないって」

「・・・・・・・・今まで、自分がやってきたことくらい覚えておけ」

「それはともかく、ボクたちも高二なんだから悪ふざけするのもホドホドにしなよ。制服がボロボロだよ」

「・・・・・・・・言っておくが100%お前の責任だ」

「ボクが何したというのさ」

「朝、ワザワザFクラスに来て、お泊り温泉OKと叫んだらうが。アンナに言えば済むことだろうに」

「アンナちゃんはまだ日本語が苦手だから、間違いがないように直接伝える行ったの」

「・・・・・・・・今までの経験では、お前を通した情報の方が高確率でネジ曲がるんだが」

「何を言うかなあ。日本語のネイティブ・スピーカーのボクにそんな

ことがあるわけじゃないじゃない」

「……日本語というより思考回路の問題だと思っただが。常人ではお前の発想についていけん」

「まあ、そういう些細な問題はおいといて、温泉かあ。楽しみだなあ」

「ですネエ」

「……人が死にかけたのを些細な問題で片付けるな」

「……回想終了」

「……という騒ぎが一週間前にあったわけだが」

「康太、いきなり誰に説明しているの？」

「いろいろと事情というのがあるのだ」

「ふーん、変なの」

少年は少女の格好を上から下まで眺めていった。

「……ところでお前の格好は何だ？」

「え？普通の格好じゃん。ポロシャツにホットパンツに帽子」

「……いや、その背中に背負っているもののことを言っているんだが」

「あ、これ？見て分からないかなありユックサックだよ。見つけるのに苦労したんだから」

「……なんでリュックサックなのだ？」

少女をリュックを下ろして開けた。

「ほら、ポッキーでしょ。チョコレートにクッキー。ボクの好きな草餅にみんなで食べれるようにポテチ、おやつに入らないからバナナと……」

「……どれだけ浮かれているんだお前は」

「そんなことないよ普通だよ」

「……夕べは寝れなかっただろう」

「……そつ、そんなことあるわけじゃないじゃん。大人だよボクは」

「……目が充血して、目の下にクマができてるぞ」

「……ひっ久しぶりの旅行なんだから仕方ないんだもん」

「そうだと康太、そういうことを笑っちゃいかんな」と颯太が加勢した

が目の下にはクツキリとクマがあった。

「……こいつもか」

「ねえ、由美ちゃん。温泉楽しみだね」

「はい、私温泉旅館って初めてで」

「ええ、そうなの？お嬢様だからしよっちゅう旅行で行っているかと思っただ」

「はい、別荘に温泉が出るもんですから、今まで旅館というのに泊まる機会がなくて」

「……」

「今、何か恐ろしい言葉を聞いた気がするぞ」

「温泉が出る別荘ってどんなんだよ」

その声が聞こえたのか、由美子が慌てて打ち消した。

「あ、でも温泉がでる別荘は一つなんですよ」

「……」

「温泉が出るのは一つってことは、いくつか別荘があるのか？」

「ねっねえ、由美ちゃんちって別荘いくつあるの？」

「そんなに大したことないんですよ。北海道と沖繩と軽井沢と草津だから4つです」

「……」

「おい、陽太。お前このまま付き合ってるいいのか？所属の黒服軍団に消されたりするんじゃないのか？」

「そんな気がしてきた」

「……そろそろ時間だ」

時計を見ると9時になろうとしていた。

よし、車に乗れ」と颯太が言った。1台では乗り切れないので、颯太と陽太が運転して車は2台。

陽太の車には、陽太と由美子と康太と愛子が乗り込み、颯太の車には颯太とアンナが乗り込んだ。

「おかしいなあ。兄貴の車何揉めてんだ？全然動かないぞ」

「ボク行って様子みてきます」少女が言った。

「だから何でナチュラルにお前が俺の車の助手席に当然の顔をして

座っているんだ？」

「助手席は妻の席だから、私が座るのは当然です」

「妻の意味を辞書で調べると何とも言っているだろうが」

「あゝ、颯太君。何か問題ありましたか？」

「おお、愛ちゃん。いいところに来た。何でこのロシア娘が俺の車に乗っているのかということに揉めているんだ」

「何でって夫婦は同じ車に乗るのが普通なんじゃ」

「夫婦じゃないというのに」

「わかりました。じゃこの車にはボクが乗ります。アンナちゃんは陽太君の車に乗って」

「デモ……」

「このままじゃ出発できないから、悪いけどそうしてくれない？」

「……ハイ、わかりませタ」

「じゃ、颯太君。この車にはボクが乗るから。お昼はおにぎり作ってきたから、運転しながらでも食べれるよ」

「シートベルトはしっかり締めたまえ、アンナ君。大事な体だからな。じゃ、出発するから愛ちゃんは陽太の車に大至急戻って」

「??ハア、いいですけど。じゃ、これ颯太君たちの分のおにぎりです」  
「……」

大騒ぎで何とか出発することができた



## 第4話

高速に乗って2時間走っていた。

「おかしいなあ」と陽太が言った。

「どうかしたの、陽太君」と由美子が尋ねた。

「いや、気のせいかも知れないんだけど、後ろの白い車が東京からずっと後ろを走っているような」

「たまたま同じ方向なんじゃないかしら。高速だから方向は一緒だし」

「そうだよね」

一方、颯太の車の中では

「だから夫なぞにな」った覚えはないと何回言えば理解するんだ、お前は」

「乙女の体を奪ったクセに」

「ちよつちよつと待て、人聞きの悪いことを言うな。そんなことした覚えはないぞ」

「キスしまシタ」

「それは体を奪ったとは言わん」

「デモ唇も体の一部デス」

「というか、その言い回しを誰から習ったんだ？」

「お母さんが教えてくれまシタ」

「やっぱり、あのババアか。いいかアンナ、マトモな人生を送りたかったら、あのババアの言うことは無視しろ」

「夫のお母さんの言うことを無視なんかできません」

「その夫のいうことはスカッと無視しやがるくせに何を言う。だいたい夫なぞになつた……」

全く進歩のない会話を延々2時間繰り広げていた。

高速を降りて国道を1時間ほど走ると「七色温泉街」に入った。予約していた旅館に着くと颯太が言った。

「よし、荷物を置いたら観光にいくぞ。10分後にロビーに集合」

彼らの部屋は二間続きで、男3人、女3人づつの和室だった。とり

あえず荷物を置いて全員ロビーに集まった。

「よし、全員揃ったな。ではいまから旅行のしおりを配る」

「「旅行のしおり？」」

「何を驚いている。遠足や旅行にはしおりがつきものだろうが」

「このところ夜遅くまでガサゴソしていると思つてたら、こんな  
作つてたのか」

「凄いですね。歌集までついています」

「……あいつのことだからどうせ演歌ばかりだ」

「何を言う「友よ」とか「四季の歌」とかも入っているぞ」

「どつちにしろ古すぎる。というか、これいつ歌うつもりなんだ？」

「(ねえ、康太)」

「(……何だ?)」

「(颯太君つて、この旅行どれだけ楽しみにしていたのさ?)」

「(……こんなしおり作るくらいだ。察しろ)」

「よし、では観光にでかけるぞ」颯太君は張りきつて飛び出して  
いった。どうみてもライブの時より楽しそうなんだけど。

「ねえ、颯太君。どこ行くの」とボクは聞いた。

「うむ、このあたりで一番大きな神社だ」

なかなかいいツアーガイドだと思つたのもつかの間、これが小姑の  
ようにウルサイのだ。

「こら、アンナ。参道の真ん中を歩くんじゃない。そこは神様の道だ」  
と道の歩き方から、

「陽太、柄杓に直接口をつけるな。手に取つて掬つてから口に運ぶん  
だ」と手水の使い方まで口うるさいことこの上ない。

嫁の粗探しをしている姑のような小言を聞きながらやっと賽銭箱  
の前まできた。

「では、簡単な説明をする」

「(何かがのり移つたみたいにいキキキしてるね)」

「(……兄貴は、昔から神社仏閣が好きだったのだ)」

(演歌好きで、神社仏閣好きでビジュアル系バンドのボーカルつて  
他にいないよ?素直に演歌歌手でデビューすればよかつたのに)」

「（・・・それでは女の子にモテン）」

「（その基準はどうしても譲れないんだね）」

「ソータ、これなんデスカ」

「ん？鈴だが」

「鳴らしてもいいデスカ」

「ああ、構わんぞ」

「ガラガラ」

「まず、この七色神社の建立は、今から約700年前」

「ガラガラガラガラ」

「主祭神は、国之常立神。まあ、地を神格化した神だ」

「ガラガラガラガラガラガラ」

「流れとしては熊野速玉大社の流れを引き・・・」

「ガラガラガラガラガラガラガラガラガラ」

「うるさいわ！鈴をシャウトさせるな。一回でいいんだ一回で」

よし、ではこれより参拝に移る。各人お賽銭の準備」どこの軍隊が参拝にきたのかと思うような一糸乱れぬ動きで、ボクたちはお賽銭を取り出して投げいれる準備をした。

「よし、投げろ」ボクたちは号令に従って賽銭箱にお賽銭を投げいれた。

「よし、二礼」颯太君の掛け声に従って二回礼をする。

「次、二拍手」同じく二つ拍手を打つ。

「最後に一礼」もう一度礼をする。

どうやら、これが正しい参拝の仕方らしい。

「アンナ、お賽銭いくら入れた？」颯太君が尋ねた。

「10円です」とアンナちゃんが答えた。すると颯太君はとても嬉しそうに

「ふふふ、罨にかかったな。10円は「とおえん」と言っただけ縁が遠くなるのだ。俺とのことは諦めろ」と言った。

ハッキリ言っただけでも大人気ない上に見苦しいことこの上ない。

ところがアンナちゃんは全く意に介した様子もなく

「大丈夫です。私日本の神様だけでなく、イエス様にも祈りましたカ

ラ」と言った。

「お前、日本の神様にケンカ売ってるな」颯太君は呆れたように答えた。

「まあ、日本の神様も懐が広い。八百万もいるんだ今更一人や二人増えたからって誰も気がつかんだろう」

前を表示する / 次を表示する

## 第5話

帰り道にお御籤売り場があった。

「よし、ここで各人お御籤をひく」

「兄貴、今時お御籤って流行らないよ」

「バカ者、神社にお参りしてお御籤を引かずにどうする。神様からの声だと思つて今後の人生の指針にするがよいぞ」

「(お御籤つてそんなに壮大なものだったの?)」

「(・・・逆らうな。どこかの世界に逝つてしまっている)」

ということで颯太君の命令によつて、みなでお御籤を引くことになつた。

「よし、各人それぞれのお御籤を取つたな。開け」颯太君の号令で一斉に開いた。

「中吉か、まあまあだな」

「・・・」

「・・・吉だ。用心が必要なのか?」

「・・・」

「私は小吉です。ちよつと悔しいなあ」

「・・・」

「ふえり、ボク末吉だよ。アンナちゃんは?」

「・・・」

「私は大吉です」

「・・・」

「すごい、見せて。なになに「待ち人・既に傍にいる」つて合つてるじゃない」

「・・・」

「さつきから黙っているけど、颯太君はなんだつたんですか?」

「うん? いや、大したことないよ、愛ちゃん。さあ、帰ろうか」

「そんなこと言わずに見せて下さいよ」ボクはそう言つて颯太君の手からお御籤を奪い取つた。

「えくつと、なにになに。・・・凶。あ、でも恋愛運はいいじゃない

ですか。「待ち人：既に傍にいる」って」

「(大吉のアンナちゃんも凶の兄貴のお御籤の文言と一緒になんだが)」

「(……しかも、それがほぼ合つてるところが恐ろしいな、ここのお御籤は)」

「フフフフ」急に颯太君が笑いだした。

「どつどうしたんですか、颯太君。そこまでお御籤に人生かけなくても」

「何を言うんだ、愛ちゃん。さあ、練習は終わりだ。本番いくぞ」

「「「はあ？」」」

「ライブでも何でも周到な練習なくして、成功はありえん。だから今のは練習だったのだ。さあ諸君、本番のお御籤を引こう」

「(おい、何か言いだしたぞ)」

「(……それより何をすれば、お御籤が成功したことになるのだ?)」

「(お兄さんって、勝つまでゲームやめないタイプだったんですね)」

「(颯太君って、どれだけ大人気ないの?)」

「(お御籤って、この番号をコンプリートすればいいんですか?)」

颯太君のせいで、アンナちゃんがお御籤を間違つて理解してしまつた。

「何をグズグズしている。神様を待たせては失礼だ。早くひけ」

しょうがないのでボクたちはもう一度お御籤を引き、颯太君の号令で一斉にあけた。

「大吉だな」

「……大吉か」

「あら、私も大吉」

「えーっ、ボクも大吉だよ」

「私もまた大吉デス」

全員の目が颯太君に注がれた。

「……」

「颯太君は何だったんですか?」

「……」

「大凶なんて入っているもんなのか?」

「……………恐ろしいほどの神の意志を感じる」

「まっまあ、後は良くなるだけと思えば……………」

「スゴいなあ。大凶なんてボク初めて見たよ。ある意味、大吉より激レアだよね」

颯太君がワナワナ震えている。

「そう言えばアンナちゃんは、また大吉だったんだ。ちよつと見せて。恋愛運は「思うがままに突き進め」かあ」

今迄も十分突き進んできたと思うんだけど、神様のお墨付きが得られたわけだ。

「颯太君の恋愛運は何ですか?」

「えっ、恋愛運?」「この門より入りし者、全ての希望を捨てよ」って、これがお御籤の文句かあ」と言ってお御籤を地面に叩きつけた。

由美ちゃんがそれを拾って

「あらあらバチが当たりますよ。アンナちゃん、お御籤を貸してちようだい」と言っておアンナちゃんからお御籤を受け取ると、

二枚のお御籤を重ねて折り畳み近くの木の枝に結んだ。

「これで大丈夫です。二人で半分っこ。アンナちゃんの幸運がちよと減っちゃうけど大丈夫よね、アンナちゃん」

「はい、ソータの側にいられる方が大事です」

うーん、アンナちゃんは健気だなあ。それにひきかえ颯太君ときたら

「ふん、俺はもともとこういうものは信じてないんだ。さあ、宿に帰って温泉にでも入ろう」と言ってお歩き出した。本当に大人気ない。

「(さつき、お御籤は神の声だから人生の指針にしろとか言っておなかったか?)」

「……………覚えてないだろう絶対」

一人で先にズンズン歩いている颯太君の頭に鳩のフンが落ちた。

「……………」

「……………さぞや名のある神社に違いない」康太が境内を振り返りつぶやいた。

## 第6話

宿に戻る途中でかなり年季の入った射的屋を見つけた。

「ねえ康太、こんなところに射的屋があるよ」

「……かなり古い店だな。やりたいのか？」

「こう見えても小中の頃は、デューク愛子と呼ばれて縁日の射的屋を泣かせたもんだよ」

「……もう、お前にどんな通り名がついていても驚かん。兄貴、愛子が射的やりたいそうだ」

それを聞いて肩を落として歩いてた颯太君が意気込んで言った。

「なに、射的をやりたいだと。よし、かつてはゴルゴ土屋と呼ばれた俺の腕をみせつけて、さっきの汚名挽回をしてやる」

「(……お前は、あのレベルのことを言ってたんだぞ、愛子)」

「(えー、やだなあ。じゃあもう二度と言わない)」

「それより兄貴、それをいうなら汚名返上だ。汚名を取り返してどうする」

「そんな細かいことはどうでもいい。みんな俺についてこい」

颯太君は意気揚々と射的屋に乗り込んだ。

「なんだか機嫌直ったみたいだね」

「……どれだけ単純なんだ、あの男は」

「ふふふ、複雑すぎるよりいいんじゃないかしら」

「由美ちゃん、それフォローになってないよ」

「分かりやすいのが、一番デス」

店の中から颯太君が「早く来い」と叫んでいたの、ボクたち急いで店に入った。

店の中には低いカウンターのような台があつて、2mほど先の棚に景品がならんでいる。あれを当てて落とせばもらえるのだ。

「康太、ボクあの一番上の大きな熊のぬいぐるみが欲しい」

「……ムチャ言うな。どう見てもあれは、この店の創業以来ずっとあの場所から動いたことはありませんといった貫禄があるぞ」

「おばさん、全員分俺が払うから」



「はい、どうも。一人500円で全部で3000円ね」

「君たち、僕のオゴリだ。遠慮なく楽しんでくれたまえ」

「(随分安上がりで兄貴風吹かすな、あの男は)」

「(……他にそういう機会がないからな)」

最初は陽太君と由美ちゃんが挑戦した。店のオバちゃんから、一人10発のコルク弾を渡されて、景品を狙う。

二人とも何発か当たったんだけど、景品はビクともしなかった。

「セメダインで固定してあるんじゃないか？あの景品は」と陽太君がボヤいた。

次はボクと康太の番だった。

「勝負だよ、康太」

「……何でもかんでも勝負に持ち込むな。好きな景品を勝手に当てる」

1発目。康太は下の段の小さな景品、ボクは最上段の大きな熊のぬいぐるみを狙って二人とも外した。

「ふふふ、康太は小さな景品狙いとは、器の小ささがわかるね」

「……お前こそ大きな熊狙いとは、無謀な性格がよく表れている。それよりもあんな大きな景品をどうやったたら外せるんだ」

2発目、3発目と外していくうちに、ボクたちの罵り合いも段々エスカレートしていった。

おかしいなあ？こんなに楽しくないことを何でもみんなお金を払ってやるんだろう。

5発目を外した時点で、見かねた陽太君が止めに入ってくれた。

「お前ら、いいかげんにしろ。それじゃ射的じゃなくて口ゲンカの間」に銃を撃っているだけだ」

残りの5発もカスリもしなかった。まったく康太のせいで酷い目に会っちゃったよ。

最後は真打と言うか何と言うか、颯太君の番だ。これでもしまぐれでもアンナちゃんに負けたりしたら、

この旅行に暗雲が立ち込めてしまう。まあ、アンナちゃんは射的は初めてだって言っていたし、そんなことはないだろうけど。

「ふふふ、やつと俺の出番か。素人共と格の違いをみせてやるぜ」と颯太君が上機嫌で言った。

一方、アンナちゃんは……銃口を覗き込んでいた。

「ア、アンナちゃん。何をしているのかな？」

「銃身を確認していいマス。少しゆがんでいるみたいデスがなんとかありません」

「えと、何を言っているのかな？」ボクにはアンナちゃんの言ったことが全然理解できなかった。

それぞれ弾を込めて的を狙った、颯太君はたったまま、アンナちゃんは両肘をカウンターにつけて。

「なあ、おい。アンナちゃんの姿勢が妙に堂にいつてないか？」

「……微動だにしないな」

「隙がないです」

2人同時に撃った。颯太君の弾は外れたけど、アンナちゃんの弾はボクの欲しがっていた熊のぬいぐるみに当たって見事落とした。

「すごい、アンナちゃん」

「まだデス。続いて二射用意デス」アンナちゃんは、2発目を準備すると、また射撃姿勢をとった。

アンナちゃんはその後10発中7発を命中させ「やっぱり自分の銃じゃないと難しいデス」という謎の言葉を残した。

みんながアンナちゃんを称賛している中、颯太君は一人黙々と打ち続けていた、弾は残り一発。

事態の重要さに気が付いたメンバーが固唾を飲んで成り行きを見守っている。何しろここで負けると（いや、既に大負けなのだが）、颯太君が拗ねるのは火を見るより明らかなのだ。

みんなが見守るなか最後の1発が発射され、5cmくらいの人形に当たって落とした。

「やった！みたか、俺の勝ちだ」と颯太君は大喜びしている。

「俺の勝ちって、野球で言えば20対0で負けてる試合で、9回裏に1点返したってレベルだろ」

「（……パーフェクトペースで抑えられて9回裏2アウトで相手

のエラーでパーフェクトを阻止したレベルかも知れん」

「それにしてもすごいね。アンナちゃん。射的は初めてだって言っていたのに」とボクがアンナちゃんを称えた。

「ハイ、射的は初めてデスけど、スナイプ（狙撃）は護身のためにとって5歳のころからパパに教わってまシタ」

「はあ？護身に狙撃を教えるって、ロシア人は普段何と戦っているんだ」

「普通は500mの標的を使うのデスが、的が近すぎてかえってやりにくかったデス」

その時、オバちゃんが泣きそうな顔してアンナちゃんが取った7つの景品を持ってきた。

「私たちなんか人買いみたいね」

「ボク、やっぱりいらない」

「……熊のぬいぐるみ欲しかったのではないのか」

「そうなんだけど、よく見ると熊なんだかキツネなんだか狸なんだかわかんないもの。かわいくない」

「アンナちゃん、これいらならお店に返しちやっていい？」と陽太君が言った。

「いいデスよ。その代り私にコレくだサイ」と言っつて颯太君が落としたり人形を手を取った。

「ソータ、私これ欲しいデス。いいデシヨ？」

「おお、もちろんかまわんぞ」颯太君のご機嫌は完全に治ったようだ。

## 第7話

先頭を颯太君が意気揚々と歩いていった。アンナちゃんがその横をぬいぐるみを嬉しそうに眺めながらより従うように歩く。

ボクたち4人は2mほど離れてついて歩いた。

「しかし我が兄ながら単純な男だな」

「……あの小さなぬいぐるみ一つ取ったくらいで、本気でアンナに勝ったつもりなのか、あの男は」

「ふふふ、アンナちゃんが自分が取った景品を選んくれたのが嬉しいんですよ、お兄さんは」

「そうかなあ、颯太君にそんなロマンチックな思考があるなんて思えないんだけど」

「あら愛ちゃんてば、颯太さんはロマンチストですよ。歌を聞けばわかります」

「由美ちゃんはそういうけどさ、ボクは未だにShuと颯太君が結びつかないんだよね」

「Shuのキャラは作っているかも知れないわね。でも、歌に表われる感情とか気持ちって作れないものなのよ、愛ちゃん」

「うーん、ボクには難しくてよくわからないや」

「簡単なことよ。音楽には人間性が現れる。愛ちゃんがShuの歌を聞いて感動したならば、颯太さんの人間性が良いつてこと」

「でも、颯太君って凄く大人気ないよ」

「少年の心を持つているつて言つてあげましょう、ふふふ」

「なんか綺麗にまとめてるけど、要するにガキつてことか」

「どうでしょ、ふふふ」

「……否定はしないのだな」

「お前ら早く来い」と話題の主が旅館の玄関前で叫んでいた。

20分後、浴衣に着替えた一同の前に立ち、颯太はハートマン先任曹長のように注意事項を一同に伝達していた。

「では、これより本旅行の主目的である温泉に入る。入浴時間は40分。その後、食事を男部屋でとる。何か質問はあるか?」

アンナが手を挙げた。「アンナ言ってみろ」

「サー、混浴でありマスか？サー」

「うむ、良い質問だ。聞いて驚くなロシア娘。この宿の温泉は残念ながら混浴ではない、だが建物屋上の露天風呂だ。解放感を楽しめ」

「（おい、アンナちゃんは本当に普通の高校生なのか？スペツナズ高等学校とかじゃねえのか？質問の仕方が妙に手慣れてたぞ）」

「（……試召システムは民生技術だから軍が絡んでくることはないはず）」

「それでは諸君、40分後に会おう」そういうと男性陣は男湯へ、女性陣は女湯へと別れていった。

「うわー、由美ちゃん、アンナちゃん、早くおいでよ。結構広くて綺麗だよ」

「本当に広いわね。やっぱり別荘のものとは違うわ」

「こんなに広くて何人はいれるんデシヨウ」

「アンナちゃん、温泉入るの初めてだよね。こうしてみんなで一緒のお風呂に入るのって平気なの？外人さんは結構嫌がるって聞いたけど」

「ハイ、いろんなマンガやアニメなどで勉強しましたから大丈夫です」

と言いながら3人はお湯に浸かった。

「かぁー、日本人はやっぱり温泉だねえ」

「やっぱり大きなお風呂は気持ちいいですね」

「ところで愛子」

「ん、何？」

「ソータたちは、どこから覗いてきマスか？」

「えっ、なにそれ」

「私が読んだマンガやアニメでは、男の子と女の子が一緒に温泉に入ると、

必ず男の子が覗こうと努力してまシタ、日本の伝統文化デスね」

女湯と男湯を隔てているのは高さ2m30cm程度の竹塀で、上の方は空いていた。だから大声をだせばお互いに筒抜けである。

「おい、何か言われているぞ」

「…………女湯覗きを日本の伝統文化と思われても困るのだが」  
「あいつは一体どんな偏ったマンガやアニメを見てきたんだ…………  
それよりもだ」

颯太はぐるりと後ろを振り向いて言った。

「なんでお前たちがここにいるんだ？」

視線の先にはバンドメンバーの4人が悪ぶれもせず立っていた。

「やあ、偶然だね」とAtsushiが言う。

「爽やかな風に誘われて温泉にでも入りたくなつてな」とGuu

「徒然なるままに車を走らせて」とGon

「当てもなく入った旅館が君たちと一緒にだったとは運命だねえ」とY  
Ouが締めた。

颯太はこめかみを揉みながら「小芝居はいいから、なんでここを  
知った」と言った。

「「そりや、俺たちアンナちゃんのメル友だもん」」

「何だそりや、俺でさえアンナのメルアドなぞ知らんのに」

「そりやお前が機械音痴で、電話だけかけられりやいと、らくらく  
フォンを使っているからだろう」

「個人的な事情はいい。それでアンナは何と言っていたんだ」

「それが、「明日、ソータと温泉に行きマス」とだけだ。どこの温泉と  
も、何時出発とも書かれちやいねえ。」

お蔭で俺たちは朝の4時からお前の家を見張るハメになつちまっ  
た」

「あつ、すると東京からずっと俺の車の後ろを走ってた白い車は兄さ  
ん達だったんですか？」陽太が言った。

「おうよ。見失わないようにずっと真後ろにつけてたんだが意外にバ  
レねえもんだな」

「モロバレしてましたよ。ただ、そんなアホな理由でつけてくる奴が  
いるとは思わなかったから偶然と思っただけで」

「ふつ、常識は常に疑ってかかるべきだな」

## 第8話

「で、お前らは結局何しに来たんだ？」

「おいおい、颯太とぼけるなよ、お前とヨメーズの3人が温泉旅行となったら、

この間のライブの慰労会ということだろう？それならばバンドメンバーとして俺たちも参加するのが筋つてもんだらうが」

「俺や康太もいるんですが・・・」

「聞こえんな」

「で、たまたま温泉に入ったらたまたまお前たちがいた」

「しかもアンナちゃんは温泉は覗かれるものと理解しているというじゃないか」

「いや、それは理解じゃなくて誤解であつ・・・ウグ」Atsushiの蹴りが颯太の腹部に決まった。

「正論はどうでもいいんだよ。俺たちが言いたいのはアンナちゃんの期待に応えるべく行動を起し、もって日口友好のお役に立ちたいとかように思っておるわけだよ」

「えくと、随分話がワールドワイドになってますけど、平たく言うところ覗きですか」

「日口親善活動と言え。アンナちゃんの期待に応えるためのな」

「バレて捕まった時にその理由を言ったらKGBが暗殺に来ますよ」

「あの4人、バカだバカだと思ってたけどバカじゃなかった、大バカだったんだね。あんなに大きな声で「覗き覗き」って叫んでれば、女湯まで丸聞こえなのに」

「でもこんなところまでわざわざ覗きのためだけに来て下さるなんて、なんだか申し訳ない気がするわね」

「えくと、由美ちゃん。そういう問題じゃないと思うの」どうも時々この人の発言は理解に苦しむなあとボクは思った。

「・・・兄さんたち、止めておいた方がいい。仮にも芸能人なんだから」

「ふつ、康太俺たちを見損なうなよ。ミュージシャンである前に一人

の男でありたいんだよ、俺たちは」

「いや、それを男の一般論にされても困るんだけど」

「それに康太だって、愛ちゃんのヌードを見たいだろう」

「……ふっ、俺はそんなものに興味はない」

「なんだってえ」ボクは思わず立ち上がった。

「どつどうしたの、愛ちゃん？」

「だって由美ちゃん。康太の奴、彼女のヌードに興味がないって言ったんだよ。ボクのプライドはどうなるのさ」

「ふふふ、男の子の照れよ。分かってあげて」

由美ちゃんにそう諭され不承不承ボクは再び、湯船に浸かった。

「ほう、愛ちゃんのスレンダーなヌードには興味がないのか」

「……俺は硬派だからな」

「じゃ、アンナちゃんのGカップのダイナマイトバディならどうだ？」

「……そんなものでも……ウグ」

「おい、大変だ。康太が噴水みたいに鼻血を噴き出した。誰かタオルを早く持って来い」

「あの男おくどうしてくれよう」ボクはワナワナと拳を握りしめた。

康太の奴、後で折檻のフルコースだ。

「あら、向こうは大変そうね」

「ねえ由美ちゃん、康太はアンナちゃんのヌード想像しただけで、鼻血出しちゃったんだけど、あれはどういうこと？」

「えっ？あつあれはそうね。あれは、えーとえーと……そう男の子の本能かしら」

由美ちゃんがボクと目を合わせないようにしながらとても困ったような顔で答えた。

「それより由美ちゃんどうしようか？あそこまで堂々と覗く宣言してるんだから、連中は絶対にやるよ。もう上がっちゃおう？」

「うくん、まだ入ったばかりでそれも勿体ないわね」

「でもこのままじゃ覗かれちゃうよ」

「それも困るわね。愛ちゃん、そこの手桶をあるだけこっちに持ってきてもらえるかしら」



ボクは言われるままに十数個の手桶を由美ちゃんの側に運んだ。

「これでいいのかな、何するの？」

「ちよつとお仕置きを、ふふふ」と言つて由美ちゃんは微笑んだ。

「そう言えば、アンナちゃんは？」とボクは周囲を見渡した。

アンナちゃんは周囲の騒ぎを全く気にすることなく、手拭いを頭に乘せた見事な温泉スタイルで手足を伸ばして温泉を満喫していた。というかこの騒動の原因が自分の言動にあるとは、全く理解していないようだ、この娘は。

「よし、じゃ扉に手をかけてジャンプして顔を出して覗くぞ」とAtsushiが言った。

「二おう！」と残りの3人が答えた。

「本当にロクでもない事ばかりにチームワークがいいバンドだね」ボクは呆れてつぶやいた。

「ん、どうした？ 颯太、陽太、康太。お前らは参加しないのか？」

「いや、俺は遠慮する。この上、アンナの裸まで覗いたのがバレた日にゃあ、そのまま教会まで強制連行されそうだ」

「俺も遠慮しとく。由美ちゃんに悪いから」

「……俺はとてつもなく嫌な予感がする」

「ちつ、だらしねえなあ、腰抜け共が。そこで男の生き様をよく目に焼き付けとけ」とAtsushiが吠えた。

「覗きの何をそんなに自慢してんだ、お前らは」

「覗きで男の生き様語られても」

「……そこまで覗きに人生かけんでもいいと思うんだが」

## 第9話

4人が塀に手をかけてジャンプし、塀の上部から顔が出た瞬間、由美ちゃんの手が素早く動いた。

「ゴンー!」「ゴンー!」「ゴンー!」「ゴンー!」

女湯を覗こうとした4人の顔面に由美ちゃんの投げた手桶が命中し、4人は塀から転げ落ちた。

「なっ何だ?」

「何かが顔に当たったぞ」

「愛ちゃんが塀の向こうで待ち構えていてパンチをブチこんだのか?」

「いや、それならパンチは篤に集中するはずだ」

「何で俺だ?」

「自覚ないのか」

「一体、あの連中はボクのことをどういう風に思ってるのかな。それにしてもスゴイね、由美ちゃん。どうやったの?」

「ふふふ、祖父が古武道の師範をしていたので、小さい頃から習っていたの。今のは投擲術っていうのよ。本当はクナイとか手裏剣とかを投げるんだけど、ちよつとした応用ね」

「よし、もう一度トライだ」再びAtsushiが叫ぶ。

「ゴンー!」「ゴンー!」「ゴンー!」「ゴンー!」命中音が再び浴場に響いた。

「おいお前ら、大丈夫か?」

「いい加減にしとかないと、顔がゆがみますよ」

「……嫌な予感当たったな」

「俺は降りた。割にあわん」とGonが言った。

「おれもグラビアアイドルの写真集でガマンするわ」Youも同調した。

「これ以上は顔面がもたん」とGuuも白旗を掲げた。

「ふっ、これぐらいの障害で投げ出すのか。俺は違うぞ。お前らのような負け犬になってたまるか」とAtsushiは叫び三度のジャンプ。

「ゴン！」

「同じところと見せかけて左から攻撃」

「ゴン！」

「移動すると見せかけて一人時間差」

「ゴン！」、「ゴン！」

「うっうーん」

「死んだか？」

「まあ、ある意味凄まじい生き様ではあったな」

「ムチャしやがって」

「うっとおしいから水でもブツカケとけ陽太」

「どうでもいいけど、こんなことばかりやってるとファン失くしま

すよ、兄さん達」

「ふっ、心配するな陽太。俺たちは昔から、あのお母様連からですら「あんた達は外面だけはいいいわねえ」とお誉めのお言葉を頂戴している」

「……それは誉め言葉じゃなくて、思い切り皮肉だと思っただが」「Atsushiって大バカじゃなくて、脳みそ自体がなかったんだね。戦隊物のヒーローの必殺技じゃあるまいし、自分がやることを大声で叫んでればボクでも当てれるよ」少女は天敵のあまりの頭の悪さにため息をついた。

「さあ、これでゆっくり温泉を楽しめるわ、ふふふ」

由美ちゃんは何事もなかったかのように微笑んだ。この人も大概得体の知れない人だなあとボクは思った。

アンナちゃんはどういうと、全く我関せずといった風情で温泉に浸かりながら機嫌よさげに歌を歌っていた。確か全ての騒動の原因はこの少女だったはずなのだが、覗きの危機に晒されたり、プライドをズタズタにされたりと一番被害にあったのはボクじゃないか。何か納得できないものが心に残った。

おっと、康太にはお仕置きフルコースを喰らわせるのを忘れないようにしとかなきゃ、乙女心を傷つけた罪の報いをたっぷり受けさせてやる。

「ふふふふ」

「あつ愛ちゃん、大丈夫かしら？何かすごく悪い顔してるわよ」

「大丈夫です。ねえ由美ちゃん。生爪剥ぐのと、歯をペンチで抜くのどどつちが効きますかね？」

「えーと、言ってることがよく分からないんだけど、両方やるというのじゃいけないのかしら」

「そうか、その手がありますね。ありがとうございます」

「おい、康太。顔が真っ青だぞ」

「……何か知らんが、さつきから寒気がとまらないのだ」

「温泉に浸かりながら寒気がするというのも妙な話だな」

「……寒気と言うよりも禍々しい邪悪な気配というか」

「何か知らんが湯冷めしたんじゃねえか？そろそろ出るか」

颯太はそういうと女湯に向かって「おい、アンナそろそろ出るぞ」と声をかけた。

すると女湯から「ちよつと待ってください、ソータ。やり残したことがありマス」という返事が返ってきた。

「なんだ、まだ身体を洗ってなかったのか？」

「ソータ」

「何だ？身体ならさつきと洗え」

「石鹸投げて下サイ」

「はあ？」

「夫婦で温泉に行った時には、一つの石鹸を二人で使うので石鹸を壁越しに投げ合うとマンガで読みました」

「お前は一体どんなマンガを読んでいるんだ。大体ここはボディソープ備えつけだから石鹸なんて持ってないわ」

「ちゃんと準備しておくのが、夫の努めデス」

「夫じゃないという以前に、それは温泉じゃなくて70年代の銭湯での話だ、バカ者」

どうもこのロシアン少女は、日本のことをいろいろと妙な風に誤解をしているようである。

## 第10話

温泉から上がると既に食事の用意がされていた。鍋を中心にして、それぞれの席に天ぷらや刺身、鮎の塩焼きに茶碗蒸しなどが並んだ豪華なものであった。

だが兄弟3人は部屋の片隅に集まって、浮かない顔で何やら相談を始めた。

「鍋か、マズいな。愛ちゃんが手を出さなければいいが」

「……この状況であいつが張りきらないはずがない」

「いくら愛ちゃんでも、どうやったら鍋を不味く作れるんだ？」

「……甘いな。あいつの場合、隠し味と称してウスターソースを一壇くらいはブチこみかねん」

「目の前で入れて、隠し味もヘツタくれもないだろう」

「……そんな細かいことに頓着する奴じゃない」

「何とかしろ、康太」

「……何とかしろと言われても。そもそもあいつには、俺の話を聞くという機能が搭載されていないのだ」

女性陣はご馳走を前に盛り上がっていた。

「早く食べようよ。ボク、お鍋得意なんだよね」などと言う少女の不穏な発言が聞こえてきた。

「……鍋に得意も不得意もあるか」

「こうなったらしょうがない。康太、お前愛ちゃんに大事な話があると言って隣の女部屋に連れ出せ」

「……それでどうするのだ？」

「そして、「アンナのことを好きになったので別れて欲しい」と言え」

「……兄貴たちの「人を犠牲にしても自分だけは助かろう」という行動原理は、何とかならんのか？」

それにそんなことしたら、愛子が修羅と化して全員鍋どころじゃなくなるぞ」

「ちっ、しかたねえな」颯太はそういうと、ご馳走を前に浮かれまくっている少女に声をかけた。

「愛ちゃんもうちに来るようになってから長いよなあ」

「えっ？ 颯太君いきなり何の話ですか？ それより早くお鍋しましょうよ、お鍋」

「まあまあ、そう慌てるな。愛ちゃんにはいままでに色々な料理を作ってもらったなあ……」

思い出したくもなかった料理の数々が脳裏によみがえる。干物入りシーフードカレーやらアルデンテ野菜炒めやら。

「はあ、まあボク割と料理は得意ですから……」

「グツ、……だが、我々としては、愛ちゃんに次のステージに進んでもらいたいと思っっている」思わずツツコミたくなるのをこらえて颯太は続けた。

「次のステージって何ですか？」何を言いだすのやらこの男は、という訝しげな目で少女は見つめた。

「つまりキャプテン、司令塔になってもらいたいんだ」

「えーっと、その話は食後に聞くとして早くお鍋食べましょうよ、お鍋」

「そう、そのお鍋の話だよ」颯太は構わず続けた。

「お鍋のキャプテンって意味がわかんない」

「つまり、サッカーで言えば10番、ラグビーで言えばスタンドオフ、バドミントンで言えば後衛だ」

「最後は司令塔関係ないんじゃない？」

「つまり愛ちゃんには、試合、いやこの場合は調理全体を司令塔としてコントロールしてもらいたい」

「つまり……?」

「鍋の命は何か？ それは火加減だ。考えなく煮たたせると素材の味を殺してしまう。」

煮立たせず、しかしちゃんと熱が通るように火加減をコントロールして欲しい」

「そんな大役、ボクには無理です」

「何を言うんだ愛ちゃん、君なら、いや君にしか任せられない大役だよ」

「でも……」

「愛ちゃん……」 颯太は愛子の肩を掴んで言った、

「諦めたらそこで試合終了だよ」

少女に取ってその言葉は座右の銘。そして殺し文句だった。

「わかりました、ボクやります。やり遂げてみせます」少女の瞳に使命感に燃え盛る炎が見えた気がした。

「(かなり壮大な話に聞こえたが、要するに手を出さずに火加減だけ見てろってことだろ、今のは?)」

「(……この短時間でよくあんなヨタ話が思いつくな、あの男は)」

「(まあ、あの5馬鹿同士で常に切磋琢磨してるからなあ)」

「(……だが、あの話で丸めこまれるのは愛子ぐらいだと思うのだが)」

大騒ぎでやつと食事が始まった。愛子はじつとカセットコンロを睨みながらつまみをひねったり戻したりしていた。

鍋も煮立ってみんながワイワイとやってる時に、スツとアンナが立ち上がった。

「どうしたアンナ、きつさと喰え。日本の鍋だぞ」 颯太が言った。

「はい、美味しいですケド、一味足りません。ちよつとキッチンに行つて調味料もらつてきマス」とアンナは答えた。

「ちよつと待って、アンナちゃん。それってまさか……」 陽太が恐る恐る尋ねた。

「ハイ、ココアパウダーとお味噌です」 ロシアン少女はにっこり笑うと、入口に向かって歩き出した。

颯太が慌てて叫んだ。「陽太、アンナを止めろ。このままじゃせつかくの鍋が、ボルシチ風闇鍋になっちゃう」

「ちよつと待つんだ、アンナちゃん」

「なんデスか?」

「鍋をもつと美味しくしようと言う君の気持ちは嬉しい。だが、あのレシピは君のお母さんが久しぶりに会えたお父さんのためだけに作った秘伝のレシピじゃなかったのかい?」

「そうデス。パパがアフガンから帰ってきた時に作ったそうデス」

「なら、こんなところで気軽に出すべきじゃない。君の愛する人「だけ」に食べさせてあげるべきだよ。それでこそ破壊力、いや愛情も示せると言うもんだよ」

「そうか、そうですね」アンナは納得して席に戻った。

「(ねえ、今の陽太君の言葉は、あれはお兄さんだけに食べさせろっていう意味に聞こえたんだけど)」由美子が康太にそつとささやいた。

「(・・・いや、まぎれもなくそう言ってたんです)」

しよせんは陽太も颯太の兄弟なのであった。



## 第11話

夕食が終わるとボクたちは、また別な温泉に入りに行った。今度は男湯と女湯が少し離れていたので、4馬鹿の覗きを心配することなくゆつくり温泉を堪能することができた。

湯上りに機嫌よく3人でキヤアキヤアと笑いながら部屋に戻ってくる。……男部屋との間の襖が全部外されていた。

「よお、偶然だね。愛ちゃん。君たちもこの温泉に来てたのかい」

男部屋に敷かれた布団の上に胡坐をかいて悠々と座っていた4馬鹿の一人Atsushiが白々しく言った。風呂場であれだけ大騒ぎしておいて、ボクたちに気づかれていないと思える神経の太さだけは認めてあげよう。

「ええ、皆さんも「偶然」この温泉に来てたんだね。奇跡的だなあ」思いつきり皮肉を込めてボクは答えた。

「うむ、急に温泉に入りたくなつてな。みんなで来たのだ」Gonが言った。

「ああ、このバカ共に皮肉など通じないと分っていたのに……」ボクは頭をかきむしった。

「そうですね。ところで気のせいかも知れないけど、ボクたちの部屋の襖が外されているような気がするんだけど」だんだんと言葉にトゲが生えてくる。

「うん、愛ちゃんの視力は正常なようだ。これで襖が見えていたら眼科に行かなきゃならんところだ」とYouが平然と言った。

なんでこの連中は、人の神経を逆なでするのがこんなにも上手いのだろうか。

「一体、どんな偶然があれば部屋の襖が勝手に外れるのさ？」言葉に生えたトゲの数が増えていくのが自分でもわかる。

「ふふふ、せっかく温泉にきたアンナちゃんに、日本の伝統の枕投げを経験させてやろうと思つてな」Atsushiが笑つて言った。

「あんた10秒前に会つた時に、「偶然だね」って言つてたでしょうが」ボクはこの連中のバカさ加減に頭が痛くなつてきた。

「うむ、夕方ロビーで君たちを見かけてな。その時は挨拶できなかったからさつき挨拶をした。」

だからアンナちゃんが来てるのも知っていた」Atsushiはドヤ顔で言った。

「くっ悔しい。こんなバカに言い負かされた……」ボクは拳を握りしめてプルプル震えた。

「愛ちゃん心の声がダダ漏れになっているよ」Atsushiが親切げに言った。

「聞こえるように言ってるんです」なんだかなきたくなってきたのはどうしてだろう。

その時、颯太君たちが湯から戻ってきた。

「わっ、何だこれ」

「兄さん達、人の部屋でなにくつろいでるんですか？」

「……愛子、何だかよくわからんが、その拳をゆるめろ」

ボクは3人にこれまでの事情を説明した。

「ロクなこと考えねえな。ところでお前ら、部屋には鍵がかかっていたはずだが一体どこから入ったんだ？」

「洋介の鳶のバイト経験を活かして、窓からだ」

「窓って、ここは3階だぞ」

「ふっ、舐めるな。親方にバンドなんか辞めて鳶になれとスカウトされた俺だぜ」Youが胸を張って言った。

「いや、洋介兄さん。それ立派な犯罪ですから。部屋間違ってたらどうするつもりだったんですか？」

「一応、荷物を開けて確認はした」

「康太、警察に通報しろ」

「あの人、ソータ」アンナちゃんがおずおずと言った。

「ん、どうしたアンナ。用ならこいつらを警察に引き渡した後でゆっくり聞いてやるぞ」

「私、枕投げやってみたいデス」

「はあ、こんな連中かばわなくていいんだぞ」

「いえ、やはり修学旅行では枕投げをしナイと。私が読んだマンガで

も必ず……」

「また、そのパターンか。修学旅行じゃねえと言いたいところだが、せっかく日本に来たんだ。楽しんでいけ」

「……で、何で俺まで参加せにやならんのだ？お前らで勝手にやれ」

「何を言う颯太。タコ&ライスvsヨメーズ&ムコーズの5対5の勝負だ」とAtsushiが言った。

「篤兄さん、そのムコーズって何なんですか？」

「ん？お前と康太のユニット名だが」

「ムコーズじゃないし、大体何のユニットなんですか」

「なに？婿の複数形はムコーズでいいはずだが」

「またそれなの。本当にセンス無さすぎ。それでどうやって作詞担当してるのさ」

恐ろしいことに、Atsushiはこのセンスの無さでタコ&ライスのほとんどの曲の詞を書いているのだ。

「ふふふ、愛ちゃん。作詞には秘訣があるのだよ」

「ロクでもないことしか言わない気がするけど、一応聞いてあげるよ。どんな秘訣なのさ」

「心にも無いことを書く！」どうだと言わんばかりに胸を張って答えるAtsushi。

「ああ、何でボクこんな連中のファンだったんだろう？」ボクは過去の自分を思い切りグープパンチしてやりたくなった。

「ファンだったってことは、今はファンじゃないってことか？」Guu君が不思議そうに聞いた。

「何でそこで不思議に思うのか、ボク全然わかんないんだけど」

「馬鹿だな、剛二。今はうちの二代目カスタネッターにしてバンドメンバー009だからファンじゃないと愛ちゃんは言いたいんだよ」

「Atsushi、全然違う。ボクわかったんだよ」

「ん、なにがわかったんだい、愛ちゃん」

「ボクの好きなタコ&ライスは、CDの中にだけ存在するバーチャルバンドだって」

「じゃ、俺たちは何ものなんだ」

「あんた達は、タコ&ライスのパチ物コミックバンド」

「そっそうだったのか」

「なに納得してんだ、お前は」 颯太君が呆れたように言った。

「いや、否定しようと思っただが、その根拠が見つからなくてな」

こいつらのファンだったことは、ボクの黒歴史として心の奥底に封印しておこう。

## 第12話

「キリがないからさっさと始めるぞ」 颯太が言った。

「……………なんで俺たちまで枕投げなんかしなきゃならんのだ」

「それより康太、愛ちゃん枕投げのルール知ってるのか、今にも直接飛びかからんばかりだぞ」

乗り気でない兄弟達に対して、女性陣はやる気満々だった。

「あの、由美ちゃん。気乗りしないなら無理に参加しなくていいんだよ」

「あら、大丈夫よ。私、ずっと女子高だったからこういうのに憧れてたの、ふふふ」

「ルールを説明する。枕が顔面直撃したらアウトだ。よし、いくぞ。よーい、開……………」

颯太が宣言をした瞬間。

「……………始」、「バン」、「バン」、「バン」……………開始1秒後に4馬鹿の顔面に枕が直撃した。

「えっ」と驚いた颯太が一度仲間を見て振り返った瞬間に「バン、バン、バン、バン」と4つの枕が顔面を襲った。

「あら、これでいいのかしら」

「勝ったんデスカ」

「えっ、もう終わっちゃったの？ボク、何もしてないんだけど」

「一体何が起こったんだ」とAtsushiが言った。

「枕投げなんて、ほのぼのしたもんじゃなかったぞ」とGuuが答えた。

「殺気すら感じられたんだが」とGonがツブやいた。

「この衝撃、どつかで味わったことがある気がするな」Youが考え込む。

「今のは、由美ちゃんとアンナか。何だったんだ？」

「古武術の投擲術です」と由美子が答えた。

「パパから護身用に教わったCCCデス」とアンナ。

「またそれか。何だCCCってのは？」

「Close Quarters Combat デス」

「なるほど強いわけだ。で、陽太Close Quarters Combatってのは何だ？」

「わかってたんじゃないのか。日本語じゃ「近接戦闘術」だな」

「お前の親父はお前を何者にしたいんだ。女子高生の護身に狙撃や戦闘術が必要なくらいにロシアってのは治安が悪いのか？」

「そんなコトないデス。パパはちよつと心配性で親バカなだけデス」

「そういうのは、親バカじゃなくてバカ親って言うんだよ」

「優しいパパデス。戦車の運転とかも教えてくれまシタ」

「そこまでやっても自分は学校の教師だと言い張るとは、どれだけ面の皮が厚い親父なんだ」

「でも厳しいところもありマス」

「そうなのか？」

「ハイ、私がどんなにお願いシテも「危ないから」といって、戦車砲は撃たせてくれませんでシタ」

「それはもう「危ないから」なんてレベルの話じゃねえんだよ。なんだその「クリスマスプレゼントにパパにゲーム機をおねだりしたら、ダメって言われちゃった、テヘ」みたいなノリは。民間人の少女を戦車に乗せた上に戦車砲まで撃たせていたらお前の親父だけじゃなくて、国防大臣の首くらいは飛んでたぞ」

「えっ、ソータ。スミノフおじさん知ってるんデスか？」

「スミノ、なんだって？」

「国防大臣のスミノフおじさんは、パパの親友デス。3人でよく戦車に乗リまシタ」

「……」

「おじさんは「撃つちゃえ撃つちゃえ」って言ってまシタが、パパがダメって」

「俺は、ソ連が崩壊した理由がよくわかったよ」

「おい、なんか凄いこと言ってるぞ」

「プロが2人もいるじゃねえか」

「なんつーか、米軍に相手に敵で突撃かけてるような気がしてきたぞ」

「かといって俺たちから勝負を挑んでおいてこのまま引き下がるのもなあ」

「おい、お前ら。まだやるつもりか？」

「うるせー、今作戦会議中だ、待ってろ」

「こうなったら敵戦線の一番弱いところを狙って一矢報いよう」

「どこだそりゃ」

「愛ちゃんだ」

「A t s u s h i、丸聞こえなんだけど。悪巧みするんならもつと小声でしなよ」怒りを押し殺した声で少女が言った。

「やれやれといった調子で颯太が掛け声をかけた。

「じゃ、いくぞ。用意」

4馬鹿が露骨に愛子に狙いを定めた。

「アイコ、大丈夫。私とユミコで倒すカラ」

「ありがとう、アンナちゃん。だけどA t s u s h iだけは、ボクに殺らせて」

「開始」「バス」、「バス」、「バス」、「バス、バス、バス、バス」……「ポス」

戦況は1回目とほとんど同じ経過をたどった。違っていたのは、由美子とアンナの投げた枕の威力が増しており、全員倒されたことと倒れながらA t s u s h iが苦し紛れに放った枕が偶然にも愛子に当たったことだけだった。

「いやあ、参った。さあ、お開きにしよう」と言いながら立ち上がった時、「うぐぐ」という声が聞こえた。

そちらの方を見ると愛子がA t s u s h iの上に馬乗りになって、枕でボコボコに殴りつけていた。

「あつ愛ちゃん。それじゃ枕投げじゃなくて、枕殴りだ」

「止めないで颯太君。この男とはいつか決着をつけないといけないと思ってたの」

「うーん、見事なマウントポジションだな」G u uが冷静に評価する。

「グレイシーにも勝てるな」Y o uも同意する。

「攻撃もスナップが効いていて効果的だ」G o nが感嘆した。

「いや、兄さんたち。冷静に評価してないで止めた方がいいんじゃないですか？」と陽太が声をかけた。

「あのな、陽太。昔、田舎のじっちゃんに言われたんだ。動物が飯食っている時は、危ないから手を出すなって」とY o uが言った。

「それにへタに止めると愛ちゃんへの攻撃がこつちにくる」とG u u。

「うむ、被害を全体に広げるよりは、局所に集中させた方が結果的に被害は少なくなる」G o nが提案した。

「いや、なんかとても良いこと言ってるようですが、要するに篤兄さんをタテにして自分たちは逃げるって言ってるだけですよね」

「なんかこのグループ、来年まで持たないんじゃないかしら」と由美子が不安げに言った。

「西斗の拳のモヒカンみたいな人たちデスね」アンナはブレない。

「……心配いらない。こいつらは昔からずっとこれでやってきた」康太はため息をついた。



## 最終話

「ふ〜」露天風呂に浸かって手足を伸ばし、大きく息をついた。大騒ぎだった枕投げは、愛ちゃんが篤を10分ほどボコって満足した後には終わった。

「あいつも昔から好意を持った相手に過剰にちよっかいを出して、嫌われて傷つくというパターンをずっと繰り返してきたんだから、いい加減に懲りればいいのに」とは思うのだが、メンバー全員似たり寄つたりの不器用な連中だから意見することもできない。

さすがに愛ちゃんほどストレートな行動に出た子はいなかったけど、あの娘は後を引く子じゃないので、いいケンカ相手になるだろう。あの娘が家に来るようになってから、本当にいろいろと変わったなと今更ながらに思った。

空を見上げてみた。空いっぱいには広がっているんじゃないかと錯覚するくらいに大きな月が出ていた。

「月か・・・」そう言えば高校の国語の授業で先生から夏目漱石と月の話を習ったことをふいに思い出した。あの時は妙に感動して、自分がその立場になったら絶対に使ってみようか思ってたなと思いだした。今のところ全然その予定はないんだけどなど自嘲して笑った。

しばらくして入口のドアが「ガラッ」と開く音がした。背中を向けて月を見ていたから分らないけど、こんな遅くに入る物好きな奴が自分以外にもいるんだなと思った。

「ソータ、一緒に入っていいデスクか」

「Fa▲※w♪?・〜 x p E . . . . .」

「落ち着いてください。日本語どころか人類の言葉じゃなくなってマス」

「なっとなっ何でおっお前がここに・・・」

「眠れなくなっって散歩していたら、ソータがここに入るのを見かけたノデ、一緒に入ろうと思っって準備してきまシタ」

「こっここは、男・・・」

「はい、男湯ですケド、遅い時間だから他に誰もこないと思いまシタ」  
「ひっひっ人が、はっはっ入って・・・」

「他の人が入ってきたらその時は、その時デス。それにバスタオルも巻いてマスから大丈夫デス」

「それを先に言え」

「なんでそんなに態度が極端に違うんデスカ」

「いや、裸かと思って色々と動揺したのだ。もう、入ってきたんだ、ゆっくり楽しめ。だが俺の方を見るなよ」

「わかりまシタ」

二人はしばらく静かに温泉の中に座っていた。

「なあ、アンナ。なんでお前日本に来んだ」

「日本が好きだからデス」

「漫画やアニメのためか」

「いえ、Shuのためです」

「Fa●※え♪\$c&<>:.....」

「ダカラ地球語を喋ってくださいサイ」

「くっ詳しい事情を聞こうか・・・」

アンナはしばらくためらってから言った。

「ソータ・・・」

「何だ」

「私、キレイでショ」

「凄い自信だな」

「そういう意味じゃありません。私、小さい頃からずっとそう言われてきまシタ。でも私は自分の顔が大嫌いデス」

「なぜだ。美人はいいことじゃないか」

「無表情なのと合わせて冷たく見えるとって、私、小学校中学校と友達いませんでシタ。パパは出張が多くて、私は家でずっと一人でシタ。高校の時にネットで偶然にタコ&ライスの「Heaven, place you are」の動画を見つけまシタ。ロシア語の歌詞もついていて、「君がいるところが天国だと気づけ」という歌詞に衝撃を受けまシタね。私、何回も何千回も聞きました」

「そっそうか、そんな感動秘話があったのか（…篤のバカが好物のお好み焼きをみんなで喰いに行った時にお好み焼きがうまかったので、感動の余りに書いた詩とはとても言えんな）」

「Shuの歌声が私に語りかけているように聞こえます」

「美人には美人の苦労があるのだな」

「ある時に教室でHeaven, place you areを口ずさんでいたら、ユリーという女の子が「それタコ&ライスだよ」と声をかけてきて私たちは友だちになりました。でも当時、ロシアではマイナーで私たちはSNSで仲間探して。友達いっぱいできました」

「ふむ」

「それから一生懸命に日本語を勉強して日本にきました」

「なるほどなあ」と空を見上げると大きな月が出ていた。これはチャンスか？

「アンナ」

「何デスか？」

「つつつつ月がとても、きつ綺麗ですね」

「……………」

（ふふふ、ロシア人には理解できまい。これを練習としていつか本番を……）

ポチャと湯の音がしてアンナが立ち上がった。そして颯太の横に座って、頭をちょこんと颯太の肩にのせた。

「こうしていてもいいデスか」

「ふつ、なっ何を言うのかね、アンナ君。僕は大人だよ。これくらいどうってことなっないさ」

「とても動揺してイルように見えマス」

「気のせいだ」

「モウ一度言っ下サイ」

「もう一度、何を？」

「さっきの、月のことデス」

「ああ、「月がとても綺麗ですね」」

「そうデスね．．．」アンナは真つ赤になって答えた。

「じゃ今度は私がいいマス。「ソータ、月がとても綺麗デスね」

「．．．．」

「返事」

「あつああ、そうですね」

「．．．．」

「．．．．」

「．．．．」

「．．．．」しばらく沈黙が続いた後で、アンナが嬉しそうに言った。

「．．．．ソータ」

「何だ」

「私、今学校で夏目漱石を習っています」

「．．．．．何だつて（タ

フリ）？」

「いろいろな話を聞きました」

「そつそれはよかつたな」

「私、とても嬉しいデス」

「．．．．．きつ君が何を言っているのか分からないよ、アンナ君」

温泉の中に二人並んで座っているのを月は静かに照らしていた。

．．．．．翌日、帰りの車の中

「いや、さつきからお前が何を言っているのか全く分からないのだが」

「だから何時ロシアに行くのかと聞いていマス」

「何で俺がロシアくんだりに行かなきゃならんのだ」

「結婚前に親に挨拶するのは常識デス」

「なんで結婚という話になっているのだ」

「ソータ、昨日プロポーズしてくれまシタ」

「そんなもんした覚えはねえ」

「嘘ついても私知ってマス。月の話は日本古来のプロポーズの言葉ダ

ト」

「．．．．．そんな意味じゃねえ」

「それに私もう、パパにメールしまシタ」

「何だその無駄に豊富な行動力は、あのムチヤクチャな親父に言ったのか」

「ハイ、パパも大喜びしてくれまシタ」

「そっそうなのか」

「その証拠に「ソータに伝えろ」とお祝いのメッセージを預かってマス」

「嫌な予感しかしないが、とりあえず言ってみろ」

「俺の屍を乗り越えていけ」と伝えろと言われました」

「それはお祝いのメッセージじゃねえ。死亡フラッグだ」

結局帰り道も延々とこの調子で騒がしい2人なのであった。

く 閑話休題 く  
終わりました

思ったより時間がかかりましたが、これで元連載のアルカディアからの転載は全部終了しました。

修正しながらなので1度に転載できず時間がかかったことをお詫びいたします。

次回からは新ネタになります。途中4話ぐらいで放つてあるYukiのネタの続きを書こうかと思つたのですが、数々の(笑)ご指摘をいただいたムツツリーニの妹の話が面白そうなのでそっちにするかと思ひます。

まあ、要するにどっちもまだ完成していないわけなんです。

これからもご愛読よろしくお願いいたします。

→

これを書いて3時間後なんですが、バカテスの10.5巻が出たと聞いてとあるところで

妹は出るかと質問したら「出てくる。しかもかわいい」とか。うちは田舎なので入荷まで

2週間以上かかるので、妹のキャラが掴めない。ということで妹編は後回しになると思います。

あまり原作から離れると面白くないと思いますので。

申し訳ありません。

## 9. 友と初恋とシエークスピア 第1話

ある日、少年と少女はライブで知り合いになったスタイリストのYukiにファミレスに呼び出された。

「うううう、Yukiさん何の用なんだろう。ボクあの人苦手なのに」  
「……………ほう、お前にも苦手な相手がいるとは思わなかった」

「だってあの人、ライブの時にボクボクの生着替えを覗いたんだよ。トラウマだよ。」

「……………いや、その表現はどうかと思うぞ。覗いたんじゃない、スタイリストとして楽屋に一緒にいただけだろう」

「結果的に同じだよ。乙女の生着替えだよ、生着替え」

「……………仕事とはいえ大変だっただろうなYukiさんも」

「彼氏なんだからボクの心配をしなよ。将来の旦那さんにしか見せないって心に誓っていたこの柔肌をあんな男に見られるなんて」

「……………男冥利につきるセリフだな。……………で、本音は？」

「男のクセにボクより美人だなんて絶対に許せない……………」

少女は悔しさを噛みしめるようにテーブルの上の拳を震わせた。

「……………そんなことだろうとは思っていたが、それは完全無欠ないがかりだ。だいたいYukiさんは昔からあだから」

「ゲイなの？」

「……………いや、あの人はああ見えても女好きだ」

「じゃ、なんであんな格好を」

「……………本人曰く、おネエキャラの方がモテるんだそうだ」

「結構、計算高いんだね。そもそも一体どんな人なのYukiさんって」

「……………そうだな。言ってみれば、霧島の頭脳と雄二の腹黒さと秀吉の外見を持った人だ」

「それってかなりのハイスペックだよ。なんでまたベクトルが真逆なああの5馬鹿と友達なのさ」

「……話せば長くなるんだが、ちょうど本人が来たから聞いてみる」

そう言って少年はコーヒーを飲み干した。入口からYukiが入ってくるのが少女にも見えた。

「ごめんなさい。私から呼び出したのに遅れちゃって」Yukiは注文を済ませるとそう言って二人に謝った後、飲み物を注文した。

「……いえ、俺たちも今来たところですから」

「さっそくだけど……」

「その前にボク、Yukiさんに聞きたいことがあるんです」

「えっ、何かしら、愛ちゃん」

「あの、Yukiさんって何であんな連中と付き合ってるんですか？」

「あんな連中? ……ああ、5馬鹿のことね。中学の同級生だったのよ」

「えー、でもYukiさんとあの連中って全然接点がなさそうなんですよ」

「うーん、そうね」Yukiはやってきたアイスコーヒーを一口すすつた。

「愛ちゃんはちよつと勘違いしているようだけど、あの連中は……」

「バカじゃないんですか?」

「いえ、バカか否かと聞かれれば、大バカと言わざるを得ないんだけど、学校じゃそれなりに人気とか人望はあったのよ」

「想像できないなあ」

「5人ともそれなりに運動神経はあったから、よく運動部の助っ人を頼まれていたわね。篤は陸上の100mで中央大会まで出たし、剛二に至っては柔道で全国大会まで出たのよ」

「部活とかすれば少しはマシな人間になったのに」

「それが5人一緒じゃないと嫌だというし、一緒にしたらしたで騒ぎ起こすし」

「騒ぎっ……」

「野球部の助っ人で5人が一緒に試合に出たことがあってね。裕二がバッテリーボックスに立った時に、応援に来てた女生徒から声援が飛ん



だの」

「次に何が起こったか想像がつくんですけど」

「多分あつてるわ。次の瞬間、味方ベンチからバットが4本飛んできて裕二を直撃よ」

「想像を遥かに超えていたね。それで大丈夫だったんですか」

「颯太のバカは「テッドバット4本分だから1点入るな」とかウソぶいていたけどね。」

「やつ野球つてそんなルールでしたっけ？」

「本当にそんなルールがあつたら、あいつらの誰かがボックスに立つたびにベンチからバットが飛んで来てピッチャーの球を打つどころの話じゃなくなるわよ。」

うーん、今もバカだが昔はもつとバカだったんだなあと少女は思った。

「でも、Yukiさんとは接点がないような」

「颯太と同じクラスだったのよ」

「ああ、それで」

「あいつは全然覚えてなかったけど」

「……………意味がわかんないです」

「ある日、私が彼女と繁華街を歩いていたら不良5人にカラまれてね」  
Yukiは遠い目をして言った。

「もう少しで殴られるという時に颯太に助けられたの」

「どうもありがとう土屋君」

「むっ、お前俺を知っているのか」

「知ってるも何も同じクラスの結城だよ。一学期は学級委員長だった」

「記憶にないな」

「……………もう二学期も半分過ぎているんだけど」

「という会話があつてね」

「バカだという傍証がこれでもかとかばかりに出てくるね。それで仲良くなつたんですね」

「そんな甘いもんじゃないわ、あいつらは。その後同じことが3回

あったのよ。その度に自己紹介するハメになったわ」

「……バカとかいう以前に脳に障害があるんじゃないのかな？」  
「本人は「モテる奴は目にも記憶にも残らんのだ。結界が張られているのかも知れん」とか言っていたわ」

「モテる人がよっぽど嫌いなんだね」

しかし、常識で考えてクラスメイトを2学期まで覚えてないということが有り得るのだろうか。あいつらなら有り得ると思えてしまう自分もどこがおかしくなっているに違いない。というかよく考えてみたら自分の周囲には、代表とかアンナちゃんとか康太とか、いろいろと常識を超越する人間が多いことに気がついた。

そう考えれば2学期までクラスメイトの存在に気がつかないくらい普通かも知れない……

と自分を納得させてみようとしたが、やっぱり無理だ。バカはどう取り繕ってみてもやはりバカだ。

メンテ

## 第2話

「で、結局何で仲良くなったんですか」

「ある時、颯太と隣の席になってね。テストの時に油汗流しながらウンウンと白紙の解答用紙にらんでいたから、ちよつとした恩返しのもりで先生の間を見て私の回答用紙と取り替えてやったの」

「へえ」

「それ以来、「心の友」呼ばわりされて芋づる式に5バカとツルむようになつたわけ」

「随分現金ですね。まあそんな点数取つたことないだろうから喜ぶ気持ちは分かるけど」

「あら、愛ちゃん。あいつらバカだけど頭は悪くないのよ」

「どういう意味ですか」

「学年のアイドル的な存在の翠ちゃんって女の子がいてね。その子に告白する権利をかけて5人で勝負したことがあつたのよ」

「ふむふむ」

「いつもは殴り合いで決着付ける連中だけど、告白前に顔をハラしたくないということでテストの順位で決着を付けることにしたの」

「それは無謀では……」

「どうなつたと思う？」

「いや、それなりの点数で決着ついたじゃないんですか？」

「ふふふ、あたしはいつもの通りに1位だったけど、2位から6位まで5馬鹿が独占したわ。そしたらね……」

「お母さんたち喜んででしょうねえ」

「まず学校中がパニックになつたわね。それからお母様方も呼ばれて3日間職員室に監禁されてカンニングの取り調べよ」

「それはお母さんたちも怒つたでしょうね。自分の息子がテストでいい点取つたのにカンニングを疑われたんじゃ」

「ところが一番厳しくカンニングを追求したのがお母様方だったらしいわ」

「えっ?」

「いや、お母さん落ち着いてください。彼らもやる気になればできる子なんですから……」

「いいえ、先生は黙ってて下さい。この連中のことは私たちが一番よく知ってます。こんな点数取れるタマじゃありません」

「そりやそうかも知れませんが、なぜか今回は一生懸命勉強してたようですし……」

ボカ、ボカ、バカ、ボカ、ボカと派手な音が5連発した。

「おっお母さん、暴力はいけません」

「あら、先生つてば暴力だなんて大げさなホホホホ。普段は木刀で行ってますのよ。手が痛いから。何しろこの5馬鹿は小さい頃から殴られ慣れしてますから」

「そうですよ先生。私たちに任せてもらえれば、30分もあれば連中が赤穂浪士に武器を渡していたことくらい白状させてみせますわ」

「天野屋利兵衛の石抱きじゃないんですから……」

「……ということがあってね」

「どれだけ信用なかったんですかあの5人は？最後のがよくわからなかったけど」

「そこは書いてる人間も心配なところよね」

「……もつと意味わかんない」

「それで結局どうなったの？」

「3日目には先生方ですら職員室には近づかなくなって、廊下中に5人の悲鳴が響いていたわね」

「頑張つて勉強して上位になった結果がそれじゃ報われないね」

「それまで毎回最下位を争っていた5人がいきなり2〜6位じゃ、誰だって怪しいと思うわね」

「……俺でもカンニングを疑う」

「まあ、でもあたしも見かねて助けに入ったのよ」

「えっ？結城君っていうと入学以来ずっと学年1番で全国模試でもトップクラスっていう結城君？」

「はっはい」

「女の子にモテモテで、彼女をとつかえひつかえしているっていうあ

の結城君?」

「えーっと……」

「可愛い顔しているくせに腹黒いという評判の結城君なの?」

「……すいません、お母様方は息子さん達からボクのことどんな風に聞いてらっしゃるんですか?」

「今言った通りよ。頭と顔はバツグンにいいけど女たらしの腹黒で、モテるくせに女の一人も紹介しない友達がいのない奴だって」

「友達?友達だって言ったんですか」

「ええ、そうだけど。それより結城というと、結城総合病院と何かご関係があるのかしら」

「はい、祖父が理事長で父が院長をしています」

「そうなの、そんなご立派なお家だとは知らなかったわ。でも結城君、私たちが言うのもなんだけど、こんなバカな連中と付き合っていると口なことないわよ。なんか弱み握られているなら、二度とあなたに近づかないように骨の2〜3本も叩き折っておくから心配しなくて大丈夫よ」

「よその子供の方が自分の息子の骨よりも大事なんだね」

「……まあ、骨ならくっ付けば直るくらいの気持ちだろう」

「それよりYukiさん。そんなにモテるんだったら彼女の友達くらい紹介してあげればいいのに」

「あたしが何人女の子を紹介したと思ってるのよ」Yukiが思わず大声を出した。

「そっそうだったんですか……」

「それをあのバカ共、興奮しすぎてデートの日に高熱出して寝込むわ、デートで緊張して腹具合がおかしくなって5分置きにトイレに駆け込むわ。緊張のあまり最初から最後まで一言も喋らないわ。それでウマく行かなかったって言ってあたしに文句言われたんじゃ、あたしだって頭に来るわよね。だから、「今後一切お前たちには女の子を紹介しない」って宣言してやったわ」

### 第3話

「それはちよつと可哀そうな気がするなあ。Wデートとかしてデートの作法とか教えてやればよかったのに」

「・・・なぜかお前はWデートに自信を持っているようだが、兄貴の場合はあくまで結果オーライだからな」

「そうは言うけどね、愛ちゃん。女の子紹介してもあのザマじや紹介以前の問題よ。それにあいっただって言うほどモテなかった訳じゃないのよ」

「えっ、そうなんですか?」

「・・・それは初耳だ」

颯太だつて篤だつて残りの連中だつて結構ラブレターとかもらつてたのよ」

「じゃ何で」

「颯太が廊下でラブレターを女の子から渡された時は、真つ赤になつて叫びながらその場から逃げ出したわ。泣きそうになつた女の子を慰めるのにどれだけ苦労したか。まあ、あたしの新しい彼女になつてくれたんだけどね」

「そういうところが腹黒いと言われる由縁なんですね」

「偶然よ、偶然。泣きそうなその子を慰めていたら頼れると思つたらしくて向こうからアプローチしてきたのよ」

「颯太君は文句言わなかつたんですか?」

「その子の顔も覚えてなかつたわ」

「なんかあの連中がモテたいだの彼女が欲しいだのって言うのは、足し算覚えたレベルで相対性理論解きたいって言っているようなもんだね」

「そう、だから女の子の紹介は止めたの。それ以前に女の子に慣れろつて言つて」

Yukiは簡単に言つたものの、現在の状況を見ているととても成功しているようには思えない。それどころか颯太など寝ぼけたアン

ナちゃんにキスされただけで気絶する始末だ。

「大体あいつらに女の子を紹介するのは大変なのよ。5人まとめて紹介しないといけないし」

「えっ、5人に順番に1人ずつ紹介していけばいいんじゃないんですか」

「甘いわ、愛ちゃん。あいつらはね、すきつ腹の野犬と同じなの。待てなんて命令聞きやあしないわ。それに何より嫌いなのが人の幸せだっていうんだから、そんな連中に1人ずつ順番に紹介してやるから待つてろなんて言っても馬耳東風よ。誰か1人に女の子を紹介したら残りの4名が全力で妨害してくれたわ。そういう時のあの連中のチームワークとききたら、そりや見事なもんだったわよ」

Yukiはそう言うため息をついた。

「なんかごく身近でそういう連中の話聞いた記憶があるんだけど……」

「(……ああ、立派なFFF団の団員になれる)」

Yukiがコーヒを一口飲んで話を続けた。

「そのうちある事件があつてね」

「事件ですか?」

「そう、同級生が他校の不良に恐喝されたの。それを聞いた連中が喜んでやつて……」

「なっ、何で喜ぶんですか?人の幸福が許せないからですか」

「ああ、人つてのは自分以外の他の4人のことよ。喜んだのはお金を取り返すという名目で大つぴらにケンカできるから。何しろうちの学校の不良は、あの5人に散々ボコボコにされてたから目をつけられないように七三分けにして厚底メガネかけてたほどだもの」

「それってもう不良って言わないじゃ?あの連中つてケンカ強かつたんですか?」

「メチャクチャ強かつたわね。何しろ5人同士で幼稚園の頃から毎日殴り合っていた上に、朝夕とお母様会にボコボコにされていたんですもの強くもなるわよねえ。1人で不良中学生の10人程度なら勝てたわ」

「意外な事実だね」

「そりやもう喜び勇んで学校飛び出してって、その日のうちにお金を取り戻して帰ってきたわ」

「ほう」

「それで済めば友達思いのいい話だったんだけどね」

「やっぱりロクでもない方向に話は進むんですね」

「外部の不良を殴る喜び覚えちゃったもんだから、ことあるごとに「不良狩りだー」とか言って学校飛び出して行ったわ。おかげで仲間内の殴り合いはなくなっただけ、篤が颯太のお弁当の卵焼きを食べちゃったという理由で殴られる不良も災難よね」

「どんだけハタ迷惑な連中だったんですかねえ」

「まあ、一般生徒には絶対に手を出さなかったのは偉かったわね。お母様会の躰が行き届いていたのね」

「……躰というよりも猛獣の調教に近いと思うのだが」

「まあ、そんな風にそこら中の不良を好き放題に締めていたら、不良連中が団結しちやってね。ある日、70人の不良に河川敷に呼び出されたのよ」

「おい、ちよつとどうするんだよ向こうは70人だよ」

「心配するなYuki。俺たちは1人で10人は倒せる」

「……10×5で50人しか倒せないんだけど、残りの20人はどうするのさ」

「む、そうだったか。ということは1人で……何人倒せばいいんだ？」

「……」

「……」

「……」

「……たぶん18人くらいじゃないか？」自信なさげに剛が言った。

4人が答えを求めるように一斉にYukiを見つめた……  
「1人14人!!中学生なんだから割り算くらいできるよになれよ。しようがない僕も一緒に行くよ」

「いや、ちよつと待てYuki。気持ちはありがたいが、お前にかすり傷でも負わせたら、不良相手のケンカどころじゃないほどの大ケガを



お袋たちに負わせられる」

「そうそういつも、何かあったらあんたたちは死んでもいいから、Yuki君を守りなさいと言っているんだ」

「うちなんかあんた達が死んでも誰も泣かないけど、Yuki君になにかあったら国家の損失だからねと言っているぞ」

「ふ、冷たい母親ばかりだな。うちなんか私の本当の子はYuki君であなただは橋の下で拾ってきた影武者なんだから、ちゃんとYuki君の盾になるのよと言ってるだけだ」

「いや、それはお前がわが子という事実には耐え切れなくなって、現実逃避しているだけじゃないのか？」

ケンカ前の緊張感もヘツタくれもあったものではなかった。

## 第4話

「まあ、ババア共のたわ言は、どうでもいいが俺たちとしてもYukiをケンカに巻き込むことは本意じゃないからな」颯太が言うと他の4人も頷いた。

「なんでだよ。ケンカだったら一緒に行くのが友達じゃないか」

「あのなYuki。一緒にケンカに参加しようがしまいが俺たちは友達だ。それに今回はどうあがいても勝ち目のないケンカだ。それに付き合わせてお前にケガさせるのは、俺たちにとっちゃ殴られるよりツライんだよ。」

適材適所ってやつだ。俺たちは身体を張るしか能がねえが、お前だって頭と顔と金持ちの家柄と女にモテるしか能がねえじゃねえか」「そのうち一つでもあれば十分じゃないのかな？」少女は首をヒネった。

「まあ、一緒にケンカに連れていってくれないことを慰めてくれようとしたんだと思うけどね」Yukiが苦笑いして言った。

「で、どうなったんですかケンカは」

「あたしが作戦を立てたわ。時間は河川敷に6時だったから、5時頃に行って草の中に隠れていること。6時過ぎてもバカ正直に出て行かないで、連中がシビレを切らして帰り支度始めた頃に襲い掛かること。相手が1週間くらい寝込む程度のダメージを与えて1人10人倒すこと。そして、ある程度倒したら速攻で逃げて、勝負つけようなんて思わないこと」

「ここで勝負つけなくてどうすんだよYuki」颯太が不満げに言った。

「黙ってな、颯太。70人を一度に倒せるわけないだろう。だから1回で決着つけようと思わないで、今日はできるだけ倒してくれればいい。後は僕が何とかする。ケンカに直接参加しないんだからこれだけは聞いてもらおうよ」

「まあ、Yukiがそこまで言うなら・・・」

「とにかく、あんた達は何も考えないで相手ができるだけ倒してきて

くれればいいから」

「要するに暴れるだけ暴れて逃げてこいということだな」

「そう、倒す時は必ず1週間寝込む程度にダメージを与えるんだよ。そこが一番大切だからね」

5人は首を捻りながら河川敷へと赴いていった。

「それでどうなったのYukiさん」いつしか少女はYukiの話にのめり込んでいった。

「そこから、あたしは友達やら知り合いやら彼女たちやらツテというツテをたどって、相手の不良共の住所を全員分手に入れたの。あ、ついでにそいつらの学校の女生徒の制服も」

「今、さりげなく「彼女たち」って言わなかった？何股かけてたんだろう。大体なんでそこに女生徒の制服なんてYukiさんの趣味がでてくるんですか?」

「失礼ね。その時にはまだ、そんな趣味なかったわよ。単に交渉に必要だっただけよ」Yukiは真顔で言った。

「なかった」って過去形なんですわ……」少女はYukiの白いブラウスと黒のタイトスカートを眺めながらいった。

「で、夜の8時頃まで待っていたら、あいつら4人がボロボロになって帰ってきたわ」

「4人?」

「そう、颯太がいなかったの。あたしがそう聞いたら、「奴は俺たちを逃すために我が身を犠牲にして敵を食い止めてくれた。尊い犠牲に敬意を表して今日という日を忘れないでおこう」と篤が遠い目をして言ったわ」

「だいたい何が起きたか想像できるボクってもう汚れているんだよね」少女は悔しそうに言った。

「同感ね。そしたら案の定10分くらいして颯太がヨロヨロと戻ってきたの」

「あれで死なないとはしぶとい奴だな」

「篤、ちゃんと転がしたのか?」

「ああ、2〜3回転してたろう」

「あんた達、颯太は我が身を犠牲にしたとか言ってなかった？」

「何が、我が身を犠牲だ」ゼイゼイと荒い呼吸で颯太が言った。

「敵に追われて4人で走って逃げていたら、いきなり篤が俺の足を引っ掛けて転がしやがった」

「偶然だ」

「その後お前ら、「お前の犠牲は忘れない」とか「せめて10分は持ちこたえろ」とか

「お宝の日本はちゃんと処分してやる」とか俺に向かって叫んで逃げていったろうが」

「俺にできるせめてものハナむけだ」

「なんでお前が俺のお宝のありかを知っているんだ」颯汰が篤の胸ぐらを掴みあげた。

「怒っているのはそこなんだね」

「思春期の男子生徒にやあ最重要事項だろうが」

「足をかけて転がされたのは、どうでもいいのかい？」

「その前に俺が剛を後ろから突き飛ばしたが、持ちこたえやがったからな」

「どうやら、お互いに誰かを生贄にしようとしたことは、この5人に取って大した問題ではないらしい。」

「ああ、もう君たちの価値観はわかったから。それで結局何人ノシて来たんだい」

「正確には数えてないが、40人以上50人未満ってところじゃないかな」

「ちゃんと1週間は寝込むくらいのダメージを与えておいたんだろうね」

「ああ、あれだけ人数がいちやこつちも手加減できないからな。下手すりゃ2週間は入院するくらいのダメージを与えておいたぜ」

「うん、上出来だ。じゃ残った相手は最大で30人ってとこだね」

「お礼参りだな」

「僕は平和主義者なんだよ」Yukiはニヤリと笑って言った。

「悪い顔しているぞYuki。じゃ、どうするんだ」

「まあ、後は僕にまかせて、とりあえず君たちは明日から僕が呼び出すまで学校休みな」

「お前、馬鹿か。学校休もうもんならお袋に殺されるわ。何の取り柄もないんだから、せめて皆勤賞だけは取れと言われているんだ」

「大丈夫、みんなのお母さんたちには僕から連絡しておく。学校の様子帰りに一人一人狙われたんじゃないからね」

「まあ、2日もあれば情報も集まると思うから、そこから行動開始さ」

## 第5話

「ということでは問題は解決したんだけどね」

「ちよつ、ちよつと待って下さいYukiさん。ジャンポで急遽打ち切りになった漫画だって、こんな無茶な終わり方しませんよ」

「Yuki先生の次の作品にご期待下さいってところかしら。それより愛ちゃんケーキ食べたくない？」

「あ、すいません頂きます。いや、そうじゃなくてですね。これまで好き放題に張りに張りまくった伏線が全然回収されてないじゃないですか、伏線回収放りなげたエヴァンゲリ……うぐ」

「……その辺でやめろ。ある一定の層を敵に回すことになる」「あたしそんなに伏線張ってたかしら？」

「他校の女生徒の制服とか5馬鹿を2日休ませたとか、「彼女たち」に協力してもらったとか」

「いや、「彼女たち」は別に伏線じゃないんだけど」

「そこも気になるポイントなんです。それで結局ケンカはどうやって収めたんですか？」

Yukiはウェイトレスを呼んでケーキを3人分注文した。

「5馬鹿を休ませている間に、怪我して休んでいる不良共の家を突き止めたわ。住所のリストは持っていたから、お見舞いに行ったの」

「お見舞い……ですか？」

「そう、私は平和主義者ですものフフ」

「Yukiの奴、人をいきなりこんなところに呼び出しながら自分が遅刻してやがる」颯太が不機嫌そうにいった。

「大体、あいつは俺たちを自分の部下のように思っているフシがあるな。いくらババア共に絶大な信用があるとは言え我慢も限界だな」篤も答えた。

「一回キツチリと誰が立場が上なのか教えてやらんといかん」颯太が頷いた。

「それは楽しみね。どうやって教えてくれるのかしら？」

2人が振り向くと花束を抱えたセーラー服の美少女が立っていた。

「む、誰だお前は？見たことない顔だが」颯太が言った。

「馴れ馴れしい口をきく女だ。俺たちに関わると不幸になるぜ」篤がニヒルに決めた。

「あんたにしては珍しく正論ね、全く言う通りだと思っわ」美少女は恐れる様子もなく言い返した。

「……なあ、篤？何で、俺たちはこの女と普通に喋れてるんだ？いつもなら後ろも見ずに逃げ出しているところだ」

「そういや、そうだな？こんな可愛い女だったら気絶しているかも知れん」

「あんた達の本能ってのは大したものね。今までこの格好が見破られたことはないんだけど」女の子の声が一段低くなった。

「その声はおっお前、まさかYukiか」二人が同時に叫んだ。

「そうだよ。これから怪我人のお見舞いに行くから、二人にボディガードしてもらおうと思ってさ」

「というか、何でお前の趣味の格好での外出に俺たちが付き合わんといかんのだ？」

「誰が趣味の格好だよ。ケンカを円満に収めるための作戦だよ。いいからついておいで」

「女装は趣味じゃなかったんですか？」少女は再びYukiの格好を上から下まで眺め回して言った。どこから見ても色気のある大人の女性だ。

「あら、今だって別に女装なんて趣味じゃないわよ」

「それじゃ何でいつも女性の格好なんかしているんですか？」

「実益よ。女の格好の方が偉いオジさま方にウケが良くて仕事が回ってくるのよ」

「……はっ腹黒い」

やがて3人は一軒の家の前に立っていた。

「いいかい、最初はボクが出るからその後に入ってきて。最初からあんな達がいたら警戒されるからね。そのためにわざわざあいつの学校の女子の制服を着てきたんだから」

Yukiはそう言うとチャイムを押しした。

「はい、どなた？」女性の声でした。

「あ、私同じクラスの近藤と申します。佐藤君が怪我をしたと聞いてお見舞いにきました」

「それはどうもありがとうございます。入って頂だい」と言って玄関が空いた。

母親は2人の男を見てギョツしたようだが、可憐な美少女がいることで警戒を解いたらしく部屋に案内してくれた。目的の少年は体中に包帯を巻いてベッドに寝ていた。

「誰だお前、学校じゃ見たことねえ面だな」怪我人は、制服を来た見覚えのない女生徒を見て言った。

「そうだろうね。ムダ話をする時間はないんだ、単刀直入に言うよ。今回のケンカはこれで手を打たないかい？」

「ああ、ふざけているのかお前。こんな体にされたんだぞ。治ったらアイツらをやってやるさ」

Yukiの目がスッと細められた「70人でたった5人を呼び出して、40人以上はやられてるんだよ。勝ってるあたしたちが引き分けにしてやろうと、こちらから手を差し出してやってるのに、その手に唾吐きかけるなんざ、いい度胸じゃないか。

治ったらあたしたちを的にする？上等だ、そこまで言われてテメエの傷が治るのをのんびりと待っててやるほど、あたしは気が長くねえんだ。ちようどベッドに寝ていることだし、1週間とは言わず1年は寝込ましてやらあ。中学でダブって下級生と一緒に卒業つてのも乙なもんだぜ」

「おい、Yukiもういいだろう」颯太が指を鳴らしながら言った。

「後は俺たちが話をつけるさ」篤も不気味に笑いながら言った。

「こう言ってるけどどうする？話が終わりならあたしは帰るわ。最近は何物騒だからこの二人をボディガード代わりに置いていつてあげる」

「バカ野郎。この2人がいる方がよっぽど物騒じゃねえか」

「そんなことないわよ。刺激さえしなければ・・・」

「だっ黙ってればいいんだな」

「いいえ、呼吸音に敏感なの」



「息するなつてことじゃねえか」

「あらいやだ息をするしないは自由よ。じゃ私はこれで。生きていたらまたどこかで会えるわね、きつと」

「おつ、おい。帰るならこの二人連れていってくれ。わかった、手を引く。グループからも抜けるから」

「あら」Yukiは妖艶に微笑んでいった。

「物わがりのいい人で助かるわ。じゃ、話をついたから二人とも帰るわよ」

「ちよつと待てYuki。俺たちは何のためにここに来たんだ」

「そうだ。せめて一発」

「あんた達はボディガードって言ったでしょう。これからお見舞いに行くところが沢山あるんだからグズグズしている時間はないわよ」

颯太と篤を部屋から蹴りだしながらYukiが言った。

Yukiという所の「穏やかな」お見舞いは、3日かけて終了した。

## 第6話

「で、残りの不良20人を放課後に河川敷に呼び出したわけよ」幸せそうにケーキを頬ばりながらYukiが言った。

「おい、女。俺たちを呼び出すなんざいい度胸だな。お前何者なんだ」「わたしはまあ、こいつらの保護者というか飼い主というかそんなもんね」

「(おい、Yukiの奴何か言いたい放題いってるぞ)」

「(保護者はともかく飼い主ってなんだ飼い主って)」

「(そうだそうだ。大体あいつから餌なんざもらったことはないぞ)」

「(そこを問題にするなバカ)」

「(要するにYukiの手下ってことだろう)」

「あのね、あんたたち。今、緊迫したいいい場面なんだからそんなバカなやり取りはもう少し小声でやってくれないかしら」

「だいたい俺たちのケンカだったはずなのに、なんでお前が仕切ってるんだ」

「アンタたちに好き放題やらせてたら話が大きくなるからでしょ。70人とケンカして40人寝込ませたなんて学校にバレたら退学ものよ」

「お前が1週間寝込ませろと言ったんだだろうが」

「ことを収めるためには仕方なかったのよ」

「内輪の話はいい加減にしやがれ」まるつきり無視されていた敵のリーダーが叫んだ。

「ああ、ごめん。あんまりこいつらがバカなもんだから・・・で、何の話だっけ?」

「お前も大概バカじゃねえか。降参しろとかいう話だろ」Yukiの目がスツと細くなった。

「・・・降参するっていうのならあたしをバカと言った無礼は許してあげるよ。大体20人じゃこいつらに勝てないだろ」

「ふ、あんまりナメてんじゃねえぞ」と言う不良連中は一斉にバットやら木刀やらの武器を出した。

「おい、あいつら武器出してきたぞ」と言いながら颯太が回れ右して歩きだそうとした。

「今更、どこ行こうってのさ」Yukiは颯太の襟首を捕まえた。

「いや、そろそろ門限の時間なんだ。破るとママンが厳しくて……」

「あ、俺はラジオ英会話講座の時間だ。早く帰らなきゃ」

「俺は、そろそろピアノのレッスンの時間だ」

「妹にミルクをやる時間だ」

「えーつと、おっ俺は、帰って明日の予習を……」

「よくもまあ揃いも揃って0.2秒で嘘だとバレるようなデタラメをほざけるもんだね」呆れたようにYukiはため息をついた。

「お前は簡単に言うがなYuki。バットで殴られるとなあ……」  
篤が抗議するように言った。

「バットで殴られるとなんなのさ」

「痛いんだよ……」

「よし、じゃあ作戦を伝えるよ……」すぐにみんなの方に向き直ってYukiは言った。

「ちよつと待て、お前が聞くから答えたんだぞ。少しくらい俺の話にリアクションしてくれ」

「時間の無駄だったよ。とにかくあんた達はボクの後ろで腕でも組んで不敵な顔で笑っているだけでいいから」

「あの、もうそろそろいいですかあ」敵のリーダーが待ちかねて声をかけてきた。

「ごめん、本当にごめんなさい。もう打ち合わせ終わったから」Yukiが申し訳なきように答えた。

「ふ、あんまりナメてんじゃねえぞ」と言うと不良連中は一斉にバットやら木刀やらの武器を再度とり出した。

「そこから始めるのかよ」呆れたように剛が言った。

「ふーん、武器を持てば対等になれるってかい。じゃこつちも武器を出そうじゃないか」Yukiはポケットからホイッスルを出した。

「こいつ意外とバカだな。止めとけYuki。どれだけ吹いてもマグマ大使はやってこない。それは俺が小学生の時にさんざん試した」

「試したのかよ。いやYuki、笛じゃバットには勝てんぞ」

「いや、わからんぞ。Yukiは笛で戦う武術を修めているのかも知れん」

「いくら何でも笛じゃ勝てんだろ。せめて金属の笛だったら……」  
「それでも無理だろ。逃げるための合図だと思う」

「あんた達、うるさい!!いいかげんに黙って見てな」Yukiはキレ気味に5バカを怒鳴りつけた

Yukiは周囲に向けて笛を吹いた。すると草原の中から、野球、ラグビー、サッカー、バレーやバスケットなどのユニフォームを来た男たちが200人ほど立ち上がった。

「あんた達、学校でカツアゲやイジメなど結構あこぎな真似しているみたいだね。そこであんた達の学校の生徒に声かけたのさ。立ち上がるなら今しかないよってね。20人ってことは1つの学校で4人の不良か。どんだけ強くても協力した一般生徒に太刀打ちできるかねえ。おまけに今までの恨みもあるだろうし、どうなることやら……」

さすがに不良どもも事態が把握できたらしく自らの不利を悟ったようだ。

「ちなみに仲間が戻ってきたら勝てるなんてバカなこと考えるんじゃないよ。あんた達のお仲間は、わたしの真摯な説得を受け入れて真っ当になるって約束してくれたんだからね。あんた達の仲間は正真正銘ここにいる20人だけさ。それでもやるかい?」

「わかったよ。俺たちの負けだ」バットを放り投げてリーダーが悔しそうに言った。

「ついでに言っておくけど、後でここに参加したあんた達の学校の生徒に手を出すんじゃないよ。例え他の学校の生徒が手を出したとしてもあんた達がやったと見なすからね。それがいやなら一生懸命に守ってやりな」

## 第7話

「…………なあ、おいYuki」颯太がYukiの袖を引っ張る。

「これを潮時に不良グループなん…:なによ、颯太いいところなのに」

「この様子だと今日も殴り合いはないのか」

「殴り合わせないために、あたしが苦勞して根回ししてきたんじゃない」

「話が違うぜ。暴れられるっていうから、今までずっと我慢してきたんだぞ俺たちは」

「そうだ」

「とりあえず、あいつらを殴らせろ」

「なんのためにお前のボディガードとやらをしたと思ってる」

「この青春の熱いリピドーを……」

「自分で何言ってるのか分かってないだろ。話し合いで済んだんだからそれでいいじゃない」

「そこまで言うなら俺にも考えがある」颯太はそう言うと、不良グループのボスの所へ歩み寄った。

「おい、お前。なんて名前だ？」ボスに声をかけた。

「どつ土井だけど……」ボスがビビりながら答えた。

「そうか、土井君。君の悔しい気持ちはよく分かるぞ。心配するな、俺は弱い者の味方だ。俺たちで力を合わせて、あの悪の女首領を倒そうではないか」

「なっ…………」あまりの事態にYukiが言葉を失っていると  
「なるほど」

「その手があったか」

「よし、俺も乗った」

「俺も行くぞ」と残りの4バカも不良側に駆け寄った。

「どうしたYuki。目元を押さえたりして。泣いてるのか」颯太が挑発するように言った。

「あんたたちのあまりの頭の悪さに眩暈がしてるのよ」

「ふふふ、その減らず口もここまでだ。散々、子分扱いしてくれた恨み

を晴らしてやる」

「言っても聞かないわよね。不良たちは好きにしなさい」と言つてYukiがホイッスルを吹くと同時に200人の運動部員が襲いかかってきた。不良たちはたちまち逃げ出した。

「へ、素人なんぞ、俺たち5人で十分だぜ」篤が叫んだ。

「忠告しておくけど……」Yukiが諭すように言つた。

「一般学生に手を出したらお母様方が黙っちゃいないわよ」

「しまった。それを忘れていた」

「汚ねえぞYuki」

「どの口がそんなことホザくのかしらねえ」呆れたようにYukiが言つた。

「待ちたまえ君たち。話し合おうじゃないか」

「我が国には平和憲法と言うのがあつて……」

「暴力はいけないよ君たち。暴力では何も解決しない……」

5人が200人の運動部員の波に飲み込まれていくのをYukiは頭を振りながら見つめていた。

「ボク、あいつらの事をずっとバカバカつて言っていたけど誉め言葉になつてた気がする」少女がため息をつきながら言つた。

「……我が兄ながら恐ろしい男だな」少年も言つた。

「まあ、わたしも正直びつくりしたけどね」Yukiが苦笑いしながら言つた。

「で、どうやって仲直りしたんですか？」少女が尋ねた。

「仲直りつて、別にケンカした訳じゃないから特別仲直りなんてしてないけど……」

「でっ？」Yukiは目の前にある颯太の頭をグリグリ踏みつけながら言つた。

「でつとは？」同じく土下座している篤が聞いた。

「何してるのかつて聞いてるんだよ」

「見りや分るだろ土下座だよ。というかお前は意味も分からずに人の頭を踏みつけてたのか？」颯太が頭を起して怒鳴つた。

「そりや廊下で5人が揃つて土下座してりや理由も聞きたくなるだ

ろ」

「ババア共に言われたんだよ。結城君に土下座して許しを得るまで飯ヌキだつて」剛が答えた。

「許しつて何の？」

「昨日ボロボロで帰ったら、ババアに見つかつて事の顛末を洗いざらい吐かされちまつた。でYukiを裏切つたつてバレたらババアが激怒してな」

「それでさつきから気になつてたんだけど、なんでみんなそんなに絆創膏や包帯を巻いてるのさ。運動部の連中には問題になるからできるだけ怪我させないように言つてあつたはずなんだけど」

「心配するな。9割がたはババア共にやられた傷だ」

「運動部200人よりも強いんだね。お母さんたちが、あと5人いたら日本は戦争に勝つてただろうね」

「そんなことはどうでもいい。俺たちを許してくれるのか。メシがかかつてるんだ」

「まあ、そういう連中だと知つてて付き合つてるわけだから、許すも許さないもないんだけど……」そういつてYukiは考え込んだ。

しばらく考えると顔をあげてこう言つた。

「わかつた、許してあげるよ。ただし君たちを放し飼いにするのは心配だから、5人とも生徒会に入りな？」

「「「はあつ？」」」

「僕は会長だからね。会長直轄の執行役員ということにしよう」

「いくら会長でもそんなこと独断で決めていいのか？」颯太が聞いた。

「大丈夫。僕には君たちと友人という以外の悪評はないからね。生徒からも教師からも信頼はあるさ」

「いやあ照れるな」

「バカにされてんだ。俺たちと友人つてのは悪評なのか」

「何かプラスになる要素が一つでもあるかい」

「「「……」」」

その時、2人の女生徒が6人の後ろを通りかかつた。

「……でね、不良学生が300人ぐらいで河川敷で大乱闘したんだつ

て」

「怖いわね」

「救急車も10台以上でる大騒ぎだったらしいわよ」

「わあゝスゴい」

「それで勝ってこちら辺の不良を束ねることになったのが、うちの学校の裏番のスケ番なんだって」

「そんな強い人うちの学校にいたんだ」

「それがスゴく綺麗な人なのに、男の不良何十人も相手にしてそりやもうスゴかったらしいわよ」

「」「」「」

「..... Yuki、今の話はもしかして？」

「君達.....」 Yukiは血走った目で5バカを睨みつけた。

「今後、この話したら殺すから」



## 第8話

「あつ、あの連中を生徒会に入れたんですか」

「目の届かないところにおくと、また何やりだすかわからないからね」

「でも会長直轄の執行役員なんて重職……」

「名前はかっこいいけどただのパシリよ、パシリ」

「でも、いくらなんでも」

「まあ、運動会や文化祭で事件起こしてくれただけど、それ以外は平和なものだったわよ。それにとにかく高校入れるために勉強させなくちゃならなかったしね」

「Yukiさんが勉強見てあげてたんですか？」

「そうよ。あんまり底辺の学校行かれても困るしね」

「なんでまた……」

「いつ、一緒の高校行きたかったのよ」Yukiは少し頬を赤くして照れ隠しに横を向いて言った。

「だってYukiさん、全国模試でもトップクラスだったのに、あいつらと同じ高校って……」

「本当はね。中学は公立、高校は私立の名門からT大の理Ⅲに進学つてのが代々決まってるの」

「それなら中学から名門私立行けばよかったのに」

「それが子供に院長を譲った後は政治家になるのも慣習なの。選挙運動の時に、地元で友達がいないとカツコつかないでしょ。だから中学は地元の公立に行くの」

「一族挙げて腹黒いんだね……」

「だけど、あたしはどの高校からでも理Ⅲに入ってみせるって言って、反対押し切ってあいつらと同じ高校に進んだのよ」

「……そうだったのか。なぜYukiさんが同じ学校に行ったのかずつと不思議だったのだが」

「それをあのバカども「女にモテるぜ」と2年で辞めたのよ。信じられる……」

「信じられるかというよりも、中学の時にそれをやらなかったのが不

思議だなつと……」

「で、あいつらがいなくなったら面白くないから私も一緒に辞めようとしたら家族からお母様会からあの連中にまで反対されちゃって」

「お母様会までですか」

「凄かったわよ」「結城君、高校辞めたらこの子の体中の骨をブチ折るから」って」

「……それ、説得というよりは脅迫ですよ。おまけに自分の子供を人質に取るって」

「まあ、一番効いたのが颯太の言葉ね」

「……ロクなことは言わない気がするのだが」

「バンドで飯が食えるようになるまでは5年かかる。それにお前を巻き込むわけにはいかん。だからその間にお前は高校を卒業して、その時に気が変わってなかったら俺たちを助けてくれ」って」

「……颯太君の言葉で初めてまともな言葉を聞いたよ」

「で、とりあえず高校を辞めるのはやめて卒業を目指したわけ」

「ところでT大の理Ⅲはどうなったんですか？……」

「全部あいつらのせいよ」

「あの騒動で落ちちやったとか」

「失礼ね。高校時代は全国模試でずっとトップクラスだったわよ。理Ⅲにもストレートで受かったわ」

「でも今やってるのって……」

「あいつらが一緒にやろうっていったから、スタイリストを目指したの。売ればプロダクションのおエライさんにも顔が効くし、あいつらも売り出せるわ」

「それで理Ⅲに行かなかったんですか」

「そうよ」

「そうよって、もったいない」

「別に医者になりたかったわけじゃないわよ。ただ家が代々そうだからそういうもんだと思っていただけ」

「ご両親は怒らなかつたんですか」

「怒るも怒らないもないわよ」

「どっちなんですか」

「そういう場合は普通怒ったってとるべきものでしょ、愛ちゃん。親戚一同大激怒。1週間大喧嘩した挙句に家を飛び出て、私は勘当になっただわ」

「さすがに名門の家はレトロな風習が残っているんだね……」

「まあ、家は妹がいるから婿を取ればいいんだけど」

「ええ〜！Yukiさん妹がいるんですか」

「そうよ。愛ちゃんたちの1つ下で櫻ヶ丘学園に通っているわ。康太は何回か会ったことがあるわよね」心なしかYukiの顔がニヤけている。

「……会ったことはあるが、ほとんど覚えていない」

「まあ、あんな才色兼備で優しくてスタイルのいい子を覚えていないなんて」

「……何かYukiさんの雰囲気が変わってきたんだけど」

「……典型的シスコンって奴だな」

「あ、そうそう。こんな無駄話をしている場合じゃなかったわ。あなた達に大事な頼みがあったの」

「ボクたちにはですか？何かできることあるのかなあ」

「あなたたち文月学園だったわよね」

「……いちおうそうだが」

「妹の名前は茜っていうんだけど、櫻ヶ丘学園の演劇部なの。今度、文月学園と合同で演劇やるらしいんだけど、どうも好きな男ができたらしいのよ」

「……はあ？」

「その男を突き止めて欲しいの」

「……で、どうするんですか」

「……愛ちゃん……」Yukiは窓の外を眺めながら言った。

「なっなんでしようか？」

「日本の去年の行方不明者って83492人なんですって」

「それがなにか．．．．」

「それが83493人になったって誰も気にしないと思わない？」

「．．．．．」

「．．．．まあ、それはともかく少しくらいは手がかりがないと探し  
ようがないんだが」

「ああ、名前は分かっているの」

「それならすぐにわかるね。何て名前なんですか」

「．．．．木下秀吉っていう男らしいわ」

「．．．．．」

「．．．．．」

## 第9話

「じゃ手間をかけるけどお願いね」 Yukiはレシートを取ると入口に向かつて歩いていった。

「ねえ、どうしようか?」

「・・・取りあえず状況が分からんと対策もとれん。明日の放課後に中庭に来てくれ」

翌日の放課後、少年と少女は中庭で落ち合った。

「・・・とりあえず俺は櫻ヶ丘学園に行つて茜ちゃんの情報を集めてくる。お前は・・・」

「わかつてるよ。木下君を見張ればいいんだね、ボクにまかせておいて」

「・・・お前が断言して大丈夫だったためしがないんだが。分かっていると思うが、くれぐれも極秘行動で頼むぞ」

「ふふふ、誰に向かつてそんな口をきいているのさ、康太。こう見えてもボクは中学時代は、ダブルオー愛子と呼ばれて・・・」

「・・・お前がどういう中学生だったのか俺にはもう想像もつかんとにかく2時間後にAクラスの教室に集合だ」

「なんでAクラスなのさ」

「・・・Fクラスだと、余計な連中が多すぎる。隠密行動どころじゃない」

2時間後、あちこちと駆けずり回つて疲れ果てた身体を引きずるようにして、Aクラスにたどり着いた少年はドアを開けた。

ガラガラ・・・

「遅いよ康太。一体何してたのさ」いきなり少女の声が飛んできた。

「・・・いや、櫻ヶ丘学園に行つてきたのだが、ちよつとお前に聞きたいことがある。こつちに来てくれ」

「なに、どうしたの?何か問題でもあった?」少女がトコトコと傍にやってきた。

「・・・つかぬことを尋ねるが、お前は「極秘行動」という言葉の意味を知つてるか?」

「何それ？こう見えてもボクはAクラスだよ、知ってるに決まってるじゃん」

「……そうか、知ってたか。それならちよつと聞きたいんだが、なぜ雄二がここにいる？」

「坂本君の悪知恵を貸してもらおうかと思つて」

「……霧島もいるようだが」

「坂本君がいるなら代表がいるのは当然だよな」

「……明久もいるな」

「木下君の友達として意見を聞こうかと思つて」

「……島田と姫路の姿も見える気がするんだが」

「吉井君が参加するならぜひ自分たちもつて」

「……黒いオーラを噴出している木下優子はなんなのだ」

「家庭での行動を把握できるでしょ」

少女はどうだとばかりに胸を張った。少年は眉間を揉みほぐして心を落ち着けようとした。

「……それでは、隅の方でニコニコしているアンナはどうしたのだ」

「マスコットガールにピッタリだなつと」

「……だなつとじゃない。お前は「極秘行動」という意味を本当に理解してるのか？これでは、いつものメンバーより多くなつていてではないか」

「必要最小限のメンバーだと思っただけ」少女は悪びれず答えた。

「……マスコットガールを何に使うつもりだ、お前は」

「士気が高まるじゃん」

「……男は3人しかないぞ」

「康太は何も知らないんだね。アンナちゃんは女生徒にも大人気なんだよ」

「……そんな情報はいらん」

「じゃ、これは言わない方がいいのかな？」少女は顎に手を当てて考え込むように言った。

「……まだ何かあるのか？」少年は呆れたように言った。

「大したことじゃないんだけど、須川君がFFF団を引き連れて隣の教室で待機しているの」

「……要するに秀吉以外の全員に知られているということではないか」

「さすがに全員っていうことはないんじゃないかな？すぐ帰宅した人もいるし」

「……そんな話をしていてのではない。お前が考える「極秘行動」の意味を言ってみろ」

「そんな豆テストで遊んでいる場合じゃないでしょ」

「……いいから言ってみろ」

「まったくもう。「すぐく密やかに行動すること」。これでいいの？」

「……その結果がこれか？俺はお前が「木下秀吉君に彼女ができました。情報をお待ちしてます」と校内放送でもしたかと思っただぞ」「バカだなあ康太は。そんなことする訳ないじゃん」

「……校内放送するよりも多い人数が集まっているのだ。大体なんでFFF団にまで知れ渡っているのだ」

「ああ、それはだね……」

人気のない西校舎裏に一組の男女がいた。

「用って何……確かFクラスの須川君だったかしら（それにしてもFクラスの連中ってみんな締りのない顔してるわね……）」

「いっいや、すまん木下。大したことじゃないんだけど……」

「大した用じゃないなら帰りたいんだけど（このシチュエーションで秀吉のこと聞かれたら、こいつ殺すわよ私……）」

「いや、俺にとっては重要というか……」

「そうなの（早く言いなさいよ、ホラホラ……）」

「おっ俺、木下のことが好……」

「あ、いたいた。おーい優子」少女が大声で叫びながら木下優子のところへ駆け寄ってきた。

「なによ愛子。今大事なところなんだけど」不機嫌な声で優子が答えた。

「えっ？あ、須川君もいたんだ。ごめんね、すぐ済むから」空気をまっ





## 第10話

「康太はボクのやることにいつも反対ばかりするんだね。ボクに対する愛情を疑っちゃおうよ」

「……愛情の問題じゃない。お前が毎回アホなことするからだ」「じつじゃあ、愛情はあるんだね」

「……だからそんな問題ではないと……ん？」ここで少年は教室にるのが自分たちだけではなかったことに気がついた。

「」「」「ジューズ」「」「」

「……ゴホン。まあ、そういう訳だ工藤。以後気をつけろ」

「今さら工藤呼びわりされてもなあ……」

「……どれくらい？」

「いきなり何だ？翔子」

「……私に対する愛情はどれくらいあるの？雄二」

「愛情があること前提かよ。そうだなあ水素の分子量ぐらいか」

「……ポツ」

「なぜ、そこで照れる？」

「……原子核を分裂させたくらいの愛情？」

「水素爆弾作るつもりかお前は。水素原子1分子だ……グオオ」

「……みんながいるからって照れなくていいのに、雄二」

「言ってることは優しいが、このアイアンクローは何だ……グオオ」

「……雄二……」

「なっ何だ……グググ」

「……最近やつとリングを握りつぶせるようになった」

「おっ、お前は何をやってるんだ……グヌヌ」

「……朝、搾りたてのリングジュースを作ってあげたくて」

「握りつぶしてんじゃねえか……オオオ」

吉井明久は「止めるなんてとんでもない。雄二の不幸は僕の大好物だ」と独り言をつぶやきながらこの凶行を止めるでもなく眺めていた。いつもならこの辺りで秀吉が「お主らいいかげんにせんか」と止

めに入るところだが、今日はその秀吉はいない。ちょうどいいから最後まで見学してみることにしよう。うまくいけばリアルスプラッタ映画が見られるかも知れない。

「ちよつと翔子、いいかげんにしなさいよ」おや、思わぬ人が止めに入った。秀吉の姉、木下優子さんだ。性格は違ってもそこら辺はやはり双子なのだろうか？

「……なに？優子」

「なにじゃないわよ。そんなこと止めてさつさと行くわよ」うん、言葉遣いはちよつと荒い気がするけど、やっぱり根は秀吉と一緒になんだね。

「ほら、さつさと秀吉にヤキ入れにいくわよ」前言訂正。性根はFFF団とそっくりだ。彼女がFクラスだったら、きつとFFF団の幹部になれたことだろう。霧島さんはシブシブといった感じでアイアンクローを外した。

「……集まりの趣旨が変わっているのだが、お前は木下優子に何を言ったのだ？」

「いや、別にこれと言って……木下君に彼女ができたみたいだねって」

「……それだけで、あんなに怒り狂うものか？」

狂うのである。康太と愛子は知らなかったのだが、木下家の近所では木下「姉妹」は、評判の美人姉妹と有名であること。姉はややがさつで乱暴な残念美人と呼ばれ、「妹」はお淑やかで性格もいい娘と評判になっていること。その「妹」が本当は男だとバレた日には自分の評判は男以下となってしまう。そのため優子は、近所では女の子として振る舞うことを秀吉に強要していた。その秀吉に彼女ができた日には……なんとしても阻止せねばならないと心に誓う木下優子であった。

「愛子、秀吉はどこにいるの？」すっかり場を支配してしまった優子が尋ねる。

「えっと、今日は立稽古らしいから小体育館の舞台上で練習しているはず」少女が恐る恐る答える。

「わかったわ。みんな行くわよ」

もはや修羅と化した優子に逆らうものもおらず、一同はゾロゾロと後続いた。

「ねえ康太どうするの？」

「……こうなつてはしようがない。1メンバーのフリをしよう。幸い木下がリーダーになっているから、俺たちが主催者だとは思われんだろう」

「FFF団はどうするのさ？」

「……放っておけ。どうせ今頃は秀吉の処刑方法を巡って会議が紛糾している」

一同が隣のBクラスの前を通ると、教室の中から活発な議論が聞こえてきた。

「いや違う。最も大事なのはどうやって苦痛を長引かせるかだ」

「それも大事だが最大の苦痛量も考慮すべきだろう」

「方法は八つ裂を提案する」

「タンクローリーで少しずつ押しつぶすと言う手もある」

「面倒くさい。屋上から紐無しバンジーでいいだろう」

「とても高校の放課後の会話とは思えないね」そっと少女がささやいた。

「……気にするな。授業中も似たり寄ったりだ」慣れたという様子で少年が答えた。

## 第11話

一同は床を踏み抜かんばかりの勢いでズンズンと進む木下優子を先頭に小体育館に向かって進んで行った。

「……愛子、あのな」

「うん?どうしたの康太」

「……木下優子を抑えていてくれ。この勢いじゃいきなり秀吉に飛びかかりかねん」

「わかったよ。ボクにまかせて」

「……その言葉が返って俺を不安にするのだが」

木下優子が小体育館のドアを開けるなり叫んだ。

「秀吉、あんたねえ……キヤア、あつ愛子何するのよ」いつの間にか優子の背後に忍び寄っていた少女が後ろから優子の胸をワシづかみにしていた。

「いや、最近優子の胸が大きくなってきたなあと思つてさ」

「そりゃ最近ブラがキツくなつてつて、そんな話は今はどうでもいいのよ」

次の瞬間、

「明久君には早いです(ゴキユ)」

「雄二見ちゃだめ(シュパツ)」

という声と音がして、そちらに目をやると明久が首を雄二が目を押さえて床をのたうっていた。この一瞬の間になにがあつたというのか。

舞台上の演劇部員たちはこの様子をあつけにとられて見ていた。無理はあるまい。ドアが開けられるなりセクハラ騒ぎが始まり、男2人が苦しみながら床を転げ回っているのだから。

「お主たちは一体何をしておるのじゃ」秀吉が呆れたように聞いてきた。

「……いや、ただ稽古の見学に來ただけなのだが」

「とてもそうとは思えん惨状になつとるぞい。なぜに稽古の見学に來ただけで明久と雄二が床をのたうち回っておるのじゃ?」

「……それは、こちらにもいろいろと事情というものが……」  
「ちつちよつと愛子、いい加減にしなさいよ……」

「フッフ、良いではないか、良いではないか」

「……いい加減に止めんかバカ者。どこの悪代官だ、お前は」  
「イタツ、何すんのさ康太。優子を抑えろっていうから言われた通りにやっているだけなのに」

「……抑えろとは言ったが、セクハラし倒せとは言っていない」  
「それならそうと最初から言つてよね」と少女はブツブツ言った。

「……最初にそういう手段を考え付く奴はお前くらいしかない」  
「えっ、そっそうかなあ。へへへ、テレちやうよ」

「……念のために言っておくが、ミクロンも誉めていないぞ」  
「いや、本当に何しに来たのじゃお主らは？」秀吉がシビレを切らして尋ねた。

「……ああ、すまん。稽古を見学させてくれ」

「それは構わんが、静かに頼むぞい」秀吉はそういうと稽古に戻って行った。

「すまんかった、続きからやろうかのう」とロングの黒髪の女生徒に声をかけた。

「踊つて下さいますか」

「喜んで」

ジ~~~~~

「よかった、また会えて」

「なに？」

ジ~~~~~

「知らないでしょう、橋の上でお会いました」

「知ってるわ。3日前に川を見詰めていた」

ジ~~~~~

「……お主ら、見学するなら床にでも座つて見てくれんかのう。全員が舞台に顎をのせて頭だけ出されると、こちらからは打ち首が並んでいるように見えて気が散るんじゃが」

「なによ秀吉。観客が気になるなんて、そんなんでよく演劇なんか

やってるわね」優子が叫んだ。

「いや、そんな観方をする観客なぞ今までおつたことがないんじゃないか……」

「あの、木下さん。こちらの皆様は……?」黒髪の少女が言った。

「ああ、この際じゃ皆に紹介しておくかのう。こちらは今度一緒に劇をすることになった櫻ヶ丘学園の結城茜さんじゃ。見ての通り容姿端麗で身長も高くスタイルもいいので、櫻園の君と呼ばれているそうじゃ」

「わあ、そんなライトノベルに出てきそうな設定の人が現実にいるんだね……どうしたの康太?」

「……いや、なんだか自己存在を否定されたような気がしてな」  
「なに訳わからないこと言ってるのさ」

「……いや、分からなければいい」

「それで木下君。さっきのセリフからすると演題は「ロミオとジュリエット」だね」

「ほう、工藤はさすがにAクラスじゃのう。まさに「ロミオとジュリエット」じゃ」

「結城さんのジュリエットって綺麗だろうなあ」と少女はうつとりと言った。茜はさすがにYukiの妹だけあって、高校1年生にして美少女というよりも美女と言った方が似合う少女だった。

「あつあ、いや結城さんはロミオじゃ」秀吉がバツが悪そうに答えた。

「はあ?じゃジュリエットは誰が……?」

「……ワシじゃ」

「なんでまたそんな配役に?コメディにしたの?」少女は首をひねって尋ねた。

「つつつまり、あれじゃ。肉体的問題というか……結城さんの方がワシより5cmほど高くてのお」

なるほど、よく見ると茜の方が見た目にもハッキリと背が高い。これで性別通りに秀吉がロミオをやれば、まさにコメディになってしまう。

「……苦肉の策じゃ」秀吉が唇を噛みしめて悔しそうにつぶやい

た。

## 第12話

「あの木下さんこちらの皆様は……?」茜が言った。

「ああ、一番右端にいるのがワシの……」

「お兄様ですね。初めまして秀吉さんにはお世話になってます」

ピシツと空気が切り裂かれる音がして優子の額に血管が浮いた。

「どこの世界にスカート履いた兄がいるのよ」優子が答えた。

「うちのお兄様はいつも履いてますけど?」動じることなく茜が答えた。

愛子と康太はYukiを思い浮かべた。間違ったことは言っていないのだが……

「まつまあ、そういう趣味の人もいるかも知れないけど、それにしたって雰囲気見れば分かるでしょ」

「ええ、やっぱりお兄様の方が秀吉さんよりも少し凛々しいですわね。クスツ」

ピキピキピキ……額の血管の数が増殖していく。

「ねえ、秀吉。「お姉ちゃん」ちよつとあんと話がしたいな」優子は舞台上に登ると秀吉の襟首をひつつかんで舞台の袖のカーテンの奥に引きずっていった。

「まつ待つのじゃ姉上。ワシは何の関係もない……」秀吉の悲鳴が聞こえる。

「うるさい。あんたの紹介が悪いからあんなことになるでしょう」

「紹介も何もワシは一言も口を挟んでおらんのだ。彼女が姉上をみた率直な感想が……痛い痛い。姉上、その関節はそっち方向には曲がらないと……」

「弟のくせに姉よりも先に彼女を作ろうなんていうのが生意気なのよ……ガン、ガン、ガン」

「いっ一体、何の話かさっぱりわからんのじゃ。痛い痛い、顔は止めて欲しいのじゃ……」

「やっぱり兄弟同士っていいですわね」茜が平然と言った。

「(分かってて言ってるのかな?)」少女が少年に囁いた。



「…… Yukiさんの妹だからな。何を考えているのやら」

「ところで他の皆様は」

「ああ、俺はFクラスの坂本だ」

「…… 妻の翔子」

「まあ、ご結婚されているのですか？お似合いのカップルですね」茜はにこやかに言った。

「…… 雄二」

「何だ？」

「…… この人はいい人。ぜひ結婚式の来賓に……」

「お前の交友関係はどれだけ狭いんだ。初対面でちよつと褒められたくらいで来賓にするなんて」

「…… 結婚式そのものは認めてくれるのね」

「ああ、祝電くらいは打つ……グオオ」ああ、雄二。その返答は……

「…… 本当に雄二は素直じゃない」案の定、霧島さんの神速のアイアンクローが炸裂した。

「素直に嫌がつていると何回言えば……グヌヌ」

「…… 私は雄二以外と結婚するつもりはない。雄二も私以外と結婚させるつもりはない」

「俺の意志はないのか……オオオ」

「…… 最大多数の最大幸福という言葉がある」

「結婚望んでいるのはお前一人じゃねえか……グググ」

「…… 私と生まれる予定の39人の子供たちがいる」

「あの人、あのお二人は何をなさっているんでしょうか？」

「えーと、ある意味愛を確認しあっているというか……」少女が汗をかきながら答えた。

「キスみたいなものでしょうか」

「ひつ広い範囲ではそうとも言えるかも……」

「随分、過激ですね」

「なっ慣れだよ。今じゃすっかり風景の一部になっちゃって誰も気にしないから。それよりこちらがFクラスの吉井君」

「初めまして吉井明久です」

「女の人と仲良くしちやダメ。アキちゃー吉井君」

「今、何か聞こえませんでしたか？」

「えっ? 詳しいや僕には何も聞こえなかったなあ」どれだけ神出鬼没なんだ玉野さん。

「こちらのグラマーな女の子が姫路瑞希ちゃん。スリムな方が島田美波ちゃんだよ」

「まあ、随分動きにくそうな方と動きやすそうな方ですね」

「??」

「どういう意味かしらアキ」

「そりや美波の場合には邪魔するものがないから動きやすいと、後ろから顎に手を回して背中を肩に担ぎあげ・・・ギヤア」見事なアルゼンチン・バックブリーカーだ。美波の技のレパトリーは着実に増えている。

「何が邪魔するのかしらね・・・」

「そりやもちろん胸が・・・ウギヤア、揺らさないで」

「あのお、この学園の方はコミュニケーションを体で伝える風習でもあるのですか」茜が不思議そうな顔で尋ねた。

「・・・そんな風習はないのだが」

「(というか茜ちゃんが喋る度に被害が拡大しているんだけど、本当に天然なの?)」

「(・・・いや、確信はないから疑ってもしょうがないだろう)」

「で、お二人は？」

「・・・俺はFクラスの土屋康太だ」

「・・・土屋・・・康・・・太?もしかして康ちゃん？」

「覚えていたのか？」

「もちろんよ。お兄様の親友の弟さんですもの。お久しぶりだわ」

「(・・・あいつらの関係を親友と言っているのかな)」

「ところでこちらの方は？」茜が今気がついたとばかりに言った。

ムツとした少女が一步踏み出して言った。

「ボクはAクラスの工藤愛子」ここで少女は少年をチラつと見た。

「・・・(今の視線は何の意味だ?)」少年は首を傾げた。

「ボクの名前は工藤愛子。康太の……」少女はハッキリと少年を見つめた。

「……………(こいつまさか俺に言わそうとしているのではないだろうな)」少年はイヤな予感に襲われた。

「だからあゝ。ボクは工藤愛子で、ここにいる土屋康太の……」今度はハッキリと首をクルリと90度回して少年を睨みつけた。少年と少女はしばらく睨み合っていた。

「……………3度も言うな。ああ、茜ちゃん。愛子は俺の彼女だ」

「やだなあ康太。そんなにハッキリと言われちゃボク照れちゃうよ」

「……………お前は正気なのか」

「まあ、康ちゃん。凄いわ。彼女ができるくらいに女性に耐性ができたのね。昔は……」というと茜を少年の手を握った。

ブ~~~~~

「ああ、康太が噴水のように鼻血を……」

「あら、昔と全然変わってないわ。おかしいわね？」茜は悪びれもせずと言った。

「……………たった数分で部隊が全滅した」

「(本当にわざとじゃないんだよね?)」

小体育館では、康太が血の海に沈み、秀吉と雄二と明久の叫び声がこだましていた。

## 第13話

「あ、でもね。康太もだいたい女性に慣れたんだよ。彼女のボクだと、ホラ」と少女は少年の手を握り締めた。

ブ~~~~~

「鼻血がさっきの倍ぐらいの高さで吹き上がりましたね」

「……………やっ、やっぱり、彼女への愛情かなあ」

「……………俺を殺す気かお前は」

「だっ大丈夫。康太の愛情はしっかり感じたよ」

「……………愛情以前に責任を感じんか、バカ者」

その時、それまで黙っていたロシアン娘が口を開いた。

「アイコ。ワタシも紹介してくだサイ」

「あ、ごめん。茜ちゃん、こちらロシアからの留学生のアンナちゃん」

「はじめまして。ソータの妻のアンナデス」

「颯太というとお兄様の親友の？この学園って学生結婚してらっしゃる方が多いんですね」

「アンナちゃん。こちらYukiさんの妹の茜ちゃん」

「オウ、Yukiとそっくりです」

「あら、そんなにお兄様に似てますか？私」茜ははにかみながら言っ  
た。

「ハイ、目元と胸のあたりが瓜二つデス」

「……………胸？（ピキ）」茜の表情が凍  
りついた。

「ハイ、目元と胸がYukiにソックリデスね。さすが姉妹デス」

「ありがとうございます。アンナさんこそ素敵なお胸で。学校では

「肉」ってあだ名がついてらっしゃいませんか？」

「お肉は好きデスね。アカネは野菜が好きでシヨウ」

「美味しいですものね。お野菜……………ほほほ」

「フフフ……………」

「ほほほ……………」

「こっ康太……………あの二人普通の会話してるのにやたら怖いんだけ

ど」

「……あの辺りの温度が下がっているに違いない。天然同士の争いは恐ろしい」

「とりあえず止めた方がいいのかな？アツアンナちゃんはロシアで劇とかやらなかったの」

「ハイ、ワタシもロミオとジュリエットをやったことがあります」

「へえ、アンナちゃんのジュリエットなら綺麗だろうなあ。あ、茜ちゃんみたいにロミオだったのかな。オスカルみたいだろうなあ」

「イエ、私は「森の木（G）」の役でシタ」アンナは誇らしげに大きな胸を張って答えた。

「……はい？」

「森の木（G）」の役デス」

「ロミオとジュリエット」にそんなに木の役が必要だったっけ？それよりアンナちゃん、そんなに綺麗なのにロミオでもジュリエットでもなかったの」

「最初はジュリエットに決まりそうだったんデスが、私が絶対にイヤだと言ったので「森の木（G）」の役になりまシタ」アンナは誇らしげに更に胸を張って言った。

一体、木（G）の役の何がそんなに誇らしいんだろうか？もしかしたらロシアの「ロミオとジュリエット」は木が主役なのだろうか？

「その役はセリフが多かったのカナ？」少女が首をかしげながら尋ねた。

「アイコ何をいいマスカ。木は木デス。立ってるだけです」

「じゃ、何でそんなに誇らしげなのさ……」

「ハイ、その頃ちょうどパパからゲリラ戦の偽装を習っていまシタ。それが学芸会の木の役に活かせまシタネ」アンナは思い出すように遠い目をしながら言った。

「……また、あの親父か」

「ちなみにアンナちゃん、それ何時の頃なの」

「ハイ、小学校4年の学芸会デス。偽装がよくできたとパパが誉めてくれまシタ」

「……………恐ろしくシユールな舞台だっただろうな」

「そつそかあ。アンナちゃんも満足しているならいいんだけどさ。とりあえずお父さんが日本に来る時には、最低でも1週間前には教えてくれるかな」

「ドウしてデスカ？」

「いや、こつちにも逃走……いや、心の準備が必要だから」

「ワカリマシタ。チャンと教えます」ロシアン娘は何を疑うこともなく明るく答えた。

「……………ところでみんなはどうしたのだ」少年が見渡すと、舞台の袖から秀吉がよろよろしながら舞台へと出てきた。

「まったく、姉上は人の話を聞かんから困るのじゃ」

「あんたが紛らわしいことするからじゃない」

「ワシは一言も喋っておらんというのに」

「そういう噂が流れているというのは、あんたの不徳の致すところなのよ」

「なんだか木下君。もう立ち直つちやつているんだけど」

「……………奴もFクラスだ。打たれ強いはず」

そういえば、いつの間にか坂本君も吉井君も立ち上がっていた。

この連中、ゾンビの血でも輸血しているんじゃないだろうか？

「まあ、とりあえず稽古を再開するぞい。結城も舞台上がってくれ」

ボクたちは床に座って舞台稽古を見ていた。

木下君のジュリエットに茜ちゃんのロミオ。最初聞いた時には違和感があったんだけど、慣れてくるとこつちの方がいいような気がしてきた。

「……………間違いないね」

「……………え？」

「間違いないよ。木下君のあの目は茜ちゃんに恋している目だよ」

「……………一応聞くが、根拠は何だ」

「フッフ、カミソリよりも鋭いボクの女のカンだよ」

「……………なるほど、よく分かった」

「康太もそう思うでしょ」

「……いや、お前のカンがそう告げているのなら100%  
それは無いということがわかった」

「何でそうなるのさ」

「……数々の外し続けてきた女のカンとやらの実績からだ」

## 第14話

「何さそれ、あんまりボクの女のカンを馬鹿にすると痛い目にするよ……」

「……まともに相手して痛い目にあつたことは数々あつたが」

「……まっまあ、それはそれとして今回は本当なの。ボクのアンテナにビンビン来てるの」

「……それはロクでもない電波でも受信しているだけなのではないか？」

ギャアギャアしている間に稽古が終わつたらしい。演劇部員が体育館の窓を閉めて掃除を始めた。

「おい、ムツツリーニ。どうすんだ？」雄二が聞いた。

「……今日はもう何もないだろう。みんな帰ってくれ。また、何かあつたら頼む」

「今日の成果つてバックブリーカーかけられただけなんだけど」明久が言う。

「……それは俺の責任ではない。島田と話し合ってくれ」

「じゃあ、土屋君また来週ですね」

「ああ、そういえば明日は日曜日だったわね」

「そういえば明日はソータとデートでシタ」

「ええ、アンナちゃん。あの颯太君といつの間そんな約束を……」

「ハイ、この間格闘ゲームで私が勝つてデートの約束をしました」

「……どこに行くのだ？」

「ハイ、角のコンビニでプリンを奢ってくれるそうデス」

「……デートだね？」

「ハイ、デートです」ロシアン少女は嬉しそうに言った。

「……まあ、アンナが満足ならばそれでいいのだが、我が兄ながら随分安上がりでデートを済ませる男だな」

その時、秀吉が少年の傍にやってきてささやいた。

「ムツツリーニ、後でちょっと相談があるのじゃが……」

「……秀吉が俺に相談とは珍しい何だ」



「それは後で話すのじゃ。ちよつと残っていてくれんかのう」

やがて誰もいなくなつた体育館に秀吉と少年・少女だけが残つた。

「・・・話はなんだ」

「いや、ちよつと言いくいのじゃが、明日結城とデートすることになつてのう」

「・・・いや、それは止めておいた方が」Yukiの顔が脳裏をチラつく。

その時、少年を押しつけて少女が目の前にたつた。

「まったく。木下君も恋愛の相談だつたらなんでこの恋愛エキスパートのラブリー愛子に相談しないかなあ？康太みたいな朴念仁に相談したって何の役にも立たないよ」

「工藤は、そんなに恋愛経験が豊富じゃつたのか？」

「・・・いや、彼は康太が初めてだけど、大事なのは中身なの」  
「・・・ロクな経験はしてなかつたはずだが」

「康太、うるさい。とにかくボクに任せておいて。どんな女の子でもオチるデートプランを作つてあげるよ」

「いついや、そこまで張り切らんでも普通のプランで十分なのじゃが、大体好きかどうかも・・・モゴモゴ」

「・・・好きじゃないのか？」

「こういう経験がないからよくわからんのじゃ。何しろワシを男扱いしたのは結城が初めてじゃし」

「それだけなの？」

「いや、結城のことを考えると胸がモヤモヤとするのは確かなんじやが」

「恋だね!!」

少女は力強く断言した。

「・・・いや、待て愛子。あまりにも即断すぎるだろう」

「なにを言ってるのさ康太。ボクの女のカンと木下君の胸のモヤモヤが同じことを言っているんだよ。これが恋以外のなんだって言うの」  
「・・・胸焼け」

「何がどうあつてもボクの女のカンを否定するつもりなんだね」

「……いや、ある意味で信頼はしているんだが」

「もつとポジティブに信頼しなよ」

「ケンカはあとにしてデートプランをお願いできんかのう」

「ふふふ、任せておいて」少女を手帳を取り出すと頁を開いた。

「……何だそれは」少年が尋ねた。

「今週、映画館でやっているタイトルと上映時間の表だよ。康太にいつ誘われてもいいように毎週作っているのに一度も役に立ったことはないんだけど」

「……そんなもの作っているとは知らなかったが、そういうのは誘われる側が作るものなのか?」

「本当に毎週毎週ボクの努力を無駄にしてくれたよね」

「……もつと有意義に時間を使え」

「それはともかく今週は何がお勧めなのじゃ?」

「初デートだからね。大人の恋愛ものでムードが盛り上がるものがいんじゃないかな?」

「そういわれてもわからないのじゃが。工藤なら何が見たいのじゃ」

「えっ、ボク? えーつとこのタイトルだったら「金魂 the mov

ie 血風江戸桜」かな?」

「……」

「……どこが大人の恋愛だ」

「だって金魂だよ、金魂。ボクの大好きな金魂の映画なんだよ」

「……初デートで見る映画じゃないだろう」

「工藤、このドクロマークは何じゃ」

「それは呪われた悪魔の映画。絶対に見ちゃいけないの」

「……なにに「悪魔の盆踊り」?」

「全米ホラー映画ヒットNo.1という血塗られた映画だから絶対に見ちゃだめだよ」

「いや、さすがに見るつもりはないが、結局お勧めは何なんじゃ」

「うーん、この中じゃ「プリティ・オーメン」かな? 女の子に人気だよ」

「わかったのじゃ。それにするのじゃ」

秀吉は見た目にもウキウキと体育館を出て行った。

「……大丈夫なのか？」

「何が」

「……お前が絡んだことがものすごく心配なのだ」

「ボクはお勧めを教えただけだよ。そうそう問題が起こるわけがないよ」

少女は明るく答えた。

## 第15話

「……と大見得を切っておきながらこれは何なのだ」二人はシネマコンプレックスの映画館の入口付近に潜んでいた。

「デート初心者同士だから、ボクたちがフォローしてあげないと」

「……いや、うまく行かせるとマズイのではないか？」

「康太は稽古の時の茜ちゃんの目を見なかったの？あれは絶対に恋する女の子の目だよ」

「……お前がそういうからには絶対に違うと思うのだが」

「ボクの眼力まで否定するつもりだね。それに映画の話をしていた時の秀吉君の目は好きな女の子をデートに誘う時の夢見る目だったじゃない」

「……お前に「金魂 the movie」の話を30分も熱く語られて、俺に助けを求めている目にしか見えなかったのだが」

「その前後をみなよ」

「それはそれとして、もし両方ともがそうならば益々Yukiさんがマズいのではないか？あの人なら本当にやるぞ」

「ねえ、康太……」少女は遠い目をしてしみじみと言った。

「……何だいきなり」

「……ボク思ったの。あの二人って本当にロミオとジュリエットみたいだなあって。好きあっている同士が家の反対で引き裂かれるの」

「……いや、反対というか邪魔しようとしているのは、嫉妬にかられたシスコンの兄だけなのだが」

「その兄がスーパーサイヤ人並みの能力を持っているんだよ」

「……」

「……だからね、ボク考えたの」

「……何かいい方法があるのか」

「……せめて、いい思い出作ってあげようって」

「……戦うつもりもないわけだな」

「あ、来たよ」と少女が叫んだ。道の反対側から白いワンピースを着て

全身からお嬢様オーラを出している茜とチノパンにネルシャツ、革のベストを着て男装オーラを全開にしている秀吉がやってきた。茜は秀吉の手に抱きついていた。

「うっうっうっうっ腕を組んでいるよ」

「……これくらいでウロたえるなバカ者。たかが腕を組んで……ウグ」

「康太だって、これくらいで鼻血出さないでよね。でも、改めて見ると凄い違和感だよ」

「……仲の良い女子高生にしか見えんな」

「今日が初デートなはずなのに、あの慣れようってすごいよね」

「……俺たちの数段上にいるな。別に監視する必要はないのではないか？」

二人はシネマコンプレックスのAホールでやっている「プリティ・オーメン」に入っていた。

「……まあ、あの調子なら大丈夫だろう。せつかく来たんだ俺たちも何か見て帰ろうか？」

「ぜったい金魂金魂金魂金魂金魂金魂金魂金魂金魂金魂」

「……だから落ち着け。別に金魂もかまわんぞ」

そのとき「あくいくちゃん」と言つて肩をポンと叩くものがいた。

「えっ誰？……ユユユukiさん」

「何でそんなに驚いているのかしら？」

「なっとなっとなっ何でこんなところいるんですか？」

「何でって、映画館にいたら映画を観に来たに決まっているじゃない。」

「プリティ・オーメン」前から見たかったのよ」

「いやあ、それはどうかな？」

「どうかなってどういう意味？ずっと見たくてやっと時間が取れたんだから」

「(どっとうするのさ康太)」

「……今、入られたらあの二人と鉢合わせだ。何とか注意をそらせ)」

「いや、つまり「プリティ・オーメン」よりもYukiさんにピッタリ

の映画があるんですよ」

「あたしにピッタリの映画？どれかしら」

「それはあの……」と言って少女は入口を指差した。

「(Bホール……は満席だし、Cホールはデイズニーだし、Dホールも満席、Eホールは金魂だし、Fホール!!) FホールのあれがYukiさんにピッタリです」

「あれがあたしにピッタリなの……?」YukiがFホールを見て言った。

「そうです。もう、上から下までYukiさんにあつらえたかのような映画で……」

「(……おい、愛子ちよつと待て)」

「うるさい康太。とにかくFホールしか空いてないんだから、何とかFホールにYukiさんを誘導しないと」

「(……しかし、いくら何でもあれは)」

「もう、Yukiさんは絶対にみて今後の人生の参考にするべきです」少女は演説に力が入る。

「ふーん、愛ちゃんから見えてあたしにぴったりに見えるんだ……」

「ええ、もうボクのイチオシです」少女が力強く断言した。

「『悪魔の盆踊り』があたしにピッタリだとは思わなかったわ……」心なしかYukiの声が凍っていた。

「え?」少女はここでFホールの入口に貼ってあったポスターを見てみた。

「全米ヒットNo.1ホラー 禁断の映画 『悪魔の盆踊り』」とデカデカと書かれていた。

「愛ちゃんはあたしをそういう風に見ていたのね……」

「いや、外見的なことじゃなくて内面的なものも含めてですね……」少女が必死に言い訳をした。

「(……墓穴をメーター単位で掘っているぞ)」

「なるほどねえ。聞いてみなきやわからないものね。愛ちゃんがお勧めならぜひ見てみるわ」Yukiがニッコリ笑った

「(たっ助かった) はっはい、ゆっくり堪能してきてください」

「でも、自分だけじゃどこがあたしに合うのかわからないから、愛ちやん一緒に観て解説してね」

「えっえっ？ボクはこの手の映画は………キヤアキヤア」

Yukiは無言をもちわざとに愛子を引きずって映画館に入ってしまった。

「……冷静に考えてみれば、あいつとはホラー映画しか見たことがないのだが」

## 第16話

少年は駅前のマツコでコーヒーを飲んでいた。携帯の呼出音がなった。

「．．．．．もしもし」

「よくもよくも．．．．．」

「．．．．．電話の呼びかけは普通「もしもし」なのだが」

「うるさい!!よくも大切な彼女を見捨ててくれたね」

「二人とも映画に入ったら秀吉たちの見張りはどうするのだ」

「おかげでボクがどんな目にあつたか．．．．．」

「まあ、ゆっくり話を聞いてやるから駅前のマツコまで来い」

しばらく待つっていると少女がお客さんを跳ね飛ばさんばかりの勢いで駆けてきた。

「康太あゝ、よくもよくもおゝ」

「．．．．．まあ、落ち着け。昼はまだだろ。ビッグマツコでも喰え」

「えっ、ああ。ありがとう。モグモグ．．．じゃなくて、よくもボクを

Yukiさんに売ってくれたね」

「．．．．．ポテトもあるぞ」

「気がきくね。あつケチャップは?．．．．．」

「．．．．．ほら」

「やつぱポテトにはケチャップがないとね．．．．．だからあ、こんなことじゃボクはごまかされないよ」

「．．．．．お前はオレンジジュースだったな」

「やつぱ彼氏だね。ボクの好みをちゃんと覚えていてくれたんだ」

「．．．．．まあ、とりあえずゆっくり喰え」

「うん、お腹すいちやつてさ．．．．．モグモグ」

「．．．．．」

「ゴクゴク、パクパク」

「ふうく食べた食べた」

「(．．．．．完全に忘れてるではないか)」

「本当にひどい目にあつちやつたよ」



「…………で、どうだったのだ」

「Yukiさんだったら、無関係のボクを「悪魔の盆踊り」に引つ張り込んじやってさ」

「…………いや、そもそも勧めたのはお前だったのだが」

「目を閉じてただけけど、音楽だけは聞こえるじゃない」

「…………まあ、どうせセリフは英語だからわからんだろう」

「それをYukiさんがボクの耳元で実況中継するんだよ。ひどいでしょ」

「…………よっぽど自分に似合うといわれたのを根に持ってたのだな」

「その反応が面白いとか言って大声で笑っちゃってさ」

「…………情景が目には浮かぶようだ」

「それも盛り上がる場面ほど、大声で笑うもんだから他の人の叫び声とYukiさんの笑い声がコーラスしてたよ」

「…………周囲の観客はYukiさんの笑い声の方が怖かっただろうな」

「おかげでボクは筋肉痛になっちゃおうし」

「…………画面を1秒も見ないでよくそこまで怖がれるものだ」

「もうYukiさんは大喜びで、別れ際に「愛ちゃん、また一緒に映画観ましようね」だって」

「…………よっぽど楽しかったんだろうな」

「もうコリゴリだよ。こんなことならAホールに茜ちゃんと木下君がいるって教えてあげればよかったよ」

「…………そうなったらホラー映画じゃなくて、スプラッター映画が観られたらどうな」

あらかた食べ終わった少女は、オレンジジュースを飲みながら言った。

「そういえば、あの2人はどうしたのさ」

「…………まあ、映画が終わって腕を組んで出てきた」

「うっ腕ってボクたちだって組んだことないのに」

「…………落ち着け。人は人、我は我、されど仲良くだ」

「なんか良いこと言っているみたいだけど、康太がもう少し勇気があ

ればボクたちだつてとつくに・・・ブツブツブツ」

「・・・後半がよく聞こえなかったが、俺たちが同じことしたら確実に3歩で輸血が必要になるが」

「いいかげんにその体質やめなよ」

「・・・趣味で鼻血噴き出しているんじゃない」

「で、結局2人はどうしたのさ」

「・・・いや、べたべたしていたと思ったら、あっさりと駅前で別れたのだ。茜ちゃんはそのまま駅に入っていたし、秀吉はそのアクセサリーショップに入って行った」

「男らしさにこだわる木下君がアクセサリーを買うはずないから、茜ちゃんへのプレゼントだと思うんだけど、一緒に選べばいいのにな。変なの」

「・・・まあ、サプライズプレゼントかも知れん」

「じゃ、今日はこれ以上やることはないってことだね」

「・・・そうだな、俺たちも帰るか」

「そういえば康太、よくもよくもボクを見捨ててくれたね」

「・・・こんなに時間が経ってから思い出し怒りをするな、バカ者」

## 第17話

朝、教室に行くときみんなが秀吉の机を遠巻きに取り囲んでいた。

「……………何をしているのだ？」

「あつ、ムツツリーニおはよう。秀吉の様子が何か変なんだ」明久が答えた。

「……………変とは？」

「見ていりゃわかる」

雄二にそう言われて秀吉に目をやると机に肘をついて顎をのせ、まぶたを半分閉じて目の焦点が定まっておらず、唇の端に幸せそうな微笑みを浮かべている。

「……………あれは何だ？」

「それが分からんから困っている。演劇バカでどんな時にも表情を変えないことが自慢のあいつが感情をダダ漏らししている」

「……………随分と幸せそうだが」

「今はそうなんだけど、もうすぐだよ」

「……………もうすぐ？」言っている意味がわからずとまどっていると、秀吉は急に様子を変えた。苦しそうに胸を押さえて目を固くつぶつてうずくまった。

「……………大丈夫なのかあれは？保健室に連れていった方がいいのでは」

「心配いらん。さつきからあれを3分置きに繰り返している」

「……………3分置きにくりかえしている？」

「何か憑りついたんじゃないでしょうか？」姫路が心配そうにいう。

「黒魔術と言えば霧島さんだね。ちよつと呼んでくる」と明久が走り出しそうなのを雄二が止めた。

「待て明久。翔子を連れて来たら本当に魔王を召喚しかねん。大体秀吉には周囲が見えてないぞ」

「幸せになったり、苦しんだりか。まるで恋してるみたいね」島田がボソッと言った。

ピクッと秀吉が反応した。

「なつなにを言うのじゃお主らは。そりやあ結城はワシを初めて男性とみてくれた女子じゃし、容姿端麗スタイルも性格も良いが、ワシらはまだデートで映画をみただけの関係じゃし、何があつたわけではない。まあワシも女子に対してこんな気持ちになつたのは初めてじゃからいろいろと感情も揺れることもあるが、べつ別に好きと言うわけじゃないので勘違いしてもらつては困るぞい。だが別に嫌いとかいうことではないので間違えんようにな。今度の公演が終わつたらできれば付き合つて欲しいと告白しようかとも思つておるのじゃが、それは別に好きということとは関係ないぞい。そこを間違えてもらつては困るのう、ワハハ」

「この長セリフを一息で言えるなんてさすがに演劇部ね」島田が変な関心をした。

「要するにあのロミオ役の櫻ヶ丘の女の子を好きになつて、公演後に告白することを考えてたら幸せになつたり怖くなつたりしたということか」

「ゆつ雄二、どうしてそのことを知つておるのじゃ」

「今、お前が全部説明したんだよ」雄二が呆れたように言った。どうやら秀吉はだいぶテンパつているようだ。

「力になつてあげたいけど、こういう問題で役立ちそうなのはいないんだよね」

「土屋君は愛子ちゃんと付き合つてますけど」姫路がいった。

「……残念ながらあいつの例は普通の女の子には全く役に立たんと思う」

「まあ、この中に秀吉にアドバイスできる奴もいないだろうしなあ」雄二が言うのと全員がうなづいた。

「まあ、ウチらはせいぜいうまく行くことをお祈りしてあげるわ、木下」

「頑張つて下さい、木下君」

後ろの方で須川とFFF団幹部が協議していた。まだ、やつてたのかこの連中は。

「いかに秀吉と言えど制裁を加えるべきだろう」

「だが、秀吉は秀吉であって男子ではないのだから、秀吉に制裁を加えると言うのはおかしくないか？」

「そうだな。今まで秀吉に手を出した男子に制裁を加えてきたわけだから整合性が歪とれん」

「だが、問題は手を出した奴の性別ではなくてターゲットの性別ではないか？」

「そうになると島田に手を出している清水に制裁をくわえるべきということになるが、今まで誰も清水を問題にしてなかったぞ」

「……ウムムム」

「……ウムムム」

「……ウムムム」

「わかったぞ！」須川が大発見をしたかのように叫んだ。

「……何だ、須川」

「……何が分かったんだ」

「つまり問題は手をだした奴の性別ではなく、ターゲットの性別でもない。真に問題なのはターゲットが俺たちにとってどうでもいいかそうでない……ギャア」

須川の背後に忍びよっていた島田が神速の動きで、須川の両肩の関節をハズした。

「まったくあんた達はとんでもなく失礼なことを大声で。そんなろくでもない話だったらせめてウチに聞こえないように話しなさいよね」ポンポンと手をはたきながら島田が言った。

「まっまあ、いろいろあるだろうが、秀吉。芝居に集中してそれから考えろ」

「そういえば木下君。ロミオとジュリエットは最後のキスシーンが見せ場ですけど本当にやるんですか」

「なっ何をいうんじや姫路。個人的には芝居のリアリティを迫及するためには本当にやるべきじやとは思うが、高校生の芝居じやからのう女の子にそこまで要求はできん」

「……その方がいい」その方が秀吉が生き延びられる可能性が数%は増える。

やがて鉄人が入ってきてみんな席に着いた。

## 第18話

演劇は大盛況だった。というよりも阿鼻叫喚と言った方がいいかもしれない。最後のクライマックスのシーンでロミオ役の結城さんが秀吉に本当にキスしたからだ。櫻ヶ丘学園の生徒は黄色い悲鳴をあげ、文月学園の生徒（主にFFF団）は怒号を発していたからだ。

「……雄二」

「何だ」

「……これにサインして」

「婚姻届だったらお前の家の金庫に嚴重にしまわれているだろう」

「……婚姻届じゃない演劇部への入部届け」

「ただ手回しがいいんだお前は。大体、入部してもすぐ主役になれるわけじゃねえだろ」

「……なってみせる。どんなに苦難な道でも」

「なんでお前が言うのと、いちいちセリフがドス黒く聞こえるんだ？それにキスシーンがある劇なんてそうそうはないだろう」

「……大丈夫。たとえ演目がバイオハザードでもキスシーンを入れてみせる」

「誰がゾンビ同士のキスシーンで喜ぶんだ」

さすが霧島さんだ。現に舞台上でキスシーンが演じられたというのに物事に動じないにもほどがある。

「ねえ、康太」

「……何だ」

「どうするのこれ？」

「……とりあえずの問題点はFFF団なのだが」そういつて後ろの席を振り返った。

「あれ？ここはどっ」

「俺、何してんだ」

「ママ、ママどこ」

「……どうやら連中はショックのあまり記憶の改変を行っているらしい。秀吉はなんとか無事だろう」

「となると問題は……」

「……あの人の人だろうか」

「ごまかせるかな」

「……かなり難しいだろう」

「どれくらい難しいと思う？」

「……ゴルゴ13が依頼を断るレベルだな」

「それは不可能っていうのと同じ意味だよ」

「それやこれやで演劇は終わった。だが、僕たちには本当のメインイベントが残っている。メンバー全員（含むマスコットガール）は西校舎裏へと集まっていた。

「この生徒は何かとここだな」

「……私は一度も雄二に呼ばれたことがない」

「お前がいつもFクラスを強襲しているからだだろうが」

「しー、雄二。夫婦漫才は止めて。秀吉たちが来たよ」

秀吉と結城さんが連れ立って歩いてきた。

「本当にキスをするとは驚いたのじゃ」

「あら、私は役者ですもの。リアリティを追求すれば台本に従うのは当然ですわ」

「ところでこの芝居が終わったら、結城に言いたいことがあったのじゃ」

「私も木下さんにぜひ聞いて欲しいことがあったんです」

「そっそうか、奇遇じゃのう……」

「ええ、本当に……」

「……」

「……」

「結構、いい雰囲気ですね」姫路さんが羨ましそうに言った。

「ええ、本当に」美波も同調するが、なぜか苦々しげだ。

「あのバカ弟、あんだだけ言い聞かせたのに」木下さんが今にも飛び出さなばかりだ。

「結城はワシのことを男だと思っているのかのう？」

「変なことを聞くんですね。立派な男の人だと思っっていますわ」



「そうか、すまんの。変なことを聞いて」

「ふふふ、変な木下さん」

これはビックリ。秀吉をちゃんと男と認識する女の子がいるなんて、脳の認知機能に異常がないことを祈ろう。

「まあ、そりやそうだと思っけど」と工藤さんが言った。

「……あれがあだからなあ」とムツツリーニも言う。どうもこの二人の様子がこの間からおかしい。

「結城、ワシと……」

「木下さん、わたしの……」

二人が同時に叫んだ。

「ははは、重なってしまっただのう。それじゃ一緒に言おうではないか」  
「ふふふ、そうですね。その方が恥ずかしくないですね」

「せえゝの」

「結城、ワシと付き合ってくれんかのお？」

「木下さん、わたしのお兄様になってくれませんか？」

「」「」「へっ？」「」「」僕たちは叫んだ。どういう意味だろう？

「すまん、結城。緊張のあまり言い間違っただようじゃ。もう一度頼む」

「はい」

「せえゝの」

「結城、ワシと付き合ってくれんかのお？」

「木下さん、わたしのお兄様になってくれませんか？」

「どっどういう意味かの？兄になるというのは」

「はい、私には勘当になった大好きな兄がいるんです。それが木下さんのように女装が似合うキレイな人で、家からいなくなっただけで毎日が寂しくて。それで木下さんのお兄様になってくれればと」

「ワシを男と思っていると言っておったが……」

「えっ？兄って普通は男ですよね」

「ワシの初恋が……むっむっごいのじゃ」秀吉は膝をついて泣き崩れた。

「あのお木下さん。そんなに負担でしたら週に1日だけでもいいのですが」茜ちゃんが無邪気に追い討ちをかけた。

## 最終話

翌日のFクラスで3人は相談をしていた。

「どう慰めりやいいんだ」

「結構、致命的だよな。兄になれってのは彼氏としての望みはないって言われているようなもんだから」

「……初恋があれば今後に影響するだろう」

その時、教室のドアが開いて秀吉が入ってきた。

「おい、秀吉。その髪が随分バサバサで、目が真っ赤だぞ」

「雰囲気が全体的にやさぐれているんだけど」

だが秀吉はそんな三人を無視して席につくとちやぶ台に足を投げだした。

「ふん、もうやっとな。ワシは今日からグレルのじゃ」といいながらポケットからタバコの箱を取り出すと一本啜えた。

「バカ止める。こんなところ鉄人に見られたら停学だぞ……って、これシガレットチョコじゃねえか」

「当たり前じゃろうが、タバコは二十歳になってからに決まっておる」  
次にどうやって持ってきたのか徳利を取り出して口をつけた。

「ふん、酒でも飲まんややってられんのじゃ」

「やめなよ秀吉。そんな飲み方していたらアル中になっちゃうよ……って、これ甘酒だよな。アル中より糖尿の心配しないと」

「未成年が酒を飲めるわけなからうに」

「お前のグレルってのはどんなんだよ」雄二が叫んだ。

「はあ、茜ちゃんが言うにはYukiさんがいなくなって寂しかったと」少女が言った。

「まあ、そうなの。あの子ったらそんな健気なことを」ファミレスのテーブルでYukiがハンカチを目に当ててさめざめと泣いていた。

「……そういうわけで、秀吉をYukiさんの代わりに兄にと」少年が続けた。

「本当に昔から優しい子だったわ」Yukiはなおも泣き続けていた。

「まあ、演劇でキスしたのはちよつと行き過ぎのような気がしますけど」少女が恐る恐る伝えた。

「いいのいいの、劇の上でのことですよ。私の代わりだと思ったんだから、その秀吉君もきつといい子なはずよ」

「(言ってることが最初と180度違うじゃないか……)」

「そうだわ、こうしちやいられない。あの子にお小遣いの一つもあげてこなきゃ。あとシャネルのスーツでも誂えてあげて……」

「いや、Yukiさん落ち着いて。高校生にシャネルのスーツは似合わないんじゃない」

「じゃ、私は行くわ。愛ちゃんも康太も手間かけたわね。今度何か奢るわ」Yukiはレシートを掴むと入り口に向かっていった。

「恐ろしいほどの兄バカだね」少女が呆れたように言った。

「……Yukiさんにあんな弱点があつたとはな」少年も言った。

「……ねえ？」学校に戻る道すがら少女が言った。

「……なんだ？」少年が答えた。

「やっぱり、あのこと言わなくてよかったんだよね」

「……ああ、あれなあ」

秀吉の告白が轟沈した時、茜が隠れてみていたメンバーの方に向かってやってきて、康太にこう言ったのだ。

「じゃ、康ちゃん。今のこと、お兄様にそのまま伝えてね」

「……へっ？」

「だって、康ちゃんと愛子ちゃんって、お兄様から私の様子を調べるようにって依頼されたんですよ」

「どっとうしてそう思うのさ」

「だって、康ちゃんは昔からの知り合いだし、愛子ちゃんはこの間のタコ&ライスのライブで舞台に出ていたじゃない。あのグループのスタイリストはずつとお兄様がやっていたから愛子ちゃんだって知り合いでしょ。そんな二人が急に周辺をかぎ回っていたら誰だってわかるわ」

「えーっと」

「だから今のことをそのまま伝えてくれれば、お兄様ったら単純でシ  
スコンだから感激してお小遣いくらいハズんでくれると思うの」

「……みんな芝居だったのか？」

「あら、失礼ね。木下さんのことは好きよ、演技者としては。ただ、お  
付き合いでするとなるとねえ」

「……」

「だいたい、お兄様が勘当なんかされるから、結城の跡継ぎが私に回っ  
てきたんですもの、お小遣いくらいハズんでもバチは当たらないと思  
わない？」

「……俺たちが報告しなければどうするのだ」

「そうね、その時は……」茜はニコッと笑って言った。

「本気で木下さんのこと好きになっちゃうかも……」

「まっまあ、Yukiさんは喜んでいたし、これでいいんじゃないか  
な」

「……それはそうだが、問題は」といいながら少年はFクラスの  
ドアを開けた。

「……あれをどうすればいいのだ？」

「ういー、ワシのことなぞ放っておいて欲しいのじゃ」と言いながら甘  
酒の徳利を煽りクダを巻く秀吉の姿があった。

## 10. 伊賀と忍者と妹と 第1話

うらかな日曜日の午後、土屋三兄弟とそれぞれの彼女たちはリビングでのんびりとお茶を飲んでいた。最近はこれが習慣になっておりダラダラとした午後を過ごすのが楽しみだった。

「へえ、凄い子がいるんだね」新聞を読んでいた愛子がつぶやいた。  
「…………どうした愛子」

「昨日、代々木でやった全日本中学陸上競技大会で、100m、200m、400m、走り幅跳び、走り高飛びで日本記録を出して優勝した女の子がいるんだって」

「へえ、スーパーガールだね。将来が楽しみだ。愛ちゃん何て子？」

「えーっと、土屋陽向（ひなた）っていう子らしいんだけど、康太たちの親戚だったりして」

「「ぷーっ」」三兄弟が飲んでいた紅茶を一斉に吹き出した。

「汚いなあもう、一体どうしたのさ」

「そっ、その子の学校はどこだい、愛ちゃん」

「学校？えーっと伊賀中学って書いてあるね」

「ちなみにその大会はいつまでだ？」

「えーっと、昨日で終わつたみたいですよ」

三人は一斉に立ち上がり同時に出口目掛けて走り出した……ものだから三人が出口で詰まった。

「ええい、どかんか陽太、康太。お兄様を先に通せ」

「その腹を引込めろ兄貴。長男としてちゃんと迎えてやれ」

「…………どっちにしる俺は無関係だ。早く通してくれ」

「なんでいきなり見苦しい兄弟の争いが始まっているのさ」

「ドコ行きますかソータ」

「俺は1週間ほど旅にでる。誰か来てもどこ行ったか分からないと伝えろ」

「あのか陽太君、どうしたの」

「由美ちゃん、誰か来たら僕は1週間ほど前に死んだと伝えてくれ」  
「聞きたくもないけど、康太はどうして欲しいのカナ？」

「……俺は……KGBに拉致されたと……」

三兄弟がリビングから駆け出そうとしたその時、玄関のチャイムがなった。

「ピンポーン……ピンポーン……ピンポーン……ピンポーン  
ピンポーンピンポーン……」

「しまった。もう手が回った」颯太が怒鳴った。

「兄貴、裏口から逃げよう」

「……駄目だあいつの事だ。裏口には既にトラップを仕掛けてあるに違いない」

「ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピン  
ピンピン……」

「あのく何の話か全然分からないけど、早く玄関開けてあげた方がいいんじゃないカナ？」

「ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピン  
ピンピン……」

「そうは言うがな、愛ちゃん。俺たちに取ってはこの玄関は地獄の釜の蓋のようなもので……」

「よく理解できないけど、じゃボクが開けますね」そう言って愛子が玄関の鍵を開けてドアを開くと同時に

「可愛い妹をただけ待たすのよ、このバカ兄貴共」という声と共に飛んできたバッグが愛子の顔を直撃した。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。てつきり兄さん達だと思つて」女の子が必死に謝っていた。

「いや、もういいんだけど……どちら様？」愛子が尋ねた。

「あたしは土屋陽向、この3馬鹿兄弟の可愛い妹です」女の子が二カつと笑って言った。

「こつこつこつこつ康太。妹がいたなんて今まで聞いてないよ」

「……落ち着け。特別言う機会もなかったただけだ」

「陽太君、妹さんってどちらにいらっしやったの」

「ああ、あいつは事情があつて田舎の祖父母のところまで暮らしているんだ」

「ソータ、つまり私の義妹ということだスネ」

「最初から間違っている上に、とりあえず妹がいたことに驚かんか、お前は」

「ふーん、思つてた通りだね」と陽向がつぶやいた。

「……思つた通りとは？」康太が尋ねた。

「ん？お母さんからお兄ちゃんたちに彼女とお嫁さんが出来たって聞いているの」

「ちよつと待て陽向、嫁つてのはなんだ」颯太が猛然と抗議した。

「颯兄、いくら高校中退でも日本人として「嫁」って言葉くらいは知つておくべきだと思つうな」

「嫁という言葉の意味ぐらい知つてゐるわ。誰が誰の嫁だと聞いているんだ」

「え、アンナちゃんが颯兄のお嫁さんになるために、はるばるロシアから嫁いで来たつてお母さんが」

「あのババア……。いいか陽向、お前には小さな頃から言い聞かせてきただらう。まっとうな人生を送りたかつたら、あのババアの言うことは無視しろと」

「お母さんからは、まっとうな人生を送りたかつたら颯兄を反面教師にしろつてずつと言われてるんだけど」

「ぐっ、でお前はどつちの言うとおりにしているんだ？」

「こつちの方が陽兄の彼女の由美ちゃんだね。はじめまして土屋陽向です」

「堂々と無視しやがったこいつ。尊敬するお兄様が尋ねているんだ、ちゃんと答えろ陽向」

「うるさいなあ。答えずに無視してあげたことが優しさだつてことぐらい気づきなよ」

「よけいに傷つくわ」

## 第2話

「陽向ちゃんね。由美子です、よろしく」由美子が事態の急変についていけずにとまどいながらも挨拶をした。

「初めまして陽向です。うちの陽兄がご迷惑をお掛けしています」

「いえ、別に陽太君はそんなことないわよ」

「ううううう、何てよくできた彼女さんなんだろう。陽兄のこと見捨てないであげて下さい。そのかわり腹立つことがあつたらわたしに言ってくれば代わりに制裁しますから」

「そっそうなの？それじゃその時はよろしくね」

由美子も陽向のペースに巻き込まれて混乱している様子だった。

「で、こちらの私がバックぶつけちゃったのが康兄の彼女の愛ちゃんだね。さつきは本当にごめんね」

「もういいって。陽向ちゃんって呼んでもいいのかな」

「うん、好きに呼んでいいよ。愛ちゃんのことはお母さんからいろいろ聞いてるよ」

「えっ、裕ちゃんボクのことなんか言ってたの？」

「うん、何でもとてもこの世の物とは思えない料理を作・・・グモ」

康太が慌てて妹の口をふさいだ。

「何するのさ、康兄」

「・・・いや、アンナを紹介しようと思ってな。これがロシアからの留学生でうちにホームステイしているアンナだ」

「はじめまして、ヒナタ。ソータの妻のアンナです」

「やっぱりお嫁さんじゃない、颯兄」陽向はギロリと颯太をにらんだ。

「言い忘れたが、そいつは可哀そうな子扱いにしとけ。頻繁に日本語が通じなくなる」

「あのさ、妹として忠告してあげるけどこの人逃したら颯兄に後はないよ。人生の全ての女性運ここで使い果たしているからね」

「馬鹿を言ってもらっちゃ困るな、陽向君。自慢じゃないが小中高バンド時代と女性運を全く使わずに生きて来た俺だぞ。女性運はタツプリ残っているはずだ」



「本当に自慢にならないことに胸張られても困るんだけど……」  
颯兄の場合、元の源泉量が閉めた蛇口から垂れる水滴並みだから1回使ったら絶対に枯渇するよ」

「俺の女運はどれだけ細いんだ。そんなもん一生分溜めても顔も洗えんわ……」

「妹が実家に帰ってきて何が悪いのよ」

「いや、悪いとはいわないけどお前は、ここ2年電話だけで全く家に帰ってこなかったらう。」

「へへへ、あたしもいろいろと忙しくてさ」

「そうか、それでその……向こうで友達できたか？」陽太君はなぜかためらいながら尋ねた。

「あの子、陽兄。うちの中学って全校生徒が3人だよ。3年生のわたしに、あとの2人は1年生みんな仲良くやってるよ」

一瞬、陽向ちゃんの顔が曇ったような気がしたけど、声は明るかった。

「……そうか」陽太君の声も心なしか寂しそうだった。

「……で、結局何しに帰ってきたのだ？」

「うん、昨日全国中学校陸上大会があつてさ。ついムキになったら5種目で優勝しちゃって優勝トロフィーが重いから家に置きにきたのと兄ちゃんたちの恋人を見たかつたの」

「……優勝？」愛子が不思議そうに尋ねた。

「ねえ、愛ちゃん。その全中ってそんなに簡単に優勝できる大会なの？」由美子がささやいた。

「(とんでもない。そのまま育てばオリンピック候補ですよ)」愛子が答える。

「(そうよね。私なんか町内運動会でも5位になるのがせいぜいですもの)」

「(いや、町内運動会と比べられても……って由美ちゃん、そんなのに参加してたんですか?)」

「(あら、なにか不思議なの?)」

「(だって由美ちゃんの家って別荘4軒も持つてるお金持ちだし、そう

「(ご近所づきあいは大切よ。町内清掃だつてちゃんと出てたわよ)」

「(たぶん、町内会は大迷惑だったんじゃないかなあ?)」

「まあ、本当はいけないんだけど、ちよつと本気出しすぎちゃつてさ。途中で止めたんだけど日本記録になつちやつた。あたしたちつて本当は目立つちやいけないんだけどね。帰つたら長老に怒られちゃうよ」

「えーつと、優勝しちやいけないってことカナ?」

「1, 2種目の優勝くらいならいいんだけど、5種目を日本記録で優勝はやりすぎたなあと・・・」

そして全員を見渡して「それに田舎に2年も住んでたら、たまには都会で遊びたくなるよね」といつてニカつと笑つた。

「それにしても陽向ちゃんつて、陸上随分やつてたの?」由美子が尋ねた。

「いや、全然」あつけらかんと陽向が答えた。

「じゃ、どうして」

「いや、本当は1年の子が陸上部なんだよね。その子が県大会前に脚を怪我しちやつて。顧問の先生がせっかく申し込んであるからお前出ろつて言われて代わりにでたら県代表になつちやつた」

「(愛ちゃん、そういうもんなの?)」

「(普通は絶対に無理です)」

「(私運動は詳しくないんだけど、それつてどれくらい難しいの?)」

「(例えるならば、陽太君がタキシード着て赤いバラの花束持つて由美ちゃんのバイト先にディナーを誘いに来るぐらいの難易度です)」

「(・・・人間業じゃ不可能つてことね)」由美子は何かを納得したように深く頷いた。

「(いや、今の例えで納得していいんですか?何と言うかその、彼女として・・・)」

「でもまあ、今度の全中は家の近くでやるから出てもいいかなと思つてさ。帰省の交通費浮くし」

「そんな理由で出場した奴に負けた他の選手に同情するわ」

「だからあ、これでも抑えたんだってば。だけどみんな遅いんだもん」  
「そりゃ、お前みたいな訓練受けてる奴はいないだろうし……」  
「訓練って何？陽太君」

「いや、何でもないよ愛ちゃん。ははは……」

### 第3話

「じゃ、とりあえず始めようか」と腰に両手を当ててかがみこむような姿勢で陽向が3兄弟に向かって宣言した。

「何をやりだす気だ、お前は？遊びに行くんじゃないのか」と颯太が尋ねた。

「決まってるじゃん。あたしがいない間に兄ちゃんたちが修練をサボってなかったのか確認をするのよ」

「……陽向君。君も疲れているだろうからとりあえず休んだらどうかね。アンナ君、お嬢様にお茶を……」颯太の態度が急変した。

「まかそうとしてもダメだよ、颯兄。この間発売されたアルバムのタイトル曲の「Flying winds」。あれ何？せっかく篤兄が全く心にも無い良い詩を書いてくれるのに、颯兄のボーカルのせいでメチャクチャじゃん。あの聞かせどころのエンディングのたった8小節のロングトーンが何でできないの？」

「(篤君の詞が全く心にもないってバレてるね……)」

「お前、そういうけどあの曲はオリコンで5週連続1位になってるんだぞ」

「ふーん、タコ&ライスのファンって音楽聞く耳がないんだね。あんなヘナヘナ声で感動するなんて」

「陽向いくら妹でも言いすぎだ。ファンのことはいくら馬鹿にしてもいいが、俺を馬鹿にする事は許さんぞ」

「そのセリフって普通逆じゃないですかね……」愛子が思わずツッコんだ。

「というかお前は素人のくせに随分と聞いた風な口をきくじゃねえか」

「あのね、颯兄。あたしこれでも絶対音感持っていて、声だって6オクターブ出せるんだよ。これでも、伊賀のマライヤ・キャリーって呼ばれてるんだから」

「凄いんだか凄くないんだかよく分からん仇名だな」

「大体、颯兄は腹筋が弱すぎ。だから声をフェードアウトするところでも力がないから声が震えて感動が台無しだよ。わたしが言ったとおりにちゃんと毎日腹筋100回やってるの?」

「……あつ当たり前じゃないかね陽向君。可愛い妹のいいつけをこの兄が破るとでも……」

「ふーん、そうなの。ちゃんとやってくれているんだ」

少女は颯太に近づくなくなりいきなりボディにアッパーをぶち込んだ。

「ぐおおおおー」颯太が苦痛でのたうった。

「なによ。腹筋なんて全然なくてお腹ブヨブヨじゃない。これでよくロックなんて歌えるわね」

「……ばっバカ野郎。幼稚園の時に猪を一発で仕留めたお前のパンチをいきなり腹に打ち込まれたらマイク・タイソンだってノックアウトされるわ」

「ちゃんと手加減したから大丈夫だって」

「人をこれだけのたうたせておいてどこが手加減だ、このバカ妹」

「だって本気で打ったらパンチがボディ突き破っちゃうよ」

「天下一武道会で優勝でも狙ってるのか、お前は……」

「やっぱりね。颯兄は腹筋弱すぎ。とりあえず腹筋100回やる。はい、うっ伏せになつて両手で体起こして」

颯太は渋々と言われた体制をとる。この妹がやると言えば絶対にやるのだ。

「はい、じゃ腹筋100回開始」

「……いち」と言いながら腕を曲げて体を床に近づけた瞬間、尻を踏みつけられた。

「何やってんのさ颯兄は、あたしは腹筋をしろと言ったの。それじゃ腕立て伏せじゃない」

「お前がこの体制を取らせたんだろうが」

「引掛けに決まってるじゃない。どうやってその態勢で腹筋するつもりなのよ」

「何で腹筋するのに、いちいち引っ掛けられなきゃならんだ」颯太はブツブツいいながら仰向けになり「いち、にー」と言いながら腹筋

を始めた。

それを横目で見ながら陽向は言った「次は陽兄だね。大学に提出するレポートを何でもいいから持ってきて、あたしがチェックしてあげる」

「ははは、陽向。いくらお前でもT大のレポートだぞ。荷が重くないか?」

「大丈夫。T大って言ってもたかが学部レベルのレポートじゃない。さっさと持ってきて」

陽太は渋々と部屋に行き、紙の束を陽向に渡した。

「まだ教養なんで哲学のレポートだがな。理解できるのか?」

「ふーん、「現代における唯物論的弁証法について」か・・・まあ、今どき随分陳腐なテーマを出す先生だね。ちよつと読ませてね」

「(ねえ、康太)」

「(・・・何だ)」

「(陽向ちゃん、随分頭いいみたいだけどあんなの読めるの)」

「(あいつは幼稚園の時に既に専門書を読んでいた。あれくらい軽いだろう)」

少女はしばらくレポートをパラパラとめくっていると、静かに頭を振った。

「ねえ、陽兄。今までずっとこんなレポート出してきたの?」

「ああ、とりあえず今までのところ全Aだったぞ」少し誇らしげに陽太が答えた。

「そうだとしたらT大って随分ヌルい大学だね。あたしが教授だったらDか、おまけしてもせいぜいCだね」

「どこが悪いんだよ」陽太が少しムツとして言った。

「なにもかもよ」少女が間髪いれずに言い返した。

「いい、陽兄。唯物論的弁証法を語るのにマルクスやエンゲルスだけに言及しているようじゃテーマの表層をなぞっているだけなの。そもそも弁証法つてのは、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに始まる西洋論理学の発展の延長の一つの終着点としてヘーゲルが完成させたものなの。ヘーゲルは命題を「テーゼ」とそれに対立する「ア

ンチテーゼ」、そしてそれらを内包した「ジンテーゼ」に分類することによって、「テーゼ」と「アンチテーゼ」が相克し、より上位の「ジンテーゼ」へと昇華する「アウフヘーベン」を提唱したのよ。エンゲルスもそんなヘーゲルの功績を認めながらもその対象が形而上にのみ限定されていることを批判して、理屈だけの「頭でっかち」と呼んだわけ。そしてエンゲルスは弁証法を現実つまり歴史分析に用いることによって唯物論的弁証法として、現実からのフィードバックを受けるといふ方法論に変えたのよ」

「そっそうだったかも知れないね・・・でも」陽太が悔しそうに言った。「でも、なに?」

「もう少しギャグを入れてくれると書いてる人は安心だと思うんだ・・・」

「なに言ってるのさ。陽兄は」陽向が激昂して叫んだ。

「書いてる人だって意味わかって書いてるわけじゃないんだから。なんとかそれっぽく見せようと必死なのよ。ギャグなんて入れられるわけじゃないじゃない」

「わかった俺が悪かった・・・というか何でお前はそんなに怒ってるんだ?」

「・・・はっ。今、あたし何か言った? 何かにのり移られたみたい・・・」

一読しただけで陽太のレポートの問題点だけでなく、その方向性や書いている人の事情まで指摘する陽向に一同は目を丸くしていた。

「すっすっいね陽向ちゃん。中学生なのにドイツ語も喋れるんだ」

「・・・最初から最後まで日本語だ、バカもの」

「えっ? だって一言も理解できなかったよ?」

「・・・ヘーゲルっていう名前だけで瞬時にドイツ語だと思うお前の方がすごいと思うんだが」

「いやあ、日本語が理解できないってのもあるもんだね」

「だから唯物論的弁証法を語るためには、今言ったことをバックグラウンドデータとして知っておくべきなの。基本的にエンゲルスの主張は一概に間違いだとも言えないと思うわ。だけど問題は、唯物論的弁証法がマルクス主義と結びついてマルクス主義的弁証法になった

ことね。そのために共産主義国家の思想的バックボーンとして採用されて、レーニンやトロツキーそしてスターリン達に採用されたけど、共産主義国家っていうのは所詮は人工国家よ。軍部という暴力装置の背景がなければ成り立たない歪で不自然な国家体制。だから思想さえも国家擁護のために利用されたの。マルクス主義的弁証法もその例外ではなかったわ。年月が立つにつれてより政治的イデオロギーが強くなり、結果として教条主義に陥ってしまったの。簡単に言えば、自由な思想、結論を導き出すための弁証法が、共産主義国家の正当性を示すためのジンテーゼが先にあつて、それを導き出すためにテーゼやアンチテーゼが後付けで加えられるようになったわけ。

そして数十年経って共産主義国家は崩壊した。エンゲルス流に言えば現実を思想に反映させた結果、現実によって唯物論的弁証法が否定されてしまったってことかしら。レポートを書くならこの程度のものは書いてよ、陽兄」

「・・・まあ、そうかも知れんが。教授がバリバリのマルキストだからなあ」

「今どき、そんな化石みたいな人がいるの？大丈夫、いざとなったらあたしが論破してあげる」

「大学のレポートで中学生の妹に応援頼んだ日にゃ俺はT大の伝説になるよ」



## 第4話

「69、7・・・0・・・もう無理だ」一人黙々と腹筋を続けていた颯太君が悲鳴をあげた。

「颯兄大丈夫？」心配そうに近寄っていった少女は何の躊躇いもなく颯汰の腹を足で踏付けた。

「うぎゃ・・・何しやがる陽向」颯太が思わず上体を起こした。

「あら、お兄様。まだ大丈夫じゃない。じゃ頑張つて続けてね。次ダメになったら今度は全体重かけてあげ・る」気にした様子もなく少女は涼しい顔で言った。

「(なんで康太たちが逃げ出そうとしたかわかったよ)」

「(・・・こんなもんじゃないんだ、あいつの怖さは)」

「さて、最後は康兄ね。写真見せて」

「・・・バカを言うな。そんなもん見せられるか」

「じゃ、勝手に見るからいいよ」そういうと陽向は階段を軽やかに上がっていった。

「・・・ちよつと待て陽向、勝手に人の部屋に入るんじゃない」康太が慌てて追いかけた。

面白そうだからボクも後をついて行った。よく考えれば康太の撮った写真つてあまり見たことないんだよね。

部屋に入ると陽向ちゃんは既にキャビネットを開けてアルバムを出していた。

「・・・キャビネットには鍵がかかっていたはず。どうやって開けた？」そこへ飛び込んできた康太が驚いたように言った。

「ん？これでちよちよいとピツキングを・・・」陽向ちゃんは髪留めに使っていたヘアピンをヒラヒラと見せた。

「・・・お前は一体どこに行こうとしてるんだ？」

「さてとまずはこの辺から・・・」

「・・・そつそのアルバムは止める。ムツツリ商会の売れ筋なんだ」「愛ちゃん、こういうのをツンデレっていうんだよ。本当は自分の作品を人に見て欲しいくせに」

「……勝手に人に変な属性をつけるな。心の底から見て欲しくないと思っているんだ」

どうもこの少女は人の発言を徹底的に自分の有利なように解釈する癖があるようだ。

「愛ちゃんも一緒に見ようよ」とベッドに腰掛けてその隣をポンポンと叩いた。愛子も興味があつたので誘われるがままに陽向の横に腰かけた。

「……いや、愛子は見ない方がいいと思うんだが」

「どうしてさ？何かボクに見られちゃ困る写真でもあるわけ？」愛子はムっとして答えた。

「……いや、そういう訳ではないんだが……」

「じゃ、めくるよ」二人の間の微妙な空気を全く斟酌することなく、少女がアルバムの表紙をめくった。

「あっアンナちゃんだ」

「こうしてみると本当に美人だよねえ。あの天然オタク発言さえなければ」愛子が答えた。もつともアンナがそういう発言をするのは土屋家と由美子と愛子の前だけなので、学校では神秘的なクールビューティーとして全学年の男女を問わず大人気なのだが。

「わあ、綺麗な人だね。この人誰？」

「これは、霧島翔子さんって言って2年生の総代だよ。綺麗で頭がよくて優しくてボクの理想の人なんだ」

「このとっても可愛い人は？」少女は次の頁をめくって尋ねた。

「康太の友達の木下秀吉。こう見えても男の子なんだよ。男のくせにこんなに可愛いなんてズルいよね」

「じゃ、このポワポワした感じの人は？」

「ああ、これは康太のクラスメイトのFクラスの姫路瑞希ちゃん。時々料理を教えてもらってたんだ」

「……お前姫路に料理を教わっているのか？」康太が焦ったように尋ねた。

「なに慌てているのさ。時々だよ。瑞希の料理は調味料を揃えるのが大変なんだから。酢酸とかシアン化カリウムとか」愛子は平然と言っ

た。

「りっ料理だよね・・・」

「もちろん料理だよ」少女は恥ずべきことなどなにもないといった風情で断言した。

「(お母さんの言ってたことは大げさじゃなかったんだ・・・)」陽向は小さな声でつぶやいた。

「うわー、この人高校生とは思えないくらいに妖艶な人だね」

「ああ、この人は3年の小暮先輩だね。茶道もやってるんだけど、着物の時は女のボクでも押し倒したくなっちゃうくらいに色気のある人だよ」

「この人は随分快活そうな人だね。ポニーテールもにあってるし・・・」  
「それは島田美波ちゃん。帰国子女でドイツ語ペラペラなんだ。こうみえてもその辺の男より強いんだよ」

「あれ、また木下君だ。でもさつきよりもちよつとワイルドだね」

「詳しいや、これは秀吉君の双子の姉の木下優子。ボクの友達なんだ」  
「えー、どつちかというところの方が男の子みたいだよ」

「まつまあ、女性としての人気は秀吉君の方が上なんだけどさ・・・」

他にもいろいろな女生徒の写真をみてアルバムを見終わった。

「康兄」陽向ちゃんが言った。

「・・・なっなんだ」

「全然ダメ。盗撮ってことを割り引いてもこれじゃお話にならない」  
「盗撮ってところは問題じゃないんだね・・・」

「あたしが前にアドバイスしてあげたでしょ」そういうと陽向ちゃんはベッドから立ち上がり中指を突き立てて言った。

「逆光は勝利!!」

「・・・なっ」

「世はなべて3分の1」

「ピーカン不許可」

「頭上の余白は敵だ」

「・・・俺は光画面部に入部したつもりはない。だいたいどこからそんな偏った知識を得たのだ、お前は」

「図書室に「究極超人L（えーる）」の漫画があつてさ、へへへ」

## 第5話

「えっ、偏ってるの」

「……そうだ。だいたい俺は展示会用の写真を撮っているんじゃない、ビジネス用の写真を撮ってるんだ」

「ビジネス用にしたってこの写真はどうかと思うな。視線は来てないし、画像は小さいし」

「……盗写で視線をもらっているというのは、バレているってことだ」

「にしてもなあ、この写真じゃ単なるピンナップだよ。訴えかけてくるものがなにもない」

「……売れてるからいいのだ」

「(ピクツ)……売れてる……だと……」少女がアルバムに視線を落としたまま、地の底から出てくるような声を出した。

「どっとうしたの、愛ちゃん。何かが憑依しちゃった感じだよ」

「ねえ、「土屋康太くん」。このアルバムには大事な人が載ってない気がするなあ」

「……お前に本名で呼ばれるとロクなことがないのだが、まあその写真は売れ筋ベスト20位だからな。全員が載っているわけじゃない」

「……そんな問題じゃないんだよね。男・土屋康太として売れ方に関係なくトップに持ってこないといけない人が抜けてないかって言っているの」

「……はて、心当たりはないなあ」

プルプル……

「……とくつても大事な人の写真がないんだけどなあ」

「……まったく思い浮かばんのだが」

プルプルプルプル……少女は怒りで震えるとアルバムを少年に向かって投げつけて、胸ぐらを掴んだ。

「バカア、彼女のボクの写真が一枚もないとはどういうつもりなのさ……秀吉君の写真まで載っているくせに」

「…………おっ落ち着け愛子」

「これが落ち着いていられるかい。彼女のボクのプライドを何度ズタズタにすれば…………」

「へへへ、愛ちゃん。そんなことなら心配ないよ」陽向が笑っていた。

「康兄が言っていたじゃん。これはビジネス用だって。しばらくそのまま捕まえていてね」

「え、陽向ちゃん何するの」

「…………陽向止めろ」

「康兄の性格からすると、この辺かな？あ、あった」キャビネット棚の上段をあさっていた陽向が嬉しそうに言った。

「うん、このアルバムの素っ気なさからみても間違いないよ。愛ちゃん一緒にみよう」

陽向が再びベッドに腰を下ろしたので少女も側に座ってアルバムを開いた。

「…………たっ頼む、それだけは止めてくれ」

「男らしくないよ康兄。いいじゃん愛の結晶なんだから」

アルバムを開くと少女の写真だけが並んでいた。何時の間にとつたのか制服で友人と談笑している写真、プールから上がって髪を拭いている写真、いつか縁日であった時の浴衣姿の写真、いつかの温泉旅行の写真（バックに5馬鹿が写っているのがとっても邪魔だったけど）…………etc.

「康太、何時の間にこんなに撮ったのさ…………」

「……………」

「黙ってちゃわかんないよ、康兄…………ウリウリ」足で兄をつつき回す妹。

「……………」

「ふーん、あくまでもバックれるんだ。じゃこの写真をブログに載せて「愛の劇場」とでもタイトルをつけて世界に公開を…………」

「…………お前はどんだけ恐ろしいことを考えるんだ」

「陽向ちゃん、それって康太よりもボクにダメージが大きいんだけ

ど……」

「そっか、でも愛ちゃん。安心していいよ」

「えっ、何を安心するのかな？」

「この写真は、さっきの写真と違って愛が感じられるから」

「……この写真が？ピンぼけだし、被写体は小さいし、さっきのピンナップの方が随分いいように思うんだけど」

「写真の価値はそんなもんじゃないんだよ。ロバート・キャパの写真だって有名なものはピンぼけなんだよ」

「……お前に写真の何がわかるんだ」

「失礼だなあ康兄。あたしは写真は撮らないけど、絵だったらこれでも県展で金賞とってるんだよ。被写体の訴え方なんてそうは変わらないでしょ」

「……ついにそんなところまで行ったのか」

「それにわざわざ写真をわけて保存するなんて他にどんな理由があるのさ」

「……そっそれは」

「……(真っ赤)」

「というわけでよかったね愛ちゃん。康兄はいくらピンナップでももう少し腕を磨いた方がいいよ。なんでもかんでもオートフォーカスに頼ってちや腕は伸びないよ」

「……あ、あのな愛子さん」

「……なっ何かな康太君」

「……いや何でもない」

「あっあのね。売らないんだったらボクの写真何枚でも撮っていいよ」

「……そっそうか」

「ゴホン」陽向がわざとらしく咳をした。

「あのく、あたしまだここにいるんだけど……」

「……(真っ赤)」

「……(真っ赤)」

「まあ、いいや。あたし自分の部屋に荷物開いて。それからシャワー

浴びるね。イチヤイチヤの続きをどうぞ」  
「……………できるか！」

トコトコと陽向は部屋から出て行った。



## 第6話

リビングには陽向を除く全員が集まっていた。

「まったく、全然変わってねえじやねえかあいつは」

「というかパワーアップしているぞ」

「……迷惑度合いも増加している」

「あの、日向ちゃんって何なんですか？運動はすごいし、頭もそれ以外も凄いんですけど」少女が恐る恐ると尋ねた。

「うーん、それを話すと長い話になるんだが……陽向はどうしている」

「……部屋片付けて、シャワー入ると言っていた」

「じゃ、時間があるだろう。実はね愛ちゃん、土屋家にはちよつとした秘密があつてね」

「……ヘルシング機関の一員とかですか？」

「いや、そういう洋風じゃなくて、実はうちは伊賀忍者の末裔なんだ」

「にっ忍者ですか、今どき」

「しかも頭領の家柄だ」

「それで裕ちゃんもよく結婚する気になりましたね」

「お袋の家は甲賀の頭領の家系だ」

「敵どうしじゃないですか」

「うむ、それで「このままでは結ばれない定めよそへ逃げましょう」と駆け落ちした」

「うわあ、ロマンチックな話ですね」

「だけど問題があつたのだ」

「そりゃ駆け落ちするくらいだから問題はあるでしょう」

「いや、その問題というのが、別に両家の誰も結婚に反対してなかったということなんだ」

「へっ？」

「さつき愛ちゃんも言った通り、今どき忍者でもないだろう。伊賀だ、甲賀だつて言つても別に敵対しているわけじゃない」

「じゃ、何のために駆け落ちを……」

「爺さんから聞いたんだが、お袋が一人で盛り上がって嫌がる親父を説得して無理やり駆け落ちしたんだと」

「……裕ちゃんらしいけど、それでもご両親は心配ですよね」

「いや、移転先は知ってたからそれほど心配はしてなかったらしい」

「なんで知ってるんですか」

「住民票移したからな」

「……それ駆け落ちじゃなくて、単なる引越して言いませんか？」

「まあ、住民票がなかったらアパートも借りられんし、就職もできないからな」

「いや、その駆け落ちのイメージが……」

「それでもまあ、抜け忍な訳だから追い忍が出たらしい」

「さすが忍者の里ですね。抜け忍は始末するということですね」

「いや、一応帰郷の説得のために訪問したらしいんだが」

「そんなの来てたのか兄貴」

「……それは初耳」

「いや、お前らも何回か会ってるだろう。こっちに出張の度に寄ってくる鈴木さん。あの人が追い忍だ」

「鈴木さんって人の良さそうな、芋洗坂係長みたいなあのオッサンか」

「……とても追い忍なんて技術を持っているようには思えんのだが」

「ああ、「追い忍」ってのはまあ、土地柄に合わせた名称でな。あの人は役場の人だ。正式な役職は住民課追い忍係」

「何をやる係か想像もつかないんですけど……」

「いや、伊賀の忍者も過疎化が進んでいてな。このままでは伝統芸能が廃れるというところで、都会に出た子孫たちに伊賀に帰りませんかと勧誘する係らしい」

「ちよつちよつと待って下さい。頭を整理しますから」というと少女は考え込んだ。

「要するに裕ちゃんは都会に出たかったから駆け落ちという名目で引

越しをした。で、時々伊賀から帰っておいでと説得にきたとこういう訳ですか」

「さすがは愛ちゃん要約がうまいね」颯太が感心したように言った。

「それじゃ忍者関係ないじゃないですか？陽向ちゃんの話とどう繋がってくるんですか？」

「まあ、忍者ってのはある種の特殊能力の持ち主だったわけだ。それに忍者の里ってのはある意味閉鎖的な特殊能力を持った血族集団だったわけだな。うちが頭領の家ってのは、結局伊賀の本家みたいなもんなんだ」

「ふむふむ……」

「で、その子孫にはそれぞれ特殊能力を持って生まれてくるのが多い。陽太の頭脳とか康太の盗撮・特撮能力とか、俺の女に弱い体質とかな」  
「最後の奴は特殊能力なんですか？」

「で、陽向の場合にはそれが極端な形で出た。運動能力はもちろん、頭脳から芸術に至るまでほぼ天才クラスだ。何しろ幼稚園の時に猪を一撃で倒し、専門書を原語で読んでいたくらいだ」

「それは凄いですねえ」

「うん……」ここで3兄弟が暗い顔をした。

「俺たちが相手できているうちは良かったんだ。それが俺たちにもついていけなくなるとあいつには友達がいなくなつた」

「そういうもんですか？」

「考えてごら愛ちゃん。大学院レベルの知識を持っている奴が小学1年生の席に座つてずっと授業を聞いてなければならぬんだよ。運動したらサッカーだとメッシ並みのテクニクを持っている子が小1と一緒に本気でサッカーができると思う？」

「……それはツライでしょうね」

「本当はさつきみたいに明るい奴なのに家でも学校でも喋らなくなつていた。だからと言って俺たちで解決できる問題でもなかったからね。見ているしかできなかつたよ」

「それでどうしたんですか？」

「陽向が壊れそうになった時に芋洗坂、じゃない鈴木さんが見かねて

言ってくれたんだ。伊賀の中学校だったら生徒が少ないから好きな勉強ができる。何だったら日替わりで大学の先生を講義に呼んでもいいって」

「で、あいつは伊賀の祖父母の家で暮らして中学に通うことにしたわけだよ」

「……最善とは思わんが壊れるより遥かにマシだ」

## 第7話

「そうだったの・・・」由美子が言った。

「だから時々、あんなに寂しそうな顔するんだね」少女も言った。「でもソータ、ヒナタのこと忘れてたでショ」とアンナが聞いた。

「そりゃ、2年間全然音沙汰なかったからな。そうしよっちは思いい出さんが・・・何故だ？」

「天才は忘れたところにやってくるというマス」

「お前の日本語能力を素直に誉めてやる気になれんのは何故だ」

「照れてるんデスね」

「呆れてるんだ、バカ者」

そこにシャワーから上がった陽向がやってきた。髪をサイドポニーに留め、タンクトップに短パンの彼女は標準よりも小柄に見えた。

「なになに、颯兄。明日あたしを遊びに連れてってくれる相談？あだし可愛い服が欲しいな」

「陽向、残念だが来週ライブだから明日は一日練習だ」

「えー、一日ぐらいサボってもいいじゃん」

「プロを舐めるなバカもん。合コンならともかく妹のお守りで練習をサボれるか」

「(合コンならサボるつもり満々なんだね)」

「(・・・あいつらの合コンなんてどうせ馬鹿絡みだから必然的に練習は休みになる。ヘタしたらライブ直前でも合コンを選びかねん。そういう連中だ)」

「ハイ、ソータ。ワタシが遊びに連れて行ってあげマス」

「お前が遊びに？非常に不安なんだが、どこに連れて行くつもりだ？」

「中野と池袋と秋葉原デス」

「却下だバカもの。うちの妹を何にするつもりだ」

「中野では、せんだらけに行つて・・・」

「ダメだと言つてるだろうが。だいたい陽向は可愛い服が買いたいと  
言つてるのに・・・」

「じゃあ秋葉原デス」

「秋葉……?」

「(おい、秋葉に洋服屋なんてあったか?)」

「(ボクはあまり行ったことないけど、見た記憶ないです)」

「(そーいや、作業服や鳶のニツカボツカーを売ってる店があった気がする)」

「(そーいうの可愛いって言うかしら)」

「(……だが、あのトンデモ親父に育てられた娘だからありえないことではない)」

「やあ、待たせたねアンナ君。で、君の言う店はどんな作業着を売ってるんだね?」

「作業着? ワタシは可愛い服と言ってマス。作業着は可愛くないデス」

「おお、そうか。それはよかった。で、どんな可愛い服を売ってるんだ?」

「ハイ、メイド服とかエプロンドレスとか春麗の衣装とか……」  
アンナは夢見るように遠い目で言った。

「コスプレ屋じゃねえか」

「エヴァのプラグスーツもあります」

「……それは少し見てみたいかも知れん」

「装備Bタイプ・マグマダイバー型」

「どんだけマニアだそりゃ。お前は陽向をどんだけ業深くするつもりだ。却下だ却下」

「じゃ陽兄、陽兄ならこの可愛い妹を遊びに連れていってくれるよね」

「いや、それがな……」 陽太が口ごもる。

「ええ、陽兄もだめなの?」

「すまん、明日は由美ちゃんと久しぶりのデートなんだ」

「いつも一緒にいるんだしデートなんていつでもできるじゃん」 陽向は口をとがらせて抗議した。

「いや、俺も専門が入ってきて実験で忙しくなったし、由美ちゃんも今パテシエからケーキ作りを教わり始めて、なかなか二人の時間が合わ

ないんだよ。本当にすまん。今度連れて行ってやる」

陽向の顔が少年と少女の方を向いた。

「康兄なら大丈夫だよ。こんなに可愛い妹を見捨てたりしないよね」

「いや、それが週末にレンズの特売があつてな。その資金を得るために商品の整理をしなくちゃならんのだ」

「そんなのと妹とどっちが大事なのさ」

「すまん。さすがにレンズ半額の魅力は大きい。今度は絶対付き合つてやるから」

「もういいよ。冷たいバカ兄貴たち」陽向は言い捨てると2階の部屋へと駆け上っていった」

「陽太君、可哀そうじゃないかしら。デートは今度でもいいのよ」

「大丈夫だよ由美ちゃん。明日になればケロつとしてるよ」

「ねえ康太。なんだったらボクが連れてってあげようか」

「……お前に可愛い服を売ってる行きつけの洋服屋があるとはしらなかった」

「失礼な。ボクにだって行きつけの洋服屋くらいあるよ」

「……ほう、どんな服を売ってるのだ？」

「可愛いスパッツとか可愛いジャージとか可愛い競泳用水着とか」

「……何でも可愛いをつけたいというもんじゃない。第一それは洋服屋じゃなくてスポーツ用品店だ」

「ソータ……」

「いいからお前は黙っててくれ」

夜中、少女の携帯の着信音が鳴った。

「非通知……だれだろ?はい」

「……愛子か?」

「何だ康太か?誰かと思っちゃったよ。どうしたのこんな遅くに」

「……あれからよく考えたんだが、陽向を買い物に連れてってやろうと思うんだ。悪いがぜひ付き合ってくれないか」

「あ、うん。その方がいいと思うよ。ボクは構わないよ」

「……助かる。じゃ○○駅の東口改札に10時で頼む」

「うん、わかったよ」

「……愛子」

「え、なに？」

「……ありがとう。チュっ……ツーツーツー」

「えっえっえええ、チュって……え〜」

夜中、少年の携帯の着信音が鳴った。

「……非通知……誰だ？はい」

「もしもし康太？」

「……愛子か？非通知だから誰かと思ったぞ。どうしたこんな遅くに」

「あれからよく考えたんだけど、陽向ちゃんを買い物に連れてってやるべきだと思うの。せっかく2年ぶりに会ったんだもの、お兄さんに甘えたいんだよ。写真の整理はボクも手伝うからさ一緒に買い物に連れてってやろうよ」

「……そうだなその方がいいかも知れん」

「ありがとう。じゃ○○駅の東口改札に10時でね」

「わかった」

「康太」

「なんだ？」

「……ありがとう。チュっ……ツーツーツー」

「えっええっえええ、チュっだと……」

夜中、陽向は携帯を回してニヤニヤしながらツブやいた。

「赤子の手を捻るより簡単だねあの二人。説得プランを10時まで考えてあったんだけど使うまでもなかったや。騙すのはちよつと気が引けるけど最後にサービスしといたからいいよね」



## 第8話

午前10時の改札前に少年と少女は立っていた。

「…………念のために聞くんだが、また20分前から柱の陰で見ているのか？」

「当たり前だよ。それがデートのルールなんだし」この少女にとって男性が待ち合わせ場所に先に来て待っているというシチュエーションはどうしても譲れないポイントのようだった。「…………まあ、いろいろと大変だなと言っておく。それよりも妹のためにいろいろと考えてくれてすまなかった」

「…………えっ?。うん、ボクも康太があんなに陽向ちゃんのことを考えていたなんて感心したよ」

「…………んっ?。まあ、気にはなっていたからな。…………ところで」

「…………陽向はどこだ?」

「陽向ちゃんはどっ?」

「……………」

「……………」

「…………お前と一緒にではないのか?」

「何でボクと?家から一緒に出なかったの?」

「…………お前が陽向を買い物に連れて行ってやろうと言ったからお前と一緒に来るんだと思っていたんだが」

「康太が買い物に連れて行ってあげたいって言ってたからボク付き合いのつもりだったんだけど」

「……………」

「……………」

「…………お前は何の話をしているんだ?」

「康太こそ何の話をしてるのさ」

「昨夜の電話の話だ…………」二人が同時に叫んだ。

その時「遅くなっちゃってごめん。なに痴話ゲンカしてるの」とサイドポニーに髪をまとめた陽向が現れた。

「……陽向、お前愛子に誘われたんじゃなかったのか？」

「陽向ちゃん、康太と買い物に行くんじゃなかったの？」

「何かと思えば電話の話か。いいじゃんサービスしてあげたんだから」と言って2人に向かつて

「チュツ」つと投げキスした。

「……あつ、あれはお前の声真似だったのか」

「なんのこと、声真似って」

「……こいつは人の声を真似ることができるのだ」

「じゃ、昨日の電話は康太じゃなくて陽向ちゃんだったの？」

「まあ、そうかな」

「……そうかなじゃない」

「ひつヒドいよ陽向ちゃん、ボツ、ボク嬉しくて寝れなかった……ということとは全然なかったんだけどね、うん」

「……目が真っ赤だぞ、愛子」

「うるさい康太。そっちこそ目の下に隈が出ているじゃない」

「二人ともたかが電話のチュツくらいでそんなに喜んでもらえて、あたしも嬉しいよ」

「喜んでない!!」少年と少女は同時に叫んだ。

「……まあ、今更騒いでもしょうがない。どこへ行きたいんだ陽向」

「ん、時間はあるしゲームセンターに行こうよ」

「(ピクツ)……ゲーセン？」

「……どうした愛子」

「ふふふ、ストリートファイター愛子と呼ばれたボクが直々に相手をしてあげるよ」

「えーつと、ストリートファイターって何？康兄」

「……俺もよく知らんが、あいつの根拠のないプライドの一つらしい」

3人は揃って駅近くの大きなゲームセンターに移動した。

「じゃ、相手してあげるよ陽向ちゃん」愛子は腕を撫でながら椅子に腰かけた。

「あのね、愛ちゃん。あたし初心者だから手加減してね」陽向が筐体の反対側の椅子に座って言った。

「ふふふ、陽向ちゃん。本気でかかってくる相手に手加減は失礼だよ。ボクの力の限りを尽くして戦ってあげるよ」

ゲームが開始された。陽向はむやみやたらにレバーをガチャガチャさせてボタンを叩きまくっていた。いわゆるガチャ打ちという奴だ。一方、愛子は余裕を持ちながら必殺技を連発する。

「……初心者相手にコンボの連発とは大人気ないにもほどがある」「久しぶりだからね。これでも遅いんだよ」

「……そういう問題ではない」

20秒も持たずに陽向が負けた。

「すぐ第二ラウンドだよ」愛子が楽しそうに言った。

……30分後、12個目の1000円玉を筐体に入れた。

「……いい加減に止めた方がいいんじゃないか?」

「うるさい、そんなこと言う暇があるなら両替してきて」1000円札を少年に突き出した。目には微かに涙がにじんでいた。

「……やれやれ」1000円札を握った少年は筐体の反対側に回った。

「……いい加減に手加減して負けてやれ。泣きかけているぞ」

「愛ちゃんって本当に負けず嫌いなんだね」余裕の表情で陽向が言った。

「じゃ、こういうのどうかな?」

すると陽向のキャラの動きが鈍くなり、愛子のキャラの攻撃が当たり出した。みるみる陽向のゲージが減っていき、あと一目盛りとなった。愛子が最後のとどめを出そうとしたその瞬間、陽向の大技コンボが炸裂し、愛子のキャラが地に倒れていた。筐体の反対側から愛子の叫ぶ声が聞こえた。

「……お前はどんだけ性格が悪いんだ」

## 第9話

「よし、今度こそ」少女が1000円玉を入れようとしたところを後ろからハタかれた。

「痛いなあ、何すんのさ康太」

「……何すんのさじゃない、1000円以上使ってるんだいい加減にしろ」

「だってこのままじゃストリートファイター愛子の名前が……」

「……心配するな。その魔法少女みたいな名前に何の権威もない」  
「愛ちゃん、あたし飽きちゃったよ。そろそろ他のゲームやろう」

「そう？じゃ次に行こうか。それにしても陽向ちゃん、途中からすごく強くなっただけど力隠してたの？」

「ううん、このゲームやるのは初めてだよ。最初の2戦はプログラムを解析してたの」

「なるほど、強いはずだね……で康太、解析ってなに？」

「……なんでお前がAクラスにいられるのかが、本当に不思議なのだが」

「だって授業じゃ出てこないよ、解析なんて言葉」

「簡単にいうとレバーの動きとキャラの動きのズレとか技を出すときのタイムラグとかを観察してたんだよ」

「……まあ、解析できたとしても、こいつの人間離れた反射神経があつての話なんだが」

「じゃ次はプリクラ撮ろうプリクラ」陽向が言った。

「プリクラ……」

「……プリクラ」

「何で二人して固まってるのさ。付き合ってるんだからプリクラくらい何回も取ってるでしょう？それとも初めてなのかなあ」陽向がニヤニヤして言った。

「バツバカを言ってもらっちゃ困るなあ、陽向ちゃん。ボクたちはプロだよ、プリクラくらい飽きるほど撮ってるね」

「……何のプロだ。まあ、確かに撮りすぎて飽きているところだ。」

お前一人で撮ってこい陽向」

「三人で来て一人だけプリクラ撮るなんてなんの罰ゲームよ。康兄、そんなこと言って愛ちゃんと一緒にプリクラ撮ったことないんでしょ」

「…………ふ、そこまで言われてはしようがない。いくぞ愛子」

「わかったよ！康太」

「いや、そこまで力入れて撮るもんじゃないでしょ、プリクラって」

「…………うるさい、行くぞ」

「おう」

「ねえ二人とも…………」

「なんだ？」

「手と足が一緒に出てる」

「…………ギャグだ」

「ギャグだね」

「なんでそういうところは息がピッタリなのかなあ？」

愛子、陽向、康太の順に並んでプリクラを撮った。

「ふーん、好きな字が書けるんだね、じゃ」と陽向がペンをとってそれぞれの画像の上に字を書き出した。

「おかあさん ひなたちゃん おとうさん」

「痛っ、なんで殴るのさ、康兄」

「…………何でじゃない。なにを書くんだ、お前は」

「いや、微笑ましい家族像を演出してみようかと…………」

「…………いらん演出しすぎだ。なんで高二で中三の娘を持たにやならんのだ」

「陽向ちゃん、2歳違いでお母さんは無理があるんじゃないかなあ」愛子が頬を染めて言った。

「わかったよ。まったく二人とも頭が固いんだから」陽向がブツブツ言いながら書き直した。

「嫁 妹 兄」

「痛い、だから何で殴るの康兄は。演出無しにしたじゃん」

「…………その嫁ってのは何だ、嫁ってのは」

「だっってお母さんがいつもそう呼んでいるんだもの」

「…………お袋の言うことは聞くなと言っているだろう」

「あのね、陽向ちゃん。今、嫁と呼んでいいのはアンナちゃんだけだから」

「…………いや、愛子。それも違う」

大騒ぎでプリクラを撮り終わった。

「陽向ちゃん、次はどこに行こうか？」

「あたし観たい映画があるんだ」

「どつどんな映画かなあ。ボク怖いのはちよつと苦手で」少女が警戒しながら尋ねた。

「あのね「ひぐらしの鳴く頃に」っていう映画なの」

「へえ〜ノスタルジックなタイトルだね。どんな内容なの」

「あたしも良く知らないんだけど、ゲームを映画化したもので、田舎に引っ越した少年と地元の少女たちのお話らしいよ」

「日本的な青春ラブロマンスっぽいね。じゃあ、観にいかうか」

「……………おい、愛子」

「……………ちよつ、ちよつとソツとしておいて……………」

ひつ酷い目にあつた……………」

「いやあ、怖かったね」あつけらかんと陽向が言った。

「…………怖かったねではない、バカ者。どこか青春ラブロマンスだ。逃げも隠れもしないホラーじゃないか」

「あたしもあんなに怖いとは思わなかったよ」

「陽向ちゃん、ゲームを映画化したものって言ってなかった？ゲームもあんなに怖いの」

「うん、ほぼ忠実に映画化されてたね」

「じゃ、ホラー映画じゃない。どうして言ってくれなかったの」

「いや、映画化する時に怖い部分は全部カットしてくれてたんじゃないかなあと思って」

「……………まったく根拠のないお前の願望じゃないか」

## 第10話

「お腹が空いたね。お昼食べようよ」全く悪びれずに陽向が言った。

「そっそうだね。陽向ちゃんどこがいい？マッコにしようか」

「うーん、あたし和食が食べたいな」

「和食かあ、お蕎麦とかでいいのかな？」

「ううん、近くにあたしの知ってるお店があるからそこにしようよ」そう言うのと陽向は答えを待たずに歩き出した。

「……………」

「……………」

「……………ねえ？」

「……………なんだ？」

「……………高校生と中学生がこんな店入っていいのかな」

「……………止める間もなく陽向が店に飛び込んだんだ仕方ない」

3人が入ったのはT國ホテルの中にある超有名店「なだ千」だった。「さてつと……愛ちゃん何にする？」陽向はあつけらかなと少女に尋ねた。

「……………なっ何にするってこれ、一番安い天重セットでもボクのか月分のお小遣いくらいだよ」

「……………おい、陽向。俺たちはそんなに金持ってないぞ」

「ん、いいよ。あたしの奢り」陽向はメニューを睨みながら、そっけなく答えた。

「……………そうか。じゃ、遠慮なくご馳走になろう」

「こっ康太、それでいいの？」少女が慌てて止める。

「……………構わん。こいつは我が家で一番の金持ちだ」

「年上の兄弟揃って中学生の妹よりお小遣い少ないなんて……………」少女は兄弟の顔を思い浮かべ、思わず同情を覚えた。

「……………何やらまた明後日の方向に勘違いしているようだが、別にこいつの小遣いが一番多いという意味じゃないぞ」少年はため息をつきながら言った。

「じゃ、どうして…………？」

「……こいつはいくつか特許を持つてるんだ。大した額ではないが中学生には多すぎる額が毎月入ってくる」

「でもほとんどお母さんに取り上げられているんだよねえ。「あなたが大人になった時のために貯金しとくわ」とか言ってるけど、幼稚園以来没収され続けてきたお年玉と一緒に返ってくるのかなあ、本当に？」

「(返ってこない!!)」少年と少女は二人同時に心の中で叫んだ。それは日本中の子供があまねく通る道なのだ。

「じゃ、みんなこれでいいね」と陽向が指さしたのは「懐石 おまかせ 2万9千円」だった。

「これって、ボクのお小遣いの半年分……」少女は絶句した。もはや贅沢を通り越して罪悪の範疇だ。うちのお父さんだってこんな食べた事ないはず……

「……お前こんなところよく来るのか？」

「ここは初めてだけど、ゼミやってくれている教授に海外からお客さんが来て接待する時には良く呼ばれる」

「……自慢の教え子なんだね」

「悪趣味だよ。中学生が専門的な話ができるのを外人さんに見せて驚かせたいんだよ」陽向は苦々しい様子でいった。

「まあ、ご飯食べられるからいいんだけどね」陽向はそう言うのと店員を呼んで注文をした。

「陽向ちゃんは普段はどんな生活してるの？」少女が尋ねた。

「ん？普通の生活だよ。平日は授業。午前中は大学の先生が来てマンツーマンで授業して、午後は忍者の訓練してる」

「いや、それ全然普通じゃないから。大学生だってそんなことしてないよ。どんなこと教わってるの？」

「ん、今は、数学、物理学、化学、電子工学、コンピュータサイエンス、哲学、論理学、社会学、心理学、生理学、生化学、分子生物学、英語、ドイツ語くらいかな」陽向はあっさりと言った。

「……くらいってそんなにやったら遊ぶ時間がないね」

「そんなことないよ。ちゃんと遊んでるよ」



「へえ、どんなことして遊んでるの？友達とカラオケとか」

「ううん、あたし友達いないから一人で遊んでる。ウサギ追ったり、小鰯釣ったり・・・」

「・・・てっ典型的な日本の遊びだね」

「いや、冗談なんだけど。愛ちゃん伊賀をどんだけ田舎だと思ってるの」

「忍者がいるくらいだから結構な・・・」

「伊賀全体に忍者がいるわけじゃないよ。うちは山の方にある「忍里」って部落なの。そこが忍者の村」

「名前の割には全然忍んでないというか、むしろここが忍者の部落ですって宣伝しているような名前だね・・・」

「ここで注文した料理が運ばれてきた。」

「どう？愛ちゃん美味しい？」

「値段知ってるから美味しいも美味しくないも、もう何が何やら」泣きそうな顔で少女が言った。

「まあまあってとこかな。値段相応って感じ」

「（・・・偉そうに・・・）」

「あつ、そう言えば陽向ちゃん。ボク不思議だったんだけどさ」少女が思い出したように言った。

「うん、何？」陽向が答えた。

「何で声真似までしてボクたちに電話してきたの？」

「だってあたしが直接お願いしても連れてきてくれないんだもん。それぞれの恋人からお願いされたら断れないでしょ」どうだつと言った顔で陽向が答えた。

「あ、いやそういうことじゃなくて。わざわざボクたちに1からデートをセッティングしてそこに混ぜらなくても、陽太君たちは今日デートするって言ってたんだから、そこに混ぜてもらえば簡単だったんじゃないかなあつて思つて」

陽向の箸が空中で停まり力なく手から滑りおちた。

「しまった、気がつかなかつた」陽向は両手で頭を掻き毟つた。

「えっ、えっ。気がつかなかつたって？」少女がウ口たえた声で言った

た。

「……愛子」少年が言った。

「なっなに？康太」

「……言いそびれていたが、陽向は確かに天才なんだが、それ以前に我が家に数々の伝説を残した「アホの子」なんだ」何かを宣言するように少年が厳かに言った。

## 第11話

「いやあ……ニヤハハ」陽向が頭をかいた。

「……誉めてない。1mも足りとも誉めてないぞ、陽向」

「……「アホの子伝説」って例えば？」

「……ふむ、一番多かったのはお使いだな」

「お使い？」

「……お袋が「陽向ちゃん、お使いお願い」というと「分かった」と言つて、あつと言う間に玄関から飛び出しているんだ」

「何か問題があるの？」

「……お使いの内容も聞かず金も持たずに飛び出さなければ問題はなかっただろうが」

「短気だったんだよねえ」

「……何を人ごとのように言っているのだ。お袋はいつもお前の後を追つて駆け出してたぞ」

「お母さんも走るの早いんだよね。いつも途中で追いつかれちゃった。でも小5の頃から商店街に着くまで追いつかれなくなったよ」

「……何を自慢している。お袋は自分で買い物して帰ってきてたぞ。全然お使いにはなつてない」

「それでも懲りずにお使い頼むお母さんも強者だよな」

「……朝顔事件というのもあったな」

「じつ事件なの……」

「……こいつが夏休みの宿題で朝顔の観察日記を書くために朝顔を植えようとしたんだ」

「そんなの普通じゃないの？ボクだってやったよ」

「……その穴を掘るためにウンボを持ち出さなかったら普通だろうな」

「ウンボって工事現場で穴掘るあの機械？」

「……ああ、近くの工事現場からウンボを持ち出して家の庭に穴を掘ろうとした」

「だって動かすのに鍵がいるでしょ」

「あのね。キーイグニツションの線を二つ直つけ……痛い、何で康兄はそんなにポンポン殴るのさ」

「……ロクでもないことしか言わんからだ。まあ、それで家の庭に穴を掘ろうとしたんだが、屏が邪魔で庭に入れない。屏を怖そうとアームを振り上げたところでゴルフの練習で庭に出ていた親父に止められた」

「もうちよつとだったのに残念だったよ。お父さんもケチだよ。掘りくらいさせてくれればいいのに」悪びれずに陽向が答えた。

「……颯太兄貴が苦勞して工事現場に返したからバレずに済んだが、バレたら大事だったぞ」

「でも、どこにもぶつけずに家まで運んだんだから問題ないじゃん」どこが悪いのかわからないといった風情で陽向が言った。

「……工事現場のウンボを勝手に家まで持ってきたことが問題なのだ」

「え、だつてずっとあそこに捨ててあったし」

「……工事中だからあそこに置いてあったのだ」

何というか、全然話が噛み合っていないなあと少女は思った。

「……極めつけは犬ゾリ事件だ」

「犬ゾリ？」

「……ああ、「動物の歯医者さん」という漫画の中で犬ゾリレースがあつて、それに感化されて犬ゾリをやりたかつたらしい。そこらに捨ててあつた自転車の車輪でソリを使って犬ゾリをした」

「康太んちつてそんなに犬を飼つてたわけ？」

「……近所中の犬を勝手に使つた」

「人の犬つて危なくない？ソリに使うんだから大型犬でしょ」

「……ああ、シベリアンハスキーにゴールデンレトリバー、秋田犬と多士済々だ」

「危ないじゃない」

「……うちの近所の犬で陽向に逆らえる奴はいない。あ、一匹だけいうことを聞かない奴がいたなそういえば」

「吉田さんちのペスのこと？いい子だったよ。あたしが首に抱きつい

て「お願い」って言ったたら快く「クーン」って承諾してくれたもん」

「……口から泡吹いてたぞ、あの犬」

「えっ、あれでんかんだったんじゃないの?」

「……それならそれで問題あるだろ。それはともかく犬を6匹揃えて公道で走らせたわけだ」

「それでどうなったの?」

「……パトカーに見つかって、10分間のカーチェイスだ。タイヤがパンクしてなかったら路地を逃げ回ってパトカーをブツチ切っていただろうな」

「あたしいつもついてないんだよね」

「……ついてるんだバカ者。警官が「時速40kmくらい出ました」と言っていたぞ。それでカーブを曲がりきれずに壁に激突したら大ケガだ」

「その程度じゃ優勝は狙えないね」

「……何の優勝を狙うつもりだ、お前は」少年にも段々と疲れの色が見えてきた。

「……ちなみにだ……お使いを除いて、全て小学校低学年時代の話だ」少年は少女を指差して言った。

「……いや、何て言ったらいいのやら」少女も返答に迷った様子で言った。

「まあ、ほらあたしもあの頃は若かったからさ……」全く反省の色を見せずに陽向がいった。

「……今はそんなことないのか?」

「うん、ユニボは学校の敷地整備の時にしか乗らないし、犬ゾリは犬の世話が大変だからチューンドカーを作っている。設計上は350kmまで出るんだけどね」

「……余計に悪化しているではないか」

## 第12話

食べたんだか食べてないんだかわからない食事を終えて外にでた。ついでに言えば何を食べたのかすら想像もつかない。覚えているのは値段だけだ。断言するけど、ボクの人生の中で一番高価な食事になるだろう。

「ごっご馳走様でいいのかな・・・」

「よろこんでくれたらあたしも嬉しいよ。美味しかった?」

「何を食べたのかすらわからなかったよ。さて、じゃ陽向ちゃん。本命のお洋服を買いに行こうか」

「愛ちゃんの行きつけのところでいいよ」

「ふふふ、自慢じゃないがボクの服はブランド物だよ」

「・・・ウニクロをブランド物というのはお前くらいだ」

「ウニクロだったら伊賀にもあるから、もうちよっとおシャレなお店がいいな。原宿とか」

「原宿・・・」

「・・・原宿」

「何で二人して固まってるのさ?」

「・・・いや、俺がああに降る日が来るとは思わなかったもんでな」

「まったく康兄はだらしがあないなあ。愛ちゃんは行ったことあるよね」

「ボクもあの手の人種には知り合いがいなくて・・・」

「愛ちゃんって一応女子高生だよな?」

「一応世間ではそう呼ばれているみたいだね」

「もうっ、話が進まないからさっさと行くよ」

30分後、3人は原宿駅の改札口に立っていた。

「康太、大丈夫なの?」

「・・・一応、ありったけのティッシュを準備しておく」

「さあ、いくよ。待ってるよお洋服」陽向がとても買い物に行くとは思えない掛け声をかけた。

道路に出た途端、マイクロミニの女の子二人連れが目の前を横切った。

ぶしゅううううく

少年が盛大に鼻血を吹き出した。

「うーん、3歩も持たなかつたね」落ち着いた様子で陽向が行った。

「陽向ちゃんそんなこと言っている場合じゃ。康太、大丈夫？」と少女が思わず少年の手を握りしめた。

ぶしゅううううううううく

「さつきよりも景気よく鼻血を噴き上げたね」

「ああ、つい」

「……お前は何度言えばわかるのだ。不用意に俺に触るな」少年をティツシユを鼻につめながら言った。

「……この街に入ったら俺の命が持たん。ここで待ってるから二人で行ってこい」

「うん、わかった。愛ちゃん行こう」瀕死の重傷を負った兄を全く省みることなく陽向は少女の手を取って街に向かって駆け出していった。

「うーん」少女は服を前に腕を組んで考え込んでいた。

「何でもかとはかりにピラピラが一杯ついているんだらう？どう考えても動きにくいと思うんだけど」身も蓋もないことを言う。

「愛ちゃん、これ似合う？」陽向が着替えて戻ってきた。

「可愛いね。陽向ちゃんこんなの好きなの？」陽向はチェック柄のシャツにボレロ、革のミニスカートという格好をしていた。

「いや、あんまりお洒落ってわからなくてさ。雑誌にこんなの載ってたから真似てみたの」これも身も蓋もないことを言った。

「とっても似合うよ。これにしなよ」その時に、店に中学生と思える3人組がキヤアキヤアいいながら入ってきた。

「今日はぜったいあのブラウス買うんだ。お小遣いためてきたんだから」

「もう売れちゃってるんじゃない」

「文子の好みだから、絶対に売れてないよハハハ」

「何それ、ひどくいい。キヤハハ」

陽向はそちらに目をやると、一瞬寂しそうな顔をしたが、すぐに明るい声で

「じゃ、これにする。次行こう」と言った。

会計を済ませて次の店に行く。全部で4〜5軒のお店を回って数点の服を買った。

中学生のグループを見るたびに辛そうな顔をするのが、少女は気になっていたが何も言わなかった。

「……遅い。何時間待たすのだ」

「あのね康兄、女の子のお買い物は時間がかかるの。これでも随分早く回った方なんだよ」

「ごめんね康太。でも陽向ちゃんの好きなお洋服を買えたから我慢して」

「……それなんだが。待つてる間ずっと気になってたんだが、お前忍里でもちゃんと着れるような服買ったんだろうな？派手すぎて着れないとかいうオチをつけてないよな」

……陽向の動きが止まった

「ニヤハハ何を言うのさ康兄。あたしがそんなドジ踏むわけないじゃん」

「……アホの子のお前だから言っているのだ」

「大丈夫。ちゃんと部屋の中では着れるから」

「……家の中ですら着れん服を買ったわけだな。こんなことだと思っただ」

「まあまあ、街に買い物に行くときには十分着れるよ」

「……もういい、疲れた。早く帰ろう」

こうしてボクたちのお出かけは終わった。



## 第13話

家についたら陽向ちゃんは「荷物を置いてくる」と行つて部屋へ戻った。

リビングには颯太君、陽太君、由美ちゃん、アンナちゃんの全員が揃っていた。ボクたちは今日の買い物話をしたり、陽太君たちのデートの話聞いたり、颯太君とアンナちゃんのいつものケンカを見学したりしていたけど、いつまで経つても陽向ちゃんが戻つてこなかった。ボクは心配になつて陽向ちゃんの部屋へ向かった。

「トントントン」 ドアをノックした。

「……………」 「返事がない。疲れたから寝ているのかな？」

「トントントン」

「……………はっはい。ちよつと待って」 慌てた声が出た。

「いいよ」という声が出たので部屋に入った。陽向ちゃんは荷物を床に置いたまま机の前に座っていた。

「あんまり遅いから心配になっちゃって」

「……………ごめんね。ちよつと疲れちゃってさ」 陽向ちゃんは目を真っ赤にして答えた。

「陽向ちゃん、大丈夫」 ボクは言った。

「うっうん、久しぶりの外出だから疲れちゃって」 忍者の訓練を受けてる子が買い物ぐらゐで疲れるものだろうか？

「陽向ちゃん、泣いてたの？ 目が真っ赤だよ」 ボクは思い切つて聞いてみた。

「え、やだなあ愛ちゃん。そんなことあるわけないじゃない」と言いながら目をゴシゴシと擦った。

「あのさ。全然頼りにならないかも知れないけど、ボクでよかつたら相談にのるよ」

「大丈夫。大丈夫」 大丈夫でないことは、目がどんどん潤んできていることから明らかだった。

「陽向ちゃんは康太の妹だから、ボクにとつても……………いつ妹みたい

なもんだから遠慮しなくていいんだよ」

「……………」

「……………」

「……………愛ちゃん、あのね……………」

「うん」

「あたし、幼稚園の頃から友達いなかったんだ……………」

「……………どうして?」

「小っちゃい頃から天才とか言われて、何やっても人よりとつてもうまくできてね。そんなあたしをみんなバケ物みたいに見るだけだけで誰も近寄ってこなかったんだ」

「……………」

「学校の授業もゼーんぶとつくの昔に知っていることばかりで、ただ黙って座って授業を受けているだけっていうのがツラくて。本当に壊れるかもと思った時に、伊賀行きの話が出たから伊賀に行ったんだ」

「……………でも勉強もできるし、陸上だって日本記録5つも出して優勝したじゃない」と少女が言うのと陽向が激昂した。

「こんな物なんていらないよ。こんなもの5つ貰うより友達が一人でもいる方がいいよ」そういうとトロフィーをベッドに投げつけた。

「こんな物いらない。勉強だつてできなくてもいい。今日の女の子たちみたいに一緒に買い物したり、カラオケ遊びに行ったりする友達欲しかったよ」陽向は号泣していた。

少女はベッドに近づくとトロフィーと取り上げポンポンをはたいて元の位置に戻した。そして陽向の後ろに回ると背後から陽向を優しく抱きしめた。

「だめだよ陽向ちゃん。陽向ちゃんが欲しくないトロフィーだって、あれを取るために一生懸命連中した人が何百人といるんだよ。そんなことしちやその人たちに失礼だよ」

「……………でも……………」

「あのね、日向ちゃん。ボクは陽向ちゃんの孤独とか苦悩とか全部わかるとは思わない。レベルは違うけどボクにも似た経験があるんだ」

「えっ、愛ちゃんも？」

「うん、ボク水泳やっていてね。中学の時、県で優勝して全国大会にも出たことがあるんだ」

「そっそうなの」

「そんなに水泳が強い学校じゃなくてみんなで水遊びしているような学校だったけど、ボクが県で優勝したら顧問の先生が張り切っちゃってね。ボクだけ特別練習で毎日クタクタになるまでシゴかれたの」

「……」

「みんなはワイワイ楽しくやっているのに、ボクだけ厳しい練習でね。みんなが帰っても一人で泳がされて、段々落ち込んできちゃったの。こんなことなら優勝しなければよかつたって思ったよ。帰りも暗くなつてから一人でトボトボと帰つたなあ」

「友達は」

「もうその時は、練習だけだったから友達もボクを遊びに誘ってくれなくなつてね。学校に一人ぼっちみたいになって、水泳辞めようかと思つちやつた」

「何で辞めなかつたの？」

「うーん、やっぱり水泳が好きだったんじゃないかな」

「でも、あたしは別に勉強好きじゃない。ただできるだけだもん」

「ねえ、知ってる。陽向ちゃんみたいな才能を英語で「Gift」って言うんだよ。神様からの贈り物」

「いらないよ。こんな贈り物。何もいいことないもの」

「アハハ、じゃ自分で別のいいこと見つければいいんだよ。ボク本当は高校に行ったら水泳やめるつもりだったんだ」

「なんで辞めなかつたの？」

「ここに引越してきた時に素敵な男の子を見たの。自分のやることに一生懸命で本当にそれが好きなんだなあっていうのが見ただけでわかる子。その子の学校だったら楽しいことが見つかるかなと思つて、その子のいる文月学園に転校したの。そしたらね、ボクやっぱり水泳やりたいなああって分かつたんだ。だから今も水泳部に入って楽しくやつてる」

「あたしにも見つかるかなあ」

「見つかるよ絶対」

「友達も？」

「あのね陽向ちゃん。勉強だけが友達じゃないんだよ。恋の話したりお菓子の話したりテレビの話したり。陽向ちゃんと勉強のレベルが同じじゃなくても友達にはなれるんだよ。大体レベルが同じじゃないといけないって言ったたら、ボクと康太は付き合えないよ」

「じゃ、みんな待っているから早く下に来てね」と少女は言って部屋から出て行った。

## 第14話

1週間滞在して陽向は伊賀に帰っていった。

……2ヶ月後

僕たちは体育館に並んでいた。

「なんだろうねいきなりの全校集会ってのは？」

「なんでも1年に転校生が入ったらしいのじゃ」

「なんで1年に転校生が入ったくらいで全校集会なんぞするんだ、あのババアなにを企んでやる」

「……授業がツブれただけでもいい」

「何か凄い転入生らしいですよ」

「……編入試験で500点満点で1020点取ったと聞いた」

「わっ翔子、毎度毎度お前はどこから現れるんだ。というか500点満点の1020点って何だ？」

「……間違つて3年の入試用模試の問題を出してしまったらしい。それを満点だったから倍の1000点」

「うちの編入試験はバラエティか？20点は何だ」

「……数学の問題に間違いがあつたらしい。そこを訂正の上で「罰ゲーム」と言つて、その子の作った問題が裏に書かれていたけれど、うちの数学の先生が誰も解けなくてその分が20点」

「もしかしてファイナル問題は1万点出すんじゃないかうちの学校は」

「しかし凄い生徒がいるもんだね」

その時、壇上にババアちよ、学園長が現れた。

「静かにおし、ガキ共」 全校生徒相手でも遠慮なしだな、この人は。

「噂は聞いていると思うけど転入生を紹介するよ」

「なんで転入生紹介するのに全校集会なんぞする必要があるんだ」

「相変わらずうるさいガキだねえ。点数だけだったらこんなことしな  
いが、ちよつと召喚システムの想定外の事態だったから面白いことが  
おきたのさ。だから、あんたらにも見せてやろうと思つてね」

「どうせまたプログラムミスじゃないのか」

「まあ、とりあえず実物を見てからホザきな。出ておいで」学園長が舞台の袖に声を書けた。真新しい文月学園の制服に身を包んだ小柄なサイドポニーの女の子が出てきた。

「紹介しとくよ。今度編入した土屋陽向さんだ。噂は聞いていると思うけど編入試験で1020点取った子だ。自動的に1年Aクラスの代表と1年の総代をやってもらおう」

「……ひっ陽向」なぜかムツツリーニが驚いている。

「陽向ちゃん？」なぜか工藤さんがここにいる。着々と霧島さんの技を自分のものにしていくようだ。

「まあ、論より証拠だ。土屋、召喚してごらん」と学園長が言った。

「はっはい、召喚《サモン》」

やがてズズズと白っぽいものが形を表し……

「ガツ、ガンガム？」装備なんてレベルの話ではない。人間ですらないじゃないか。

「あれはロボットではないのかのう」

「……中に人が入っているから装備と言えないこともないが」

「どうだい驚いたかい？」学園長が自慢げにいう。

「驚いたじゃねえ。いかにも計算通りみたいな言い方しているが、さつき想定外とか言っていただろう」どうも雄二は学園長の言葉にツッコまずにはいられないらしい。

「うるさいガキだねえ。ちようどいいからあんだこの子と戦ってみな」

「アホか、俺の召喚獣は素手だぞ。どうやったら勝てるんだ」

「何も勝てとは言わないさ。そうさね、このこの点数を10点減らしたらあんだの点数を100点増やしてあげるよ」

「だが、だなあ」その時に霧島さんが近寄ってきて雄二に何か手渡した。

「……雄二、これがあれば大丈夫」

「なんだこれは……っってお守りじゃねえか。しかも安産祈願」

「……効果がある」

「糞ガキさつきと舞台に登りな」学園長が急かす。

「わかったよ。おう、転入生。悪いけど手加減しないぜ」言っていることだけ聞けばカッコいいんだが、実力差からすればドラゴンとチワワなのだが。

「まあ、あんたの好きな教科で戦わせてあげるよ。何がいいんだい」

「俺か……よし数学にしよう」

「じゃ吉本先生お願いするよ。始めな」

「召喚《サモン》」雄二の召喚獣が現れた。学ランの裏地に龍の刺繍が入っているところが装備アップされたところだね。

「召喚《サモン》」転校生の召喚獣が現れる。さつきと同じ白いガンガム……

「ちよつと待て、ババア」雄二が叫んだ。

「なんだい、うるさいガキだねえ」

「ガンガムだけでも反則なのにビームバズーカまで持つてるじゃねえか」

「システム上本体にこれ以上装備が付けられなくなったんだね」

「だねじゃねえ。バズーカ相手にメリケンサックで勝てるか」

「ああ、わかったわかった。土屋。その武器は使用禁止だ」

「ちえ、威力試したかったのに」

「開始」

？

## 最終話

雄二は善戦したと言えよう。召喚獣の動かし方では遥かになれている。相手に接近しメリケンサックで殴りまくる。

「カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン」

ただ悲しいかな相手の防御力が強すぎて1点も減らない。

「あのく学園長。あたしも反撃していいんですか？」

「ああ、戦いだから好きに反撃しな」

ガンガムは片足をあげて雄二の上に置くとゆっくりと降ろし始めた

「ぶち」

「勝負あり」吉本先生の声が響いた。

勝利というよりも事故と言った方が適切な気がするが勝ちには勝ちだ。いやあ、恐ろしい。あれが2年でなくてよかったなあと1年生に同情した。

「じゃ、土屋。みんなに挨拶しな」学園長が転入生に言った。

「はい」と転入生がマイクの前に立った。

「初めまして文月学園の皆さん。私は土屋陽向と言います。お気軽に陽向ちゃんとお呼び下さい。この学園の2年Fクラスの土屋康太の妹です。なんか1年Aクラスの代表と1年の総代とかをやらされるようですが、私が総代になったからには1年を半年で優勝が狙えるチームに見せます。座右の銘は「下克上」です」と言ってペコリと頭を下げた。

そう、みんな笑っていたのだ、この時には。まさか数カ月後にテンヤワンヤの大騒ぎになるとも知らずに・・・

「じゃ、これで集会は終わりだよ」

少年と少女は転入生のところに駆け寄った。

「・・・おい、陽向。お前はこんなところで何をしているのだ？」

「やだなあ、康兄ちゃん。集会参加してなかったの」

「・・・参加していたから聞いているんだ。なんでお前が転入してくるんだ」



「ん、愛ちゃんの話聞いてこの学校が面白そうだったから」

「ボクの話って、あの夜の話？」

「そう、水泳以外にも楽しいことがありそうだったって話」

「……いや、そんな些細なことを聞いているんじゃない。なんで中学三年生が高校に転校できるんだ。日本には飛び級はないぞ」

「別に飛び級なんてしてないよ」

「わかるように話してくれるかな、陽向ちゃん」

「ん、とね。この学校に転校したいって抜け忍係の鈴木さんに相談したの」

「……抜け忍係に相談したってどうにもならんだろう」

「康兄ちゃん、忘れたの鈴木さんは住民課なんだよ」

「……だからどうした？」

「戸籍とか住民票とか扱う課じゃない」

「????」

「だから偶然あたしの生年月日を1年早く書きちゃうこともありえない話じゃないよね」

「……有りえるか、そんな偶然。お前、何かで鈴木さんを脅したろう」

「康兄、いくら兄妹でも言っていないことと悪いことがあるよ。脅したなんて人聞きの悪い」

「脅したんじゃないんだね」

「うん、お礼に鈴木さんが人に見せたくない写真をネガごとあげただけ」

「……それを世間では脅しというんだ、バカ者」

「まあ、もう転校してきちゃったものしょうがないじゃない。ところで康兄、さっきから気になっているんだけど、窓を釘で打ち付けている人たちは何なの？」

少年が振り返るとFFF団の団員が一心不乱に窓を釘付けしていた。これはいつものあれだ。背中に冷や汗がながれる。

そこに須川がやってきて言った。

「やあ、土屋陽向君だったね。こんな可愛い妹がいるなんて康太君が

妬ま、いや羨ましいよ。ところでお兄さんと大事な話があるんだ。ちよつと借りていいかな」

「あ、そうですね。じゃ、康兄。あたし愛ちゃんと帰るね。あんまり遅くならないようにね」陽向は愛子の手を取って出口に向かって駆け出して行った。

## 11. 友と戦と全校戦争 第1話

ホームルームの時間、陽向は教壇の上で腕を組んだままあぐらをかいていた。

「なんでなのさ？」陽向は教室を見渡すと懽然として言い放った。

「なんでとはどういう意味ですか？」長い黒髪を赤いリボンで結わえた少女が尋ねた。

「なんで試召戦争が全然起きないかって聞いているの。あたしが転校してきてから1回も起きてないんだよ。せつかくそれを楽しみに戸籍まで偽造して転校してきたのにさ」

「戸籍を偽造・・・？」

「あ、いやこつちの話。なんでもないよ」

「試召戦争が起こらないのは、ハッキリ言って代表、あなたのせいです」

答えている少女は城ヶ崎由香。陽向が転校してくるまでAクラス代表で1年総代だった生徒だ。だが由香は代表の座を陽向に奪われたことを別に恨んではいなかった。奪われたのは自分の実力不足、もつと努力して取り戻せばいい。そういう風に考える真っ直ぐで素直な娘だった。その由香が声を荒げるのは、とにかく陽向のやることなすことが、この真面目な少女の神経を紙やすりで削りまくるようなものであったせいである。

「なんであたしのせいなのさ、由香リン。あたしこんなにかわいいのに」

「それは個人の好みだからコメントしません。あと、私を由香リンと呼ぶのは止めて下さい。城ヶ崎という名前があります。ついでに言えば、教壇の上にあぐらで座るのは止めて下さい」

「もう、由香リンってば堅いなあ。スパッツ履いてるから見えても大丈夫だよ」

「そういうことを言ってるではありません」

「このクラスにスパッツフェチがいるってこと？」

「いちいちクラスメイトの性癖まで把握はしていません。単にお行儀が悪いと言ってるのです」額を押さえながら少女が言った。

「うーん、伊賀じゃ寄合の時は囲炉裏端であぐらかいて会合してたからこっちの方が気合入るんだよね」

「ホームルームで何の気合を入れるつもりですか、あなたは？」

「由香リン、いいツツコミだねえ」

「話が進まないので無視します。とにかく1年生の間で試召戦争が無くなったのは代表のせいです」

「あたしのことはヒナちゃんって呼んでいいよ、由香リン」

「あなたは人に説明させておきながら、それを聞く気があるんですか？」

「もちろん聞いているよ。なんであたしのせいかがよく分からないけど」

「いいですか」由香は教え諭すように陽向に言った。

「すべてはあなたのあの非常識な召還獣のせいです。あんなもの相手に誰が勝てると思います？Aクラス全員倒しても代表のあなた一人にやられるのは火をみるより明らかですあから、結果的にAクラスに試召戦争を仕掛けてくる組はなくなりました」

「でも他のクラスで試召戦争がなくなったのはどうしてさ」陽向は納得がいけないといった様子で言った。

「勝っても負けてもあなたが試召戦争を仕掛けてくるとみんな思っているんです。ただでさえ消耗しているところにAクラスにまで試召戦争を仕掛けられたら全員0点で補習室行きです。だからみんな動くに動けないんです」

「えー、じゃ、このままずっとこう着状態が続くってこと？」

「現時点ではそういうことになります」

「うーん……」陽向は教壇にあぐらをかいたまま考えていた。

「ロクでもないことを考えているんじゃないでしょうね」由香が警戒心を露わにして言った。

「あのさ由香リンが代表と総代やればいいんじゃない？あたしはただ

の兵隊でいいからさ」

「それは、私だったら簡単に倒すことができるということ为前提にした発言ですね。バカなことを言わないで下さい。代表と総代はテストの点で自動的に決まるのです。それに次のテストで自力で奪い取ってみせますから、譲られるには及びません。あと、再度申し上げますが由香リンは止めてください」

「そんな不便な決まりなの？やりたい人がやればいいと思うんだけどなあ」

「これがこの学校のシステムです」

「よし分かった。由香リンは副代表だからあたしの部下だよ。放課後に全クラスの各組の代表を集めてくれる？」

「何をするつもりなんですか」

「……へへへ、下克上会議」陽向はそういうとニカッと笑った。

放課後、全クラスの代表が集まった教室で陽向は再び教壇にあぐらを書いてみんなを見直してた。

「土屋さん、いいかげんにしなさい。さつさと教壇から降りて。みんなに失礼よ」

「ああ、いいよ。城ヶ崎。そっちの方がお館様らしい」

「……お館様？」

「へへへ、あたし忍者の子孫でさ。この間ポロッと洩らしたら「お館様」ってあだ名がついちちゃったの」

「……忍者？」

「いや、最初は冗談だと思ってたんだけど、女子の体育抜け出して男子のサッカーに混ざってプレイしてさ。ドリブルで7人抜きだの、本田ばりの無回転FKだので一人で5点も入れられちゃ信じざるを得ないよな」

「あなたお腹が痛いから保健室行ってくつって言うっておきながらそんなことしてたの」

「だって、女子の体育の創作ダンスなんて、こっ恥ずかしくてやってられないよ」

「だから学校っていうのはそういうもんじゃないと……」

「由香リン、うちのお母さんみたい」

「誰があなたのお母さんよ」と大声で怒鳴ってしまった。気がつくとき、すべての組の代表が由香をじっと見つめている。

「コホンっ、ではこれから会議に入ります。今日集まってもらったのは……」

ここで由香は気がついた。陽向に代表を集めろといわれて声をかけるのに時間を取られてなんの会議だったのかを聞くのを忘れていたのです。

「……きつ今日の会議は下克上会議です」誰かが質問してこないことを祈った。

## 第2話

「なんだそのマヌケな会議は？」案の定イラついた声で質問が飛んできた。声のした方に目をやると強面の顔をした体格のいい男がいた。「ハニヤ、ごめん。あたし転校してきたばかりでみんなの名前覚えてなんだけど、あなたは誰かな」陽向が空気を全く読まない間延びした声で尋ねた。

「Fクラス代表の竜崎誠だよ」

「マコちゃんか、あたしAクラス代表の土屋陽向、ヒナちゃんって呼んでくれていいよ」

「いいよって前に、そのマコちゃんってのは何だ。せめて誠と呼べ」

「え、だって長つたらしいじゃん」陽向が不服そうに答えた。

「長いもなにもマコちゃんの方が一文字多いだろうが」

「でも可愛いからマコちゃんでもいいよね。はい、決まり」

その後、強面の竜崎がギャアギャアいうのを一切受け流す度胸は大了したものだ。

「まあ由香リンのネーミングセンスはどうかと思うけどさ、要するに試召戦争ができるようにしようって会議なの」

「あんたが言ったんでしようが。それと由香リン禁止」と由香が怒鳴る。

「試召戦争つてもなあ・・・」

「お館様がいるんじや勝てっこないし」

「負けたら設備が悪くなるくらいなら今のままでもいいよね」と各代表が口々に叫ぶ。

「うん、みんなのいうことはわかってる。だけど代表代わってって言っても頭の固い由香リンはいやだっていうし、それじゃ状況は変わらないよね」

「」「ふむふむ」「」

「だけど試召戦争の目的は、より設備のいい環境を目指して勉強することによって上のクラスを倒して手にいれることだと思っんだ」「なるほど・・・」

「確かにそうなんだけど……」

「だからさ。発想を変えようよ。Aクラスにあたしがいるから試召戦争を諦めるっていうんじゃないよ。もっと視野を広く持とうよ」

「……ごめん、土屋さん。ちよつと言っていることがよくわからないんだけど」

「へへへ、あたしいい手を思いついたの。試召戦争に勝って、その上で全クラスの設備を良くする方法」

「そんな方法あるのかよ、お館様」

「勝ったらよくなる。負けたら悪くなるつてのが試召戦争のルールだぞ」

「……そんな都合のいい方法なんてあるわけないじゃない」由香が呆れたように言った。

「へへへ、それがあるんだな」陽向が不敵に笑った。

「……嫌な予感しかしないけど、どんな方法かしら」

「2年生と3年生に試召戦争を仕掛ければいいんだよ」陽向がニカつと笑った。

「あのね、土屋さん」由香が諭すように言った。

「試召戦争は同じ学年同士じゃないとできないの。そうでないと点数が同じにならないでしょ」

「学年対抗できるようにすればいいんだよ。それに3年から言い出したのならともかく点数的に一番不利なあたし達1年生から言い出すんだもの断る理由はないでしょ。それに1年生の現状みればお互い現状維持でヘタしたら卒業するまでこのまま試召戦争をやらないままになっちゃうよ。学校としてもそれは困るでしょ」

「それは分かったけど2年や3年相手に勝てるのかよ。いくらお館様が凄いつて言ってもそれだけじゃ心もとないぜ」

「そこは作戦だよ。大丈夫、伊賀の諸葛孔明と言われたあたしがついているよ」

「時代どころか国まで違っているわね。せめて竹中半兵衛くらい言えないのかしら」

「学校が納得するかしら……」



「そこはあたしと由香リンで学園長を説得するよ」

「あなたは どうして いちいち私を巻き込みたがるの。あと城ヶ崎と呼べって何回言えば・・・」

「代表と副代表といえど夫婦も同然だよ、由香リン」

「何で言ってる傍から気持ちよく忘れて由香リン呼ばわりできるのかしら」

「すぐに試召戦争を仕掛けても勝ち目はないから、まず情報を集めて欲しいんだ。各クラスの部活をやっている人に3年生の先輩の進路を確認するように言ってみよう。大事な情報で作戦の肝になるところだからね。よろしくお願い。じゃあ、とりあえず今日はこの辺で。あたしは学園長を説得してくる」

陽向は言いたいことを言うつもりで机から飛び降りて教室から出て行った。

各クラス代表は鳩が豆鉄砲くらったような顔で戸惑ったまま席を立てずにいた。

「ふむ、お前さんの言いたいことは大体わかったよ」学園長は机に肘をつきながら目の前の二人の女生徒を見つめた。

「学園長なら理解してくれると思ってました」陽向はニコニコと学園長を見つめ返した。

「確かに1年が試召戦争をやらないうってのは問題になっていたところさね」

「じゃ、ちょうどいいですね。学年対抗試召戦争をやりましょう」

「そうなると点数が問題になるね」

「今の点数のままでもいいし、1年の問題を解かせてそれを点数にしてもいいし、あたしたちはどっちでもいいですよ」

「勝てるっていう自信があるのかね」

「負ける戦はしない主義です」

「よし、わかった。ただずつととなると問題もあるから一か月限定のテストケースとしよう」

「ありがとうございます。では失礼します」と言って二人の女生徒はドアに向かった。

「しかしまあ、バカ兄貴とはエライ違いだね」学園長がボソつと言った。

陽向の足がピタつと止まり学園長の方に振り返った。

「あたしのこととはどんなに悪く言つて笑つて許しちゃいますけどお、康兄のことを悪くいうとタダじゃおかねえぞババア」と微笑みながら言った。

「ふふふ、やっぱり、あんたならそういうと思つてたさね」学園長も怯まずに言った。

「あら、最初から計算してたような言い方ですね」

「そういう風に言えば、そう聞こえるだろう」

「本当に年を取ると煮ても焼いても食えませんね」

「食うとこがないチビガキよりはマシさね」

「フフフフフ……」

「ハハハハハ……」

由香はこのやり取りを震えながら見ていた。

### 第3話

「それでは失礼します」2人の女生徒は頭を下げ、ドアを閉じた。  
「それにしても土屋さんってよく学園長にあんな口がきけるわね」由香が感心したように言った。

「もう、由香リンだったらいつまでも堅いなあ。あたしのは陽向って呼んでって言うてるのに。それが難しいんだったらヒナちゃんでもいいよ」

「なんでハードルが上がってるのよ。友達でもないのにそんな呼び方しません、っていうより由香リン禁止だと何度言えば・・・」

陽向の瞳が一瞬哀しそうに曇った。「別に学園長だって、取って喰やあしないよ。伊賀にいた頃なんて、鎖鎌バアさんに何度頭割られそうになったことか」

「・・・くっ鎖・・・何ですって?」

「鎖鎌バアさん。鎖鎌の達人でね。分銅をブンブン振り回してあたしに投げつけるの。何にも悪いことしてないのに」

「それは警察呼ぶべきだったんじゃないかしら。近所の人にも危害が及ぶでしょうに」

「それがあたしにだけ鎖鎌振り回すんだよね」

「それもおかしな話ね。何か恨みがあったとか・・・」

「心当たりがないんだよね。強いて言えばバアさんが飼っていた鶏の卵を盗んだことくらいかな」

「かなって、強いても何もそれで十分だと思うんだけど。それにしてもたった1回卵盗んだくらいで酷い話ね」

「あ、いや。毎日だったから」

「そのおバアさんが火縄銃持ち出さなかったことを感謝すべきね、あなたは」

「やだなあ由香リン。火縄銃なんて普通の家にはないよ」

「伊賀じゃ鎖鎌は普通の家庭に常備されてるようね。にしても人の家の卵を盗るのは感心しないわ」

「だって仕方ないんだよ。あたし卵かけご飯が好きなのに、うちは鶏

飼ってなかったんだもの」

「土屋さんご存知かしら？日本には1400年も前から通貨制度というのが導入されているのよ」由香が呆れた様子で言った。

「そんなの知ってるけど家からお店まで遠いんだよ。でも卵は隣の庭にある。そうすると誰でもやることは一つでしょう」

「普通の人間は、毎朝鎖鎌振り回されるよりはお店で買うことを選ぶと思うわ。あなたは勉強の前に人間界のルールというものを学ぶべきね。それにしてもそのお婆さんも過激ね」

「うーん、多分真面目なクリスチャンだと思うんだけど・・・」

「忍者の里でクリスチャンってのは珍しいわね。教会通ってたの？」

「ううん、毎回あたしを追い回しながら讚美歌13番を必ず歌っていたから」

「どれだけ世界規模で恨みを買ってたのよ、あなたは」

「あと刀を振り回す日本刀ジイさんってのもいて・・・」

「何をやったかは聞きたくもないけど、伊賀の人って何かを振り回していないと人とコミュニケーションができないのかしら？」

「そんなことないよ。手裏剣オジさんは・・・」

「ストップ！それ以上言うて書いてる人が伊賀から訴えられるわ」

「えーっ、なに言ってるのかわかんないよ、由香リン」

「いいのよ、いろいろと大人の事情というのがあるの。あと由香リン禁止」書いている人のことまで思いやる由香であった。

「まあ、そういう年寄に揉まれてきたあたしからすれば、学園長なんて怖くもなんともないって」陽向があっけらかんとして言った。

「揉まれたというより、あなたが騒動起こしてただけのようにしか聞こえなかったんだけど」

「それにさ。きつと学園著はやんちゃな生徒の方が好きだよ」

「また、そういう。何を根拠に・・・」

「目だよ。学園長だって若い頃はやんちゃだったはずだよ。今だってやんちゃな目をしてるもん」陽向はニカッと笑って言った。

「雄二これはどういうことかな」掲示板に貼られたババア、いや学園長の通達を見ながら隣の雄二に聞いた。

「どうもこうも学年対抗の試召戦争を向こう一か月間認めるってことだろう」

「じゃあ恨み重なる3年Aクラスに復讐できるということだね」

「明久よ、よく読むのじゃ。クラス対抗ではなく学年対抗、つまり学年まとめでの試召戦争じゃ」

「……嫌な予感がする」

「じゃあAクラスからFクラスまで一緒に戦うということだね」

「……そう」

「わっ、毎度のことながら、お前はどこから現れてくるんだ、翔子」

「……そんなことは些細な問題」

「些細じゃねえ。さつきまで気配もしなかったぞ」

「……大事なものはAクラスの代表が総代表ということ。つまり2年生は全員私の部下」

「まあ、そういうことになるのじやろうな」

「……ということでは雄二。これから市役所に婚姻届を出しにいく」

「“ということでは”の前後の文が全く繋がってないぞ。なんで俺がお前と婚姻届を出しに行かなきゃならんのだ」

「……命令だから」

「はあ？」

「……総大将は部下に好きな命令を出せる」

「あほか。そりゃ試召戦争に関してだ。プライベートにまで命令できる訳ないだろうが」

「……ダメとは書いてない」

「そんな命令出そうなんて考える奴は、学園中でお前だけだからだ」

「……後出しはズルい」

「お前にだけは権力を持たしちやいかんと良くわかったよ」

「どんな隙も見逃さずに雄二に結婚を迫る霧島さんの行動力を僕たちは少し見習うべきなんだろうか？」

## 第4話

「しかしこりや誰の考えだ」

「……十中八九、陽向のアイディアだ」

「陽向ちゃんってムツツリーニの妹の？」

「……そうだ。あいつは試召戦争をしたくてウズウズしていたんだが、1年生がAクラスに戦争をしかけてこないとブツクサ言っていた。だから学年間戦争を仕掛けたんだろう」

「ムツツリーニの妹だけでこんな大がかりなことが決められるもんか  
のう？」

「……学園長を説得したんだろう」

「あのババアを乗せたのか、スゲエな」

「……陽向は年寄りに可愛がられるタイプらしい。伊賀では毎朝隣のバアさんに遊んでもらっているとか言ってた」

「二「ほう、そりやすごいな」」

よもやその「遊んでもらっている」の内容が、鎖鎌で追い回されることだとは思ってもよらない一同は感心したように言った。

「つまりそのテクニクで学園長を籠絡したという訳じゃな」

「いや、それだけじゃないだろう」雄二が苦い顔をして言った。

「……どういうこと雄二」霧島さんが不思議そうに尋ねた。

「このふざけた通知をよく読め」壁に貼られた学園長からの通知を指差した。

【第1回チキチキ下剋上大合戦】

・学年単位の試召戦争等する。ルールは通常通り

・総大将は各学年の総代とする。総代が仕留められた時点で試合終了とする

・戦闘フィールドは校内全域

・各人は2×4cmの白布に名前を書いて左胸に表示すること

・多重戦争も認める

・戦闘数に制限は設けない

- ・ 負けた学年はそれぞれのクラスのレベルを1ランクダウン
- ・ 補習は体育館でそれぞれの教科に別れて行う
- ・ 補習は現行通り。時間制限あり、問題数制限なしの青天井ルールとする。

・ OP曲 “吹けよ風、呼べよ嵐”、<http://www.youtube.com/watch?v=LcgKfSl8whw>

・ 挿入曲 “ごはんはおかず”、<http://www.youtube.com/watch?v=y2FGSGcLqno>

・ ED曲 “甘き死よ、来たれ”、<http://www.youtube.com/watch?v=a6rM5tTb3E>

「なんだこのOP曲やら挿入曲やらED曲つてのは、あのババア完全に遊んでやがる」

「……私もそう思う」

「珍しく意見が一致したな、翔子」

「……OP曲は「ハレ晴れユカイ」にするべき」

「選曲を問題にしてんじやねえんだよ」

「挿入曲が「ごはんはおかず」というのは問題にならないのじやな」

「……ED曲が「甘き死よ、来たれ」とは不吉」

「だから曲の話はどうでもいいんだよ」

「それよりこの多重戦争とはなんなのかのう?」

「例えば1年が俺たちに戦争を仕掛けてきた時に、3年が便乗して俺たちに戦争仕掛けてもいいってことだ。くそつ、俺たちに不利じやねえか」

「どうしてさ、雄二。1年が僕たちに仕掛けてくるとは限らないじやないか」

「アホか。確かに強い奴からツブすつてのはケンカでも戦争でも常道だが、試召戦争の場合には点数が減っていくんだ。その条件で俺たちに戦争仕掛けられたら、マズいことに俺たち、正確にはFクラスだが、は3年Aクラスと確執がある。だから3年が俺たちに多重戦を仕掛けてくるだろう。それを見越せば俺たちが先に3年に仕掛けるだろ

うと思うから、1年は兵力を温存して、戦争後に勝った方に仕掛けるつもりなはずだ」

なるほど正論だ。だが、雄二。そういう話はもっと小声でした方がいいんじゃないだろうか？集まってきた他のクラスの連中が戦争に敗れることが必然になっっているのはFクラスのせいだという目でさつきから僕たちを睨んでいるんだが。

視線に質量があったら僕たちは射殺されているに違いない。

「じゃ、どうすればいいのさ。このまま座して死を待つのかい？」

「とりあえず作戦を立てよう。翔子お前が総大将だから一緒に来い」

「……市役所が先」

「まだ言っているのか。諦めてとつと来い」

僕たちは戦争準備に取り掛かった。

……3年Aクラスの教室

「おい、高城。全校戦争どうすんだよ」常村が言った。

「2年Fクラスに復讐するチャンスだぜ」夏川も同調した。

「うーん、クラス対抗じゃないしねえ。こつちから仕掛けるのも得策じゃないし、わざわざ3年に戦争仕掛けてくるとも思えないから、1年と2年で争ってくれるんじゃないかな？その後、勝った方を力技でツブしに行こう」

「あんた面倒くさいだけなんでしょ」小暮が呆れたように言った。

「うん、いついや作戦だよ、作戦」

「どうだかね。まあ、それが一番いいかもしれないわね。2年がこつちに仕掛けてきたら1年がわざわざ3年に仕掛けてもこないだろうし、結果的に2年に仕掛けるだろうしね」

緊張感のない3年の作戦会議は5分で終わった。



## 第5話

「さて、各々がた。いよいよ決戦だよ」陽向は抑えきれない喜びを表しながら各クラス代表を見渡して言った。

「だから、あんたは教壇にあぐらかいて座るのを止めなさいって言うているのに」義務のように由香が言った。

「お願いしていた3年生の進路の調査は終わったかな」

「ああ、ちゃんと取ってきたけどこんなのどうすんだ、お館様」Bクラスの代表が言った。

「これから3年生の名簿を渡すから、それにそれぞれ進路を書いてちょうだい。貴重な情報よ。由香リン、これをみんなに渡して」

「あたしはあんたの秘書じゃないのよ。あと由香リン禁止」由香はブツクさいいながらも書類を各クラス代表に配った。

「で、結局お館様はどうするつもりなの。様子見するのそれとも2年に戦争を吹っ掛けるの」Cクラス代表が言った。

「何のために全校戦争を学園長にお願いに行ったと思っっているのよ。もちろん試召戦争を仕掛けるわ」

「2年のAクラスは強者揃いらしいぜ。代表から5席までほとんど実力差はないらしい」

「そのかわりFクラスが恐ろしいほど足を引っ張ってくれるという話だ。ブルマ姿の女子の団体当てればクラスの9割がこっちに寝返ってくれるらしい」

「ある意味、恐ろしいクラスね」由香がボソリと言った。

「どっちでもないわ。あたしたちの敵は3年よ」

「」「ええ」「」一同が驚愕の声を上げた。

「お館様、それは無茶だ。2回戦わないといけないことを考えると2年を先にやった方がいい」

「そう、2年と3年は仲が悪いから、2年と戦っても3年は参戦してこない。うまく行けば一緒に2年と戦ってくれる」

「ケンカの常道は強い奴から倒すことだぜ」Fクラス代表の竜崎誠が言った。

「うーん、マコちゃんはやっぱりケンカ慣れしているだけあって良いこと言うね。でも、やっぱりこの場合戦うべきは3年なの」

「だからマコちゃんじゃねえってんだろうが」

「話の腰を折らないでマコちゃん。この場合、表面的な強さだけみちやいけないの。3年は受験があるから、進路によつて選択科目が違つているはずよ。具体的に言えば、国立大学、私立文系、私立理系。国立大学は万遍なく勉強しているだろうけど、私立系は文系なら理数は勉強してないし、理系なら社会、国語なんかは勉強してないはず。持ち点は2年の最後の点数が持ち越されるから、それなりにあるでしょうけど補習で点数の補填はほとんど望めないってわけ。だから最初だけは手ごわいかも知れないけど、ある程度点数を減らせばもう戦力復帰は無理つてことなの。だから一見怖そうに見える3年の方が実は弱い」ここで陽向はみんなを見渡した。

「それにさつきみんなが言ったとおり2年と3年は仲が悪いから、あつたし達が3年に宣戦布告しても2年はあつたし達を攻撃してこない。まず、静観ね。3年に宣戦布告する可能性もあるけどそれは低いわ。だって、この戦争が終われば今度は2年と戦うんだもの。できるだけあつたし達の戦力は削いでおきたいはずだもの」

「ところで相手が国立志望だったらどうするんだ」

「その時は5教科以外、例えば保体とか音楽で勝負を挑むわ。そのためのスペシャルチームを組むの」

「結局、どうするんだ？」

「まず攻撃と守備に分けるわ。攻撃はA、B、Cクラス。守備は、D、E、Fクラス。」

「攻撃チームはそれぞれの組の生徒を点数で3つのグループに分けてちょうだい。他の科目はどうでもいい、その科目だけ強ければいいから。1つは対国立向けのスペシャルチーム。音楽と保体の点数を最優先。2つ目は対私立文系向けの理数チーム。数学と理科の点数の高い人を選んでね、国語や古文や社会なんて赤点でもいいわ。3つ目は対私立理系向けの人文チーム。国語、古文そして社会の点数を優先して」

「いくらこつちが対3年チームを作っても相手が進路別にチーム作ってないの意味がないでしょう」由香が言った。

「ふふふ、いい質問だね、由香リン。でも大丈夫。3年生は絶対に上の3チームに分けてくるよ」

「何でそんなことわかるのよ」

「わかるよ。まず、第一にあたしが3年生だったら絶対にそうする。第二にチーム員を適当にバラバラに揃えたら戦力が低い方で平均化して不利になる。クラス対抗ならしょうがないけど、これは学年対抗だからね。クラスに関係なく高い点数を取れる科目の人同士でチームにするはず。第三に3年生は1年なんて眼中にないから、仮に1年から仕掛けられてきても力技で押しつぶそうとする。それだったら全員が得意な科目を揃えてその科目で勝負をかける」

「じゃ、勝てないじゃねえか」竜崎が言った。

「そこでこつちも秘密兵器を使うの」陽向がニカッと笑った

「あなたの言うことはさっぱりわからないわ。秘密兵器って何」由香が言った。

「さつき組み分けしてもらったメンバーとは別にラグビー部や柔道部などの運動部で体格のいい力のある人を8人とC、D、E、Fクラスからどの教科も不得意で戦力にならないという人8人と各部のメンバーを1人選んでもらいたいの。それがあたしたちの秘密兵器」

「そんなの何に使うんだ？」竜崎が聞いた。

「突撃隊と救援隊と偵察隊を作るの」

「二二突撃隊と救援隊と偵察隊??」

「そう、いくらこつちが相手に会わせてチームを組んでも立ち会いは先生の科目が3年生有利のチームだったら意味がないでしょ。その時は突撃隊のメンバーが突っ込んで先生を召喚フィールド外に引っ担いでくる。その後、救援隊がこつちの得意科目の先生を真ん中に引っ張って行って、戦闘開始すればこつちの得意科目で戦えるというわけ」

「偵察隊ってのは何？」

「相手は階段とか廊下とかをチームで守っているはずだよ。そこに

こっちの対抗チームをうまく当てるには、相手が国立か理系か文系かを見分ける必要があるの。そのために反対側の校舎の屋上に偵察隊を配置して、自分の先輩がどこのチームにいるのかを見つけて欲しいわけ。その情報に従ってこっちの攻撃チームを動かすわ」

「よくもまあ、そんな卑劣な手が思いつけるものね」由香が呆れたようにいった。

「へへへ、だから伊賀の竹中半兵衛と呼ばれていたって」

「心の底から呆れているんだけど？あと、伊賀の諸葛孔明はどこ消えたの」

「ちよつと気になるんだが」竜崎が考え込むように言った。

「何かなマコちゃん」

「マコちゃんじゃねえ・・・いや、話が進まないからそれはいい。守備と攻撃に分けるというのは賛成だが、攻撃チームにA、B、Cクラスと成績のいいクラスを集めちゃ、守備が弱くなって敵がお前のところに殺到するんじゃないかねえか？」

「ああ、そのことか」陽向はこともなげにいった。

「そのことかって、お前自分だけで勝つつもりかよ」

「違うよ。D、E、Fクラスの人たちには申し訳ないけど捨石になってもらうの」

「捨石ってどういう意味だよ」竜崎が気色ばんだ。

「あ、ごめん。言葉が悪かったね。時間稼ぎをしてあたしがこっち側にいると思わせてくれればいいの」

「意味が分からないわ土屋さん」由香が首を傾げて言った。

「だって、あたしも攻撃に参加するもの」陽向は当然のように言った。

全員が目をパチクリさせた。

「あのね、土屋さん。試召戦争のルールではね。代表は自分の位置を相手に教えていなければいけないの」

「うん、知っているよ。10分ごとに教えなければいけないだよ。だからその10分で3年の教室に駆け付ける。申し訳ないけど3年の代表を仕留められるのはあたししかいないと思うんだ。だけど他の人間を相手にしている暇はないの。だからみんなにはそれ以外を

押さえて欲しいんだ。攻撃チームの作戦が成功すれば相手の防衛線に穴が開く。そこからあたしが突っ込む。だから守備チームは攻撃チームが穴をあけるまでの時間を稼いで欲しい。それしか勝ち目はないと思うの」

一同が黙り込んだ。

「あたしのスタンドプレーに見えるかも知れないけど、受け身に回ったら絶対負けるよ。だから集中攻撃の一点突破で相手の大将の首を取る。大丈夫、暗殺は忍者の得意技だよ」



きないという理由でFクラスを選ぶということもあるけど、それは諸刃の剣で逆に言えば逃げられないことになるから、それを選択する可能性は低いね」

「そうすると俺たちは中央階段と西階段から突入するということになるな」Bクラスの代表が言った。

「結果的に言えばそうだけど、現時点で断言するのは止めようよ。もし3年が1年を舐めていたらAクラスから動かない可能性もあるから」

「守備はどうするんだ」竜崎が訪ねた。

「あたしはFクラスにいる」陽向が言った。

「お前さつきFクラスは逃げられないって言っていたろうが。俺たちの作戦じゃ攻撃チームが穴を開けるまで守備チームが時間を稼いで、そしてお前が出撃するってことだっただろう。どうやって脱出するんだ」

「簡単よ。守備チームは中央階段と西階段をD、E、Fクラスの全員で2年の階までみっちり埋めてもらおうわ。召喚獣同士の戦いなどできなくらいに。よしんばできたとしてもせいぜい先頭の数人だけ。全員倒すにはかなりの時間がかかるはず。それに突撃隊と救援隊を配置するから先頭の数人がやられた段階で相手が国立なのか文系なのか理系なのかがわかる。そしたら突撃隊が先生を拉致して、救援隊がこっちに有利な先生を配置すればさらに時間が稼げるはずよ。その間に攻撃チームが穴を開けてくれたら、あたしは誰もいない廊下を走って3階まで駆け上って突撃かけるわ」

「東階段はどうするんだ」

「あたしがFクラスにいるのに、わざわざ一番遠い東階段から人を突撃させないでしょう。戦力は集中してくるはずだし、あたしたちを舐めていたら力技で押しつぶそうと考えるはずだもの。それに万が一東階段から来たら中央階段の人間が廊下を埋めればいいのよ」

「そんなもんかな」竜崎は腑に落ちない様子だった。

「みんなを安心させるためにハッキリ言っておくけど、この戦いはあたしたちが絶対的に有利なの」

「相手の対策立てたくらいでなんでそんなことが言えるのよ」由香が言った。

「相手の対策なんて枝葉末節だよ。本質的なことを言えば3年生はこの戦争に全く興味が無いっていうことなの。3年生にとつてこの時期の最優先は大学受験対策であつて、試召戦争なんて迷惑以外のなにものでもないわけ。だから勝とうが負けようがどうでもいいと思つている人がほとんどだと思うの。多分、この戦争の対策だつて考えていないし、攻撃だつてAやBクラスが全員で押しかければ何とかなると思つているくらいじゃないかな。それでもチーム分けくらいはしてくるだろうけど。だから対策を考えているあたし達の方が絶対的に有利つていうわけ」

「なるほどそう言われればそうだな」

「受験前にして試召戦争のためだけに使わない科目を勉強するわけないしな」

一同の士気が一気に高まつた。

「じゃ、一応チーム分けを確認するよ。国立対策のスペシャルチームは大丈夫？」

「ああ、全クラスから音楽と保体の点数がいい人間を集めた」

「OK、じゃチーム名は玄武。リーダーはBクラス代表の堀内君」

「私立文系対策の理数系チームは？」

「AからCクラスで理数が得意な人間を集めてある」

「よろしい。じゃチーム名は白虎。リーダーはCクラス代表の小山内さん」

「わかつたわ」

「私立理系対策の人文チームは？」

「同じくだ。1名Eクラスで点数が高い奴がいたから入れといた」

「点数さえ高ければ構わないよ。チーム名は朱雀。リーダーはAクラス3席の三谷さん」

「はい、自信ないけど頑張ります」

「さて、突撃隊と救援隊と偵察隊は？」

「柔道部から3名、空手部から1名、ラグビー部から2名、相撲部から



2人の計8人だ」

「じゃ、これを配るから先生の顔と教科をちゃんと頭に入れてね」

「土屋さん、それ何？」 由香がいぶかしげに尋ねた。

「ん？ 学園のホームページに載っていた教員の顔写真とプロフィール。これ知らないとかどの先生を排除すればいいかわからないでしょ」  
「ホームページ閉鎖した方がいいと先生に報告した方がいいのかしら」

「救援隊は当日、理系の先生と文系の先生と保体・音楽の先生を必ず連れてきてね」

「どこに連れて行くのよ」

「戦闘になりそうなポイントにだよ」 何を聞くのかと言わんばかりに陽向が答えた。

「一番大事な偵察隊。準備は大丈夫？」

「ああ、高性能双眼鏡4つに全部の部員を一人ずつ揃えたぜ」

「じゃ、あなたの携帯に電話して状況を常に確認するからお願いね。この作戦の成否はあなた達にかかっているんだから」

相変わらず教壇の上にあぐらをかきながら陽向は一同を見渡して言った。

「いい、3年戦はあくまでも前座。敵は2年にありだよ」

「」「」「」「」「」

一同はわけのわからぬ昂揚感に突き動かされて鬨の声を上げた。

## 第7話

翌日、二人の少女は3年Aクラスの教室前にいた。

「なんであなたは毎回わたしを巻き込みたがるのよ」由香はブツブツいいながら歩いていた。

「ニヤハ、だって一人で宣戦布告に行くのは寂しいじゃない。それに交渉には由香リンが必要なんだよ」由香の不平を聞き流しながら陽向が言った。

「宣戦布告で何の交渉よ。男子生徒にでも行かせばよかつたじゃない」

「それじゃだめなんだよ。3年総代とちよつと取引しなきゃならぬいから」

「相変わらずあなたの言っていることは全くわからないわ」

3年Aクラスの前についた。

「じゃ、行くよ由香リン。宣戦布告と同時に戦闘状態も同然だからね」

「あたし帰っていいかしら」

「決意はできたみたいだね。さあ、行こうか」

「あなたは一度でもわたしの話を聞いたことがあるのかしら」

ドアを開けて教室に入っていた。中にいた生徒が一斉に二人の方を振り返る。

「どうも、1年総代の土屋です。試召戦争の申し込みに来ました」

「あなた、御用聞きじゃないんだからもっと威厳を持ちなさいよ」

「なんだあくお前らは」ソフトモヒカンのガラの悪い生徒が言った。

「ここはお前らみたいなガキがくるところじゃねえぞ」人相の悪い坊主頭の生徒も叫んだ。

「わあ、三年ともなると教室でペットが飼えるんですね」陽向が感心したように言った。

「ペットペット……誰がペットだこのガキ」二人が同時に吠えた。

「言葉が喋れるなんて随分利口ですね。……そうだこれ食べべるかな？」陽向はポケットをガサゴソとあさると二人にビスケットを差し出した。

「そんなもん喰うか、俺たちはペットじゃねえんだ、3年Aクラスの生徒だ」

「え、人間だったですかあ。つまんないの」陽向は興味が失せたように二人に背中を向けて教室を見渡した。

「侮辱するだけ侮辱しておいて、あつさり無視してんじゃねえよ」

「うるさいなあ、えーつとこういう時は何て言うんだっけ。そうだ！ハウス!!」

「今度は犬扱いか」ギヤアギヤア喚く二人を陽向は完全に無視した。

「(先輩だいが怒ってるけど、大丈夫なの土屋さん)」

「大丈夫。モブキャラは主人公には勝てない定めなんだよ」

「あなたいつの間にも主人公になったのよ。ところであなた3年総代の人の顔知ってるの？」

「知らないけど・・・あ、たぶん窓際に座っているあのポケつとした人だよ」

「(あんな間抜けそうな人が本当に総代なの)」

「うん、間違いない。鋭利なオーラと禍々しいオーラとパカパカしいオーラをまとっている」

「なにその間抜けなオーラは？」

「いや、そうとしか表現できないんだよね」

二人は窓際でボくつとしていた男生徒に近寄って行った。

「3年総代の方ですよね」

「あなたよくこいつが総代だってわかったわね」隣りの席に座っていたスタイルのいい和風美人が代わりに答えた。

「はい、パカパカしいオーラが漂っていたので」

「それただのバカつてことじゃないの？」

「どつちにしろ只者じゃないなと思えます」

「まあ、確かにある意味只者じゃないけど、えーつと1年総代の土屋さんだっけ」

「はい、先輩は？」

「あたしはAクラスの小暮葵。この3年総代にしてバカの高城の幼馴染よ」

「小暮先輩、スタイルいいですね。ちよつと触っていいですか？」と言  
うなり陽向は葵に飛び掛かった。

「ちよつ、やだ。触らないで……」

「いやあ、こりやスゴいなあ……」

「なにいきなり上級生にセクハラかましてるのよ、あなたは」

「由香リンも触らせてもらおうといいよ。凄いよ。胸が手に入りきらな  
いんだよ」

「触りません。すいません小暮先輩。うちの総代ちよつとアホの子な  
もので」

「アホにはこいつで慣れているつもりだったけど、いろんなタイプが  
いるのね。ところで何しに来たのあなた達」

「はい、試召戦争しようと思って申し込みに来ました。受けてくれま  
すよね、高城先輩」

「えっボク？」急に話を振られた高城は驚いたようにこつちを見た。

「あんた今までの大騒ぎ見てなかったの」葵が呆れたようにいった。

「いやあ、ボクと関係ない話だと思っていたから」

「ふむ、大物だ」陽向が感心したように言った。

「こいつは自分のこと以外には感心ないだけよ」葵が訂正した。

「まあ、そういうわけで試召戦争申し込みます。開始時間は明日の1  
0時でお願いします」

「うーん、面倒くさいなあ」

「いや、先輩。学園の規則では試召戦争を申し込まれたら拒否できな  
いんですよね」由香が言った。

「そうなんだけどさ。面倒くさいものは面倒くさい」高城が駄々をこ  
ねた。

「小暮先輩、この人なんとかありませんか？」由香が業を煮やして言っ  
た。

「こうなると子供だからね、こいつは」葵は諦めた声で言った。

「わかりました。高城先輩。あたしと賭けをしましょう」

「賭け？」高城が興味を引かれたように陽向の方を見た。

「はい、3年が勝ったら高城先輩の言うことを1つだけなんでも聞き

ます。1年が勝ったらあたしの言うことを何でも聞いて下さい」

「うーん、特にやつてもらいたいことなんてないんだけどなあ」

「ここにいる由香リンにメイド姿でご奉仕させます」

「……(ガタン)」

「それも丸1日……」

「……(ピクツ)」

「隅から隅までずいっと」

「……ウ……はど……な？」

「はっ？」

「ウサ耳はどうか？」

「シツポもつけます」

「しようがない可愛い後輩の申し出だ。試召戦争を受けよう」高城は陽向の手をガツシリと握った。

「あなたは一体何を約束してんのよ」と由香が陽向をはり倒した。

「あなたは一体何を考えているのよ」と葵が高城を蹴り飛ばした。

「……たつ高城先輩。あたしここに転校してきてから校内暴力ばかり受けているんですけど」

「……ふっ甘いな土屋君。ボクは小暮君と出会って以来ずっと虐げられているよ」

二人の代表は床に倒れながら固く手を握りあい、何かを共有したようであった。

## 第8話

「あのね、由香リン。そろそろ機嫌直して降ろしてくれないかなあ」陽向は愁傷な声でそう言った。由香に首根っこを掴まれて猫のようにして廊下を運ばれていたのだ。

「いいえ、却下だわ土屋さん。あなたは放っておくと明後日の方に飛んで行くから。これからは私が責任を持って行動を厳重に管理するわ」

「でもこの格好は恥ずかしいよ。友達としてどうかなあと思うな」

「友達ですって？」由香は陽向を置くところとほほ笑み一発ゲンコを喰らわせた。

「友達、なんて素敵な言葉かしら。ところでその友達を賭けの餌に使ったのは、どこのどなただったかしら」

「仕方ないんだよ。由香リンじゃなきゃいけない理由があったんだから」

「どういう理由かお聞かせいただきたいものだわ」

「Aクラスで一番メイド服が似合・・・イタっ、なんでぶつのさ」

「あなたが私の神経を逆なでしてばかりだからでしょうが」

「話は最後まで聞いてよ。理由はそれだけじゃないんだから」

「ちゃんとした理由なんでしょうね」

「ネコ耳とシッポも似合・・・イタっ、せめてグーでぶつのは止めて」

「そんなくだらない理由のために無理やり私を引っ張って行ったの？

大体賭けなんてする必要がないでしょう」

「あるんだよそれが」

「試召戦争が終わったら3年には用がないでしょう。どこに賭けをする必要性があるのよ」

「3年じゃないよ。2年に勝つために必要だったの」

「2年どころか3年にすら勝てるか分からないっていうのに、何を言ってるのあなたは」

「3年には絶対勝てるよ」陽向は自信に満ち溢れた顔で言った。

「しょうもない根拠だったら今度は「ウメボシ」喰らわすわよ。あなた

のお蔭で勝負に負けたら私はネコ耳メイド姿で隅から隅までずっ  
いっつご奉仕することになってるんですからね」

「あのね。みんなが油断するといけないと思っただから言わなかったけ  
ど、3年生はこの大会に乗り気じゃないの。そりや受験も迫っている  
のに余計なことでも時間使いたくないでしょ」

「それはそうかも知れないけど一応学校の公式行事だから」

「うん、だからみんなシブシブ参加するかも知れないけど、本気なのは  
総代がいるAクラスとこれ以上設備が悪くなるのを避けたいFクラ  
スかお祭り好きの生徒くらいだよ。後は適当に参加してさっさと負  
けて教室で勉強でもしようと思ってるよ」

「負けるの?」

「そう。ヘタに勝っちゃうと試召戦争にずっと参加しなきゃならない  
からね。適当に手を抜いて負けるはず」

「自信があるんでしょね」

「できるだけ頑張るよ」

「必死に頑張るなさい」由香は拳を陽向のこめかみにグリグリと押し  
付けながら言った。

「アイタタタタ、わかった。死ぬ気で頑張る」

「(仮)友人として忠告してあげるわ、土屋さん」由香は陽向を解放す  
ると微笑みながら言った。

「ここまで来てまだまだ(仮)なんだね。で、忠告って何?」

「もし負けたら、あなたの制裁メニューに「蹴り」を追加する予定なの」

「何十人を犬死させても必ず勝つよ」陽向は真剣な顔で答えた。

「ところで気になっていたんだけど、賭けの「隅から隅まで」って何の  
隅なの」

「さあ?あたしも勢いで言ったただだから。でも高城先輩にはちゃん  
と通じてみたいだから問題はないんじゃない?」フギヤ」由香の見事な  
回し蹴りが陽向に決まった。

「まったくあなたには呆れてものも言えないわ」由香は廊下を歩きな  
がら陽向に文句を言っていた。

「本当に由香リンは次から次へとよくそんなに怒るタネがあるねえ」

陽向がのほほんと答えた。

「一体誰のせいだと思っっているの。あなたが節分並みに怒りのタネを豪快に撒いてくれるから私が怒らなきゃならなくなるのよ」

「まあ、それはそれとして……」

「一生のお願いだから、あなたの脳に「人の話を聞く」という機能を装備してちょうだい。さもないとわたしは卒業までに脳の血管を切っちゃいそうだよ」

「気を付けてね。友達として心配だよ」

「どうもありがとう。心配してくれるならあなたが転校するか他のクラスに移ってくれるのが一番の薬だと思うの」

「えー、あたし由香リンとずっと一緒にいたいよ。できれば大学まで」  
「進路が決まったら真っ先にわたしに教えてね。わたし意地でも違う大学に行くから」

「まあ、冗談はさておき……」

「念のために言っておくけどわたしは純度100%本気だったわよ」

「由香リンにだけはこの試召戦争の戦略的目的を言っておくね」

「戦略……何ですって?」

「戦略的目標。簡単に言えばこの戦争の本質だよ」

「勝つことでしょうか?」

「うん、それはそうなんだけど、そのためにどうするかってこと」

「あなたが作戦を立てて守備チームやら攻撃チームやら作ったんじゃない」

「うん、あれはみんなを試召戦争に参加させるためなの。あたしたち1年が勝つための方法は結局一つしかないの」

「どういうこと?」

「つまり、どうやってあたしを短時間に無傷で敵の総代の前に立たせるかってこと」

「あなた一人で乗り込むって意味?」

「うーん、何人で乗り込んでもいいんだけど、2年にしろ3年にしろ敵の総代を倒せるのはあたししかないと思うんだ」

「あなた一人で戦っているつもり」



「そうじゃないよ、由香リン。敵の総代が本陣に立て籠もっている以上、勝負をつけるにはこつちから出向くしかないってこと。長期戦になると向こうの点数が上の分こつちの守備が破られるからね」

「そうかもしれないわね」

「だからこつちから出向くしかないんだけど、向こうだって総代の周囲には護衛を置くでしょう。こつちがそれに勝とうと思ったらそれ以上の人数が敵の本陣に突入するしかないけど、それは絶対ムリ。だからあたしが敵の虚をついて短時間で本陣に乗り込み、敵の総代と1対1の勝負に持ち込むの」

「護衛がいるなら1対複数になるかも知れないじゃない」

「その可能性は大きいけど、そうなって護衛の攻撃を受けることになっても無視して敵の総代だけを攻撃する。恐らく1対5くらいまでだったら、あたしが負ける前に敵の総代を倒せると思うんだ。ただし、本陣に突入するまでは敵の攻撃を受けずに無傷でいる事が絶対条件」

「なるほど」

「だから、悪いんだけどみんなには、あたしが本陣に突入するための道を作ってもらおう。守備チームも攻撃チームもね」

「わかったわ。でもなぜみんなに言わなかったの？」

「だってみんな一生懸命に試召戦争を戦うつもりなんだよ。それが実は単なるあたしのための道づくりでしたなんて言ったら面白くないよ」

「じゃ、なんで私には話してくれたの？」

「あたしもいろいろ考えて、結局勝つためにはこの方法しかないと思っただよ。でも、みんなを利用してみたいで心苦しくてさ。一人で抱え込んでるのがツラくて誰かに打ち明けたかったの」「それがわたしなわけ？」

「そう、由香リンは（仮）友人かも知れないけど、あたしは友達と思っているから……」

「……」

「遅くなっちゃった、急ぐ」陽向は由香の手を取って走り出した。

## 第9話

翌日、朝9時。陽向はFクラスの教壇の上に胡坐をかいていた。「あなたは人のクラスでもお構いなしね」由香がもはや義務のようにツッコんだ。

「いやあ、こっちの方が気分がでるもんで」

「それにしてもFクラスってのは汚い教室ね。机もないわ」

「そう？あたしはこっちの方が落ち着くなあ」

「次の振り分け試験を全部白紙で出したら自動的にこのクラスに入れるわよ」

「随分大きな内緒話で人の教室けなしてくれるじゃねえか」竜崎が憮然として言った。

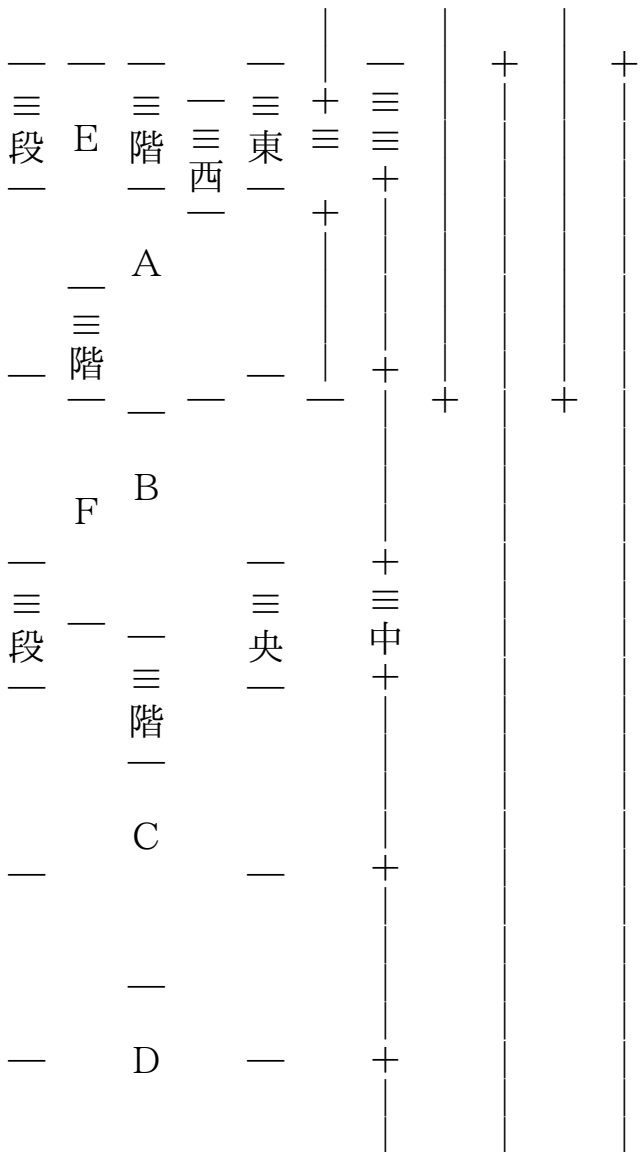
「あ、マコちゃん。ちょうどよかった。作戦ちよつと変えたから聞いてくれる」

「マコちゃんじゃねえと何度言えば……」

「何十回言っても理解できないわよ、この人は」由香がため息をつきながら言った。

「あのね、この図を見て」と言っで見取り図を取り出した。

— 南校舎



「中央階段と西階段をD、E、Fクラスで埋めるってことだったけど、人数の割り振りはどうなっているの」

「3クラス90人を45人ずつに分けて中央階段と西階段に埋める」

「うん、じゃそこから10人ずつ割いて東階段も埋めて。ただし人数が少ないと見破られないように先頭からギッシリ埋めてね」

「それはいいが……」

「それから列の配置だけどFクラスを先頭にして、Eクラス、Dクラスにして欲しいの」

「意味があるのか?」

「うん、Fクラスは簡単にやられるかもしれないけど、次のEクラス。それがダメならDクラスで仕留められる。階段の幅が狭いからそんなに一度には戦えないでしょ。そうやって少しでも敵を減らして欲しいの」

「だが、Dクラスまでやられたらお前のとこまで一直線だぞ」

「その前に攻撃隊が敵の守備に穴を開けてくれるよ。とにかく守備隊は逃げ回ってもいいから時間を稼いで欲しいの」

「わかった。他に何かあるか?」

「あと守備隊の前線は2年の階までにして。それ以上、上にはいかなること」

「何でだ」

「あたしが突入して3年の廊下を突っ切る時に、階段から敵の攻撃隊が溢れていたら邪魔されるから」

「なるほど」

「それとマコちゃんは、守備には参加しないで、東階段、中央階段、西階段の3か所の指揮を執って。まあ、東階段からはほとんどこないと思うけど、一応念のためにね」

「よし、とりあえずお前が突入するまでの時間を稼げばいいんだな」

「そう。じゃ、マコちゃんのチームの名前は青龍ね」

「それは別にどうでもいい」

9時40分になった。陽向は携帯を取り出して、どこかへ電話した。

「こちらアルファ1、アルファ1。ベータ2どうぞ。オーバー」

「こちらベータ2、コンディショングリーンです。オーバー」

「様子はどうか？オーバー」

「敵の様子がよく見えます。そろそろチーム毎に集まっているようです。オーバー」

「それ普通に喋った方が早いんじゃないの？」

「由香リン。こういうのは気分が大事なんだよ」陽向が諭すように言った。

「なぜかしら。あなたにそういう言われ方をすると腹が立つわ」

「今、メンバーの確認が終わりました。お館様が言った通りに進路別にチーム分けしているみたいです。オーバー」

「ベータ2、どういう配置なの、オーバー」

「西階段側の教室に理系メンバーが入りました。C教室には文系メンバー。AクラスのメンバーはD教室です。オーバー」

「国立系は？オーバー」

「A教室です。オーバー」

「ベータ2、報告ご苦労。引き続き監視を頼む。オーバー」

「さてみんな。敵はほぼこちらの予想どおりの動きを見せたわ。西側通路からは私立理系チーム、中央通路からは私立文系、東階段からは国立系が攻撃してくるわ」

「東階段からはこないはずじゃあなかったのか」

「まだ、あたしの位置を向こうに教えてないからね。一応、どこからでも攻撃できるようにしているんでしょう。あたしの位置が正反対で他のところが苦戦してるとなったら、そっちに移動するはずよ。それに敵の総代がDクラスに入ることは分かったわ。そして護衛隊としてAクラスが総代の回りを固めるはず」

「じゃ、どうする」

「作戦通りよ。東階段には玄武チーム、中央階段には白虎チーム、西階

段には朱雀チームはこれから2年の階に行つて廊下で雑談しているフリをして。どうせ3年が1年の顔なんて覚えてなんていないからわかりやしないわ。守備隊の戦闘が始まったら、そのまま2年の階から3年の階に駆け上つて。敵の守備隊はきつと階段のところで待機しているはずだから。突撃隊はすぐに相手の先生を拉致。救援隊はそれぞれの先生をフィールドに連れて行く。そうしたらすぐに戦闘開始よ」

陽向はもう一度電話をかけた。

「こちらアルファ1、ブラボー2応答せよ。オーバー」

「こちらブラボー2、どうした？オーバー」

「敵の大体の人数わかる？オーバー」

「ああ、なんだか妙にスカスカなんだよな。教室にも結構な人数が残っているようだし。オーバー」

「ありがとう。通信終了」

「思ったとおりよ。敵の大半はこの試召戦争やる気ないわ。戦力の差が勝敗の決定的な差ではないことを見せてやるのよ」

「いや、それセリフがぜんぜん違うわ」律儀にツツコむ由香であった。

その時、陽向の携帯の呼び出し音があった。

「もしもし……」

「高城先輩ですか」

「そうだ。試召戦争開始の時間だ。ボクは3年Dクラスにいる」

「あたしは1年Fクラスです」

「うむ、では健闘を祈る……」  
「これはどうでもいいことなんだが賭けのことを……グワツ」電話の向こうでスゴイ音がした。

「……?」

「あ、もしもし土屋さん。小暮ですけど、じゃこれから開始よ」

「はっはい、あのくなんかスゴイ音がしましたけど高城先輩は？」

「一足先にいい夢見てるわ、じゃお互い頑張りましょうね」そういって電話が切れた。

陽向は一同を見渡して叫んだ。

「さあ、みんな。祭りの始まりだよ」

## 第10話

「青龍A、B、Cチーム。それぞれの階段を埋めて。隙間を作らないように。それと50点以下になったら後ろの人と位置を代わって、体育館で補修テストを受けてきて。150くらいまで回復させればいいから」

「土屋、お前バカか」竜崎が呆れたように言った。

「どこがバカなのよ。敵を消耗させつつ味方も殺さないという諸葛孔明も裸足で逃げ出す的確な名作戦じゃない」

「俺たちやFクラスだぞ。持ち点からして50点程度しかないのに、50点以下っていったら1撃くらっただけで体育館行きだ」

「方針変更。みんな死ぬまで戦いなさい。靖国で会えるわ」陽向が大声で叫んだ。

「あなた、本物の外道ね。諸葛孔明はどこいったの」由香が呆れたようにいった。由香は陽向の参謀役（つまりツツコミ）ということで傍にいるようにと言われていたのである。

「そうは言うけどこの戦力でどうしろっていうのさ、由香リン。諸葛孔明だって白旗量産してるよ」

「まあ、とりあえず負けるにしても逃げ回れと言っておく。それに突撃隊がこっちの有利な舞台を作ってくれるはずだしな」

「なんかその有利っていうのが200対50が200対60になる程度のようない感じがしてるんだけど」

「大丈夫だよ、由香リン」陽向がニッコリと笑っていった。

「結構、いい勝負になるのかしら？」

「ううん、死んで倒れても道を塞いでくれるから3年生はこっちにこないよ」

「鬼畜という言葉は、あなたのために生まれた言葉に違いないわ」

その時、陽向の形態が鳴った。

「こちらアルファ1、敵が動いた。西階段は理系、中央階段は文系、東階段は国立。それぞれ10人程度、オーバー」

「ベータ2先生は見える？」

「ええつと、ちよつと待つて。一覽と照らし合わせる。わかった。西階段は物理の古賀先生、中央階段は、古文の与野先生、東階段は国語の山内先生だ。オーバー」

「ありがとう。じゃ連絡員のみんなは、青龍チームに連絡して」

連絡員として確保されていた3人の女生徒がそれぞれの階段に待機している連絡員に相手の先生と教科を連絡した。

西階段にはFクラスの生徒を先頭に30人のD、E、Fクラスの混成群が階段にびっしりとひしめいていた。おそらく中央階段、東階段も同じ状態だろう。

「よし、突撃隊。相手の先頭が見えたと同時に突っ込んで先生を担ぎ挙げてそのまま廊下を突っ走れ。救援隊、こっちの先生の準備はいいか」

「いつでもオツケーだ」

「あのね君たち、試召戦争ってのは一種の試験なんだから、無理やり教科を変えるというのは感心しないな」拉致されている教師が言った。

「そういいですけど、3年と僕たちじゃ戦力差があるんですから、作戦で補うくらいしないと」

「静かに。きたぞ。いけ、突撃隊」

「うおおおおおおお」体格のいいラグビー部の生徒がいきなり3年の中に突っ込み、あつけにとられている教師を肩に担ぎ上げるとそのまま走り去っていった。何が起きたのかわからない3年はポカンとしていた。

「よし、今だ救援隊。先生を連れて先頭にでろ」

「じゃ、先生お願いします」

「やれやれ」と教師はゴンズイ玉のように群れをなしている1年の間を通して先頭に出て宣言した。

「古文担当堀内です。試召戦争の立会をします」

「よし、先頭3人出ろ」

「1年高橋幸夫 召喚《サモン》ズズズと足軽が姿を現した。

「1年横山準 召喚《サモン》なぜかグローブをつけた野球の

「1年佐藤邦彦 召喚《サモン》下級忍者が出てきた。」



一方、3年は混乱に陥っていた。

「おい、物理の古賀はどうした？」

「なんか熊みたいのにさらわれていったぞ」

「古文なんてほとんど忘れたよ」

「どうでもいい。誰か3人でろ。向うが対決《デュエル》してんだ。誰もでない全員補習室送りだ」

「3年安藤光一 召喚《サモン》」

「3年鈴木聡 召喚《サモン》」

「3年谷本一郎 召喚《サモン》」

形式的には対決になった。後ろから竜崎の声がした。

「いいか、無理に戦うな。逃げ回って時間を稼げ。死にそうになったらフィールド外にでて次の列の奴と交代しろ」

3年 安藤光一 92 vs 1年 高橋幸夫 90

3年鈴木聡 98 vs 1年 横山準 89

3年 谷本一郎 88 vs 1年 佐藤邦彦 91

「おい、なんだか俺たちと点数変わらないぞ」

「本当に3年生か？」

「いくら理系でも俺たちと同じレベルって酷くないか？」

だれかが恐る恐る尋ねた。

「あのく、先輩たち何クラスですか？」

「ああ、俺たちか3年Fクラスだけど」

途端に1年から歓声が上がった。

「何だよFクラスじゃねえか」

「ふざけやがって、Fクラスで文系も理系もあるか」

「勝ったも同然だな」

自分たちもFクラスであることを全く忘れていた青龍チームであった。

# 第11話

「こちらアルファ1、ベータ2どうぞ。オーバー」陽向は偵察隊に電話をかけた。

「ねえ、お願いだから普通に喋って頂だい」由香の懇願はもちろん無視された。

「3年の階はどうなっているかな、オーバー」

「Aクラスの前に国立系、Cクラスの前に私文、Eクラスの前に私理。

あとAクラスメンバーがDクラスにつめてるな、オーバー」

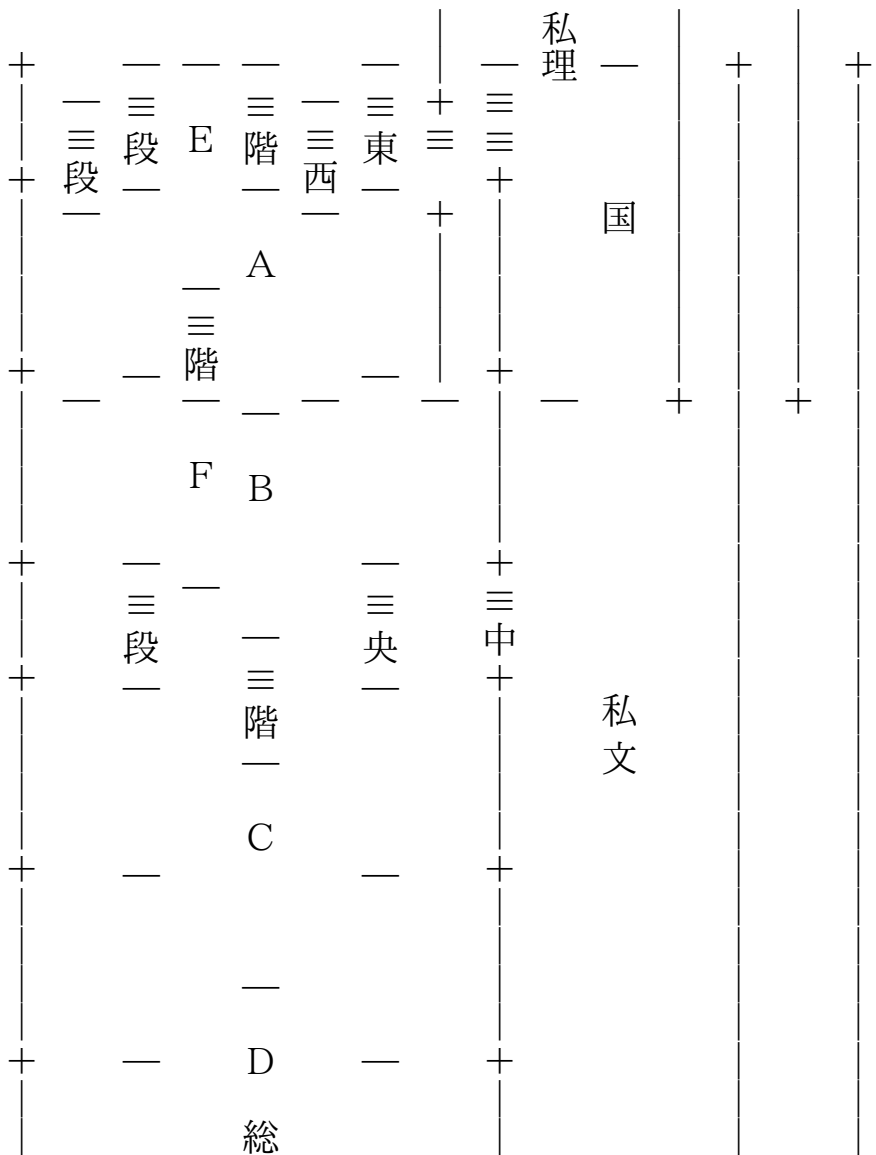
「廊下に出ているのはどれくらい？オーバー」

「各グループ10人程度だ。Aクラスの人数はわからない。オーバー」

「了解。引き続き偵察を続けて、オーバー」

「よし、今の状況はこんな感じ」陽向が図に字を書き加えた。

南校舎



「現在の状況はこんな感じだね」そこへ竜崎が飛び込んできた。

「おい、土屋。東階段の国立部隊が2年の廊下を通って中央階段と西階段に移動したらしいぞ」

「計算通りだね。玄武チームと朱雀チームには、逃げ回りながらとにかく時間を稼ぐように伝えて」

「計算どおりなの……?」不審げに由香が言った。

「そう。全く受験に使わない科目なんて苦手だろうからね。それに見た目に階段を埋め尽くしているように見せかけているから突破するのは無理だと思ったんだろうね。それに西階段や中央階段でそれぞれのチームが受験科目と逆の科目で勝負させられて苦戦していると伝令が飛んだから、全科目勉強している国立系に応援要請が行ったんだよ。これで3階までストレートに道が開けたよ」

「でも道が開いたのは3階までだろう。総代がいるDクラスまでどうするんだよ」竜崎が言った。

「今、白虎チームが丸々手すきだよ。それとマコちゃん、玄武と朱雀から後ろ側にいる5人ほどを白虎チームに合流させて」

「少しは説明しろ」

「簡単だよ。次の居場所報告の電話が終わると同時にあたしと由香リンが3年Dクラスまで突撃をかけるの。つていつでも途中で守備隊がいるから白虎チームでそれを足止めしてもらいたい1年と3年もみ合っている間を抜けてDクラスまで突撃だいいー」

「だい!じゃないわよ。何でわたしまで」

「由香リン、夫婦は一心同体だよ」

「なんで勝手にモードアップしてるのよ。それにDクラスには3年Aクラスの生徒が沢山いるんでしょ」

「大丈夫。何人かかかってきても総代だけを攻撃すれば絶対倒せるよ」

「そうなの?」

「でもまあ、由香リンがどうしてもメイド服でご奉仕したいというのなら、手を抜いて負けてもいい……オゴワ」由香の回し蹴りが陽向の側頭部に炸裂した。

「あつ愛を感じないよ、由香リン・・・」

「そんなもの1マイクログラムも持った覚えはないわよ」

「ウサ耳が嫌なら外してくるようにお願ひしてあげてるか・・・  
ドゥワ」

「どうやったら動きが止まるのかしら、これ」由香が日向をグリグリと足で踏付けた。

「そんなことしたらショートが見えるよ、由香リン」

「あなたがこの学園にいる限り、わたしはスパッツを愛用することにしたの」

「動きやすいもんね」

「ある意味そうね。いつでもあなたに蹴り入れられるから」

「あたし蹴られること前提で由香リンと付き合っていないといけな  
いの？」

「だったら発言と行動を少し改めなさい」由香は更にグリグリと日向を踏付けた。陽向の口からカエルの鳴き声のような声が漏れ出た。

「おい、お前ら遊んでいる場合じゃないだろ」

「あたしは別に好きで踏みつけられているわけじゃないよ。とにかくマコちゃんは、チームの再編成をして、そして半分が三年の廊下の手前にいる国立チームの相手を、残りの半分はその横をすり抜けて奥の私文チームに試合をいどんでね。壁を作ってくれば、あたしはそこを突破するから」

「どうも時々、いえ頻繁にあなたの言うことが理解できないわ」

その時、陽向の携帯が鳴った。

「もしもし、高城先輩ですか」

「おや、まだ生き残っていたのかい土屋君」

「先輩は死にかきましたよね」

「舐めてもらっちゃ困るなあ。小暮君と知り合って以来あれ位は、おはようのキス程度のもんだ・・・オゴウ」  
「またもや電話の向うで  
すごい音がした。」

「一体何言ってるんのよあんたは。・・・もしもし土屋さん。うちの馬、いや総代は3年Dクラスにいるわ」

「念のため伺いますけど、生きていますか？」

「大丈夫、丈夫さだけで生き残ってきた奴だから」

「あたしも同じく1年Fクラスにいます」

「そう、じゃお互い頑張りましょうね」電話が切れた。

## 第12話

「よし、これで10分の猶予ができた。出撃するよ、由香リン」  
「なんであたしまで」

「だからあたしたちは一心同体なんだって言っているじゃない」

「そんなものになった覚えはないと10回以上は言っているわよね」

「ええ、か弱い友達を一人で敵陣に特攻させるんだ」

「あなたが弱いって言うのなら、恐竜絶滅の原因はノイローゼだわ」  
「とにかく時間がないんだよ。みんなが壁作っている間に3年Dクラスまで到達しなきゃならないんだから、行こう」陽向は由香の手をとってFクラスから駆け出した。

廊下を反対側の階段に向かって一心に駆け抜ける。途中の階段で対決《デュエル》の声が聞こえる。守備隊の人数がほとんど減っていないところを見ると作戦は今のところうまく行っているようだ。だが、3年が国立隊を西階段と中央階段に回した以上、もう突撃隊を使った作戦は通用しないだろう。防衛線が破られるのも時間の問題かもしれない。一刻も早く敵の総代を倒さねばならない。

「由香リン遅すぎ」遅れがちになる由香に声をかけた。

「あなたが速すぎるのよ。陸上か何かやってたの」

「そんなのやってないよ。ただ中学の日本記録を持っているだけ」

「そんなのについていけるならあたしだって日本記録出せてるわよ」

東階段についていた。階段の上の方から怒声が聞こえる。白虎チームが戦っているのだろう。

「由香リン、3階まで駆け上るよ」

「ちよつ、ちよつと休ませてちようだい」

「だめだよ。白虎チームが戦っているドサクサにまぎれて3年の防衛線を突破しなきゃ」

そういうと陽向は階段を駆け上っていった。由香もしかたなく跡に続いた。

3階についた。Aクラスの入り口付近で男子生徒30人くらいが一塊になって対決《デュエル》をしていた。

「よし由香リン、行くよ」陽向が叫んだ。

「行くよって、廊下中人が固まっているじゃない」

「うん、だから跳ぶんだよ」陽向はそういうと人ごみに向かって走り出し、軽々と跳躍して人の群れを飛び越した。

「由香リン、早くおいで」陽向の声が人ごみの向こう側から聞こえてきた。

「ばっ、馬鹿言ってるんじゃないわよ。そんなバケモノみたいなマネできるわけないじゃない」

すると陽向が群れの向こう側から再び跳躍して戻ってきた。

「こんな可愛い陽向ちゃんに向かってバケモノ呼ばわりは失礼だよ、由香リン。簡単だよ。ピョーンって跳べばいいの」

「あっ、あんたバカじゃないの？せっかく向こう側に行ったのに、そんなバカなこと言いにはわざわざ戻ってきたわけ？」

「バカって言う方がバカなんだよ」

「そんな小学生の口ゲンカみたいなこと言っていないで状況を考えなさい。わたしはわたしで何とかするから、とにかくさっさと敵の総代のところに行きなさい」由香は陽向の尻を思い切り蹴り飛ばした。陽向の姿は再び人ごみの向こうへと消えていった。

Aクラスの前に着地した陽向は、再びCクラスの前で戦闘の壁にぶつかった。さつきと違って1年がかなり押されている。参戦して戦うべきか躊躇しているところに由香がやってきた。

「あれ、由香リン早かったね。やっぱり跳んできたの？」

「違うわよ。大きな声で「トイレに行きたいから通して下さい」って言ったらみんな道を空けてくれたわ。わたしもうお嫁に行けない」由香は泣きそうな顔をして言った。

「由香リンも手段を選ばないね・・・イタツ」由香にゲンコで殴られた。

「誰のせいだと思ってるのよ、誰の」

「じゃ、ここも突破するよ。ついてきてね」陽向は再び跳躍して群れを跳び越えた。

いよいよAクラスの前にたどり着いた。由香もヨレヨレになりながらも追いついてきた。

「もしかして、またあの手使ったの？」

「言っておくけど、このことを他の人にバラしたら殺すわよ」

「さて、ここに敵の総代がいると思うんだけど、あたしが高城先輩をやるから、由香リンは小暮先輩をお願い」

「あんたが高城先輩を倒せば済む話じゃなかったの」

「そうなんだけど、ここまで苦労したんだから小暮先輩と由香リンの美女対決で目の保養をしてみたいなあと……イタツ。由香リン、暴力がひどすぎるよ」

「あんたがわたしの神経でバイオリン演奏できるくらいに逆なでするからでしょうが。いいから、とつと高城先輩倒して帰るわよ」

「わかった、じゃ行くよ」陽向がドアを開けた。

「失礼しまくす。トドメさしにきました」

「だから、その軽さは何なのよ」

思いがけない乱入に教室にいた全員が固まっていた。

「つつ土屋君、どうやってここに？」高城が言った。

「え？普通に階段使つてですけど……」

「いや、そういうことを言っているんじゃないでしょ」由香が耳打ちした。

「まだ次の位置連絡の時間にはなってないですよね。だから高城先輩と戦いにきました。」

「ふ、甘いな。そういうことを見越してボクの得意分野の先生を配置してあるよ」

「あ、そうですか？じゃ、こころおきなく戦いましょう。分野は何ですか」

「物理だよ。高城好光 召喚《サモン》」高城が叫ぶと槍を持った白銀の騎士が現れた。

「負けませんよ。土屋陽向 召喚《サモン》」全体集会の時に見せ付けられたガンガムがビームバズーカを持って現れた。

二人の召喚獣が対峙した。

3年 高城好光 980 vs 土屋陽向 10080

「「「おおおおお」」という叫び声が教室中に響き渡った。陽向の



召喚獣の装備とあまりの点数に対する驚愕の声であった。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ、土屋君」

「何ですか先輩。手加減はしない主義ですよ」

「いや、賭けの件だがボクが勝ったらネコ耳メイドの奉仕ということだったが、この点数差はあんまりだ」

「だから？」

「ボクが負けたらスクール水着で奉仕というのはどうだろうか？」

「ああ言ってるけど、どうする？由香リン」

「瞬殺しなさい!!できるだけむごたらしくね」

「だいぶ染まつてきたね、由香リン」

「ちゅどくくん」

間髪入れずに陽向のビームバズーカが火を噴いた。

ほとんど間を置かずに小暮葵が高城の後頭部に蹴りを叩き込んだ。

「おくい、高城の召喚獣が跡形もないぞ」

「というか高城もノックアウトされてるぞ」

「スゲえ威力だな、ビームバズーカ」

「いや、高城先輩本人を倒したのはあたしじゃないんだけど……。とにかく先輩方これであたしたちの勝ちってことでいいですね。賭けもあてしたちの勝ちですから」

妙に体格のいい先生が教室に現れた。

「ほう、高城が負けたのは初めてじゃないか？補習室でもっと勉強を好きになってもらおうか」というと泣き叫ぶ高城先輩を引きずって入った。

「勝ったのかしら？」

「勝ったんだよ。さあ、みんなのところに戻ろう」陽向がニカッと笑って言った。

## 第13話

勝負が決した後、教室で待機している通信員に連絡を入れて勝ったことを伝えた。教室に戻りながらまだ対決《デュエル》を続けている同級生たちに戦争が終わったことを伝えた。教室に戻るとお祭り騒ぎになっていた。

「すっげー、本当に3年に勝っちゃったよ」

「いやー、お館様の読み通りだったな」

「この調子で2年も楽に勝てるんじゃないか」

そこへ陽向と由香が戻ってきた。

「やあ、みんなお疲れさま。みんなのお陰で勝てたよ」

「お館様、勝利の演説を」

「ハイル、ハイル、ハイル、ハイル……」

いつしか教室中に「ハイル」の掛け声が響いていた。

「よし、夕べあたしが徹夜で考えた勝利の演説を一発」

「「「おおお〜」」」

「コホンっ」と軽く咳払いをして演説を始めた。

「諸君 あたしは戦争が好きよ。諸君 あたしは戦争が好きよ。諸君

あたしは戦争が大好きよ。

数学戦が好きよ 英語戦が好きよ 国語戦が好きよ 古文戦が好

きよ 物理戦が好きよ 化学戦が好きよ 生物戦が好きよ 地理戦

が好きよ 日本史戦が好きよ 世界史戦が好きよ 保体戦が好きよ

音楽戦が好きよ。

教室で 廊下で 体育館で プールで 屋上で 食堂で 進路指

導室で 音楽室で 美術室で 職員室で。

この学園で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きよ。

戦列をならべたFクラスの一斉突撃が怒声と共に敵を吹き飛ばすのが好きよ。

空中高く放り上げられた敵の召喚獣が効力攻撃でばらばらになった時など心が踊るわ。

攻撃隊の操る召喚獣の日本刀が敵の召喚獣を撃破するのが好きよ。

悲鳴を上げて壊滅した隊列から飛び出してきた敵召喚獣をなぎなたでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだったわ。

銃剣先をそろえた1年生の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きよ。恐慌状態の女生徒が既に息絶えた敵召喚獣を何度も何度も刺突している様など感動すら覚えたわ。

敗北主義の逃亡者達が進路指導室に連行されていく様などはもうたまらない。

泣き叫ぶ点数が少ない敵召喚獣敵が私の振り下ろした掌とともに歓声を上げて突き出される槍にばたばたと薙ぎ倒されるのも最高ね。

哀れな敵召喚獣が雑多な武器で健気にも立ち上がってきたのをビームバズーカが壁ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚えたわ。

2年生のAクラスに滅茶苦茶にされるのが好きよ。

必死に守るはずだった防衛ラインが蹂躪されFクラスの仲間が殺されていく様はととても悲しいものね。

2年生の高得点に押し潰されて殲滅されるのが好きよ。

2年生の攻撃隊に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだわ。

諸君 あたしは戦争を 地獄の様な戦争を望んでいるわ。

諸君 あたしに付き従う1年生戦友諸君。あなた達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むの？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むの？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な闘争を望むの？」

『戦争《クリーク》！ 戦争《クリーク》！ 戦争《クリーク》！』クラス中から戦争《クリーク》の声がこだまのように響いている。

「よろしい ならば戦争《クリーク》よ。

あたし達は渾身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳よ。だけどこの1階の教室で数ヶ月もの間、堪え続けてきたあたし達にただの戦争ではもはや足りないわ!!

大戦争を!! 一心不乱の大戦争を!!

あたし達はわずかに6クラス 200人に満たぬ1年生に過ぎないわ。

だがあなた達は一騎当千の古強者だとあたしは信仰している。ならばあたし達はあなた達とあたしで総力1万と1人の軍集団となる。

あたし達を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こしましょう。

髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開かせ思い出させましょう。

2年生に恐怖の味を思い出させてやるわ。2年生に我々の軍靴の音を思い出させてやるの。

天と地のはざまには2年生の哲学では思いもよらない事があることを思い出させてやるわ。

180人の1年生の戦闘団で 世界を燃やし尽くしてやるわ。

1年総代全軍指揮官より全1年生へ 目標2年生総代!!

第二次ゼーレヴェー作戦 状況を開始よ。

さあ、諸君。地獄を作るわよ」

ここまで一気にいうと陽向は「どうだ」とばかりに由香の方を見た。

由香はニツコリと微笑むと無言でこぶしを陽向の頭に叩き込んだ。

「あなたはたかが試召戦争をどれだけワールドワイドにするつもりなのよ。これじゃ2年生どころかイギリスとバチカンまで敵に回すじゃないのよ」

「え、夕べ徹夜してDVDから演説を書き写したのに」

「もつとマシなことに時間を使いなさい」もう一発ゲンコがとんだ。

## 第14話

2日後、2年生戦に向けての代表会議が再び開かれた。陽向はいつものように教壇の上であぐらをかいて各クラス代表を見渡した。3年生戦に勝利した喜びから一同は浮き立っているように見えた

「さあ、みんな。3年生戦の勝利はもう忘れよう。「勝って兜の緒を締めよ」と言うしね。ちなみに「緒」って「尾(しっぽ)」のことじゃないからね」

「なんで、そう余計な一言を付け加えるのかしら？そんなバカな勘違いするのは、あなたとFクラスの生徒くらいです」由香が冷静にツツコんだ。

「俺たちとこのアホとを一緒にするな」竜崎が抗議の声をあげた。

「ちなみに関西の方じゃアホよりもバカの方が失礼なんだよ」陽向が言った。

「そんなトリビアいりません。どっちでも好きな方を名札にして付けてて下さい」もはや慣れたとばかりに由香は動じなかった。

「まあ、ツカミはこれぐらいにして会議を始めようか」

「何で会議するのに、いちいちツカミが必要なよ。素直に始めればいいじゃない」

「そう言えばお館様、2年生の進路調査はしてないけどいいのかな」Bクラスの代表が言った。

「ああ、それはいいの。3年生と違って2年生は進路分けしていないから、選択と反対の教科を当てる作戦はとれないわ」

「じゃ、どうするんだよ」Fクラス代表の竜崎が言った。

「2年戦は守備も攻撃も力押しになると思うの。ただし、基本点が低い分だけこつちが不利になるから短期決戦で決める必要があるわ」

「つまり、どうするの？」Cクラス代表が言った。

「これを見て」陽向は見取り図を取り出した。

+

+

—三三—

+

—三三—

+

+



「なんでそう言い切れるのよ」由香が不思議そうに言った。

「由香リン、あたしの話を聞いてなかったの？あたし達が短期決戦を望むのなら、長期決戦に持ち込むのが常道でしょ。それなら防御のし易い、一方向からしか敵のこないFクラスに本陣を置くだろうと考えるのが普通よ」

「じゃあ、わたし達もFクラスに本陣を置くのね」

「それじゃあ敵の思うツボだよ。長期戦に持ち込まれてこっちがギリ貧になるだけ。だからあたし達は本陣をDクラスにおくわ」

「それじゃあ、あたし達だけ攻撃に晒されるじゃない」

「リスクはある程度覚悟の上だよ、由香リン。この場合、敵の攻撃隊をこの階までおびき出す必要があるの。そうしないと2年の階に敵がうじゃうじゃいることになるからね。そのための力押しだよ」

「ちよつと待って。そうするとこっちの攻撃隊とむこうの攻撃隊が階段で鉢合わせになって、そこで戦闘になるんじゃないかしら？」

「さすが由香リン、いいところに気がついたね。それを避けるためにうちの攻撃隊は別の場所から出動させるの」

「別の場所？」

「そう、3年生との戦争の時に由香リンが身体を張って勝ち取ってくれた賭けだよ」

「あれはあなたが勝手に賭けたんでしようが。それが何の関係があるのよ」

「賭けの権利を使って2年生との試召戦争が始まる前に3年DクラスとEクラスは空けてもらう。どつか講堂でも授業してもらえばいいかな。その空いたクラスにうちの攻撃隊を待機させて、2年生の攻撃隊がこの階に降りてきたのを確認してから2年生の階に攻撃をかけてもらうの。そして攻撃チームの半分は敵の攻撃チームを後ろから挟撃するの」

「なるほど、それなら攻撃はできるわね。でも2年生がFクラスに本陣を置くなら西階段前からFクラス入口あたりまで戦場になって、それこそ蟻の這い出る隙間もないくらいに人であふれるはずよ。一体、どうやって総代を倒すつもり？」

「秘密兵器を使うの」

「またそれ？いくらあなたでもあの距離は飛び越せないでしょう。ヘタしたらFクラスの廊下の突き当たりまで人で埋まっているはずよ」

「3年生戦の時は、突撃隊、救援隊、偵察隊が秘密兵器だったけど、今度はその手は使えない」

「だから今度は何かかって聞いているのよ」

「今度はAクラスの精鋭10人の特攻隊で攻撃するの」陽向はそう言ってニカッと笑った。



## 第15話

Aクラスに主だったメンバーが集められて作戦会議が開かれていた。

「ねえ、雄二。たぶんもうすぐ1年生が試召戦争を仕掛けてくると思うんだけど、どうするのさ。3年生も負けたんだよ」明久が行った。

「ああ、ムツツリーニの妹……陽向とかいったか、あれが3年の高城を瞬殺したらしい」

「そんなのに勝てるの坂本」美波も不安そうに聞く。

「まあ、1対1なら正直言つてこの学校に勝てる奴はいないだろうな。何しろ敵はガンガムだ」吐き捨てるように雄二が言った。どうやら全校生徒の前で虫のように踏みつぶされたのを根に持っているらしい。なんて心の狭い奴なんだろう。

「まあ要するに今回の戦争の本質は陽向対2年生ということだ。あいつが翔子の前に立つまでにどれだけ点数を削れるかが勝負なんだが……」

「どうしたのじゃ雄二。何か気になることでもあるのかのう」

「3年生との戦いを見てみると、あいつは1年生全員を使って3年を釘づけにしておいてから、がら空きになった廊下を一気に3年のところまで駆け抜けたそうさ。点数を削るもヘツタくれもない」

「……それは短期決戦でしか勝ち目がないということ」

「おう、よく分かっているじゃねえか翔子。基本点はどうしても上級生が上になる。だから対決《デュエル》になっても逃げ回り、点数が危なくなると教師を強引に取り換えて、また新しい対決《デュエル》で勝負して時間を稼いでいる。逆に言えばそれだけ長期戦はしたくないということだ」

「で、結局どうすんのさ?」

「これを見ろ」雄二が見取り図を取り出した。

+

+



いからな。恐らくDクラスに本陣を置くだろう、そして隙を見て陽向が突っ込んでくるはずだ。守備隊の1年は逃げ回るだろうが、召喚獣の扱いはこっちが上だ。少しずつ削っていけ」

「……明日、さっそく両親に挨拶に行こう」

「こっちの守備隊は西階段前からFクラスの廊下一杯に配置する。陽向にすり抜けられないようにな」

「……式場が3年分押さえてある。いつでも式は挙げられる」

「だあああ。せつかく無視してやってるんだから、いい加減にその話題から離れろ」

「……でも守ってくれるって言った」

「試召戦争の話だ、バカ者」

「ちよつと待っててくれないか」それまで黙って聞いていた久保君が発言した。

「ん？何だ久保。なんか作戦に不備でもあったか？」雄二が不思議そうに聞いた。

「いや、霧島さんを守るプランはそれで完璧だと思う。だが、僕たち2年生にはもう一つ守らなければならないものがあるんじゃないか？」

「試召戦争で守らなければならないもの……悪いが思いつかんだが」

「この学園で唯一の「観察処分者」である吉井君だよ」久保君のメガネがキラリと光った。

「……いや、別にそんなもの守る必要は」

「なにをいうんだ。学園唯一の存在が2年生であるというのにそれが倒されたら、試合に勝っても勝負に負けたのと同じことだよ」久保君が力説する。僕の身をそんなに心配してくれるなんて久保君はやっぱりいい人だなあ。どこぞの代表に足の爪の垢をKg単位で飲ませてもらいたいくらいだ。

その時、いきなりドアがガラッと開いて一人の女生徒が飛び込んできた。

「私も賛成です。アキちゃー吉井君は2年の宝です。私と久保さんで、Dクラスでアキちゃー吉井君を守ります」玉野さんだった。いろ

いろと神出鬼没だがこんなところまで、何か引つかかるものはあるが、僕の身を案じていることには変わらない。ありがたく受け止めよう。

「なによ、それじゃウチもアキの護衛に回るわ」うん、実戦だったら美波は学園トップクラスだけど試召戦争では力になるんだろうか？ いざとなったら盾として使えるかも知れない。

「それなら私も明久君を護ります」姫路さんまでありがたい申し出をしてくれ。

「ちよつと待てお前ら。肝心の総代の護衛が一人も決まってるのに、何でどうでもいい明久の護衛がいきなり4人も決まっているんだ」

「大丈夫だよ、坂本君。代表の護りは、ボク以下のAクラスのみんな10人でやるから」

「そうか工藤。それじゃ人選は任せる」

「……雄二、ちよつと話がある」ムツツリー二が教室の隅に雄二を連れて行った。

「……は陽向は……」

「それ本当か……」

「……ああ、恐らく今も変わってないはずだ……」

「よし、これで勝ちのめどが見ついた。お前ら安心していいぞ」雄二がみんなに言った。

何のことかよくわからなかったが、雄二が安心していいと言ったからには、僕たちはこの試召戦争に負けることが確実になったということなんだろう。

## 第16話

「あのね、土屋さん。あなた自分でいったことさえ覚えてないの？Fクラスの入り口前は人であふれているんですよ。特攻隊だか特売品だか知らないけど、そんなの10人も引き連れて2年の総代の所までたどりつける訳ないでしょうが」由香が呆れたように言った。

「えへへへ、実はもう一つ秘密兵器があるんだな、これが」陽向が楽しそうに言った。

「もったいつけてないでいっぺんに説明しなさい、いっぺんに」由香が陽向のこめかみに力の限りに拳をグリグリと押し付けた。

「痛い痛い。由香リン、ギブギブ」

「いいからとつとと説明しなさい。キビキビと全部、詳細に」由香は息を切らしながら席に着いた。

「まったく由香リンはすぐ暴力に訴えるんだから。そんなことじゃ将来お嫁に・・・」

「ガタン」由香が再び席から立ち上がった。

「はい、すぐ説明します。今すぐに」陽向がそれを見て慌てて説明し始めた。

「あたし達のもう一つの秘密兵器は「梯子」です」陽向がどうだとばかりに宣言して皆を見渡した。一同は真意を測りかねてポカンとしていた。

「あたし達の学年に梯子さんなんて人いないわよ」由香がいった。

「やだなあ、由香リン。梯子っていうのは高いところに登るための道具で人の名前じゃないよ」

「知ってるわよ、それくらい。ボケたんだからツツコみなさいよ」由香は顔を真っ赤にして恥ずかしそうにパイと横を向いた。

「ツツコミキヤラがたまにボケるとスベるよね」

「スベるって言うな」由香がどなった。

「で、結局その梯子が何で秘密兵器なんだ」竜崎が不審そうに尋ねた。「戦争が始まったら守備隊と攻撃隊でできるだけ大騒ぎして欲しいの。そうすれば2年生の注意は廊下の方に向けられる。その際に梯

子で特攻隊とあたしで2年のFクラスに突撃するの」

「それならあなた一人でいいんじゃないのかしら」

「たぶん教室には護衛として10人程度はいると思うの。その人たちに一度にかかってこられたら、いくらあたしでも勝ち目がないわ。特攻隊の人たちにはその護衛の人たちを足止めして欲しいの。その際にあたしが敵の総代を倒すわ」

「梯子一つで10人が登るのは時間がかかるだろうが」

「いい質問だね、マコちゃん。この作戦の成否は短時間で敵の教室に乗り込めるかどうかにかかっているの。2年生があっつけに取られていくうちに乗り込んで、すぐに対決《デュエル》を申し込んで動けなくする必要がある。だから3つの梯子を使って乗り込むわ」

「梯子なんてどこにあるのよ」由香が尋ねた。

「体育倉庫に脚立が3つあるのを確認してあるよ」

「手回しがいいわね。でも外から突入するのは反則じゃないかしら」

「大丈夫。そのために戦闘区域を学園中にもらってあるの。だから、あたし達が外から突入しても全然反則じゃないよ」

「よくもまあ次から次へとそんなに汚い手を思いつくわね、あなたは」由香が呆れたように言った。

「いやあ、あたし伊賀の真田幸村と呼ばれていたから」

「誉めてないし、竹中半兵衛はどこ行つたのよ」

「これなら行けるんじゃない」

「お館様が2年の総代を倒せばいいんだろ、結局」

他の代表は既にやる気になっていた。

「じゃあ、それぞれの組で攻撃隊と挟撃隊と守備隊を分けて見取り図通りに配置してね。試合開始は10時にするから、攻撃隊は9時まで静かに3年DとEクラスに入つて。勝負は明後日よ。質問がなければこれで解散。あ、由香リンとマコちゃんは話があるからちよつと残ってくれるかな」陽向は皆に聞こえるような大声で言った。

「話つてないかしら、土屋さん。あなたに指名されてロクな目にあつた例がないんだけど」

「梯子作戦のことだろう」

「あの作戦がどうかしたの？」不審げに由香が言った。

「あの作戦には致命的な欠点があるんだよ。もういいだろう土屋、全部話せよ」

「ニヤハハ、さすがマコちゃん。鋭いね。確かにあの作戦には大穴があるんだ」

「笑っている場合じゃないでしょ。その穴ってなによ」

「外から梯子で侵入するという作戦自体はいい。だが、それは窓が開いていたらの話だ。窓が閉まっけていて鍵がかかっていたら一步も入れん」

「穴どころの話じゃないじゃない。作戦そのものが成り立たないわ」

「そうだね。でもあたし達はどうしてもあそこから突撃するしか方法はないの。だからマコちゃんにお願いがあるの」

「俺にお願い？」

「そう、総代としての命令じゃなくてお願い」

「なんで命令じゃないんだ？」

「かなりのリスクがあるから。良くても停学、最悪退学になるかも知れない。そんな命令できないよ。だから断ってくれても構わないというか断られても当たり前だと思っっているの」陽向は少し言いにくそうに言った。

「何をやらせるつもりだ？」

「もし鍵がしまつてたら、窓をハンマーで割って開けて欲しいの」

「ちよつと土屋さん、あなた気は確かなの？」さすがに由香も驚いた様子で言った。

「あたし達の勝機はそれしかないの。どうしても窓を開けてそこから突入するしか」

「俺が断ったらどうするつもりだ」竜崎は値踏みするような目で陽向を見つめた。

「その時は、あたしが窓を割る。そして由香リンに2年の総代と戦ってもらおう」

「ちよつと土屋さん。2年の総代の霧島先輩は学園始まって以来の才媛と呼ばれている人よ。わたしじゃかなわないわ」

「でも、あたしが窓をわるのなら、その次は由香リンしかないんだよ」

「じゃあじつくり長期戦で戦いましょうよ。なんでそんなに勝ちにこだわるの？」

「あのね由香リン、これはあまり言いたくなかったんだけど、あたしつてこんなだから幼稚園から中学まで友達が一人もいなかったの。「バケモノ」とか呼ばれてずっと一人きりでとっても寂しくてツラくてね。ある時、兄の彼女さんがこの学園なら楽しいことあるよつて教えてくれて、それであたし転校してきたの」

「……」

「楽しかったよ。由香リンとかマコちんとか生まれて初めての友達もできて。学年全員でお祭りみたいの一つのことを目指して。3年生に勝った時にみんなから誉められた時にはとっても嬉しかったなあ。だからね、2年生にも絶対に勝ちたいの」

「だから、わたしじゃ勝てないって……」

「最善を尽くして勝てなかったならしょうがないよ」

由香は俯いてしばらく何かを考えていた。

「……初めての友達……」

「そうだよ。由香リンには（仮）友人つて言われちゃってるけど」

「わかった。窓を割るのはわたしがやるわ。だからあなたは霧島先輩を倒しなさい。そして2年生に勝ちましょう」

「ダメだよ、由香リン。悪けりや退学だよ。あたしだったら大丈夫。ここ数か月本当に楽しかったから、学校に行くのがこんなに楽しかったのは初めて。他の学校に行ってもあたしは平気だよ」

「あなたみたいな社会不適合者がよその学校でなじめる訳ないでしょう」

「ええい、うるさい」竜崎が叫んだ。

「なによマコちん。せつかくいいところだったのに」

「お前らだけじゃ梯子3つ分の窓は開けられないだろう。俺とFクラスの人でその役を引き受けた。女にそんな役やらせられるか」

「カツコいいよ、マコちん。あたしが女だったら惚れてたね」



「あんた自分の性別すら忘れたの？」

「その代わりと言っちゃあなんだけど、由香リンをメイド姿でご奉仕を・・・イタイ」由香の拳が叩きこまれた。

「あなたはどうかあつても私をメイドにしたいのね」

「いらん」竜崎がにべもなく断った。

「なんですって？わたしのメイドじゃ気に入らないっていうの？」

「由香リン、怒るポイントがズレてるよ」

「そもそも、あなたが原因でしょうが」由香は思わず陽向の首を締め上げた。

## 第17話

翌日、陽向と由香は2年Aクラスに向かつて並んで歩いていった。「今日は、どうしてあたしがって言わないの？」陽向が由香の方を向いて恐る恐る尋ねた。

「どうせ何言おうが連れて行くんでしょ。もう諦めたわ。それに、霧島先輩は女だからメイドにされる心配もないしね」

「甘いよ、由香リン。世の中には執事喫茶というのがあつてね・・・」  
「その頭の中に何が詰まっているのか見てみたいもんだわ」

2年Aクラスの前についた。二人は深呼吸をしてからドアをあけた。

「すいませくん。1年のものですけど総代の霧島先輩いらつしやいますか？」

「あれ、陽向ちゃんどうしたの？」

「あれ愛ちゃん？そういえば愛ちゃんもAクラスだったんだ」

「うん、そうだよ。アンナちゃんもいるよ」

「ハクイ、ヒナタ。今朝かたぶりデス」

「それって2時間前ってことじゃ・・・」

「あれ、こちらはお友達？」

「うん、そうだよ。副代表の由香リン。由香リン、こっちは下の兄の彼女の愛ちゃんと上の兄の彼女のロシアから来たアンナちゃん。交換留学生で家にホームステイしているんだ」

「はっ、初めまして1年Aクラスの城ヶ崎由香です」

「初めまして。ソータの妻のアンナデス」

「妻？」

「ああ、ロシア語でTuma《彼女》って意味らしいよ」

「あ、そうなんですか。ちよつと驚いちゃった」

「陽向ちゃんもムチャ振りするね。初めましてボクは2年Aクラスの工藤愛子です。それにしても友達ができて良かったね、陽向ちゃん。ボク心配してたんだよ」

「うん、あとマコちゃんっていう男の子の友達ができただけどね」

「私は（仮）友人ですけど」

「意地でもその（仮）は、外さないつもりなんだね、由香リン」

「外すなら後ろの方を外すつもりよ」

「えっ、あたし（仮）だけなの？」

「あの、ところで陽向ちゃん達なにしにきたの」愛子が不思議そうに聞いた。

「あつ、忘れてた。総代の霧島先輩に用があつて・・・」

「えっ、代表？さつきまでいたけど姿が見えないからきつとFクラスだね」

「総代がFクラスなんかは何の用なんですか？」

「何の用かと言われても・・・多分今頃は目潰ししているかアイデアをしながらしているのかな」

「（この学園の総代つてのは変人しかねないのかしら？）」

「（本当だね。まともなのがあたししかないよ）」

「（あなたがブツチギリで変人なのよ）」

「なんでまたそんな物騒なことになってるの、愛ちゃん？」

「それはまあ、恋する女の子の熱情というか恋する少女に不可能はないというか・・・」

「なんだかよくわかんないけど、とりあえずFクラスに行ってみるよ」ということでFクラスまで来たんだけど、なにか変な声聞こえない？」

「気のせいだよ由香リン。いくらFクラスだってそうそう変なのはないよ」そういうと陽向はガラッとドアを開けた。教室にいた多数の黒い三角マスクに黒衣の集団が一斉に振り向いた。

「すいません。教室間違えました」陽向は慌ててドアを閉めた。

「なにあのKKKみたいな集団は？変なのってレベルじゃないわよ」由香が驚いた声で言った。

「落ち着きなよ、由香リン。あれはきつと単なるサバトか黒ミサだよ」「サバトか黒ミサっていう時点ですでに「単なる」の範疇から外れているのに気がつきなさいよ、あなたは」

「とにかく霧島先輩探さなきゃいけないんだから、そつと入ろう」

二人はドアをそつと開けて教室に入った。どうやら不気味な集団は十字架に縛られた男性とを取り囲んでいるようだ。

「てめえら、いいかげんにしろ。あれは偶然だと何度言えば……ムグ」

「黙らせろ」リーダーらしき人の声で口にハンカチが詰め込まれた。

「土屋さん、この人達なにやってるのかしら？」

「いや、あたしに聞かれても。あ、あそこに普通の人たちがいるから聞いてみようか？」

「普通って。この惨劇のさなかにちやぶ台囲んでのんびりお茶飲んでるって十分普通じゃないわよ」

「いいから、いいから。あのくすいません先輩。この人達何をしてるんですか」一番近くにいたなぜかズボンをはいた可愛い女生徒に声をかけた。

「うん？おお、お主はこの間転校してきたムツツリーニの妹じゃな。あまり気にせんでもよい。単なるリンチじゃ」

「気にするわよ！単なるで済む問題じゃないでしょう」由香が思わずツッコんだ。

「由香リン、あたし以外にも遠慮なくツッコめるようになったんだね」  
「いや、そう言われてもこのクラスでは日常茶飯事じゃからのう」

「リンチにまでかけられるなんて、あの男の人はどんな極悪非道なことをしたんですか？」と陽向が男装の女生徒に尋ねた。

「ワシもよく知らんのじゃが、何でも通学途中で風でスカートがまくれた女生徒の下着を見たとか」

「はあ？」二人そろって声をあげた。

「そんなことがリンチの理由になるんですか？」

「奴らはFFF団というのじゃが、連中に取っては万死に値する罪らしい。なにしろ「他人の幸せは許さない」が連中のモットーじゃからのう。それを知って血の涙を流した団員もおるらしい」

「真正のバカの集まりね。霧島先輩もいないようだし、さっさと帰りましょう、土屋さん」

「んっ？お主ら霧島に用じやったのか、おーい、霧島。お客さんじゃぞい」女生徒は集団に声をかけた。一人の団員が振り向くとこちらにやってくる三角マスクを脱いだ。

「きつ霧島先輩。こんなところで何してるんですか？」由香が思わず叫んだ。

「……何って、雄二のお仕置き。浮気は許さない」

「お仕置きつてもしや足元に積まれた薪と関係ありますか？」

「……土屋さん……世の中には知らない方がいいこともある」

「そっそうですよ。ほら土屋さん、霧島先輩に早く用を伝えて」

「そっそうだね。あのお明日10時に1年生と試召戦争お願いします」

「……わかった。じゃ私は忙しいから」翔子はそう言うと、再びマスクをかぶって集団の中に戻っていった。

由香は陽向の首根っこを引っ掴むと大急ぎでFクラスから飛び出た。

## 第18話

翌朝9時半、陽向はDクラスの教壇の上でいつものようにあぐらをかいていた。

「じゃあ、みんな作戦を確認するね。まず全体の3分の1を守備隊として半分に分けて中央階段前からCクラス前、西階段前からEクラス前まで配置する。戦い方は前回と同じだけど教科が選べない分こちらが不利な場合もあるから、その時にはできるだけ逃げ回って。」

残りの3分の2は攻撃隊として半分と挟撃隊として半分を、既に3年DクラスとEクラスに配備してあるわ」

「かれらはいっ出るの」

「戦闘開始から10分後、つまり10時10分に挟撃隊は中央階段と西階段から駆け下りて2年生を後ろから襲う。攻撃隊は恐らくFクラス前にいるだろう敵を攻撃するわ」

「霧島先輩が別の教室にいたら?」

「その時は挟撃隊を半分にして敵のいる教室を挟むように両側から攻撃する」

「それで勝てるの?」

「今度の攻撃隊の任務はあたしの通り道をあけることじゃない。できるだけ騒いで教室の注意を廊下に惹きつけることだから問題ないよ。あたしたちの切り札《Ace in the hole》は特攻隊だよ」そういうと陽向は申し訳なさそうに他の二人と談笑していた竜崎に近づいて言った。

「マコちゃん、いまさらだけど嫌なら止めてもいいんだよ」

「俺たちが止めたなら勝てねえだろうが」

「だけどさあ……」

「うるせえな。さつさとブリーフィングしてろ」

「あのね、マコちゃん。こんなことじゃお詫びにならないと思うけど、マコちゃん達が退学になったら、あたしも学校辞めるから」

「そんなことさせるために志願したんじゃないやねえぞ、これしか勝つ手がないからだ」

「うん、わかっているよ。だからこれはあたしのワガママ。マコちゃんたち退学にさせてあたしだけのうのうと学校に通えないよ」

「それじゃ、俺たちが志願した意味がねえ」

「マコちゃん達は勝つために志願したんだよ。ごめんね、こんな作戦しか浮かばなくて」

陽向はそういうと教壇に戻った。

「特攻隊は、はしごを確認して。危険のないように組立はしっかりしてね。じゃタイムスケジュールを発表するよ。10時に戦闘開始と同時に守備隊と攻撃隊は戦闘体制。10時10分に挟撃隊が階段を駆け下りて後ろから2年生を攻撃。10時20分、1回目の位置確認の電話が終わると同時に、特攻隊の10名とマコちゃん達3人は窓からはしご3つを出して敵総代のいる教室にはしごをかける。マコちゃんたち3人をそれぞれ先頭にして3人ずつ分かれてはしごを登って。マコちゃんたちが窓を開けたらそのまま窓から突入して、手近にいる2年生に対決《デュエル》を申しこんで動けなくしてちょうだい。その際にあたしは霧島先輩を攻撃して破ってみせる」

「おお」と鬨の声上がる1年生のクラスであった。

「ねえ、雄二作戦を立てないでいいの?」僕は尋ねた。

「ん?作戦ならもう立てたじゃないか」

「作戦とは、あのFクラスをまず派遣して、全滅したらDクラス、Cクラスって奴のことかのう?」

「そうだが何か?」

「というか3年生を破った1年生を相手にFクラスが勝てると思えないんだけど」

「俺もそう思う」

「じゃ、何で?」

「全滅しても少しでも点数稼いでくれればいいさ。どうせ時間稼ぎだ」

さすがは雄二だ。クラスメイトの命など屁とも思っていない。

「まあ、どうせ奴らも時間稼ぎのつもりだろう。本命は守備隊に穴を開けて一人突っ切ってくるはずだ」

「本命ってあのムツツリー二の妹のこと？」

「ああ、翔子に勝てるにはあいつしかいねえ。恐らく一人で飛び込んでくる。3年戦の時には団子で戦っているところを上から飛び越えたって話だ」

「じゃあ、守備隊に意味ないじゃないか」

「一応奴らを真似て階段前からFクラス前まで守備隊をウジャウジャ配置してあるが、まあ突破してくるだろう」

「なんでそんなに余裕なのさ」

「二の手、三の手を準備してあるからな。心配するな」

「ありがとう、その言葉でもものすごく不安になったよ。二の手、三の手ってなにさ」

「二の手ってのはあれだ」雄二は顎で教室の隅を差した。教室の入口の隅には物理の斎藤先生が、出口の隅には数学の古谷先生が椅子に座っていた」

「物理と数学が二の手？」

「いや、それとは違うんだが」

「どうもお主が言うことはよくわからんのう。三の手とは何じゃ」

「まあ、それは秘密兵器ってことだ。それよりそろそろ始まるぞ。位置につけ」

なぜか総代の霧島さんを差し置いて雄二が指揮をとっているのだが、霧島さんは憧れの目で雄二を見ていた。あれは恋する少女の目というやつだろう。この戦争が終わったらさっそく軍法会議にかけねばなるまい。

「ねえ、雄二。僕が隔離されるのがどうしても意味がわからないんだけど」

「心配するな。お前が死んでも影響はない」

「それはいても役にはたたんということじゃな」

「まあ、そういうわけで久保と姫路は護衛から外しておいた。あいつらがないないと戦力として損失だからな」

「そこまでして僕を隔離しなくてもいいじゃないか」

「ほう、じゃお前、土屋の妹のガンガムに踏み潰されてみるか？お前は



ダイレクトに痛みを受けたよな」

「よし、僕は一番遠いAクラスに隠れる。で、誰が護衛についてくれるのさ」

「玉野と清水だ」

「はい？」

「玉野と清水が志願した。しつかり守ってもらえ」

「ちよつと待って。守るどころか貞操と命の危険すら覚えるんだけど」

「気のせいだ、行つてこい」

「さあ、アキちゃー吉井君行きましょう」玉野さんはなぜか大きいバツグを抱えていた。

「ブタ野郎さえ殺ればお姉さまも……ブツブツ」清水さんが不穏な独り言を言っている。

「ねえ、雄二。ガンガムに踏みつぶされてもいいから僕もここに……」

玉野さんが恐ろしい力で僕の首根っこをつかんでAクラスへと引きずって行つた。

## 第19話

10時になった。陽向は携帯のボタンをプッシュした」

「……………はい」

「霧島先輩ですか？1年総代の土屋です。約束通り試召戦争開始です」

「……………わかった。私は2年Fクラスにいる」

「了解です。あたしは1年Dクラスです」

「……………土屋さん、あなたに忠告してあげる」

「なんででしょうか？降伏しろというのなら拒否しますけど」

「……………違う。あなたは私に勝てない」

「それは霧島先輩が必ず勝つということですか？」

「……………違う。私もあなたに勝てない」

「えっと、なぜなぞ？」

「……………ううん、雄二がそう言った」

「その雄二さんっていうのは、どちら様で？」

「……………私の夫、永遠のパートナー、如月ハイランドで愛を誓い合った相手、素晴らしい伴侶、子供たち39人の父親、永久のソウルメイト……………」

「あの人、すいません。その話まだ続きますか？」

「……………大丈夫、あと1時間くらいだから」

「そっそうですか。じゃ、今度ゆっくりお話伺うということで」陽向は強引に電話を切った。

「どうしたの？」陽向の様子がおかしいのを心配して、由香が声をかけた。

「どうしたもこうしたも、鬼気迫るおのろけっていうのを生まれて初めて聞いたよ」脂汗をにじませて陽向が言った。

「相変わらずなに言ってるのか分からないけど、2年生の本陣はどこ？」

「予想通りFクラスだよ」

「翔子、お前の電話中俺は寒気がしっぱなしだったんだが、1年生の本

陣はどこだ」

「・・・1年Dクラス」

「予想通りだな」

「よし、作戦開始」陽向と雄二が同時に叫んだ。

「玉野さんとにかく落ち着いて」Aクラスまで玉野さんと清水さんに引きずられてきた僕は、今玉野さんに無理やり上着をはぎ取られようとしてしている。

「ダメです、アキちゃー吉井君。もう試召戦争がはじまるんですから」  
「うん、それは分かっているんだけど、なぜ僕が上着を脱がされようとしているのかが分からないんだ」

「アキちゃー吉井君の戦闘服を私が作ってきましたから、それに着替えて下さい」

清水さんは部屋に入るなり、ドアから窓から、鍵と言う鍵を全部かけてカーテンまで閉め始めた。

「これでブタ野郎を殺る準備は完璧です。これでお姉さまは私だけのものに・・・ブツブツ」

おかしい。部屋に入ってたった10秒で僕は状況を全く理解できなくなっている。

　　とかいろいろと危険な状況に陥っている、たった10秒で。僕は片手で上着を押さえながらも一方の手でポケットから携帯を取り出し、全ての元凶であるあの男に電話をかけた。

「トウルルルル・・・」

「はい・・・」

「あ、雄二。僕だけど・・・ツイッター」雄二の奴、たった九文字で電話を切ってしまった。親友が危機にあるというのになんて腐った奴だ。交渉の仕方が悪かったに違いない。もう一度電話してみよう。

「トウルルルル・・・」

「はい・・・」

「この間AVを借りたことを霧島さんにバラす」

「明久じゃないか、どうした？」

「どうしたもこうしたもないよ。護衛が僕に襲い掛かってきてるんだけど。誰か救援を。だから玉野さん、僕を脱がさないで」恐ろしい力で上着が脱がされた。

「さあ、アキちゃー吉井君。次はズボンを脱いで下さい……ハアハア」

「お前らは一体兄をしてるんだ？」

「なにをしてるか教えて欲しいのは僕の方だ。玉野さんズボンだけは……」思わず怒鳴ってしまった。

「何か知らんが楽しそうな雰囲気は伝わった。まあ、ゆつくり楽しめ」  
「そんなことを言ってる場合じゃないんだ。玉野さんが恐ろしい力で僕を裸にしようとしている。一刻も早く強力な救援隊を送ってよ」

「ああ、わかった。その状況に最強の連中を送ってやる。奴らなら無事に救いだしてくれるだろう」

「ちよつと待ってよ。それってもしかして」

「ああ、Fクラスの連中だ。もうしばらくまつてろ……ツーツー」

「いや、できれば別のクラスに……雄二……雄二」

これは困った。状況（一人は僕を裸にヒン剥こうとし、一人は僕の命を狙っている）がどうあれ2人の女の子と鍵のかかった密室で一緒となったら、連中が黙っているわけがない。

玉野さん、清水さん、FFF団と3翻揃って、これで裏ドラが乗れば満貫だつて僕は混乱のあまり何を言ってるんだ。いや、落ち着けFクラスは捨石として今、1階で1年生と戦っているはずだ。そうそうこっちは……

「ここか、明久が女とシケこんでるのは」

「やろう、戦闘にも参加しないで一人だけいい目を見やがって」

「ヒヤハハハ、やっちゃうよ。切り刻んじやうよ」

やってこないはずがなかった。というか既に狂戦士《バーサーカー》化している奴もいる。ここからの脱出とその後の逃亡まで考えなければならぬ。

冷静に考えれば素直にムツツリーニの妹に踏みつぶされていた方がよかつたような気がしてしょうがない。

## 第20話

「あのく、お館様」廊下から一人の生徒が飛び込んできた。

「守備隊じゃないの？どうしたの敵が思ったより手ごわいの？」

「いや、手ごわいというか何というか、戦闘の最中に伝令が来たと思ったら敵が全員「殺せ」と叫びながら2階にかけ戻っていききました。今、敵は誰もいません」

「おかしいわね、陽動作戦かしら。とりあえず現状を守って。深追いしちゃだめよ。挟撃される恐れがあるわ」さすがの陽向もFF F団の常軌を逸した行動を読むことはできないようであった」

「なに、Fクラスが戦闘を放棄して全員明久の方に行っただろ。あの馬鹿ども何やってんだ。しかたない予定より早いがEクラスを出せ」

「雄二、明久は大丈夫かのう」

「清水と玉野がいるんだ。心配なのはFクラスの方だ」

「坂本君ってやっぱりみんなが心配だったんですね」

「戦死したら廊下に転がして障害物にする予定だったのに、計画がメチャメチャだ」

「あんたとアキは死んだら絶対に畜生道に落ちるわね」

「お館様、新しい敵がきました。さつきより強敵です」

「なるほどFクラスから順番に送りこんで少しずつ点数を削る作戦ね。すると今来ているのではEクラスで、Aクラスは教室、BクラスとCクラスは廊下の守りに就くはずだから攻撃隊はD、Eクラスよ。これで敵の半分が攻めてきた計算ね。よし、挟撃隊を突入させて」

3年の廊下から挟撃隊が後ろから駆け下りてきた。

「うわ、何だ後ろから敵が出てきたぞ」

「隊列を乱すな。後方の列は後ろの敵に対応しろ」

「走るな、逃げるな。俺たちの方が有利なんだ」

前方と後方で戦闘が始まった。あっちこちで「召喚《サモン》」の声がある。もう、誰と誰が戦っているのかすらわからない混戦に陥った。

「よし、これでしばらくは時間が稼げるわ。じゃ位置報告の電話をするから」

「トウルルルルル」

「……はい」

「霧島先輩ですか、土屋です。位置報告を……」

「……切れることのない赤い糸で繋がった者同士、ケンタウルスとベガ……」

「まだやってたんですか。それにケンタウルスとベガは1年に1度しか会えないんですよ。」

それより、あたしは同じくDクラスにいますから」

「……私もFクラスにいる。それで私たちは志を同じくする同士、親公認でだれもが認める学園N.O.1のカップル……」

「はい、その話はまた今度……ブチッ」

「どうだった?」

「次は由香リンが電話してくれないかなあ、あたし怖い夢みそうで……」

「なんで位置報告の電話でそんなことになるのよ。2年生の本陣はどこ?」

「2年Fクラスだよ。じゃ状況開始だよ!」

はしごが3つ取り出され窓から外に出された。陽向とAクラスの生徒、それにFクラスの3人が窓から外へと飛び出た。

「翔子、陽向はどこにいるんだ」

「……まだDクラスにいる」

「変だな。守備隊が挟撃を受けて大分人数が減っているのにまだ出てこないのか? 長期戦になれば不利になることがわかってはいるはずなのに。よしDクラスを攻撃に出せ。このまま前線を突破してDクラスに突っ込む」

1年生は3つのはしごを持って2年Fクラスの真下に位置した。はしごを3ヶ所にわけて先頭をハンマーを持ったFクラスの生徒が登る。その時、陽向の携帯がなった。慌てて陽向は携帯に出る。

「なによ、この大事な時に。見つかったらどうするのよ。え、敵のDク

ラスが攻撃してきた？ありがとう」携帯を切ると静かな声で言った。「敵は力押しできたわ。意識が攻撃に行っている。今がチャンスよ」

各はしごに3人ずつ窓のギリギリまで登った。

「おい、土屋」竜崎が押し殺した声で言った。

「なに、マコちゃん」

「やっぱりダメだ。窓に鍵がかかっている。叩き割るしかねえ」

「そう……3人ともゴメンね……やって！」陽向の声とともにハンマーを振りかざした3人が一撃で窓ガラスを割って、手を伸ばして鍵を外し、窓を開けて教室に飛び込んだ。続いたAクラスの3人も即座に教室に飛び込むと手近にいた護衛役の2年生に対決《デュエル》を申し込んだ。

「1年Aクラス 城ヶ崎由香 召喚《サモン》」

「1年Aクラス 大城厚 召喚《サモン》」

「1年Aクラス 柴田あゆみ 召喚《サモン》」

……

突然のことにあつげにとられていた2年生は「召喚《サモン》」の声に条件反射のように応じた。結果的にこれで護衛が足止めされ総代が裸の状態になったも同然になった。

そこへ最後に陽向が飛び込んできた。

「お待ちせしました。霧島先輩と坂本先輩。1年Aクラス 土屋陽向 参上しました」

ちらつと竜崎たちに目をやると妙に体格のいい強面の教師に腕を掴まれて教室から連れ出されるところだった。

「やるじゃねえか、陽向だったか？廊下から力押ししてくると思つたら外からガラスを割って入ってくるなんてな。その手段を選ばねえやり方は嫌いじゃないぜ」

「坂本先輩こそ増援にEクラスを送ったと見せかけてBクラスを送ってくるなんてやりますね。しかもあたしがそれを見抜いて、守備にEクラスを使っていると判断して廊下を突破するようにしむけるなんて手段を選びませんよね」

「よくわかったな」



．．．．．ざわざわ

「ふっ、人をはめることばかり考えてきた人間の発想．．．瘦せた考  
え．．．」

．．．．．ざわざわざわざわ

「俺をなめた罪、それはこの世で一番重い実刑、情状酌量の余地なし。  
だが、まさか窓ガラスを割ってまで突入してくるとはな」

．．．．．ざわざわざわざわざわ

「不合理こそ作戦．．それが作戦の本質．．不合理に身をゆだねて  
こそ試召戦争」

．．．．．ざわざわざわざわざわざわざわ

「翔子、おまえさつきからなんで「ざわざわ」って言ってるんだ？」翔  
子が両手を口にあてて「ざわざわ」とつぶやいていた。

「．．．．．「やれ」という書く人の声が聞こえた気がした」

## 第21話

「だから玉野さん、ズボンから手を放してってば。今はそんなことをやっている場合じゃないんだ」

ドアが外から突き破られようとしている。あれが破られれば間違いない。僕は明日の朝日を空の上からみるはめになるだろう。

「ダメです。アキちゃー吉井君。ズボンを脱がないとメイド服が着れません」

「メイド服？今、メイド服って言ったよね。戦闘服って言っていないかったかい」

「メイド服は少女の戦闘服です。アキちゃー吉井君が着れば、攻撃力はうなぎの滝登りです」

「ええい、わけのわからないことを・・・あぶない」包丁が頬をかすった。

「ちいつ、運のいいブタ野郎です。安心するがいいです、次は外しません。そして美春とお姉さまは愛の逃避行へ・・・」うん、目が逝っている。こんなことなら美波を連れてくるべきだった。

「いや、僕は全然邪魔してないからね。逃避行でも脱獄でも好きなのやってくれればいいから」

「おい、丸太もってこい。ドアを突き破るぞ」

「どこにあんだそんなの。丸田ならいるぞ」

「デブだからいいか。よし丸田突撃しろ」

まずい、普通の状態でもまずいのに上着脱がされて、半脱ぎのズボンに玉野さんがしがみ付いている状況をみて連中が正気でいられるわけがない。普段でさえ話が通じない連中だ。この状況では日本語が通じなくなっている恐れがある。

「アキたちは大丈夫かしら」

「1年の最前線と激しい戦いをしていられるかも知れんのお。まあ援軍も行ったじゃし大丈夫じゃろう」

「よくし、5人でいっぺんにつつこんでドアを突き破るぞ」

「そうは行くか。内側から踏ん張って・・・だからズボンから手を放す

んだ玉野さん」

試召戦争とは全く関係なく、援軍と激戦を繰り広げていた。

「じゃ、時間もないので手早く片付けましょう」陽向が廊下側の中央の窓の前に立っていた翔子の前に進みでた。

「……土屋さん、忠告したはず。あなたは私に勝てない」

「先輩もあたしに勝てないんですね。難しいなぞなぞだったけど分かりましたよ。答えは「人間」です」

「ムツツリーニから聞いてた以上の「アホの子」だな」

「え、違ってるんですか？」

「違ってるというか、お前のはスフィックスの謎だ。次に翔子が言ったのは別になぞなぞじゃない」

「えくズルい」

「一言もなぞなぞだとは言っていないんだが」

「何でもいいや。さっさと決めるよ」陽向は教室の両端に目を走らせた。入り口と出口に物理と数学の教師が座っている。どちらも陽向の得意科目だ万が一にも負けることは考えられない。

「まあ、やってみろ」

「言われなくてもやるわよ。1年Aクラス 土屋陽向 召喚《サモン》」

だが、何も現れなかった。

「あれっ？召喚、召喚、召喚」

「無駄だよ。召喚獣は現れない」雄二が余裕たつぷりにいった。

「召喚戦争のルールを覚えているか？陽向」

「当たり前じゃない、さもないと作戦が立てられないし」

「召喚フィールドの大きさは？」

「教師を中心として半径10m、それがどうしたの。距離的には十分あるのになんで召喚獣が出てこないの？」

「この教室は長さが18m。この意味がわかるか？」

「??？」

「それがお前の欠点だ。試召戦争の経験不足。俺たちやいやになるほ

ど試召戦争をやってきたからな、経験で知っているんだ」

「どういう意味よ」

「つまり、この18mの教室の両端に教師をそれぞれ配置した。すると中央でフィールドの重なりが2mできる。それが今お前が立っているところだ。そこはシステムがどっちの召喚獣を出しているのかわからずにフリーズする。つまりどっちの召喚獣も出てこない領域だ。俺たちは干渉領域と呼んでいる。だからお前も翔子も勝てないのさ」

「じゃ、勝負がつかないじゃない」

「そう、だから俺は2の手、3の手を準備した」陽向の背後に人が飛び降りた音がした。

「康兄」音に驚いて体ごと振り向いた陽向が言った。

「……よくここまで来た陽向。せめてこの兄の手でとどめを刺してやる」

「これが二の手だ。すまん」いつの間にか陽向の背後に立っていた雄二が陽向の方をトンと突いた。陽向は前によるよるとよろけ康太の前に立っていた。

「そこは干渉領域外だ。そしてこれが三の手。工藤頼む」と廊下に向かって声をかけると愛子が教師を一人連れてきた。

「それでは試召戦争始めます」

「無駄だよ、康兄。あたし手加減しないよ」

「……ふ、お前ぶるときに負ける俺ではない、遠慮なく来い、陽向」  
「教科は保体」

「えくく!!」陽向が叫んだ。

「2年Fクラス 土屋康太 召喚《サモン》」上忍風の衣装をまとった忍者の召喚獣が現れた。

「えとえとえと」なぜか陽向が躊躇している。

「何やってるのよ、陽向。早く召喚しないと負けちゃうわ」由香が叫んだ。

「ええいい、ヤケだ。1年Aクラス 土屋陽向 召喚《サモン》」  
「でるぞガンガムが」

「今度は何を持っているのかしら」

「ずずずずず．．．．．」

「おい、何かブリキのロボットみたいのがでてきたぞ。ガンガムどうしたんだ」

「2年 土屋康太 795点 vs 1年 土屋陽向 12点」

「『『『なつなにいく???』』』』 一同が叫ぶ間もなく勝負は一瞬で決まった。」

「勝負あり。2年の勝ち」

うなだれて手をついている陽向に康太が声をかけた。

「力を落とすな陽向。そこはかつてこの兄も歩いた道。発電機を動かせるほど鼻血を吹き出して今や保体では教師にも負けないほどになったのだ。精進しろ」

「なんかいい話っぽくまとめているけど、要するに並はずれたエロになったってことだよな」

「お前も同じだということも忘れていないか、工藤」

「いやあテレちやうよ」

学園中を巻き込んだ学年対抗試召戦争は終わった。

## 第22話

「みんなごめん」教壇の上で陽向は全員に向かって土下座していた。「こんな時でも教壇の上から降りないのね、あなたは」義務のように由香がツツコんだ。

「全部、あたしの不徳の致すところだわ」

「それでどうするつもり？」由香が静かに尋ねた。

教室は静まりかえっている。みんなかなり怒っているのだろうか。むりもない、あんなに頑張ったのを自分がブチ壊してしまったのだからと陽向は思った。

「うん、今回の責任を取って、あたし・・・総代と代表を辞めるよ。後任は元の総代だった由香リンにお願いする」

「ふざけるんじゃないわよ」由香が大声で怒鳴った。

「だって・・・」

「だってじゃないわ。わたしはあなたに前に言ったわよね。総代の座は実力で奪い返すって、覚えてないとは言わさないわよ。そんなことで責任取ったことになると思ってるの？」

「城ヶ崎、言いすぎだ」竜崎がなだめるように言った。

「言い過ぎじゃないわよ。このアホの子には、これぐらい言わないとわからないのよ」

「・・・分かったよ、由香リン」陽向は俯いて唇を噛みしめると声を押し出すようにして言った。

「今回の責任を取って、あたし・・・あたし学校を辞める」陽向は両手の拳を握りしめて言った。

「全然、分かってないじゃないのよ」由香は陽向のそばに歩み寄ると肩を思い切り揺さぶった。

「だって、それしか責任の取りようが・・・」

「そんなの逃げてるだけじゃない。責任取ったって言わないのよ。いい、あたし達はもう2年生と3年生にケンカを売っちゃったのよ。それなのに一人だけ逃げようなんて許さないわ。わたしはそんな人を友達だなんて呼びたくない」

「えっ、友達？」

「うつうるさいわね、そこに反応するんじゃないわよ。とにかくあなたは責任とって、どうやったら2年生に勝てるのか、考えなさい」由香は赤くなつた頬を隠すように横を向いたまま言った。

「それより城ヶ崎、俺たちは噂でしか聞いてないんだが、お館様が負けたのはどういう状況だったんだ」Bクラス代表が尋ねた。由香が詳しい状況を説明すると教室中がシンつとなつた。

「(やっぱり、怒っているよね。しようがないけど)」

「……………ツプ」

「？」

「クツ……………プツプ」

「??？」

「二二「ドウワハハハ」」

誰かが堪えきれずに笑いだしたのをキツカケに教室中が爆笑の渦に包まれた。

「なっ何よみんな。なにがおかしいのよ」

「12点なんてありえないだろ、ハハハ」

「でたらめ書いても20点はとれるだろうに」

「もうちよつとカッコいい負け方なかつたのかしら」

「これはあれだな。保体の時だけお館様はFクラスに行ってもらふべきだな」

「なによ、みんなして言いたい放題言つて。あたしはこれから保体に力を入れるんだからね」

「あら、じゃそんなお館様にプレゼントよ。せめて50点は取つてちょうだいね」由香も笑いながら保体の副読本を陽向に手渡した。

「ふん、あたしが本気を出したらどんなに凄いか、そこで見てるといいわ」陽向はそう宣言して本に目をおとした。

「ぶしゅううううう」

「ああ、お館様が虹のような鼻血を出してぶっ倒れた」

「ティツシユだ。ティツシユを詰めろ」

「変ね。そんなに過激なこと書いてあつたかしら？」由香は冷静に陽

向が読んでいた頁を開いた。

「え〜つと」「ヒトは、22対の常染色体と1対の性染色体、計46本の染色体を持つ。性染色体の組み合わせは女性では2本のX染色体、男性ではX染色体とY染色体1本ずつとなっている」って何でこれで鼻血が出せるのよ。ちよつと起きなさい、陽向。あなたどれだけ物凄い妄想力してるのよ」由香は陽向を揺り動かした。陽向は幸せそうに気を失っていた。

陽向、由香、竜崎の3人は学園長室のドアの前に立っていた。

「一緒に行こうか？陽向」と由香が心配そうに言った。

「俺がついて行こう。やったのはおれだからな」竜崎も言った。

「大丈夫。あたしの責任だからあたし一人で行くよ。お願いだからこれくらいの責任は取らせて」陽向はそういうとドアをノックした。

「お入り」ドアの向こうから横柄そうな声がした。

「失礼します」陽向は一人でドアの向こうに消えていった。

「それであの3人をどうなさるおつもりですか学園長」神経質そうな教頭が言った。

「どうって、あれは事故だとあたしや聞いてるけどねえ」

「どこの世界に試召戦争中にハンマーで窓ガラスを叩き割って教室に乱入する事故があるんですか」

「元気があっていいことさね。それだけ勝つことに執着心があるんだったら、そのうち成績もあがるだろうよ」

「未来の話をしているんじゃないやありません。今、現在起こった事件のことを話しているんです。なんらかの処分を下さないと他の生徒に示しがつきません」

「ハンマーで窓ガラスを叩き割る生徒が、そうそういるとは思えないがねえ。じゃ、悪いけど西村先生、あんたのところで10日ほど補習で預かってくれないかい」

「わかりました」西村と呼ばれた体格のいい教師が答えた。

「処分が軽すぎます」

「あんたはうるさいねえ。自分の所で指導できなかつたからって、退



学にしてよそ様に押し付けられるつもりかい。停学にしてもFクラスじゃ、休みが増えたと喜ぶような連中だよ」

「・・・しっ、しかしですな」

「西村先生はどう思うね？」

「私は学園長のお言葉に賛成です、ですが」

「ですが、なんだい？」

「連中は退学の方がよかったと思うかもしれませんが」そういうと西村はニヤッと笑った。

「じゃ、それで決まりだ。窓ガラスを割った1年生3人は10日間の補習。じゃ、もういいよ」学園長がそういうと教頭と西村は一礼して出て行った。

## 最終話

「これでいいのかい、チビガキ」学園長はカーテンの陰に隠れている陽向に声をかけた。

「ありがとうございます、ババア長」陽向がカーテンの陰から出てきて学園長の前にまわった。

「教頭呼び戻してもいいんだよ」

「いやですわ。ちよつと口が滑っただけじゃありませんの、お婆様」

「いま一つ敬意が感じられないけどまあいいさね。あんたがこんなに友達思いだとは知らなかったよ」

「あたしの立てた作戦ですから、全責任はあたしにあります。でも学園長があたしのお願いを聞いてくれるとは思いませんでした」

「教頭は細かいからねえ。たかがガラスの3枚や4枚でうるさいっただらありやしない。夜の校舎窓ガラス壊して回ったわけじゃあるまいし」

「80年代の17歳じゃあるまいし、今時、日本中探したってそんな不良いませんよ」

「みんな大人しくなっちゃったねえ」学園長は少し寂しそうな顔をして言った。

「とにかく今度のことは、あたしの借りつてことにしておいて下さい」  
「借りなら返すつもりがあるのかい」

「ええ、必ず」

「あたしや気が短いんだ。それならすぐにでも返してもらおうかね」  
「待てないほど老い先が短いんですか？」

「ええと、教頭の内線番号は……」学園長は電話を取り上げて言った。  
「いやですわ、ちよつとしたアメリカン・ジョークじゃありませんか、ジョージ」

「誰がジョージだい。ちつとも笑えないよ」

「だからこそアメリカン・ジョークなんです」

「あんたは、もう一度日米戦争引き起こすつもりかい」

「で何して返せばいいんですか？肩でも叩けと」

「随分お手軽に済ますつもりだね。そうじゃないよ、あなたの事は前の学校の北川先生からよく聞いてるんだ」

「・・・北川先生から」陽向は驚いた様子でつぶやいた。

「そう『伊賀中学』の北川先生さ。あと、役場の抜け忍係とかいうよくわからない部署の鈴木さんから連絡があつてね」

「鈴木さんも・・・」

「何だか話が終わるまでに10回くらい「決して脅されたわけじゃないんです」とか言つてたけど、あんた何したんだい」

「10回も言ってるんだから、なにもしてない証拠じゃないんですか？」

「10回も「脅されてない」って言うつてのは、普通は「脅されました」と白状しているようなもんなんだけどねえ」

「それでなんて言つてたんですか、北川先生と鈴木さんは」

「2人とも同じこと言つていたよ。このままじゃあなたは人間として人の心がわからないカタワ者になる。なんとか文月学園に入れてやつてくれてね。あんたずっと友達がいなかつたんだつて」

「・・・」

「学校嫌いですつと一人で勉強していたあんたが、急に文月学園に行きたいと言いだしたから驚いたらしいよ。でもまあ中学生を高校に編入させようとするかねえ」

「それはその・・・あたしがもう我慢できなくて」

「せいぜい感謝することだね。お二人とも首をかけてまであなたのためにやつてくれたんだ」

「いいんですか」

「ふんっ、いいこと教えてやるよ、チビガキ。規則つてのは、人が気持ちよく生きるためにあるんだ、規則のために人が生きてるんじゃない。それを本質を分かつてないバカ共は規則規則と振りかざすけどね。それに1歳や2歳の違いなんて卒業したら誰も気にしないさね。」

「・・・はい。でも借りを返す話と今の話と何の関係があるんですか」

「正直言って、うちの学校でもあんたが学べることはほとんどないさね。あんたみたいな規格外が入学してくることなんて想定してなかったもんでね」学園長は椅子から立ち上がるとドアに向かってゆっくりとあるきだした。

「はあ……でも、あたしはこの学園楽しいです。大好きです」  
「それだよ。あんたは勉強なんかなくてもいい。どうせあんたを教えられる教師なんてうちにやあ一人もいないんだ。その代わりあんたは一人でも多く友達を作りな。それで貸し借りなしにしようじゃないか」

学園長はドアをいきなり引いた。ドアに耳をつけて聞き耳を立てていた由香と竜崎はバランスを失って部屋の中に倒れ込んだ。

「どうやらこの2人はあんたのことが心配だったらしいよ。これが友達さね。こんな友達を卒業までに一人でも多く作るんだね。それがあたしへの恩返しさ」

「……学園長ってまるで先生みたいですね」

「あんたは学園長の意味を知っているのかい？」

「召喚システムいじって遊んでいるオタクだと」

「Fクラスのバカ兄貴の言うことをまともに受け取るんじゃないよ、チビガキ」

「あたしのことだったら笑って許してあげるけど、康兄の悪口いうんじゃないやねえと言っているだろうが、ババア」

「ふん、その様子だと元気は戻ったようだね」

「あら計算していたみたいない方ですね」

「そういう風に言えば、そう聞こえるだろう」

「本当に、年を取ると煮ても焼いても食えませんね」

「食うところがないチビガキよりはマシさね」

「……フフフフ」

「……ハハハハ」

二人の笑い声がいつまでも学園長室に響いていた。

一同はいつもの帰り道を歩いていた。

「くそ、明久の野郎。試召戦争をバツクれやがって」

「一体どこにいったのじやろうのう。あいつが試召戦争をサボるとは思えんのじやが」

「本当ね。これは明日はお仕置きだわ」

「明久君にもきつとやむおえない事情があつたんですよ」

「事情つてどんなだよ」

「……1年の女の子に呼び出されたとか」

「なんですつてえ、そんなこと許されるわけないじゃない」

「いや、要するに毘つてことだろう。毘かけてまで明久を呼び出す意味がよくわからんが、もしかしたら「観察処分者」つてのが強い奴につけられる称号だと勘違いしたのかも知れんな」

「どっちにしる連いて行つたという事実は消えないわ。明日は関節技カーニバルね」

「いや、さつきからちよつと気になっておるんじやが、わしらは何か忘れておらんかのう」

「何かつてなんだよ」

「なんだよと言われても困るのじやが、何か大事なことを忘れていているような気がしてしょうがないのじや」

「気のせいだ気のせい。早く帰つてメシ食おうぜ」

くそう、もうそろそろ限界だ。ドアからの圧力がだんだんと強くなってきた。僕は両手で必死にドアを押さえながら、ズボンにしがみついている玉野さんの肩を片足で押し込んでいる。雄二に携帯で連絡もできない。

玉野さんは恐ろしい力ですでにズボンの片足が脱がされてトランクスが丸見えだ。いや、そんな些細なことに頓着している場合ではない下手すればトランクスまで脱がされかねない。と言つてる側から腹の横を包丁を持った清水さんが飛び込んできた。体を捻つてそれをかわす。

「往生際が悪いブタ野郎です。そろそろ素直になつたらどうですか」「断る!!」僕は間髪入れずに言い返した。ここで素直になつた日には、明日の朝にはベーコンとして朝食の座を飾るハメになってしまう。

「こら、明久。いかげんにあきらめてここを開けろ」ドアの向こうから声がする。

「今だったら致命傷だけで済ませてやる」さすがFクラスだ。致命傷の意味を分かっている。一体何と勘違いしているのか想像すらつかない。

「お前たちこそ、何を勘違いしているかわからないが、玉野さんいいかげんに離して、ここには何も無い。さっさと1年と戦ってこい」  
「何も無いならこつちをあげろ」

ふむ、正論だが頷くわけにはいかない。上着とズボンの片方を脱がされて、女生徒が足にしがみ付いているんだ。あのムツツリーニだつて言い訳ができる状況ではないのだ。

それにしても学校が静かだ。もしかしたら試召戦争が終わったのかも知れない。そうすれば雄二達もうすぐ助けに来てくれるだろう。

持ちこたえるんだ僕、早く来い雄二。友達の危機なんだ。

「早くこい雄二。友人の命が危ないぞ」僕は大声で叫んだ。

「さて、今日の晩飯はこのコンビニ弁当にしようかな」雄二はコンビニでこの上なく真剣に悩んでいた。

## 12. 浮気と仲間とバスデイケーキ 第1話

休日の午後はみんなで集まってお茶をしながら歓談するのが、このところの土屋家の習慣になっていた。

「それですね。アンナちゃんったら……」

「いかにもこいつらしいな。ハハハ……」

「……ハア」

「……もう、アイコそれは言わない約束デスね……」

「いいじゃん。アンナちゃんらしくてかわいいよ……」

「……ハア」

「ハア」

「……ちよつとみんなこっちに来てくれ」 颯太が皆を部屋の隅に呼び集めた。

「一体あれは何だ？なにがあつたのだ」 颯太君はソファでうなだれている陽太君を顎で示しながら言った。

「何か陽太君の周囲だけ黒雲がかかっているみたいだよ」

「由美ちゃんがお茶会来てないのと関係あるのかな？」

「たつたそれだけであんなにゾンビみたいになるもんなのか？」

「……T-virusをまき散らさないうちに始末した方がいい」

「祝福儀礼済の銀の弾頭じゃないとダメデス。パパが持っているんデス」

「また、あの親父か。なんでお前の親父は、いちいち日本での話に絡んで来たがるんだ？」

「仕事で使うと言ってマシタ」

「それは間違いなく別のヤバい組織に関わっているぞ、お前の親父は」

「そんなコトありません。ただの高校の先生デス」

「なんで普通の教師に、祝福儀礼済の銀弾頭の銃が必要なんだよ。ロシアじゃ、その辺の高校でグールやバンパイアがナチュラルに授業受けたりバスケやってたりしてんのか？」

「ソータ、グールやバンパイアは日中に出歩けないのは常識デス」

「そんな話をしてるんじゃないやねえんだよ。というかロシアじゃ常識か知らんが日本じゃ一部のマニアしか知らんわ、そんなこと」

「いや、怪しい機関の話はバチカンに任せて、陽太君をなんとかしましようよ」

「あの調子だと家中にカビが生えちゃいそうだよね」陽向ちゃんが二カつと笑って言った。

「……家の中が暗くてしょうがない」

「わかりませタ。ワタシがヨータの相談にのつてきてあげマス」アンナちゃんがただでさえ大きい胸を張って言った。

「いや、ちよつと待て。お前ではまとまる話も暴発する。話が明々後日の方に飛んで行きそうだ」颯太君が必死に止めた。

「なぜ止めマスか、ソータ」

「いや、お前の気持ちはありがたいんだが、もつと適任者がいる。愛ちゃんだ」と颯太君がいきなりボクに話を振った。

「えつ、ボつボクですか？ いやだなあ、あの黒いオーラに関わるの。なんかもう、有無をも言わず即刻お祓いでもしてもらった方がいいんじゃないですか？」

「いや、そう言わずに。今、ガラスの少年のように閉ざされた陽太の心をこじ開けられるのは、愛ちゃんしかいないんだよ」

「ガラスの心をこじ開けたら割れるんじゃないや……でも、ボク、いつも康太にお前の解釈は明後日の方向だって言われてるし……」

「明後日、結構じゃないか。アンナの明々後日より一日分近づいてる」それって大阪行くのに、東北新幹線乗るか長野新幹線乗るかくらいの違いしかないんじゃないんですかね？」

「長野の方が戻ってくるのに時間が短いじゃないか」

「間違うことは確定事項なんですネ」

「と言うことで愛ちゃん頼むよ」颯太君が拝むように言った。

「あ、そういうえば陽向ちゃん。かわいい妹が聞けば心を開いてくれるんじゃないですか？」

「えくあたし？それでもいいけど、あたし陽兄に怖がられているから



なあ。あたしが行ったら今の状態。プラス怯えが入って、雨の中に捨てられている子犬状態になっちゃうよ、きつと」

そうだった。陽向ちゃんは陽太君の哲学のレポートをケチヨンケチヨンに貶して再提出させるだけの能力の持ち主だったのだ。悩んでいる時にケチヨンケチヨンにされたら泣きが入るかもしれない。

「……だから、お前しかいないのだ」

「いや、それなら颯太君か康太が行きなよ。男同士だし実の兄弟なんだから話もしやすいよ」

颯太君がやれやれこいつ何も分かってないなという顔で首を振ると諭すようにボクに言った。

「愛ちゃん、確かに俺たちは男同士だし、血を分けた兄弟だ」

「でしよう、兄弟は助けあわなきや」

「だが、血を分けた兄弟だからこそ、わかることがあるんだよ……」  
「これ以上は聞くなつて囁いているんです、ボクの中のゴーストが……」

「つまり俺たちは誰よりもお互いのことを知っている。その結果「こいつらは信用できん」とお互いに同じ結論を出したわけだ。さすが兄弟だろ？3人が同じ結論に達したんだから」

「胸はつて威張れることじゃないでしょう。もっと兄弟仲を良くする努力を……」

「失礼だな、愛ちゃん。兄弟仲はすこぶるいいぞ」

「そつそうですよね、いくらなんでも……」

「信用しあつてないだけだ」

「それを普通は仲が悪いというんです」

「ふ、わかつてないな愛ちゃん」颯太が自信ありげに言った。

「なつ、なにがですか？」

「平和とは戦争と戦争の間の状態を言う」という言葉がある」

「はあ？」

「つまり、「仲がいい」とはケンカとケンカの間の状態をいうんだよ」

「それってケンカしてるのがデフォルト状態ってことじゃないですか」少女は呆れて言った。

「うむ、厳密に言えば今日で通算1週間仲がいいぞ」  
「いくらなんでも短すぎ」

## 第2話

「いや、そんなこと胸張って言われても・・・」

「というところで愛ちゃんが最適なのだ」颯太がシレつと言った。

「ボクが最適というより、皆さんが最悪なだけじゃあ・・・いや、だからボクは・・・」颯太、康太、陽向に背中を押されて陽太の横に押し出された。

「・・・えつと・・・ですね」

「・・・あ、あの・・・陽太君」愛子は恐る恐る声をかけてみた。  
ハアツ」

「・・・あ、あの・・・陽太君」愛子は恐る恐る声をかけてみた。  
ハアツ」後ろを向いて手で大きくバツテン印を送った。だが、颯太と康太は「Go! Go!」とばかりに腕を振り上げ、陽向は両手でボクシングの真似をしている。

「ハア・・・あの・・・陽太君」愛子は少し大きな声で声をかけた。

「えつ、うわつ。愛ちゃんいつ来たの」ビックリしたとばかりに飛び上がった。正気だろうか、この人は？

「はあ、ほんの2時間ほど前からここでお茶してましたけど・・・」  
「そっそうか、よく来たね。ちよつと考え事していたものだから・・・」  
「いや、考え事っていうレベルじゃなかったですよ。なにかあったんですか？あまりお役に立たないかもしれないけどボクでよかったですら相談にのりますけど」

「いっいや、別に何ともないから・・・ハハハハア・・・」

「そうですよね、ボクじゃお役に立ちませんよね、じゃボクはこの辺で・・・」関わらない方がいいと、心の中の獣が言っている。内心ホツとしながらその場を立ち去ろうとしたら、腕をガシッと掴まれた。

「別に何ともないんだ・・・うん・・・何ともあるはずがないじゃないか」独り言のように陽太がつぶやく。

「それは、よかったですね。それはそうとこの手を・・・」愛子が必死

に腕を掴んだ陽太の手を引きはがそうとした。

「……だが、どうしても愛ちゃんが聞きたいというのなら」

「いえ、まったくそういう気はないんですけど、この・手・が……」  
腕を掴んだ指を一本一本ひき剥がそうとしていた。

「しかたない、他ならぬ愛ちゃんにそこまで言われちゃ話さないわけにはいけないな」

「いえ、そこまでして話す必要性はまったくない……誰か助けて」  
助けを求めてみんなの方に目を向けたら……すでに視線の先には誰もいなかった。なんて逃げ足の速い連中だろう。

「あの連中へ、どうしてくれよう……」血がたぎるのを感じた。

「いや、本当に大したことじゃないんだ」陽太が言い訳がましく言う。

「そつそうですか……それじゃそういうことで」だが言葉とは裏腹に陽太は愛子の腕を放そうとはしなかった。

「うん、こんなこと長く付き合っていればよくあることじゃないか」

「あのボクの話聞いてくれてます……ボクも腹くくりました。話を聞きますからこの手を離してください」

「……手？おわあ」陽太君は初めて自分が僕の手を握っているの気がついたようだ。

「ふう、やつと離してくれた。いいですよ、こうなったらボクが話を聞きますよ。聞けばいいんで……よ……エグ」不覚にも思わず涙ぐんだ。

「いや、そこまで大したことじゃないんだが、泣かれると困るなあ」

「ほつといてください。聞くと決めたからにはちゃんと聞くんですから。ほらさつきと話して」ヤケクソである。

「いや、本当に大したことじゃないんだ……」陽太君が黙り込む。

「ここまで人を振り回して、いまさら大したことじゃないじゃ済まされませんよ。大河ドラマ並みに演出して楽しませてください」

「いや、そこまで脚色いれると何がなにやら……」

「まあ、どうせ由美ちゃん絡みでしょうけど……」

「……ギクツ、なぜそのトップシークレットを」陽太くんは明らかに動揺したようだ。

「いや、トップシークレットもへったくれも陽太くんがあんなに悩むなんて由美ちゃんのこと以外に考えられないし、チャンス問題ですよ。あと自分で「ギクツ」って言わないでください」

「そう、僕が由美ちゃんを初めて見かけたのは去年の今頃……」  
「ちよつちよつと待ってください。話はそこから始まるんですか？」

「なにか問題でも？」 陽太は不思議そうに言った。

「いや、そんなあどけない顔で不思議そうにされても困るんですけど、そこから話始まつちやったら今日中に悩みのところまでいかないじゃないですか」

「大丈夫、前みたいに泊まっていけばいいよ」

「あれだけ渋っていた割には、話す気マンマンなんですね」

「そう、あの日は雨模様の……」

「無視して始めるし……わかりました。ちゃんと聞くから話を聞いて、ここ1週間あたりの話にしてください」

「……1週間」そういうと陽太は再び首をうなだれた。

「その様子だと、この1週間に由美ちゃんと何かあったんですね」

「いや、何もなかったんだ……」

「何も無いのに何でそんな暗くなってるんですか」

「何もなかったから暗くなっているんだよ、愛ちゃん」

「……すいません、大人の関係はボクには理解できません。わかりやすく言って下さい」

「……ト……れた」陽太は弱々しく答えた

「はいっ？ すいません声が小さくて聞こえませんでした」

「デート……られた」

「パードウン？」

「デートを断られたんだよ」陽太はこの世の終りのような声で叫んだ。  
「わっ、ビックリした。デート断られたって、そりゃ由美ちゃんだって用もあるだろうし、断ることだってあるでしょう」

「2回なんだ」

「へっ」

「今週、2回誘って2回断られたんだ」もはや陽太は泣き出しそうだった

た。

「えーっと、ちよつと頭が混乱してきたので整理させて下さい。陽太くんは今週由美ちゃんを2回デートに誘ったけど断られたと。それでこの天気の良い日曜の午後にお岩さんだつて地獄に引きずりめそうな禍々しいオーラを出して拗ねていたと、こういうわけですか?」

「だいぶ脚色が入っているけど、要約すればそういうことになるのかな?」

「なるんです。アホですか、あなたは」

### 第3話

「本当に昨日は大変だったよ」学校の帰り道すがら少女はまだプリプリと怒っていた。

「……しかし、デートをたつた2回断られたくらいで、あそこまで落ち込めるのなら、由美ちゃんに振られた日には出家でもしかねんな、あの男は」少年も言った。

「だいたい由美ちゃんはああ見えても陽太くん一筋なんだから……」  
「……それもそう……それはどうかな？」角を曲がった少年がいきなり逆戻りして首だけ出して道の先を見た。

「どうしたのさ」不審な行動に声をかけた。

「顔だけ出してケーキ屋の前を見ろ」ケーキ屋とは由美ちゃんがバイトしている「メイクイーン」のことだろうか？少女はそつと顔を出してみた。店の前に派手な赤い外車が止まっており、由美ちゃんがその車から出てきた。ドアを閉めるとドライバーに微笑みながら手を振り、大きな荷物を持って店に入っていた。

「ねえねえ、あれどういうこと？」少女は興奮しながら言った。

「……俺に聞かれても知らん。わかっているのはあの派手な外車で由美ちゃんが送ってもらったらいいことだ」

「……」

「……」

「……このことは」

「……兄貴には」

「内緒ということだ」二人の息がピッタリと合った。

「昨日のは何だったんだろうねえ」学校の帰り道に少女が不思議そうに言った。

「……まあ、大学の友達にでも送ってもらったんだろう」少年はどうでもいいという風に言った。

「大学って由美ちゃん「小妻女子大学」だよ？それに幼稚園から大学まで女子高で、男の人とまともに話したのは、陽太くんが初めてだっ

て……………」

「…………合コンで知り合ったとか」

「少しは陽太くんの心の支えになるような想像しなよ。例えば……………」

「…………例えば？」

「大きな荷物を持っていったから、通りがかりの親切な人が車で送ってくれたとか……………」

「…………世間ではそれを「ナンパ」というのだ」

「まあ、でもああいうことはそうそうは……………」

「…………隠れる」少年が鋭く言った。

「今度は何さ」

角から顔をそっと出してみると、昨日と同じ車が店の前に止まっていただけでなく、運転手の背が高く、体格のいい青年が荷物を抱えて由美ちゃんと一緒に店に入っていた。

「ちよつ、ちよつと康太あれ」

「…………うむ、ただ事ではないな、あれは」

やがて2人ででてくると青年は由美ちゃんの頭をクシヤクシヤと撫でた。由美ちゃんも少し恥ずかしそうな嬉しそうな顔をしていた。

青年が車を出すと、しばらく店の前で微笑みながら手を振っていた。

「……………」

「……………」

「…………ねえ」

「…………やっぱり」

「内緒ということだ」「二人の息がピッタリと合った時に、背中の方でザサという音がした。」

「…………こつ、康太振り返って確認して」

「…………いや、とても嫌な予感があるのだ。お前確認しろ」

「…………やだよ。ボクの中のゴーストが見ちゃいけないって囁くんだよ」

「…………じゃ、二人で一緒に」

せえので振り返った時、地面に手と膝をついて力なく頭をうなだれ



ている陽太の姿がそこにあった。

「あれ、見なかったことにできないかな？」

「……ここまでガン見してるのにか？それより、俺たちが何とかしなかったら明日の朝まであの調子だぞ、きつと」

「それも困るね。とりあえず家まで連れて帰ろうか」

「……そうだな警察や救急車が来る前になんとかした方がいいだろう」

「で、家に連れてきたわけか」颯太が苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「ゼエゼエ……家まで、いつ一時間かかりました」汗を拭きながら少女が言った。

「それにしてもまた見事に落ち込むもんだな。見ろあの周囲の光をすべて吸収し尽くすブラックホールのような落ち込み方を。CERN《セルン》にポータブルブラックホールとして売りつければ一財産できるかもしれない」

「キョウマ、SERN《セルン》は、我が未来ガジェット研究所の敵デス」

「誰が狂真だ。あと、我が家に変な名前をつけるな」

「えー、じゃアンナちゃん。あたしは誰？」

「ヒナタは天才だから、マキセクリスですね」

「えー、あたし戦士だから阿万音鈴羽がいいな」

「それでもいいです」

「(貧相なヌードって言われていたから) 牧瀬紅莉栖は愛ちゃんね」

「何の話？」少女が不審げに尋ねた。

「ううん、なんでもないよ。それじゃ颯兄は体型からダルかな」

「なんの話をしているのだ、お前たちは？」

「アンナちゃんは、スタイルいいから桐生萌郁。ライダースーツきたらもう、たまりまへんなく状態だよ」

「お前ら、陽太のこの状態を前にして、よくそんなに楽しそうに遊べるな」颯太が呆れたような顔でいった。

陽太は四つん這い状態で頭を垂れてずっと固まったままであった。

## 第4話

「で、どうすりゃいいんだ、これ？」颯太が床で四つん這いに固まったままの陽太を見て言った。

「結果が出るマデ、このままでしようネ」アンナが可哀そうなものを見るような目でつぶやいた。

「結果？何の結果だ？」

「二ブいなあ颯兄。陽兄が由美ちゃんにフラれるか、捨てられるか、ダメになるかだよ」

「良い結果になる可能性を完全に排除しているね」愛子が言った。

「……今日のあれ見ちゃあなあ。兄貴なんて由美ちゃんの手を握ったことすらないはずだ」

「いくらなんでも大学生のカップルがそんな……」

「二はない」颯太、康太、陽向の三兄妹が揃って首を振った。

「キスならともかく、いくら何でも大学生が手も握れないって」

「土屋の血を舐めるな。そんなマネしたら3日は熱発する」康太が言うと、颯太と陽向が重々しく頷いた。

「大体、そんなことがあったらスキップで帰ってくるな」颯太が言った。

「その後、部屋で一人ワルツを2時間は踊るわね」陽向が続く。

「……疲れ果てて倒れているところを発見されて、ベットに寝かされて3日発熱という訳だ」兄妹全員が自信を持って断言した。

「で、今までそんなことはなかったのに、陽太は由美ちゃんの手を握ったことがないという結論に落ち着くのだよ、愛ちゃん」

「土屋の人間はエロっちいことをすれば熱発する」、「陽兄は由美ちゃんと付き合ってから熱発したことがない」、「故に陽兄は、由美ちゃんと手をつないだことがない」。教科書のお手本にしたいくらいに見事な三段論法だね」陽向が腕組みしてうんうんと頷きながら言った。

「そんなの教科書に載せたら日本中の土屋姓の人が大迷惑だよ。結局このままにしておくんですか」

「まさか由美ちゃんをバイト先から拉致って来て引導渡させるわけに

もいかんしなあ」

「あ、そう言えば・・・」愛子が思い出したように言った。

「・・・何かあるのか、愛子」

「今週のお茶会も由美ちゃん来れないって言ってたんだけど、昼までバイトでその後お買い物に行くからだって」

「だから？」颯太が首を捻りながら尋ねた。

「お買い物に行くんなら、あの赤い車の人と行くんじゃないかなあ？それを尾行してみるってのはどう？」

「なるほど、とりあえず相手が何者か調べるわけだな。よし、俺が車を出す。各人目立たない格好をして、うちに11時に集合だ」

日曜日の11時。集合した全員を前に颯太は頭を抱えていた。

「確かに俺は目立たない格好でと言った・・・だが、何で揃いも揃って黒装束なんだ」

「やっぱり目立たないって言ったたら黒かなあつと」愛子が答えた。

「それで康太と愛ちゃんは、ジャージなわけか」

「うん、黒の服って持ってないし、ちょうど学園の運動着が黒だからいいかなあつて」

「・・・同じく」

「あ、でもホラ。靴も黒にしたんだよ。エア・ジャーダンV。レア物だよ」

「わかった、わかった。行く場所によつては激しく浮く格好だな」

「颯兄、あたしはね・・・」

「陽太は黒のハイネットに黒のジャケット、黒のチノパンか。鬱の文学者みたいだな」

「そういう兄貴だつて黒のスーツにサングラスで、どこのMIBかと思うぞ」

「ねえねえ、あたしの格好はねえ」

「やかましい。極力無視してやってるのに無理やり割り込んでくるな。大体なんだその恰好は」

「なにをいうのさ、颯兄は？これが土屋家の正装だよ」

「戦国時代ならな。平成の時代に忍者装束で街歩いてたら人だからができるわ」

「伊賀じゃ市役所の制服だよ」

「……あそこがおかしいんだ」

「そのうち本当に伊賀から訴えられるよ」

「まあ、ここまではとりあえず全員黒だからフリーダムなお葬式の帰りと言えんこともないだろう」

「ただだけロッケンロールな人が死ねばここまでフリーダムな喪服のお葬式になるのか想像もつかないね」愛子が言った。

「問題はお前だ」颯太はアンナの前に立って言った。

「わたしデスか？」アンナは心外だという風に答えた。

「なんで不思議そうに確認するのかこっちが聞きたいわ。念のために聞くが、それは何のつもりだ？」

「目立たないタメのGRUフローラー迷彩服であります、サー」アンナは恥じることなど何もないと言った風情で答えた。

「アンナ、俺たちがこれから何をするのか理解しているか？」

「サー、ユミコの尾行であります、サー」

「それで、その迷彩服か」

「そうだよアンナちゃん。せめて砂漠《デザート》パターンじゃないと目立つよ」

「ちよつと黙っててくれ、陽向。そもそも迷彩服そのものを問題にしているんでな」

「デモ、これはパパからの大事なプレゼントですネ」アンナがちよつと不服そうに言った。

「プレゼントかよ。ただだけセンスないんだ、あの親父」

「ハイ、クリスマスにもらいまシタ」

「しかも、クリスマスプレゼント……」

「お願いがなくなって嬉しくて嬉しくて、それを着て街を歩き回りまシタ」

「お前のリクエストだったのか……」

「ワタシにとっての思い出のプレゼントであります」

「無理やり、いい話にまとめんな」

## 第5話

「だいたい何歳の時のプレゼントだから、その無駄にでかい胸のサイズにピッタリなんだ？」

「10歳からクリスマスプレゼントは迷彩服と決まってるまシタ。GR Uフローラー、VSR93迷彩服、KZK迷彩スーツ、シヨフィールド迷彩ジャケット、BEREZKA迷彩服・・・大切な宝物デス」

「どんだけ迷彩服フェチなんだ、お前は。女の子なんだから大人しく人形でもねだっている」

「勘違いしないでください。おねだりしたのは迷彩服だけじゃありません。ちゃんと別のものもおねだりしまシタ」

「ほほう、少しは女の子らしいプレゼントももらったわけだな？」

「AK47突撃銃をもらった時は嬉しくて3日は眠れませんでした」

「聞いた俺がバカだった。念のために聞くが、それはエアガンかモデルガンなんだろうな？」

「ロシアではエアガンの方が高いノデ実銃を・・・」

「わかったもういい。あの親父に何を言っても無駄だ」

「パパをバカにしないでください。ちゃんと「弾は危ないからダメ」と言ってくれませんかシタ」

「実銃をプレゼントした段階で「危ないから」なんて次元は飛び越えているんだ、バカもの」

あいかわらず全然かみ合わない二人の会話であった。

「頭が痛くなってきた。とりあえず全員車に乗れ」

運転席に颯太君、助手席にアンナちゃんと陽向ちゃん、後部座席にボクと康太と陽太君が乗り込んだ。

「颯兄、狭いんだけど・・・」

「アホ、四人乗りのカローラに六人乗ってんだガマンしろ」

「こっ康太、ヘンなところ触らないでよ」

「・・・人聞きの悪いこと言うな。押されるから仕方ないのだ」

「ええい、とりあえず出発するぞ」車はやかましく出発した。

「そっか、アンナちゃんにこうやって寄っかかればいいんだね」陽向が

身体をアンナに預けながら言った。

「でもこの後頭部に当たる感触がなんとも言えず・・・グフフフ」

「どこのエロ親父だ、お前は」颯太が少しイラついた様子で言った。

「いや、でも颯兄。アンナちゃんの胸って本当に気持ちいいんだよ。

こうやってパイナップインってすると低反発枕みたいで・・・」

「あつ、あのヒナタ。恥ずかしいので止めてください」

「ふふふ、よいではないか、よいではないか・・・」

「お前はどこの悪代官だ」

「・・・ねえ、康太」愛子がドスの効いた声で言った。

「・・・どっとうした。愛子さん」なぜか康太が脅えたように答える。

「なんでかな？ボク正体不明のやり場のない怒りが湧いてきてるんだけど」

「・・・そつ、そうか、それは困ったな。思春期のやるせない感情が暴走しているのだろう。それより陽太兄貴が静かだな」

「話をごまかそうとしてもダメだよ」

「・・・なんで俺のせいになっているのだ」

「じゃ、この怒りはどうすればいいのさ」

「・・・それは知らん。俺に分っているのは、今のお前ならマイク・タイソンでも倒せるということだけだ」

車の中は相変わらず大騒ぎだった。

やがて車は由美子がバイトしているケーキ屋「メイクイーン」の100m手前で止まった。

「ここなら、由美ちゃんにもバレないだろう。愛ちゃん、相手は赤い外車だったよな」

「そうです。ボク車詳しくないから外車ってことしか分らなかったけど」

「もうすぐ由美ちゃんのバイトが終わる時間だ。ここで待っていて、車に乗ったら追いかけてよう」

10分経過した。どこからか爆音のような音が近づいてきた。

「なっなんだ？ジェット機でも不時着するのか？」颯太が窓を開けて

空を見上げた時、赤い車が轟音を立てて颯太たちの横を通りぬけてメイクイーンの前には止まった。

「あ、あれです。あの車」

「あれって愛ちゃん、いくらなんでもあれは……………」

「どうしたんですか？」

「あれはフェラーリF40じゃないか。外車にもほどがある」

「凄いですか？」

「愛ちゃんにも分りやすく説明すると、あれ1台で東京に家を買える」

「あんな小さいのに台所やトイレやお風呂がついているようには見えないけど？」

「いや、キャンピングカーじゃないんだから。金額の話だ」

やがて由美子が店から出てきて慣れた様子でフェラーリに乗り込んだ。

「おい、随分遠慮なしだな。かなりの仲だとみた」颯太はそういうと後部座席の陽太をチラッとみた。陽太は由美子がフェラーリに乗り込んだ時点ですべての生命エネルギーを使い果たしたかのように崩れ落ちていた。

「どうするこれ、後をつけるか？」颯太が言った。

「何いつているんですか、颯太君。ここまできたら二人の関係を判明するまで徹底的に尾行ですよ尾行」なぜか愛子が張り切りつて言った。

「…………お前が張り切ってロクな結果になっただことがないんだが」  
「まあ、フェラーリを六人乗りのカローラでどこまで尾行できるかわからないが、やるだけやってみよう」

由美子を乗せて走りだしたフェラーリの後を颯太のカローラが追いかけた。



## 第6話

「……うん、下道を通るようだから、フェラーリと言えどこの車でも尾行できるな。ところであれの様子はどうか？」運転しながら颯太が聞いた。

「あれって、これのことですか？」愛子がダウンしている陽太の首根っこを捕まえて持ち上げた。

「そうだ。その『物体』のことだ」

「いやあ、もう魂全部抜けちゃってますね」

「ちっ、だらしねえな。彼女が他の男の車に乗ったくらいで」

「そんなコトいいますが、ソータだってワタシが他の男とデートしたら死ぬほどショック受けるでしょ」アンナが自信満々に言った。

「いや、むしろその男に遊園地の回数券をプレゼントしたいくらいだ。お前を引き取ってくれるならな」

「フッフ、ソータのそんな強がりもかわいいデスね」アンナが幸せそうに言った。

「お前のその根拠レスな自信がどこから湧いて来るのか、脳のCT取ってみたいわ」

「ヒナタ、こういうのをツンデレといいマス。日本の伝統文化デスね」「いいかげんに俺の話の聞くといか理解することを覚えろ、お前は」隊長、陽太君がピクともしていません」愛子が言った。

「とりあえず大人しくていい。錯乱してこの狭い車内で暴れられたら大ごとだ」

2台の車は距離を置かず走っている。

「おかしいな……」颯太が不思議そうに言った。

「どうしまシタ、ソータ」

「いや、デートなら普通は六本木とか渋谷とかの繁華街に向かうはずなんだが、この道はどうもあまりデートにはふさわしくないような場所に向かっている」

やがて由美子たちは駐車場に車を入れた。颯太たちも慌てて近くのコインパーキングに車を入れた。

「なあ、これ本当にデートなのか？」颯太が首を捻りながら言った。  
「なんでですか颯太君」愛子が訪ねた。

「だって、ここ合羽橋だぞ。飲食店用具の専門街でデートとは程遠い街だ」

「……それよりあれをしろ」康太が指差した。一同が二人を見ると、由美子が男性の腕手を回して腕を組んで歩きだした。

「いかん、陽向。陽太の脈を確認しろ。必要ならアトロピンを100単位投与だ」

「そんなの持つてるわけないじゃん。イモリの丸焼きの丸薬ならあるけど」

「どう考えても緊急用を持つべき薬じゃなくて、倦怠期の夫婦用の薬だぞそれは」

「大丈夫みたいです。さっきの魂抜けた状態からまだ回復していないようですから、腕を組んでいるところは見ていないと思います」

「とりあえず尾行するぞ」颯太が言った。  
「待つてくだサイ。尾行の時の注意事項があります」アンナが鋭い声で言った。

「いきなり何を言い出すんだお前は？」颯太が不思議そうに言った。

「はい、KGBという警備会社に勤めているアンドリアノフ小父さんから前に尾行のやり方を教わりまシタ」

「どうでもいいが、スペツナズだのKGBだの、ロクでもない一族だな、お前のところは。で、そのアンドリ何とか小父さんが何だって」

「アンドリアノフ小父さんデス。小父さんが言うには、尾行をする時は頭ではなくて肩を見ろとのことデシタ。後頭部を見つめていると視線で気付かれマス。また、途中で服装を変えられた時のために、靴を覚えておけと。服は変えても靴は変えられませんカラ」

「デートの時に尾行を想定して、いちいち服を変えたりするカップルがどこの世界にいるんだ？」

「あと、完全な尾行には車2台と人数が10人必要デスが、この人数ですカラ各人がしっかり見張ってくださいサイ」

「さすがKGBだ。かなり本格的だな」

「イエ、これは日本に来て読んだ『ミスターキートン』という漫画で知りまシタ」

「KGBのアンドリアノフ小父さんはどこ行った」

「警備会社だから、そんなに詳しくないんデス」

「どうでもいいが何でスペツナズとかKGBとか名称のところは素直に言ってるのに、どうでもいいところで誤魔化してるんだ、お前の一族は？」

「なんのことデスカ？」

「いや、もういい。とにかく追いかけるぞ」

「陽兄はどうすんのさ」

「康太、肩かして連れてこい」

「楽しそうに店を覗きながら歩いている由美子ちゃんたちの50m後方を一同は店に隠れながら付いて行った。

「由美ちゃん、楽しそうだね」愛子が寂しげに言った。

「そうなんだけど……これデートか？」颯太が首を捻って言った。

「これだから颯兄はダメなんだよ。女心が分かってないね。好きな人と一緒ならどこだってデートになるの」

「なんで一度もデートしたことがないお前にそこまで偉そうな顔して説教されなきゃならんのだ」

「なにさ。じゃ颯兄はデート経験あるの？」

「もちろんない」

「どうしてそこまでドヤ顔で言い切れるのかなあ？」

「なにをいいマスか、ソータ。ワタシたちの夕飯の買い物も立派なデートデス」

「ありや、お前が毎回尋常じゃない量の買い物するから単に荷物持ちで俺が連行されているだけだろうが」

「やがて二人は一軒の店に入っていた。遠くから看板を確認したら「伊藤調理用具店」と書いてあった。

「最近の女性には、調理用具が流行りなのかい、愛ちゃん？」

「いや、そりゃボクも料理は得意な方ですけど、別に家にあるもので十分ですけど」

「……前半は聞こえなかったことにして、兄貴、こいつに若い女性の流行りを聞いても無駄だ。立ち読みでファッション雑誌よりジャンプを選ぶ女だ」

仕方がないので2人が店から出てくるのを待つことにした。30分ほどして出てきたらこちらの方に向かって歩いてきたので、慌てて近くの食品サンプルの店に入ってやりすごした。

「なんか車に向かってるぞ」

荷物は男性が持つて、由美ちゃんは相変わらず男性の腕に手を組んでいる。

「よし、追うぞ」

「……兄貴、陽太兄貴が目を覚ました」

「最悪のタイミングで目を覚ましたな。陽向、ぶん殴ってもう一度気絶させてやれ」

「ええ、かわいそうだよ」

「普段は遠慮なくやっているだろうが」

「ううん、いやあ。何か寝てみたいで……えっ？あれは由美ちゃん」

「ああ、また陽太君がゾンビ状態に……」

「もうどうでもいいから引きずってこい」

僕たちは車に乗り込むとまた由美ちゃん達を追った。

「あれ、この道って……帰るみたいだぞ」

やがて赤い車はメイクイーンの前に止まり、由美ちゃんと荷物を降ろして去っていった。由美ちゃんは荷物を持ってメイクイーンに入っていった。

「どういうことだ、これは？デートじゃなかったのか」

「デート……なはずなんですけどねえ」

「まあ、陽太がこの様子じゃどのみちどうにもならん。俺たちも帰るか」

かくしてボクたちの尾行は何の成果もなく終わった。

## 第7話

「で、結局一日動き回って得られたのがあれだけか」颯太は顎でソファーに倒れこんでいる陽太を指した。

「……………結局、何もわからなかった」

「陽太君の液状化が激しくなったただけですネ」

「ユミコのデートを見学しただけでシタね」

「あれをデートと言っているのか本当に？」

「男女が一緒に出かければデートですネ」

「うむ、実にお前らしい大雑把な定義だ」

「でもさ、陽兄に勝ち目ないよね。相手は大金持ちだし」

「みんなが遠慮して口にするのをためらっていた事実を何のためらいもなくエグリ出すなお前は」

「だって、現実問題みんなはどう思うのさ」

「……………」一同の目が陽太に注がれた。

「こうなったらしようがない。俺たちにできることはただ一つだ」颯太が宣言するように言った。

「由美ちゃんに確かめるんですね？」愛子が言った。

「いや、暖かく見守ろう」

「結局、面倒くさくなっただんですね」

「なっ、何を言うんだ愛ちゃん。夫婦喧嘩は犬も喰わないというじゃないか。他人が口出しすると余計にコジれるんだよ」

「いや、そもそも夫婦じゃないし喧嘩じゃないし」

『遠き別れに耐えかねて、この高殿に登るかな』と昔の偉い人も言っていることだし」

「今の陽太君をあまり高い所に登らせない方がいいと思うんですけど……………」

「まあ、なるようになるさ。うん」

「そうだね、愛ちゃん。心配ないよ」

「ユミコが選ぶことデスね」

「……………そのうち立ち直る」

すでに1日にして飽きてしまった陽太救援隊であった。

「まつまあ、みんながそういうならいいんですけど、週末の陽太君の誕生会どうするんですか？」愛子が言った。陽太の誕生パーティーをするというのは、ずっと前から決まっていたことなのだけど・・・

「パーティーなあ。今の状況でやるのはどんなもんだろうか。第一、由美ちゃんが来なきや意味ないだろう」

「由美ちゃんは絶対に来ます。ボク信じてます」

「うーん、そうだな。少しは陽太が元気になるかも知れないな。よし、予定通りやろう」

「由美ちゃんがこれなかった場合でも、ボクが一生懸命料理作りますから」腕まくりせんばかりの勢いで愛子が言った。

「「えっ？」」土屋三兄弟の驚愕の声が響いた。

「いやいやいや、愛ちゃん。それは申し訳ないから、ピザでも取るよ」・・・無理するな、愛子。お前だけに働かせては申し訳ない

「愛ちゃん、僕のことには気にしなくていいからね」いつの間にかゾンビ状態の陽太まで復活して、必死で愛子の料理を止めていた。

「じゃ、ワタシもヨータのためにボルシチを作ります」アンナもノリノリで言った。

「「えっえっ」」

「ちよつと待てアンナ。誕生パーティーにボルシチは合わないだろう」

「・・・こんな時に出すのはもったいない」

「アンナちゃん、あれは愛する人にだけ食べさせるべきだと、前に・・・」

「大丈夫です。ヨータも私のボルシチで元気になってください」

「いいじゃん、兄たち。せっかく愛ちゃんとアンナちゃんが料理作ってくれるっていうんだから、っ」馳走になろうよ」陽向が能天気には言った。

「陽向、ちよつとこっちに来い」陽太が陽向を部屋の隅に有無をも言わず引きずって行った。

「なにすんのさ、颯兄」

「（お前は気軽に言ってるが、あの二人の料理の破壊力を知らんだ）」

「破壊力って、別に普通の料理でしょう。そりや多少まずいかもしれないけど、一生懸命作ってくれるんだから、それくらいはガマンしなよ)」

「(記憶が飛ぶんだよ・・・)」

「(はいっ？料理の話だよね)」

「(愛ちゃんが絶好調の時の料理は、記憶が飛ぶんだよ。もう、美味いとか不味いとかいう次元の話じゃないんだ)」

「(何か変な薬入れているとか・・・)」

「(いや、普通の食材に普通の調味料を使っている。それでなんである効果がでるのか不思議でしょうがない)」

「(すっスゴいね)」

「(しかもだ・・・)」

「(まっまだ、なにかあるの?)」

「(愛ちゃんの腕が向上、この場合向上と言っていいのかわからんが、するにつれて効果の持続時間も長くなっている。この間など、愛ちゃんが作った夕食を食べてたはずなのに、気がついたら翌日のライブの舞台上で歌っていた)」

「(そこまですると製品化できるんじゃないかなあ。でっでも、アンナちゃんのボルシチもあるし)」

「(ココアパウダーと味噌が隠し味のボルシチだ)」

「(・・・それはボルシチなの)」

「(・・・本人はそう言い張っている。一口目はいいんだが、二口目は飲み込むことを喉が全力で拒絶する)」

「(そっそれは、止めた方がいいかも知れないね)」

「(もう遅い。お前のせいで二人ともやる気になっている。いいか責任取れよ。残すことは許さんぞ)」

「(愛ちゃん、アンナちゃん。陽兄がこんな時だから簡単にデリバリーでいいんじゃないかな)」陽向は一応の抵抗を試みた。

「何をいうのさ、陽向ちゃん。こんな時だからボクたちの料理で元気つけてあげなきゃ」

「(そうデス、ヒナタ。愛をこめて一生懸命作りマスね)」

瞬殺された。

「いや、二人とも僕のためなんかには手間を取らせちゃ悪いよ」陽太が言った。

「何を言うんですか、陽太君。ボクこんなことくらいしかできないですし」

「そうね、ヨータ。ワタシたちの料理で元氣出してください」

「いやいや、いろいろあったし、今回のパーティはこじんまりと。何だったら中止してもいいくらいだから二人に迷惑はかけられないよ」

「大丈夫です。絶対に陽太君が元氣がでる料理を作ってみせます」

「ワタシの愛のボルシチでユミコの愛を取り戻してください」

一見、二人に氣を使っているようだが、何としても料理を辞めさせようと必死な陽太であった。

しかしながら土屋家関連の女性には土屋家の男どもの話を聞くという機能が装備されていないため、愛子もアンナも陽太の説得などハナっから聞いてはいなかった。

「……しかし、愛子とアンナが料理をすると言っただけで、ゾンビ状態の兄貴が瞬時に正氣にもどったな」

「T-Virus ワクチンなんかより、ずっと効果があるんじゃないかねえか？」

「……アンブレラ社からスカウトが来るかも知れん」

己が運命を悟りきった兄弟は、必死に氣を紛らわせていた。



## 第8話

翌日、ボクと康太はメイクイーンにバースデーケーキを注文するために立ち寄った。レジをしたのは偶然にも、由美ちゃんだった。

「あら、久しぶりね。二人とも」由美ちゃんは微笑んで言った。

「由美ちゃんこそお久しぶり。忙しいんですね」ボクが言った。

「え、ああ、そっそうね。忙しいと言えば忙しいんですけど・・・今日はどうしたの」なぜか由美ちゃんはウロたえた様子で言った。

「どうしたのって明後日の陽太君の誕生パーティーのケーキの注文にきたんですよ。忘れちゃったんですか?」

「いえ、忘れてる訳じゃないんですけど・・・そうね、時間がないのね」最後の方はブツブツ声になっていた。

「あつ、あの。由美ちゃん大丈夫?」

「えっ? あつ、ええ大丈夫よ。じゃバースデーケーキは私が持っていくわね」

「じゃ、お願いします」ボクたちはケーキを注文すると外に出た。

「由美ちゃん、やっぱり何かあるのかなあ? 時間がないとかいったけど・・・」

「・・・・・・・・兄貴とのことだろうか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なるようにしかならん。二人の問題だ」

ボクたちは無力感を感じながらトボトボと歩いた。

「うむ、今日と言う日を象徴するような素晴らしい天気だ」颯太がリビングの窓を開けて空を眺めながら言った。

「・・・・・・・・素晴らしい天気って、雷雨にでもなりそうに空が真っ暗なのだが」

「だからピッタリなのだ。陽太が振られる上にあの二人の料理でパーティだ。台風が突然出現していても驚かんとぞ、俺は」

「ピンポン」そこへ愛子がやって来た。

「やあ、愛ちゃんいらっしやい」

「えーっと、陽太君の様子とか聞きたいことはいろいろあるんですが、

とりあえずなんで陽向ちゃんが縛られて猿ぐつわカマされているんですか？」愛子はリビングの隅に転がされている陽向を指差して尋ねた。

「うむ、陽向に悪魔が憑りついたのだ」

「あつ、悪魔？」

「うむ、デートがあるから出かけるなどという神をも恐れぬ妄言を吐き散らして出かけようとしたのでな。一人だけ逃げようなん・・・いや、そんな妄想に憑りつかれた奴を放置できんのでな。兄弟総がかりで押さえつけて縛り上げたのだ」

「この家は一体なんの宗教を信じてるんですか？デートくらいで縛り上げられるなら、結婚したいとか言ったら火あぶりになりそうですね、その宗教」

「愛ちゃんも来たことだし縄を解いてやれ康太」颯太君が康太に言った。

「酷いよ、兄達。本当にデートだったらどうすんのさ」

「・・・つまりは嘘だったということだろう。お前が煽ったんだ、いい加減に諦めろ」

「・・・」

「ところでさつきから陽太君の声がしませんね。お部屋ですか？」

「いや、あいつならさつきからそこにいるぞ」颯太君が部屋のもう一方の片隅を指差したそこには、陽太君が暗い様子で体育座りをしていました」

「あつ、あれなんですか？」

「朝からあの調子だ。多分うちの屋根にはハゲタカが数十匹とまってるに違いない。うつとしいったらない」

「まあ、今日は由美ちゃんもくるから大丈夫ですよ。由美ちゃん成分が欠乏しているだけです」

「由美ちゃん成分でも由美チャンニウムでも何でもいいから、さつきと立ち直らんと悪霊がバスツアーでやってきそうであつたらん」

「じゃ、ボクはアンナちゃんと買い物に行つて来ます」そういうと少女は出て行つた。

しばらく様子を見て確実に外出したことを確認から颯太はみんなに声をかけた。

「おい、お前ら集まれ。陽太もいつまでも落ち込んでないで来い。今から命に関わることを話す」

命に関わると聞いて陽太も腰を上げた。

「これまで俺たちは無防備にあの二人の料理に立ち向かって完敗してきた。それがこんどは2人のコラボレートだ。武蔵と小次郎のユニットに百姓が立ち向かうようなもんだ。どんな惨状になるのか、想像もつかん」

「……だからといってもはやあの二人を止める手段はない」

「そこで俺はこの数日間、図書館に通って「薬物代謝学」の本を読み漁ってきた。あの2人の料理はある意味「毒劇物」だからな」

「愛ちゃんもアンナちゃんもすごい言われようだね」陽向が言った。

「おまえも一度喰えばわかる。正直なんで厚労省が規制しないのか疑問に思うぞ」陽太がボソつと言った。

「国の対応を待っているはこっちの命が危ない。自分の身は自分で守らなければ」

「……で結局、対応策はみつかったのか？」

「あった。こんなに勉強したのは生まれて初めてというくらいに勉強したかいがあった」

「もったいつけずにさっさといいなよ、颯兄」

「うむ、まあT1/2（薬物半減期）とかCmax（最高薬物濃度）とかいろいろあるんだが、ぶっちゃけてシンプルに言えば、薬物の効果は

$$E \text{ (Effect; 効果)} \parallel V \text{ (Volume; 量)} \times T \text{ (Time; 体内存在時間)}$$

で表わされる。つまり効果の強さは体内にある薬物の量がどれくらいの間体内にあるのかということだ」

「フムフム」

「Tは体内の事だから意志ではどうにもならん。そうするとEを少なくするにはどうすればいい？」

「そりゃあVの量を減らせばいいんだろうけど、食べずに残すのも2人に悪いじゃないの」陽向が言った。

「うむ、正解だ。だが俺はそれを解決する手段を発見した」

その時、チャイムの音に続いてドアが開き誰かが入ってくる音がした。

「おう、颯太。来てやったぞ」Atsushiが言った。

「まあ、陽太の誕生パーティーってのが気に入らないがな」とGuu。

「うまいもん喰わせてくれるんだって」Youも続く。

「俺はグルメだからな」Gonが言った。

「あたし達までお邪魔してご迷惑じゃないかしら」最後にYukiが言った。

「改めてご紹介しよう。Vの皆さんだ」颯太は兄弟たちに向かって得意げに言った。

自分が助かるためには仲間であつても地獄に引きずり込む兄の外道さに声も出ない3人であった。

## 第9話

「なんのことだ、颯太？Vつてのは」Atsushiが言いながら遠慮なくソファアーにドカッと腰を下ろした。あとの4人もそれぞれ腰掛けた。

「ん？まあ、たいしたことじゃない気にするな」そこでAtsushiは陽向に気がついた。

「ん、陽向じゃねえか、いつ帰って来たんだ？俺との勝負を途中で逃げ出して伊賀なんか転校しやがって、まだ勝負はついてねえぞ」

「99敗1分で勝負がついてないっていうんだったら、篤兄のいう勝負ってどうやったらつくのさ。もう、勝負するものがないよ」

「ふ、1分してるじゃないか。ここから俺の怒涛の100連勝が続くんだよ」

「言っておくけど、その1分は篤兄の本職のキーボードで勝負したんだからね」

「あれは審判がおかしいんだよ。フィーリングでは俺が勝っていたはずだ」

「プロが素人相手にフィーリングでしか勝てないって言う段階で負けだと思わないのかなあ？」陽向が呆れたように言った。

「ところで今日は何を喰わせてくれるんだ。わざわざ俺たちを呼びつけたんだ、ただの料理じゃないんだろうな」

「(確かにただの料理じゃない)」陽太は思った。

「ん、今日の料理か。そんじよそこらじゃ喰おうと思っても喰えない料理だ」

「(……保健所の許可が下りないからな)」と康太は思ったが、むろん口にはしなかった。

「随分、もったいつけるじゃないか。なに喰わせてくれるんだよ」

「うん、それを発表する前にだな、陽向」颯太は妹に目配せをした。

「分かっているよ。颯兄」陽向は玄関に向かうとガチャッと鍵をかけ、ドアチェーンまでかけて、両足を踏ん張って玄関前に立ちふさがった。

「なんであいつは鍵なんか掛けに行っただ？」Gonが尋ねた。

「ああ、このところ物騒だからな。ところで今日の料理だが……」

「二「フムフム」三」

「愛ちゃんとアンナの手作り料理だ」

「ガタンっ……」4人は無言で立ち上がると玄関に向かつてダッシュし、入り口で詰まった。

「邪魔だ、どきやがれ」

「うるせえ。お前は愛ちゃんの手料理をたらふくご馳走になつてろ」

「俺を通せ。デートの時間に遅れる」

「うちは厳しいから門限が6時なんだ。早く帰らないと爺やに怒られる」

「なんでいきなり見苦しい争いが起こっているのかしら？おまけに0.2秒で嘘だと分かるデタラメまで飛び出しているし」事情を知らないYukiが不思議そうに言った。

「ふ、愚かな連中だ」颯太は余裕の態でつぶやいた。

ようやくリビングを抜けた4人の前に玄関前に、陽向が片手で苦無《くない》をもて遊びながら立ちふさがっていた。

「兄たち、どこに行くのかな？パーティはまだ始まっていないよ」

「やつやあ、陽向君。お兄さんちよつと用事を思い出してね。申し訳ないけどそこを通してくれるかな」

「そうそう。デートの時間に遅れそうなんだ」

「門限が……」

「あら、そうなの。あたしも鬼じゃないからそういう事情なら通してあげないこともないんだけど、条件がひとつだけあるんだ」

「どつどんな条件かな？」

「あたしの屍を乗り越えて行ってね」陽向はニコつと笑っていった。

「バカ野郎、お前倒そうと思つたら米軍に救援要請ださなきやならねえじゃねえか」

「在日米軍だけじゃ勝てないし……」

「自衛隊を加えたらどうだ？」

「五分五分だな……」

「玄関先で会議も無粋ですわ、お兄様方。さつさとリビングにお戻りになって……さもないと」

「さつ、さもないとどうなるんだよ」

陽向は右手をさつと一閃すると、苦無がY o uの頭を掠めて柱に突き刺さった。

「最近、手が勝手に動くようになって、本当に危ないの。当たっちゃったらゴメンしてね」

「ゴメンしてね」って可愛く言われても許されることか」

「あれ、また右手がムズムズと……」

4 バカは慌ててリビングに戻った。

「一体、あんた達はよそ様の家に来るなり何を騒いでいるのよ」Y u k iが言った。

「命の危険が迫っているのに、大人しくできるか」G u uが憤慨したように言った。

「大げさねえ。そりや愛ちゃんはあまり料理は得意じゃないかも知れないけど」

「ありや料理じゃなくて錬金術の一種だ」A t s u s h iが言った。

「何を言ってるの、あんたは」

「この間のライブ以来、ずっと夢でライダー軍団と戦っているんだぞ、俺は」とG o n。

「まあ、まあ落ち着け諸君」颯太が一同に向かって言った。

「てめえ、颯太。俺たちをハメやがったな」Y o uが詰め寄る。

「何をいうんだ君たち。バンドといえば一心同体。喜びも悲しみも幾年月という言葉もあるじゃないかね」

「なんだったら、この瞬間にお前をクビにしてもいいんだぞ」A t s u s h iが叫んだ。

「ところで、諸君にいいニュースと悪いニュースがある。どっちを先に聞きたいかな？」悠々と颯太が言う。

「この期に及んでいいニュースなんてあるのか？じゃ、それから聞かせてみる」

「いいニュースか。それは、この間のライブで愛ちゃんが昼飯を作っ

てきてくれたが、実はあれは愛ちゃんの本当の実力じゃない」そういうと4人から安堵のため息が聞こえた。

「そうか、そうだよな。いくらなんでもあれはなあ」

「おにぎりだったから具材が悪かっただけか、ははは」

「いやあ、冷や汗かいたぜ」

「ん、じゃ悪いニユースってのは何だ？」

「悪いニユースか。聞きたいというのなら話すが、愛ちゃんの本当の実力はあれの数倍凄い」

「ガタンっ……」 4人は再び無言で立ち上がった。

「タンタンタンタンタン」 4人の足元に陽向の投げた苦無が突き刺さった。

「あくあ、また右腕が勝手に……」

4人は処刑をまつ死刑囚のようにソファアに腰掛けて大人しくなった。



## 第10話

「まあ、諸君そんなに気落ちすることはない。こんなこともあるかと・・・」颯太が得意げに言った。

「こんなこともあるのかとじゃねえ。こうなることを見越して俺たちを呼びつけたんだろうが、お前は」Atsushiが叫ぶ。

「まあ、落ち着け。愛ちゃんの料理に対抗する言わば防具《アーマー》をちゃんと用意してある」

「本当か。お前にしちや手回しがいいじゃないか」Gonが疑わしげに言った。

「ふっ、伊達にリーダーをやっちゃあいけないぜ」

「お前がリーダーなのは、ジャンケンに負けたからだろうが。みんな面倒くさがってリーダーをしたがらないから」とYou。

「そういうこともあったかもしれないな。だがリーダーとしてちゃんと対抗策を考えてあるんだ」

「今一つ信用できんが、聞くだけは聞いてみようか。対抗策ってなんだ？」とGouが尋ねた。

「ふふふ、それはこれだ」というと、颯太は持っていた紙箱を高々と掲げた。

「何だそれは？」

「整腸胃腸薬ポンシロンだ。ほれ」と言ってみんなに配った。

「なるほど、あらかじめ胃腸薬を服用して、愛ちゃんの料理に備えるわけか」Youが薬の袋を眺めながらツブやいた。

「それにしても、これでどれくらい効果があるんだ？」Gonが疑わしげに尋ねた。

「お前たちにも分かりやすく言うのだな。ドラゴンクエストで装備が「きのぼう」と「ぬののふく」の状態で竜王の部屋に放り込まれた程度の効果が・・・グワツ」四方向から薬の袋が顔に投げつけられた。

「バカ野郎、そりゃ効果がないって言うんだ」

「気は心という言葉を知らんのか、お前らは」

「いくら何でも一撃で100pt以上のダメージを与える敵ボスに対

して、防御力1の「ぬののふく」の効果を気力で補えるか」

「ピンポーン」その時、玄関のチャイムが鳴った。

「あつ、きつと愛ちゃん達が買い物から帰ってきたんだ」と陽向が玄関に向かった。

「ただいま。どうしたのカギなんてかけちゃって」

「へへっ、ちよつといろいろあつてね」陽向が笑ってごまかした。

「タクサン靴があるけど、お客さんデスカ？」アンナが言った。

「えっ、お客さん？……まさかあの連中が」そう言った愛子の顔が険しくなった。どうやら玄関に並んだ靴だけで誰がやってきたのか理解したようだ。

荷物を持ってリビングに顔を出すと、想像どおりこの世で一番顔を合わせたくない連中が勢ぞろいしていた。

「よお、愛ちゃん。久しぶり」Atsushiが上機嫌で声をかけてきた。

「本当に久しぶりですね。もっと会わなくても全然構わなかったんですけど」自分で不機嫌になっていくのが分る。

「ハハハ、愛ちゃんの冗談は相変わらず面白いなあ」Gonが言った。自分の頭に血が上る音が聞こえた気がする。

「……本気なんですけど。ところで皆さんは今日は何しにいらっしやっただんですか？」

「ん、陽太の誕生パーティーをすると聞いてな。わざわざ来てやったんだ」Youが言った。

「あ、そうですか。それじゃパーティーは7時からなんで、帰りのタクシーは6時半に迎えに来てもらうように予約しとけばいいですかね」「愛ちゃんは相変わらず気が利くなあ」とGu。

「バカねえ、会って10秒で帰れって言われてるのよ」Yukiが呆れたように言った。

「むっ、そうだったのか。こうなりや意地でも陽太の誕生日を祝つてやる」Atsushiが憤慨したように言った。

「無理しなくていいんですよ。皆さんお忙しいでしょうし」愛子が冷たく答える。

「なにを言うんだ、愛ちゃん。陽太と康太はガキの頃からの付き合いで、俺たちにとつちや実の弟のようなもんだ。俺たちが祝わなくてどうする」Y o uが言う。

「迷惑しか被らなかつたって言ってますけど。じゃ、どうあつても皆さんパーティーに参加するんですね」

「おう」

「もちろん」

「当然」

「いわば義務だな」

四人が大きく頷いた。

「はあ、これじゃ材料足りないよ。買いに行く時間もないし」愛子がため息ついた。

「ああ、愛ちゃん。量は半分ずつでもいいんじゃないかな。気持ちの問題だよ」計画通りになることが運び、颯太は上機嫌で言った。

「そうですね。何とかなりそうです」愛子が考えながら答えた。

「ところで愛ちゃん。今日は何を食べさせてくれるのかしら」Y u k iが尋ねた。

「和風シーフードカレーです」愛子が自信満々に答えた。

「……愛子、シーフードカレーっていうと、いつものあれか？」康太が恐る恐る尋ねた。

「そうだよ。今回はより和風にしてみようかな」と

「……かなつとって、今まで作ったことはあるんだろうな」

「ううんないよ。いわば実験作だね」愛子が胸をはって答えた。

「……そういう実験は、できれば自宅でやって欲しいのだが」

「なんだ康太。シーフードカレーいいじゃないか」

「しかも新作を彼氏に最初に食べてもらいたいなんて、健気じゃないか」

「まあ、カレーだったら大した失敗もないだろう」

「とにかく腹減った早く食わしてくれ」

よもやシーフードが干物の事だと思いきもない連中が騒ぐ。

一方、土屋兄弟はゲンナリしていた。

「じゃ、ボク料理してきます」愛子とアンナが台所に消えた。

Yukiが四人を冷たい目でジーツと見ていた。

「なんだYukiその目は」Guuが言った。

「あんた達との付き合いも長いけど、やっぱり清々しいほどのバカだと思つて」Yukiが答えた。

「なんで俺たちがバカなんだ？」Gonが言った。

「せっかく愛ちゃんが逃がしてくれる道を作ってくれたのに、自分から残つて料理が楽しみつてことにしたことどころがバカじゃないのよ」

「しつ、しまった。気がつかなかつた。つい、愛ちゃんに對抗してしまった。おーい、愛ちゃん、やっぱりタクシーは6時半でたのむ」Atsushiが台所に向かって叫んだ。

「今、忙しいから自分で呼んでくださーい」冷たい返事が返ってきた。

## 第11話

「こうなりや仕方ない。俺は腹をくくったぞ」Gonが言った。

「いい心がけだ。ちなみにお前たちに土屋家家訓を教えておこう。この家にいる以上、お前たちにも適用されるからな」颯太が言った。

「そんな大層なものがあるのか」Youが言う。

「まあ、颯太のところは伊賀忍者の頭領の家系だからな。家訓の一つや二つあるだろう。だけどそれが俺たちに何か関係があるのか？」Atsushiが言った。

「大ありだ。土屋家家訓第一条「愛ちゃんを泣かしてはいけない」  
「伊賀忍者関係ねえじゃねえか。おまけに随分新しい家訓だなそれ」  
Guuが不平を言う。

「土屋家はフレキシブルなのだ。だから愛ちゃんが作った料理は、どんなものでも美味しそうに全部食べることだ」どんなものでもの部分にアクセントを置いて颯太が言った。

「それを破るとどうなるんだ？」Atsushiが尋ねる。

「うちのババア経由でお母様会の懲罰委員会の議題にあがる。まず有罪は逃れられん」

「ひでえシステムだな。俺たちには言論の自由はないのか」とGon。  
「俺も同じことをうちのババアに聞いたことがある」颯太が言った。

「そうしたらどうした」

「「あー、もちろん言論の自由はあるわよ。言論の後の自由がないだけで」と涼しい顔で言われた」

「お前の家は旧ソ連か」Guuがつぶやいた。

「ちなみに家訓第二条は「アンナがボケたらツツコまなければならぬ」だ」

「家訓にする意味があるのかそれは？」

「第二十条まであるが、聞きたいか？」

「ロクでもない家訓のような気がするからいらん」Youが答えた。

「颯兄、あたし愛ちゃんたちを手伝ってくるよ」

「お頼むぞ、陽向。あいつらがあまりにも常識を逸脱しそうだった

ら、それとなく止めてくれ」

「それは全く自信がないなあ」陽向は台所へと向かった。

「愛ちゃん、お手伝いにきたよ」

「あつ、陽向ちゃんありがとう。じゃ、そこにある野菜を洗ってくれるかな」

「うん……えっと、愛ちゃん。野菜どこ？」

「そこの流しに出ているよ」

「流しに出ているって、これ……大根、長ねぎ、ゴボウだよ。今日はカレーじゃなかったっけ？」

「うん、シーフード和風カレー。ジャガイモの代わりに大根。冬は大根が美味しいからね。玉ネギの代わりにネギ繋がりで長ネギ。あとニンジンの代わりに歯ごたえが似ているゴボウを使おうかと思って」愛子は自信満々で言った。

「……」

「それを洗って切ってくれるかな」

「……わっ分かったよ、頑張る」陽向は動揺した様子で言った。

「洗ったよ。愛ちゃん」陽向は言い知れぬ疲労を感じながら言った。

「じゃ、大根は3cm位に輪切りにしてから、四つ切にして。それから角を落として丸めてジャガイモに似せて。長ネギは2cmくらいに切って、ゴボウは斜め切りでお願いね」

「愛ちゃん、魚は切らなくていいの？」

「うん、今焼いてるから、その後切るよ」

「……焼いてる？」

「干物だもの焼かないと食べれないよ、陽向ちゃん」

「シッ、シーフードだよね？……」

「やだなあ、干物って魚だよ」愛子は何を言うのかとばかりに笑い飛ばした。

「……」陽向は黙々と作業に戻った。

陽向は切り終わった野菜を愛子に渡すと、アンナの方に目を向けた。アンナは先ほどからわき目も振らずにまな板の上で包丁で何かを切り刻んでいた。

「アンナちゃんは、さつきから何をやっているのかな?」

「おうヒナタ。ワタシのボルシチはママのレシピです。ですがそこからワタシのアイデアを加えないと、ワタシとソータの家庭の味とはいえません。伝統と革新デス。愛子を見て教えられまシタ」

「それはわかったけど何やってるの?」

「ナットーをきぎんでます」

「……なっ納豆?」

「はいナットーは美味しいですネ」実はアンナは大の納豆好きで、他の兄弟がパンを朝食にしても、頑なに「ご飯、味噌汁、納豆、生卵、海苔」の朝ご飯を欠かさないのだ。

「まっまさか納豆をボルシチに……」

「ハイ。「美味しいボルシチ×美味しいナットー」もつと美味しいボルシチ」になりますネ」

「……そっか、がっ頑張つてね。じゃ、もう手伝うとこなさそうだから、あたしは戻るね」陽向は逃げるようにして台所から飛び出した。

「おう陽向、どうだった」颯太が尋ねた。

「颯兄、さつきのボンシロンちようだい」それには答えず陽向が言った。

「何だ、どうした」

「ぬののふく」でも「鰯の頭」でもないよりはいい気がするの「そういうと陽向はボンシロンを一気に飲み干した。

「いいかげんに何があったのか話せ」颯太がイライラと言った。

「聞かないほうがいいと思うけど、どうしても聞きたいなら話すよ」

「なんでたかが誕生パーティの料理が、こんなスリリングな展開になってるんだ?」Atsushiがツブやいた。

「まず、カレーに入っている野菜が、大根、長ネギ、ゴボウです」陽向が宣言するように言った。

「すげえな。カレーと呼べる要素がカレールーしかねえぞ。ルーがなければ筑前煮だ」Gonが感心したように言った。

「次にシーフードカレーのシーフードとは干物のことです」

「干物をシーフードの範疇に入れるのは、愛ちゃんぐらいだな。間違っているような間違っていないような……」Guuが考え込んだ。

「まつまあ、アンナちゃんのボルシチがある」気力を奮い立たせるようにYouが言った。

「愛ちゃんにインスパイアされたアンナちゃんが、颯兄との家庭のため新しい味に挑戦しました」

「あのバカ娘、俺のいう事は一つもきかなくせに何を見習ってやがる」颯太が悔しそうに言った。

「納豆大好きアンナちゃんが、ママのレシピに納豆を加えました」

「」「」「……」「」「」「」

しばらく押し黙っていた一同は、次の瞬間ポンシロンに一齐に飛びついた。





能してください」颯太がない頭をかき集めて考えたVを増やして一人当たりの摂取量を減らすという作戦も、いたずらに犠牲者を増やしただけに過ぎなかった。

「それじゃ運んできますね」愛子はごく機嫌な様子で台所に消えていった。

「ブンチャ、ブンチャ、ブンチャ、ブンチャ」とボクは低い声でどこかで聞いた覚えのある曲を口ずさみながらお盆にカレーの入った皿を載せてリビングへと運んだ。

「愛ちゃん、今口ずさんでいる曲なんだか知ってる？」Yukiがやや青ざめながら尋ねた。

「ううん、シヨパンじゃないことは知っている。荘厳でいい曲でしょう」ボクは胸を張って言った。

「モーツアルト作曲、K《ケツヘル》626番、二短調よ」

「へえ、Yukiさん物知りですねえ。で、それがなにか？」ボクは感心していった。

「一般的にはレクイエム《葬送曲》って言われているわ」

後方から「もうダメだあ」という泣き声が聞こえてきたような気がするのは、なぜだろう？連中のことだからあまり大した意味はないだろう、気にしないでおくことにした。

「へえ、不吉な題名ですね。荘厳な曲だから合うかなって思ったんですけど」

「この連中の様子を見ているとこの上なく最適な選択と言ってもいいかも知れないわね」Yukiは周囲を見渡していった。

「それじゃ配りますね」周囲の空気を全く気にすることなくボクはカレーをテーブルに置いていった。

「禍々しい色のカレーだな……」颯太が言った。

「……カレーの匂いがしなかったら、誰もカレーとは思わん」康太が言った。

「地味というかなんと言うか色合いがないな……」陽太も言った。「この上に載ってるのが干物だね。凄い存在感だなあ」陽向がツブやく。

「和風シーフードカレーだからね」ボクは答えた。

「愛ちゃん、この一面に散らばっている豆みたいなものは小豆？」Att  
sush iが尋ねる。

「ううん、隠し味のコーヒーだよ」

「全然、隠れていねえじゃねえか」Gonが言った。

「なんでそんなものを・・・」Youが絶句した。

「みんなは料理しないから知らないかも知れないけど、カレーの隠し味としてコーヒーを入れたり、コーラを入れたりするんだよ」ボクは馬鹿な四人組に解説してやった。

「たっ確かにカレーにコーヒーを入れることはあるけど、あれは丸ごと  
のコーヒー豆じゃないと思うんだけど・・・」Yukiが唾然  
としてツブやく。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」なぜか食卓が  
さつきよりも静まり返ってしまった。

「どっとうしたのかな、みんな？せつかくの陽太君の誕生日なんだか  
ら景気良くやろうよ」

「そっそうだな。パーつとやるぞ、お前ら」

「おっおう。誕生日だしな」

「ここで祝わなきゃどこで祝うってんだ」

「そっだそうだ、一思いに殺しやがれ」

なんでこの連中はヤケクソになっているんだろう？不思議に思っ  
ているところにアンナちゃんがボルシチを運んできた。

「そうだ、俺達にはまだボルシチが・・・あつ・・・た・・・」と  
Att sush i。

「ボルシチボルシ・・・ち・・・ボルシチってこんな色だったか？」  
とGon

「色、なに言ってんだお前。そんな些細な問題より表面に浮かんでい  
るあれってもしかして納豆じゃねえか？」Guuが指摘する。

「なっ納豆が熱せられて匂いが倍増してる・・・俺納豆食えないのに」  
Youが泣きを入れる。

「イツパイ作りましたカラ、たくさん食べてくだサイ」アンナちゃんが

邪心のない笑顔で答える。

「(ここに)に至らばしようがない。みな覚悟を決めて食事を頂こう。その前に食前のお祈りを……」颯太が言った。

「(この家いつからそんなことやるようになったのさ)」愛子が康太に尋ねた。

「(……たぶんカレーがテーブルに並んだ瞬間からだろう)」康太が答えた。

颯太が立って手を組んで頭をたれてお祈りを始めた。

「天主にまします御身を我ら称え、主にまします御身を讃美し奉る。永遠の御父よ、全地は御身を拝みまつる。全ての御使いら、天つ御国の民、万の力ある者、ケルビムも、セラフイムも、絶間なく声高らかに御身がほぎ歌を歌いまつる」

「アーメン。さあ、食べよう」愛子がスプーンを握った。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の天主、天も地も、御身の栄えと御霊威とに充ち満てりと。誉れに輝く使徒の群れ、褒めたとすべき預言者の集まり、潔き殉教者の一軍、みな諸共に御身を称え、全地に遍き聖会は、御身、限りなき御いつの聖父を、いと高き御身が真の御独り子と、また慰め主なる聖霊と、共に讃美し奉る」一段と大きな声で颯太がお祈りを唱えた。

「アーメン。ずいぶん長いお祈りだね。さあ、食べよう」愛子が言った。

「御身、栄えの大君なるキリストよ、御身こそは、聖父の永久の聖子、世を救うために人とならんとて、処女の胎をもいとわせ給わず、死の棘に打ち勝ち、信ずる者のために天国を開き給えり。御身こそは、御父の御栄えのうちに、天主の右に坐し、裁き主として来りますと信ぜられ給う。願わくは、尊き御血もてあがない給いし……」

「ちよつちよつと待つて下さい。そのお祈りあとどれくらい続くんですか?」

「うん?普通にやれば30分くらいで終わるが」颯太が言った。

「いいかげんにしてください。日々の糧を感謝しますアーメン。はい、これで終わりです。さあ食べましょう」

愛子が強引にお祈りを打ち切った。

「・・・ずーつとブツブツ言ってたのは、これを覚えてたのか」康太がボソつとツブやいた。

## 第13話

「ぐおおお、最後の手段の神頼みがああ〜」颯太が慟哭した。「もうダメだあ、俺たちはこの小汚い家で死ぬんだ」と全員が喚き出した。

「いったいあんた達はさつきからなにを騒いでいるのよ」Yukiが言った。

「小汚いは余計だ。やい、Yuki。俺たちに取ってはキリストの奇跡だけが希望だったんだぞ」

「また、随分大掛かりな話になったけど、一体何の話よ」

「いいか、イエス・キリストは水をワインに変え、石をパンに変えるという秘蹟を見せたんだ。それに比べりや愛ちゃんのカレーを食べ物に変えることくらい朝飯前だろうが。それを願って食前の祈りに最後の望みをかけてたんだ」颯太が言った。

「さりげなく愛ちゃんのカレーを食べ物の範疇から外しているわね、あんたは。じゃ愛ちゃんのカレーは一体何なのよ」

「名伏せ難くして禍々しき、冒瀆的かつ病的な混沌とした何かだ」

「クトゥール神話まで持ち出さないと表現できないものなのね」

「SAN値が一発で0だ」

「下げんでいいわよ、そんなの」

「ふふふ、お前が余裕を見せていられるのも今のうちだけだ。愛ちゃんのカレーの恐ろしさは食べてみればわかる。スカウターで見れば戦闘力はOver 9000だ」

「スーパーサイヤ人レベルね。じゃ、アンナちゃんの料理はどうなのよ」

「アンナはまだそれほどではない。愛ちゃんの料理を濃硫酸とすれば、アンナの料理は濃硝酸くらいだ」

「一緒にしたら王水ができるじゃないの」

「なんでも溶かせるな」陽太が言った。

「……想像以上の危険物だったわけだな」

それを聞いていた四馬鹿が言った。

「愛ちゃん、今まで隠してたけど実はおれはイスラム教徒で今断食中なんだ」Atsushiが言った。

「断食《ラマダーン》って日中だけで夜はたっぷり食べていいんですよ。イスラム教徒の癖にそんなことも知らないんですか？」愛子は冷たい目をして言った。

「じゃ、今から食前のお祈りを……」

「却下です」

「愛ちゃん、俺はゾロアスター教徒で……」Gonが言った。

「うるさくいい、却下、却下、却下……ゼエゼエ」

「兄たち、往生際悪すぎ」陽向が呆れた様子で言った。

その時、家の外から「ブルルルルルルルウ」という爆音が近づいてきた。

「なっなんだ」

「ジェット機でも落ちてきたんじゃないか？」

「というか、この家に近づいてきてないか？」

「しめた、いや危ないからすぐに避難しよう」

四馬鹿が大騒ぎをしていた。

「颯兄、この音って……」陽向が颯太に向かって言った。

「この音、聞いたことありますね」愛子も言った。

「ああ、間違いない。フェラーリの音だ」颯太がさういふと、みんなの視線が一斉に陽太に集まった。

陽太は床の一点を見つめて何かを決意したような顔をしていた。

爆音は土屋家の前まで来ると急に止んだ。

そして運命のチャイムが鳴った。「ピンポーン」

「ごくり」全員が唾を飲んだ。意味は分かかってないが付き合いで唾を飲む四馬鹿。

「陽向君、出たまえ」颯太が言う。

「えくなんて、あたしが？」抗議する陽向。

「陽太を出すわけにはいかんだろう。とつとつ行ってこい」と無理やり押し出した。

「はくい」と言つて陽向は仕方なくドアを開けた。そこにはケーキの

箱を持った由美子とスーツを着た大柄な男性が立っていた。

「やつ、やあ由美ちゃん。遅かったね。もうみんな来てるよ。ちよつ、ちよつと待ってて」強張った声で陽向はそう言うと、リビングに駆け戻った。

「大変、大変。由美ちゃんが新しい彼氏連れて、陽兄に引導渡しに来たよ」と告げた。陽太の顔が青ざめた。

「ダメだよ、陽向ちゃん。こういうデリケートな話題の時は言葉を選ばないと」愛子が言った。

「え、じゃあどう言えばいいのさ、愛ちゃん」

「そうだなあ、例えば「由美ちゃんが陽太君に新しい彼氏を紹介しに来た」とか」陽太の顔がさらに青ざめた。

「本質的に変わりたくない？」

「俺が出る」陽太が言った。

「おい、大丈夫か、陽太」颯太が言った。

「大丈夫。最後ぐらいカッコよく決めてみせるさ」

「なんかいいセリフみたいですけど、すでに諦めてるってことですよね、あれ」愛子が言った。

陽太が玄関に向かった。

「遅くなってごめんなさい、陽太君」

「由美ちゃん！」

「はっ、はい」陽太の勢いに押されて由美子が返事をした。

「君と一緒にいれて今まで楽しかったよ」

「いきなりどうしたの？」

「君は僕には過ぎた女性だった」

「そんなことはないと思うけど・・・」

「だからこんな日がくるかも知れないと心のどこかで思っていた」

「ごめんなさい。ちよつと話が見えないんだけど・・・」

「僕はいつも君の幸せを願っている」

「それはとてもありがたいんだけど・・・」

「だから君がその男性を選ぶというのなら・・・」

「男性？あら、ごめんなさい。紹介するのを忘れてたわ。こちらは兄



です」

「そう、君が僕よりお兄さんの方がいいと言うのなら……僕は喜んで……」

「初めまして。いつも由美子がお世話になってます。兄の三宮龍一郎です」大柄な男性が爽やかに微笑んだ。

「お兄さんと言うと同じ両親を親に持つ年上の男性？」

「ずいぶん回りくどい言い方だけど、その通りね」

「由美ちゃんのお兄さん？」

「他人の兄を紹介してどうするのよ」

「つまり、お兄さん？」

「そう、兄の龍一郎」

陽太の力がへなへなと抜けて床に座り込んだ。

## 第14話

「という訳で改めて紹介します。私の兄の三宮龍一郎です」由美ちゃんと言った。

「どうも初めまして三宮龍一郎です。由美子の彼氏に一度挨拶したいと思ってたんです。なにしろ僕の後輩ですから」

「え、後輩ってじゃ龍一郎さんもT大だったんですか？」愛子が言った。

「そうです。もともと僕は文Iでしたけど。その後、ハーバードのビジネススクールを出て今の会社に入りました。と言ってもそれだけじゃないんです」

「という他にも何か」

「僕も男声合唱をやってたんですよ。サークルの先輩でもあるわけですよ」

「えっ」今度は陽太が驚いた。

「指揮は今でもハゲヒゲかい？」

「そうです。しよっちゆう多田武彦を歌わされてます」

「ははは、多田武彦マニアは相変わらずだなあ。僕たちは「柳川」と「富士」だったけど、陽太君たちは何を歌ってるんだい」

「僕たちは「父のゐる庭」です」

「ああ、「紀の国」は名曲だよね」

陽太君は龍一郎さんが先輩ということですからすっかり緊張も解けたようだ。

「Yuki……」颯太君がYukiさんに声をかけた。

Yukiさんは、龍一郎さんを見ながら、何か考え込んでいる様子だ。

「おい、Yukiどうした。大丈夫か？」こんどはAtsushi君が声をかけた。

「えっ、ああ大丈夫よ。ちよっと考え事してたの。あの、龍一郎さん。失礼ですけど姓が三宮ということでしたけど、三宮グループと何かご関係があるのかしら？」とYukiさんが言った。

三宮グループならボクも知ってる財閥グループだ。銀行から商社、電機、造船、流通、サービス業に至るまでカバーしている。三井や三菱などの三大財閥には及ばないものの中堅財閥といった位置づけのグループだったはずだ。

「ははは、よく分かりましたね。まあ、昔風に言えば本家の若旦那、総領の甚六つてところです」龍一郎が隠すでもなく自慢するでもなく嫌味なく答えた。こういうところが育ちの良さなんだろう。

「やっぱり、そうでしたか。いつも祖父がお世話になっております」Yukiが膝を正して頭を下げた。

「え、お祖父さんをお世話つていいですよと、あなたは？」

「自己紹介が遅れました。私、結城紘一の孫の結城香と申します」

「えっ、結城のお殿様の……」龍一郎は慌てて膝を正して頭を下げようとしたのをYukiが押しとどめた。

「いえ、私はもう結城の家を勘当になっていきますから関係はありませんので、どうぞそのままです」

「(なんか話が随分大きくなってるぞ……)」

「(何だ結城の殿様つてのは?)」

「(Yukiのところの祖父つてAtsushiが庭の池で鯉釣つてたら、日本刀振り回して追いかけて回したジジイのことだろう?)」

「(Yukiん家に遊びに行く度に一列に正座させられて、中国戦線で戦友おぶつて敵中突破30kmの話を毎回聞かせやがった、あのジジイか?)」

「(あの話、今考えたら年齢があわねえんだよな)」

「(あのジジイ確か、国会議員で何とか大臣やってたつて聞いたぞ)」

「(あの血の気が多いジジイがか?国会開くたびに流血騒ぎ起こしてたんじゃねえか?あのジジイ)」

「なあ、おいYuki」颯太が耐えかねたように言った。

「なによ」

「その、結城の殿様つてのは何のこった?」

「ああ、あたしの先祖は紀伊辺りに所領のある大名だったの」

「」「なつにいく」「」五馬鹿に取つても初耳だったらしい。

「その出入り商人が、三宮さんのご先祖様で、確か備前屋とかいったかしら。で、どういう訳か家の歴代の当主と備前屋の当主が妙に気が合ってまあ幕末まで仲良くやっていたって言う話よ」

「いや、それだけじゃないですよ。明暦の大火で全財産失くしたうちの先祖に、結城の殿様が十万両を無利子無期限でポンつと貸してくれた、それでうちは立ち直ったそうですから」

「でも明治維新で殿様止めて医者になった曾々祖父の学費、留学資金から開業の費用まで三宮さんが出して下さったって聞いてるわ」

「そんなことなんでもないことです。家の家訓の第一は「結城家にこことあらば全力をあげてこれに助力せよ。三宮家がツブれても構わん」ですから」

「まあ、三宮家のお蔭でうちもソコソコやれているし、今は祖父の選挙の時に応援を頼むくらいの付き合いなんだけどね」

「それくらいのお手伝いしかできないのが、齒がゆいです。これでは先祖に顔向けが・・・」

「「「「ははあく」「「「「一同はいきなり始まった日本史レベルの話に圧倒されるばかりであった。」

「あれっ、ちよつと待って。それじゃ由美ちゃんはお嬢様ってこと?」陽向がそういうと一同の目が一齐に由美子に集中した。

「えっえ、いえ全然お嬢さまなんかじゃありませんよ、私。うちはもう本当に一般家庭で・・・」

「別荘4つも持つてる一般家庭はないよ、由美ちゃん」愛子が言った。「・・・一般家庭の兄はフェラーリなんか持つてない」康太も追い打ちをかける。

「そりゃあ実家はお金があるかもしれないけど、私はバイトでお小遣いを稼いでいるただの大学生です」由美子が言った。

「え、由美ちゃん。家からお小遣いをもらってないの?」

「ははは、我が家の方針でお金を稼ぐ大変さを身を持って知るために、大学生になったら小遣いはないですよ」とお兄さんが愉快そうに笑った。

「そうかあ、ボクお嬢様って月100万位のお小遣いをもらって、学校

の行き帰りはボディガード付きの黒塗りの車で送ってもらおうと思ってたよ」

「愛ちゃん、ライトノベルじゃあるまいし、現実にそんな人いるわけないじゃない」

「ぐにゃ」

「なんだおい、一瞬空間がゆがまなかったか？」 颯太が言った。

「……アイデンティティ・クライシスが起きたのだ。これ以上この話題に触れない方がいい」 康太が警戒するように言った。

## 第15話

「すいません、お待たせしました。せっかくだから食べて行ってください」愛子とアンナがそれぞれの料理を運んできた。一同に緊張が走った。

「おい、金持ちのボンボンにあれ喰わせるつもりだぞ」

「恐れをしないとか何とかいうか」

「一口でシヨック死するんじゃないかねえか」

「止めた方がいいんじゃないか、颯太」

「そうだな。愛ちゃん、お二人はお腹が一杯なんじゃないかな」

「いやあ、昼から何も食べてなくてお腹が空いていたところなんですよ」龍一郎が身も蓋もないことを言う。

「……いや、我々庶民の食事は口に合わないんじゃないかな。台所にカップ麺があったからそれでもお出ししたら」

「ボクのカレーはカップ麺以下なんですか？」愛子が冷たい目で見る。

「ははは、何を言うんだ愛ちゃん。愛ちゃんのカレーはマニア向けとどうか罰ゲーム向けとどうか」

「大丈夫ですよ。僕はカレーが好きですから」龍一郎が更に追い討ちをかける。

「一体誰のためにこんな苦勞していると思ってるんだ、この男は」颯太が小さな声で毒づいた。

「それではいただきます」龍一郎がカレーを口に運ぶのを一同はじーっと見つめていた。

「どうですか」愛子が尋ねた。

「うん、美味しい」

「」「」「なにいく!!」「」「」

「何でそんな反応なのさ」

「これはラオスの山の中の少数民族の村でご馳走になった料理ですね。まさか日本で食べられるとは」龍一郎が感動の面持ちで言った。

「おい、ラオスってどこだ」

「それよりもあれを常食にしている人類がこの世にいたのか」

「あの、なんでそんなところ料理知ってるんですか？」陽太が尋ねた。

「ああ、僕は大学を1年休学してバックパックで世界中を放浪していたんですよ。ラオスの山の中で道に迷って3日3晩飲まず食わずで歩いてやっとその少数民族の村にたどり着いて。その時にご馳走になったのがこの料理で、いやあ懐かしいなあ」

「腹ペコだったからウマかっただけじゃねえのか？」Atsushiが言った。

「愛ちゃん、これシーフードカレーじゃなかったの？」Guuが尋ねた。

「そうなはずなんですけど。そんな複雑なバックグラウンドを持つ料理だったとは」

「いや、作った本人がカレーの確信ないのか」Gonが言った。

「じゃワタシの料理もどうぞ」アンナがボルシチを進めた。

再び一同の目が龍一郎の口元に注がれる。

「うん、これもウマイ。パラグアイの山中のインディオの村でご馳走になったスープですね」

「どうでもいいが山の中ばかりだな」颯太が言った。

「とりあえず世界は広いということがわかった。愛ちゃんレベルが世界にはゴロゴロしているということだな」

「というか、こいつ普通に食ってるな」

「材料はアレだが、愛ちゃんの腕前が上がっているんじゃないか」

「そういえばそうだな。愛ちゃんだってそういつまでもアレじゃねえだろう」

「心配して損したぜ。じゃ俺たちも喰おうか」

「「「「「いただきま〜す」」」」」一同は機嫌よくカレーを口に運び、

「「「「「グオッフ」」」」」一斉にむせた。

「なっ何だこれはバルサンの味がするぞ」Atsushiが言った。

「舌がシビれてきたぞ・・・」Gonが言った。

「台所に置いておいたらゴキブリも全滅するな」とGuu。

「愛子、恐ろしい子……」Y o u が震えながら言った。

「しかし、お兄さんは平気で食べてますね」陽太が言った。

「あ、すいません。凶々しいようですが、おかわりもらえますか」龍一郎が上機嫌で言った。

「……恐ろしいことにおかわりまでしている」康太が言った。

「おい、Y u k i。あいつは本当に財閥のボンボンなのか？下手したら俺らより貧しい食生活しているとしたら思えんのだが」颯太がY u k iに尋ねた。

「なによ愛ちゃんたちはどこ行つたの。もうすぐ本番よ」

「たつた一口でどこまで記憶が巻き戻ってんだ、お前は」

「とりあえずカレーは危険だ。ボルシチで時間を稼ごう」全員が一斉にボルシチを口に運び

「「「「「ゴホゴホゴホ」」」」」一斉に咳き込んだ。

「なんだこれは、納豆汁にホットチョコレートを入れたらこんな感じになるぞ」

「俺の喉に自我が生まれてる。飲み込もうとすると全力で拒否するんだ」

「味噌汁に砂糖いれたらこんな感じか」

「気が遠くなってきた……」

「あ、すいません。できればスープもおかわりもらえますか」龍一郎が上機嫌で言った。

「誰かあいつを殴り倒してこい。あれを標準にされたら俺たちの命が危ない」颯太が叫んだ。

龍一郎の健啖ぶりに愛子もアンナも上機嫌である。

「そういえば由美ちゃんはとうした」

「あれ、由美ちゃん食べないの」愛子が言った。

「ごめんなさいね、愛ちゃん。とても食べたいんだけど、今ダイエット中なの」由美子が申し訳なさそうに言った。

「由美ちゃんが逃げたぞ。陽向、陽向はどうした」リビングを見渡すと、陽向がスプーンを握ったままうつ伏せに倒れていた。



「……あいつは戦死だ。免疫がなかったからな」康太がしみじみと言った。

「Yuki。おい、Yukiは大丈夫か」颯太が叫んだ。

Yukiは静かに黙々とカレーを口に運んでいた。

「えーつと、Yukiさん。お体は大丈夫でしょうか」颯太が恐る恐る尋ねた。

「なに言ってるのよ、あんたは。当たり前じゃない、それより相手の不良共を倒せるだけ倒して逃げてくるのよ」記憶が更に遡っている様子だった。

## 第16話

「くっそく何だ。あの男」Atsushiが言った。

「金持ちのボンボンで、T大だけじゃなくハーバードまで出ていてか」Gouが言う。

「おまけに愛ちゃんの料理までうまそうに食いやがる」とGon。

「敵だな」Youがつぶやいた。

「お前ら、アホか。そんな奴いちいち敵認定してたらキリがねえぞ」颯太が諭すように言った。

「そうはいうが颯太。あのスペックじゃあいつはきつと女にモテるぞ」Atsushiが断言した。

「確実に敵だな、俺たちの」即座に颯太が答えた。

「女性にモテる人を自動的に敵認定するのは止めておいた方がいいと思うよ。そのうち仲間が兄達だけになっちゃうから」陽向が言った。

「ふむ、なるほど……ちよつと待て、陽向。それは世界中でモテないのは俺たちだけと言ってるのと同じじゃないのか？」とGonが叫んだ。

「いきなり復活するな、バカ者」颯太が言った。

「大丈夫か、陽向」Atsushiが言った。

「いや、カレー口にしたところまでは覚えているんだけど、気がついたら床に寝てた。睡眠不足なのかな？」

「まあ、いろいろと知らない方が幸せな大人の事情というのがあるのだ」颯太が言った。

「とりあえず食事の途中だからカレー食べないと」と言うのと止める間もなく再びカレーを口に運び、スプーンを握りしめたままスローモーションで仰向けに倒れていった。

「伊賀に行ってもアホが全然直ってないじゃないか、こいつは」Youが言った。

「というか前よりアホさ加減が磨きあげられている上にワックスまでかかっているぞ」Atsushiも同調する。

「……兄として否定してやりたいのだが根拠が見つからない」と

康太がツブやいた。

「そういえば皆さんのご職業は何ですか」たらふく食べて一息ついた龍一郎がいきなり質問してきた。

「え、僕たちですか。いやあしがない自営業と言うか自営業みたいなもんです」颯太が頭を掻きながら答えた。

「なんで、そんなに卑屈なのさ」愛子が言った。

「そうは言うが愛ちゃん。財閥の跡取りにいい歳してバンドやりますなんて言えるか？鼻で笑われるだけだぞ。俺たちにもプライドがある」颯太がささやいた。

「(自由業よりもまだバンドの方がマシだと思っただけだ)」

「こいつらはバンドをやってるんですよ」Yukiが横から言った。

「Yuki、いつの間にか正気に戻ったんだ」Atsushiが言った。

「なによ。睨んでもこのカレーは分けてあげないわよ」と言ってYukiがカレー皿を隠した。

「まだ混乱から立ち直っていないらしい」Guuが可哀そうなものを見る目でYukiを見つめた。

「バンドですか。いいなあ音楽で喰っていけるなんて。僕はタコ&ライスというインディーズのバンドが好きなんですよ」龍一郎が思いがけないことを言いだした。

「こいつ結構いい奴なんじゃねえか？」Atsushiが言った。

「なかなか見る目があるな」とGuuも同調する。

「やっぱり一流の人間は違うな」とGon。

「もしかして会社の経費でCDを1万枚くらい買ってくれんじゃねえか」Yuuが虫のいいことを言う。

「ふむ、敵認定を取り消してもいいかも知れん。コンディション・グリーンだ」

「だから兄達はそのおだてに弱い性格何とかしないと、そのうち秋葉で高い絵を買わされて痛い目を見るよ」陽向が言った。

「だからお前は、いきなり復活するなど言っているんだ」颯太が言った。

「あれ、あたしどうしたんだろう。カレー口に入れたところまで覚え

ているんだけど。とりあえず食事しなきゃ……。」と陽向が言ったところを颯太がスプーンを取り上げた。

「それは無限ループだ、バカ者。お前は愛ちゃんのカレーで記憶が飛ばされているんだ」

「ええ、だってあたし修行のおかげでほとんどの毒物に耐性があるんだよ」

「愛ちゃんの才能は伊賀600年の歴史を遥かに凌駕しているということだな」

「戦国時代だったらひっぱりだこだね」

「なんかそこはかとなくボク馬鹿にされてませんか？」愛子が不機嫌そうな顔でいった。

「そんなことないよ、愛ちゃん。これから美味しくいただくところだよ」陽太がフオーローするように言った。

「そうだよ、愛ちゃん。でも最後にお袋の声を聞いてもいいかな？」Atsushiが言った。

「なんで食事の度にお母さんの声を聞く必要があるんですか」愛子が冷たく答えた。

「これが聞き納めになるかと思うとついね。まあ、最後の親孝行って奴だ」

「なにいい話風にまとめているんですか。お母さんの声でもお婆さんの声でも好きな声聞いて下さい」

「いや、婆さんはとくに死んでるから、もうすぐ直接話できると思うんだ」

「いや、言ってることがよくわかりません」

「俺は弟にちよつとメールを……。」Gonが言った。

「何で弟にメールなんだ？」Youが尋ねた。

「いや、Code F2525を実行せよと」

「なんだ、そのCode F2525ってのは？」Guuが聞いた。

「俺の部屋に隠してあるエロ本を全て処分せよという命令コードだ」Gonが答えた。

「お前のところはCIAから常時監視でも受けてるのか？」颯太が呆れ

たように言った。

「じゃ、みんな覚悟はいいな。では食前の祈……」

「何回、お祈りするつもりですか。さっさと食べて下さい。片付きませんから」

一同は黙々と食べ始めた。時々「ウツ」とか「ゴフゴフ」とか咳き込むのはなぜだったのだろうか。

## 第17話

10数分後一同はやつと食事を終えた。

「ハアハア・・・やったぞ」

「偉業を達成した気分だな」

「俺はまだ生きているんだよな。これは現実だよな」

「とりあえず神に感謝の祈りを・・・」

「なんで食事を終えただけで、いちいちそんな前人未到の快挙を成し遂げたようなこと言ってるんですか」愛子が不思議そうに言った。

「そうは言うがある意味人類の限界へのチャレンジだったわけだから」とAtsushiiが言った。

「Atsushii君、今までカレー食べたことないんですか？」愛子が言った。

「今日は、カレーの範疇がすさまじく広いということを教えられたよ」  
「相変わらず言ってることの意味がわかりませんが、ボクにケンカ売っているということだけはわかりました」愛子がドスの聞いた声で言った。

「何をいうんだ、愛ちゃん。チワワが土佐犬にケンカ売るわけないだろう」

「その言い方がケンカ売っているって言うんです」

「なんで俺の言うことをそう悪い方にばかり捉えるかなあ」Atsushiiが呆れたようにいった。

「何ひとつ良い方に解釈できるようなこと言っていないからです」

「これじゃ喋れないじゃないか」

「それはいいことです。できればボクに話かけないでくれると助かります」

「ムムムム・・・」

愛子とAtsushiiが睨み合った・・・

「本当に仲悪いなこいつら」Guuが言った。

「まあ、そうでもないんだけどな」颯太が苦笑いして言った。

「あ、そうだ。ケーキ出すの忘れてました」雰囲気を変えるように由美

子が言った。

「そうだ。よく考えりや陽太の誕生日だったな。それ以外のインパクトがあまりに強すぎて完全に忘れていたぜ」Gonが言った。

「これが頼まれていたケーキです」といってバスデイケーキをテーブルに広げた。

「そして恥ずかしいんですけど、これが私が作ったケーキです」そういうと全面に苺が飾られたホールケーキを出した。

「ほう、由美ちゃんの手作りケーキとはうらやましいな、陽太」Youが陽太にヘッドロックを決めた。

「うむ、なかなかもらえんぞ」Gonが陽太の足を引つ掛けて床に転がした。

「はははは、モテる男は違うなあ」笑いながら四馬鹿がストンピングで陽太を蹴りまくった。

「言葉は祝福しているようなんだけど、身体は正直だね。嫉妬丸出しだよ」陽向が感心したように言った。

「的確に急所を蹴っていますネ」冷静にアンナが解説した。

「いや、二人ともそんな落ち着いている場合じゃないでしょ。やめなさい、この四馬鹿」愛子の制止でやっと落ち着いた。

「まあ、こいつらが黙っているとは思わなかったが、やっぱりだったな。それにしても全面苺で真っ赤だな。シユア専用ってやつか、うまそうだ」颯太が言った。

龍一郎の眉がピクリと動いた。

「今、なんて言いました？」低い声で龍一郎が言った。

「ケーキが美味しそうだなあと……」

「その前です」

「その前？シユア専用かと……」

「あ、何か気に障りましたか？すみません」

「……どれですか」

「ねえ、由美ちゃん。お兄さん、何言っているの？」愛子が尋ねた。

「いえ、私にもちよつと意味がわからないわ」由美子もわけがわからないと言った風情で答えた。

だが、颯太にはピンとくるものがあつたようだ。

「ファースト以外は認めねえ」

「なかなか見所があるようだな。で、どっち」

「もちろん連邦だろうが」

「ふつ、しよせんその程度の男か。男ならシオン軍だろうに」

「なんか知らないけど、通じ合ってるみたいだよ」

「何なのかしら？」

「シオン軍側なんてどうせ金持ちのボンボンが不良に憧れるようなもんだろうが」

「認めたくないもんだな。自分自身の若さゆえの過ちというものを」

「俺が一番ガンガムをうまく使えるんだ」

「見せてもらおうか、連邦軍のモビルスーツの性能とやらを」そういうと龍一郎は身体を乗り出し颯太の頬を軽く往復ビンタした。

「キヤア、兄さん。一体何するの」由美子が驚いて叫んだ。

「二度もぶつた。親父にもぶたれた事なのに」颯太は意に介さず、ぶたれた頬に手を当てて言った。

「いや、そういう言い方するとなんかいいとこの子に聞こえるけど、圭君が手を上げなかつたつてだけで、裕ちゃんはじめお母様会に毎日ボコボコにされていたらつて聞いたけど」愛子が言った。

「坊やだからさ」龍一郎が挑発するようにいった。

今度は颯太が龍一郎を打とうと手を伸ばしたが、龍一郎はそれをかわして言った。

「当たらなければ、どうということはない」

「アミロ、行きまゝす」

「モビルスーツの性能の違いが、戦力の決定的差ではないということを教えてやる」というと更に颯太にビンタをした。

「まだだ、たかがメインカメラをやられただけだ」

「ええい、連邦軍のモビルスーツは化け物か」

「ねえ、由美ちゃん。お兄さん、さつきまでどうって変わって楽しそう



に颯太君と小芝居やってるんだけど、何が始まったの？」

「私も兄のこんな楽しそうな姿見たの始めてなんだけど、なんなのかしらこれ」

四馬鹿から一斉に歓声が沸いた。

「うむ、シオン軍とは見上げた奴だ」とA t s u s h i

「けっ、ロクでもねえ奴だ」とG u u

「シオンなんぞに肩入れとは底が見えたな」G o nがいう。

「いやいや、俺は龍を歓迎するぞ。これで連邦対シオンが3対3になつた」とY o u

いつの間にかお兄さんが「龍」呼ばわりされているのはいいとして、五馬鹿と話が合っているという事実にはボクはそこはかとなく不安感を覚えた。

## 第18話

「大変、龍君が五馬鹿に馴染んじゃって、区別がつかなくなってる」  
「……かなり失礼なこと言ってるな。お前もいきなり龍君呼ばわりしているんだが」

「ねえ、由美ちゃん。龍君って三宮グループの会社ってことは、結構いい会社なんですよ」

「いい会社かは分からないけど、三宮ホールディングスって会社なの」  
「……ほう、外資とはさすがだな」

「さすがに康太はFクラスだね。三宮グループって言ってるのに英語名ってだけで外資だと思うなんて。で由美ちゃん、それって何する会社なの？」

「三宮グループ全体の株を管理する会社で、グループのトップね」

「それじゃあんな馬鹿共と遊んでバカ伝染されたら、上司の人に怒られちゃうよ」

「うーん、上司って言うても上には社長しかいないし、社長は父だから大丈夫じゃないかしら」

「バカが伝染るってところは否定しないんだね。上に社長しかいないってどういうこと？2人だけでやってる会社なの？」

「それじゃ自営業だよ、愛ちゃん」陽太が言った。

「……そこらのコンビニの方が社員は多いぞ」康太も言う。

「いえ、もっとたくさん社員はいると思うけど、兄は副社長だから」由美子が平然と答えた。

「三宮グループトップの会社の副社長？」  
「アンナ以外の全員が叫んだ。」

一同の目が龍一郎に集まった瞬間、何かに興奮した龍一郎が立ち上がって叫んだ。

「がたがたヌカしてるとコロニー落とすぞゴルア……」

「何だかよく分からないけど、龍君連れて帰った方がいいんじゃないかなあ、由美ちゃん」その様子を見て愛子が言った。

「僕もそう思うな」陽太も同意する。

「……日本経済の損失になりそうな気がする」康太も同じ意見だ。  
「これで由美ちゃんも陽兄が結婚すれば、龍一郎お兄さんはあたしの義理の兄になるということだね。ふふふ、あたしにも運が向いてきたね」と陽向がニヤリと笑った。

「いや、それ全然違うから。というかどれだけ腹黒いこと考えてるんだ、お前は」陽太が即座に否定した。

「ちなみにリユウの言った「コロニー落とす」とは、『機動戦士ガンダム』で描かれた一年戦争の冒頭で、シオン公国軍により発動されたブリティッシュ作戦として行われた……」アンナが唐突に語りだした。  
「解説ありがとう、アンナちゃん。でもその知識って、今後のボクの人生で一切役立つことないと思うからいらないや」愛子が解説をさえぎった。

「でも兄さんのあんなに楽しそうな様子初めて見たし、別にいいんじゃないかしら。そりゃ兄さんは優秀だけど、副社長なのは三宮本家の長男だからだし」

「甘いよ、由美ちゃん。あの連中のバカは伝染るんだよ。「ダメ、絶対」って厚労省も言ってるよ」愛子が必死に説得する。

「(なんか兄さん達エラい言われ方してるな。愛ちゃんの中では、国家規模で付き合いが規制されてるらしいぞ……)」

「(……あの連中は愛子の天敵だからな)」

「(というか、こんな短時間でバカが伝染るんだったら、生まれた時から兄達に囲まれてるあたしはどうなるんだろう?)」

「(お前はアホが強力に発症しているから、バカが伝染ってるかどうか区別がつかん)」

「(……俺たちも伝染ってるということか?)」

「(しかしよく考えれば最近是最も濃厚に接触してるのは、愛ちゃんなんだけどな)」

「(……あいつがそこまで考えて喋っている訳がない、感情が思いつくまま脊髄反射で口から出しているだけだ)」

「(大腦すら經由してないのか。ある意味スゴいな……)」感心したように陽太が言った。

「一番はシユア専用ザクと相場が決まっている」と龍君が言った。  
「ばかやろう。一番はドムだろうが」とA t s u s h i が言う。  
「ふっ、物の価値を知らん連中だ。アツガイこそ至高よ」とY o u が言う。

「問題外だ、バカ者」龍君とA t s u s h i が同時に叫んだ。

「さつきまで仲間が増えたと喜んでいたのに、なんでいきなり仲間割れが始まっているのさ」愛子が言った。

「タイトルにもなったガンガムこそ王道だろう」颯太が言った。

「けっ、砲撃戦じゃガンキャノンの足元にも及ばねえよ」G o n が対抗する。

「ガンタンクのキャタピラの機能美を理解できないとは、情けない奴らだ」G u u も負けてはいない。

「ああ、こつちでも始まった」

「まあ、昔からこの連中の連帯が30分以上続いたことがなかったしねえ」とY u k i が平然といった。

「いや、Y u k i さん。平然としてないで止めてくださいよ」

「止めても無駄よ。自分以外は全員敵って連中ですもの。それぞれが常に1対4なのよ」

「それでなんで幼稚園からずっと五馬鹿やってられるんですか？」

「アイコ、「強敵」と書いて「とも」と読むと……」アンナちゃんが解説してくれたけど、そんな爽やかなもんじゃないような気がするんだよね、この連中の場合。

「ねえ、由美ちゃん」

「なにかしら、愛ちゃん」

「やっぱり龍君連れて帰った方がいいと思うよ。あの連中と付き合い合ってたたら人間性がすさむよ」

「奇遇ね。私も少しそう思ってたわ……」と言った由美子の表情は硬かった。

## 最終話

憂慮する由美子たちに一切構わず六馬鹿（すでに龍一郎も馴染ま  
くっていた）の議論は白熱するばかりだった。

「ゲッターロボで永井豪の深さを知れ」と龍一郎。

「古いんだよ。エウレカ7がトレンドだ」と颯太がいう。

「センスがねえな。マクロスこそ基本だろうJK」とAtsushi。

「一億年と二千年前からアケリオンと決まっている」とYou。

「ザンボット3の最終話をみてトラウマになりやがれ」とGuuが主  
張する。

「インフィニット・ストラトスが王道だ」とGonが言った。

「二二却下だ、却下。バカ者二二」全員が一斉に言った。

「とてもいい歳した大人が怒鳴り合う話題じゃないよね」

「どうでもいいが何の話をしてるんだ、あの連中は？」

「……たぶんロボットアニメの話だと思うんだが、全員が全部知っ  
てるというのがスゴいな」

「あたしのクラスの子だって、あんなには知らないと思う」

「お兄さんの部屋にロボットのプラモデルがたくさんあるとは思って  
いたけど、ここまでだったなんて……」由美子が呆れたように  
言った。

しばらく六人でゴチャゴチャとやっていたと思ったら、また争いだ  
した。

「団長のハルヒが一番だって言うてるだろうが」と龍一郎。

「長門の良さもわからずにSOS団を語るんじゃないやねえ」と颯太がいう。

「朝比奈さんのドジっ子ぶりを知れ、愚か者」とAtsushi。

「鶴屋さんが一番に決まっているによろよ」とYou。

「朝倉のヤンデレぶりがたまらん」とGuuが主張する。

「佐々木を飼ってみたいぞ」とGonが言った。

「二二黙ってる変態二二」全員が一斉に言った。

「今度は何なのさ？」

「よくもまあ次から次へと争いのネタがあるもんだ」

「たぶんラノベに出てくる女の子の話だと思うんだが」

「25歳の男が唾飛ばしてまでやる議論じゃないと思うんだけど」

「ねえ、由美ちゃん。お兄さん本当にいいの？」愛子が聞いた。

「お兄さんは楽しそうだからあのままでいいとして、陽太君ちよつと二人だけでお話したいんだけどいいかしら」由美子が言った。

「え、僕と二人きりで、はっ話ですか」陽太君に明らかに動揺していった。

「そう、ダメかしら」

「いえ、そんなことはないんですけど部屋はで二人きりつてのはマズいと思うので庭でいいですか」

「うん、どこでもいいわ」

そうして二人が玄関から出て行った。

「ねえ、あれ何の話だろう」

「……………いよいよ別れ話か」

「でも一緒にいたのはお兄さんだよね」

「ほかに好きな男の人がいるんじゃないデスか？」

「……………」

乙女たちの目が光った。

「あの由美ちゃん、おっお話つてなんでしようか」

「あのこのところずっとお誘い断つていてごめんなさい」

「いやあ、気にしてませんよ」

「本当に気にしてなかったの？」由美子が下から見上げるように陽太と見つめた。

「きつ気にしてないこともなかったような気がしないでもないけど、由美ちゃんも忙しいだろうから」

「あのね。うちの店のパティシエさんからずっとホールケーキの作り方習ってたの」

「ホールケーキ？」

「うん、陽太君のバースデーケーキに手作りのケーキを作ってあげたくて。でも全然うまくいなくて、しょっちゅう失敗してうまくできなかったのが、やっと今日だったの」

「そつそうだったんですか、どうもありがとうございます」

「浮気だと思った？」由美子がいたずらっぽく笑って言った。

「まつまさか由美ちゃんに限って浮気だなんてそんな、はははは」

「ちよつとくらい嫉妬してくれた方が嬉しい気がするわね、ふふふ」

「いえ、僕は由美ちゃんを信頼してますから」

「それはそうと、この間なんでみんな合羽橋にいたの？」由美子が突然意外なことを言い出した。

「え、合羽橋……」

「ええ、私が調理用具が必要になって兄と合羽橋に買い物に行ったら、みんな合羽橋にいたわよね」

「なんで、僕たちだってわかったんですか……」

「だって、陽向ちゃんが忍者服で飛び回っているし、モデル並みのアナちゃんが迷彩服で決めて立っていたから、通りすがりの人が取り囲んで写メ撮っていたじゃない。誰でもわかるわよ」

「……（あのバカ娘ども）」

「陽太君たちが尾行してくるのがわかったから、ちよつと妬かせようと思って兄さんに抱きついたりしちやっただけど、どうだったからしら」

「……ちよつと嫉妬しました」

「ちよつとだけ？」

「……いっいえ、正直とても嫉妬しました」

「うふふ、嬉しいいわ。嫉妬もしてくれないんじや、本当に私のこと好きなのかと思っっちゃうもの」

「……」

「……」

陽太が静かに由美子の肩を抱き顔を近づけていった……

「クシユン」頭上からくしゃみが聞こえた。

「だめだよ陽向ちゃん。今、いいところなんだから」愛子の声が出た。

「あつ、あの三人とも何をしているのかな？」陽太は二階のベランダを物干し場を見上げた。陽向、愛子、アンナが顔だけ出して二人を見下ろしていた。

「えーつと、天体観測？」陽向が言った。

「雨でも降りそうな空模様なのにか？」

「あ、あの女子会です、女子会。乙女たちの恋バナを……」愛子が言った。

「なんでわざわざこんな寒いベランダで、下を見下ろしながらそんなことやってるの」

「ソータ、そんなことはどうでもいいカラ。さっさと続きをやってくだサイ。風邪ひきそうデス」アンナが逆切れした

「できるか」陽太と由美子はこれ以上はないくらいに顔を真っ赤にして言った。

「もうちよつとだったのにね」

「いいところで陽向ちゃんがかくしやみなんかするから」

「ソータも根性がありません」

三人がそれぞれにブツブツいいながら階段から降りてくると康太とYukiが疲れきった顔をしてソファに沈み込んでいた。

「どうしたのさ二人とも」

「あれを見ろ」康太がさつきまで激論を戦わせていた六馬鹿の方を顎でさした。

愛子がそちらをみると全員で肩を組みながら、アニソンらしき歌を樂しそうに熱唱していた。

「もう10曲目だ。いいかげんに止めてくれ」

「弟はロマンチックなことやっているのに、この連中ときたら……」

「よおし次は「花の子ルンルン」だ」龍一郎が樂しそうに叫ぶ。

「だめだ、こいつ。早くなんとかしなくちゃ」愛子はどこかで聞いたようなセリフをツブやいた。



### 13. みんなとカップルとクリスマス 第1話

冬晴れの寒い日の午後、少年と少女は連れ添うようにして下校の道を歩いていた。

「12月になったし、もうすぐだね」少女が嬉しそうに言った。

「……………ああ、やっと冬休みだ」少年が答えた。

「……………違うよ。冬休みの前にもっと大事なことがあるでしょう」少女が不機嫌そうに言った。

「……………期末テストか。俺には憂鬱以外の何ものでもないが、楽しみとはさすがにAクラスだな」

「一体誰がそんなもん楽しみにするのさ。カップルとしてやらなくちやいけない大切なことが12月にはあるでしょ」

「……………大掃除は別にカップルでやる必要はないのではないか?」「うすうす感じていたけど、もしかしてワザと言ってるね?」

「……………いや、別にケンカを売ってるつもりはないが、お前が何を言いたいのかさっぱり分からん」

「ウウウ、12月で思いつくのが、「冬休み」と「期末テスト」と「大掃除」しかないなんて、康太つてば不憫な人生を歩んできたんだね」少女は目にそつとハンカチを当てた。

「……………そこはかたなくバカにされた気がするが、お前だってカップルという言葉とは無関係に生きて来ただろうが」

「ちゃんと情報は仕入れてたもん」

「……………仕入れるだけで使わなければ、何の意味もない」

「ボクは水泳が忙しかったから彼氏を作らなかつただけで、モテなかつたわけじゃないもん」

「……………なぜそこを強調する。というか誰もそんなことは聞いてない」

いつの間にか口ゲンカに発展していた。

「……………ゼエゼエ。OK、ちよつと落ち着こう。せつかくのロマン

チツクな話なのに、ケンカしてちや意味がないよ」

「……今までの会話のどこにロマンチックな要素があったのだ。欠片も見当たらなかったが」

「12月と言えばクリスマス以外の選択肢はないでしょうが」思わず少女の声が大きくなった。

「……ああ、クリスマスもあつたな。で、それがどうかしたか？」  
「なんですと？」

「……いや、クリスマスとカップルがどう結びつくのだ？クリスマスというのは、家族でクリスマスケーキ食べて、KFC食べる日だろう。」

「………」

「……まあ、小さい頃はサンタからのプレゼントが楽しみだったがな。今更そんな歳でもないし」

「……ねえ、康太。ボク怒らないから正直に答えて」

「……なっ、何をだ」

「もしかして本気で言ってる？」

「……本気とは？」

「クリスマスケーキとかKFCとか」

「……家では毎年そうだったが」

「違あ〜う!!」

少女がちやぶ台をひっくり返さんばかりの勢いで言った。

「……おっ、お前いきなり何を」

「いい、クリスマスっていうのはバレンタインデーに並んで恋愛シミュレーションには欠かせないイベントなんだよ」

「……なぜいきなりゲームが出てくるのだ」

「攻略でも欠かせないイベントだというのに、ましてやボクと康太は親兄弟も認める公認カップル」

「……それはお前がうちに入り浸っているからではないのか？」  
「理想のカップルになるためには、このイベントをちゃんとクリアしなければいけないの」少女は宙を見つめながら右手を握りしめて言った。

「……まだ諦めてなかったのか、それ」

「だから代表たちのように、ちゃんとクリスマスデートしなくちゃいけないの」

「……ん？雄二は連休に旅行に行くと言っていたが」

「大丈夫。代表は一週間前に身柄を確保して坂本君部屋に監禁するつて言っていたから」

「……それが犯罪行為だという意識は微塵もないんだな、お前らは」

「康太……」

「……何だ」

「乙女の純情は法律よりも重いんだよ……」

「……いや、全然言い訳になってない」

「瑞希も美波も吉井君の家でパーティするつて言ってたし」

「……念のために聞くが料理は明久が作るんだろうな」

「ううん、瑞希と吉井君のお姉さんで作つてサプライズパーティをするんだつて」

「……サプライズにもほどがあると思うが。とりあえず明久の番号を着信拒否にしておこう」

## 第2話

「だいたいカップルのくせにクリスマスを忘れるなんて信じられないよ」

「……今まで縁がなかったのだから仕方あるまい。だいたいお前だってカップルになって初めてのクリスマスだろうが」

「だから、ボクはモテていたんだってば」

「……モテようとモテまいとカップルでなかったことは変わらん」  
「情報収集はバツチリだよ」

「……ある意味可哀そうな話じゃないのか？彼氏もいないのにカップルでのクリスマスのおごし方の情報だけ豊富というのは」

「康太は、予習をしないから成績が悪くてFクラスなんだよ」

「……相変わらず話が飛躍しすぎだ、お前は」

ギャアギャア言い争いながら、いつも通り帰宅した。リビングにはすでにみんな揃っていた。

「相変わらずケンカか。仲がいいんだか悪いんだか分からんなお前たちは」 颯太が呆れたように言った。

「違うんだよ、颯太君。康太がクリスマスのおごし方についてあんまり無知だからさ」 愛子が言った。

「何だ、愛ちゃんはそんなにクリスマスケーキとKFCが好きなのか。大丈夫だ、料理で愛ちゃんとアンナの手を煩わさなくていいように、3ヶ月も前からしっかりと予約してあるぞ」

「……」

「ん、もしかして愛ちゃんはターキー派かな？この辺じゃターキーは手に入らなかつたんだよ」 陽太が言った。

「……この兄弟は揃いも揃ってどいつもこいつも。ねえ、由美ちゃん。クリスマスには他にやることあるよね」 愛子が由美子に助け船を求めた。

「そうねえ、高校まではミッション系の女子校だったから、毎年クリスマスミサに参加してたかしら。そうだ今年はみんなで行きましようか」とトンでもないことを言いだした。

「……いや、もうちよつと庶民目線になつてくれるとありがたいかな。クリスマスミサなんて何をするのか見当もつかないよ。アンナちゃん、ロシアでもクリスマスにやることあったでしょ」

「そもそもロシアのクリスマスは1月7日ですカラ。家族で過ごす日ですネ」

「ビークワイエット、アンナちゃん。日本には古くから「Do the Romans do」という諺があつてね。日本に來た以上日本の風習に従わなければいけないんだよ」

「……」「Do」の時点で日本の諺じゃないと気づけ、お前は。普通に「郷に入れば郷に従え」でいいだろうに」

「なんでいい歳した男女が7人もいて、しかもそのうち6人で3カットプルなのに、なんでこんなにテンションが低いのかなあ。クリスマスだよ、クリスマス」愛子が憤慨した口調で言った。

「そうだよ、みんなクリスマスだよ、クリスマス」陽向が嬉しそうに叫んだ。

「えーつと、陽向ちゃんはなんでそんなに嬉しそうなのかな？」愛子が不思議そうに尋ねた。

「だってクリスマスには、サンタさんがプレゼントをくれるんだよ。今年は何をくれるのかな。楽しみだな」

「サンタさんって……」

「……愛子」康太が耳元で小声で囁いた。

「(なに?)」

「……あいつはまだサンタを信じているのだ」

「(サツ、サンタを信じてるって、だって、もう高校生……)」

「……伊達に「アホの子」と呼ばれている訳ではない」

「ねえねえ、愛ちゃん。伊賀にいた時はプレゼントが「お煮しめ」とか「焼き魚」だったんだよ。ひどいと思わない？」

「そつそれはきつと伊賀の土着のサンタさんだったんだよ」

「……ムチャ言うな、お前も」

「(お婆さん、プレゼントっていうのでよっほど困ったんだね)」

伊賀の方がこのSSを読んでないことを願う書いてる人であった。

「おい、康太ちよつと来い」颯太が康太をリビングの隅に呼んだ。

「愛ちゃん、どうしたんだ？」

「……どうしたもこうしたも、いつものように変なスイッチが入っただけだ」

「なんのスイッチだ？」

「……クリスマス・イブはカップルで過ごすのが、恋愛イベントには欠かせないらしい」

「そりゃ、ずいぶん迷惑なスイッチを入れてくれたもんだな」

「……念のために言っておくが、俺では止めきれないぞ」

「はい、みんな注目」愛子がパンパンと手を叩きながら言った。

「情けないことにカップルが3組もいるのに、誰も正しいクリスマス・イブの過ごし方を知りません。そこでボク、工藤愛子が皆さんに正しいクリスマス・イブの過ごし方をお教えします」

「えーっと、愛ちゃん。それは俺たちもやらなきゃならんのかな？」颯太が尋ねた。

「もちろんです。「雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう。Silent night, holy bright」と昔のエライ人も言ってます」

「……それはイブに待ちぼうけを喰らう歌だ」康太がツッコんだ。

「愛ちゃん達が楽しんでくればいいんじゃないかな」陽太が言った。

「何を言うんですか陽太君。カップルになったからにはクリスマスデートは定番、いいえいつそ義務と言っっていいくらいです」

「愛ちゃん、あたし別に彼氏いないんだけど」陽向が言った。

「そこらへん歩いている男生徒とっ捕まえてきなさい」

「もう既にカップルでデートというコンセプトから外れているぞ」颯太が言った。

愛子による「クリスマスカップル講座」は、以後1時間続いた。

### 第3話

【土屋陽向の場合】

「……っていうことが昨日あってね」陽向が机に顔だけ出しながら言った。

「……」

「で、マコちゃんにクリスマスデート誘ってもらおうと考えたわけ」

「……」

「他に親しい男の子もいないし、マコちゃんもその方が嬉しいだろうなって思ってる」

「……」

「マコちゃん、何で無視してるのさ」

「……おい、アホ」

「いくらマコちゃんでも由香リンのことアホ呼ばわりしたら許さないよ」

「お前のことだ」

「あんたのことよ」

陽向の頭に二方向からゲンコが飛んできた。

「ダブルは痛すぎるよ、二人とも」頭を抱えて屈みながら陽向が言った。

「そんなことはどうでもいい。お前、俺が今何をやってると思ってるんだ」

「椅子に座っているだけじゃん」

「何で椅子に座っていると思ってるんだ」

「……えっと、立つと疲れるから？」

「授業中だからだ、バカ者」誠が思わず叫んだ。

「竜崎、うるさいぞ。授業中に騒ぐな」教師が注意をした。

「先生、俺に注意をする前に授業中にAクラスからFクラスまでやってきて騒いでいるこのアホを注意して下さい」

「ん、ああ土屋はいいんだ。授業御免状を持つてる」

「授業御免状？何ですかそれ」誠が思わず聞き返した。

「これだよ。学園長がくれたの。これ持つてると授業出なくてもいいんだって」と言つて陽向は誠に紙を差し出した。

「なんだこれ？」

『授業御免状』

勝手にしな。

文月学園学園長

あのババア、教育を放棄してやがる。こんなもの先生たちは反対しなかつたんですか」

「というか、先生たちの要望で出されたんだよね」と涼しい顔で陽向が言った。

「どういう意味だ」

「あたしの機嫌が悪い時にする質問に先生たちが答えられなくつてさ。みんな恐がっちゃつて、できれば授業に出て欲しくない……」  
「あんたたち、それでも教師か」誠は教壇に立つ教師に向かって怒鳴つた。

「竜崎これにはちゃんとした理由があるんだ」教師が厳かに言った。

「どんな理由ですか」

「俺たちは教師である前に人間でありたいんだよ」

「いいこと言つてるように聞こえるけど、全力疾走で後ろ向きに逃げてるだけじゃねえか」

「まあまあ、マコちゃん先生たちを責めちゃいけないよ」陽向がなだめるようにいった。

「なんでそんなに上から目線なんだ、お前は。一体どんな質問してるんだ？」

「うーん、それほど大したこと聞いてるわけじゃないんだけどね。数学の先生には『フェルマーの最終定理における谷山・志村予想の位置づけ』とか、世界史の先生には『キリスト教グノーシス派におけるプラトン哲学の影響』とか、古典の先生には『連体修飾構造における主格助詞の歴史的变化について』とか」



「何を言ってるのかすら、わからんのだが」

「大丈夫。マコちゃんもそれぞれ大学院の博士課程で専門を取れば分るようになるから」

「そんなもんを高1の授業で質問するんじゃないやねえ。ほとんど嫌がらせじゃねえか」

「たまにはあたしも授業に参加したいんだよ」

「普通に授業受ける、普通に」

「だって全部知ってることなんだもん。それで学園長が授業御免状をくれたわけ」

「お前の事情はわかったが、城ヶ崎はなんだ？」

「わたしは、先生がこの子野放しにすると何しでかすかわからないから付いて行けって。本当にいい迷惑よね」

「お前も授業御免状とやらを持つてるのか？」

「そんなの持つてるのは、陽向くらいよ」

「じゃ授業抜け出しちゃマズいだろう」

「やだなあ、マコちゃん。よく読みなよ」と言って陽向が授業御免状を差し出した。

「えっ、なになに……『一枚につき三人様までご利用可』。どこのクーポン券だ、これは」

「ああ、土屋」教師が声をかけた。

「何ですか、先生。あたしの質問を受けてくれる覚悟ができたんですか？あたし『チョーサーのカンタベリー物語に見られる中世英語におけるオイル語系統のフランス・ノルマン語の語彙の影響』について聞きたいことがあるんですけど」陽向の顔が輝いた。

「先生に脅しをかけてるんじゃないわよ、あんたは」由香子が陽向にゲンコを見舞った。

「いつ、いや。そうじゃなくて、お前は授業御免状を持っていても、竜崎は授業中だから……」

「大丈夫です。あたしが後で補講しときますから」

「そうか、ならいいんだ」

「いいわけあるか。なんで俺がこのアホから補講受けなきゃならんのか」

だ。あんたもビシッと注意しろよ」

「竜崎、俺にも家庭があるんだ」

「生徒見捨てといて、何だその「俺、いいこと言った」風の顔は」

陽向がいるせいで、結局Fクラスの授業は全く進まないのであつた。

## 第4話

終了チャイムが鳴ると、誠は陽向と由香子を廊下へと連れ出した。  
「……月夜の晩ばかりじゃねえぞ」というつぶやき声が聞こえたのは気のせいだろうか？

そういえば最近Fクラス内にゲルFFF団なる謎の秘密結社が造られたという噂もあるのだが、今はそれに構っている場合じゃない。とりあえず話ができそうなところということで、次が体育で教室に人がいないAクラスに向かうことにして3人並んで廊下を歩いていた。

「だいたい授業中に押しかけてこないでも休み時間でできる話だろうが……」

「いい話は早い方がいいじゃん」陽向が屈託なく答える。

「あ、御館様。竜崎君からクリスマスデート誘われたんだね」通り過ぎる見知らぬ少女が声をかけて行った。

「……一生聞かなくても何の問題もなかったぞ、俺は」

「マコちんったら、そんなに照れなくていいのに」

「おお、竜崎。やる時ややるな」廊下で立ち話していた男子生徒が冷やかに話す。

「……照れてねえし、そもそも俺に何のメリットもない話だ」

「こんなに可愛いあたしとデートできるんだよ。メリットしかないじゃん」

「あ、竜崎君。やっと勇氣出したんだ。お幸せにね。」すれ違った女生徒が嬉しそうに言う。

「……自分で可愛い言うな、というか俺には全くその気はないから他の奴を誘え」

「え、数ある候補の中からマコちんを選んであげたんだから光栄に思っ、男らしくあたしをデートに誘いなよ」

「いやあ、御館様。あの竜崎からデートに誘われるってヤルなあ」Bクラスから出てきた男生徒が感嘆したように言った。

「……………おい、アホ」誠が不思議そうに言った。

「陽向ちゃんと呼んで言って言ってるのに。難易度が高いならヒナちゃんでもいいよ」

「よけい難易度高いわ、アホ陽向。ちよつと聞きたいことがあるんだが」

「アホはどうしても譲れないんだね」

「お前からアホを抜いたら何もなくなるからな」

「え、あたし純度100%のアホなの？」

「ああ、陽向つてのはシャンプーのラベル程度に思っておけ。それより、気のせいかも知れんが、きつきからすれ違う奴がみんな俺がお前をデートに誘って成功したような祝福を言ってるように思えるのだが」

「マコちんのあたしへの溢れんばかりの愛を感じたんだね、きつと」陽向が堂々と答えた。

「本人が1mgもそんなもん感じたことないのに、何で赤の他人が感じるんだよ」誠が思わず陽向の襟首を締め上げた。

「まあまあ、竜崎。落ち着きなさいよ」由香子が言った。

「城ヶ崎、事情を知ってるのか」誠は陽向から手を離すと由香子の方へ向き直った。

「えつくと、知っていると言うか、何と言うか」由香子は言いにくそうに口ごもった。

「言え！」誠が言った。

「実はAクラスからFクラスに向かう途中で、陽向ったらBからEクラスまでの全クラスに飛び込んで行って「これからマコちゃんにクリスマスデートに誘ってもらいに行くの」って大声で宣伝してたの」

「いやあ、一応みんなに話を通しとかなないとマズいと思ってさ」陽向が頭をかきながら言った。

「まず、俺に話を通さんか」誠が再び陽向の襟首を締め上げた。

「タツプタツプ、喉に入っているよ、マコちゃん」陽向が誠の腕を叩いて行った。

「だいたい城ヶ崎、お前がついてて何で止めないんだ」誠の怒りの矛先は由香子にも向かった。

「ムチャ言わないでよ。廊下歩いてたと思ったら教壇に登って大声張り上げてるんだもの。止める暇なんてないわよ」由香子が呆れ顔で言った。

「ゲホゲホ、まったくマコちゃんは気が短いんだから」

「ここまでお前を絞め殺していないというだけで、自分で自分を誉めてやりたいくらいに十分気が長いと思うんだが」

「一体なにが不満なのさ？」

「いや、むしろどこに俺が満足できる要素があったのかを聞きたいが」

「あたしとデートできるじゃない」

「何の罰ゲームだ、そりゃ？」

「竜崎、お取込み中悪いんだけど」由香子が言った。

「なんだ？今忙しい」誠が興奮して言った。

「あなたもそろそろ陽向と議論しても無駄ってことを覚えた方がいいわよ。この子、自分がこうと決めたら譲らない上に、最初っから人の話なんて聞いちゃいないんだから」

「そりゃそうだが」

「いやあ、さすが由香リン。あたしの事よく理解してるね」

「誉めてない!!」誠と由香子が同時に叫んだ。

「それにここで無視したとしても、最悪24日の朝にあなたが起きてきたら、この子あなたのお母さんと朝ご飯食べてお茶飲んでるわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」十分想像できることだったので誠は黙った。

「被害を最小限に抑えたかったら、黙って言う通りにすることね」

「ぐぐぐ、まあそこまででは100万歩譲って良しとしよう」苦痛の面持ちで誠が言った。

「懐広いんだか狭いんだかわからない譲歩だね」

「だが、なんでわざわざ俺から誘ったことにせにやならんのだ？」

「だって愛ちゃんが、そういうんだもん」

「誰だそれは？」

「康兄の彼女で2年Aクラスの子・・・・・・・・こっ个性化的な料理が得意な

人だよ。その愛ちゃんが「デートは絶対に男の子から誘う決まりなんだよ」って」

「世の中は広いようで狭いな。こんな身近にお前以上のアホがいたとは」

「まあ、とりあえず話は決まったようだし、わたしは授業に戻るわね」由香子がヤレヤレという感じで言った。

「うん、ありがとう由香リン。じゃあ24日は10時に桜ヶ丘駅東口改札に集合ね」

「はい？」

「いや、だから。24日は10時に桜ヶ……」

「聞こえてたわよ。なんでわたしまで行かなきゃならないのよ」

「だって由香リン、予定ないでしょ」

「うっ、うるさいわね。大きなお世話よ」

「クリスマスイブをたった一人きりでローソク見つめて過ごす友達を見捨てるほど、あたし薄情じゃないよ」

「わたしはどんだけ可哀想な子なのよ」

「それに由香リンは、あたしのお目付け役だし」

「あなたお目付け役の意味わかってるの？」

その時、誠が由香子の肩をポンッと叩いて言った。

「あきらめろ。俺はお前の母親と一緒に朝飯喰うはめになりたくないぞ」

「はああ〜」盛大にため息をつく二人。

「よーし、これであたしだけ仲間外れにならなくて済むもんね」陽向が一人だけ喜んでいた。

## 第5話

【土屋陽太の場合】

「やれやれ、愛ちゃんにも困ったもんだなあ」陽太が苦笑しながら言った。

「ふふふ、でもお蔭でデートする口実ができたわ」由美子も微笑みながら言った。

「それはそうだけど、由美ちゃんクリスマスはケーキ屋なんて書き入れ時じゃないの?」

「わたしは今表じゃなくてケーキを作る方に回っているから。23日までは、死ぬほど忙しいけど24日には休みもらえるわ」

「そうか。うーん、どこか行きたいところある?」

「別にクリスマスデートだって構える必要ないんじゃないかしら。二人で街を歩いているだけでも楽しいわよきつと」

「そうだね。じゃ24日は、桜ヶ丘駅の東口に10時で……」

さすがに「土屋家の良心」と呼ばれているカップルである。ネタを仕込むスキも無いのであった。

【土屋颯太の場合】

「アンナ・マリア・カリニン君」颯太が言った。

「ナンで、いきなり初登場のフルネームなんデスか?」

「さつき思いついたからだ。それより今回は大変不本意ながら君とクリスマスデートをすることになった。不本意ながら君とクリスマスデートをすることになった。大事なことなので2回言いました」

「ソータは、クリスマスデートが楽しみなんデスね」

「不本意」の方に着目せんか、バカ者」

「難しくても意味がわからなかったカラ無視しまシタ」

「どう考えても、意味がわかった上でピンポイントで無視したようにしか思えんのだが」

「そういう時には、「イヤだけど君とクリスマスデートをすることになった」と言えば通じマスね」

「ちゃんと通じてるじゃないか。それよりそう言われても傷つかんのか？」 颯太が少し心配そうに尋ねた。

「ツンなソータもかわいいと思ひマスね」アンナが嬉しそうに言った。「人に変な属性つけるな。意味は通じてても俺の意見を無視する気満々だな、お前は」

「ソータが素直になればいいんデス」

「俺は心から素直に嫌がってるんだ。いや、その話はいいんだ。ところでアンナ・マリア・カリーニン君。君はデートというものをしたことがあるのかね」

「ナンでまたフルネーム？」

「緊張するところなるのだ」

「ないデスよ」アンナがあっけらかんと言った。

「そうか、まあお前は美人と言っていい部類だからそういう経験があってもおかしくは……なっ、ない？」なぜか颯太がウロたえたように言った。

「ハイ、デートどころか男の人とお付き合いをするのはソータが初めてデス」

「俺たちの関係を「付き合っている」と言っているかどうかはともかくとして、その顔とスタイルで、今まで男と付き合ったことがないですと」

「ハイ、ワタシが純潔を奉げたのはソータだけデス」

「たかが寝ぼけた上でのキスをどれだけ美化してるんだ、お前は」

「ユーコがそう言った方がイイと……」

「あのババア。血を分けた息子をどこまで追い詰めるつもりだ」

「男の子たちからいっぱい交際を申し込まれましたケド、ワタシは中学の頃からShu一筋でしたカラ、みんな断ってきました。だからソータにはワタシを妻にする義務がありマス」

「知らんわ、そんなもん」

「ところで何でそんなコト聞きますか」

「いや、アンナ・マリア・カリーニン君がどんなデートをしたいかと思っただけな」



「いいかげんにフルネーム呼ぶの止めませんか？ソータは、デートしたくないんデスカ？」

「俺が？フハハハ、バカを言ってもらっちゃ困るな、アンナ君。25歳の健康な成人男性で日本を代表する超人気バンド「タコ&ライス」のボーカル兼リーダーの俺だよ」

「じゃ、デートプランは全部ソータにまかせマス」

「すみません。自分、調子こいてました。本当は1回もデートしたところありません」颯太は速攻で謝った。

「そこまで卑屈にならなくテモ。何が問題なんデスカ？」アンナが聞いた。

「実は基本的な質問で恥ずかしいのだが……」颯太が秘密を打ち明けるように言った。

「大丈夫。絶対に笑いませんカラ」

「……デートって何をすりやいいんだ？」

「ブーツ」アンナが盛大に嘖き出した。

颯太はリビングの隅で壁に向かって体育座りをしてうなだれていた。

「ソータ、謝りますカラ、いい加減に機嫌直してください」アンナが背中をさすりながら声をかける。

「笑わないっていったのに、大人はいつだってそうなんだ……もうエヴァなんか乗るもんか」

「碓シンジごっこはそれくらいにして。そもそもソータの方が8歳も年上デス。とにかく二人でデートプラン考えまショウ」

「そつ、そうか。Yukiに聞いたところでは買い物とかしたりするらしいのだ」

「ちようどいいデス。商店街の八百屋さんでクリスマスセールで、野菜全品2割引きだそうデスから、一緒に買い物に行きまショウ」

「??それはわざわざクリスマスデートでやるべきことなのか？」

「クリスマスセールはクリスマスにしかやってません」アンナが自信を持って断言した。

「あと食事したり……アンナ、お前何食べたい？」

「そうデスねえ、久しぶりに焼き魚、サンマなんか食べたいデスね。あとホウレン草のおひたしに、キンピラ牛蒡。お味噌汁はなめこがいデス」

「誰が今晚の晩飯に食いたいものを答えろと言った。俺はクリスマスディナーのことを言ってるんだ」

「アア、それなら何でもいいデス」

「何で晩飯の方が力入ってんだお前は？」

「ソータと一緒になら、なんでも嬉しいデス」

「そうかじゃあ俺が調べておく。24日の10時に桜ヶ丘駅の東改札口で待ち合わせよう」

さすがに「土屋家のバラエティ担当」と呼ばれたカップルである。ネタの仕込みが間に合わないほどであった。

## 第6話

【土屋康太の場合】

少年と少女は部屋で話し合っていた。少年がベッドに腰掛け少女がその前に立ちふさがるようにして少年を見下ろしていた。

「さて……………」

「……………さてとは？」

「決まっているじゃない。クリスマスデートの作戦を立てるんだよ」

「……………作戦ってお前。頼むからその全方位360度に戦をしかける癖はやめてくれないか。いったい何と戦っているんだお前は」

「わかってないなあ、康太は。僕たちは土屋家で一番古いカップルいわば最古参兵《ベテランズ》だよ。新兵の陽太君・由美ちゃん、颯太君・アンナちゃん、陽向ちゃんは……………誰でもいいや、このカップルたちに手本を示す必要があるんだよ」

「……………また、変なスイツチを入れたな。大体、俺たちと兄貴たちがカップルになったのって三ヶ月も変わらんぞ。DQの装備で言えば「ぬののふく」から「かわのよろい」に変わった程度の違いしかない」

「DQ三ヶ月もあつたらラスボスまで倒せるようになってるんだよ。だからこの戦いを完全な勝利にするためにも、完璧な計画が必要なの」

「……………たかがクリスマスデートをどれだけ大げさにするつもりだお前は」

「お祖父ちゃんがいつも言っていた海軍五省っていうのがあつてね」

「……………海軍五省？」

「一、至誠（しせい）に悖（もと）る勿（な）かりしか

一、言行に恥づる勿かりしか

一、氣力に缺（か）くる勿かりしか

一、努力に憾（うら）み勿かりしか

一、不精に亘（わた）る勿かりしか」

「……………それとクリスマスと何の関係が？」

「つまり、真心をもってデートに取り組んだか。クリスマスデートがカップルにとって大事なイベントだと宣言して、それを実行したか。デートに全力を尽くしたか。デートのために努力を傾けたか。デートに手を抜くことがなかった。ということを経海軍五省が言っているの」

「……その解釈は間違いなくお前の勘違いだと思っぞ。これ作った人もそこまで拡大解釈されるとは思ってない」

「とにかく、クリスマスデートはカップルにとってそれくらい重要なイベントってことなの」少女が力強く右のコブシを握り締めて天を仰いだ。こうなった少女を止めるすべはない。

「ということで、ジャーン」と少女はノートを取り出した。

「……なんだそれは」

「これは未来日記。またの名をLife Note」少女が胸を張っていった。

「……全然訳があつてないんだが、何なのだ」

「ふふふ、これに書いた予定は実現するという恐ろしいノートなんだよ」

「……また、変なことを。Death Noteのパクリじゃないか」少年が手を伸ばしてノートを取ろうとすると、少女が隠した。「ダメだよ。これに触れちゃうとノートをくれた天使が見えちゃうから」

「……そういう設定なわけだな。だが冷静に考えてみれば単なる予定帳ではないのか？」

「設定言うな。未来日記なの」少女が少し頬を膨らませていった。

「ああ、わかったわかった。そういうことでもいいから」少年はあきらめていった。

「とりあえず康太は何をしたい？」

「……取り立ててないが」この少女はどうせ少年の意見を聞く耳を持つてはいないのだ。勝手に計画を立てさせてもいいのだが「T國ホテルでディナー」とかいう無謀な計画を止めさせるためにも参加せざるを得ない。

「ノリが悪いなあ。えーと、まずゲーセンで康太をシゴきあげてあげるよ。陽向ちゃんにボコボコにされた恨みを晴らさなきゃ」と言つてノートに記入した。

「……俺に晴らしてもしかたないだろうに」

「そしたらお昼ご飯だね。ちよつと有名なイタリア料理屋がクリスマスランチやっているから、13:00からお昼ご飯と……」再びノートに記入した。

「それからやつぱり映画は外せないよね。クリスマスにカップルでロマンチックな映画を見なきゃイエス様だつて金属バットを振り回すよ」

「……映画つて、お前。このところずっと映画でヒドい目にあつてるのにまだ懲りないのか」

「大丈夫だつて。クリスマスだよ、クリスマス。ここでラブロマンス映画を上映しなくていつやるっていうのさ」

「……まあ、お前がいいならいいんだが。何を見たいんだ」

「『プリティ・ウイマン』が見たいの。女の子の夢だつていうから」

「……じゃ、上映時間は調べておけよ」

「わかった。じゃ時間はあけておいて「映画『プリティ・ウイマン』を見る……」つと」

「……ネタが尽きたな」

「ボクあとひとつやりたいことがあるんだけど、それまで時間があるから街をブラブラしようよ」

「……なんだやりたいことつて」

「それは秘密。でも書いておくね」と言つてノートに書き出した。

「……こんなもんか？」

「こんなもんだね」

「……海軍五省まで持ち出してきた割には、いつものデートを変わらない気がするんだが」

「気分だよ、気分。行き当たりばったりじゃなくて、二人で計画を立てたつてというのが大事なんだよ」

「……100%お前の意見だったかな」

こうして康太たちもクリスマスを迎える準備は整った。

## 第7話

【吉井明久の場合】

姉さんがリビングから僕に声をかけた。

「アキ君、ちよつとここにきて土下座しなさい」

「ちよつと待って、姉さん。いろいろと文脈がおかしい」

「ですがアキ君の顔を見てると情熱的なチュウをしたくなります」

僕は速攻でリビングの床に土下座した。ああ、背骨が伸びて気持ちがいいなあ。

「アキ君ももう大人なので言うておくことがあります」

「なんででしょうか」

「実は我が家はキリスト教徒なのです」

これはビックリ。生まれて初めて聞いた話だ。

「初めて聞いたけど、カトリック？それともプロテスタント？」

「いえ、もつと古いシスコンニウス派という教派です」

「聞いたことないというか、いろいろと怪しげな教派だね」

「ギリシャの聖人シスコンニウスが開いた教派で、イエス様がシスコンであったと主張する一派です」

「滅ぼしてしまえ、そんな教派」

「その斬新な教義ゆえに325年のニケア公会議で異端とされた教派です」

なんで1700年前に異端とされたキリスト教の教派が日本に伝わったのかとか、我が家がピンポイントでそんなものの信者なのかとかツツコミたいところは山ほどあるが、話がややこしくなるのは必至なので、黙っておくことにした。

「何でそんな大事なことを今まで黙っていたのさ」

「バチカンのイスカリオテ機関の目を欺くためです。もしシスコンニウス派が日本に生きていると知れたら、アレキサンドル・アンデルセン神父がスキップしながらやってきちゃいます」

「いや、あの人はイギリス方面で忙しいからそんな心配はいらないんじゃないかなあ？」

「よく分かりませんが……それはそうと、もうすぐクリスマスです  
ね、アキ君」

「そうだね。冬休みだね」

「アキ君はクリスマスがどういう日なのかは知っていますか？」

「えっ、イエス・キリストの誕生日じゃないかっただけ？」

「それは他派の解釈です。我がシスコンニウス派では、イエス様が初  
めて大好きな姉さんにプレゼントをした日とされています」

「ストップ、姉さん。イエスはマリアが処女懐胎したから神の子って  
言われてるんで、姉さんがいたら処女もへツタクレもないんじゃない？」

「アキ君はやっぱ子供ですね。この世には処女膜再生手術というの  
があるのですよ」

「キリストの奇跡を根本から否定しちゃったよ。今のは全世界のキリ  
スト教徒を敵に回す発言だよ、姉さん」この人は、今あるものは20  
00年前にもあったと思ってるんじゃないだろうか？

「他派のことはどうでもいいのです。シスコンニウス派にとってクリ  
スマスとは、イエス様が最愛の姉さんにプレゼントをしたことを記念  
して祝う日なのです」

「最愛の姉さんって」

「イエス様は姉萌えだったのです」

「そういう性癖は、そつとしておいてあげようよ」

「というわけで、シスコンニウス派はニケア公会議で異端とされたの  
です」

「その教派が公会議までの300年間近くも弾圧されなかつたって  
いうことの方が驚きだよ」

「ですからシスコンニウス派にとってクリスマスとは、イエス様が姉  
萌えであったことを祝いする大切な行事であり、弟から姉さんにプ  
レゼントをする風習があるのです」

「妹しかいなかったり、一人っ子や男兄弟だったらどうするのさ」

「そんな不信心者は破門です」

「ばっさり、切り捨てちゃったよ。でも死後2000年近く自分がシ  
スコンであったことを、世界規模で毎年祝われた日にやあ、いくらイ



エス様でも人類滅亡させたくなくなるんじゃないかと思うんだけど」

「シスコンニウス派は懐が広いのです」

「そうなの？」

「ですから姉さんは、結婚式は白無垢を着て神前式でやるつもりです」  
「いくらなんでも懐広すぎ。それ教派どころか宗教をまたいでいるから」

「アキ君がウエディングドレスがいいというなら、ウエディングドレスにしますけど」

「いや、別にそういう意味じゃないんだけど」

「というわけでクリスマスが近づいてきましたので、アキ君にこれを渡しておこうと思ひまして」そういうと姉さんはパンフレットを僕の方に放った。

「えくつと、これって」

「アキ君が姉さんへのプレゼントを悩まないように、姉さんの方からリクエストしてあげます。姉さんは、そのカルティエの三連リングが希望です」

いろいろと人とズレてるところも多い姉さんだけど、指輪が欲しいだなんてやっぱり女性だったんだなあ。どれどれ三連リングとやらは……

「ちよつと、ちよつと姉さんこれ……」

「綺麗ですよ。やっぱり最愛の人から指輪を送ってもらおうというのが、女の子の夢ですから……」姉さんは遠い目をして言った。

「いや、そんなことじゃなくて、これ僕の小遣いのほぼ1年分」なんか不穏なことを言っていたような気がするが、そんな些細な問題に構っている場合じゃない。

「ちやんと貯金しておいて下さいね」

「無理。クリスマス4日前にいきなりこんなの見せられて1年分の小遣い貯金しろって言われても絶対無理だから」

「お黙りなさい。アキ君は、姉さんがその程度のことも考えずにプレゼントをねだったと思っっているのですか？」

「何か方法があるの？」

「大阪のミナミの萬田銀次郎という偉い人が「身体で2つあるものは、1つくらい売ってもどうっちゅうことはないんじゃない」と言っておられます」

「何でそこまでしなけりやいけないんだ」この調子ではイベントのたびに僕は身体を切り売りするハメになってしまう。

「姉への愛に生き、姉への愛に殉じるのが、我がシスコンニウス派の教義です」

「それはもうキリスト教関係ないよね」

「アキ君がいい子にしてたら、イエス様が何とかしてくれますよ」姉さんは、そう言つてニツコリと微笑んだ。

イエス様にそんな力があるならば、主食が塩水になってしまつている僕の食生活からなんとかしてもらいたいと、心から願つた。

【坂本雄二の場合】

ドアに空いた窓からトレイが差し出された。

「……雄二、食事」

「翔子か。今日は何日だ」下校途中で布で口を塞がれて、気がついたらこの部屋にいた。あれから何日過ぎたのだろう。

「……そんなことはどうでもいい。大事なのはクリスマス」

「家は連休に家族で旅行に行く予定だったんだが」

「……オバ様の許可は取つてある」

「拉致の許可か？」

「……「よろしくね」つて言つていた」

「あのババア。少しは心配しやがれ」

「……大丈夫、雄二は私が守る」

「俺を襲うなんて奴はお前しかいないんだが」

「……ここにいれば安全」

「ここが一番危険な場所なんだよ、いろいろと」

「……じゃ」そういうと翔子は戻つていった。

「おい、翔子。だから今日は何日なんだ」雄二の声が虚しく響いた。

【四馬鹿の場合】

「おい、クリスマスどうすんだ」A t s u s h i が言った。

「クリスマスって、誰か予定があるのか」G o n が尋ねた。

「二．．．．．」

「しようがない、また「クリスマス記念桃鉄大会」だな」

「その前日は「天皇陛下ご生誕記念桃鉄大会」とか言っただけじゃなかったか？」

「日本人として陛下の誕生日を祝うのは当然のことだな」

「じゃあまた勝負だな。現在のところ俺が821勝、Y o u が754勝、G u u が608勝、G o n が121勝だな」とA t s u s h i が言った。

「何で俺だけそんなに勝率が悪いんだよ」G o n が言った。

「お前が毎回、水戸黄門のようにキングボンビー引き連れて歩いているからだよ」Y o u が答えた。

既に「女にモテるぜ」というバンド設立の目的を誰ひとりとして覚えていない四馬鹿であった。

そして全ての者の上にクリスマスは平等に訪れる．．．．．

## 第8話

12月24日午前10時。桜ヶ丘駅東口改札前……

「一体どういうことなのさ」少女が言った。

「……どうということとは？」少年が答えた。

「この状況のことだよ」少女が改札前を指差していった。

改札前には数m置きに颯太、陽太、そして試召戦争の時に窓ガラスを割って飛び込んだきた1年生の男生徒が人待ち顔で立っていた。

「そしてこっち」再び指差した反対側の柱の影に、アンナ、由美子、陽向と1年生の女の子が様子を伺うように隠れていた。

「なんで揃いも揃って、みんなこの駅のこの改札でこの時間に待ち合わせているのさ。これじゃクリスマスデートじゃなくて、みんなでお出かけたよ」と少女が言った。

「……原因は100%お前のやったクリスマスデート講座のせいだと思っただが」少年は答えた。

「なんでボクのせいなのさ」

「……あの時、デートプランまで説明しただろう」

「まあ、一応の例として……」

「……由美子さんはそれを素直に受け止めた。アンナは他に場所を知らない。陽向はアホだから何も考えずにそのまま実行した。その結果、全員がこの場所を待ち合わせにしたわけだ」

「少しは応用とかしなよ」

「……俺に言われても困る。それより問題は、全員がお前の訳のわからんこだわりを真似して、待ち合わせ時間より早くついているにもかかわらず男性陣が来るのを柱の影で監視している」

「デートの基本だよな」

「……頼むからこれ以上、そのアホなこだわりを拡散しないでくれ」

「ねえ、陽向。わたし達ここで何しているの？竜崎さつきから待っているわよ」

「由香リンは、デートの作法を知らないんだね。デートは女の子が待

ち合わせに遅れて「ごめん、待った」って言うもんなんだよ」

「どこのストコドツコイからそんな作法聞いてきたのよ。竜崎かなり頭にきているわよ」

「しょうがないなあ。あと30分は待たせるつもりだったのに、じゃ行こうか」

「それやったら竜崎帰つてると思うけど。とにかくあなたが謝りなさいよね」

「やつほー、マコちゃん。お待たせ」

「ゴン!!」陽向が手を上げて竜崎に近づくと同時にゲンコが飛んで来た。

「無理やり人を引っ張りだしといて、どれだけ待たすんだ、このアホ陽向」

「痛あゝい。デートに誘ったのはマコちゃんじゃん」

「ゴン!!」再びゲンコが飛んで来た。

「お前が無理やり俺にデートに誘えと言ってきたんだらうが」

「あのね。そんなに頭殴るとバカになっちゃうから」

「心配するな。お前はキャパいっぱいのアホだ。これ以上悪くならん」

「竜崎、お取り込み中のところ申し訳ないけど、この調子じゃ夕方までここでケンカするはめになるよ。さつきと行こう」業を煮やした由香子が無理やり二人を引っ張っていった。

「待ちましたか、ソータ」アンナが颯太のところに駆け寄って言った。

「待ちましたかじゃねえ。朝お前にたたき起こされて八百屋のクリスマス2割引セールとやらに引っ張っていかれて、山ほど買い物したまま一緒に電車で来ただろうが。どこ行ってたんだ」

「アイコが男性を待たせるのがデートのルールと言っていましたカラ、そこの柱に隠れてました」

「ここまで一緒に来たのに待ち合わせする意味がねえだろうが。というかこの両手いっぱい野菜どうすんだ」

「いい買い物ができますタ」アンナが満足そうに言った。

「このままデートするつもりか?」

「捨てるわけにはいきませんネ」

「デート終わってから買い物すりやよかつたんじやねえか」

「それでは売り切れてしまいマス。セールは女の戦場ですネ」

「どんだけ日本に馴染んでるんだお前は。日本のオバさんみたいなのと言ってるじやねえか」

「とにかく行きまショウ」

「なんかいろいろ事情があるみたいだね」少女が言った。

「……もうすでにクリスマスもへったくれもないような気がするんだが、でどうするんだ」

「ボクたちにはこれがあるんだよ」と言っただけ少女はノートを取り出した

「……なんだそれは」

「もう忘れたの？ 未来日記だよ。これにちゃんと予定を書いてきたからね。その通りに行動しなきゃいけないんだよ」

「……逆らっても無駄なんだろうな。で、まずどこ行くんだ」

「うん、ボク行きたいところがあるんだ」少女が行った。

「じゃあ、まずそこに行こう」少年が答えた。

「……」

「キヤハハハ……」

「……おい」

「キヤハハ、金さんってば……」

「……おい、愛子さん」

「キヤハ……え、何かな？」

「……何かなではない。お前が行きたいところというのはコンビニのことか」

「だって、今週の金魂読みのがしたから、ちよつと立ち読みを……」

「……クリスマスデーのしよっぱなにやることじやないだろうに」

「ハハハハ……えつ、何か言った」

「……いや、何でもない。せめてコンビニで立ち読みして大声で笑うのは止めてくれ」

## 第9話

「いやあ、今週の金魂も面白かったね」満足そうに少女が言った。

「……楽しめたようでなによりだ」皮肉っぽく少年が言った。

「うん、ボクの金魂エピソードベスト200に入る出来だったね」

「……ビルボードのチャートより範囲が広いじゃないか。本当に面白かったのか、それは？」

「だからベスト200に入る出来だと……」

「……わかったわかった。しかし初っ端から「未来日記」とやらから外れているではないか」

「そんなことないよ、ホラ」と言っただけ少女はノートを開いて見せた」

「2012年12月14日 10:30 康太とコンビニで仲良く立ち読み。今週も金魂は面白かった」

「……予定立てて立ち読みするんじゃない。さっきの店でジャンポが売り切れだったらどうするんだ」

「ふふふ、ボクを甘く見てもらっちゃあ困るなあ。そういうことも見越してあえて店名を入れずにコンビニとしたんだよ。売り切れだったら別のコンビニに行けばいいんだよ」

「……なんでクリスマスデートで、ジャンポ求めてコンビニ巡りせにやならんのだ」

「それよりも心配だったのは、今週の金魂が面白くなかったらどうしようと思っただけドキドキしちゃったよ」

「……心配すべきところは他にあるんじゃないのか」  
こうして二人でコンビニから出た。

「……で、「未来日記」とやらでは、次の予定はなんなんだ？」  
「ギヤラクシーに行つて康太をストリートファイターでボコボコにした」だね」ギヤラクシーとは、この街で一番大きくて新しいゲームセンターだ。

「……そこは普通に「ゲーセンに行った」でいいと思うんだが」  
「ボコボコにしないとボクの気がすまないんだよ」

「……「未来日記」なのに、お前の本音がダダ漏れしてるぞ」

10分ほど歩いてギャラクシーについた。中に入ると人だかりがしていた。

「……なんだこの人ゴミは」

「よっぽどウマイ人がプレイしてるのかな？」

「……全然前に進めんな」

「今後のプレイの参考になるかも知れないから、ちよつと見ていこうよ」そう言う少女は人ゴミの中にツツコンで行った。

「ふう、やっと前にでたよ。さてどんな名人がプレイを……アつ、アンナちゃん？」

そこにはドラムマニアを叩いているアンナの姿があった。

「……スゴいな。Super Hardでプレイしてるぞ。あれってプロのドラマーでも難しいらしいぞ」

「スーパーパーモデル並みのスタイルの銀髪美人がSuper Hardでプレイしてたら、そりゃ人だかりもできるよね。みんな写メ取りまくりだよ」

「……まあ、プレイ中は口がきけないからな。口開けば天然ボケのオタクなんだが」

「それはそうと颯太君はどうしたんだろう？」二人が周囲を見渡して颯太を探したら、柱の陰から顔を半分だしてアンナを見つめている颯太を見つけた。

「あそこにいるけど、どうみてもアンナちゃんのストーカーだよね、あれ」

「……デート中と言っても誰も信じないな」

「まあ、デートの形は人それぞれだから。じゃ、行こう」

「……助けるつもりは全くないわけだな、お前は」

「康太、ストリートファイターはこっちだよ」少女が少年に声をかけた。

「ふふふ、ほらほらマコちゃん、そろそろライフが無くなっちゃうよ」陽向の楽しそうな声が聞こえてきた。

ストリートファイターの筐体に陽向が、反対側の椅子に同級生の男生徒が座って、必死な顔でレバーを操作してた。



「てめえ、陽向。こっちは初めてなんだ少しは手加減しやがれ」

「十分手加減してあげてるよ。開始から30秒は攻撃してないし、レバーとボタンを逆の手で操作してあげてるんだよ」

「このアホ、こんなことまでこなしやがる」男生徒が悔しそうにつぶやいた。

「ねえ、竜崎。あんたが負けず嫌いなのはわかったけど、もう1000円も使ってるのよ。いい加減にしといたら」女生徒が呆れたように言った。

「……………デジャビュだな」少年が言った。

「しばらく空きそうにないみたいだから別なところに行こうか」

「ねえ、康太」少女が言った。

「……………なんだ？」

「さつきからプリクラのところに陽太君たちがいるんだよね」

「……………プリクラ撮るつもりなんだろう」

「ボクもそう思ってたんだけど、15分もあややって立ち尽くしてるんだよね。何してるんだろう？」

「これがプリクラっていうものなのね……………」由美子が言った

「そうみたいだね。初めて見た」陽太も言った。

「……………」

「……………」

「これで写真が撮れるのね……………」

「写真が撮れるんだね……………」

「……………」

「……………」

「二人で撮るのって初めてね……………」

「初めてだね……………」

「……………」

「……………」

「だっ、大丈夫かしら……………」

「大丈夫だよ、僕がついてる……………」

「あの二人、プリクラっていうのがどんな機械なのか理解してないん

「じゃないのかな？」少女が不思議そうに言った。  
「・・・かなり悲壮な決意をしてるみたいだが」  
陽太たちがプリクラを撮り終るのに、さらに10分を要した。

## 第10話

少年と少女はその後コインゲームをしたり太鼓を叩いたりして遊んだ。

「……おい、愛子。ストリートファイターをしなくていいのか」

「うーん、まだ陽向ちゃんがいるかもしれないから……」

「……別にいいだろう。ちよつと代わってもらえば」

「代わってくれるだけならいいんだけどね。勝負申し込まれたりしたら……」

「……別に勝負してやればいいではないか」

「何てことを言うのさ、康太は。大事な彼女がボコボコにされてもいいって言うの？」

「……俺をボコボコにすると、わざわざ未来日記に書いた奴が言うセリフか」

ストリートファイターの方へ行ってみると、陽向たちはいなかった。

「よし、じゃあ一丁揉んでやるよ康太」

「……いや、別に俺がやりたいわけじゃない」

「ダメだよ。もう未来日記に書いちゃったんだから」

「……やれやれ」

5秒でボコボコにされた。

「……ちよつと待て愛子。いくら何でも初心者相手に本気出しすぎだろう。俺はほとんど何もしてないぞ」

「ふふふ、全力で向かってくる相手に本気を出さないのは失礼だよ」

「……だから全力も何も、俺はただ立ってただけなんだが」

「ほら、ゴチャゴチャ言っただけで次のラウンドだよ」

そこからは愛子の繰り出す華麗なコンボ技のオンパレードだった。

「いやあ、楽しかったね」少女は上機嫌で言った。

「……それは何よりだ。俺は取り出せない貯金箱に金を入れてる気分だった」

「お腹すいちゃったから、ランチ食べに行こうよ」

「それはいいが店知っているのか」

「ふふふ、クリスマスデートの情報はこちらと調べてあるって言っちゃない。黙ってボクについて来て、惚れ直すといいよ」

5分ほど歩いて店についた。

「ここは女の子に人気のイタリアンのお店で、その名も「イル テアトリノ デル ダ アクア パッツア」だよ。魚介類が人気で鮪のアルフォントがお勧めだね。」

「……鮪の何だって？」

「鮪をアルフォントしてあるんだよ」

「……要するに知らないんだな」

「うるさいよ、康太。じゃ行くよ」少女は意気揚々とドアを開けて入って行った。

「いらっしやいませ、ご予約でございましたでしょうか？」ウエイターが近寄ってきて言った。

「えっ？いえ予約はしてないんですけど」少女が怯んだように言った。

「申し訳ございません、お客様。本日はクリスマスディナーということでご予約のお客様だけになっております」

「えーっと、合い席でもいいんですけど……」

「大変申し訳ございません」

「ランチ程度で大きな店だね」少女は憤慨して言った。

「……どうするんだ、おい」少年が言った。

「ふふふ、こんなこともあるのかと次の店も調べてあるんだよ」少女が誇らしげに胸を張って言った。

「……そこまで威張るなら、「こんなこと」がないようにして欲しいのだが」

「康太は男のクセに細かいなあ。もうイタリアンは止めた。やっぱり料理と言えばフレンチだね」2人は再び歩き出した。

「ここが有名フレンチのお店、「ガストロノミー ル・ジュー・ドウ・ラシュリール」だよ。マダムビュルゴーのシャラン鴨胸肉のロースト

パンデビス風味レモンとコーヒーの香りソースが大人気」

「……どうでもいいが知ったかぶりするならば、メモをチラチラ

見ないでちゃんと記憶してくれないか？」

「うるさいなあ。ちゃんと雑誌の切り抜きを持ってきたんだからいいんだよ。さあ、行こう」少女は再び意気揚々とドアを開けた。再びウェイターが近寄ってきた。

「いらつしやいませ。ご予約でしょうか」

「えーと、もしかして今日は予約だけなんでしょうか？」少女が恐る恐る尋ねた。

「はい、さようでございます」

「念のためにお尋ねしますが、合席というのは……」

「申し訳ございません。そのようなシステムはございません」

「だからボクは洋食は嫌いなんだよ」

「……クリスマスはイタリアンでランチとか言ってたなかつたか？」

「やっぱり、アジア人はアジア料理だね。中華料理屋に行こう」

「……ちよつと待て愛子。いくらなんでもクリスマス中華というのはないだろう。だいたい、未来日記にイタリアンでランチと書いてあるんじゃないのか」

「つつつ、ボクを舐めてもらつちやあ困るなあ。こんなこともあるのかと、未来日記にはランチとしか書いてないよ」

「……だからそもそも「こんなこと」がないようにしろと言っているのだ。もう、手近なところであそこでいいんじゃないのか、一応イタリアンだ」と言つて少年が指差した。

「……シャイゼリア。いくら何でもクリスマスランチでファミレスつて、康太センスなさすぎ」

「……中華料理屋に行こうとしていた奴が言うセリフか。あそこなら予約もいらん。行くぞ」少年が歩き出した。

二人で店内に入るとウェイトレスがやってきた。二人であることを告げたとき

「愛ちゃん、こつちこつち」という声があった。

そちらの方に目をやると、颯太以下全員が揃っていた。

## 第11話

「あれ、どうしてみんな揃っているの?」と言いいながら少女は颯太たちのいる席に近づいた。

そこには、颯太とアンナ、陽太と由美子、陽向と同級生の男生徒と女生徒が座っていた。

「どうしてもこうしても、愛ちゃんが教えてくれた店は、全部今日は予約だけと言われたんだ」颯太が忌々しそうに言った。

「いや、あれは別に紹介したんじゃないやなくて、例としてあげただけで別の店に行けば良かったんじゃないかな……」少女が小声でつぶやいた。

「……結局、お前のせいではないか」

「なんでボクのせいなのさ、康太?」少女がムツとしたように言った。

「……お前のクリスマスデート講座でちゃんと教えなかったからだ。クリスマスのレストランは予約しないと入れないというのは、俺でも知ってる常識だぞ」

「ムム、ボクの完璧なりサーチに思わぬ穴があったとは……」

「……穴どころか底が抜けてるわ。危うく昼食難民になるところだった」

「そんなもんになるわけじゃないじゃん。いざとなれば立ち食いそばでも食べればいいんだよ」少女がムキになって言い返した。

「……何が悲しくてデートで立ち食いそばを食わにやならんのだ。そもそもロマンチックなクリスマスデートを言い出したのは……」  
「まあまあ、無事に食事にありつけたからいいじゃないか」見かねた陽太が割って入った。

「そうよ、愛ちゃん。それにこのお店のサービスはスゴいのよ」由美子が感動した面持ちで言った。

「えーっと、この店ってそんなにサービス良かったですかね?」少女の記憶ではごく普通のファミレスだったはずなのだが……

「ええ、飲み物を何種類、何杯飲んでも同じ料金なの。わたし感激してカプチーノを3杯も飲んじゃたわ」由美子の顔は喜びに輝いていた。

「……それって単なるドリンクバーなんじゃ」恐らく由美子はファミレスというところに来たのは初めてなのだろう。

「そんなことよりそろそろ食事を注文しよう。アンナは何が食べたいんだ？」颯太が言った。

「ハイ、ワタシはカツ丼がいいデス」銀髪のロシアン少女はキツパリと言いつつ切った。

「ほう、イタリアに正面からケンカを売りやがったな。俺も長いこと日本人をやってるが、カツ丼がイタリア料理だったとは知らなかった。ここにメニューがあるから、隅々まで読んでカツ丼が載ってたら注文しろ」

「アンナちゃん、トンカツはカツツレットが起源だから、イタリアじゃなくてフランス料理だよ」少女が注意した。

「……井という時点で日本料理だ、バカ者」少年がたまりかねて叫んだ。

それぞれの料理を注文し終えた時、颯太が言った。

「ところで陽向。その少年少女は誰だ？」

「ああ、同級生のマコちゃんとユカリんだよ」陽向がストローをくわえたまま答えた。

「そうか、俺は陽向の兄の颯太で、隣が次男の陽太、向かいにいるのが彼女の由美ちゃん。陽太の隣が三男の康太で、その向かいにいるのが彼女の愛ちゃん。俺の向かいの外人が交換留学生でうちにいるアンナだ。よろしくな、ユカリんにマコちゃん」

「あんたまでマコちゃん言うな。俺は竜崎誠です」

「城ヶ崎由香子です」

「ソータ。なんでワタシのことをチャンと妻と紹介しませんか？」アンナが不平をとなえた。

「妻？」

「これ以上、妙な誤解を拡散させてたまるか。すまん、二人共。アンナはまだ日本語が不自由な上に頭が少々残念な子なんだ。時々妄言を吐くが無視してやってくれ」

「はあ」二人は狐につままれたような顔で答えた。

「で、陽向。マコちゃんはお前の彼氏なのか？」陽太が尋ねた。

「やだなあ、颯兄。あたしの口からそんなこと恥ずかしくて言えないよ」陽向がワザとらしく体をクネらせながら言った。

「ハッキリキツパリ否定しろ、アホ。別に恥ずかしがるところなんざ少しもないだろう。「ちがう」の3文字で済む話じゃねえか」誠が叫んだ。

「ははは、マコちゃん。そう恥ずかしがらなくていいぞ。俺たちは別に反対はしないからな。君なら安心して陽向を任せられる」

「だから、違うって言うてるだろうが」

「じゃあ何でクリスマスデートなんかしてるんだ？」

「あんたの妹にハメられて、脅迫されたからだよ」

「なに？じゃあユカリんが君の彼女か？安心しろマコちゃん。俺たち兄弟は懐が広い、たとえ他に彼女がいたって、君に陽向を任せることに何のためらいもない」

「俺に厄介払いする気マンマンだな、あんた」

「人の話を全く聞かないのはどうやら家系のようなね」由香子がつぶやいた。

「厄介払いとは失敬なことを言うマコちゃんだ。これでも兄として陽向のことを考えているんだ。まかすのは誰でもいいという訳じゃないぞ」颯太が神妙な様子で言った。

「とてもそうは思えなかったんだが、そうなのか？あと、マコちゃん言うな」

「そうだ。任された後、俺たちには絶対に迷惑をかけないという重要な条件が……」

「上下左右裏表どこから見ても厄介払いじゃねえか」

「マコちゃん、君はちよつとカルシウムが足りないんじゃないか？そんなに怒っていたら疲れるだろうに」颯太が涼しい顔で言った。

「颯兄、マコちゃんはいつもこんな感じだから、気にしなくていいよ」

「誰のせいだと思ってるんだ」誠が怒鳴った。

「まあ、というわけで陽向のことをよろしく頼む」

「やだなあ、颯兄。あたしテレちやうよ」陽向が頭を掻きながら言っ



た。

「俺の話を聞け」誠が再び怒鳴った。

ちようど誠が絶叫した時に料理が運ばれてきて、結局話はウヤムヤのまま終わった。

## 第12話

「いやあ、美味しかったね」少女が満足げに言った。

「じゃあ、あたしたち映画が始まっちゃうから行くね」と陽向が言つて、3人は映画館の向かつて歩いていった。

その時に反対側から来た5人の不良高校生らしき連中が絡んできた。

「おい、色男。クリスマスに両手に花か？」一人が誠に言った。

「うるせえ、急いでるんだ」誠が静かに言つて脇をすり抜けようとした。

「マコちゃんはなかなか度胸があるな」颯太がそれを見て面白そうに言った。

「一人ぐらい分けてくれよ」別の男がニヤニヤしながら言った。

「城ヶ崎、俺の後ろに隠れている」誠が言った。

「ほう、なかなか漢気もある」颯太が言った。

「いいカツコするじゃないか、色男」ガタイのいい男が言った。

「ねえねえ、マコちゃん。あたしはどうすればいいの」陽向が期待に目を輝かせながら言った。

「お前は、あいつらに突っ込め」誠がためらいもなく言った。

「なるほど、判断力も素晴らしいようだ」颯太が感心した口調で言った。

「感心しないで、助けてあげた方がいいんじゃないですか？」少女が慌てた口調で言った。

「助けるって、あんな不良連中俺は知らんぞ」颯太が不思議そうに言った。

「いや、不良を助けるんじゃないやなくて陽向ちゃん達ですよ」

「ははは、愛ちゃんは面白いことを言うなあ。陽向相手に不良がたつた5人じゃあ、武田騎馬軍団に百姓が鋏で立ち向かうようなもんだ」颯太が面白いことを聞いたという風に大笑いした。

「なんでユカリんと扱いが全然違うのさ」陽向が憤慨して言った。

「お前なら大丈夫だろう」

「そういう問題じゃなくて、男なら女の子を守るのが義務なんだよ」陽向は、誠の後ろに回ると誠の尻を蹴り飛ばした。

「マコちゃんがあたし達のために不良に立ち向かってくれた。キヤ―(棒)」

「ち、見せつけやがって」一人が加えてたタバコを吐き捨てると、誠に向かって殴りかかってきた……

「グオオオオオ」いつの間にか傍まで来ていた颯太が、殴りかかって来た不良の顔面にクローをする、そのまま体を高々と持ち上げた。

「暴力はいかなあ、少年。何事も平和が一番だぞ」

「……中学、高校と不良との抗争にあけくれて、区中の不良を撲滅した奴の言っているセリフじゃないと思うが」

「グググ、離せオヤジ」

「ハハハ、こんな好青年を捕まえて親父はないだろう……シミシミ」声は笑っていたが目は笑っていなかった。

「グオオオオオオ……ほっ骨が」

「骨の一本や二本で細かい奴だな。折れたらそこが強くなると聞いたことはないのか」

「ねえ、康太。颯太君、もしかして怒ってない？」

「……あの男は中学時代から老け顔で、オヤジと呼ばれていたからな。あの不良は触れてはいけない逆鱗に触れたわけだ」と康太が言った。

「颯兄、あたしたち時間がないから、もう行くね」陽向がシレつと言った。

「おお、この少年たちには俺がキチンと言い聞かせておくから、たつぷり映画を楽しんでこい」颯太がそちらを見ながら言った。

「離しやがれ、このクソオヤジ」と叫びながらも一人が殴り掛かってきた。それなりにケンカ慣れしているらしく、颯太が不良を持ち上げている右手の側から攻撃してきた。

その時、アンナが二人の間に割り込み膝を曲げて身体を沈めたかと思つと、肘を下から振り上げ不良のみぞおちに叩き込んだ。

「グオオオオオ」みぞおちに肘を食らった不良は地面をのた打ち回つ

た。

「ほう、やるじゃないかアンナ」颯太が感心して言った。

「これぞ、宇宙CQC 2nd Edition Version 2.07デス」アンナが誇らしげに言った。

「CQC以外全くわからんのだが」颯太が言った。

「・・・何だかいろんな設定が混ざっているようだが」康太が首をかしげながら言った。

「だから、宇宙CQC 2nd Edition・・・」アンナが繰り返した。言った。

「いや、聞こえなかったという意味じゃない。何だその「宇宙」ってのは」

「カッコいいですネ」

「カッコイイからつけただけか。じゃ、2nd Edition Version 2.07ってのは何だ」

「この名前を手がかりに、2036年からやって来るワタシたちの娘の「土屋・アナスターシャ・鈴羽」がソータを見つけ出します」

「勝手に俺を巻き込んで、どこまで綿密に未来設計をやってんだ、お前は」

「大丈夫デス。根性で必ず女の子を産んでみせます」両コブシを握りしめて言った。

「そんなことを言ってんじゃない。だいたい何でわざわざ娘が俺に会いに2036年からやってくるんだ。普通に家に帰ってくればいだけだろうが」颯太が叫んだ。

「その頃には、ソータもワタシも死んでるからですネ」

「縁起でもねえ人生設計立ててやがんな、お前は」

「あのく、すいませんでした。俺たちもう行っていいですか？」不良の一人が言った。

「まあ、別にかまわんが。この区で不良なんて珍しいな。俺たち五鬼龍が完全に全滅させたはずだが」

「はあ？五鬼龍ですか？」不良が首を捻った。

「そうだ、聞いたことあるだろう。五鬼龍の武勇伝を」

「すいません。聞いたことないっす」恐る恐る不良が言った。

「ねえ、颯太君。五鬼龍って何のこと」少女が不思議そうに尋ねた。

「ん？俺や篤たち五人のことだが」

「そんな名前で呼ばれていたってというのは、初耳なんだけど？」少女が言った。

「いや、カツコイイかなって今思いついたんだが」颯太が答えた。

「それじゃ、その人たちが知ってるわけじゃないじゃない。普通に五馬鹿でいいんじゃないかな」

「ごつ五馬鹿……」不良の顔がみるみる青ざめた。

「知っているのか？」颯太がやや不機嫌そうに尋ねた。

「伝説の女裏番Yukiの子分で区中の不良を襲ってツブしたという五馬鹿のことなら有名です」

「ちよつと待て、コラ」颯太が叫んだ。

「なんかYukiさん本人が知らないうちに伝説になってたみたいだね」少女が言った。

「……大名の子孫の名家の嫡子が女装裏番と親に知れたら、勘当じゃすまん」

「お前ら5人そこに並べ。何もしないから並べ。俺が今からあの口クでなしのYukiの真実を教えてやる」

5人の不良は颯太に言われるままに大人しく並んだ。

「いいか。そもそも俺たちはYukiの子分じゃない。Yukiが作戦を立てて俺たちはその指示通りに動いて不良をやっつけていただけだ」

「そういうのを日本語では、子分というんじゃないのかな？」少女が言った。

「卑怯にもあいつの後ろにはヤクザよりも恐ろしい組織がついていて、俺たちを虐げていたのだ。お蔭であいつのことを無理やりきかされていた」

「……もしかして裕ちゃんたちのことかな？」

「……それ以外ないだろ」

「大体あいつは、自分勝手な奴で自分はたくさん彼女がいたのに、女の

「一人も俺たちに紹介せん」

「だんだん私怨が出てきたね」

「……………こうなると長いぞ」

「兄貴、おれたちもう行くぞ」陽太君が言った。

「陽太君、お兄さん大丈夫かしら」由美子が心配そうに言った。

「……………大丈夫です。どちらかと言うとかわいそうなのは不良たちの方で」少年が言った。

「じゃ、ボクたちも行こうか」少女も言った。

そうして4人は映画館の方に向かって歩きだした。

その背中から「あれだけ彼女を持っているんだから、一人くらいわけてくれてもいいとは思わんかね、君たち」颯太の妬みの声が延々と聞こえた。

## 第13話

「むむむむ……」少女は腕組みをして映画館の入口を睨んでいた。

「……おい、愛子」

「むむむむむう……」

「……あの？愛子さん」

「なにさ」

「……いつまでも入口で映画館を睨んでいたら、他のお客さんに迷惑ですよ」できるだけ少女を刺激しないように言った。

「……この映画館は、なにがどうあってもボクにホラー以外の映画は観せないつもりなんだね」

「……そんなことはないと思うのだが」

「ボクはね、康太……」

「……はい」

「今日という今日は、ホラー以外の映画だったら、例えCMの時にREM睡眠に突入して、エンドロールで目が覚めるような映画でもいいくらいに覚悟で来たんだよ」

「……それで映画を観たと言えるかどうかは別にして、覚悟だけは伝わってくるな」

「なのにこの仕打ちは何なのさ」少女がポスターを指差して叫んだ。

「シネコンプレックス桜ヶ丘が送るクリスマス特別企画」

カッパルのお二人に送る全館ホラー祭り

抱き合うもよし、一緒に叫ぶもよし。

吊り橋効果で二人の絆はより強く」

「……クリスマス特別企画らしいな」

「どこの世界にロマンチックなクリスマスにホラー映画しか流さない映画館があるのさ」

「……あるのさと言われても、目の前にあるとしか言えないんだが」

「A館が「呪怨」、B館が「リング3」、C館が「13日の金曜日」 p a

rt 10」、D館が「エルム街の悪夢5」、E館が「シックス・センス」、F館が「パラノーマル・アクティビティ」、G館が「テキサス・チェンソー」って、全部ホラーじゃん。何を見ればいいのか？」

「……そこまでいやなら映画は止めればいいんじゃないか？」少年が言った。

「だってもう未来日記に「映画館でプリティ・ウイメン」を観たって書いてあったもの、グス」少女は涙声になりながら言った。

「……それをやってない段階で未来日記もヘツタクレもないだろうが」

「ここで映画まで止めちゃったら完敗だよ。映画を見れば半分の負けで済むじゃない」

「……毎回思うんだが、お前はいつも何と戦っているんだ？」

「とにかくボクたちの知力とカンの限りを尽くして、一番怖くない映画を選ばなきゃ。康太も頑張りなよ」少女は力を取り戻したようであった。

「あの？陽太君大丈夫。無理して映画見なくていいのよ」由美子が心配そうに言った。

「ははは、由美ちゃん。何を心配しているんだい」

「いえ、さつきから顔色が悪いから」

「風邪気味なのかな。で、由美ちゃん何を見るのか決まった？」

「えーっとそうねえ。1と2は見たからリング3がいいんじゃないかしら」

「さつ貞子の映画だね。よし、それを見よう」陽太が歩き出した。

「陽太君、切符売り場はこつちよ。そつちは逆」

不良たちに説教をしていた颯太たちも到着した。

「おい、アンナここで映画を見るつもりなのか？」颯太が言った。

「そうデス。アイコのレクチャーではクリスマスデートでは映画を見るのがルールだと」

「いや、あんまり愛ちゃんのいうことをマトモに受け取らん方がいいと思うんだが」

「デモ、この街には他に映画館ありませんネ」



「別のことをすればいいんじゃないか？」

「ソータ、もしかしてホラー映画苦手ですか？」

「はははは、何をいうのかね、アンナ・マリア・カリーニン君。幽霊なんているわけないのにホラー映画が苦手なんてあるわけないじゃないかね」

「ナンでまたフルネームを？それよりソータ、ナンで後ずさりしてますか？」

「そんなことはないぞ。そっそうだ、お天気占いで今日は晴天だから映画は凶だと穴野アナが言っていた」

「幽霊は信じないクセに占いは信じるんですか？」

「穴野アナの占いをバカにするな」

「でも思いつきり曇っていて、天気予報はハズれているんですケド」

「くそう、役に立たない穴野衆だ」

「あそこにいるヒナタを見習ってください。ポスターをスキップしながら見て回ってます」

「あのアホと一緒にするな。俺の心はひび割れたビー玉でちよつとショックで割れてしまうのだ」

「じゃ、手近なところで「呪怨」にしまシヨウ」

「俺の話を知っているのか？俺はガラスの少年時代だと言っているだろうが」

もちろんアンナがその発言を聞くはずもなく、首根っこを掴まれた颯太は映画館に引きずって行かれた。

「ねえねえ、どの映画にするよ」陽向が楽しそうに言った。

「……………」

「……………」

「古典的にジェイソンがいいかな？それとも邦画がいいかな」

「……………」

「……………」

「……………なんで二人ともテンションが低いのさ」

「ホラー映画を観るのにテンションが高くなるお前の方が理解できません」

「えー、だって「絶対それやっちゃいけない」ってことをやって殺されるマヌケな人を見てると笑えるじゃん」

「あんたもしかして「13日の金曜日」ってコメディ映画だと思ってない？全編そんな人だらけなんだけど」

「よし、じゃあ「13日の金曜日」にしよう。笑えるよお」陽向が元気よく切符売り場に向かって歩き出した後を、誠と由香子はいやいやついていった。

「……………」少女は腕組みしてポスターを睨みつけていた。

「…………あのく決まったんですか、愛子さん？」少年が恐る恐る尋ねた。

「呪怨」から「シックスセンス」までは却下だね。全部名前を知っているから怖い映画に違いないよ。残るのは聞いたことのない「パラノーマル・アクティビティ」か「テキサス・チェンソー」なんだけど……………」

「…………で、どっちにするんだ」

「よし、「テキサス・チェンソー」にしよう。きっとテキサスの木こりの幽霊の話だよ。テキサスの木こりって陽気なデブって感じじゃない？幽霊でも怖くないよ、きっと」

「…………テキサスって平地の牧場ばかりで山なんかないんじゃないか？」

「大丈夫、ボクの女のカンがこの映画は怖くないって言っているの。いくよ康太」少女はヤケクソになって元気に切符売り場へと進んだ。

「…………お前の女のカンがそう言うからには、オチは見えている気がするんだが」少年はボヤキながら後に続いた。



「だつてさ。まず、何でアメリカ人の女の子って夜の湖で一人で泳ぎたがるのかな。走湖性の遺伝子でも持っているかな」

「そんなアホな遺伝子があるわけないでしょう。まあ、お約束みたいなものよね」

「それにジェイソンが男の人の顔を壁に押し付けたら、壁の反対側が顔の形に出っ張ったんだよ。あのコントであたし大爆笑しちやつたよ」

「お前以外は悲鳴あげていたけどな……」

「こんな大笑いしたのは久しぶりだよ」

「ホラー映画を観た感想じゃねえ」誠が怒鳴った。

「楽しい映画みたいね」13日の金曜日」って。あれなら陽太君も大丈夫かしら」由美子が言った。

「……いや、あいつの感性を一般的なものと思わない方がいいです」

「本当に素晴らしい映画でシタ」アンナが勘当した面持ちでやってきた。

「呪怨のどこをどうみれば、そういう感想が出てくるんだ、お前は」

「だって、ゴーストになってまでも母子が一緒なんですヨ。強い愛で結ばれているんデス」

「あの二人はお互いに全く会話してなかっただろうが。それぞれが単独で人を驚かしていただけだ」

「ソレにしてもお母さんは服を着ているのに、ナンで子供は裸ですか？ 虐待？」

「幽霊にあまり暑さ寒さは関係ないだろう」

「ところでソータ、日本人は何でゴーストが出るとわかっているのに、わざわざ夜にあの家に行きますか？」

「昼に行ったらドラマにならないからじゃないか」

「あら、アンナちゃん、颯太。あなた達も来ていたの？」その時、不意に声をかけられた。

「ハイ、ユーコと……お友達ですか？」

「あらアンナちゃんは初めてかしら。四馬鹿のお母様たちよ」

「アア、「お母様会」のみなサンですネ。初めまシテ」アンナが挨拶をした。

「まあ、この子がいつも言っている颯ちゃんのお嫁さんなのね」

「本当、お人形さんみたいに可愛いわあ」

「アンナちゃん、うちの馬鹿にもお友達紹介してくれないかしら」

「まあ、初孫が楽しみねえ。100%アンナちゃんに似せるのよ」

「げっ、ババア連……」颯太が小さな声でツブやいた。

「あら、颯ちゃん。お久しぶり」一人の母親が微笑みながら近づくと、ボディにアツパーをぶち込んだ。

「うぐうっ」かがみこんだところを別の母親が、首筋に肘を入れた。

「ぐえ」たまらずしゃがもうとしたところを他の母親が足を払った。

「おお」うつ伏せに倒れ込んだところを最後の母親が首を踏付けた。

全部で5秒の熟練の連携プレーであった。

「うぐぐぐぐ」呻いているところに「今、ババア何とかとか聞こえたけど、気のせいだよねえ、颯ちゃん」と涼しい顔で尋ねた。

「やつ、やだなあ、オバさま。この僕がそんな暴言を吐くわけないじゃないですか」

「そうよね。年のせいかな。耳が悪くなっちゃって」

「いえいえ、まだまだお若いですよ。で、できればいいんですけど僕をお踏みになっっているお御足をどけてくれたらありがたいんですけど……」

「あら、わたしだったらこんな行儀悪いマネをいつの間に。ごめんないね」といって母親は足をどけた。

「それにしても颯太ちゃんは幸せよね。こんな美人でスタイルがいいお嫁さんがいるんですもの」

「いや、こいつは嫁でも何でもない……」颯太が反射的に答えた。

「ソータ、往生際が悪いデス」アンナが颯太の頭を踏付けた。

「ぐぎやっ」颯太がカエルが踏み潰されたような悲鳴をあげた。

「アンナちゃん、何てことするの。そんなことオバさん感心しないわ」裕子がアンナに向かって言った。

「すいません……」アンナはうなだれると頭から足をどけた。

「謝るなら、まず俺に謝らんか。ママン見た？これがこいつの本性だよ」 颯太の怒り声が聞こえてきた。

「頭踏むだけじゃ何にもならないわ。そうやって踏む時には頭蓋骨と首の間の「頸柱」という急所を踵で踏みつけるの。痛さの余り声もないわ。やってみて」

「こうですか？・・・（グリグリ）」

「ババアいったい何を・・・ギヤアアアア〜」

「そうそう、でも気をつけてね。力入れすぎると頸椎が折れちゃうから」

「・・・ピクピクピク」 颯太が細かく痙攣を始めた。

「あく、面白かった。じゃ、アンナちゃん、デート頑張つてね。何だったら朝帰りでもいいわよ」

お母様会の5人は痙攣する颯太を一切省みることなく笑いながら出て行った。

「えーっと、今のは何だったのかしら？」 由美子が瞬きをするのも忘れていった。

「あれが「お母様会」です。兄貴たちはあの5人に毎日ボテクリ回されていました」

「でも古武術をやっている私の目から見ても素人の動きじゃなかったわよ」

「この区内の不良を壊滅させた兄貴たちが全員でかかっても、あの一人にもかなわないというところで実力を察して下さい」

## 第15話

「……………一体何の騒ぎだ」陽太がゆっくりと体を起こした。

「陽太君、もう大丈夫なの」由美子が言った。

「ああ、ごめんね由美ちゃん。だらしないところみせちゃって」

「それよりも身体は大丈夫」

「いや、体よりも精神的なダメージが…………でももう大丈夫だよ」

「それならいいけど、愛ちゃんはまだダメそうね」

少女が再び垂らした手を小さく振った。

「……………こいつのことは気にせずにデートの続きをやって下さい」

「大丈夫かしら」

「まあ、ここは康太に任せていきましょう」陽太は一刻も早くこの場を離れたそうに言った。

「じゃあ、愛ちゃんをよろしくね」二人は映画館から出て行った。

「……………さてつと」少年は独りごちるとソファに座った。

「……………おい、愛子さん。いい加減に復活してくれんと夜になるんだが」少女に話しかけた。

「……………無理」少女がつぶやくように言った。

「……………しかし凄い映画だったな」

「……………どこがテキサスの陽気な木こりの話なのさ？」

「……………お前が勝手に言ったんだ」

「だって、テキサス・チェンソーだよ。テキサス人ってカメラに向かって陽気に「ハイ」っていう人たちじゃないの」少女は起き上がると少年に食ってかかった。

「……………それはテキサス親父だ。あの人だけをモデルにしてテキサス人がみんなあだと判断したのかお前は？」

「それにチェンソーって言えば、木こりだと普通は思うじゃないのさ」

「……………大前提の「ホラー映画」ってのを完全に無視しているなお前は」

「しばらくお肉が食べれないよボク」少女は涙目になって訴えた。

「…………女のカンとやらで選んだ映画じゃないのか？」

「おかしいなあ、ボクのカミソリよりも鋭い女のカンが曇ったのかな」

「…………というか、一度でいいから輝いているところを見せてもらいたいんだが。ペーパーナイフよりも切れ味が悪いぞ」

「みんなはどうしたの？」

「…………陽向は映画の感想を爆笑しながら語りつつ、スキップしながら友達と出て行った」

「そんなに楽しい映画だったんだ。そっちの方を見れば良かったよ」

「…………陽向の感性を一般化しない方がいい。友達たちは青い顔していたからな」

「陽太君は？」

「…………お前のちよつと前に復活して、由美ちゃんと一緒に出て行った」

「由美ちゃんは平気だったのかな？」

「…………あの人は血まみれの幽霊が目の前に出てきたら、手当をしてやりかねん人だ。映画程度は屁でもないだろう」

「颯太君とアンナちゃんは？」

「…………颯太兄貴はアンナに頭を踏みつけられた後、首根っこひつつかまれて出て行った」

「ボクがダウンしている間に何があつたのさ？」

「…………いろいろと言葉にしにくいことがあつたのだ」

「アンナちゃんがそこまで怒るなんて、颯太君どれだけ怒らせたんだろう…………」

「…………いや、別に怒ったわけじゃなくて、達人に手ほどきを受けたというか何というか」

「こんな街中の映画館にそんな達人がいたの？」

「…………5人ほどな。それより元気が出たならここを出よう。どこか行きたいところがあると言っていただろう」

「そうだ忘れてたよ。未来日記に書いてあつたんだ」

「…………まだ、それにこだわっていたのかお前は」

「当たり前だよ。僕たちの行動指針だよ」



「……………テキサス・チェンソーまで書いてあったのか？」

「それは誤差範囲だね」

「……………km単位で外れているような気がするんだが」

「……………で？」少女が尋ねた。

「でっ、とは？」少女が答えた。

二人は前に訪れたジュエリーショップの前にたっていた。

「……………何でこんなところにいるのかと尋ねているんだ」

「本当にバカだなあ、康太は。クリスマスと言えばプレゼント。女の子へのプレゼントと言えばアクセサリーに決まっているじゃない」少女の指には、前にこの店で少年が買った指輪が光っていた。

「……………俺に買えと？」

「プレゼントなんて贈ってもらってから嬉しいんだよ。要求して買ってもらったって嬉しさ半減だよ」と言いながら、店の奥のシルバーアクセサリーの売り場へと進んで言った。

「……………その割には歩みに迷いが無いな」

「このあたりだと康太のお小遣いでも買えるからね」

「……………何で俺の小遣いの額まで把握しているんだ、お前は」

「えっ？裕ちゃんが教えてくれたよ」

「……………常識とかプライバシーとか……………いや、何でも無い」

少年は全てを諦めたかのように言った。

「ボクのお気に入りはこれだよ」十字架のついたネックレスを指差した。

「……………」

「……………」

「……………」

「ボクのお気に入りはこれ」少女が再び指差した。

「……………」

「……………」

「……………」

「お気に入りはこれだってば」

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・そうか」

「・・・・・・・・・・そうかってそれだけ？」

「・・・・・・・・・・俺に気兼ねせずにおええばいい」

「代表だったらアイアンクローをかけているところだよ」

「・・・・・・・・・・ほんの2分前にプレゼント云々と自分が言ったセリフを思い出せ」

「だって未来日記に書きちやっただよ」少女が涙目になって訴えた。

「・・・・・・・・・・知らん」少年は逃げるようにして店から出て行った。

## 第16話

数十分後、ボクたちは陽太君が由美ちゃんに告白した夜景が綺麗な公園で夜景を眺めていた。

「まったく康太のせいで、未来が変わっちゃっうよ。未来日記じゃあのジュエリーショップでネックレスをプレゼントに買ってもらはずだったのに……」

「……人の小遣いの使い道まで、勝手に未来日記に書くんじゃない」

「これじゃβ世界線に戻れないよ」

「……お前は何の話をしているんだ？」

「だめだ。この男には乙女心は理解できないようだ。ボクは説得を諦めた。」

「あ、あっちの方が夜景が綺麗だよ」ボクがそっちに向かって歩きだすと、道が少しぬかるんでいたみたいで足が滑ってしまった。

「キヤア!!」

「危ない!!」康太が手を伸ばしてボクの手を掴んで身体を支えてくれた。

「……あ、ありがとう」

「……いや。大丈夫か」

「う、うん。大丈夫なんだけど……」康太はまだボクの手を握っていた。ボクから手を離すのはもったいないような気がしてそのままにしていた。

「……(真っ赤)」

「……(真っ赤)」

「あ、あっちに行こうか……」ボクたちは手を繋いだまま、景色のよいところに向かった。

「……(真っ赤)」

「……(真っ赤)」

「あ、そうだ。康太にクリスマスプレゼントがあったんだ」沈黙に耐えられなくなったボクは、バックから袋を取り出した。

「……プレゼント？馬鹿でかいバックにはそれが入っていたのか」  
康太が袋からプレゼントを取り出した。

「へへへ、手編みだよ」ボクは得意げに言った。

「……それはありがたいんだが……これは何だ？」康太が不思議そうに言った。

「何って見ればわかるでしょ。マフラーだよ」ボクは少しムっつとして言った。

「……聞いていいか？何でマフラーが三角形というか台形なんだ？端の幅が50cmくらいになっっているぞ」

「お母さんから編み方習って初めて編んだだけだね。編んでるうちに裾がどんどん広がっていつちゃって。直そうとしてもにっちもさっちもどうにもブルドックで……」

「……まあ、せつかくのお前の手作りだ。ありがたくもらっておく」

「ちゃんと使つてね」

「……マフラーとしてか？」

「マフラーなんだから当たり前じゃん」

「……どうあつてもこれをマフラーと言い張るわけだな」

しばらく二人でまた夜景を眺めていた。そうしたらボクの目の前にいきなり袋が突き出された。驚いて康太の方をみたらボクの方を見ないで、前を見つめたまま無言でボクの顔の前に手を突き出した。

「ボクにプレゼントなの？」ボクは康太に確認してみた。

「……」康太は無言だった。

ボクは袋を受け取ると中の箱を取り出して開けてみた。

「これって……」中から出てきたのは、さっきのジュエリーショップで康太にねだった、いや間違った、康太がボクに買ってくれるはずだったネックレスだった。

どうしてだろう。涙が出てきた。ボクは左手の薬指に光っている前にもらった指輪に目を落としてみた。

どうしてだろう。どうして康太はこんなにボクのことをわかって

くれるんだろう。どうしてボクのして欲しいことをやってくれん  
だろう。

「どうしてボクがこのネックレスを欲しがっているってわかったの  
？」ボクは尋ねた。

「……誰かがこの一ヶ月、家中特に俺の部屋の壁中にそのネック  
レスの記事のコピーを貼りまくったんでな」

「それだけでわかってくれたの」

「……それ以外にどう解釈すればいいんだ？」

「わかってくれるのは、康太だけだね……」ボクは涙ぐんだ。

「……いや、家中全員の一致した見解だったんだが」

「つけていい？」

「……ああ、かまわんが」

「ねえ、つけて？」

「……俺がか？」

「うん、お願い」

康太は不器用な手でボクの首にネックレスをつけてくれた。

ボクは自分から康太の左手を握って、夜景を眺めた。

このときにボクの顔を見たら、これ以上はないくらいに幸せそうな  
顔をしていたことだろう。

「これでチャンとβ世界線に戻れるよ」

「……いい加減にその設定はやめてくれんか」

## 最終話

辺りは「シーン」という音がしそうなくらいに静かだった。これなら未来日記の最後の行動も実行できる。ボクは少しずつ康太に寄っていった。もう少しで肩が触れそうになった時……

「二人とも早く。ここだよ、愛ちゃんが言っていた場所は」

「階段を3段跳びで駆け上れるのはお前位だ」

「私たちは忍者じゃないんだから、少しは考えなさいよね」と陽向ちゃんたちの声が聞こえた。

「あれっ？愛ちゃん」ボクたちは瞬間的に2mほど飛びのいた。

「愛ちゃん達も来てたんだあ。大丈夫だよ、邪魔にならないようにあっちの方にいるから」そういうと3人は離れたところで夜景を眺めだした。

「じゃ、マコちゃんそろそろ始めようか」陽向が言った。

「今度は何を始めるつもりだ」誠が言った。

「クリスマスデートと言ったらプレゼントでしょう。さあ、出して」

「初耳だが……どこからそんなこと聞いてきた」

「愛ちゃんが言ってたんだよ。カップル同士でプレゼントの交換をするんだって」

「お前は、まずカップルの意味から覚えろ。というよりその愛ちゃんのおかげで俺は今日だけで今月の小遣いが吹っ飛んだんだが」

「デートは男性が出すのが決まりなんだよ」

「おかげでゲーム代、食事代から映画代まで3人分全部俺が出したんだが、その上プレゼントだと」誠が怒鳴った。

「あたしはティファニーのリングが欲しいんだ」陽向が言った。

「ねえ、念のために聞くけどティファニーのリングって何だか知ってるわよね、陽向」

「クリスマスデートするんならこういうものもらいなさいってクラスの子が教えてくれた。別に指輪なんて欲しくないけど決まりだったらしかたないよね」

「しやうがないで人にどんだけ金使わせるつもりだ、お前は。だいた



誰にプロポーズするんだ？」

「もちろんソータがワタシにデス」

「なんで俺がお前にプロポーズせにやならんのだ」

「夫が妻にプロポーズするのは当たり前デス」

「とうるか妻にプロポーズする夫はおらん。プロポーズしたから妻になっっているんだろうが」

「ソータ……」

「何だ」

「ワタシ今、ユーコから関節ワザを習ってマス……」

「さあ、早く行こう。アンナ・マリア・カリーニン君。公園はこの上だな」

「ソータ、急に走らないでください」

「……やっぱり来たか」

「結局、全員集合だね」

「何だ。全員いるじゃないか」 颯太が言った。

「兄貴も来たのか」

さっきまで静かだった公園が急に賑やかになった。

「よし、じゃさっさとお参りして帰ろう」 颯太が言った。

「いや、神社じゃないんだから」 陽太がツッコんだ。

ボクたちはお互いの邪魔にならないように5mくらい間隔を空けて夜景を眺めていた。みんな黙っていたので、また静かな静寂が戻ってきた。やがて空から白いものがチラチラと落ちてきた。

「……寒いと思ったら雪だ」

「ホワイトクリスマスだね。クリスマスデートの終わりには最高だね」

I'm dreaming of a white Christmas.  
Just like the ones I used  
to know

聖歌隊にいたというアンナちゃんの小さな歌声が聞こえてきた。

「……white Christmasだな」

Where the streets glisten and



children listen……」ああ見えてもバンドのボーカルの颯太君が唱和した。そしてボクたちもみんな小さく唱和し始めた。

「To hear sleigh bells in the snow.

I, m d r e a m i n g o f a w h i t e C h r i s t m a s W i t h e v e r y C h r i s t m a s c a r d I w r i t e M a y y o u r d a y s a l l b e m e r r y a n d b r i g h t A n d m a y a l l y o u r C h r i s t m a s e s b e w h i t e」

ボクは歌いながら周りを見渡してみた。颯太君がいる。アンナちゃんがいる。陽太君がいる。由美ちゃんがいる。陽向ちゃんがいる。誠君がいる。由香子ちゃんがいる。

そして何より康太がボクの傍にいます。こういうのを幸せというのだろうか。

未来のことはわからない。それどころか明日のことだって確かじゃない。このメンバーがいつまで一緒にいられるだろうか？

でもそれを考えてもしょうがない。それより今一緒にいられる幸せに感謝しよう。

そしていつまでも一緒にいられるようにお願いしよう。

「……誰の番だ？」Atsushiが言った。

「Guuじゃねえか」Gonが言った。

「何で2日も徹夜で桃鉄なんかやらなきゃならんだ」Guuが言った。

「……頼む、寝かせてくれ」Youが言った。

その夜、少女は机に向かって未来日記を開いていた。

「だいたい計画どおりだったんだけど……」少女の目は最後の一行に釘付けになっていた。

「……やっぱり無理だったなあ……キヤア」と言っ顔を

真っ赤にしてベッドに飛び込んだ。  
最後の行にはこう書かれていた。

- 「デートの最後に思い出の丘で夜景を見ながら康太とき……」

## 14. 彼と夫と花嫁修業 第1話

日曜の午後、アンナの部屋に女性陣が集合をかけられた。部屋のアにはたどたどしい文字で「女子会 立入きん止」と看板がかけられていた。

「今日は集まってクレて、ドウモありがとうございマス」アンナがみんなを見渡しながら言った。

「いやいやアンナちゃんの頼みなら断れないよ」愛子が言った。

「折り入って相談って何かしら」由美子が尋ねた。

「颯兄とケンカでもしたの？」陽向が言った。

アンナは俯きながら畳に「の」の字を書きだした。

「アンナちゃんどうしたの？」

「日本女性は恥ずかしい時には、畳に「の」の字を書くと、志ん朝の落語でやってまシタ」アンナが恥ずかしがっているとは思えない冷静な声で答えた。

「日本文化の随分ディープなところまで進んでいるんだね」愛子が感心したように言った。

「でもアンナちゃん、そういう時はカタカナの「ノ」の字じゃなくて、ひらがなの「の」の字を書くのよ」由美子が言いにくそうに言った。

「ソウなんですか？志ん朝はなにもいってませんでシタ」アンナは慌てて「ノ」の字から、「の」の字に切り替えた。

「あたしですら志ん朝なんて知らないのに……でもまあ、そんなに恥ずかしがるということとは、どっちにしろ颯兄絡みということだよ」陽向が言った。

「ハイ、ワタシがこんなに一生懸命やっているのにソータはいつまでも夫の自覚を持ってくれません」アンナが全員を見渡しながら言った。

「一体、どうしたら、ソータが夫の自覚を持ってくれますか？」

「結婚もしてないのに夫の自覚を持ってっていうのが無茶なんじゃないかな?」アンナに聞こえないように小声で他の2人にツブやいた。「夫はともかく彼氏としての自覚を持って欲しいんじゃないかしら」由美子が答えた。

「(とういか颯兄って本当にアンナちゃんの彼氏なの?アンナちゃんのモーションから逃げてばかりいるように見えるんだけど……)」陽向が言った。

「(でもアンナちゃんの決意と裕ちゃんの嫁容認の前では、颯太君の意志なんてゴマ粒ほどの影響力もないと思うんだけど……)」

「(ふふふ、大丈夫よ。お兄さんもちゃんとアンナちゃんのことを好きはずだよ。ただ表わすのにテレしているだけよ)」由美子が断言した。

「(あのへタレの颯兄に彼氏の自覚をもたすのかあ。どうすればいいんだろうね)」

「あの、アイコ」アンナが言った。

「ん?どうしたの、アンナちゃん」

「『の』の字の次は、畳のケバをむしるって圓生が言ってますが、ケバってなんですか?」

「アンナちゃん、進む方向確実に間違っているから。というかどこでそんなの見てるの?」

「ミコミコ動画の落語コミュニケーションデス」

「とりあえずそれは江戸時代の風習だから、無理にむしらなくてもいいんだよ」

「ソウですか?」アンナが納得出来ない様子で言った。

「(さつさと何とかしないと、アンナちゃんがいろいろと間違った方向に進んで弥生時代の習慣あたりまでたどり着いちゃうよ)」

「(要するにお兄さんが、アンナちゃんを誰にも渡したくないって思うようになればいいんじゃないかしら)」

「(つまり、どういうこと?)」

「(そっか、つまりアンナちゃんの女子力を上げればいいんだね)」愛子の言葉に3人の目が一斉にアンナに向いた。

「(女子力上げるって、あの美貌、あのスタイル、何よりもGカップの

バスト。あれ以上、女子力あげたら世界制覇できるよ、愛ちゃん」陽向が言った。

「陽向ちゃん、何も女子力は外見だけじゃないんだよ……多分」なぜか少し悔しそうに胸を押さえながら愛子が言った。

「つまり、どういうことかしら、愛ちゃん」由美子が不思議そうに尋ねた。

「日本の正しい新妻になれるように、花嫁修業をしましょう」愛子が自信たっぷりと言った。

「(花嫁修業?)」陽向も尋ねた。

「(そう、日本の正しい嫁になれるように炊事、洗濯、掃除の修行です)」(それはいいけど、そんなことどこで教えてくれるの?)」

「(やだなあ、由美ちゃん。ボクたち「土屋家女子会」がマンツーマンで特訓するんですよ)」

「アンナちゃん、作戦が決まったよ」愛子が言った。

「本当デスか、アイコ」アンナが嬉しそうに言った。

「うん、これまでのアンナちゃんのアプローチでは、まだロシア人の部分が残っていて純粋日本人である颯太君には受け入れられないところがあつたと思うの」

「フムフム」アンナがうなずく。

「だからボクたち女子会のメンバーが、アンナちゃんが正しい日本の新妻になれるように花嫁修業を手伝ってあげる」

「そうデスか。ありがとうございます」

「やだなあ、お礼なんていいよ」

「じゃあワタシは、落語を聞き続けなければいいんですネ」

「できればもう聞かないでくれるかな。いろいろ間違つた知識を得てきそそうだから」

## 第2話

「ところで愛ちゃん、花嫁修業って何をやればいいのかしら」由美子が尋ねた。

「……そりゃあ新妻がやるようなことをやればいいんじゃないですか」愛子が考えながら答えた。

「アイコ、新妻がやるようなコトってなんデスカ？」アンナが聞いた。

「……」

「なんで顔が赤くなってるの、愛ちゃん？」陽向が不思議そうに尋ねた。

「……なっ、なんでもないよ」愛子が顔を赤くしながら答えた。

「まあ普通に考えると、料理、洗濯、掃除ということになるのかしら」由美子が首をかしげながら言った。

「でも由美ちゃん、それって日本とロシアでそんなにやり方違うものなのかな？」陽向が尋ねた。

「それもそうねえ……」由美子が考え込んだ。

「まあ、それなりに違うところがあるかも知れないし、アンナちゃんも結婚して日本に住むんだから日本式のやり方を覚えておいても損はないと思いますよ」愛子が言った。

「もうお兄さんと結婚するってことは確定事項なのね……」

「えっ、だってアンナちゃんは最初からそのつもりだし、裕ちゃんだって大賛成で「早く孫の顔が見たいわ」なんて言ってますよ」しきりに頷くアンナを見ながら愛子が言った。

「いえ、お兄さんのことを言ってるんだけど……」

「颯兄に発言権なんてないんだよ、由美ちゃん。だから颯兄の意見なんて、関係ないの」陽向があっけらかんと言った。

「自分の結婚なのに、テレビのチャンネル権なみに発言権がないのね」由美子が感心したように言った。

「まあ、この先アンナちゃん以上の女の子が現れることはまずないでしょうから、この際颯太君の意志はどうあれ、アンナちゃんの手を打ってもらう方が本人のためにもなるんじゃないでしょうか」愛子も

無責任に同調する。

「そうねえ。お兄さんだつてアンナちゃんのこと好きなんだし、アンナちゃんに協力するのが一番なのかもね」深く考えるのがバカバカしくなったのか由美子も賛成した。

「え、颯太君つてアンナちゃんのこと好きだつたんですか？」愛子が今更のように驚いて言った。

「そりゃあそうよ。そうでなきゃあんなに息の合った会話はできないわ」

「あれは単にアンナちゃんの天然大ボケにツツコまずにはいられないだけじゃ?.....」

「まあ、でも颯兄があれだけ遠慮無くツツコめる女の子はアンナちゃんしかいないよね。普通の女のひとだったら、そもそも会話が成り立たないから」陽向が言った。

「ワタシが大ボケとは、一体なんの話ですか？」アンナが不思議そうに尋ねた。

「「自覚なかったんかい!!」」三人が綺麗なユニゾンでツツコんだ。

「まっまあ、それはともかく花嫁修業だけドボクたちが、それぞれ得意なもの教えるということでもいいんじゃないかな」愛子がその場をゴマかすように言った。

「そうね。わたしが教えられるものと言つたらお花とお茶かしら」由美子も協力するように言った。

「さすがに由美ちゃんはお嬢様だね。ちゃんと花嫁修業してるんだ」

「そんなんじゃないのよ。家の付き合いでそういう場に出ることもあるからしかたなくなの」

「あれ?愛ちゃん。お茶だつたらあたしもできるよ」陽向がこともなげに言った

「えっ、陽向ちゃんも?もしかして茶道つて日本の一般家庭では普通に教わるもんなの?」愛子が動揺したように言った。

「よその家は知らないけど、伊賀にいた時におばあちゃんから教わつたの。土屋家は伊賀忍者の頭領だから、そういうことも知っておく必要があるんだつて」

「なんか忍者も大変なんだね。それはそうと由美ちゃんがお花にお茶かあ。じゃボクは……お掃除とお料理を教えよう」

「えっ？」 由美子と陽向が同時に叫んだ。

「どうするの、由美ちゃん。アンナちゃんの料理に愛ちゃんの料理が加わったら、ほとんど生物兵器だよ。なんとかしてよ」愛子をみるとしきりに「それがいい」とばかりに頷いていた。なぜかこの少女は自分の料理の腕に絶大な自信があるようだった。

「なっなんとかしてって言われても、わたしはお菓子は作れるけど普通の料理はほとんどやったことがないのよ。陽向ちゃんはどのような？」

「（あたしが教えられる料理って、携帯食料の丸薬とか蛇やカエルの調理法とか、ある意味アンナちゃんにはピッタリかも知れないけど、新婚家庭の食卓に出したら1日で離婚されちゃうようなものばかりで……）」

「あっあの、二人でなにを話し合ってるのかな？」愛子が不審げに尋ねた。

「あっ、なっなんでもないの。愛ちゃん、お料理だったらわたしが教えましようか？」 由美子がオズオズと申し出た。

「えっ、由美ちゃん。お料理もできるの？」

「できるってわけじゃないんだけど、うちの母から習ってそれからアンナちゃんに……」

「なあんだ、それならボクが直接教えた方が早いよ。ボクなら大丈夫だから」由美子は「そういう意味ではないのだ」という言葉をぐつと飲み込んだ。

「由美ちゃんが、お花とお茶。ボクがお掃除とお料理。陽向ちゃんは、何を教えるの」

「えっ、あたしも教えるの？」 陽向がビックリしたように言った。

「そうだよ。こういうのはみんなやらなくちゃ」愛子はすっかり使命感に燃えているようである。

「……でも、あたし別に教えられることなんて……えーつと、そうだ忍術を教えるよ」



「それって花嫁修業に必要なことなの？」

「よその家ならいざしらず、土屋家は伊賀忍者の頭領の家だからね。今は一応あたしが継ぐってことになってるけど、あたしに何かあったら本来の跡継ぎである颯兄が継ぐんだから、知っておく必要はあるでしょう」

「なるほど、じゃ陽向ちゃんは忍術を教えるつと。よしこれでアンナちゃんの花嫁修業は完璧だね」愛子が上機嫌で宣言した。

「ありがとうございマス、ミンナ」アンナも嬉しそうに言った。

由美子と陽向の顔は暗かった。

### 第3話

【アンナちゃんの花嫁修業 お掃除編】

土屋家のリビングに愛子、陽向、アンナが勢揃いしていた。

「今日からアンナちゃんを正しい日本の新妻にするべく花嫁修業をする訳だけど……」愛子が宣言するように言った。

「ハイ、よろしくお願いしマス、ママ」アンナが敬礼して言った。

「いや、軍隊の訓練じゃないんだから敬礼もママも止めてくれるかな」

「わかりまシタ」

「まあ、言いたいことは色々あるんだけど、とりあえずその格好は何かかな？」

愛子たちの視線の先には、白い割烹着に手ぬぐいを姉さん被りにして、ご丁寧な片手にホウキを持つアンナの姿があった。

「コレが正しい日本の妻の家事姿だと聞きます」恥じることなど何一つないとばかりに、アンナがGカップの胸を誇らしげに張った。

「いや、うちのおばあちゃんだってそんな格好しないから」愛子が呆れたように言った。どこからどうみても外人の、見た目だけはクールビューティな少女が割烹着に姉さん被りをしているのは、なかなかシユールな光景であった。

「今時、コントでもこんな格好しないよね。アンナちゃん、その情報どこから持ってきたの？」陽向が不思議そうに尋ねた。

「ハイ、サザエさんのお母サンはいつもこの格好デス」アンナが自信満々に答えた。

「昭和初期だったら、正しいかも知れないけど……白樺派も大絶賛だね。」

「アニメもいっぱいあるだろうに、よりもよってそこに行くかなあ？」

「一度、アンナちゃんの頭の中の日本像がどうなってるか覗いてみたいね」

「宇宙船の中で割烹着着てハタキかけてそうだよね」

「まあ、本当はエプロンでいいんだけど、せっかく準備したんだからそ

の格好でいいや」愛子が言った。

「なんかお茶の間コントやるみたいだけど……」陽向はまだ納得できない様子であった。

「ではリビングから掃除すればいいデスカ？」アンナがホウキを握りしめて力強く言った。

「うん、それもいいけどね。掃除で大事なのは夫の秘密を把握することなんだよ、アンナちゃん」

「はいっ？」アンナと陽向が同時に言った。

「とにかくこつちに来て」愛子はそういうと階段を昇っていった。2人も仕方なく後に続いた。

愛子は颯太の部屋の前に立ち止まると、振り返っていった。

「男の子って必ず日本を持っているからね。それを把握するのは妻として大事なことのの」

「要するにガサ入れだね」陽向が脱力したように言った。

「そう、掃除をしつつ日本の探索をする。家内安全のために必要なことだよ」

「家庭に余計な波風が立ちそうなんだけど……」

「わかりまシタ。ではさっそく」アンナがそう言うのとドアノブを回した。「ガチャ」ドアには鍵がかかっていた。

「鍵がかかっていマス」アンナが情けなさそうに言った。

「ふむ、これで部屋に何かを隠している可能性が高まった、すなわちク口だね。陽向ちゃんお願い」

「いいのかな？あのねアンナちゃん。部屋の鍵くらいだったらピン2本で何とでもなるから。それ以上だとあたしのプロ用ピッキング道具貸してあげる。あれだと銀行の金庫以外は大抵開けられると思うから」

「ハイ」

「そこまで大仰でなくてもいいと思うんだけど……」愛子がつぶやいた。

「まず、一つ目のピンで下の方を押しながら出っ張りをゆっくり押し下げるの。で最後までいったら、反対側の壁にピンをつけて錠を回す

の。やってみて」

「ハイ、一つ目で押し下げながら……あつ外れました。もう一度……押し下げながら最後まで。そして二つ目を入れて錠を回すと……ガチャ。開きました」

「うん、これで大抵のドアの鍵は開けることができるよ」

「さすが陽向ちゃんは忍者だね」愛子が感心したように言った。

「さて、部屋に入ったわけなんだけど。意外とシンプルでキレイにしてるね」颯太の部屋はベッドと本棚とテレビ以外には何もなかった。

「掃除しますか？」アンナがホウキを握りしめて言った。

「それは後回し。まず部屋全体を見渡してエロっちいオーラを感じて」

「エロっちいオーラですか？」

「愛ちゃん、エロっちいオーラってどんなの」陽向が尋ねた。

「黒にピンクが混ざった感じかな。ふふふ、盗聴器を道具なしで見つけ切れるボクには日本の隠し場所を見つけることくらい赤子の手を捻るようなもんだよ。まず、ベッドの下からエロっちいオーラを感じる」愛子はそういうとマットレスの下に手を突っ込んだ。

「ほら、こんな本が隠されていた」マットレスの下から数冊の雑誌を取り出した。いずれも肌も露わな若い女性が表紙の本であった。

「どうかな？二人には感じるかな？」愛子を腕を組んで得意げに言った。

「感ジルも何も、何が何ヤラ」

「どんな修行をすればそんなことができるようになるの、愛ちゃん」

「まあ、慣れだね。康太の部屋の掃除をしていたら大体どこに隠すのかわかるようになった。じゃ、二人も無心になってオーラを感じてみて」

愛子の言葉に2人は周囲を見渡していたが、何も感じれなかったようだ。

「ダメだよ、愛ちゃん。何も感じない」

「修行が足りないなあ。例えばあのクローゼットの中」愛子はビシッとクローゼットを指差した。



て  
いた。

## 第4話

ありったけの日本を探しだした少女たちは、その山の前で呆れていた。

「よくもまあ、こんなに買い集めたもんだよね」

「まあ、颯兄は仮にも社会人だから小金は持つてるしね」

三人は見るともなしに押収した日本の頁をめくっていた。

「これを見る限り颯太君は巨乳スキーなんだね」

「なに食べればこんなに大きくなるんだろうね」

「そういうえば陽向ちゃん、大丈夫なの？」愛子が尋ねた。

「えっ、何が？」陽向が答えた。

「だって染色体の話読んだだけで鼻血吹き出して気絶したって聞いたよ。日本なんか読んで大丈夫かってこと」

「そりやそうだけど、ここにあるのって女の子の裸じゃん。大きさに違いはあるけど、自分ので見慣れてるよ」

「それもそうだね・・・アンナちゃん、元気ないけどどうしたの？」

愛子は暗い顔をしているアンナに気がついて声をかけた。

「アイコ・・・どうしまシヨウ」

「どっ、どうしたのかな？」

「この本をみる限り、ソータは胸の小さな女の子が好きみたいデス。ワタシどうすればいいデスカ・・・」アンナは沈んだ声で言った。

「なんだろう、ボク一瞬ムカってきちやっただけど」愛子が怒りを押し殺した声で言った。

「あたしは殺意が湧いた・・・」陽向も同調した。

「格差社会の歪みがこんなところにも現れるとは・・・」

「マリー・アントワネットに「パンがなければケーキを食べればいい」と言われたフランス民衆の気持ち理解できた気がするよ」

それはともかくアンナが本気で落ち込んでいる様子だったので慰めることにした。

「そりやアンナちゃんのGカップに比べれば、小さいかもしれないけれど日本人としては十分大きい方だから。だから颯太君は大きいバ

ストの女の子が好きなんだよ」

「ソウですか。じゃソータはワタシのバストも好きでシヨウカ？」

「大丈夫。颯太君はアンナちゃんのバストが絶対に好き」愛子はアンナのGカップバストをビシッと指さして迷うことなく断言した。

「ソレを聞いて安心しまシタ」アンナが目に見えて上機嫌になった。

「ちよつと、ちよつと愛ちゃん」陽向が慌てて言った。

「んっ、どうしたの陽向ちゃん」

「その言い方じゃ颯兄は、アンナちゃんの胸だけが目当てみたいだよ」  
「それもそうかな？でもアンナちゃんがあんなに喜んでるみたいだし、いいんじゃないかな？」無責任な愛子であった。

「颯兄に好かれるなら、何でもいいんだね」

「颯太君も男冥利に尽きるよね。女子高生にあんなに一途に思われ  
て……」

「方向はだいぶ迷走してるみたいだけどね」

「ハックション」練習中に颯太は大きなクシャミをした。

「ん、どうした颯太。風邪か？」Atsushiが尋ねた。

「いや、冒瀆的かつ病的な混沌とした禍々しい悪寒に襲われた」

「何か知らんが随分ややこしい悪寒だな。今日は早く帰って寝ろ」

「いや、何だか家に帰らない方がいい気がする。お前ん家に泊めてくれ」

「バカ野郎、ライブも近いのにボーカルに風邪ひかれてたまるか。  
とつと家に帰って暖かくして寝てろ」

数時間後、颯太は家の玄関に立っていた。

「どうも、この家から邪悪な気配がするんだが……」

「あ、颯兄。お帰り」陽向が声をかけてきた。

「ああ、陽向か。アンナはどうした？」

「なに、颯兄。アンナちゃんが気になるの？」陽向がニヤニヤしながら  
言った。

「バカ、そんなんじゃないやねえ。いつも帰ってくるなり飛びついてくる奴  
が出てこないから、風邪でもひいたかと思ってるな」

「いや、別にそんなわけじゃないんだけど、乙女の悩みというか乙女の



怒りというか……」

「なにを言ってるんだ、お前は」へんな奴だと思いつながら自分の部屋に向かった。「ガチャ」ドアが抵抗なく開いた。

「あれ、鍵かけるの忘れてたかな」ノブを回して部屋にはいるとアンナが無言で背を伸ばしたまま暗闇に正座して待っていた。

「なつ、なんだ俺の部屋で何してる。」颯太は部屋の電気のスイッチをいれた。

「で、お前は何をしているんだ？」

「掃除です」

「部屋が全く綺麗になってないのはともかくとして、どうやって鍵のかかった部屋に入ったんだ？」

「陽向からピッキングを習いました」

「一体何をしやがる。ほとんど犯罪行為だと理解してるのか」

「アイコが乙女の純情は法律より重いと云ってましたカラ大丈夫デス」

「いや、そもそもピッキングしてまで掃除する必要性をだな……」

「ソナナことは些細な問題デス。ここに正座してください」アンナは自分の前を指さした。

「いや、俺にとつては重大な問題なんだが……」

「些細な問題と云ってマス。早く座ってください」アンナの声が低くなった。颯太が渋々とアンナの前に正座した。

「ソータに折り入って聞きたいことがあります」

「なつ、なにかな、アンナ君？」

「これは何デスカ？」アンナは身体の後ろから日本の山を2人の間に押し出した。

「こつこれは、マイトレジャー。どこからこれを……」

「部屋を掃除したら偶然見つけまシタ」

「天井裏まで掃除したと言いつもりか、お前は」

「些細な問題デス。もう一度聞きマス、これは何デスカ？」

「これはそのなんだ……大人の階段を登るための参考書と云うか」  
「それ以上大人になったら中年デス。ワタシとの歳の差をもっと広げ

るつもりデスカ」

「いや、それはその比喻というか、レトリックというか……」  
「ソータも男だからこんな雑誌も読みたいデシヨウ。それくらいは許すのも妻の度量デス」

「何でお前に怒られているのか、さっぱりわからんのだが」

「ダケドこれだけの雑誌の中に、ワタシに似ている子が一人もいないのはどういう訳デスカ？」 アンナは怒りを押し殺した声で言った。

「怒ってるのはそこなのか……」 颯太が呆れたように言った。

「理由を教えてください……」 アンナが身を乗り出してきた。瞳の中に怒りの炎がメラメラと立ち昇るのが見えるような気がする。

「そつそりやあ、女の子はみんな日本人だからアンナ君ほどの美貌とスタイルを備えた子なんていないよ……」

「……そつ、そうデシヨウカ」 アンナの顔がみるみる赤く染まった。目前の恐怖から逃げたいあまり地雷を踏み抜いたのではないかと颯太は思った。

「そうだよ、ははは」

「フフフ」

「じゃあ、この雑誌は片付けようか」と颯太が問題となっているH雑誌を一刻も早く目前から消そうと手を伸ばした。

「イエ、この雑誌は没収します」 アンナがいち早く雑誌を取り上げた。

「なっ、なにい？」 颯太が叫んだ。

「ワタシに似てない女の子なんて見る必要ありませんネ」 アンナが微笑みながら言ったが目は笑ってなかった。

「もつ、もちろんじゃないかね。アンナ・マリア・カリーニン君」 その迫力に颯太が半泣きで言った。

「ワタシも鬼ではないので、これは返してあげマス」といって「ロシア美女紀行」のDVDを差し出した。

「こつ、これはマイフェイスレットDVD。あの完璧な偽装を見破ったというのか」

「アイコが3秒で見つけまシタ。これは見ることを許してあげマス」

「……これ……見たのか」

「ハイ、ですからこの子は顔がワタシにチョット似ているから顔だけ見て下サイ。そしてこの子は、スタイルがワタシに似ているからボディだけ見て下サイ。後の子は見てはダメデス」

「そんな器用な見方ができるかあ」

8歳年下の女子高中生に説教される25歳成人の颯太であった。

## 第5話

【アンナちゃんの花嫁修業 華道編】

土曜日の午後、愛子、アンナ、陽向の三人は三宮家の門前で呆然と立ち尽くしていた。

「これ本当に個人の家なの？」

「公園じゃないんデスカ？」

「まるまる2ブロックは占めてるね。こんな家が本当にあるんだ。お金持ちとは聞いてたけど、こんな家ライトノベルの中に出てくる生徒会長の家くらいかと思ったよ」

「グニヤリ……」空間が歪んだ気がした。

「ダメだよ、陽向ちゃん。ライトノベルの話題はタブーだよ」愛子が注意した。

「なんだか色々と変なルールがあるんだね」書く人にも事情というのがあるのである。

「色々と大人の事情というのがあるんだよ」

「で、どうすればいいんデスカ、アイコ」アンナが尋ねた。

「ここにインターホンがあるから、押してみようか」愛子が恐る恐るインターホンを押してみた。

「……はい、三宮でございますが」落ち着いた初老の男性の声でした。

「あつ、あのボクたち由美ちゃ……由美子さんの友達で1時に何うことになってるんですが」

「お嬢様のお友達の方ですね。承っております。どうぞ」

「どうぞって言われてもどうすりやいいのさ？」陽向が言うと同時に、重々しい木製の扉が自動的に開いた。

「入ってことだよね」愛子が言った。

「庭で遭難するんじゃないの？」陽向が不審げに中を覗いた。

「道があるから大丈夫デス」三人はこわごと敷地の中に入って行った。

家の前で由美子が微笑みながら待っていてくれた。

「スゴいね、由美ちゃん。門から家まで5分もかかっちゃったよ」陽向が言った。

「あら、あたしは陽向ちゃんの家くらいが好きだな。いつも大好きな旦那さんの近くにいられて……アツ」

「ほほう〜」

「いや、べつ別に陽太君のことじゃないのよ。ごく一般論で……」

「ほほう〜」三人はニヤニヤしながら由美子を眺めた。由美子は顔を真っ赤にしていた。

「ところで、さつきインターホンに出たのはもしかして執事さん？」愛子が尋ねた。

「やあね、愛ちゃん。ライトノベルじゃあるまいし執事なんて日本にいるわけじゃないじゃない」

「グニヤ」再び空間が歪んだ。

「そりやそうだね。じゃ誰なの？」陽向が尋ねた。

「あれは爺やよ。お祖父さまの代から家で働いていて、家の中のことを全部取り仕切ってくれてるの」由美子がこともなげに答えた。

「(それ執事とどう違うの?)」陽向が小さな声で愛子に言った。

「(よく分からないけど、タキシード着てるのが執事で紋付着てるのが爺やなんじゃないかな)」愛子が答えた。

「で、ユミコ。メイドさんはどこデスカ？」アンナが遠慮なく尋ねた。

「みんなして一体何なの?そんなもの普通の家にいるわけじゃないじゃない。本当にライトノベルの読みすぎよ。うちには住み込みのお手伝いさんが3人いるだけよ」

「グニヤ」再び空間が歪んだ。

「何かさつきから空間がグニヤグニヤしているような気がするんだけど」由美子が不思議そうに言った。

「いや、ライトノベルの話をするとなさなるんだよ、由美ちゃん」愛子が言った。

「そうか、こんな大きな家なのにメイドさんはいないのか」陽向が残念そうに言った。

「(でもメイドって、よく考えれば西洋のお手伝いさんのことじゃない

のかな?)」

「もしかして由美ちゃんって、メイド服着なければメイドじゃないと思ってるんじゃない」

「そんなことより、早く入って」由美子が大きな玄関の入口を開けて、四人が家の中に入った。

「ワンワンワンワン」何か黒いものが陽向に飛びかかった。

「ひやあ〜」陽向がその黒い物体に押しつぶされた。

「あ、だめよケルベロス」由美子が言った。陽向が黒い大きな犬に押し倒されていた。

「あつ、あたし犬ダメなの。早くどけてどけて」陽向が叫んだ。

「あら、そうなの。ケルベロスが家族以外にこんなになれるのは初めてなのよ。ほら尻尾振ってるわ」

「いや、由美ちゃん。そんな悠長なこと言っている場合じゃなくて、牙向いてるよ、この犬」

「それは笑いかけているのよ、陽向ちゃん。ケルベロスが笑うなんて滅多にないのよ。よっほど気に入られたのね」

「それはいいから、お願いだからこの犬どけて」

「あらあら、ケルベロス。こっちおいで……陽向ちゃんの上から全然どかないわね」

「顔を舐めまわすな、バカ犬」陽向が叫んだ。

由美子、愛子、アンナの3人が力を合わせてやっとのことで陽向から引き剥がした。

「ぜえぜえ……エライ目にあつたよ」陽向が息を荒くして言った。「それにしてもこの犬、ケルベロスっていうの？」愛子が尋ねた。

「ええ、子犬でもらってきて名前を決める時に、ケルベロス、バスカーヴィル、ロンダーニーニの3つの候補の中から一番可愛い名前にしたの」

「(かわいいって……3つとも魔犬の名前だよね)」

「(ロンダニーニってブリーチの呪文に出てくる名前だよ)」

「(それを言うならケルベロスは冥界の番犬の名前デス)」

「(由美ちゃんって、ほとんど欠点がないけど致命的にネーミングセン

スがないね)」

「あのさ、由美ちゃんがお店持つときには絶対にあたしたちに相談してね」

「えっ、それはいいけどどうしてかしら」由美子が不思議そうに言った。

「いいかげんにあたしの頭から足をどける、バカ犬」

陽向に異常に懐いてしまった大きな黒犬は後ろ足で立って、前足を日向の頭の上に乗せて嬉しそうに「ハッハッハッハ」と口を開けていた。

## 第6話

「とりあえず生け花する前に、お茶でも飲みましょう」由美ちゃんがそう提案した。

「あ、由美ちゃん。もしかして今日は龍君いるのかな。久しぶりに挨拶したいんだけど」愛子が言った。

「えっ、ええ。部屋にいると思うんだけど。特に挨拶なんていらんんじゃないかしら」由美ちゃんの顔が心なしか強張りながら言った。

「何言っているのさ。この間はボクとアンナちゃんの料理をたくさん食べてくれてお礼を言う間もなく五馬鹿に紛れちゃってウヤマヤになっちゃったから、ちゃんとお礼したいんだ」

「そっ、そうなの。あまりお勧めしないけど。兄さんは部屋にいると思うわ」

「だから纏わりつくなくなって言ってるの、このバカ犬」

黒い大きな犬は払いのける陽向が遊んでくれているとも思っているのか、嬉しそうに陽向に飛びかかっては投げられていた。

「あっ、あの陽向ちゃん、お手柔らかにね。それとバカ犬じゃなくてケルベロスと呼んでくれると嬉しいんだけど」由美ちゃんが恐る恐る言った。

「あ、そうかゴメンね。ケルベロスって長ったらしいからケンでいい？」

「ワン!!」ケルベロスは嬉しそうに尻尾を振った。

「ケン、あんたそんなにあたしが好きなの」

「ワン!!」

「あたしの舎弟になりたいわけ??」

「ワンワン!!」

「犬は苦手だけど、由美ちゃん家の飼い犬だし舎弟にしてあげてもいいよ。そのかわりあたしの言うことは絶対服従だよ」

「ワン!!」ケンは嬉しそうに尻尾を振った。

「何か会話が成立しているみたいだね」愛子が言った。

「こんなに賢い子だったかしら？」由美子が不思議そうに言った。



「ふふふ、みんな伊賀忍者を舐めてもらっちゃ困るなあ。動物と会話をするのも忍術のひとつだよ」

「ホントですか、ヒナタ」

「疑うんならもつと見せてあげるよ。ケン「2—1」は？」

「ワン!!」

「ほらね」陽向が自慢げに言った。

「いや、ほらねって陽向ちゃんそれは……」

「疑い深いなあ、愛ちゃん。じゃ、ケン「1×1」は？」

「ワン!!」

「今度は2桁だから難しいよ。「15—14」は？」

「ワン!!」

「次は掛け算も入れるよ。「3×3—8」は？」

「ワン!!」

「ほらね。凄いでしょ」得意げな様子 of 陽向とケルベロスだった。

「会話が成り立っているとか以前に、それを犬と即興でできたのがス

ゴいよね」

「昭和の香りがするコントだったわね」由美子が感心したように言った。

「じゃ、そろそろ龍君に挨拶に行こうか」愛子が言った。

「本当に行くの？止めるなら今のうちよ」由美子が気が進まない様子で行った。

「何を言っているのさ、由美ちゃん。親しき仲にも礼儀ありだよ」

由美子は説得を諦めたのか、先に立って歩きだし二階の一室の前で立ち止まってドアをノックした。

「兄さん、由美子だけど」

「ん、どうした？」

「愛ちゃんたちが来ているの、挨拶したいんですって」

「ああ、鍵は開いているから入ってくれ」

「失礼します。龍君お久しぶり……で……す」愛子たちは声を失った。部屋中いっぱいロボットのプロラモデルが飾られていたのだ。

「由美ちゃん。龍君って三宮グループの後継者で、一部上場企業の副社長だよ。この部屋なに？」

「(そうなの、だからガンガムの趣味はずっと隠していたんだけど、この間お兄さんたちと会ってから弾けちゃって。今や部屋中にプラモを飾っているわ。リビングにも飾ろうとしたんだけど、私が断固阻止したの)」

「(だから五馬鹿なんかと付き合うのはよせって言ったのに)」

「ん、どうした愛ちゃん。何をゴシヨゴシヨとやっているのかな」龍一郎が快活に言った。

「えっ、いや何でもありません。それにしても凄いコレクションですね」

「あつ、愛ちゃん、ダメ」由美子が小さく叫んだ。

「えっ？」と愛子が振り返った時には、龍一郎に腕をガツシリと掴まれていた。

「ははは、愛ちゃんもガンガムが好きなのか。じゃ、僕の自慢のコレクションを見てもらおうかな」といいながら部屋の中に引きずり込んだ。

「えっえっ。いや、それほど興味があるというわけでは……」

「ははは、遠慮することはないよ。やっぱり一番にこれを見てもらわないとな。これが全てのガンガムの母ともいうべき、アムロ・ライが乗っていたファースト・ガンガムだ。僕はこれを超えるガンガムはないと思ってるんだ。そりゃ、後期のガンガムは装備は上かも知れないけど、やはり原型の良さが……」龍一郎は水を得た魚のように生き生きと説明を始めた。

「たっ、たすけて……」ドアの方を見ると、さつきまでそこにいたはずの3人と1匹の姿はどこにもなかった。

龍一郎の説明は以後1時間にも渡って熱く行われた。

一時間後、愛子はフラフラになりながら一階のリビングに現れた。「みんな酷いよ。ボクを見捨てて……」

「だから挨拶なんか行かない方がいいって止めたのよ」由美子と言った。

「愛ちゃんがプラモを誉めた瞬間に、ケンがあたしの服の裾引っ張っ

て下に連れていったんだよ」と陽向。

「ガンガムの話が出た瞬間に、いきなり部屋の中の霊圧が高まったノ  
デ避難しまシタネ」とアンナ。

なるほどと一瞬思ったが、結局はこの娘たちは自分だけ助かろうと  
したのではないかと愛子は思った。

「でも愛ちゃんなんかまだいいわよ。私なんてガンガムシリーズの全  
てのストーリーを説明できるほど話聞かされているんだから。そん  
なアニメなんか一度も見たことないのに」由美子がプンスカと怒って  
いる。

「できれば家庭の問題は、家庭内で処理してくれるとありがたいんで  
すけど」愛子が疲れ果てた様子で言った。

「なににせよ、龍君をこれ以上五馬鹿に接触させないで下さい。挨拶  
するたびにあれじゃ身が持ちません」愛子が力強く宣言した。

## 第7話

「じゃあ、そろそろお花の練習をしましょうか。みんな自分のお花を持ってきてくれたかしら」由美子が立ち上がったと言った。少女たちは予め由美ちゃんから好きな花を持ってくるように言われていたのだ。

「持つてきてま〜す」

「そう、じゃ行きましょう」由美ちゃんが先頭に立って廊下を歩き出し、アンナ、愛子、ケンに跨った陽向ちゃんが続いた。

「ひっ、陽向ちゃん。何してるの？」

「いや、ケンって体が大きいから乗れるかなと思って試したら乗れたんだよ」

「大丈夫なの？」

「平気な顔してるから大丈夫なんじゃないかな？」

「まあ、こんなに大きいから・・・由美ちゃん、いいのかな？」

「ケルベウスがいいと言うのなら、大丈夫よ」

「ケン、いけるよね」陽向が犬に尋ねた。

「ワン！」犬は元気に返事をした。

「大丈夫だっけ、愛ちゃん」

「なんかコミュニケーション能力が向上しているみたいだね」愛子が感心したように言った。

「ここの部屋よ」由美子が引き戸を開けて6畳の和室に案内した。そこには3人の和服の若い女性が待っていた。

「あの、由美ちゃん。この皆さんは・・・？」愛子が尋ねた。

「うちのお手伝いさんの本田さん、鈴木さん、川崎さんよ」

「ナンでお手伝いさんが必要なんですか？」

「せっかく生け花をするんだから、形もそれらしくしましょう。着物を準備してあるから、着物に着替えましょう」

「着物!!」

「由美ちゃん、着物の着付けなんてできないよ」愛子が叫んだ。

「大丈夫よ。本田さん、鈴木さん、川崎さんが着付けてくれるわ」

「お任せください」女中の皆さんが微笑みながら言った。

「うう、帯が苦しい」愛子が言った。

「着物なんて滅多に着ないしね」陽向も言った。

「陽向ちゃん、伊賀で着物はよく着てたんじゃないの？」

「忍者着や道着はよく着たけど、振袖なんて正月くらいにしか着ないよ」

滅多に着物など着ない現代っ子の二人はブツブツ不平を言った。

「あのお嬢様、アンナさんの着付けが……」鈴木さんが焦った声  
で由美ちゃんに言った。

「どうしたの？着物の寸法が合わなかったのかしら？」由美ちゃんが  
言った。

「いえ、寸法は合ってるんですけど、胸が大きすぎて襟が決まらない  
です」

「……………」

「……………」

「…………アンナちゃんが何か家事を覚えようとするたびに、ボク傷  
ついていくんだけど」愛子が言った。

「…………あたしのプライドもボロボロだよ」陽向も落ち込んだ様子  
で言った。

「あら、お二人は大丈夫ですよ。やっぱり日本人ですね、チャンと決  
まっていますよ」なぜか川崎さんが慰めてくれた。

「慰めてくれてるんだろうけど、駄目押しされちゃってるよね」

「日本人体型って胸薄出っ尻ってことだよね」

「胸が苦しいデス」アンナが辛そうに言った。

「帯が苦しいんじゃないんだね……」愛子が帯をさすりながら言っ  
た。

「圧迫されている場所が違うんだね」陽向が恨めしそうにアンナの胸  
を見つめた。

「じゃ、行きましようか」同じように着物に着替えた由美子が言った。

「え、由美ちゃん。この部屋で生け花するんじゃないの？」

「ここは着物部屋で、着物をしまつてある部屋なの。生け花は和室で  
やるわ」

「つまりあの部屋丸ごと箆笥みたいなもんだね」陽向が感心したように言った。

「ウォークインクローゼットなん德斯ネ」

「それは多分違うと思うんだけど、絵に書いたようなお金持ちの家だね」

しばらく歩いていると由美子が振り返って言った。

「あの、アンナちゃん。着物の時はそういう風到大股じゃなくて、つま先を「ハ」の形にしてシズシズと歩いた方がいいわ」

「こうデスカ」アンナは言われた通りに歩きにくそうにチョコチョコと歩いた。

「それと陽向ちゃん……」由美子は言いにくそうに言った。

「ん、どうしたの由美ちゃん」陽向は明るく言った。

「ケルペウスと仲良くしてくれるのは、嬉しいんだけど。着物着ている時はケルペウスに跨らない方がいいと思うの」

「え、そうなの。これ楽でいいんだよね」

「着物の裾が捲れちゃうから、女の子としてちよつと……」

「そっかあ、いつもと違ってスパッツ履いてないからね」

「履いててもやめた方がいいと思うわ」由美子は疲れた様子で言った。

## 第8話

由美子の先導で三人と一匹は後に続いた。

「(どうでもいいけど腹が立つくらいに広い家だね)」

「(あたしもう何回角曲がったか覚えてないよ)」

「(ボクたちって色々と持たざる者に入れられてるみたいだね)」愛子はそう言うと、由美子とアンナの背中を見つめた。

「(思わず税務署に電話したくなっちゃうよね)」陽向が割りとは本気に聞こえる声で言った。

やがて一同は渡り廊下へ出た。

「あの、由美ちゃん。外でやるの？」愛子が尋ねた。

「いえ、この廊下は生け花の部屋に行くためのものなの」

「(生け花の部屋?)」三人は驚いて声を上げた。

「ゆっ、由美ちゃん。生け花専用のお部屋があるの?」

「どれくらいお金持ちでも、いくらなんでもそれは……。」陽向が絶句した。

「あ、勘違いしないでね。母がお花の先生をやってるから、その教室として使ってる部屋なの。生け花のためだけに部屋を造るほど贅沢じゃないわ」由美子は慌てて言った。

「そっか、ビックリしちゃったよ」

「そうだよ。専用の部屋造るなんて贅沢だよ」二人は安堵したように言った。

「でも、お兄さんはガンブラ展示用の部屋を作ったけど」由美子は小さな声でボソッとつぶやいた。

「えっ、由美ちゃん。何か言った?」

「ううん、何でもないわ。着いたわ、ここよ」由美子が部屋のドアを開けて三人を招き入れた。

「あまり広くナイ普通の6畳の和室ですネ」アンナが言った。

「そうだね。でも体育館みたいに広い所の真ん中で四人でチマチマ生け花するのもかえって侘しいから、これぐらいでちょうどいいんじゃないかな」愛子が言った。

「ケン、どさくさまぎれに一緒に入ってこようとししないで外つで待つてな」陽向が犬に注意を与えていた。

部屋には既に四人分の水盤や剣山、鉢などの生け花用具が準備されていた。

「じゃあ、私はここに座るので三人は対面に座ってちようだい」由美子が座布団に座りながら言った。三人は言われた通り由美子の対面に正座した。

「三人とも生け花は初めてかしら？」

「二初めてでくす」

「そう。でも堅苦しく考えなくていいのよ。なにもお免状を取ろうつて言うんじゃないから私も厳しく教えるつもりはないわ。ある程度の基本は教えるけど、自由に活かしてくれればいいから」由美子が諭すように言った。

「二はくい」小学生のように素直にハキハキと返事をする三人であった。

「でも大事なことがあるの。お花はその人の人となりそのまま映し出されるの。だからお花を活ける時は、集中して無心に活かしてね」

「人となりデスカ。じゃあ、ワタシのお花はきつと可憐デスネ」アンナが少し恥ずかしげに言った。

「(今、アンナちゃん何か恐ろしいことを言わなかった?)」愛子が陽向にささやいた。

「(あんだだけゴージャスな顔とスタイルしているのに可憐ってのは、ベルサイユ宮殿を侘びと表現するようなもんだよね)」陽向もつぶやいた。

「(ロシア人基準じゃ、アンナちゃんレベルが可憐て言うのかな?)」

「(もしかして可憐じゃなくてカレリンって言ったんじゃないかな?)」

「(カレリン?それ何て意味なの?)」

「(いや、人の名前でアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・カレリンって人)」

「(早口言葉みたいな名前だね。で、誰なのその人)」



「(ロシアの130kgレスリングチャンピオンで、オリンピック3連覇した人。「霊長類最強の男」ってあだ名がつくくらい強かった人だよ)」

「(種を超越してレベルで強かったんだね。とりあえず凄い人だったのは分かったけど、17歳の女子高生が頬染めるくらいに憧れるかな?)」

「(だって、あのアンナちゃんだよ。宇宙CQCと狙撃の達人で、戦車運転できて、クリスマスプレゼントにお人形よりもAK47突撃銃をおねだりしたアンナちゃんだよ)」

「(そう言われれば可憐よりもカレリンの方が、アンナちゃんにはお似合いのような気がしてきたよ)」

「(でしよう?絶対にカレリンだって)」陽向が自信満々に答えた。

その時愛子とアンナの目があった。

「早くそうなれるといいね、アンナちゃん」愛子がニッコリ笑って言った。

「ワタシは可憐じゃないデスカ?」アンナが少し傷ついた様子で言った。

「うーん、カレリンにはまだ遠いかな」愛子が言った。

「ソウですか。どうしたら可憐になれマスカ?」アンナが尋ねた。

「今はまだ「土屋家最強の女」くらいだからね」

「??なぜ土屋家がでてきマスカ?」

「千里の道も一歩からだよ、アンナちゃん」

「なるほど、少しずつ努力して可憐になるのデスネ」

「そう、そしてオリンピック代表になって金メダルをとらなきゃ」

「??オリンピックにそんな競技ありましタカ?」

「まあ、3連覇もしてるんだからカレリンが代名詞になってるんじゃないかな?」

「わかりました。ワタシはオリンピックでロシア代表目指します」

「頑張つて。ボクも応援してるよ。そしてアンナちゃんがオリンピック3連覇できたら、みんながアンナちゃんのことを「女カレリン」って絶対に呼ぶようになるよ」愛子がキツパリと断言した。

「あの、愛子ちゃん」由美子がオズオズと言った。

「ん、どうしたの由美ちゃん？」

「今の会話、咬み合っているように見えて、もの凄くズレていたように聞こえたんだけど」

「そんなことないよ。アンナちゃん、カレリンになりたいんでしょ」愛子がアンナに尋ねた。

「ハイ、可憐になりたいデス」アンナがニツコリと答えた。

「ほら、息はバツチリじゃん」愛子が胸を張って言った。

「……もしかしてやつぱりカレリンじゃなくて可憐だったかも」陽向が小さくつぶやいた。

## 第9話

「とっ、とにかく。始めましょうか」由美ちゃんが言った。

「お花は自分の右側に広げてね。一応基本だけ教えておくとお花全体を3分割して、一番先を「真(人)」、上から1/3の部分を「副(天)」、下から1/3の部分を「体(地)」と呼ぶの。そこにアクセントを置くのがポイントね。お花の長さを調節するために、そこにある缺で切つて長さを調節するの。わかったかしら」

「「はーい！」」

「形とかいろいろあるんだけど、とりあえずは自由に活けて頂戴」

「「わかりましたー！」」

ボクたちは由美ちゃんに言われたとおりに持つてきた、自分の好きな花をそれぞれ自分の左側に広げた。

「バチン!!!」 豪快な缺の音がした。

「ドスン!!!」 更に豪快に花を剣山に突き刺す音が続いた。

「できマシタ」 アンナちゃんが誇らしげに言った。

「できたってまだ10秒も経ってないよ」 愛子が言った。

「それよりあれ見てよ、愛ちゃん」 陽向が言った。愛子がアンナの方を見ると高さ30cmほどのヒマワリが一本剣山に突き刺されて聳え立っていた。

「あつ、あのアンナちゃん。これは何かしら？」 由美子が恐る恐る尋ねた。

「ヒマワリです。日本人が桜が好きのように、ヒマワリはロシア人が一番好きなロシア人の魂デス」

「アンナちゃんらしい豪快さだね」

「さつき「可憐」とか言ってたよね。ロシア人はあれ見て可憐さを感じるのかな？」

「由美ちゃんが生け花は人となりが見れるって言ってたけど、ゴージャスな花とスリムなボディは確かにアンナちゃんそのものかもしれないね」

「他の何者も寄せ付けけないというか、聞く耳持たないというか」

二人が言いたいことを言っているなか、由美子は頭を抱えていた。

「あのアンナちゃん。他にお花は持ってきてないのかしら？」

「ハイ、ヒマワリだけデス。何か問題でもありませんか」

「問題というか、何をどこから説明していいものやら……」由美子は額を押さえて考え込んだ。

「由美ちゃんが悩んでいるね」

「そりゃあの豪快すぎる生け花をみたら、あたしだって悩むよ」

「まあ、ボクたちはボクたちのお花を生けよう。陽向ちゃん何もつてきたの」

「あたしは百合と花菖蒲。お店の人のお勧めだったんだ。愛ちゃんは」陽向が言った。

「ボクはかすみ草が好きだからかすみ草と草を少し」

「へえ、かわいい花が好きなんだね」

「本当はスマレが好きなんだけど、生け花用に売ってなくて鉢植えしかなかったんだ。引き抜くのもかわいそうだから」

「なるほど、じゃあたしたちもやろうか」

二人はそれぞれの水盤に向かって花を生けだした。由美子がアンナに掛かりきりになっていたため、自由に活けることができた。

パチンパチンと鋏の音が静かに響く。

アンナに掛かりきりになっていた由美子が二人を放っておいたことに気がついて声をかけた。

「ふたりとも調子はどうかしら」

「うん、バツチリだよ。ボクらしきが出せたと思うんだ」愛子が自身満々に答えた。

「うーん、一応生けてみたけどあまりうまくいかないや。自由に生けるってのも難しいね」陽向が自身無げに答えた。

「ふふふ、別に正式にやっているわけじゃないのだから、好きに生けていいんですよ」由美子が二人の方に向き直って、固まった。

「あつ、あの。愛子ちゃんこれは何かしら？」

「何って生け花だよ。ボクの好きなかすみ草と色が寂しいから草を少々」と愛子は答えた。

「なんか草むしりを忘れて雑草が伸びたグラウンドの片隅といった雰  
囲気なんだけど……」由美子が遠慮がちに答えた。

「え〜？ 酷いなあ由美ちゃん。ちゃんと教わったとおりに人、天、地と  
三段階に高さを調節したのに」

「……そのせいで虎刈りの丸坊主みたいにも見えるわね」由美子  
は再び額を押さえた。

「だってかすみ草自体がそんなに高さが無いから仕方ないんだよ。そ  
れを補うために草を長めにしてアクセントをつけたわけ」

「その草がかえって雑草感を強調してくれているわ」

「そうかなあ、侘び寂びがあつていいと思うんだけど……」

「適度の侘び寂びは必要だけど、お花だからある程度の華やかさは必  
要なのよ」

「愛ちゃん、侘び寂びつてのは貧相つてことじゃないんだよ」陽向が非  
常にも確信を突いた発言をした。

「……ぐぐぐ、ボクとしてはいいできだと思っただけだなあ」愛  
子は悔しそうに言った。

「アンナちゃんと愛ちゃんを足して2で割ればちょうどいいと思うん  
だけだな」由美子も思わず本音を漏らした。

「とりあえず、愛ちゃんのは高さが足りないから、私のお花を加えれば  
いいと思うの」由美子はそういつて愛子の作品の手直しを始めた。

## 第10話

「ああ、疲れた」颯太が家のドアを開けた。

「あつ、颯兄。お帰り」陽向がリビングから出てきて言った。

「おお、陽向か……ちよつと待て。お前何を被ってる?」

「えっ?別に何も被ってないよ」陽向が言った。

「背中に担いでいる毛皮はなんだ?」

「え、ああ。これ」陽向が説明しようとしたところ犬が陽向の肩から顔を出して叫んだ。

「ワンワン!!」

「わっ、いつ犬じゃないか」颯太が腰砕けになって言った。

「あ、そうか颯兄は犬が苦手だったもんね」

「そういうことはどうでもいい。何でそんなバカでかい犬が家にいるんだ。どこかから拾ってきたのか?」

「違うよ。由美ちゃんはこの犬でケルベロスっていうんだけど、あたしの舎弟になりたいっていうんで舎弟にしたんだよ」

「お前が友達少ないのは知っているから交友関係にまで口を出すつもりはないが、友達はいせいで霊長類までにしてあげ」

「何気にすごくバカにしてるよね。ゴリラやチンパンジーだったら友達にしてもいいみたいだね」

「で、何で由美ちゃんはこの犬が家にいるんだ」

「いや、それがこの子妙にあたしに懐いちゃってさ。」

「犬なりに何か相通じるものを感じたんだらうな」

「家にお泊りしたいってダダこねちゃって。由美ちゃんの許可ももらって家に泊めることにしたの」

「由美ちゃんの許可を取る前に、まず家族の許可を取らんか、バカ者」颯太が怒鳴った。

「まあ、まあ。颯兄が犬嫌いなのはわかってるけど、この子は頭いいから可愛いんだよ。ほら、ケン。颯兄に挨拶しな」

「フフン」

「おい、今この犬。俺のことを鼻で笑いやがったぞ」

「え、そんなことないよ。お母さんを見たときいきなりお腹見せて擦り寄っていくぐらいの礼儀正しいんだよ」

「それは家のボスを瞬間的に見抜いただけじゃないのか？」

「ちゃんと芸もできるんだよ、ほらケン降りな」陽向はそういうと犬を背中から降ろした。犬は礼儀正しく腰を下ろしてちよこんと座った。

「行くよ、ケン。お手」陽向が言った。

「ワン！」犬は右前足を陽向が差し出した手のひらの上にチョコンと乗せた。

「ケン、次はおまわり」

「ワン！」犬はその場で大きな体をクルクルと回しだした。

「どう？」陽向が得意げに言った。

「まあ、一般的な犬の芸だが……」

「とっておきの芸があるんだよ。ケン、おちんちん」

陽向がそう号令をかけると犬は右前足で股間を隠した。

「ふふふ、どうかな颯兄。こんな芸ができる犬はそうはいな……イタツ」

「よそ様の家の犬になんちゆう下品な芸を仕込んでるんだ、お前は」颯太はそういうと陽向の頭にゲンコを入れた。

「まったく、芸が理解できない人間とは話ができないよ。いくよ、ケン」

「ワン」ケルベロスは後ろ足で器用に立ち上がると、背中を向けた陽向の両肩に前足をおき、後ろ足でトコトコと陽向の動きに合わせて歩いていった。

「姉弟と言われても納得するくらい似たもの同士だなあれは」颯太が呆れたように言った。

「ふう〜」風呂から上がった颯太は部屋のドアを開けた。

「………陽向。おい陽向」大声で陽向を呼ぶ。

「なんなのさ颯兄、夜中に大声を出さないでよ。ご近所迷惑だよ」

「なんなのさじゃねえ、あれは一体何だ」颯太はそういうとベッドを指差した。

ベッドの上ではケルベロスが気持ちよさそうに寝ていた。

「さつき紹介したじやん。由美ちゃんとの犬でケルベロスだよ」

「そんな基本的なことを聞いているんじゃないやねえ。あの犬は俺のベッドで何をしているんだ?」

「寝てるみたいだね」

「俺が悪かった。お前には一から噛み砕いて話をしないと通じないんだったな。何で由美ちゃんのところからお泊りに来た犬が、俺のベッドで気持ちよさそうに寝ているんだと聞いているんだ」

「ケンはずいぶん前からベッドで寝ているんだって。で、あたしが一緒に寝ようって言ったなら遠慮しちゃって部屋から出て行ったんだよ。廊下でも寝ているのかなと思ってたんだけど、そうか颯兄のベッドで寝てたんだ。やっぱりベッドじゃないと寝れないんだね」

「寝れないんだねじゃねえ。冗談じゃねえ。叩きだしてやる」颯太がベッドに近づきケルベロスに触れようとした途端

「ワンワンワンワンン……グルル」とケルベロスが吼えた。

「なっ、何だこの犬は、いきなり凶暴になったぞ」犬嫌いの颯太は及び腰になった。

「ケン、そこは颯兄のベッドだから……」陽向が言うと、ケルベロスは心の底から嫌そうな顔をして前足で自分の横のマットレスをポンポンと叩いた。

「颯兄、一緒に寝かせてあげると」

「もともと俺のベッドだ、バカ者。なにが悲しくて犬のお許しを得て一緒に寝かせてもらわんとならんのだ」

「じゃあ、どうすんのさ?あたしかアンナちゃんと一緒に寝る?アンナちゃんだったらエニタイムOKだよ」

「そんなマネするくらいだったら野宿するわ。しょうがない今日は床で毛布被って寝るぞ」

「前向きなのか後ろ向きなのか、わからない決断だね」



## 第11話

【アンナちゃんの花嫁修業 茶道編】

颯太は寝苦しさの中で目が覚めた。

「うん、何で俺は床で寝てるんだ？そうか、あのバカ犬のせいだ。にしても随分体が重くて寝苦しかったな」颯太は胸の上を見た。黒い塊が身体の上に乗っかっていた。

「陽向。おい、陽向君」大声で陽向を呼んだ。

「颯兄は、朝っぱらからうるさい。一体どうしたのさ」

「どうしたのさじゃねえ。なんだこれは」

「なんだこれはって言われても、ケンと一緒に寝るなんて随分仲良くなっただねえ」

「仲良くなったわけじゃねえ。こいつが勝手に俺の身体の上で寝てるんだ」

「でも四肢を伸び伸びと伸ばして随分リラックスしているよ。颯兄の身体の上ってよっぽど寝心地がいいんだね」

「俺の身体は低反発マットレスか。どうでもいいから、このアホ犬をどけろ」

「ケン、そろそろ起きな」陽向がケルベロスに声をかけた。

「フアアア」ケルベロスが大きなあくびをしながら体を起こした。

「しかしこのバカ犬。耳元であんなにでかい声を出したけどピクリともしなかつたぞ。番犬としては全く使えんな」颯太が呆れたように言った。

「ガウ」ケルベルスが颯太に向かって吠えた。

「悪口だけには敏感に反応しやがる」

由美子の先導で三人と一匹は再び長い廊下を着物を着て歩いていった。

「(なんだかもう驚くの疲れちゃったよ、ボク)」愛子が言った。

「(税務署に通報するだけじゃ気がすまないね)」陽向も言った。

「(やっぱり胸がキツイです)」アンナも言った。

「(もう聞かなかったことにおこう。現実を見なければツラくな

いはずだから」「アンナから目を背けながら愛子が言った。

「いや、あたしはまだ可能性があるから……」陽向が言った。

「何をいうのさ、陽向ちゃん。ボクと1つしか違わないじゃないか」

「ほら、1年分の可能性がね……」2人が醜い言い争いを続けていると由美子が言った。

「じゃ、ここで草履に履き替えて庭に降りて頂だい」

「由美ちゃん、外でするの?」

「いえ、茶室に行くのに庭を通らないといけないから」

「(今度は茶室だつて、愛ちゃん)」

「(これくらい想像はしてたよ、ボク)」

「ユミコママは、お茶も教えているのデスカ?」

「いえ、これは父と母の趣味で……」由美子が言いにくそうに言った。

「(趣味の部屋!!)」三人が同時に叫んだ。

「茶道は茶釜とかしつらえなければいけないので、専用の部屋が必要なのよ」

「にしても趣味のためだけに茶室建てるなんて、やっぱりお金持ちはスゴいなあ」

「この調子じゃケンの部屋もあるんじゃないのかな?」

「そつ、そんなことはないのよ。(兄さんは等身大ガンダムをたてる場所を確保しているけど……ボソツ)」由美子が小さな声で言った。

「(ここよ) 由美子が言った。

「思ったより小さいね」愛子が言った。

「2畳しかないもの」

「ふむ、「侘び寂び」だね」陽向が言った。

「ワタシ、ワサビは苦手デス」アンナが言った。

「いや、アンナちゃん。ワサビじゃなくて「侘び寂び」ってのは、何と  
いうか……みすぼらしいものだよ」愛子が説明した。

「あの、愛ちゃん。その説明はちよつと……」由美子が慌てて言った。

「え、違うの？由美子ちゃん」

「えーっと、基本的には「侘び」と言うのは、「粗末であるだけじゃない」を、「寂び」と言うのは「古いものの内側からにじみ出てくるような、外装などに関係しない美しさのこと」を言うの」

「ふむ、なるほど」愛子が力強くうなづいた。

「わかったの、愛ちゃん」陽向が尋ねた。

「いや、全然。ようするに古くて美しいものだということにはわかった。どんなものかは想像もつかないけど」

「とりあえず入りましょう」話を変な方向に迷走しないうちに由美子が言った。

「ねえ、由美ちゃん。この入口って設計ミスじゃないのかな。こんなに小さくちや入れないよ」愛子が言った。

「ふふ、これでいいのよ、愛ちゃん。これは「にじり口」と言って、茶室の入口なの。こんな小さな入口にすることによって、日常を持ち込むことを拒んで、それを無理をしてくぐりぬけることで新しい世界が開ける入り口であるとされているの」

「なるほど．．．．」愛子が力強くうなづいた。

「愛ちゃん、意味が．．．いや、なんでもない。それにしてもこんな小さな入口じゃ、アンナちゃんのダイナマイトヒップが通れないんじゃないかな？」陽向が失礼なことを言った。

「バカにしないでください。チャンと通れマス．．．多分」

「結局、ちゃんと通る自信がないんだね」

「大丈夫よ。そこまで小さな入口じゃないから」

四人はにじり口から茶室へと入って言った。

## 第12話

「さて」由美子が対面に座って三人娘を見渡して言った。

「いよいよお茶なだけど……」心なしか由美子の顔が暗かった。「ボクたちは由美ちゃんの実似をすればいいんだよね」愛子が言った。「いえ、私は主でお茶を立てて、お客様のみんなをもてなす側だから動作が違うの。陽向ちゃんはお茶ができると言っていたわよね」

「できるというか、ばあちゃんの自己流のお茶を教わったくらいだから」

「何でお茶飲むだけで、そんなに悩みマスカ？」アンナは相変わらず悩みが無さそうだなによりだ。

「そうね。じゃとりあえず最初のお茶は私が飲むから、それを真似して。その後の作法も真似してくれればいいわ」由美子は開き直ったように言った。

「じゃまず入ってくるころからね。席中に入ったら、まず床前に進み床正面に座って、扇子を膝前において一礼してから、両手を畳にのいたまま、掛物を拝見するの。次に、花と花入を拝見して拝見が済んだら、一礼して立ち上がって席についてちょうだい」

三人娘はにじり口の方に戻り、床の間に座って掛け軸を見た。

「これ何が書いてあるんデスカ？あまり上手じゃありませんネ」アンナが何の躊躇いもなく酷評する。

「多分……白鳥なのかなあ。随分薄汚いけど」愛子も同調する。「これ多分、雁だと思うよ。月も書いてあるから。まあ、こういう下手なところが侘び寂びなんじゃないかなあ」

「あの、一応念のために言っておくけど狩野伊川院栄信という人の有名な絵なの。あと、できれば感想は心の中だけに留めておいてね」由美子が眉間を揉みほぐしながら言った。

「次に釜の拝見なんだけど、お点前をする人の入り口の踏込畳の前へ行って、道具畳へ進むの。道具畳では、炉の前に座って扇子を膝前において、両手を前についたまま、拝見してちょうだい。感想はくれぐれも心に留めてね」由美子が有無をも言わさぬ調子で言った。

「……」三人はいろいろと言いたいことを胸の中に収めて黙ったまま炬を眺め、その後席についた。

「次にお菓子の頂くの」由美子が和菓子の皿を4つ持つてくるとそれぞれの前に置いた。

「まず、懐から懐紙を出して……アツ」由美子がお菓子を皿からこぼすと部屋の隅に寝そべっていたケルベロスの前に転がしてしまった。犬はご褒美と思ったのか饅頭をペロリと平らげた。

「なるほど、こうかな？」陽向が皿を手にとって傾けると饅頭は皿からケロベルスの前に転がった。ペロリと犬は饅頭を食べた。

「ちよつとボクの位置からは難しいね」愛子をさういうと饅頭を楊枝で弾き飛ばした。狙いたがわず犬の前に落ちると犬はまたペロリと平らげた。

「ワタシの位置からケンが見えません」アンナは少し考えると、饅頭を手につつと犬に向けて投げつけた。だが、犬はすでに3個の饅頭を食べてお腹がいっぱいになったのか、アンナの饅頭には見向きもしなかった。

それを見たアンナは立ち上がるとケルベロスの傍に行き、口をこじ開けて饅頭を押し込んだ。

「オマエが食べないと作法になりません」アンナは憮然として言った。「あ、いや。そんな作法はないんだけど……」由美子が小さな声で言った。

「次にお茶の飲み方なんだけど。茶碗が運び出されて自分の正面に置かれたら一礼をするの。畳のへり内の前の客と自分との間に右手で茶碗を引き寄せ前の客にあいさつをしてね。

次に右手で自分と次の客の間に茶碗を置いて、次の客にあいさつをするの。右手で自分の正面の畳へり内ひざ正面に置き、主に「お点前いただきます」とあいさつをするのね。

茶碗を右手でとり左手にのせ、右手を添えて軽くおしいたき茶碗の正面を避けるために、時計の針の方向に二度まわしてからお茶を頂くの」

「ちよつと、ちよつと待つて由美ちゃん。えーつと、茶碗が……」

愛子が頭の中で一生懸命シミレーションし始めた。

「大丈夫よ、愛ちゃん。私の真似……（さすがにあんなことはもうないわよね）をしていれば」

「ソウです、アイコ。大丈夫デス」いつも脳天気根拠のない自信に満ち溢れているアンナが言った。

「じゃ、今日つかう茶碗はこれね」と言って由美子が茶碗を箱から取り出した。

「由美ちゃんちのものだから、きつと高いんだろうね」

「割らないようにしないと」

「あら大丈夫よ。これは普段使いの奴だからそんなに大したもんじやないわ」

「そつか、それなら安心……また随分見窄らしいというか小学生が作ったような茶碗だね」

「まあ、安いらしいからしょうがないのかな」

「ねえ、由美ちゃん。こういう茶碗っていくらくらいするのか？」愛子が尋ねた。

「うーん、普段使っているものだからそんなに高くなくて二十万くらいかしら」

「につにつ二十万……」愛子が思わず手から茶碗を落としそうになったのを、アンナと陽向が左右から手を差し伸べた。

「この小汚い小学生の工作みたいな茶碗が二十万……」

「黒楽茶碗というもので、渋くて好きなの」

「こういうのを渋いというんだね。あたしには侘び寂びって理解できないや」陽向が言った。

「普段使いで二十万というコトハ、ちゃんとした席ではどんなものを使っているんデスカ？」

「年一回の総茶会の時に出す、瀬戸の加藤唐九郎の茶碗かしら」

「値段聞いてもいい」愛子が恐る恐る言った。

「うーん、たぶん1500万円位かなあ」由美子が言いにくそうに言った。

「ねえ、お茶を花嫁修業に入れても無駄じゃないのかな。一生使う機会ないよ、多分」愛子が言った。

「ソータが理解できるとは思えません」アンナが自分たちの事は完全に棚に上げて同意した。

「颯兄は紙コップでお茶出しても気にしない人だしね」陽向が断言した。

「それよりさっそく始めましょう」由美子が促した。

二十万円の茶碗で飲むお茶は、不思議なことにもより美味しい気がした。

## 第13話

【アンナちゃんの花嫁修業 忍術編】

翌日四人は道場の板の間に合気道の道着みたいなものを着て立っていた。

「あの由美ちゃん、ここなに？」愛子が尋ねた。

「三宮流古武術の道場よ。わたしのお祖父さまが師範をやっているの。今日は、陽向ちゃんが忍術を教えてくれるというので貸してもらったの」

「由美ちゃんのお祖父さんっていうと、三宮グループの当主なんじゃ」「先代の当主だったの。今は父に後を譲って好きな武道をやっているわ。わたしはそのお祖父さまに小さい頃から手ほどきを受けていたわけ」

「まあ、アンナちゃんは宇宙CQC 2nd Edition Version 2.07の使い手だから、忍術なんてすぐ覚えられるよ」陽向が言った。

「なんデスカ、ソレハ？」アンナが不思議そうに言った。

「薄々そうじゃないかとは思っていたんだけど、あの時は思いついたことをそのまま言っただけだったんだね」確かこの娘はクリスマスに街で颯太が不良に殴られそうになった時に不良を吹っ飛ばして誇らしげに「宇宙CQC 2nd Edition Version 2.07」と宣言してはいなかったか？

「ああ、ソウデス、ソウデス。宇宙CQC 2nd Edition Version 2.06デシタ」

「思い出してくれて何よりだけど、なんかバージョンダウンしているよ」愛子はツツコむのも面倒くさくなってそう言った。

「じゃ体慣らしに由美ちゃんとアンナちゃん、組手してみたら？」陽向が言った。

「じゃあ、軽くお願いしようかしら」由美子も武道家の血が騒ぐらしい。

「ハイ、お願いシマス」アンナが言った。



道場の中央に二人が進み出ると1mほど離れて正対し、礼をして構えた。

アンナが踏み込んで右掌底を打ち込んだところを由美子が半身になってかわしながら、右手でアンナの手をつかみ左掌底を外側から肘に叩き込もうとした。それをアンナは左足を踏み込んで右肘を曲げて衝撃を肘で受け止める。続けて掴まれた右手首を回して由美子の腕を掴むと飛び上がって腕に飛びついた。由美子は腕を振り払って一歩後ろへ飛びのいた。

「なっなんか目にも止まらない攻防だね。ボク何が起こっているのかすら分からないよ」愛子が言った。

「アンナちゃんの宇宙CCCって基本的には、コマンドサンボだね。それに八卦掌を取り入れているみたい。由美ちゃんのは、古流柔術だね。立ち関節なんて今どき認められてないよ」

「なるほど……」

「念のために聞くけど愛ちゃんわかってる?」

「いや、全くわからない。何か凄そうだなあつてのだけは伝わった」

「……まあ、いいけどさ。要するに両方とも基本技は関節の取り合いつてことだよ。だから欠点といえど接近してないと戦えないってことかな。だからアンナちゃんの技は「近接格闘術」なんだよ。Version 2.07っていうのはよく分からないけど」

「そこはあんまりツツコまないであげてくれるかな、アンナちゃんだし」

「はい、終了」しばらく二人が戦っていたら陽向ちゃんがそういつて試合を止めた。

「アンナちゃん、すごい強いわ。わたしこれでも師範代クラスなのよ」  
「由美子もすごいです。今までここまでやりあえた相手は、パパ以外にいません」

うんうん、武道家同士の清々しい称え合いだね。

「じゃ、アンナちゃん。忍術を教えるから開始線に立って」と陽向が言った。

「ハイ」とアンナは素直に従った。

「アンナちゃんの欠点は、まさにCQCにあるの。接近しないと戦えない。だから遠くから攻撃する忍術の技を教えてあげる」そういうと陽向は手で印を結びながら、何やら詠唱を始めた。

「鉄砂の赤壁、僧形の劣塔、灼鉄熒熒、湛然として終に音無く。黒白の羅、二十二の橋梁、六十六の冠帯、白狼の骸、黒鴉の隴、淵明・白峰・断地・伏犬・雲海・蒼き隊列、太円に満ちて地に縛られるべし縛道の七十 七条空羅」そう言う手を手を挙げてからアンナに向けて振り下ろした。

「……陽向ちゃん、今のなに？」恐る恐る由美子が尋ねた。

「縛道という忍術だよ。呪文で相手を動けなくするの」胸を張って陽向が答える。

「えーと、何も変わってないように見えるんだけど」愛子が言った。

「ウっ動けマセン」アンナが泣きそうな声で答えた。

「「ええーっ」」三人が同時に叫んだ。

「えーっと、ボクたちはともかくとして、なんで陽向ちゃんまで驚いているの？」

「（……いや、実は「縛道」なんて忍術ないんだよ）」

「「はあ？」」愛子と由美子が同時に叫んだ。

「（それじゃ、今のは何だったの？）」

「（いや、ツカみのギャグでプリーチの鬼道の詠唱をやって、「なんでやねん」ってツッコみを期待してたんだけど……）」

「（この状況でツカみとかツッコミとかを期待するかなあ？）」愛子が感心したように言った。

「（じゃ、なんでアンナちゃんは動けなくなっているのかしら？）」由美子が不思議そうに尋ねた。

「（あたしの推測なんだけど……）」陽向が言った。

「（フムフム……）」

「（アンナちゃんが素直すぎて、自己暗示にかかっちゃって動けなくなっただんじゃないかと……）」

「（それはもしかしてバカ……いや、ものすごく単純っていうことじゃない？）」

「(愛ちゃん……素直って言ってあげようよ)」陽向がおばあちゃんが孫を見るような眼差しで言った。

「助けてクダサ〜イ」アンナの泣きそうな声が聞こえた。

「早く助けてあげた方がいいんじゃない?」

「そんな無茶な。なんでかかったのかわからないのに、どうやって助ければいいのさ)」

「(自己暗示で動けなくなったのなら、それらしいことやれば自己暗示が解けるんじゃないかしら?)」と由美子が提案した。

「(それは名案だね。やってみるよ)」

「じゃ、アンナちゃん。縛道を解くための解道をかけるよ」陽向がアンナに正対して手で印を結びながら再び詠唱を始めた。

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ、蒼火の壁に双蓮を刻む大火の淵を遠天より歩むべし。散在する獣骨、尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪、動けば風、止まれば空、槍打つ音色よ、天空を駆けよ。解道の十三 双連雷吼下」そういうときつきと同じように両手を上に突き上げてからアンナちゃんに向かって振り下ろした。

「どう、アンナちゃん?」陽向が言った。

「はい、動けるようになりまシタ。陽向の忍術スゴいデス」アンナは忍術のスゴさを目の当たりに見て興奮が抑えられないようであった。

「いや、ある意味スゴいのはアンナちゃんなんだけどね」

「世界中でアンナちゃんにしか効かない忍術だわね」

陽向は、忍術の神秘を目の当たりにして狂喜したアンナに抱きしめられて複雑そうな笑顔を見せていた。

## 第14話

「縛道、見事なり!!」道場の入り口で大きな声が響いた。

全員がそちらの方に目をやると、白髪で小柄な道着を着た老人が入り口からこちらの方ゆつくりと歩いてきた。

「由美ちゃん、あの人誰?」

「私のお祖父様の三宮隆一郎。この道場の師範よ」

「縛道など50年ぶりにお目にかかったわ」老人は構わず続けた。

「(もしかしてボクたちが知らないだけで、割りとポピュラーに存在する技なんじゃないのかな?)」愛子が由美子にささやいた。

「(それはないと思うのだけど……)」由美子が複雑な顔をして言った。

「由美子、このお嬢さん方はどちら様かな?」老人が由美子に言った。

「あ、紹介が遅れて申し訳ありません、お祖父様。皆さんわたしの友人で、こちらにいるのが工藤愛子ちゃん。あちらが土屋陽向ちゃんにアナン・カリーニンちゃんです」

「土屋……?」老人の目がスッと細められた。

「ええ、伊賀忍者の子孫で、今日はアナンちゃんに忍術を教えてくれることになってるんです」

「ほほう、伊賀忍術とな。お嬢さん、ひよつとして土屋正蔵という名に聞き覚えはないかの?」

「土屋正蔵は、あたしのおじいちゃんだけど、じいちゃん知り合いなの?」

「ほほほ、ちよつとした顔見知りでの……ドオリヤ」老人は陽向に近づくといきなり飛び蹴りを見舞った。

「わっ」陽向はとっさに連続バク転で蹴りを躲しつつ老人からの距離を取った。

「いつ、いきなり何するのさ、じいちゃん。危ないなあ」

「黙らっしやい。土屋正蔵の孫とあっては土屋正蔵自身も同然。ここで会ったが百年目。盲亀の浮木、優曇華の花。待ち得たる今日ただいま五十余年前の仇、いざ尋常に勝負、勝負」

「あたし百年どころか、まだ二十年も生きてないんだけど。五十年前のおじいちゃんの仇なんて言われても困るよ」陽向が当惑したように言った。

「モウキノウボク ウドンゲノハナ」サンスクリット語かな？」愛子が首を傾げて言った。

「盲亀の浮木、優曇華の花」と書きマス。出会ったり物事が実現することが困難なことの例えデス」アンナが得意げに解説した。

「へえ、アンナちゃん良く知ってるわね」由美子が感心して言った。

「古今亭志ん朝の「高田馬場」という噺に出てきマスネ」

「あのさ、アンナちゃん。マジで日本語の教材変えた方がいいと思うよ。そこら辺から現代日本語まで到達するのに、あと数百年かかると思うから」愛子が言った。

「大体、うちのおじいちゃんまだ生きていて、伊賀に住んでるんだけど。住所を教えるから仇討ちしたいなら、そっちの方に行つてよ」陽向が老人に向かって言った。

「一瞬のためらいもなく、自分のおじいちゃんを売ったね、陽向ちゃん」愛子が由美子にささやいた。

「（陽向ちゃんにしてみたら、巻き込まれたのは自分の方だから）」由美子が答えた。

「伊賀は遠いから面倒くさいのじゃ」老人が答えた。

「その程度で諦められる恨みだったら、二世代超えた孫のあたしで敵討ちなんてしようと思わないでよ」陽向が抗議の声をあげた。

「手近だから恨み晴らしとこうかなあと思つての。では覚悟はいいかな・・・グワツ」

由美子が老人の脳天に手刀を叩きこんでいた。

「お祖父様、いいかげんにして下さい。「・・・かなあ」なんてフレンジーに仰つても100%八つ当たりですから」由美子が静かに言った。

「脳天にチョップって・・・由美ちゃんって使っている言葉の割に師範のおじいちゃんを敬っていなくない？」愛子が不思議そうに尋ねた。

「とにかく、一から説明して下さい。そうじゃないと陽向ちゃんもわたし達も対処に困ります」

「わかった。説明してやろう。そうすればワシがなぜ土屋正蔵を仇と思うか納得するじやろう。とりあえず座りなさい」ボクたちは道場の床に円になって座った。

「あれは今から53年前、ワシがまだ三宮グループを継ぐ前じゃった。ワシは父と交渉して、グループに入る前に2年間の武者修行を認めてもらったのじや」

「はあ、武者修行ですか？」愛子が感心したように言った。

「日本全国を回っているんな敵と戦ったよ。北海道ではヒグマ。秋田ではツキノワグマ、奥多摩ではオオサンショウウオ、八丈島ではキョーン、奈良では鹿、大阪ではオバハン、六甲で猪、沖縄ではハブとマンガース。皆強敵だった」

「あの、戦うどころか保護しなきゃいけない、動物が幾つかあったんですけど？」愛子がいった。

「もう時効じやろ」老人は自信満々に言った。

「動物にシカ戦ってもらえなかったんデスカ？」

「道場もたくさん回ったよ。そして2年の期間が終わりかけたところに尋ねたのが、伊賀の土屋正蔵のところだったわけだ」

「ああ、わかった。うちのおじいちゃんにボコボコにヤられたのを恨んでるんだ？」

「バカを言うな。最初に縛道で動きを封じ込められた以外は互角だったわ」

「縛道!!」陽向、愛子、由美子の三人が声を上げた。

「アンナちゃん以外にあんな技にかかる人はいないと思っていたけど、意外と身近にもう一人いたね。つまり由美ちゃんのおじいさんってアンナちゃんレベルってこと？」

「(否定したいんだけど根拠が見つからないわ。ねえ陽向ちゃん、縛道って本当じゃないの?)」由美子はこめかみを押さえながら陽向に尋ねた。

「(そんな便利な技があったら、忍者は全員失業してハローワーク通い

だよ」「陽向は言った。

## 第15話

「で、結局じいちゃんは、うちのおじいちゃんとどういふ関係だったのさ」陽向が尋ねた。

「ワシは正蔵の道場に二ヶ月世話になった。力量がほぼ互角ということもあったが、それ以上に正蔵とは気があつてな。修業が終わったら二人でよく街まで飲みに出かけたもんじゃ」

「恨みの部分を早く話してよ」

「慌てるな小娘。「最初からクライマックス」なぞとは、人の心の機微を知らん改造人間のセリフじゃ」

「年寄りのくせに変なところを押さえてるんだね」愛子が言った。

「それはともかくワシらは、いつも二人で楽しく飲んでおつた。ところが正蔵はそんなワシの友情を裏切るような天をも恐れぬ振る舞いをしてかしておつたのじゃ」

「人の恨みごとってイマイチ感情移入できないんだよね。しかも50年前の話って言われてもなあ……」陽向が言った。

「その夜も二人で飲みに行った時に、とてもビュチホーなギャルがおつての」

「50年前にビュチホーだのギャルだのつて……新しいんだか古いんだか」愛子が呆れたように言った。

「ワシがその子をナンパしてしばらく一緒に飲んでおつたのじゃ。そしてワシがトイレに行つて帰つてくると正蔵とギャルの姿が消えておつた……ウウウツ。今でも思いだすと悔し涙が流れてくるわい」老人の目には確かに涙が浮かんでいた。

「なんかよくわからなかつたけど、要するに自分がナンパした女の子をおじいちゃんに横取りされたのを恨んでいるつてことでもいいのかな？」陽向が首をかしげながら言った。

「(始まりが壮大だった割には、オチがセコイ恨みだね)」愛子が言った。

「(よくもまあその程度の恨みを50年以上も持ち続けられているわよね)」由美子も呆れたように言った。



「そういう訳でな。土屋正蔵が不倶戴天の仇であることは理解できたじやろう。それに伴ってその小娘も自動的に仇となると……ドリヤ」老人は座った姿勢から陽向の方向に体を滑らせて蹴りを放った。陽向も正座の体勢から飛び上がった蹴りを避けた。

「だから危ないってばさ、じいちゃん」

「ええい、いさぎよく立ち会わんか」

「不意打ちばかりしているクセにどの口が言うかなあ？」愛子が呆れたように言った。

「奇襲攻撃は戦闘の基本デスネ」アンナが言った。

「わかったよ。とりあえずおじいちゃんに仇取ればいいんだね」陽向が言った。

「そうじゃ、それでこそワシの50年来の恨みが晴れるというもの……」

「まったく手間がかかる……ブツブツ」陽向はそう言いながら懐から携帯電話を取り出して何処かへかけた。

「もしもし。あ、おばあちゃん？おじいちゃんいる？えつ、寄り合い。しかたないなあ、じゃあおばあちゃんでもいいや。あのさ50年位前に家に2ヶ月くらい居候していた三宮隆一郎って人覚えてる？え、覚えてるんだ。はっ？汚い格好で家の前で行き倒れになっていた？その後2ヶ月も家に居候しておじいちゃんと毎晩飲み歩いていた？」

「(由美ちゃん、だいぶおじいさんの話と違うね)」愛子が言った。

「(都合の悪いところは抜け落ちて、いい部分だけ残っていたみたいね)」由美子が答えた。

「え、ありやロクなもんじゃねえから会っても近寄るなって。いや向うから勝手に近寄ってきてね。おじいちゃんに恨みがあるからあたくしで晴らすって言うてるんだけど。え、新婚家庭に2ヶ月も居候して旦那を毎晩飲み連れ歩いてた奴がなんの恨みだつて？あたしに怒られても困るよ」

「(おじいさんの居場所教えたら、陽向ちゃんのおばあちゃんが50年前の恨み晴らしに乗り込んできそうなことやってるね)」愛子が感心したように言った。

「(お祖父様だったら、一体何をなさっていたのかしら)」心なしか由美子の目に静かな怒りの炎が灯ったような気がした。

「そう。で、その恨みってのが三宮さんがナンパした女の子をおじいちゃんが横取りして消えた……ちよつ、ちよつとおばあちゃん、落ち着いて。50年以上前の話だから、いまさらそれ問題にしてもおじいちゃん自身覚えてないと思うよ。え、乙女の純情は時を超越するって?さすがにその歳で乙女なんて言ったらJAROが黙っちゃいないんじゃないかな、おばあちゃん」

ここで陽向が電話から耳を外して老人に言った。

「あのね、おばあちゃんが一週間コース、一ヶ月コース、一年コースのどれがいいかって」

「なんの話じゃ?」

「よく分からないけど入院コースとか言ってたよ」

「まあ、手頃なところで一ヶ月コースにしておこうかの」

「わかった」そう言うのと陽向は再び電話に向かって話しだした。

「そう、一ヶ月コースでいいって。入院っておじいちゃんどこか体悪いの?え、これから悪くなる予定?よくわからないけど大事にしてねって言うておいて、じゃあ」陽向は電話を切った。

「これでいいでしょう、じいちゃん。仇はおばあちゃんが取ってくれるって」

「ふむ、いいと言えはいんじやが……やはりこの手で仇を討たねば納得できん、覚悟……グワツ」老人が陽向ちゃんに飛びかかるうとしたところに脳天に由美子の手刀が決まった。

「わつ、じいちゃんが倒れた」

「由美ちゃん、仮にもおじいさんで師範なのに大丈夫?」

「いいのよ。これくらいいしなないとわからないわ」由美子は微笑みながら言ったが目が全く笑っていないかった。

「アノ、大丈夫、デスカ?」アンナが近寄って老人に声をかけた。

「もう……駄目かもし……れん。せめて最期は、その胸の中で……ギヤ」とアンナに飛びかかろうとしたところに、由美子の踵落としが脳天に決まった。

「あらあら、大変。お祖父さまが貧血をおこしちゃったわ。休ませなくちゃ」由美子が棒読みでセリフを言うと、片足を持って奥の部屋に引きずっていった。

「ああいうのも貧血っていうの？」陽向が言った。

「白目むいてたよね」愛子が答えた。

「アンディ・フグ並みの踵落としだったデスネ」

しばらくすると奥の部屋から由美子の説教する声が聞こえてきた。

この日、アンナが覚えた忍術は縛道だけであった。

## 第16話

【アンナちゃんの花嫁修業 お料理編】

「いよいよ本番だよ、アンナちゃん」ピンクのエプロンを着た愛子が腕まくりせんばかりの勢いで言った。

「料理が本番なんデスカ？」割烹着を頑なに着続けるこだわりの少女アンナが言った。

「そうだよ。日本には「男は胃袋でつかめ」という諺があつてね。胃袋を制するものは、幸せな結婚生活を制するんだよ」

「ワタシ、そんなに握力ないデスカラ、ショーコみたいなストマック・クローはできマセン」アンナが意気消沈して言った。

「何と勘違いしているのか想像もつかないけど、たぶんそれ違っていいから。日本の男は「肉じゃが」さえ食わせておけば、パブロフの犬も裸足で逃げ出すくらいの条件反射で惚れ直すよ」

「肉じゃがデスカ」

「そう肉じゃが。だから今日は肉じゃがを作つて颯太君に見直してもらうんだよ。フフフフ」

「ソウですか、フフフフ」

二人の少女の不気味な笑い声が台所に響きわたった。

リビングは葬式のような沈痛な沈黙が支配していた。

「アンナが花嫁修業をすると言いつ出した日からいつかは来ると覚悟はしていたが、ついに恐れていたこの日がやってきてしまった」颯太が立ち上がつて演説をぶつた。

「コクコク・・・」陽太と康太と陽向と由美子が頷いた。

「おい」

「だが、恐れるばかりでは勝利は望めん。我々も打つて出ようではないか」

「コクコクコクコク・・・」

「なあ、おい」

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動、之を撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し。皇国の興廢、この一戦に在り。各員一

層奮励努力せよ。康太乙旗を揚げろ」

「……そんなものが一般家庭にあるわけない」

「おい、バカ」

「お前はさつきから何をうるさくしてるんだ、A t s u s h i」

「うるさくもなるわ。いきなり呼び出されて連合艦隊出撃の辞を聞かされて何をわかれというんだ、お前は」A t s u s h iの後ろで三馬鹿が頷いていた。

「ん？説明していなかったか？アンナが花嫁修業というはた迷惑な、いや愁傷なことを始めて、今日はそのメインイベントの料理修業の日だ」

「それと俺たちがここに呼ばれたのと何の関係があるんだ？」G u uが尋ねた。

「それは俺たちが食う分を少しでも減らそ……馬鹿を言ってもらっちゃ困るよ、G u u君。アンナはれっきとしたバンドメンバー008じゃないか」

「あの設定まだ生きていたのか？」G o nが言った。

「そのバンドメンが料理をするのだ。みんなで食ってやるのがチームワークというものではないのかね、諸君」

「そりやまあ、そうかもしれないが」Y o uが渋々と言った。

「……愛子がバンドメンバー009ということを完全に忘れているなこの連中は」

「昔から都合の悪いことはすぐ忘れる連中だったから」康太と陽太が小さな声でささやきあった。

「まっ、まあアンナちゃんだし」A t s u h iが言った。

「致命傷にはならんだろう」G o nも同意した。

「変な材料さえ入れなければいいわけだからな」G u uが言う。

「せっかくの家庭料理だしな」とY o uも諦めたように言った。

「とてもこれから食事をいただく人たちのセリフとは思えないわね」由美子が呆れたように言った。

「ところで陽向、あの黒いでかい犬はなんだ？」とA t s u h iが聞いた。

「由美ちゃんこの犬でね、ケルベロスっていうの」

「で、なんでその犬がドアのところ立ちはだかつて番のようなことをしてるんだ？」

「んー、ちよつと大事な事をまだ話してないからかな」

「大事な事？」 Gon が聞いた。

「なんか嫌な予感がしてきたんだが。聞かない方がいいような気がする」 Guu が言った。

「今日のアンナちゃんの料理は「肉じゃが」です」

「和食か、アンナちゃんも頑張っているじゃないか。それが大事な事なのか？」 You が言った。

「別に隠すほどの話じゃねえよな？」 Guu が不思議そうに言った。

「なぜだ、胸騒ぎがどんどん大きくなっていく……」 Gon が訴える。

「お前、何かもつと大切な事を隠してないか？」 Atsushi が言った。

「いやあ、そんなに大したことじゃないよ。アンナちゃんは和食作りは初めてなのです」

「そりゃ、そうだろうなあ」

「まあ、多少マズくてもしょうがないということか」

「ロシア人だしな」

「そんなこと心配してたのか。バカだなあ俺たちの心は海よりも広いぞ。そんなこと気にするもんか」 四馬鹿がホツとした様子で言った。

「ですから本日の料理指導を愛ちゃんが……」

「二「ガタン」三」 四人が一斉に立ち上がった。

「タン」、「タン」、「タン」、「タン」その瞬間、陽向が投げた苦無が四馬鹿の足元に突き刺さった。

「グルルルル」ケルベロスが顔をあげて牙をむいた。

「逃げられると思ってるのか。お前たちにはバンドメンバーとしての義務を果たしてもらおうぞ」

「何が義務だ。てめえ俺たちを巻き添えにするためにわざわざ呼び出しやがったな」 Atsushi が叫ぶ。

「バンドと愛ちゃんの料理を食べることと何の関係があるんだ」G o n が言った。

「俺、じいちゃんの遺言で肉じゃが食っちゃいけないって言われてるんだ」G u u が訴える。

「お前のじいさんは、一体いくつ遺言残してんだ？ついでに言えば昨日商店街で会って挨拶したぞ」颯太が言った。

「皆さん、お忙しいようだから僕はこれで失礼するよ」Y o u がそーつとドアに向かうとケルベロスに激しく吠え付かれた。

「陽向、この犬を止めろ」Y o u が懇願した。

「勝手に逃げようとするからだよ。それ以上進んだら喉笛喰いちぎられるよ」

「なんでたかが肉じゃがのせいで犬に食い殺されんとならんだ」泣きそうな顔でY o u が言った。

「まあ、犬に喉笛喰いちぎられたら100%死ぬが、愛ちゃんの料理なら万が一愛ちゃんの料理の手元が狂った時に生き延びられる可能性はかすかにでてくる」颯太が悠々と言った。

「なんでそんなD e a d o r D e a t hみたいな危険な橋を渡らにやならんだ」A t s u s h i が叫んだ。

「ふふふ、あきらめなよ篤兄。あたしたちは一蓮托生、喜びも悲しみも幾年月だよ」

「陽向、お前ものすごく極悪な顔してる上に、何を言ってるのか全然わからん」

「どうせあたしたちは逃げられないんだから、それだつたら兄たちも逃がさないよ」

陽向もやはり土屋家の人間なのであった。

## 第17話

「ところで颯太、Yukiには声をかけなかったのか？」Atsushiが尋ねた。

「いや、電話はしたんだが忙しいらしくてな」颯太が答えた。

「あいつが俺たちの誘いを断るってのは珍しいな。何て言ったんだ？」

「ん？いや、普通だが・・・」

「トウルルル」

「カチャ・・・もしもし」

「おお、Yukiか？」

「あんたから電話なんて珍しいわね。どうしたの？」

「ああ、実はお前に折り入って相談があつてな。明日の夕方に家に来て欲しいんだが」

「ブチツ・・・ツーツーツー」

「あつYuki。もしもし？」

「というやり取りがあつてだな。電話もできないくらいに忙しいようだ」颯太が平然と答えた。

「バカ野郎、そりやお前の悪企みが一瞬で見破られてるんだよ」Atsushiが怒鳴った。

「それにしても、さすがYukiだな。あれだけの会話から愛ちゃんの影を感じるとは」Guguが感心したように言った。

「というか僕としては、何回も同じ手で騙される兄さん達の方が不思議なんですけど。一体兄貴に何て言って呼び出されたんですか？」陽太が尋ねた。

「確か、「合コン決めてきたから計画立てようぜ」だったな」Gonが言った。

「アンナちゃんの目が光っているのに、颯兄がそんなことできないことくらい気がつかないかなあ？」陽向が呆れたように言った。

「いや、冷静に考えればそうなんだが、「合コン」の一言で全ての思考活動が合コンに集中してしまったのだ。人間の煩惱とは恐ろしいも



のだ」Y o u が感慨深げに言った。

「…………こいつらは、そのうち絶対にデート商法に引つかかるな」  
康太が小声でつぶやいた。

「材料の買い物に行つてきまゝす」と玄関から愛子の声がした。

「おい、陽向。お前も一緒に行つてこい」颯太が慌てて言った。

「え、なんであたしが」陽向が文句を言った。

「愛ちゃんのことだ。じゃがいもがなかったからと言って代わりに大根使つたり、そつちの方が美味しいと思つたとか言つて糸こんにやくの代わりにうどんの入つた肉じゃがになりかねん。変なもの買わないように見張つて来い」

「それもそうだね。行つてくるよ」

三人の少女たちは、近くの商店街にやつて来た。

「で、アイコ。何買いマスカ」アンナが尋ねた。

「肉じゃがだからね。じゃがいもと人参と玉ねぎと牛肉だね」愛子が答えた。

「いらつしゃい、お姉さんがた。今日は白菜が安いよ」八百屋のおじさんが元気よく声をかけた。

「じゃがいもどれくらい買えばいいかな……………」

「じゃがいもかい、お姉ちゃん。安くしておくよ」

「あんまり多く買つて余らせてもしょうがないよね」

「…………お嬢様、じゃがいもは保存が聞くから大丈夫だよ」

「たくさん作つて余らしてもなあ」

「……………若奥様、どれくらいにしましょうか」

「いやだなあオジさん。若奥様だなんてボク照れちゃうよ。そののじゃがいも10kgちょうだい」

「ちよつと、愛ちゃん。いくら何でもそれは買いすぎじゃあ」陽向が慌てて口を挟んだ。

「そうデス、アイコ。じゃがいも10kgナンテ多すぎマス」

「よつ、颯ちゃんの奥さんも久しぶりだねえ」

「ソナ。結婚はまだデス。人参と玉ねぎ20kgずつくだサイ」

「ちよつとちよつと二人とも。石原軍団がカレーライスの炊き出しす

るんじゃないんだから、そんなに買っちゃってどうするつもり？」

「パプリカも安いよ。若奥様」

「5kgちょうだい」

「フキなんてどうだい、颯ちゃんの奥さん」

「なんだかわからナイケド10kgもらいマス」

「ストップ、ストップ。二人とも落ち着いて。その材料で一体なにを作るつもりなのさ」陽向が必死に二人を押しとどめた。

「ちっ、陽向ちゃんが一緒だったか」八百屋が舌打ちして言った。

「ちっじゃないよ、オジちゃん。そんなの売りつけて家の晩御飯に何を作らせるつもりだったのさ」

「えくと、無国籍料理？」八百屋は考えながら答えた。

「無国籍料理ってのは、訳の分からない料理って意味じゃないんだよ。普通の材料使ったって訳の分からない料理になるってのに……ブツブツ」

「えっ？」愛子とアンナが言った。

「あ、いやなんでもないよ。オジちゃん、じやがいも2kgと人参と玉ねぎを1kgずつちょうだい。後はなにもいらぬから」

「パプリカとフキはどうするんだい、陽向ちゃん」

「日本中探したって肉じゃがにそんなの入れてる家なんてないよ、オジちゃん」

「てんやわんやで八百屋での買い物を終えた三人は向かいの肉屋へ向かった。」

「へい、いらつしやい。何にしましょうか、若奥様」どうやら肉屋の主人は八百屋での騒ぎを見ていたらしい。

「その神戸牛を薄切りで2kg」愛子が間髪入れずに答えた。

「ちよつとちよつと、愛ちゃん。肉じゃがの肉に神戸牛なんか使ったら、もったいないオバケが集団でタップダンスしながら家の中でパレードしちゃうよ」陽向が慌てて止めた。

「そうデス、アイコ。もったいないデス」

「颯ちゃんの奥……」

「オジちゃん、シヤラップ。何も言わずにその一番安い牛の薄切り

肉1kgちょうだい……」

陽向が強制モードで無理やり買い物を終了させた。

帰り道で愛子が何かを思い出したように言った。・

「あつ、しまった。糸こんにやく買うの忘れた」

「糸こんにやくトハ、なんデスカ、アイコ？」

「こんにやくが細長くなったものだよ、アンナちゃん」

「細長い……冷蔵庫にウドンが入ってマシタ」

「うーん、それで代用すればいいか」

「お願いだから、肉じゃがにうどん使うのは勘弁してね」陽向が疲労困憊した様子で言った。

## 第18話

「ただいま〜」三人は食材の袋を両手に下げて玄関を開けた。「おお、お帰り」リビングから颯太が出てきて出迎えた。ケルベロスの吠え声がしているところを見ると、四馬鹿がこりもせず脱走を謀ったのだろう。

「疲れただろう。ゆっくりするといい」

「何を言うのさ、颯太君。常在戦場、風林火山だよ。すぐに料理にかからなきゃ」愛子が力強く答えた。

「そつ、そうか。意味はわからんが意気込みだけは伝わってきた。まあ、頑張ってくれ。ところで陽向君、ちよつとこつちへ来てくれ」颯太は陽向を廊下の隅へ呼び出した。

「何なの、颯兄」陽向が聞いた。

「首尾はどうだった？」颯太が心配そうに尋ねた。

「危なく何の料理になるかわからなくなる危険は防いだよ」

「よくやった。じゃあ続けて調理の監視を頼む」

「えー、あたし買い物だけで精魂尽き果てただけど。材料はちゃんと買ってきたし問題ないんじゃないの？」陽向が不平を訴えた。

「バカ野郎。愛ちゃん料理の真の恐ろしさは調理にあるんだ。目を離したら最後、肉じゃが作っていたはずが、いつの間にか「あの」カレーが出来上がる危険性もあるんだぞ」

「あのカレーって、あたし愛ちゃんの作ったカレーなんて食べたことあったっけ？」陽向が不思議そうに尋ねた。

「そこら辺から記憶が飛んでいるのか。お前は愛ちゃんカレーを一口喰っちゃあぶつ倒れ、一口喰っちゃあぶつ倒れしてたんだよ」

「ああ、なんかかすかに覚えてるような気がする。そうか、あれは別の世界線の記憶じゃなかったんだね」

「そんなアホな記憶があるか。まぎれもなくこの世界での現実だ。しかもなお悪いことに……」颯太は言葉を切った。

「まだなんかあるの？」陽向がゴクリと唾を飲んだ。

「アンナの花嫁修業ということで、愛ちゃんがいつも以上に張り切っ

ている。このままでは、料理を食ったらダイバージェンスメーターが1%の壁を超えてしまうかも知れん」

「凄い威力だね。たかが肉じゃがでβ世界線に戻っちゃうなんて」

「ああ、これまでのことが全部なかったことになるのだ。愛ちゃんや由美ちゃんは康太たちの彼女ではなく、アンナもいなくなる。お前は伊賀に逆戻りだ……冷静に考えたら俺に何のデメリットもないな。陽向君疲れただろうから、リビングでゆっくり休みたまえ」

「何言ってるのさ。今後絶対に現れることのない唯一無二の颯兄のお嫁さん候補のアンナちゃんもいなくなっちゃうんだよ。颯兄のためにも一生懸命調理を監視するよ」

「俺を心配してるふりをして、実はメチャクチャ貶めてないか？」

「そんなことないよ。疲れているけど颯兄のために頑張るよ」

「お前が俺のことをそこまで考えてくれたとは、兄として感慨無量だ……で、本音は？」

「ユカリんやマコちゃんたちと毎日楽しくやってるのに、いまさら伊賀に帰るなんて冗談じゃないよ」

「清々しいほどのアホだな、お前は」颯太が呆れたように言った。

「とにかく、この鈴羽に任せて。第三次世界大戦はあたしが防いでみせる」陽向が拳を握りしめながら言った。

「誰が鈴羽だ。いくら愛ちゃんでも肉じゃがで世界大戦までは起こせないとおもうぞ……多分」

「自信はないんだね」

陽向は使命感に燃えて台所へと向かった。

「愛ちゃん、調子はどうか？」

「あ、陽向ちゃん。今お野菜を洗い終えたところだよ」

「アイコ、ワタシは何スレばいいデスカ？」

「じゃ、アンナちゃんはじゃがいもの皮剥いてもらおうかな。手を切らないように気をつけてね」

「愛ちゃん、あたしも何か手伝おうか？」陽向が尋ねた。

「今日はアンナちゃんの花嫁修業だから、リビングでお茶でも飲んでてくれていいよ」

「そうしたいのは山々だけれど、1%の壁を超えないように見張つてないと……」

「何が1%だつて？」

「いやあ、何でもないよ、あはは」

「アウチツ」アンナが叫んだ。

「どうしたの、アンナちゃん」愛子が慌てて言った。

「包丁で指切っちゃいマシタ」

「だから言ったのに」陽向はそう言いながら、引き出しから絆創膏を取り出した。

「指出して……はい、これでいいよ。慌てないでいいからね、アンナちゃん。あんまり薄く剥かないで厚目に剥くといいんじゃないかな」

「わかりマシタ」アンナは答えるとまたじゃがいもの皮剥きを始めた。

「むけマシタ」アンナが誇らしげに言った。

「どれどれ……」

「ボクにも見せて……アンナちゃん、コレ何？」

「見ての通りじゃがいもデス」

「でもこれ直径1cmくらいしかないよ。確か元のは15cmくらいのお大きめのじゃがいもだったのに」

「ヒナタが言う通りに手を切らないヨウニ、皮を厚目に剥きまシタネ」アンナは堂々と答えた。

「14cmも剥くつてのは、皮じゃなくてほとんど本体だよ。手を切らない程度に薄く剥いてくれるかな」

「日本のじゃがいもの皮剥きは、難しいデスネ」

「いや、じゃがいもの皮剥きなんて世界共通だと思っただけ……」陽向が呆れたように言った。

## 第19話

やがてアンナが全ての野菜の皮むきを終えた。

「デキました。次は何をすればいいデスカ？」

「ありがたい。じゃ、お野菜と肉を一口大に切ってから、ぎつと洗ってもらえるかな」

「アイコはシマセンカ？」

「ごめんね。クリスマスに「テキサス・チエンソー」って映画を見てから、トラウマで生肉は見ることもできなくなっちゃったんだよ」

「ということは、康兄は今後野菜と魚しか食べれないわけか」陽向がつぶやいた。

「まあ、半分ベジタリアンになったと思えば」愛子が言った。

「できマシタ。陽向、ママンレモンはどこにありマスカ」

「ママンレモンは流しの上の棚に……ちよつと待った、アンナちゃん。ママンレモンで何するつもりなの？」陽向が慌てて言った。

「切った野菜を洗えとアイコが……」

「そこは水洗いでいいんだよ。野菜を食器用洗剤で洗ってどうしようってのさ」

「キレイになつて、除菌までされマスネ」

「どうせ炒めて煮込むんだから、菌なんては死んじやうよ。細胞培養しようってんじゃないんだから、どんだけ無菌操作が必要な肉じゃがなのさ」

「そうデスカ？」アンナは納得できない様子で、洗いだした。

「できマシタ」

「よし、じゃあアンナちゃん。ここからが本番だから気を引き締めてね。一瞬の気の緩みがとりかえしのつかない事故を生み出すんだからね」

「わかっています。一兵が油断してやられれば、一小隊が全滅します。

一小隊が全滅すれば、一中隊が全滅します。一中隊が全滅すれば、一大隊が全滅すれば、一連隊が、そして最終的には一師団が全滅しますね」

「いつ、いや。そこまで大仰に考えなくてもいいんだけどさ。それ誰から教わったの?」

「ワタシが教練を受けた時のドリル・マスター(Drillmaster)デス」

「それは何者?」

「ブツチャけて言うとは、パパですネ」

「薄々そうじゃないかとは思っていたけれど、やっぱりそうだったね。もうちよつとりラックスしていいよ、アンナちゃん」

「分かりました、ママ」

「いや、全然リラックスできてないから、それ。とりあえず鍋に油を入れて肉と野菜を炒めます。油はバターかサラダ油で……両方とも見当たらないね」

「ここに油がありマス、アイコ」アンナが油の缶を見つけた。

「天ぷら油か……同じ油だからいいか」

「ちよつと待った、愛ちゃん。列車が1mも動かないうちに脱線しかけているよ。てんぷら油なんかで炒めたら匂いが付いちやうよ」陽向が慌てて止めた。

「えー、でも同じ油だし、他に油見当たらないし」

「サラダ油は確かこのタンクの下に……ほら、あった。これ使つて」陽向が流しの下からサラダ油を取り出して渡した。

「では、油を入れて……まず肉を炒めます。そうそうウマイよアンナちゃん。次に野菜を入れて軽く炒めます……」

「次はどうしマスカ」アンナが箸で鍋の中の野菜を転がしながら尋ねた。

「次は日本酒を少々……どこにもないね。陽向ちゃん知らない?」愛子が尋ねた。

「日本酒は確かここに……あれ、ないや?切れているみたい」

「愛子、どうしマスカ」

「しよがないここに赤ワインがあるからこれで代用しよう」

「ちよつと、ちよつと愛ちゃん、肉じゃがに赤ワインなんて入れていいの」



「アンナちゃんが作るんだから洋風肉じゃがということにすればOKだよ」

「もうネーミングだけで勝負するつもりなんだね」

「それに日本酒だってワインだってアルコールなんだから、同じだよ。示性式にすれば $\text{C}_2\text{H}_5\text{OH}$ だよ」

「そりゃまあ、そうかもしれないけど……って、愛ちゃん、それメタノール。そんなんで料理したら、えらいこっちゃだよ」

「え？あたしの友達の瑞希がメタノールの方が殺菌作用は強いから料理には向いてるって……」

「いや、料理にアルコールを入れるのは別に殺菌のためじゃないから。普通のアルコールはエタノール、示性式は $\text{C}_2\text{H}_5\text{OH}$ だからね」

「まあ、同じアルコールということで、赤ワインを使おう。それ！入れるよ」愛子が景気よく赤ワインを半分ほど入れてしまった。

「愛ちゃん、具がワイン漬けになっちゃったけど。ここからどうやって肉じゃがにリカバリするの？」

「とつ、とりあえずワインが少なくなるまで煮詰めよう」

……30分経過

「さて、いよいよ味付けだ。ここが一番肝心だよ、アンナちゃん」愛子が力強く断言した。

「わかりマシタ」アンナが答えた。

「赤ワイン入れた段階でもう味付けもヘタクレもないんじゃないかなあ……」陽向がつぶやいた。

「醤油と味醂で味を整えるの……なんでこの家は何もないの」愛子が棚をかき回しながら言った。

「というか、買い物行く前に調味料の残量くらい調べておこうよ、愛ちゃん」陽向がツッコんだ。

「ここに塩があります、アイコ」アンナが言った。

「お塩かあ……野菜に味が染みたかどうかがわからないんだよねえ」

「デミグラスソースの缶がありマシタ」

「デミグラスソース……まあ、味が無いよりいいか」と言って缶

を開けて鍋の中に入れた。

「ナンか、量が少なくありませんか？」アンナが言った。

「水足してみようか」更に水を加えた。

「えーっと、カレーみたいになっちゃったけど、どうするの愛ちゃん？」

「せっかくだからカレールー入れてみようか」

「お願いだから、それだけは止めて」陽向が必死に止めた。

「まあ、これでじゃがいもに火が通れば出来上がりだよ」

「できあがりって何が？」陽向が尋ねた。

「もちろんアンナちゃん謹製洋風肉じゃがだよ」愛子が胸を張って言った。

「あくまで肉じゃがと言い張るつもりなんだね」陽向が疲れたように言った。

## 第20話

陽向が、精魂尽き果てた様子でフラフラとリビングに入ってきた。

「おお、陽向。肉じやがの様子はどうだ」颯太が尋ねた。黙っているがリビングにいる全員の刺すような視線を感じる。

「まあ、少なくとも手順の一つ一つに間違いはないよ……」陽向は言葉を選びながら答えた。

「なんかよくわからんな。俺はちゃんと肉じやがができたのかと聞いてるんだが」

「だから、あたしは調理の手順に間違いはないよって言ってるんだけど」

「……………」

「……………」

「…………それはつまり手順に間違いがないからちゃんとできたと解釈していいのか」

「解釈は自由だけど、とにかく一つ一つの手順は正しかったの」

「……………」

「……………」

「…………言ってる意味が全然わからんのだが、とりあえず肉じやがはできたんだよな」

「愛ちゃんはそう主張してるね」

「全く理解できん説明しろ」

「簡単に言えば肉じやが作る手順の中に、カレー作る手順が紛れこんでいたとしたら、手順そのものは正しくても別物になるでしょう。そういうことだよ」

「つまり失敗したと……………」

「そこまでは言わないけど、少なくともあたしはあんな肉じやがを見ることがないよ」

その時、台所から「できたよ」の声が出た。

「ついに来たか」颯太が言った。

一同がテーブルに着くと、愛子とアンナが皿に入った料理を運んで

きた。

「「「「ぐくつ」「」」」」一同が唾を飲んだ。

「割と普通だな」 A t s u s h i が言った。

「肉じゃがには見えんが」 G o n が言った。

「何でスープの中に入ってるんだ？」 G u u が言った。

「愛ちゃん、これなんて料理？」 Y o u が尋ねた。

「肉じゃがです」一瞬のためらいもなく愛子が答えた。

「こんな肉じゃが初めて見たんだけど」颯太が言った。

「アンナちゃんが作ったので洋風肉じゃがですね」

「・・・何でも風とつければいいもんじゃない」

「由美ちゃん、これって・・・」陽太が言った。

「ええ、多分」由美子が答えた。

「ねえ、愛ちゃん。これどうやって作ったの？」

「え？普通の肉じゃがの作り方ですよ。じゃがいも、ニンジン、玉ねぎと肉を切ってサラダ油で炒めて、そして日本酒がなかったので赤ワインを入れました」

「・・・その時点で肉じゃがの定義から、激しく逸脱していると思うのだが」

「同じアルコールだから誤差範囲だよ。で、ワインを煮詰めて味付けしようとしたら、醤油も味醂もなくて。味なしというわけにはいかないので、そこにあったデミグラスソースで煮込んだの。まあ、味が洋風だから洋風肉じゃがということだ」

「・・・その何でも適当に手近なもので間に合わせるやり方が惨劇の原因だと思うのだが」

「あのね、愛ちゃん」由美子が言いにくそうに言った。

「なんですか、由美ちゃん」

「愛ちゃんが肉じゃがにこだわる意気込みは分かるんだけど、それはごく普通の「ビーフシチュー」の作り方よ」

「ビツ、ビーフシチュー？ボクそんなの作ったことないのに」愛子が驚いたように言った。

「・・・おい、愛子」康太が言った。

「なにさ、康太」愛子が答えた。

「……お前は肉じやがの起源を知ってるか？」

「知らないけど、そんなのあるの」

「日本海軍の東郷提督を知ってるか？」

「日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊を破った人だよ」

「……その東郷提督がある基地の司令官だったときの話だ。若いころ留学したイギリスで食べたビーフシチューがどうしても食べたくなり、洋食などみたことも聞いたことない厨房の部下に、じやがimoto、ニンジンと、玉ねぎと牛肉が入っていることだけ伝えてビーフシチューを作れと命令した」

「ほとんど、イジメレベルの命令だね」

「……ところがその部下も漢だった。「洋食」と言われたにも関わらず、醤油と味醂で味付けをするという開き直りを見せた。そうしてできたのが「肉じやが」だ」

「ふーん、すごいね。で、それとボクと何の関係があるの？」

「……そのコックは、ビーフシチューから肉じやがを作り上げた。なんでお前は、わざわざその針を逆に回して肉じやがからビーフシチューを作るんだ」

「それボクすごいってことだよ」

「……ああ、確かにすごい運だな。日本酒の代わりに老酒や泡盛だったらとか、デミグラスソースの代わりにクレイビーソースだったりしたら目も当てられんところだ。目をつぶってバット振ったらボールに当たってホームラン級の奇跡が2つも続いている」

「うめえなこれ」Atsushiがガツガツとかきこむ。

「愛ちゃんの料理じやないな」Guguが失礼なことを言う。

「愛ちゃんお代わりあるかな」Gonが言った。

「アンナちゃんも作ったんだよ」Youが言った。

「ハイ、アイコが指導してワタシが作りまシタ」

「これならいつでもお嫁にいけるよ」Youが無責任に言う。

「(どうする?)」陽太が言った。

「(一応普通のビーフシチューですね)」

「(遅延型の毒物が入っているかも知れん。陽向、調理過程の査察体制に問題はなかったか?)」

「(いくつか危ない場面はあったけど、未然に防いだよ)」

「あれ、皆さん食べないんですか？」愛子が言った。

「いやあ、いまからいただくところだよ」颯太が答えた

「」「」「いただきまうす」「」「」

## 第21話

みんながビーフシチュー(愛子いわく洋風肉じゃが)を食べ始めた。

「おいしいわ、愛ちゃん」由美子が言った。

「野菜にしっかりと味が染みてるよ」陽太が言った。

「ちゃんと喰えるぞ」Atsushiが言った。

「体に悪影響も無さそうだ」Guuが言った。

「今日という今日は覚悟をしていたんだが」Gonが言った。

「食べられるということただそれだけのことがこんなに幸せだとは」Youが言った。

「ミンナ喜んでますね、アイコ」アンナが嬉しそうに言った。

「それはそうなんだけど、どういう訳だか余り嬉しくないんだよね」愛子が首をかしげながら言った。

「まあ、神仏のご加護により奇跡的に喰える料理ができたわけだ。これからもこの調子で頑張ってくれ、アンナ君」颯太が言った。

「おかず一つ作るのに、神仏の力に加えて奇跡まで必要って凄い話だよね」陽向が感心したように言った。

「……毎日の食事を作る度に動員かけられては、キリストや釈迦だって終いにや金属バットを振り回すと思うんだが」康太がツブやいた。

「アイコ、日本語難しくてよくわからナイのデスガ、ワタシたち誉められてるんデスカ？」アンナが首を傾げて尋ねた。

「うくん、どちらかというところ6:4で馬鹿にされているような気がしないでもない」愛子が答えた。

「ん、アンナその手は何だ？」颯太がアンナの手に貼られた絆創膏に目を留めた。

「コッ、コレはその……手荒れデス」

「この短時間でそんだけ手荒れするなんて、どれだけ敏感肌なんだ、お前は」

「違うよ、颯兄。アンナちゃんは肉じゃがが作ろうとして包丁で手を切っちゃったんだよ。頑張ったんだよ、アンナちゃんは」陽向が口を

挟んだ。

「……………そうか。まあ、あんまり無理するな」颯太が言った。

「……………ハイ」アンナが小さい声で答えた。

皆の称賛を聞きながら、アンナは無邪気に喜び、愛子の表情はだんだんと硬くなつて行つた。

【アンナちゃんの花嫁修業 エピローグ】

……………二日後の夕方

「アンナ、ちよつと散歩に行くから付き合つてくれ」颯太がアンナに向かって言った。

「これから散歩デスカ？もうすぐ晩御飯デス」

「飯は後でいい。早くコートを取つてこい」

「ハイ」

二人で家を出て駅の方に歩き出した。

「ソータ、ドコ行きデスカ」

「ついてくればわかる」

「ハイ……………」こういう時にアンナは無駄な質問をしない。日本人以上に大和撫子だった。

二人は電車に十数分乗り、見覚えのある駅でおりた。

「こつちだ」颯太が階段を先になつて歩く。アンナは後ろから「もしかして」と少しドキドキしながら従つて歩いた。やがて視界が開けて綺麗な夜景が見えた。想像した通り、ここはクリスマスにみんなで来た場所。愛子が「ここで愛を告白されるとずっと幸せになれるんだよ」と教えてくれた場所だ。二人は手すりに近寄つてしばらく夜景を眺めていた。風が冷たかった。

「まあ、動機が間違つてたとはいえ、花嫁修業ごくろうだったな。大変だったろう」

「ソータのためにやったことですカラ、苦労なんかありません」アンナは微笑んで言った。

「そのことなんだが……………」颯太が何時になく真面目な顔で言った。「お前が好きなのはタク&ライスのShuだろう？確かにShuをやつてるのは俺だが、俺とShuとは違うんだ。ShuはCDとライ



ブの中にしかないんだ」少し感情的になって一気にまくしたてた。少し言い過ぎたかと思つてチラッとアンナの方をみた。

「ソータ……」アンナが優しく言った。

「なっ、なんだ？」

「ワタシはタコ&ライスもShuも大好きデスネ」

「そうだろ。だから……」颯太が言いかけるのを手で制してアンナが続けた。

「でも、ワタシはちゃんとソータが好きデスヨ」照れも恥ずかしがりもせずキツパリ言い切る17歳女子高生。

「えーっと、それはそのつまり……」正面からハッキリと言われ、狼狽する25歳成人男性。

「そういうことデス」

「そういうことだったのだな」再び二人の間に沈黙が流れる。

「まっ、まあ。そうだからという訳じゃないんだが、これ」颯太は恥ずかしいのか前を向いたままアンナに小さな箱をつきだした。

「なんデスカ、コレ？」アンナの鼓動が早くなつた気がした。

「開けてみれば分かる」

「ハイ……シルバリングですネ。信じられません」嘘だ、箱を見た時に、自分は期待していた。そして確信もしていた。颯太なら。そうしてくれるはずだと。

「お前も一生懸命やったからな。ご褒美だ。サイズは陽向から聞いたから合ってるはずだ」

「ありがとうございます……あのくもう一つお願いがあります」アンナがオズオズと言った。

「むっ、なんだ」

「ソータの手ではめてくれませんか？」

「いや、構わんが……」颯太がアンナの右手をとるとアンナが慌てて言った。

「違います。左手の……中指じゃなくて薬指です」

「たかが指輪にそんな決まりがあるのか」颯太が指輪をアンナの左手薬指にはめようとした時にアンナが尋ねた。

「ソータ？」

「ん、なんだ？」

「もう一度聞きマスガ、本当にいいんデスカ？」

「いいも何も指輪を指にはめんでどうするんだ？」そしてアンナの指に指輪をはめた。

「ソータ、ワタシ嬉しいデス」アンナが思い切り颯太に抱きついた。

「わっわ、馬鹿者やめんか……胸が……胸が」

アンナが抱擁に満足した時、颯太は気絶寸前だった。

## 最終話

「ラくら、ラくら、ラララララくら」アンナが上機嫌でリビング中を縦横無尽にハタキをかけて回っていた。

「あの曲は「カチューシャ」ね。ねえ、なんでアンナちゃん、あんなに上機嫌なのかしら」由美子が言った。

「完全に舞い上がってますね」愛子が言った。

「気をぬくとメリー・ポピンズみたいに浮き上がっちゃいそうだよね」「やっぱり「あれ」のせいじゃないですかね」

「あたしも「あれ」のせいだと思う」三人はじつじつと「あれ」左手の薬指に光る指輪」を見つめた。

「おい、アンナ。みんながお茶している時にハタキをかけるのは止める。お前もお茶でも飲め」颯太が言った。

「ハイ、わかりまシタ」アンナは素直にそういうと颯太の横に寄り添うように座った。

「積極性も出てきているみたいね。そんなに嬉しいのならあたしたちに教えてくれてもいいのに」

「たぶん自分から言うのが恥ずかしいので、ボクたちに気づいてもらいたいんじゃないですかね。ほら、今だって膝の上で手を合わせる時にさりげなく左手を上にして指輪見せてるし」

「乙女魂大爆発だね。下手にツッコむとトルーキンの指輪物語並みの大叙事詩を聞かされそうだよ」

「でもここまでされて聞かないのも悪い気がするわね」

「そうは言っても、地雷と知って踏みつける勇気はボクにはないよ」

「さつきから、ちらちらとこつちを見ているんだけど・・・」

「アンナちゃん、それ綺麗な指輪ね、どうしたの？」由美子が緊張に耐え兼ねて尋ねた。

「ヤダ、ユミコ。ワタシ恥ずかしいです」アンナが顔を手で覆った。

「ほとんどセリフ棒読みだったね」

「指の隙間からこつちちを見てるよ。もっとツツコめって意味じゃないかな」

「アつアンナちゃん。それ誰かからのプレゼントなの？」

「ハイ、ソータからの結婚指輪デス」待ってましたとばかりにアンナがきっぱりと答えた。

「ブーっ」颯太が盛大に紅茶を噴き出した。

「お、お前はいうにことかいて何を言ってるやがる」

「だって、ソータがリングをはめてくれましたね」アンナが左手の甲を颯太に向けて指輪を突き出した。

「お前がはめて欲しいと言ったからだろうが」

「ねえねえ、颯兄。左手の薬指の指輪って意味知ってる？」陽向が聞いた。

「指によって意味が違うのか？」

「そんなことだろうと思っただけ、颯太君。左手の薬指って結婚指輪の意味だよ」

「アンナお前俺を騙したな」颯太が叫んだ。

「私は何も言ってません。どこにはめたいかと聞かれたから左手の薬指と言いましな。それにはめる時にソータに「本当にいいんデスカ？」と確認しましなネ」

「ぐぐぐ……」

「まあ、どうあがいてもアンナちゃんとの結婚は規定事項だったとは言え、兄貴も思い切ったよなあ」陽太が感心したようにいった。

「何の話だ？」

「だって、アンナちゃんと結婚するということは、あのパパが義父さんになるということだよ」

「なに、あのとんでも親父がか」颯太は今更ながらに驚いていた。

「……できればロシアで生活してくれると助かる」康太が言った。

「アンナ、まさか親父に言っただろうな」

「昨日、Sky peで報告しました」

「なんでお前はいつでもいい時に限って、無駄に行動力を発揮するんだ。で、何と言っていた」

「トテモ喜んでくれましな。興奮して持っていたコップを握りつぶすクライニ」

「そりやあ、激怒してんだ、バカ者。他に何か言つてなかつたか」

「お祝いに来るそうデス」

「なに、あのとんでも親父をロシアから出すのは、ワシントン条約違反じゃないのか？で、いつ来ると言つていた？」

「各地で活動しているスペツナズ2個中隊を集めるノニ、2日かかるから明後日の夜には家にいるヨウニト」

「特殊部隊集めて何をしにくるつもりだ、あの親父は」

「お祝いデスネ」

「お前は黙つてろ……いや、アンナ君。指輪がちよつと汚れているようだ。拭いてあげるから僕に渡したまえ」

「キツパリとお断りシマス」

「なに、夫が信じられんというのか」

「妻だからソータが何を考えているかくらいわかりマス」

「(どうでもいいけど、夫婦というのはもう疑問の余地はないんだね)」

「(リミッター外れるとそうなるんじゃない)」

「こうなつてはしょうがない」颯太がリビングの入口に向けて駆け出した。

「あ、ソータ。待つてくだサイ」アンナは手で印を組むと両腕を天に突き上げた。

「南の心臓、北の瞳、西の指先、東の踵、風持ちて集い、雨払いて散れ。

自壊せよ　ロンダニーニの黒犬、一読し・焼き払い・自ら喉を掻き切るべし　縛道の十九　追覇疾縛」詠唱を終えると両腕を颯太君に向かって振り下ろした。

「ぐおお、アンナ何をした。体が動かん」颯太が叫んだ。

「ふふふ、花嫁修業の成果　縛道デスネ」アンナが不敵に微笑みながら言った。

「どこの新婚家庭にこんな技が必要なんだ」

「少なくとも我が家では、必要です。ソータは都合が悪くなるとすぐ逃げマスカラ」

「ねえ、陽向ちゃん」愛子が言った。

「なに？愛ちゃん」陽向が答えた。

「縛道」って忍術、本当に無いの？これで身近にその術にかかる人が3人も出ただけだ」

「いや、本当に無いはずなんだけど、あたしも自信なくなっちゃった。こんど伊賀に帰った時に、秘伝書をひっくり返してみるよ」

「とりあえずこの術を解いてくれ、アンナ君」

「時間がなかったので解道までは修業してません」

「なにい？どうするんだこれ」

「とりあえず、明々後日パパが来るまでそのまま置いてください」

「ばか言うな。とつとと解け」

颯太の喚き声を完全に聞き流しながら、アンナは左手の指輪にウツトリと見とれていた。

## 15. 父と弟と日本襲来 第1話

少年は兵舎の廊下を歩いていった。スピンドルオイルの匂いと獣の匂い。ここはまさに男の世界だ。部屋の前に着くとドアをノックした。

「入れ」中から中年男性の声がした。温和だが隙のない兵士の声だ。「相良軍曹、入ります」少年はまだ10歳程度の年齢だろう。兵士と呼ぶには余りにもあどけない顔つきだが、目は戦士のそれだった。この部屋の主が継父だったこと、なによりも少年が大人でも敵わない兵士としての資質を持っていたことから、特例でこの部隊に入隊が許されていた。並みの兵士では、入ることができないロシア軍特殊部隊「スペツナズ」へ。

「お呼びでありますか、少佐殿」少年は敬礼をしてから尋ねた。

「非常事態が発生した、軍曹」男は少年に背をむけて窓の方を向いたまま言った。

「その前にご報告があります、少佐殿」

「言ってみたまえ」

「アフガンに潜入したAチームが、ゲリラの挟撃にあって孤立。救援を求めています」

「挟撃か……」

「至急、救援チームを派遣すべきかと……」

「こういう稼業をしていると運を信じるようになる」男は少年の方を振り返り、静かに言った。

「今回の場合には、情報が漏洩していた恐れが高く……」

「そういうことではないのだ、軍曹。敵と対峙していて敵の撃った弾が頬を掠めることもある。数cmずれていたら死んでいた。何度もそんな経験をするとな、運というものを信じるようになる」

「はっ、それとAチームと何の関係があるのでしようか？」

「それどころではない非常事態が発生したのだ、軍曹」

「まさか北朝鮮が核ミサイルの発射準備を整えたのでしょうか？」

「それだったらどれだけ良かったことか」

「それほどの非常事態が……」

「……エンジェルだ」男は悔しそうに言った。

「……はい？」

「エンジェルを忘れたのかね、軍曹」

「いえ、コードネームⅡエンジェル。本名、アンナ・マリヤ・カリーニ

ン。ぶつちやけて言う姉ちゃんのことだと思えますが」

「その通りだ、軍曹」

「そのエンジェルがどのような危険に見舞われたのでありますか」

「夕べ、私宛に「ソータと結婚しました。喜んでくだサイ、パパ」と連

絡があつた」

「申し訳ありません少佐殿。エンジェルとAチームの関連がどうして

もわかりません」

「つまりAチームは運が悪かつた」

「と言いますと」

「指揮官は、つまりわたしだが、明日より1週間休暇を取って日本に行

く。したがってどのような作戦行動も起こせん」

「ちよつと待て、親父。あんたが親バカ炸裂させて姉ちゃんの結婚邪

魔しにいくというだけでAチームを見捨てるのか」

「言葉を慎め、軍曹。ちゃんと手は打つつもりだ」

「失礼いたしました。さすが少佐殿であります。で、どのような手を

打つつもりでありますか？」

「Aチームには『各員一層奮励努力せよ』という電文を打つつもりだ」

「ロシア軍が負けた日本軍の電文を打って誰が喜ぶんだよ」

「心配するな、軍曹。ロシア人は懐が深い」男は静かに言った。

「こういうところが自分がロシア人になり切れないところだろうか  
と少年は思った。

「ということでは私には日本に行く」

「しかし、基地司令に何と言うつもりでありますか、少佐殿」

「エンジェルが結婚しそうだと思ったら、戦術核とアーム・スレイブ



(AS) 以外の全ての兵器の使用を許可してくれた」

「戦争しろ、親バカ親父共」少年が怒鳴った。

「で、君はどうするかね、軍曹」

「はっ、私はAチームの……」Aチームのメンバーと姉の顔が浮かんだ。

「一緒に日本に行かせていただきます」すまん、みんな。君たちの成仏はちゃんと祈っておく。

飛行機は静かにブリッジへと近づいていった。銀髪で髭を蓄えたガツシリとした大柄な男と東洋人に見える頬に傷のある少年が小声で話していた。二人に唯一つ共通しているのは鋭い眼差しだった。

「着いたぞ、軍曹。恐らく君の故郷である日本だ」

「少佐殿、本当に俺は日本人なのでしょうか？何の郷愁もわいてきません」

「無理もない、軍曹。わたしが君を救出して以来、君は日本とは何の関係もなく生きてきた」

「つまり俺は何者でもないってことですね」少年は自嘲気味に言った。

「何者であるかは問題ではない。何者になるかが問題なのだ、軍曹」男が諭すように言った。

「特に何かを守らなければならん時にはな」

「それならば……俺は、ソースケ・サガラ・カリーニンで有りたいです。少佐殿」

「アンナのためか？」男はいたずらっぽく微笑んだ。

「ねっ、姉ちゃんのこととは関係ないやい」それまでの大人びた口調が急に歳相応の子供っぽさに変わった。

「ははは、隠すな、軍曹。君のシスコンぶりは隊でも有名だぞ」

「うるせえ、親父。姉ちゃんに彼氏ができたからって、わざわざ日本まで飛んでくるあんたに言われたくはねえよ」

「別に心配だから日本にきたわけではないぞ、軍曹」

「じゃあ姉ちゃんが本当に結婚するっていったらどうするんできりますか、少佐殿？」

「スペツナズ二個中隊を待機させてある」

「Aチームを犠牲にしてですか？」

「戦争には運がつきものだよ、軍曹」

「戦争関係ねえよ」少年が叫んだ。

「お客様」キャビンアテンダントがやってきて引きつった笑顔で彼らに言った。

「当機は30分以上も前に着陸して、他のお客様はすでに到着ロビーについております。つもる話はロビーの方でお願い出来ますでしょうか？」

## 第2話

「了解しました。早速日本訪問のための装備の準備にとりかかりませす」少年は敬礼をして部屋から出て行くとした。

「待て、軍曹。どんな装備をするつもりだ？」少佐が呼び止めてたずねた。

「は、エンジェルがどのような状況下におかれているのかの情報がありませんので、いかなる事態にも対応できるようにするつもりであります」少年は胸を張って言った。

「つまり……？」男が不安げに質問した。

「はい、まず小火器としてAK47アサルトライフルに、バックアップ用としてアサルトショットガン。護身用として拳銃とバックアップ用の小拳銃を一丁ずつとそれに手榴弾を4個。万一敵がASを出してきた場合も考慮してロケットランチャーと、護衛兵がいた時に備えてグレネードランチャーを持っていきます。我々が少数であることを考慮し戦闘中の死角を守るためにクレイモア指向性地雷。そしてエンジェルを救出するために壁を爆破するためのTNT爆弾を2kgほどであります、少佐殿」

「完璧だ、軍曹」少佐が言った。

「ありがとうございます」少年は少し自慢げに胸を張った。

「ただ、問題点が1つだけある」

「何でありますか、少佐殿」少年は意外そうな声で尋ねた。・

「その装備をそのまま持っていったら、日本に着く前にモスクワの空港で我々は逮捕されるだろう」

「そんな馬鹿な。我々はロシア軍特殊部隊スペツナズであります」

「いくらスペツナズと言えども、それだけの武器を持って飛行機に乗せてくれるほど我々が母国の懐は広くないのだ、軍曹」

「ではどうしろと……」少年はうなだれて言った。

「駐日ロシア大使館に昔の部下が駐在武官として赴任している。彼に改造エアガンに鉛のBB弾を準備してもらおう」

「お言葉ですが、少佐殿。それでは街のギャングにも対抗できないか

と……」

「いや、日本では銃を売ってないのだ」

「銃を売ってない？技術力の高い国だと聞いていましたが、まさか全家庭で銃を自作しているとは……」

「うむ、さすがの発想だ、軍曹。もう少し分かりやすい表現に改めよう。普通の日本人は銃を持っていないのだ」

「そんな馬鹿な。それではどうやって身を守るのでしょうか、少佐殿」

「君の語彙には平和という言葉はないようだな」

「平和とは、戦闘と戦闘の間的小康状態であります」少年は真面目な顔で言った。

アンナに会うための飛行機に乗る前に大騒ぎであった。

「で、例によってこのメンバーなわけだね」愛子が周囲を見渡していた。

出迎えロビーには、アンナ、颯太、陽太、由美子、康太、陽向が揃っていた。

「何を言うんだ、愛ちゃん。アンナのお父さんと弟が来るんだ。みんなで出迎えてあげるのが礼儀じゃないか」颯太が胸を張って言った。

「アンナちゃんと二人きりで出迎えるのが怖いので、ボクたちまで巻き込んだのは許します」

「ははは、何を言うんだ、愛ちゃん。俺は全然怖いことなんかないぞ」颯太が言った。

「じゃ、ボクたち帰っていいですか？」

「早まるんじゃない、愛ちゃん。せっかく来たんだ、もう少しいればいい」

「怖いのをあくまでも認めないつもりなんです。それはいいとして、あの連中は何なんですか？」愛子が冷たい目で颯太の後ろにたむろっている連中を指さした。

「何だ、愛ちゃん。しばらく会わないうちに俺たちのことを忘れたのか」Atsushiが言った。

「あんなに可愛がってやったのに忘れるなんて、薄情な娘だ」Gonが

言った。

「照れなくてもいいんだよ」G u u が答える。

「というか、俺たちも何でここにいるのか、よくわからんのだが」Y o u が言った。

「今度は兄貴に何とやって騙されたんですか？」陽太が尋ねた。

「スチワードと合コンだから、空港に来いと・・・」A t s u s h i が言った。

「合コンという言葉を知ると思考停止しちゃうみたいだね」愛子が呆れたように言った。

「何で被害者の俺たちが責められんといかんだ」G u u が憤慨していった。

「同じ手で何回も騙されちゃ、自業自得だよ」陽向が言った。

「巧妙な騙しだな」G o n が感心したように言った。

「・・・小学生でも2回は引つかからんというのに」康太が言った。

「というかですね、兄さんたち。1万歩譲ってスチワードの合コンというのに騙されたのはいいとしましよう。でも、合コンで空港に集合っていうのは、幾らなんでもおかしいと思わなかったんですか。スチワードスにしてみたら空港ってのは、職場ですよ。普通、職場で合コンはしないでしょ」陽太が諭すように説明した。

「いや別にライブ会場で合コンやっても構わんで、俺たちは」Y o u が不思議そうな顔で言った。

「あなた方にいまさら常識とか説こうとは思いませんが、どこの世界に合コンライブをやるバンドがいるんですか」愛子が呆れたように言った。

「目の前にちゃんというじゃないか」A t s u s h i が胸を張って言った。

「そうですよね、そんな人達だったんですよね。すいません、ボクが悪かったです」

アンナパパが到着する前に空港ロビーも大騒ぎだった。

日本から南に遠く離れたメリダ島。密かに地下に造られた潜水艦ドッグで、銀髪の少女が、自分の身長の2倍近くありそうな中年男性

に向かつて、腰に手を当てて叱りつけていた。

「マデューカスさん。こんななに工事が遅れていては、この子が完成する頃にはわたしはオバさんになってしまいます」

それこそ幼き日のテレサ・テスタロッツサ嬢であったが、この物語とは何の関係もないので話は発展することもなかった。

### 第3話

「まあ、愛ちゃん。今日は彼らはタコ&ライスのメンバーじゃないんだ」颯太が言った。

「ええ、ボクはとつくの昔にそうじゃないと思ってますから」愛子が冷たく言った。

「いや、そういう意味じゃないんだ」

「四馬鹿っていうのは、もう知ってますよ」

「いや、今日の彼らには重要な役目があつてわざわざここに呼んだんだ。少しは優しくしてやってくれ」

「重要な役目……ですか？」

「そう、今日の彼らはタコ&ライスではなく、四馬鹿でもない。新しいユニット名は「ダミーズ」だ」

「なんだかよく分からないんですけど、ボクたちに関わってこないなら無視くらいはしてあげます」

「それが最大限の優しさなのか……」颯太は絶句した。

「さつきから黙って聞いていれば、俺たちを呼んだのには何か魂胆があつたわけだな」Atsushiが不意に言った。

「む、聞いていたのか、お前」

「そんだけ大声で話せば嫌でも聞こえるわ。何で俺たちが漫才なんかせにゃならんのだ？」

「それはトミーズだ、バカ者」

「漫才なんかつて、前にバンドは踏み台でM-1取るのが夢とか言つてたよね」愛子がツッコんだ。

「するとミイラになるのか？」Atsushiが愛子を見無視して言った。

「それはマミーズ。俺が言ったのはダミーズだ」

「ダミーズ？どういう意味だ」

「心配しなくてもそのうち分かる……（身体でな）」

「ところでアンナちゃんのパパってどんな人なの？」由美子が尋ねた。

「ハイ、身長は190cmくらいで肩幅が広くて、短めの銀髪に口髭と

顎髭を生やしてマス」

「そういう人を見つければいいんだね」

「ソレと今回は弟も一緒に来てマス」

「アツアツアンナちゃん、弟がいたなんて初耳だよ。弟さんいくつ？」

「10歳デス」

「10歳でアンナちゃん似なら銀髪の天使みたいな子なんだろうなあ」

「イエ、ソースケは日本人デス。本名は、ソースケ・サガラ・カリーニンです」

「なんで日本人が弟なの？」陽向が不思議そうに尋ねた。

「ハイ、シベリアで飛行機の墜落事故が会った時に、パパの部隊が救助に出て、タツタ一人の生き残りがソースケでシタ」

「どうでもいいが、スペツナズが学校で親父が学校の先生という最初の設定を完全に忘れているだろう、お前は？」颯太がたまらずツッコんだ。

「施設に入れるのは可哀想だと、パパが我が家に引取りまシタネ」颯太のツッコみを全く無視してアンナが付け加えた。

「アンナちゃんは、抵抗なかったの？」由美子が尋ねた。

「ハイ、ワタシは一人っ子で友達もいなかったもので、スゴク嬉しかったデス。だからソースケを姉萌えにするようにイツパイ可愛がりましたネ」

「姉……何だつて？」愛子が尋ねた。

「姉萌えデス。弟はすべからくシスコンでなくてはならないと日本のライトノベルで読みましたネ」

「偏った属性を弟に押し付けるんじゃない」颯太が言った。

「無理やりシスコンにされた弟君も、いい迷惑だよね」陽向がつぶやいた。

「でもアンナちゃんが日本に来ちゃったら弟さんは、モスクワの自宅に一人なの？」陽太が尋ねた。

「イエ、ソースケは9歳の時にパパの学校に転校しまシタ。成績が良かったノデ、今年から軍曹という係になったそうデス」



「二二」10歳でスペツナズの軍曹く??」「二二」

「ハイ、自慢の弟デス」アンナは嬉しそうに微笑んだ。

「10歳で特殊部隊の軍曹ってのは、ムチャにも程がある国だな」

「(というかアンナちゃん、軍曹ってのが何かの係だと思っっているみたいだけど)」

「(・・・狙撃だの迷彩服だの、あれだけミリタリーにどっぷり浸っているのに、なんでそんな基本的なことを知らないのだ)」

「(アンナちゃん的には全くミリタリーに結びついてないんじゃないかなあ)」

「(戦車の運転をしてたとか言ってたが、あいつは一体戦車を何だと思ってるんだ?)」

「(作業車の一種とか?)」

「(キヤタピラー以外に共通点は無いよね)」

「(まあ世の中には17歳で大佐にして、上陸強襲潜水艦の艦長をしている女の子もいることだし、10歳の特殊部隊軍曹がいてもおかしくないかも知れん)」颯太が頷きながら言った。

「クシュっ」遠く離れたメリダ島の地下ドッグでテレサ・テストアロッサはクシヤミをした。

「お風邪ですか?ミス・テストアロッサ」長身痩身の男が言った。

「あ、いえ。大丈夫です、マデューカスさん。きっと誰かが噂をしていたのでしよう」銀髪の少女が答えた。

## 第4話

「そう言えば少佐殿。少々お聞きしたかったことがあるのですが」入国審査の列に並びながら少年が言った。

「なんだね軍曹」

「いくら少佐殿が親バカ……アンナ姉さんを溺愛していたにしても、結婚すると言ったぐらいで引き離すためにわざわざ日本にまで来るのは行き過ぎのように思えるのでありますが……（Aチーム見殺しにしてまで）」

「なるほど一利ある意見だ。だが、君は本質を見誤っているようだ、軍曹」

「本質でありますか？」

「何も私はエンジェルが結婚すると言っただけで、日本に来た訳ではない。実はエンジェルが日本に留学するに当たって、部隊より極秘任務が与えられていた。結婚がその任務に影響を与えないように、引き離す必要があるのだ」

「そんなことが。やっと状況が理解できました。さしつかえなければその任務というのを教えていただけませんか」

「司令と私しか知らない極秘任務だ」男が重々しく言った。

「そこを何とかお願いいたします。姉さんに関わることでですから、もしかししたら自分も力になれるかも知れません」

「……そうかも知れんな」

「ぜひ……」

「うむ、絶対に機密を漏洩してはならんぞ、軍曹」

「もとより承知であります、少佐殿」

「……ジャンポだ」

「……はっ？」

「知らないのかね。日本で売っている少年ジャンポという漫画雑誌だ」

「名前は聞いたことがあります、それがどうしたのでありますか？」  
「我が部隊の隊員たちの大半はあの雑誌のファンだ。そこでエンジェ

ルに毎週少年ジャンプを送らせていたのだ」

「たつ、たかが漫画を……」

「たかが漫画ではない。Death BookのRが死んだ時には、部隊葬を出せと隊員が乗り込んできた」

「……」

「R派と曰『ライト』派で諍いが起きたことも一度や二度ではない。危うく作戦行動にまで支障がでるところだった」

「……」

「最近ではPleaechだ。よもや、卯の花四番隊隊長が初代剣七だったとは……まして更木剣七を強くするために戦って死んだ時には、カウンセリングに通う隊員の数が増えた」

「ツブしてしまえ、そんな部隊。というか、あんたも全部読んでるんじゃないか」少年がたまりかねたように怒鳴った。

「従ってエンジェルからのジャンプ送付が途絶えることは隊の命運を左右すると言っても過言ではない。下手をすればクーデターが起きかも知れん。それを防ぐために私は多忙の中わざわざ日本へやって来たのだ」

「少佐殿、愚見申し上げてもよろしいでしょうか？」

「遠慮なく言いたまえ、軍曹」

「アンナ姉ちゃんに「結婚してもジャンプ送るの忘れるなよ」とメールするだけでよかったんじゃないのか、親父？」

「おお、今日の日本はいい天気だ」少年の発言を無視するかのようには窓の外に目を向けた。

「知らんふりしてんじゃないよ。何のかんの言って結局姉ちゃんの結婚妨害するのが目的だろうが」

「そういう君はどうなのだ、軍曹」

「おお、俺は姉ちゃんが幸せで、姉ちゃんを任せられる男だったらそれでいいかなと……」

「参考までに聞くが、君はエンジェルを任せられる男としてどの程度の技能を想定しているのだ？」

「狙撃が1000mクラス、ナイフ格闘、徒手格闘がマスタークラス

で、重装備で1日30km踏破、高高度からの夜間パラシュート降下により敵の後方に潜入でき、ナイフ1本で1週間のサバイバル技能を有し、すべての陸上車両を運転可能な男であります」

「スペツナズに欲しい人材だな。それは結局遠回りにダメ出ししているのではないかね、軍曹」

「そつ、そんなことないやい」少年が赤くなっていった。

「まあいい。とにかくこの点において君と私の利害は一致している。二人で力を合わせてエンジェルを奪回しよう」

「了解であります、少佐殿」少年が男に向かって敬礼した。

「あのく盛り上がっているところを申し訳ありません」額に血管をヒクヒクさせた男が声をかけてきた。

「む、誰だね、君は？」男が言った。

「入国管理官です。他のお客様は20分も前に全員外へ出て行かれました。できれば早く手続きを済ませていただければありがたいのですが」係員は怒りを抑えた声で言った。

男と少年は慌てて手続きを行った。

## 第5話

飛行機が到着してからかなりの時間が経っているのに、アンナの父と弟は出て来なかった。

「お父さんたちなかなか出てこないわねえ」由美子が言った。

「アンナちゃん、お父さんたちもしかして飛行機変更したんじゃないのかい？」陽太が言った。

「イエ、そんな連絡は受けてないんデスガ」アンナが困惑したように言った。

「…………アンナちゃん」

「何ですか？」

「何となくんだけど、あの迷彩服着て怪しい動きをしている男の子が弟さんじゃないのかなあ？」愛子が遠慮がちに言った。

一同が入国ゲートから続く廊下に目をやると、確かに迷彩服を着て数mおきに廊下を右に左に走りながら柱の影に身を隠すような動きをしている少年がいた。

「ソウです、あれが弟のソースケデス。アイコよくわかりましたネ」

「いや迷彩服とか怪しい行動とかから総合的に判断して…………」愛子の頭に由美子を尾行した時に、合羽橋を迷彩服で走り回っていたアンナの姿が浮かんだ。

「でもあれはソースケの私服の米国陸軍デザートパターン迷彩服で、ワタシのGRU山岳フローラー迷彩服とは全然違うのに分かったのは凄いデス」

「私服まで迷彩服って。でも一般人には見分けつかないから。それより弟さんのあの不審な行動は何なの？」

「ポジショニングですネ。セーフティポジションを確保しながら、前進する方法デス」

「

「相変わらず言ってることが全くわかんないんだけど、多分日本じゃ必要ない技術なんじゃないかなあ」愛子が首をひねりながら言った。

「じゃあ横にいる大きな男の人がお父さんなの？」陽向が尋ねた。

「そうデス、パパです。皆さんに注意があります。音を立てずにパパの背後に立たないようにして下サイ。条件反射で攻撃してしまいマス」

「お前の親父はどここの国際テロリストだ。まさか「デューク西郷」とかいう名前の偽造パスポートで来日したんじやあるまいな」颯太が怒鳴った。

「バカなこと言わないで下サイ。ロシア人だからチャンとロシアのパスポートを持って決まっていマス。常識で考えて下サイ」アンナが冷ややかに言った。

「お前に言われると最高にムカつくセリフだな。1から10まで常識外れの家族のくせしやがって、何でもここだけ常識的判断を要求されなきゃならんのだ」颯太が慥然とした様子で言った。

「パパ、ソースケ」やがて2人が近づいて来るとアンナがたまらず叫んでかけ出した。

2人もアンナの姿に気づくと、父が満面の笑顔で手を広げてアンナを迎えた。

アンナはその手……の横をすり抜けると弟に飛びついてキスの嵐を浴びせた。

「うわー、アンナちゃんのお父さん完璧に無視されたわね」由美子が言った。

「シヨックの余り手を広げたまま固まってるよ」陽太がいった。

「校舎裏通りかかったらフラれる所を目撃しちゃったくらいに、痛々しくて見ていられないね」愛子が言った。

「それよりアンナちゃん、今度は抱き上げて顔を胸で抱きしめてるよ」うわ、ねっ姉ちゃん止めろ」少年は抵抗した。

「フフフ、ソータ。久しぶりだからって遠慮はいりません」

「弟くん足をバタバタしてるってことは恥ずかしいのかな」愛子のんびりと言った。

「颯兄、颯兄。アンナちゃんが羨ましいことやってるよ。早く行って「アンナの胸は夫の俺のものだ」と主張しとかないと、あの美巨乳がカリーニン家の共有財産になっちゃうよ」

「だれが夫だ……」

「またそこに行くかなあ。颯兄は自分の意志で結婚指輪を左手の薬指にはめたんだから、結婚したも同然なの。だからロシアからお父さんと弟さんが来たんじゃない。ちゃんと男らしい所見せなよね」

「ありや、アンナの詐欺に引つかかったんだ」颯太は懽然として言った。

「でもアンナちゃんは、弟さんが姉萌えのシスコンとか言ってたよね？」愛子が言った。

「うん、だけど今の見てたら完全にアンナちゃんの方が全力フルスイングのブラコンだよ」

「多分弟をシスコンにしようといういろいろやってるうちに自分がブラコンになっちゃったんじゃないかな、アンナちゃんだし」二人は笑えなかった。

「あの、愛ちゃん……」由美子が遠慮がちに言った。

「大体、アンナちゃんが人をどうこうできる訳ないって」愛子は陽向に力説していた。

「ねえ、愛ちゃん……」

「縛道と同じできつと自己暗示にかかっちゃったんだよ」

「ちよつと、愛ちゃんってば……」

「だから弟くんも……ん、由美ちゃん、どうしたんですか？」

「その弟くんなんだけど、さつきから手足が痙攣して……あら、動きが止まったわ」

「えっ？」アンナの方を見ると、アンナに強制的に抱かれて胸に顔を埋めた弟の四肢がダラリと垂れ下がっていた。

「わーっ、アンナちゃん、タツプタツプ。弟くんが窒息してる」陽向が慌てて叫んだ。

「エッ」とアンナが宗介を胸から離すと、弟は白目を剥いて口から泡を吹いていた。

「ソースケ、一体ダレがこんなひどいことを……」アンナが涙ぐみながら言った。

「……」「……」あんだだ、あんだ……」その場にいた全員が、心のなか

でツッコんだ。

「そつ、それよりアンナちゃん。お父さんに挨拶した方がいいんじゃないかなあ。アンナちゃんに無視されたシヨックで手を差し伸べたまま、ずっと固まっていて通行人に大迷惑だから」愛子が言った。

「そうデスネ」と言つて、アンナが父の腕の中に飛び込んだ。

「パパ、久しぶりデス。とても会いたかったデス」

「ハハハ、アンナ元気だったか、相変わらず甘えん坊だな」

「（おい、何事もなかったかのように会話が再開されたぞ）」Atsus hi が言った。

「（さすがアンナちゃんのパパだな）」とGuu

「（カリニン家、恐ろしい子）」Gonも続いた。

「（なんとというか本当に親子なんだな）」Youも感心したように言った。

「パパのことは一時も忘れたことはありませんデシタ」

「アンナは相変わらずパパが世界一好きなんだな」

「「「「「いやいやいや。たつた今まで親父のことは、アウト・オブ・眼中だったろうが「「「「「」」」」」」」」」

再び全員が心の中で総ツッコみを入れた。



## 第6話

「ねえ、この子どうすればいいの？」アンナの抱擁攻撃で失神して床に寝転がっている宗介を指でつつきながら陽向が言った。

「アンナちゃんは向うで感動の父娘の対面をやっているようだし、ボクたちが介抱するしかないんじゃないかな」

「じゃ、伊賀忍流の活を入れて……」陽向はそういうと宗介の上半身を引き起こし、背中に膝を当てると「うりゃ」と気合を入れて活を入れた。

「……陽向ちゃん、何かさつきより口から出てる泡の量が多くなつたみたいだよ」

「あれ？ツボを間違えたかな？とおりゃ」

「……痙攣が激しくなってるね、大丈夫なのその術」

「いやあ、おじいちゃんが一回やってるのを見たことがあるだけなんだよね、実は」

「……つまり、見よう見まね」

「何とかなると思ったんだけどね」陽向は悪びれずに頭を掻きながら言った。

「どけ、お前ら。ちよつと水を飲ませよう」陽太君がペットボトルから水を飲ませた。

「うっ……ううう……」やがて少年は息を吹き返すと、身体を起こして周囲を見渡し、身構えると懐から拳銃を抜き出して突きつけた。

「貴様ら、俺に何をした」

「いや、ボクたちは何もしてないよ。したのはどっちかという君のお姉さんで……」

「嘘をつくな。アンナ姉ちゃんが俺に危害を加えるわけがない」

「なかなか信仰心の篤いシスコンだね」陽向が呆れたように言った。

「とっ、とにかくその銃を下ろしてくれ」陽太が震えながらいった。

「動くな」少年は銃で威嚇しながら立ち上がった。

「マテバなんて使い道のない銃を……」陽向が言った。

「うるさい、俺はマテバが好きなんだ」少年が反論した。

「バックアップを受ける側としては、別の銃にして欲しいものね」陽向が言った。

「誰がバックアップだ。というか、ほとんどの人間が元ネタ知らんぞこれ」

「囁くのよ、私の中のゴーストが……」陽向がつぶやいた。

「ええい、黙って手を後ろに組め……グア」少年の後ろから、長い髪をリボンで縛った少女が近寄って脳天にハリセンの一閃を見舞った。

「あのねえ。うるさいのよ、あんたは。あたしがパパのニューヨーク赴任の見送りに来て、感動の涙のお別れをしようとしていたのに、そんな気持ちどっかにふっとんじやったわよ。どうすんの。どう責任取ってくれるのよ。大体、空港の中で拳銃なんか振り回して危ないと思わないの、あんたは」

「大丈夫だ、女。これはエアガン……グワっ」再びハリセンが炸裂した。

「誰が、女よ。あたしには千鳥かなめっていう立派な名前があるのよ。それにエアガンだったら振り回していいってもんじやないでしょう。どんだけ戦争ボケなのよ」

「いや、ちよつと落ち着け、千鳥……グワっ」三度目のハリセンが炸裂した。

「気安く千鳥なんて呼ばないでちょうだい。大体人が名乗ったら自己紹介するのが常識ってもんでしようが。何なの？あんた名前がないの、それとも人には言えない名前なの」

「何かスゴい子だね。口を挟む暇がないよ」愛子が感心したように言った。

「あのハリセンどこから出したんだろう？とりあえず弟君は何言っても殴られてるね」陽向も言った。

「わかった。俺の名前はソースケ・サガラ・カリーニンド、千鳥。頼むから落ち着いてくれ」

「あたしは落ち着いているわよ。騒がしいのはあんたの方でしょう。」

口から泡吹いたかと思つたら、痙攣するわ、失神するわ。気がつけば銃を振り回すわ」

「最初から見ていたのか？」

「あんなにウルサクしていたら、いやでも目が向くわよ。おかげであたしの乙女の感傷はどつか行っちゃったわよ」少女がハリセンを手にジリジリと少年に近づいていった。少女が近づいた距離だけ少年がジリジリと後退して行った。

「ハブとマングースの闘いみたいだね」愛子が人ごとのように行った。

「アンナちゃんといい、あの千鳥かなめちゃんといい、宗介は人の話を聞かない女の子に弱いんだね」陽向が言った。

「なるほど、一理あるね」愛子が言った。

「（おい、あの二人まるで人ごとのように話してるんだが）」陽太が言った。

「（二人とも自分たちが「人の話を聞かない女の子」の部類に入っていると、欠片も思っていないようだな）」康太が呆れたように言った。

「まあ、とにかくこれからは静かにするから勘弁してくれ、千鳥……ジリジリ」

「あんたみたいな戦争バカが、黙っていられるとは思ってないわよ……ジリジリ」

「それでは、どうしろと言うのだ……ジリジリ」

「このハリセンにかけてあんたを黙らせてみせるわ……ジリジリ」

「つまり俺を気絶させると言っているのか……ジリジリ」  
「ふっ、戦争バカにしては察しがいいじゃない。さあ、大人しくあたしのハリセンの錆になりなさい……ジリジリ」

「断固として断る……ジリジリ」

「じゃあ、実力行使しかないわね。日本の平和と治安のためにあんたを眠らせてみせるわ……ジリジリ」

「話は変わるが君とどこかであったことはないだろうか……ジリジリ」

「あんたみたいな戦争バカに知り合いはいないわよ。とは言うもの

の、あたしもどこかで会ったことがあるような気がするのよね………ジリジリ」

「それにしても君は男にいつもこうやってハリセンを振り回しているのか………ジリジリ」

「失礼ね。これでもあたしは、ご近所じやお淑やかなお嬢様で通つてるのよ………ジリジリ」

「お淑やかではなくて脅しやかでは………ドワ」

「なんですってえ……」

千鳥かなめと名乗った少女はハリセンを振り回しながら宗介を空港中追い回した。

「なかなかいい友達ができたようだね」愛子が微笑ましそうに言った。

「スペツナズの軍曹をハリセンで追い詰める少女がいるなんて、日本もなかなか捨てたもんじゃないね」陽向が感心したように言った。

## 第7話

「待ちなさい、宗介。何で逃げるのよ」かなめがハリセンを振り回しながら少年を追いかける。

「君が追ってくるからだ」少年が逃げながら答える。

「あんたが逃げるからでしょう」ハリセンが少年の後頭部をかすめた。「追うから逃げるのか、逃げるから追うのか……なかなか哲学的な命題だ」

「スカしたこと言ってるんじゃないわよ。今だったら致命傷で止めてあげるから止まりなさい、宗介」

「却下だ、千鳥。だいたい君は致命傷の意味を知っているのか？」

「馬鹿にしてんじゃないわよ。即死じゃないだけ、あたしの優しさに感謝することね」

「どっちにしろ殺すこと前提なのだな。それを聞いて安心して逃げることができる」

「だから待ってて言ってるのよ。この戦争バカ」

「どうでもいいけど二人とも凄いスタミナだね」愛子が言った。

「もう三周目だけど、全然スピードが落ちないね」陽向が感心したように言った。

「……あの二人は相性が悪いようだ」康太が言った。

「千鳥さん、最初は宗介君を大人しくさせるって言っていたわよね」由美子が言った。

「あの子が出て来てから3倍くらい騒がしくなったような気がするな」陽太が言った。

「ところでアンナ、軍……宗介はさつきから何をしているのかね」空港中を逃げまわっている少年を見ながら男が言った。

「ナニカお友達と鬼ごっこをしているみたいデス」

「ははは、宗介も少年らしいところがあるではないか」よもや命をかけた追いかけることも知らずに男が機嫌よく言った。

「シヨースケはカワイイですカラ」フルスイングのブラコン姉に悪い解釈など出てくるはずがなかった。

「いつ、いいかげんに、止まらつてのよ……ゼイゼイ」

「きつ君もいいかげんに諦めたら、どつどうだ……ゼイゼイ」

「あたしには、あつあんたを仕留めて日本の治安と平和を守るといふ、しつ使命があるのよ……ゼイゼイ」

「君は一体どこの治安部隊の、しよつ所属なんだ……ゼイゼイ」

「神代小学校4年1組の学級委員長としての責任よ……ゼイゼイ」

「日本の小学校は治安維持まで行なっているというのか……ゼイゼイ」

「さすがに7周目ともなると息が切れてきたみたいだね」愛子が言った。

「でも、どつちも止まろとしないつてのは、根性というかなんというか……」

「……意地だろうな。なぜかあの女の子は弟君にライバル意識を持っていているようだ」康太が言った。

「でも走っているけどさすがに静かになつて迷惑はなくなつたわね」由美子が言った。

「いや、由美ちゃん。走り回つていふというだけで十分迷惑だよ」陽太が冷静に言った。

「友達ができたのはいいが、さすがに走り回るのは他の乗客に迷惑だな」男が言った。

「ドウするんですか、パパ」

「軍曹、ちよつとここに來たまえ」よれよれになつた少年が目の前を走りかかつた時に男が言った。

「ゼエゼエ……なつ何でありますか、少佐殿。自分は現在、非常事態中でして」

「初めて年頃の友人ができて喜ぶ気持ちはわかるが、はしやぎすぎるのはいかん」

「年頃の友人？はしやぎすぎ？……申し訳ありません。自分には一体何のことやら」

「ではなぜ走り回つていふのかね？」

「は、日本の治安部隊にマークされ……グワ」

「でえりやああああああ」かなめのハリセンの渾身の一撃が宗介の後頭部に炸裂し、宗介が前のめりにブツ倒れた。

「ゼエゼエ……本当に手間取らせてくれちゃって、この戦争ボケ」  
「なっなんだ」

「ソースケ」あっけに取られる父と姉。

その時初めて二人の存在に気づいたかなめがハリセンを背中に隠しながら、ご近所で「お淑やかなお嬢様」と評判を得ている笑顔と物腰で言った。

「あ、初めまして。相良君のご家族の方ですか？私、千鳥かなめと申します」

「あつ、ああ初めまして。私は宗介の養父のアンドレイ・セルゲイヴィッチ・カリーニンだ」

「ワタシはソースケの最愛の姉のアンナ・マリア・カリーニンデス」初めて弟の側に現れた女の影にアンナは牽制の意味を込めて「最愛の」と付け加えて自己紹介をした。

「ところで今、宗介が何かで殴られたように不自然にブツ倒れたように見えたのだが」

「ホホホっ、おじ様だったらご冗談ばかり。走り回って疲れたんですわ、きつと」

「ウウン……」その時宗介が気がついた。

「きつ、貴様は千鳥かなめ。少佐殿助けて下さい。こいつは治安部隊の……グオツ」

かなめのキックが宗介の後頭部に決まり、宗介は再び失神した。

「あら大変。宗介君ったら疲れているのね。あつちのソファで休みましよう。じゃ、おじ様お姉さま失礼します」かなめは宗介の首根っこを捕まえてロビーを引きずって行った。

「パパ？」

「なんだね、アンナ」

「今、カナメが何かしたように見えたのデスケド」

「私もそう思うんだが、残念だが見切れなかったのだよ」

後年の活躍を彷彿させるかなめの技であった。

## 第8話

「宗介もすぐにいい友達ができたようじゃないか」父が言った。

「男女交際には20年、イヤ30年早いデス」アンナが不機嫌そうに言った。

「17歳で結婚すると宣言したお前が言っているいいセリフとも思えんのだが。しかしお前がいるうちは、宗介は彼女も作れんな」父が苦笑いして言った。

「ソースケにはワタシがいるから彼女なんていりません」ブラコンフルスロットルの姉であった。

「それはともかく、お前の彼氏に挨拶するのを忘れていたな」指をポキポキと鳴らしながら父が真剣な顔になって言った。

「そういえば紹介を忘れていまシタ。えーつと、あそこにいる人デス」とアンナが指差した先に颯太が……Atsushiの影に隠れていた。

「そうかそうか」父が5馬鹿に近寄っていった。

「おい、なんかあの親父、危ない目をしてこっちにくるぞ」

「気にするな。いけダミー颯太君一号」そういうと颯太はAtsushiを父のところへ押し出した。

「なんだ、ダミーって。ハハハ、ハイ」Atsushiが差し出した手を握ると満身の力で握り潰した。

「ぎゃあ、てっ手が……やめる親父手が潰れ……」Atsushiが泡を吹いて倒れた。

「今の何？」愛子が言った。

「篤兄の手をアンナちゃんにバレないように恨みを込めて握り潰したんだね。何かやるとは思っていたけど」

「パパ、その人じゃないデス。その左側の人」と指差した先にはGuuの後ろに回り込んだ颯太がいた。

「おい、こっちくるぞ」

「行け、ダミー颯太君二号」颯太が前に押し出した。

「ははは、ギブアップ。ギブアップ」Guuが降参の意を示すように両



手をあげた。そこに両手を入れて持ち上げながら思い切り締め上げた。

「ぐわあく、せつ背骨があ。背骨から音がする」泡を吹いて気絶したG u uを床に投げ捨てる父。

「陽向ちゃん、今のは？」

「ベアハッグだね、鯖折りともいうけど。怪力レスラーがよく使う技で、古くはブルーノ・サンマルチノとかが有名だよ。というかアンナちゃん全然気がついてないのがスゴいよね」

「パパ、違いますっテバ、その左側の人デス」

「こつちくるぞ、おい」G o nがビビりながら言った。

「攻撃は最大の防御だ、ダミー颯太君三号」

「よし、ウオ〜っ」と叫びながらG o nが父へと突進していった。そこをスレ違いざまにG o nの首に腕をかけて後頭部から落とした。

「えーっと、もうどう弁解しても挨拶の範疇を超えてるよね」

「あれはランニングネットクブリーカードロップと言って、今はなきジヤイアント馬場が開発した技だよ。相手が走ってくる場所に走り込んでカウンターで腕を首に引っかけるようにして倒し、後頭部をマットに叩きつけるという技だね。それにしても技が全部昭和のプロレス技だね」

「パパ、ソータは……」アンナが必死に誘導しているが、アドレナリン全開になった父の耳には届いておらず、目の前で動くものは全て敵と認識したようだ。

走り込んできたY o u (ダミー颯太君四号) に飛びつくど首を足で挟んでバック転し、反動でY o uの身体を一回転させ後頭部を床に打ち付けた。

「もう、何て言ったらいいのやら」

「フランケンシュタイナーだよ、愛ちゃん。フランケンシュタイナー」陽向が興奮して言った。

「別の世界線の記憶を保持する能力だったっけ？」愛子が尋ねた。

「それはリーディング・シュタイナー。今の技はフランケンシュタイナーと言って、正対した相手に向かって跳び上がり、相手頭部を自ら

の両足で挟み込んでそのままバック宙の要領で回転しつつ相手の頭部をマットに叩きつけるという技だよ。ウラカン・ラナ・インベルティダと似ているけど、ウラカン・ラナ・インベルティダは相手の正面からジャンプして両肩に乗り、両足で頭を挟みこむ。そのまま自分の頭を振り子の錘のように使って後方に倒れこみ、相手の股の間を潜りこむ。その勢いを使って相手を前方に回転させつつ、両足を取り回転エビ固めの要領でフォールを狙う技なの」

「解説ありがたいんだけど、たぶんボクは一生使うことのないトリビアだと思っただよね」

「ダミー君は全員やられたか。ありがとう君たちのおかげでとんでも親父を止めることができたよ。君たちの健闘は忘れないよ」と颯太がダミーズの屍に黙祷を捧げている正面に父が立った。

「何だ、この親父まだやり足りないのか、ウグツ」父が颯太のボディにアッパを打ち込んだ。たまらず片膝付いたところに身体を乗り上げ、腿で颯太の顎を強打した。颯太は床に倒れた。

「えーつと、陽向ちゃん。今にも何か名前がついているの」

「何言っているのさ、愛ちゃん。今のは閃光魔術とも閃光妖術とも呼ばれるシャイニング・ウイザードだよ。相手の片足に乗り上げ、すぐさま膝で相手の頭部や顔面を蹴り上げる技だよ。初期は膝で攻撃していたんだけど、あまりにも危険だということで、今みたいに腿で攻撃することが多いね。アンナちゃんのパパ、よく研究しているよ」

「何のための研究なんだか」愛子が呆れたように言った。

「最初に颯太が言っていたダミーズってこういう意味だったのか。でも後半に行くに従って大技になってダメージが大きくなってきたから、普通にやられた方が良かったんじゃないのかな？」

「パパ、挨拶はもつと大人しくやってくだサイ」アンナが叫んだ。

「いや、アンナちゃん。そのセリフは最初で言わないと……あらかた全員やられちゃったあとで言われても」

「それにしても、あれを挨拶だと信じ込んでいるってのは、さすがアンナちゃんだね」

周囲を見渡すと床には五馬鹿の屍累々であった。

## 第9話

「それはそうとどうすんのさ、これ」愛子が床でのびている五馬鹿を指差して言った。

「いろいろと面倒そうだから、知らないふりしておいた方がいいと思うな」陽向が無責任に言った。

「そもいかなだろう」陽太が言った。

「……だが、五人も担いでは帰れん」康太が言った。

「ピリピリピリ」笛の音がして、警備員がこつちへやってくるのが見えた。パパと五馬鹿の乱闘を見て誰かが通報したのだろう。

「よし、この連中は見知らぬ人たちだ」陽太の決断はすばやかだった。

「つまり、見捨てるってことなのね」由美子が尋ねた。

「違うよ、由美ちゃん。このままでは僕たちまで厄介ごとに巻き込まれてしまう。それは兄さんたちの本意でもないはずだ。僕たちだけでも助かってくれと倒れた兄さんたちも思っているはずだよ」陽太が由美子を説得するように言った。

「なんか、すごい美談にしていますけど、引つ張れるものだったら親の足でも引つ張るようなあの連中がそんな愁傷なこと考えますかねえ？」愛子が言った。

アンナとパパを引つ張って、やや離れたところに全員で移動した。五馬鹿は警備員に担がれてどこかへ運ばれて行った。

「ふー、危機一髪だった」陽太が言った。

「危機一髪はいいんですけど、五馬鹿はどうするんですか？」

「おなかが減ったら帰ってくるだろう」

「遊びに出かけた小学生じゃないんですから……」こういう時に、陽太もやはり土屋家の人間だと感じずにはいられないのであった。

「そういえばアンナちゃん、お父さんをまだ紹介してもらってないよね」陽太が言った。

「忘れてました。こちらがワタシの父のアンドレイ・セルゲイヴィッチ・カリーニンデス。」

パパ、こちらがお世話になっている土屋家のヨータにコータにヒナ

タ。そしてコータの彼女のアイコにソータの彼女のユミコです」

「おお、アンナがいつもお世話になっています。アンドレイ・カリーンです。スペツナズというロシアの専門学校で教官をしています」

「(・・・あの設定は、この親父から来たんだな)」

「(この期に及んでも言い張るとは、厚い面の皮だ)」

「息子の宗助がいるんですが、友達ができたようで遊びまわっています。実に困った奴だ」

「(さつき、かなめちゃんのハリセンの一撃で気絶して、引きづられていったよねえ)」

「(ロシア的には、遊びの範疇なんじゃないの？なんか細かいことは気にしなさいな国だし)」

その時、宗助が頭を撫でながら戻ってきた。

「どうした軍ぞ・・・宗介」

「ひどい目にありました、少佐ど・・・お父さん」

「あの、日本人の女の子と遊んでいたのではなかったのか」

「自分が遊ぶわけがありません。あの女に捕らえられ、ハリセン連打やら往復ビンタやらありとあらゆる拷問を受けておりました。どうも内調か陸幕二課などの日本の諜報関係の人間ではないかと思われ  
ます」

「何か喋ったのかね」

「まさか。隙を見て逃げ出してまいりました」

「(どうもこの親子というか、カリーン一家ってみんな似たもの同士だね)」

「(10歳の女の子を使う諜報機関があると思ってるのかな・・・)」

「パパ、ソースケにも紹介を・・・」

「おお、失礼した。みなさん、この子がアンナの弟のソースケ・サガラ・カリーンです。見た目の通り、日本人ですが事情があつて私が引き取りました」

「姉萌のシスコンで困っています」アンナが嬉しそうに言った。

「ねっ、姉ちゃん。俺はシスコンじゃないんだから、そんなこと人に言うなよ」

「イエエ、どんなライトノベル読んでも、弟は姉萌と決まっていマス」  
「（……一体、どんな本読んでいるんだろうね、アンナちゃん）」  
「（どうかアンナちゃんが重度のブラコンってのは十分見せても  
らったけど、宗介がシスコンってところはまだ見てないんだけど）」

「それにしても宗介はかわいいなあ、あたしあんな弟が欲しかったん  
だよね」陽向が唐突に言い出した。

「……かわいい？口をへの字にして、不機嫌そうな顔してるけど」  
愛子が不思議そうに言った。

「そういうちよつと突つ張ったところがかわいいんじゃない、愛ちや  
ん。よし、あたしの弟分にしちゃおう」

「陽向ちゃんの弟分ってケンがいるじゃない。どうするの」

「その下に入れればいいよ」

「犬より立場が下なんだね」

「ねえ、宗介。あんた、あたしの弟分にしてあげるよ」陽向が宗介に向  
かっていった。

「弟分？何をバカなことを言っている、女。なぜ、俺が民間人の弟分な  
ぞにならんといかんのだ」

「まあまあ、遠慮しなくていいんだよ」陽向が手を伸ばした。

「触るな」宗介が手を払おうとした瞬間、陽向が目にも止まらぬ動きで  
宗介の後ろに回り、あつという間にスリーパーを決めた。

「そういうつれない態度を取るとどんどん締まるよ」

「……陽向、喉に入っている喉に」陽太が叫ぶ。

「くつ、誰がお前の弟分なぞに……ググツ」

「へえ、まだそういう元気があるんだ。じゃもうちよつとググつと」

「ぐおおく……ちよ……ちよ……ちよつと待て」

「なんか、また泡吹いているけど癩癩かなんかの持病があるんじゃない  
いか、宗介君は」

「いや、単に喉が絞まっているだけかと」愛子が答えた。

「ん？返事がないな。じゃもう少しググつとな」

「……わか……った。タツプタツプタツプ」

「穏やかな話し合いでわかってくれて、あたしも嬉しいよ」

「……チョークスリーパーで脅迫しておいて、穏やかもへつたくれもあるか」

床に四つんばいになってゼエゼエしている宗介に近寄って陽向が言った。

「これであたしがお姉ちゃんだからね。陽向姉ちゃんって呼ぶんだよ」

「……俺に取つての姉ちゃんはアンナ姉ちゃんだけだ」

「じゃあ、なんて呼ぶのさ。陽向なんて呼び捨てた日にやあシャイニングウイザードの連発食らわすよ」

「ヒナ姉でいいだろう」

「……ヒナ姉か。なんかちよつといいね。あたしのかわいさもでているし。よし、あたしのごことはヒナ姉だよ」

この騒ぎですでに皆、連行された五馬鹿のごことは忘れていた。

## 第10話

「それにしても大丈夫。宗介君」愛子が言った。

「うるさい。気安く俺に触るんじゃない、オバさん」

「・・・・・・・・オバさん・・・・・・・・宗介君、みんな喉渴いただろうから、向こうの柱の後ろの自動販売機で飲み物買いに行こう」愛子は嫌がる宗介を引きずって行った。二人が柱の陰に隠れると同時に「ボカッ」と物凄い音が響いた。

「ごめんね。自動販売機があると思ったのに勘違いしちゃった」愛子が柱の反対側から満足そうな表情で出てきた。宗介が涙目で頭を撫でながらついてきた。

「ナニか、ありませんシタカ。ソースケ」アンナが心配そうに言った。

「うん？別に何も無いよね、宗介君」愛子が目を細めて宗介を見つめた。

「はい、何もありません、お姉さん」相変わらず頭を撫でながら宗介が言った。

「おい、愛ちゃん。実力行使に出たみたいだぞ。凄い音がしたぞ」

「・・・・・・・・よほど「オバさん」がムカついたのだな」

「とりあえず、いつまでもここに居ても話がまったく進展しないので電車に乗りましょう」由美子が提案した。9話も使いながら未だこの親子は日本の土を踏んでいないのだ。当然の提案と言えよう。

一行は電車で都内へと向かった。

電車の中で携帯でやかましく話している若い男がいた。

「ぎゃはは、だから俺言っちゃったんだ・・・・・・・・」

「むっ、マナーをわきまえぬ青年だ。ここは一つ私が注意を」パパが青年のところに向かおうとした。

「いつ、いや。止めて下さい。騒ぎが余計に大きくなります」

「そういうものか。それでは軍そ・・・・・・・・宗介。君が言っちゃって穩便に鎮圧してきたまえ」

「鎮圧って段階で穩便じゃありませんから。わかりました僕が行ってきます」陽太が言った。

「……ちよつと待て、兄貴。お前が行っても似たり寄りだ」「やめて陽兄。電車じゃ逃げ場がないよ」

康太と陽向の二人が必死に止める。

「どうしたの二人とも。陽太君だったら別に問題ないじゃない」愛子が不思議そうに言った。

「……お前は知らないからそういうことを言えるのだ。普段は優等生面しているが、うちの兄弟で一番血の気が多いのが陽太なのだ」「おまけに篤兄たちと小さい頃から遊んで鍛えられているから、ケンカもそれなりに強いし……」陽向が言った。

「そつ、そうだったの。意外な一面だね」愛子が言った。

「あたしが悪さしても、颯兄は逃げるし、康兄は我関せずだし。何度返り討ちにあつても注意してくれるのは陽兄だけだったんだよ」陽向が言った。

「いや、悪さして怒られるのを返り討ちにしちゃダメでしょう」愛子が呆れたように言った。

「……ということ、ここは一番お前が言ってくれ」康太が言った。

「なっなんでボクが」愛子が絶句した。

「いや、あの青年に一番被害を与えない方法はそれしかないのだ。陽向が行っても血祭りだし、俺が行って殴られでもしたら、陽太、陽向、宗介、パパの総力戦になって最悪の結果になる。女性だったらあの男も手を出ささんだろう」

「それはそうかも知れないけど……」愛子がブツブツいいながら、電話をしている青年のもとに向かった。

「だからよ〜」

「あの……」

「俺も黙っちゃいけないわけよ」

「あの、お兄さん」

「そりゃ……ん、なんだ女」

「電車で携帯はマナー違反なので、すぐに止めた方が身のためですよ」「ああ、うるせえな。お前にや関係ないだろうが」



「いえ、ボクはあなたの身の安全のために、一応親切で注意をしてあげているんで……」

「うるせえよ。隣の車両にでも行きな」そういうと青年は愛子に背を向けて会話を再開した。

「一応、ボク。警告はしましたからね」愛子はそういうと皆のもとに戻ってきた。

「ダメだった。説得に失敗しちゃった」

「それでは、やはり私が……」

「いえ、少さ……お父さん。ここは自分にお任せ下さい」

「日本の問題ですから、僕が片付けます」

「あたしがチャチャつと黙らせてくるよ」

「ワタシの宇宙CCCで……」恐ろしいことに8人中5人も武闘派がいた。

とりあえず一番小さいから被害が少ないだろうということで宗介が派遣された。

「で陽子がさ」

「おい、その青年」

「また、誘ってくれて……うん、何だガキ」

「電車内の電話はマナー違反だ。とつとと切れ」

「なにを」というと青年が宗介の胸ぐらを掴み上げた。

「できるだけ話し合いで済ませたかったのだが、そういうわけにもいかんようだな」宗介は落ち着いて言った。

「あんまり生意気言ってるの殴……」宗介が胸のホルスターからマテバを抜き取り、青年の花先に突きつけた。

「これが何だか理解できるな」

「へっ、そんなエアガンなんかで驚くかよ」

「エアガンでも改造してブーストアップ、鉛弾仕様だ。この距離からだと当たればただではすまんぞ」宗介は銃を天井に向けて引き金を引いた。

「ズギューン」銃声がして天井に穴が開いた。

「すまん、どうも連絡員との間にミスがあったようだ。改造エアガン

を依頼したはずだったのだが、実銃を持ってきてしまったらしい」

「ひえ〜」男が四つん這いになりながら隣の車両へと逃げ出した。

「とりあえず状況終了いたしました」

「ご苦労だった、軍曹……宗介。エージェントにも困ったもんだな。エアガンと実銃を間違えるとは」

「困ったもんだで済まされる問題なんですか」愛子が言った。

「まあ、俺たちにとっては実銃の方が取り扱いには慣れている。問題ない」

「いやいやいや、そういうことじゃなくて」

「マア、でもマナー違反も追っ払いましタシ。問題ないデスヨ」

「そうだな、ハハハハハ」アンナ、パパ、宗介の三人が笑った。

「うちの先祖は、ああいう連中相手にしてよく戦争に勝ったな」

「どうかロシア軍は、負けたということに気がついてなかったんじゃないか?」

日口の対応が明白に分かれた電車内であった。

## 第11話

電車を降りて家へと向かう。途中で騒動が起きないことを祈っていたが、存外大人しかった。アンナが途中途中で店などの説明をしているのを大人しく聞いていた。

「ただいま」陽太がドアを開けてアンナ一家を家の中に案内した。

「ほほう、これが君の部屋か」

「なかなか、大きい。日本は家が狭いと聞いていたが、そうでもないようだな」

「いえ、これ丸ごとで家族の家です」

「……………なかなかいい家だ」

「必要なものにすぐ手が届く」

その時に母の裕子が台所から出てきた。

「あらもう着いた……………ハッ」

いきなり出てきた母に驚いたカリニン父子が反射的に胸のホルスターから銃を引き抜いて向けた。だが、その時には既に母は横っ飛びに飛んで射線を外し、手にしていた菜箸を二人に向けて投げ放っていた。

「……………うう」菜箸が手に刺さり二人は銃を取り落とした。

「わわ、お母さん。何するのさ」

「だっていきなり銃向けられたら普通はああするでしょ」

「……………普通の人間は立ち尽くすか叫ぶと思うんだが」

「アンナちゃんのお父さんと弟さんの手に箸が刺さっているよ」

「まあ、大変絆創膏を……………」

「絆創膏じゃどうにもならんだろう」

「後、うちにあるのはイモリとナメクジを煎じた軟膏くらいだけど、外人さんにも効くのかしら」

「日本人でも遠慮したい薬だね」愛子がボソつと言った。

「とりあえず絆創膏でいいから貼りましょう」話が進まないで由美子が強引に話を進めた。

「本当にすいませんね。いきなりマテバとベレッタを突きつけられた

ら驚いちやって、気がついたら体が勝手に動いちやいまして」

「……あの瞬間に銃の種類まで」

「だからと言っていきなり菜箸投げるなよ」陽太が怒って言った。

「だって、追い忍かと思っただもの」

「あのねえ。母さんたちが伊賀と甲賀の里を駆け落ちしてきた話は何百回も聞かされてきたけど、今更追い忍なんてかかるわけないだろ」  
「そんなことないわよ。伊賀の追い忍係の鈴木さんはたまにいらっしやるじゃない」

「鈴木さんは公務員で住民課なの。東京出張のついでにうちに寄ってくるだけだろう」

「甲賀から来るかもしれないわよね」

「実家とお中元お歳暮のやり取りして盆に里帰りして、法事にも律儀に出ているのになんで今更追い忍飛ばすんだよ。俺たちが小学生の頃は伊賀と甲賀で交互に夏休み過ぐしてたんだぞ」

「それもそうねえ」母はのんびりと言った。

「裕ちゃん凄いなあ。人間技じゃないよ」

「そりやお母さんは甲賀で100年に1人の忍者と呼ばれていて将来を囑望ごぼうされたから」

「え、そうなの？」

「そりや頭領候補の最筆頭だったんだから」

「女性なの？」

「伊賀は嫡子が継ぐけど、甲賀は実力主義だから女でも頭領になれるの」

「なんで駆け落ちを……」

「駆け落ちというか、頭領になりたくないからお父さんを引きずって東京に逃げてきたんだけどね」

「無理やりロマンチックな話にまとめちゃったわけだね」

「あたしには他にあった道があるんだとか言ってたらしいよ」

「コンビニ首になったニートみたいなセリフだね」

「そういえば裕ちゃんと圭君ってどうやって知り合ったの？伊賀と甲賀じゃ水と油だと思っただけど」

「愛ちゃん、古いなあ。今どきそんなこと言ったら忍者の里も生き残れないんだよ。お父さんたちは「忍術協会の青年部」で一緒に活動してたんだって」

「何をする団体なのか、想像もつかないんだけど……」

「まあ、サークルみたいなもんじゃない？」

「忍者がサークルって……」

「出会いが少ないからねえ。あたしもこっち出てきてよかったよ」

「何かいい出会いがあったの？」愛子が目を輝かせて尋ねた。

「いや、可能性は広がったかなあって」

「いや、それにしても奥さんの技術はすばらしい」父が手当を受けながら言った。

「別に考えてやってことじゃなく、体が勝手に動いたことですから」

「戦場では、それこそが大事なのです。ぜひ我が部た……校で教官をやって頂きたいものです」

「それは褒めすぎですわ。お父様こそ銃を抜く手の早かったこと。視線を外するのがあと0.1秒遅れていたら打ち抜かれていましたわね」

「いやいや、お恥ずかしい」

「あれはなに？」愛子が尋ねた。

「よくわからないけど達人同士の腹の探り合いじゃないのかな？」陽向が答えた。

## 第12話

「まあ、玄関先ではなんですから中へどうぞ」裕ちゃんが言った。

「失礼します」宗介がそのまま上がりとした。

「わー待って待って」愛子が叫んだ。

「む、何だ女、うるさい……ボカ」愛子が宗介の頭をポカリと殴った。

「さつき、お姉さんって呼べって教えてあげたでしょう」愛子が憤然として言った。

「やっぱりさつき殴ってたんだな」陽太が言った。

「……もう、隠すのも面倒くさくなったんだな」康太が言った。

「ははは、宗介。日本の家では靴を履いたまま上がってはいけないのだ」パパが言った。

「そうなのでありますか？」

「うむ、だからちゃんと泥を落としてから上がるように」パパは自信満々と言った。

「それじゃ同じです。土足禁止ってのは泥靴禁止って意味じゃありません」愛子が言った。

「あの、靴を脱いでそのスリッパをどうぞ」由美子が二人に諭すように言った。

その時リビングの方から大きな犬がのっそりと出てきた。

「あ、ケン。この子が今日から新しい兄弟だからね」陽向が宗介の肩を捕まえて犬の方に向けた。犬はなぜかシヨックを受けた顔をして、リビングの方にスゴスゴと引き返していった。

「どうしたんだろう、ケン」陽向がげんそうな顔で言った。

「もしかして新しい兄弟分ができたから自分が見捨てられると思ったんじゃないかな」愛子が言った。

「ああ、あの子意外と繊細だからね。」陽向がリビングに向かうと犬は隅の方で丸くなって拗ねていた。

「ねえ、ケン。兄弟分っていつてもケンがいなくなるんじゃないんだよ。新しい弟ができたんだから、お兄ちゃんがそんな態度だとかか

しいよ。弟をちゃんと教えてあげなきや」犬を撫でながら優しく言い聞かせていた。お兄ちゃんのところまで耳がピクつとなり、スツクリと立ち上がると再びリビングの入り口に向かい、宗介の前に立つと顔をクイっとリビングに向けて「ついて来い」と言わんばかりに先に立って歩きだした。

「やれやれ、世話が焼ける」陽向がやれやれという風に呟いた。

「あの、陽向ちゃん。ケルベロスと完全に会話できてるみたいなんだけど」

「うん、ケンの言いたいことは大体わかるよ」

「いや、何でケルベロスが陽向ちゃんの言うことを理解できているのかが不思議で。私がいうのもなんだけど、あの子あんまり頭がいい子じゃないんだけど」

「陽向が犬に近いんですよ」陽太が言った。

「……あいつは大概の動物と会話ができる」康太も同意した。

「そつ、そうなの。忍術って凄いわね」どうやら由美子は理解できないことは、全部忍術のせいにすることに決めたようだ。

「ちよつと待て、女……あ、いやヒナ姉。俺は犬より下なのか？」宗介が叫んだ。

「当たり前じゃん。一番の新入りで一番年下なんだから」陽向が当然のように言った。

「いくら何でも誇り高いスペツナズが犬より下の扱いで我慢できるか」

「あんたねえ、甘えてるんじゃないわよ。我が土屋家には鉄の階級があるんだから」

「家庭に階級があるのか」

「序列と言つてもいいわ」

「ちなみにどんななののだ？」

「まず、一番がお母さん。次があたしでその次がお父さん。そして愛ちゃんに由美ちゃんにアンナちゃん。この辺は彼女になった順番だからほとんど差はないね」

「そんな豆知識いらん」

「そして陽兄、康兄、ケンと続いて最後が颯兄。あんたは一番最後ね」  
「家族じゃない人間が半分近く混じっている上に犬まで混じっている。おまけに実の兄弟の序列が低くて長男が最低ってのはどういうことだ」

「大丈夫だよ。宗介は今は序列最下位だけど夕食の皿洗いのお手伝いをすれば颯兄の序列は抜けるから」

「その程度で抜けるって、お前の兄貴はどれだけ軽く見られているんだ？」

「うーん、颯兄の場合、今までの負債が大きいかからねえ。あ、でもアンナちゃんと結婚したらケンの上になることにはなっているんだ」

「うちの姉さんをそんなことに使うんじゃない」

「しようがないじゃない家は忍者の家系なんだから、序列は大事なんだよ」

「あれ本当なの」愛子が康太に尋ねた。

「……お袋はそう言っているが、ほとんどお袋の支配体制のために作った大嘘だ」康太が答えた。

「なんかどんだんカリーニン家に間違った日本像を植えつけているよ  
うな気がするんだけど」愛子が心配そうに呟いた。



## 第13話

「まあ、わたしとしたことが。こんな所で立ち話も何ですから中へどうぞ」

裕ちゃんが二人をリビングへ案内した。

「なかなかいいお宅ですな」アンナパパが言った。

「日本の家はこうなっているのか。窓に鉄格子がハマってないが防犯はどうしているのだ」宗介君がよくわからない感想を言った。

そこへ裕ちゃんがお茶を運んできた。

「粗茶ですがどうぞ」

「ほほう、日本の紅茶は緑色をしているのですか」パパが感心したように言った。

「違いマスネ、パパ。ユウコは「ソチャ」と言いまシタ。粗末なお茶という意味デス。つまり、上等なお茶を飲ませるほどの客ではないということデスネ」アンナちゃんがドヤ顔で悪意があるのではないかと疑っちゃうような解説をしてくれた。

「いや、アンナちゃん。字は確かに粗末なお茶って書くけど、「粗茶」ってそういう意味じゃないから。お客様に出すお茶を謙遜して言っているんだからね」ボクは一応訂正しておいたけど、通じただろうか？ まあ、本当に粗末なお茶を出されたとしても、気にしなさそうな二人ではあるんだけど。

「うむ、美味しいお茶です。ところで颯太君の姿が見えないようですね。ぜひ、ご挨拶をしたいのですが」アンナパパがトンでもないことを言い出した。

「何か自分が颯太君とついでに四馬鹿を倒したことに気がついてないみたいだね、アンナパパ」ボクが言った。

「(じゃ、あの5人は何のためにやられたのさ。倒され損だね)」陽向ちゃんが答えた。

「(……目の前に敵がいたから体が動いただけ。軍人の本能だろう)」

「(近くにいただけで軍人の本能を刺激するって、あの5人はどれだけ

「邪悪なオーラ出してんのさ」

「(沖繩旅行したら米軍に追われそうだね)」

「そう言えば颯太はどうしたの、あなた達」

「えーっと、兄貴はもう少し飛行機見ていくって」陽太が答えた。

「アンナちゃんのご家族が見えてるっていうのに本当にしようがない子ねえ」裕ちゃんが憤然として言った。

「しっ、信じるんですか」由美ちゃんがビツクリしたようにツブやいた。

「何のことかしら？」

「いっ、いえ何でもありません」

「申し訳ありませんカーリーニンさん。愚息はまだ空港にいるみたいですよ」

「いや、別に防具のお話は・・・」

「違いマスネ、パパ。愚息とは馬鹿な息子という意味デス」

「いや、だからアンナちゃん違うって。確かにそうかも知れないんだけど、そうじゃないんだよ」というかこの親子は、何でワザと選んだかのように日本語を間違った意味で覚えているんだろうか。

「ところでアンナはご迷惑をおかけしてありませんかな」アンナパパが言った。

「とんでもない。本当にしつかりした気立てのいいお嬢さんですわ。親御さんの躰がよろしかったんでしょうね」

「いやいや、男手一つで育てたものですから教育も行き届きませんで「まあ、ご謙遜を。こないない娘さんをお嫁さんにいただけるとはなんて本当に幸せですわ」

「・・・ピキッ・・・ははは、アンナはまだ17歳の子供ですからね。夢見がちなのでしょう。まさか真に受ける方がいらっしやるなんて」

「・・・ピキッ・・・あらあら、ご冗談を。今時17歳と言えば立派な大人ですわ。親として子供の意志をちゃんと受け止められなんてことありませんわよねえ」

「・・・ピキッ・・・いえいえ、まだマンガやアニメになぞに

夢中になっっているような子供ですよ。現実と夢との区別もついておらんのでしょ

「……ピキツ……日本のマンガやアニメには、そこらの小説よりも深いテーマのものもございましてよ。それが認められない方というのは、随分頭が固くなつてらっしゃるんじゃないかと」

「ねえ、気のせいかな。言っていることだけ聞いていると普通の会話だけど、さつきから雷の幻影が見える気がするんだけど」ボクが言った。

「うーむ、達人同士の死合だね。何気ない言葉に見えて相手のヒットポイントを確実に突いているよ」

「とつ、とりあえずアンナちゃんに止めてもらおうよ。このままじゃスペツナズと忍者軍団の抗争になっちゃうよ」そう言って、しつかりした気立てのいい娘の方を見ると、会話の内容が理解できてくるのかできていないのか、アンナパパと裕ちゃんの会話をニコニコしながら聞いていた。

「話がハズんでいるところですが、ワタシこれから料理してきます」アンナが立ち上がった。

「料理？」アンナパパと宗介君が叫んだ。

「ハイ。久しぶりにワタシの手料理の特製ボルシチをいっぱい食べてください」

「いかん、随分長いことお邪魔してしまった。では、この辺で失礼しよう、軍曹……宗介」

「了解であります。少……お父さん」

「何言っているマスカ。今日は泊まっていつてくだサイ」

「休暇中でも、いや休暇中だからこそ訓練をかかしてはならんのだ。奥さん、申し訳ありませんが、庭で野宿させていただいてもよろしいですか」アンナパパが鬼気迫る勢いで裕ちゃんに許可を求めた。

「はあ、それは構いませんが、せめてお食事でも……」裕ちゃんが気圧されるように答えた。

「断食も訓練のうちです。行くぞ、宗介」

「了解であります」二人が立ち上がり玄関に向かったところをアンナちゃんが宗介君を後ろから羽交い絞めにした。

「訓練はパパだけでやってください。ソースケはまだ10歳です。そんな訓練早すぎます」

「む、そうか。じゃ軍曹頑張れ」アンナパパは玄関から出て行った。

「少佐殿。部下を見捨てるんですか。少佐殿・・・戻ってこい、親父」

「ソースケはお姉ちゃんの愛のボルシチを一杯食べて、一緒にお風呂に入って、一緒に寝まシヨウネ」何やら宗介くんの目が死んだ鯖のような目になっていたのは気のせいだろうか？

食事が終わってボクはカーテンの隙間から外を眺めていた。ちなみに他のメンバーは床に倒れていた。食べてすぐ寝るのはいけないはずなんだけど。

「ねえ、アンナちゃん」

「なんデスカ」アンナちゃんは久しぶりにボルシチが作れて嬉しそうだ。

「なんかお父さん、一人で焚き火でマシユマロ焼いて食べてて、そうとう哀愁が漂ってるんだけど」

「ワタシのボルシチを食べてくれなかったパパなんてどうでもいいデス」アンナちゃんはプンスカしながら言った。

弟には蜂蜜よりも甘いアンナだったが、父には唐辛子よりも辛いのであった。

## 第14話

「アンナちゃん、お風呂入ったら？」裕ちゃんが声をかけた。

「ありがとうございます。ソースケお風呂入りマスヨ」アンナちゃんが宗介君に言った。

「いや、別にいちいち俺に断らずに勝手に入ってくればいいじゃないか？」宗介君が不思議そうに答えた。

「ハイ。だからお風呂場に行きまショウ」

「なんで姉ちゃんが風呂に入るのに、俺が風呂場に行かんとならんのだ」宗介君が不思議そうに言った。最もな疑問である。

「もちろん一緒に入るからに決まってマス」アンナちゃんが、この弟は何を言い出すのかというような顔をして言った。

「ちよつ、ちよつとアンナちゃん。一緒に入る気なの？」ボクが尋ねた。

「ハイ、ソースケは日本のお風呂に慣れてませんネ。だから一緒に入って教えてあげマス」さすがアンナちゃんだ。自らの決断に微塵の疑問も持っていない。

「ばつ、馬鹿を言うな、姉ちゃん。昔から男女七歳にして席を同じゅうせずと言つてだな・・・」どうでもいいけど、どうしてカリーニンの家の連中つて、こういう難しい言い回しや格言は知っているのに、普通の日本語が限りなく怪しいんだろう？

「お風呂を同じゅうせずとは言つてませんネ」アンナちゃんは動じない。

「席すら一緒じゃいけないって言っているのに、風呂が同じで良い訳ないだろうが」

「男女じゃありません、姉弟です。『自らを省みて直くんば、千万人といえども我ゆかん』という言葉もありマス。何も恐れることはありマセン」いや、たかがお風呂に入るのに、そこまで壮大な決意をしなくてもいいと思うんだよね。

「恐れているんじゃないくて、恥ずかしがつてるんだ」宗介君が叫ぶ。

「それならなおさらデス。いずくんぞ姉弟の間で何の隠し事がありま

しようやデス。ちなみにこれは文法的に二重否定と言って……」  
「そんな知識はいらん」

「あのね、宗介」復活した陽向ちゃんが宗介君に声をかけた。

「ひな姉ちようどいい。アンナ姉ちゃんを止めてくれ」宗介君が陽向ちゃんにすぐるように言った。

「いや、悪いけどアンナちゃんが決意したんだったら、誰も止めきれないと思うよ。時間の無駄だから、さっさとお風呂に入ってきてきな」陽向ちゃんが冷たく突き放した。

「寝言はもういいデス。後につかえてマスカラ、さっさとお風呂に入りマスヨ」宗介君の思春期男子の淡い恥じらいが寝言の一言で片付けられてしまったのは、同情を禁じ得ない。

「いや、俺はシャワーでいいから、姉ちゃん止めて……」アンナちゃんが宗介君の襟首を捕まえてお風呂へと引きずって言った。

「大丈夫かな、あれ。宗介君トラウマになるんじゃない……」ボクは陽向ちゃんに尋ねてみた。

「いいんじゃない？アンナちゃんの美乳Gカップを拝めるだけでも目福だよ。シスコンだし」陽向ちゃんが人事のように答えた。弟分のはずじゃなかったのだろうか？

「陽向ちゃん、言ってることが単なるエロ親父だよ。でも今までのところ宗介君にシスコンの気配が見えないんだよね」

「そうだね。どちらかという超絶ブラコンの姉に振り回されている弟って感じで……」

「アンナちゃん、なんで宗介君がシスコンだと思っただろう」

「うーん、相対速度の問題じゃないかな」陽向ちゃんが不可解なことを言い出した。

「何で物理学が？」

「いや、例えば止まっている電車と時速300kmで走っている電車がすれ違ったとすると、時速300kmの電車に乗っている乗客からは止まっている電車の方が時速300kmで走っているように見えるというやつで……」

「つまり、超絶ブラコンを自覚していないアンナちゃんから見れば、宗

介君の方が超絶シスコンに見えるってことかな」

「いや、そういう可能性もあるってこと。なんせアンナちゃんだし」

「アンナちゃん、だからねえ……」かなりムチャクチャな理屈だけど、ボクは何となく納得した。

「愛ちゃんも今日は泊まって行きなさいな。ご自宅には私から電話しておくから」裕ちゃんが言い出した。

「ほへ？ボクも泊まるんですか？」

「ええ、だって明日アンナちゃん家族の観光に付き合うのに、明日また来るのは面倒でしょう」なぜか裕ちゃんは、アンナファミリーの日本観光にボクが付き合うと思いきこんでいるらしい。

「あのみ、観光にボクも付き合うんですか？」ボクは確認してみた。

「ええ、陽向と二人でガイドお願いね」

「久しぶりの家族団らんだから、3人で行かせてあげた方がいいんじゃないですか？」

「そうねえ、第二次日露戦争開戦を覚悟するならそれでもいいんだけど。あの3人じゃどんな国際問題を起こすやら」裕ちゃんはあくまでも真面目だった。

「えーっと」ボクも頭の中でいろいろシミュレーションしてみた結果……

「ボク、どこに寝ればいいんですかね」結論が出た。

「陽向の部屋で寝ればいいわよ。まあ、別に康太のベッドで一緒に寝ても私は構わないけど」やっぱり本気の顔だった。

「じゃ、ソータ寝ましょうか」アンナが言った。

「俺はどこに寝ればいいのだ」宗介が言った。

「もちろんお姉ちゃんと一緒にデス」アンナが当然という顔で言った。

「一緒になってベッドは一つしかないじゃないか」宗介が抗議した。

「ちゃんと2人寝れマス」

「風呂と一緒に入った上に、ベッドまで一緒にたまるか」

「ソースケはワタシと一緒に寝るのは嫌デスカ？」アンナが目をうるませて上目遣いになって言った。

「だっ、だからその目は止めろって言っているだろう」宗介はアンナの

この目に弱いのである。

「仕方ないなあ」渋々といった感じで、だがどこか嬉しそうな様子で宗介がベッドに入ろうとした。

「ドガっ!!」いきなりドアが蹴り開けられた。

「宗介なにしてんのさ。寝るよ」陽向が言った。

「いや、もう寝るところなのだが」

「なにバカなこと言っているのさ。今晩はあたし達姉弟の3人で一緒に寝て絆を高めるんだよ。そのために由美ちゃんからケンのお泊りの許可をもらってあるんだから」よく見ると陽向の傍らにはケルベロスが侍っていた。

「さあ、あたしの部屋に行くよ」陽向が部屋にズカズカと踏み込んで宗介の首根っこを掴んでひきずり出した。

「ワウ」ケルベロスがこっちだという風に顔を振った。

「いや、今日は久しぶりにアンナ姉ちゃん。というより何で俺は犬に兄貴風を吹かせられなきゃならんのだ」

「そりゃ、あんたが末弟だからだよ」陽向が宗介を引きずりながら言った。

「えーっと、陽向ちゃん。ボクはどこに寝ればいいのかな」

「あつ、愛ちゃんはアンナちゃんと寝てね」

「その女、なんとかしてくれ」宗介君がボクに縋るように言った。

「いや、ボクに言われても困るなあ。姉弟の問題は姉弟で解決してくれないと」

「姉弟じゃねえ」宗介君はその言葉を残して陽向ちゃんの部屋に消えていった。

「なにがあつたのデスカ」アンナちゃんが状況を理解できずに尋ねた。

「まあ、いろいろあるんだよ。もう遅いから寝ようか、アンナちゃん」これ以上問題をややこしくしたくないボクは言った。



## 第15話

翌日はアンナパパと宗介君を観光に東京観光に連れて行くことになった。せっかく日本に来たんだから温泉にでも行ってもらったという話も出たのだが、カリリーニン一家だけで行かせると、どんなスットコドツコイな騒動を引き起こすか予想も付かないので、全員一致で否決され近場を観光することになったのだ。なぜか、ボクと陽向ちゃんと颯太君が監視、いや案内をすることになったのが理解に苦しむけど。

「3人観光に行くのに案内が3人も必要なのかな？」ボクは言った。「オールコートマンツーマンだね。お母さんは守備を重視したんだよ」と陽向ちゃんが言った。

「何の守備なのか、聞くのがこわいよ」ボクが答えた。

「お前ら2人でいいじゃないか。何で俺まで」颯太君がブツクサ文句を言っている。

「それはごつちのセリフだよ。アンナちゃんの夫である颯太君が行かないで誰が行くのさ」ボクが言った時、「スチャ」と何か金属の物体を引き抜く音が2つ聞こえた。

「どうやら長旅で疲れているようだ。変な空耳が聞こえた気がしたのだが……アンナの夫とか何とか」アンナパパが颯太君に銃を突き付けながらも、妙に穏やかな声で言った。

「ははは、いやだなあお父さん。愛ちゃんがバランスを崩して「おつと」と言ったんですよ」颯太君が冷や汗をかきながら言い訳をした。

「……言葉には気をつけることだ」宗介君が銃をホルスターに戻しながらつぶやいた。

「（おい、俺本当に行くのか？この調子じゃ帰ってくるまでに4〜5発は撃たれているぞ）」

「（でも行かなかつたら、アンナちゃんの乙女魂がバーニングして、有ること無いこと惚気を吹き込むだろうから、帰ってきたら蜂の巣になりますよ）」ボクは忠告してあげた。

「どつちみちデスフラッグじゃないか。そうだからバンドの日本

ツアーに出よう」

「そこらの高校生バンドじゃあるまいし、颯兄たちのバンドは一応一流インディーズバンドだから、そう簡単にコンサーとかできないんだよ」陽向ちゃんが言った。

「しようがない、おいアンナ。今日はどこに観光に行くんだ」

「はい、たつぷりと日本の文化の真髄を味わってもらいたいので、中野と池袋と秋葉原です」

「もの凄く、既視感のあるセレクションなんだけど。本当にそこに連れて行くの」

「秋葉は何となくわかるけど、中野と池袋の日本文化ってなにがあったっけ？」

「何をいいますか。中野は「せんだらけ」の本店がありますね」

「前に帰国する前に連れて行ったらファイギュアの棚の前で、お前がトランペットが欲しい黒人少年状態になって、引っぺがすのに30分かかった店だな」颯太君が言った。

「お父さんにファイギュア見せるの？」

「大丈夫です。これでもロシア人はファイギュアが大好きです」アンナパパが言った。

「へえ、ロシアで日本文化が流行っているってのは聞いていたけどそこまでなんだ」陽向ちゃんが言った。

「私はイリーナ・スルツカヤや浅田真央のファンですよ」

「どの辺から訂正したらいいのやら……」ボクは途方にくれていった。

「うん、それなら大丈夫だよ」陽向ちゃんが断言した。

「陽向ちゃん、もう説明が面倒くさくなってるでしょう」ボクが尋ねた。

「誤解解くだけで今日1日かかっちゃうよ。もう現地で親子でファイギュアを楽しんでもらおうよ」

「中野はそれとして、池袋ってサンシャイン？」

「いえ、乙女ロードでお買い物シマス。ちやうど新刊も出ている頃デスネ」アンナちゃんが断言した。

「ちよつ、ちよつと待つてアンナちゃん。乙女ロードにこんな髭面の叔父さんと10歳の少年連れてったら警察に通報されちゃうよ」

「観光というより、単にアンナちゃんのオタクシヨツピングコースって感じだね」

「アンナは自分の欲望に忠実だからなあ」

もちろんこのメンバーでアンナの決断に意義を唱えられるものなど誰もいない。

観光は 中野 ↓ 池袋 ↓ 秋葉原の順番で決まった。アンナちゃん、これくらい休日に行けそうな気もするんだけど。

「それでは行きまシヨウ」そう言うのとアンナちゃんは颯太君の右腕にしがみついて、その大きすぎる胸を潰れるように押し付けた。

「まっ、待てえいゝアンナ。胸がプニ・フニと……」颯太君が叫ぶ。間髪入れず「スチャ」聞き慣れた音が二つ。銃口は蒼汰君の後頭部につきつけられている。

「気をつけて答えることだ、青年。私の指は既に引き金にかかっている」

「俺の銃はフェザータッチだ。息がかかっただけでもその頭をブチぬくぞ」

「なっ、何でしょうか？」颯太君が両手をホールドアップして言った。「今言った「プニ・フニ」とは何のことかな？」アンナパパが真剣な顔で言った。

「まさかアンナ姉さんのむっ胸が……」宗介君が今にも引き金を引きそうな目で颯太君を睨んでいる。

「何かこうも気軽に何回も銃を突きつけられていると、これがロシア人のコミュニケーションなのかと思っちゃうね」陽向ちゃんのんきなことを言う。

「ハハハ、お父さんたちは知りませんか？ナポリ民謡ですよ」

「ナポリ民謡？」

「そうです。「行こう行こう火の山へ。行こう行こう山の上へ。プニ・フニ、プニ・フラ。我を呼ぶプニ・フニ、プニ・フラ」って歌です」「あれは「フニ・クリ、フニ・クラ」ではなかったかな？」アンナパパ

が首を捻る。

「日本語訳した時に訛ったんですね、きつと」

「そうだったのか。いや、すまなかった」2人は銃を取めた。

「あれで納得するってのは、さすがアンナちゃん家族だね」

「(素直といえば素直だけど・・・)」

何時まで経っても観光に出発できない一行であった。

## 第16話

それでも何とかかんとか電車を乗り継いで中野にやってきたボクたちだった。その途中で颯太君が4回ほど頭に銃を突きつけられたのは、まあ大したことじゃないだろう。人間は何事にも慣れる生き物なのだ。

「うわあ、このビルいっぱいにおたく臭が漂っているね」

「まあ、大元はこの店というかこの店群なんだけどね」陽向ちゃんがいう。

そう、ボクたちは知らなかったのだ。アンナちゃんが気軽に「せんだらけ」というから、単なる一軒のお店だろうと思っていいたら、ジャンル別に20を超えるお店が、ビルの1階から4階まで散らばっていた。ただなんて。

「オタクというのは業が深いものなのだ」颯太君がしみじみと言う。

「それにしても……あれどうすんの？」

律儀に各店舗でたつぷりと捕まっていたカーリーニン家御一行様が、冬の昆虫のようにへばりついて動かなくなった場所。そう「フィギュア」の展示棚の前である。

「アンナちゃんはまあ予想がついていたけど、アンナパパや宗介まで黒人少年状態になるってのは想定外だったね」陽向ちゃんが言った。

「一体何を見ているんだ」颯太君が偵察に向かった。

「もう、ドキドキプリキュアがフィギュアになってマス。まだプリキュア5もコンプリートしていないのニ……」アンナちゃんがつぶやいている。

「……俺の記憶じゃ、あれ全部で10人以上いるんじゃないのか？全部集めるつもりかよ」もちろんそんなツツコみがアンナちゃんの耳のフィルターを通過するはずもない。

「ふむ、やはり『真希波・マリ・イラストリアス』が一番ですね。特にこの真中のものは、腰のくびれ具合といいバランスといい至高と言えます。原型師は右藏さんに違いありません。制服姿も捨てがたいのですが、やはりプラグスーツが……」アンナパパが何やら真剣に

ファイギュアを凝視している。

「いい歳してどんだけエヴァに詳しいんだ、あんたは。何だその原型師ってのは」

「・・・ペカチユウ」宗介君がツブやきながらポケモンのファイギュアを凝視している。

「なんのかんの言ってやっぱり10歳のガキなんだな。人の頭に銃を突きつけやがるが」

「どうだった？」ボクが尋ねた。

「まあ、いろんな意味で日本文化を堪能しているようだ。というか俺より遥かに詳しいぞ、あの連中は」颯太君が答えた。

「いや、そういう意味じゃなくて。もうこのビルだけで2時間以上時間を使ってるんだよ。放っておいたら1日ここで終わっちゃうよ」陽向ちゃんが言った。

「冷静に考えたらこの後、乙女ロードに秋葉だろ。ここで観光の全日程を済ましても大して変わらないんじゃないか？」

「そんなことしたらただでさえカオスのカリーニン家の日本のイメージがますます酷いことになるよ」ボクが主張した。

「乙女ロードと秋葉で修正できるとは思えんのだが、というかカオスに拍車をかけるだけじゃないか？」

「とりあえずあの3人を引き剥がすよ。愛ちゃんはアンナちゃん。颯兄はパパ。あたしは宗介を引き剥がすから」陽向ちゃんが宣言した。裕ちゃんのオールコートマンツーマンの威力が発揮する時がやってきたのだ。

「・・・あの」颯太君が言った。

「・・・」

「お三人様。ご堪能中のところ申し訳ありませんが、そろそろ次に行かないとお時間が・・・」

「・・・」

「なんでそんなに卑屈なのさ」陽向ちゃんが言った。

「ほぼ100%の確率で、頭に銃を突きつけられるからだ、バカ者」

「・・・」

「しようがない。やるよ……ソレ」とボクが号令をかけて、3人を柵の前から引き剥がした。

「待ってくださいサイ。まだ、ゆっくり見てません」アンナちゃんが叫んだ。

「30分以上も見ていれば十分だよ」ボクが答えた。

「待ちたまえ。今。『真希波・マリ・イラストリアス』の制服がいいかプラグスーツがいいか決めていたところなのだ」

「買うつもりだったのかよ、おっさん」

「……ペカチユウ」

「あとでコンビニでカード買ってあげるから」

何だか異国で外人さんを拉致するギャング団のようなボクたちだった。

ブツクサ言いながら後ろをついてくるカリニン一家を無視して、僕たちは電車で池袋に向かった。

「で、その乙女ロードとはどこなんだ？」颯太君が言った。

「ボクも知らないんだけど、何となく人に尋ねちゃいけない気がする」ボクの中のゴーストがささやいている。

「アンナちゃんが知っているんじゃない？」陽向ちゃんが言った。

「みんなこっちデスネ」陽向ちゃんの言う通りだった。あの迷路のような池袋の駅をアンナちゃんは自分の家の庭のように全く迷いなく進んでいった。

「ところで前から気になっていたんだが、なんで『乙女ロード』なんだ？」

「女の子がいっぱいいるからじゃないですかね」

「少女漫画の専門店がいっぱいあるのか？」

「さあ？それはなんとも」金魂が愛読書のボクに聞かないで欲しい。

「それはね」陽向ちゃんが胸を張っていった。

「少女漫画というよりも腐女子専門のBL本のお店がいっぱいあるからなんだよ」

「腐女子？」

「BL本？」

「婦女子じゃなくて、腐った女子と書いて『腐女子』、BLってのは Boys Loveの略で、簡単に言えば美少年の同性愛物の同人誌のことだね」

「どっ、同性愛ってお前。そんなの需要あるのか？」颯太君が驚いたように言う。

「バカだなあ、颯兄は。『ホモが嫌いな女の子はいない』んだよって」「そうなのか？愛ちゃん」ボクはヘッドバンキングのように首を横に振った。

「いや、由香リンが力説してたんだけどね。おまけにこれは名作だからぜひ読めとか言って『桜の木の下で貴様を待つ』とかいう本まで貸してくれた」なんか優子がその本のことをどうこう言っていた気がするんだけど。

「お前の数少ない友達をどうこう言うつもりはないが、友達を選んだ方がいいぞ」颯太君が言った。

「それよりまさかアンナちゃん、そのお店にパパたちを連れて行くつもりじゃ……」

「あの全く迷いのない足取りはそうなんだろうな」

「そんな店にパパたち連れていったら、パパシヨック死しちゃうよ」

「これはいかん」颯太君が3人に近づいていった。

「そういえば近くに大きな水族館があるんですよ、そこに行きましょう」

「ソータ、乙女ロードはどうしますか？」

「ええい、お前は勝手に行つて腐ろうが発酵しようが好きにしてこい」

「BL本の素晴らしさをぜひパパたちに教えようと……」

「親の寿命を縮めたり、弟を違う道に進ませたいのかお前は。とにかく2時間後にいけふくろうの前で待ち合わせだ」

ボクたちは強引にアンナちゃんとパパたちをわけた。アンナちゃんはブツブツ言いながらも嬉しそうに人混みの中に消えて行った。



## 第17話

2時間後、ボクたちはいけふくろうの像の前でアンナちゃんを待っていた。

アンナちゃんは5分くらい遅れて、手に一杯の本の詰まった紙袋を下げて現れた。

「遅い、どれだけ待たすのだ」颯太君が言った。

「時間どおりデス」アンナちゃんが答えた。

「待ち合わせから5分も遅刻しているぞ」

「ロシアでは1時間からを遅刻といいマス。日本人は神経質すぎます」

「お前らが大まかすぎるのだ」颯太君が怒鳴った。

「豪快にも程があるね」陽向ちゃんが言った。

「で、そんなに一杯、何を買って来たのだ？」

「やおい本です。新作が沢山出ていて選ぶのが大変でした」

「やおい本だあ？」

「やおいとはヤマ無し、オチ無し、イミ無しの頭文字で、主にBLを……」アンナちゃんが得意げに言った。

「やおいの解説しろとは言っていない」颯太君が袋の中から一冊を取り出して頁を開いた。

「おつ、お前これは」思わず落とした本を取り落としたのを、アンナパパが拾って目を通し、これまでに見たことが無いような厳しい顔をして言った。

「アンナ、こんなものを買ってくるなんてどういうつもりだね」そう言って銃を取り出すと……颯太君の頭に突きつけた。

「ちよつと待て、親父。なんでアンナを怒るのに俺の頭に銃を突き付けてるんだ」

「いや、これは失礼。つい、条件反射で……」アンナパパが言い訳をする。

「条件反射になるくらいに人の頭に銃を突き付けてるんじゃないやねえよ」颯太君がブツブツと言う。

「アンナ、パパはお前をこんな本を買うような子に育てた覚えはないぞ」アンナパパの厳しい叱責の声が響く。

「すみマセン……」アンナちゃんがしおらしくシユンとして言った。

「何だ、この本は。肌色成分は少ないし、バツクのヌキも甘い」

「ちよつと待て、親父。そんなこと以前にもっと他に注意する点があるだろうが。何だその編集者が新人マンガ家にするようなマニアックな説教は」颯太君が怒鳴った。

「デモ木上イ憂子先生の本はストーリーが毎回素晴らしいんデス」

「木上イ憂子って……もしかして優子とか、アツハハ、まさかね」ボクが乾いた笑いを出す。優子の趣味のど真ん中の雑誌というところに一抔の不安を感じたのだ。

「それより、ヤマ無し、オチ無し、イミ無しの本のストーリーってなんだろうね？」陽向ちゃんが言う。そりやそうだ、ストーリーがあったら意味があるものね。

「宗介はどう思う」アンナパパが宗介に本を渡した。

「そつ宗介君にはちよつと早いんじゃないかな」ボクが慌てて止めたが遅かった。宗介君は興味なさげにパラパラとめくると

「Bチームのデイチャーチンとイワンみたいなことやっているだけじゃないか」と言った。

「あんたの部隊はどんだけ風紀が乱れているんだよ。本当にロシア最精鋭部隊なのか？」

「部隊とは何のことかな？私は教師で、学校で教えているだけだが」アンナパパは動ぜずに言った。

「何がどうあつてもその設定を最後まで引っぱるつもりなんですわね」ボクが呆れて言った。

「とにかく親として娘がこんな本を買っていることを怒れ」

「颯太君、人の趣味にとやかく文句をつけるのは野暮というものだ」

「趣味の範囲が広すぎるだろうが。アンナの場合、野球やっているのにストライクゾーンがサッカーゴールぐらいあるぞ」

「まあ、どんなものであれ趣味を持つのはいいことだ。無趣味で無骨

な私には熱中できるものがあるアンナが羨ましいよ」アンナパパが言った。

「さつき、せんだらけで『真希波・マリ・イラストリアス』のフィギュアを買うのに30分も悩んでたろうが、あんたは。ナチュラルにプラグスーツなんて専門用語まで口に出しやがって」

「あれはあの人形の造形美に魅せられていたのだ」

「単にフィギュアに興味を持った奴が、造形師とやらだ誰かまで見抜けると思ってるのか。どんだけフィギュアを見倒してれば、そんなの分かるんだよ」

「紳士の嗜みに対する日口間の文化の違いだな」アンナパパも負けてはいない。

「いきなり比較文化人類学レベルに話を大きくしてんじやねえ。小僧、お前はと思う」いきなり宗介君に話をムチャ振りする。

「……ペカチュウ……欲しかった」

「アンナが人の話を全く聞かないのは、家系だということだけはよくわかったよ」颯太君は呆れたように言った。

「で、アンナこの後はどうするんだ？」颯太君がアンナちゃんに聞いた。

「ハイ。そろそろお腹も好きましたので、秋葉でお昼を食べましょウ」アンナちゃんが満面の笑顔で即答する。

電車の中で颯太君が、頭に拳銃を6回くらい突きつけられていたけど、もはや見慣れたボクたちにとっては、見慣れたいつものほのぼのとした車内風景に過ぎなかった。

## 第18話

「で、アンナちゃん。秋葉でお食事というとやっぱメイド喫茶に行くの？」ボクはアンナちゃんに尋ねた。

「ナニを言ってますかアイコ。ワタシはパパとソースケを連れてメイド喫茶なんかに行くと行くほどのオタクじゃありません」とアンナちゃんがキツパリと断言した。

「そつ、そうか。そうだよ。いくら何でも日本に観光に来て（本当は颯太くんとの仲を割くためだが）、昼食がメイド喫茶じゃね」ボクは笑って言った。

……20分後、ボクたちはアンナちゃんの微塵の迷いも感じられない先導で入った、秋葉のとあるお店のテーブルで呆然としていた。

「……で、ここはどこ？」確かにメイドが一人もいないお店にボクたちは座っていた。

「アンナちゃんは、嘘は言っていないよね、嘘は」陽向ちゃんもその点には同意してくれた。

だが、各テーブルをサービスして回っているあの人たちはどう見ても……

「おい、アンナ。この店は何だ？」颯太君も同じ疑問を抱いていたように、アンナちゃんに尋ねた。

「ハイ、執事喫茶です。女の子に大人気ですよ。前から来たかったのです」アンナちゃんは一点の曇りもない笑顔で答えた。アンナパパと宗介君のための観光だということは、一切考慮していないようだ、この娘は。というかその「女の子」というのは、世間一般で言うところのボクたちも含めた「女の子」なのかという疑問が湧きでてくる。

「大体、電車の中の『ワタシはパパとソースケを連れてメイド喫茶なんかに行くと行くほどのオタクじゃありません』宣言は何だったんだろうね？」ボクは陽向ちゃんに囁やいた。

「『ワタシはパパとソースケを連れてメイド喫茶（辺り）に連れて行くほどの（低レベルな）オタクじゃありません』って意味だったんじゃない

ないのかな?)」陽向ちゃんが答えた。

「(なんだか知らないけど、オタクのオールラウンドプレイヤーとしての矜持か何かがあるのかな?)」

「(まあ、マスター級のオタクだからね、アンナちゃんは。並みのオタクじゃないってところをパパや宗介に見せたかったんじゃないのかな)」陽向ちゃんが諦めきったような声で答えた。

確かに陽向ちゃんの言うことにも一理あるんだけど、メイド喫茶だったら可愛い女の子がキュートなメイド服を身につけて、甲斐甲斐しくサービスしてくれるのを眺める楽しみがあると思うんだけど、この店で一般人のボクたちは何を楽しめばいいのだろうか？

ボクは何となく日本で本当に執事さんを雇っている家とグルカ兵をボディーガードとして雇っている家は、どっちが多いんだろうかとなどと、頭が現実逃避を始めるほどに現状把握に苦労していた。ライトノベルだと生徒会長一人につき執事さんが一人いる計算になるんだけど。最もメイドさんは、その100倍はいるはずだが、ボクは生メイドさんを見たことは一度も無いし……

そもそも店を入るところから一騒ぎだったのだ。意気揚々をドアを開けたアンナちゃんを執事服に身を固めた執事さんが出迎えて、慇懃なお辞儀をしながら言った。

「お帰りなさいませ、お嬢様、ご主人様……えっと旦那様?」いや、ボクに尋ねられても困るんだけど。さすがに190cmの精悍な髭面の外国人男性の来店はマニュアルでも想定していなかったようにで老練な執事さんもどう呼んでいいのか困ってしまったらしく語尾が半疑問形になっていた。

「うむ」さすがはアンナパパ。全く動じることなく店ヘズカズカと入って行った。宗介君は物珍しそうに5人の執事が動き回る店内を見渡していた。本場イギリスでも執事を5人も雇っている貴族はいないと思うので無理はないと思う。

6人なので執事の人がテーブルをあわせて席を作ってくれた所でボクたちは席についた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。本日は何をお召し上がりでしょうか」さ

すがはプロだ。どうやらこの謎の集団（190cm髭面体格良しの外国人、170cm超美人銀髪Gカップの日本語を流暢に操る外国人、10歳の目つきが異様に鋭い少年、25歳の秋葉とは無関係に人生を送ってきたような青年、160cmAカップ・・Bカップ（うっ、嘘じゃない。最近ブラがキツくなっている気がするから大きくなっているはずだもん、ってボクは誰に言い訳しているんだろう）の可憐な女子高生、150cmのあどけない中学生にも見える女子高生）の中から、アンナちゃんがリーダーだと瞬時に見抜きメニユーを真っ先に渡しながら尋ねてきた。

「ナニがお勧めデスカ」

「はい、『あなたと執事のラブラブオムライス』が当店の一番人気でございます」

「ソレは何デスカ？」

「はい、執事とジャンケンをして頂き、お嬢様がお勝ちになられたら好きな執事を指名して一緒に写真が取れるというものです」

「それは誰が得するシステムなんだ」 颯太君が言った。

「はい、通常ですと執事と記念撮影する場合には、指名料が500円にポラロイド写真料が500円の1000円かかりますが、ジャンケンに勝って頂ければそれが無料になるという大変お得なシステムでございます」

「俺に1000円くれれば写真はいらん」颯太君が無然として言った。

「それを6つお願いシマス」アンナちゃんがキツパリと断言した。むろん反対できるような人間はこの場に一人もいなかった。

「ソレと食後にティーをお願いシマス」

「畏まりました。ティーはロイヤルミルクティーでよろしいですか？」

「ワタシたちはロシア人なので、ロシアンティーをお願いシマス」

「失礼致しました。それではご注文を確認させて頂きます。『あなたと執事のラブラブオムライス』を6つとロシアンティーを6つでよろしいでしょうか」

「ハイ、それをお願いシマス」アンナちゃんがニコニコして言った。

「ふむ、日本料理というのは、なかなか変わっているのだな」アンナパパが言った。ああ、誤解がまた大きくなっていくけど訂正する気力もないし、その必要性も感じなくなっている。

ちなみに『あなたと執事のラブラブオムライス』は、なぜか男性陣だけが執事さんとのジャンケンに勝利し、営業スマイルの執事さんと無然とした表情の男性陣の記念写真を3枚手に入れた。まあ、ボクとか陽向ちゃんが勝って執事さんとの記念写真を貰っても始末に困ると思うんだけど……

ついでに言えばアンナちゃんがジャンケンに負けたことを真剣に悔しがっていたのは、言うまでもない。

## 第19話

もう一杯オムライスを食べると主張して聞かないアンナちゃんの腕を掴んで颯兄が店の外へ連れだした途端に、予想通りに2丁の拳銃が颯太兄の頭に突きつけられた。

「青年、わたしは部た・・・学校でも寛容な男として通っている。殺すにしても言い訳をする時間ぐらいは与えるのが私の主義だ。何をしているのかね、君は」

「何をもって、オムライスの2杯目に挑戦しようとしているアンナを店から連れだしたところですが、それがマズかったんですか？」颯太君が尋ねた。

「そんなことを聞いているのではない。君が握っているのは、アッ、アンナの手じゃないか」

「そりゃ、こうしないと連れてこられないし」  
「パパ、ワタシとソータはもう夫婦だから手くらい繋いでも何の問題点もありマセン。大体、毎日の買物の時に手を握りあう「仲良しラブラブ新婚カップル」として商店街でも有名です」さすがはアンナちゃんだ。状況というか空気を全く読まずに、油田の火災現場に上空からガソリンをバラまくような発言を平気でやってくれる。

「あれはお前がむりやり手を絡ませてくるんだろうが」颯太君ってば、頭に銃を突きつけられた状態でよくそんなツツコミができるもんだ。

うん、確かに「仲良しラブラブ新婚カップル」として家の近くの商店街では有名だということとはボクも認めるのにやぶさかではない。商店街中の店をアンナちゃんが力説して回って、疑う（主に颯太君のせいで）お店の人たちをムリヤリ納得させていたから。本当に結婚したら、商店街で「アンナちゃん(36 pointの文字)・颯太君(10 pointの文字)結婚祝賀セール」をやるって商店会長さんも言っていたし。

「新婚夫婦なら当たり前のことデス」アンナちゃんが当然と言った感じと言った。

「しっ、新婚夫婦だと？ワタシはまだ認めたわけじゃありませんわよ」



アンナパパが興奮のあまりにおネエ言葉になっている。

「父ちゃん、落ち着いて銃をしまつてくれここは日本だ。銃の使用はまずい」宗介君が突きつけた銃をフォルダーにしまいながら言った。わずかながらこの子の方が父親よりは常識があるようだ。

「こいつの始末は俺がナイフでつけてやる」腰の後ろからデカイナイフを取り出して言った。前言撤回、行為そのものを問題にしているのではなく何を使うかを問題にしていたようだ。

「駄目だ、ソースケ。お前のナイフ格闘はまだプロフェッショナルレベルだ。せめてマスターレベルでないと」

「怒りの分で技量は上がっているはずだ。どのみち日本人の民間人一人殺すのにはプロフェッショナルレベルでも十分だ」

今度はカリリーニン親子が言い争いを始めた。内容を別にすれば父と10歳児の微笑ましい言い争いと見えなくもないかも知れない。

「……陽向ちゃん、悪いけど今の状況を整理してボクに説明してくれない。ボクもう何が何やら」

「とりあえず、颯兄とアンナちゃんが「お買い物時に手をつなぐのは有りか無しか」で揉めていて、アンナパパと宗介が、颯兄をやるのにナイフ格闘のプロフェッショナルレベルで資格十分かで揉めているところかな?」

「執事喫茶の人も入り口でそんな話題で揉められても迷惑だろうね」

「いや、秋葉のど真ん中でやっても迷惑というか、警官隊が駆けつけてくるような話題だと思うよ」陽向ちゃんが冷静に言った。

「……10分後、どうやらそれぞれのグループは妥協点を見出したようだ。」

「……という事で買物の時に手をつなぐのは無しということでもいいんだな」颯太君が言った。

「ソータがそこまで嫌がるのなら夫の顔を立てるのも妻の務めです。それにワタシには秘密兵器がありますカラ」アンナちゃんが不敵に笑った。

「何だ、その秘密兵器とは」

「ソータは馬鹿ですね。教えたら秘密兵器になりません」アンナちゃ

んが珍しく、本当に珍しく正論を言った。

「で、親父たちの方は決着がついたのか」颯太君が尋ねた。

「ああ、申し訳ない。なんとか説得して宗介のナイフ格闘は禁止した。なにしろまだプロフェッショナルレベルだからな」

「プロフェッショナルでもマスターレベルでも刺された時の痛みにや変わりないだろうが」

「その代わりと言ってはなんだが、スペツナズ・ナイフの使用を許可した」

「スペツナズ・ナイフってのは何だ」

「ああ、ボタンを押すとナイフの刃の先が銃弾のように飛び出して相手に刺さるのだ」

「スペツナズ・ナイフの解説しろって意味じゃねえ。ナイフの使用を禁止するって発想は出てこなかったのかって言ってんだ」

「いくら上官でも兵士に戦闘時の武器の使用を禁止はできない」アンナパパが毅然と言いつつ切った。

「この親父、強引に引つ張り続けた教師の設定をあつさり捨てやがった。アンナの手を握っただけで、戦闘状態に突入するってロシア人ってのは、どれだけ沸点が低いんだ」颯太君が呆れたように言った。ここまでの電車の中で10回以上、頭に銃を突きつけられておいて沸点もへつたくれもないと思うんだけど。

「で、これからどうすんのさ、颯兄」陽向ちゃんが尋ねた。

「うーん、こいつらに取っっちゃあ秋葉って地雷原だらけだからなあ。フリーダムに放牧したら、ヘタしたら3日は家に帰れんぞ」

「ああ、青年」アンナパパが言った。

「何だ、親父」

「わたしはアニメとやらはよく知らないのだが「Ghost in the Shell 《攻殻機動隊》の初回限定版 草薙素子フィギュア付きBlue Ray Box」が欲しいのだが」

「ビートルズの武道館公演のチケットが欲しいというのと同じレベルのムチャな発言だぞ、それは。そんなもん即日完売に決まってるだろう。というかアニメ知らないとか言いながら、何でそんなにマニアッ

クナアニメの情報知ってたんだ」

「心配するな、青年。ちゃんと予約はしといた」アンナパパは泰然として言った。

「どうやってロシアから予約したんだよ」颯太君が怒鳴った。

「やれやれ、君はインターネットというのを知らんのかね。今は世界中からどこへでも注文ができるんだよ」アンナパパが可哀想な子を見るような目で颯太君を見た。

「予約はできるとしてもどうやって秋葉まで買いに来るつもりだったんだよ。……予約って、あれは半年も前に締め切ったはずで……さてはあんた、アンナのこと口実で、半年前からそれを買うことを目的に来日するつもりだったんだな」

「君が何を言っているのか理解できんな。アンナの結婚話が持ち上がったのが、偶然引取り日だっただけだ」

「まあ、やっぱりソータとワタシの結婚は運命だったんデスネ」疑うということを知らないアンナちゃんが目をキラキラさせながら言った。「普通、あれを信じるかな？」ボクが言った。

「さすが、ポジティブ・シンキング世界選手権女王のアンナちゃんだね。何の疑問もなく運命だと信じちゃったよ」陽向ちゃんがため息をついた。

「さあ、時間の無駄だ。BDを予約したゲームストへ案内し給え」アンナパパが来日以来、最も素晴らしい笑顔を見せながら言った。

## 第20話

案内(もちろんアンナちゃんの微塵の迷いも無き道案内)によって、ボクたちはゲームストとかいう店に到着した。というかこのビル全体がその店らしいんだけど、アニメと漫画だけでなくフィギュアやらゲームやらも充実しているオタクの聖地のようなお店だと陽向ちゃんも解説してくれた。

「そう言えばお前、地球のエンターテイメントは、保護対象だと言っていないかったか」

「そうですよ。惑星保護機構で一級保護対象地域に指定されています」

「それじゃこれ勝手に持ち出しちゃいけないんじゃないのか?」

「……真尋さん、「バレなきや犯罪じゃないんですよ」

カップルらしい高校生が理解できない会話をしていた。なにやら別の番組と混信しているようだ。

それよりあの女子高生が何で背中にボールを背負ってるのかの方が気になったボクは好奇心に負けて尋ねてみた。

「あの、すみません」

「はい、何でしょう?地球人の娘さん」ボクの方を振り向いた銀髪ロングヘヤーの美少女が満面の笑顔で答えた。

「地球人?」

「ああ、こいつの言うことは無視して下さい」男の子が慌てて言った。

「はあ、それはおいておくとして、なんでボールなんか背負ってるんですか?」

「ああこれですか。これはボールじゃありませんよ」

「えっ、どう見てもボールにしか見えませんですけど」

「これは『名伏し難いボールのようなもの』です。ロイガーの固い鱗も豆腐よりも簡単に切り裂ける対邪神専用特殊ネオ・アームストロング・エクストリーム・リーサル・アームストロング・ウエポンなのです」

「アームストロングが2回入っているけど」陽向ちゃんが不思議そうに言った。

「いや、それ金魂のパクリじゃ……ウグ」ボクの口が美少女の手で押さえられた。

「つつつつつ、邪神聞きの悪い発言はいけやせんぜお嬢さん。パクリじゃなくて「リスpekツ」と言ってくれなき……ゲルググ」いつものまにか女の子の脳天にフォークが刺さっていた。

「なに一般人にまで迷惑かけてんだ、お前は。本当にすみません」

「……いつ、いや。どうも失礼しました」どうやら、あまり関わりあいにならない方がいい種類の人たちのようだ。アンナちゃんといい、この人といいたても美人なんだけど、銀髪の人というのは残念な人が多いのだろうか？

一方、アンナパパは1階売り場のカウンターにズカズカズカと一直線に乗り込んで行った。

「君、予約していたBDを受け取りに来たのだが」アンナパパはカウンターで店員さんに予約票を渡しながら言った。

「えっ、あつはい。えーつと、アレクサンドル・カリーニン様ですね、少々お待ち下さい」190cmの髭面年配のロシア人がアニメのBDを買いに来たというのに、この店員さんは動じる気配もない。

「(ねえ、身体全体から怪しい気配を漂わせている外人がアニメBDを予約で買いに来てても店員さんビクともしないね)」ボクは陽向ちゃんにささやいた。

「(そういう人多いんじゃないのかな？在日米軍なんて日本が戦争になったら秋葉原防衛のために希望者だけで1個師団できるって言われているくらいにオタクが多いって聞いたよ。『聖地秋葉原は俺たちが守る』って豪語しているって)」

「(アメリカと戦争になっても、守ってくれそうな連中だね)」

「(さすがにそれは……ないとは断言できないところが怖いよね、ああいう人たちって)」

「ところで、アンナちゃんの姿が見えないようだけど」ボクは陽向ちゃんに尋ねた。

「お店についた瞬間に姿が消えたよ。そりゃ、アンナちゃんに取っちゃあ1週間餌が貰えなかったライオンの眼前に、神戸牛の生肉をマ

ルマル放り投げたようなもんだからね」何を当たり前のことを聞くのかという顔をして、陽向ちゃんが答えた。

「池袋でも結構買い物していたみたいだけど、留学生なのによくそんなににお金あるね」

「お母さんから我が家で一番たくさんお小遣い貰っているし、読者モデルの給料もあるからね」実の子よりもお小遣いが多いというのは、如何なものか？

「……いつ、いつ読者モデルになんてなったの、アンナちゃん？」  
「なったと言うか、本人にはその自覚は全くないんだけどね。「乙女ロードで男の人に声かけられて着いて行ったら、イロイロと綺麗な洋服着せられて写真撮ってもらった上に、お金まで貰いマシタ。日本人本当にいい人多いデス」とか言つて喜んでいたら、翌月のファッション雑誌の表紙飾つてた。読者に好評ということでした。それ以来毎月モデルやってるみたいだよ」

「そりや、さすがに裕ちゃんが黙ってないでしょ」

「うん、近所中の本屋でその雑誌買い占めて、お母様会とご近所さんと商店街と両方の実家と親戚に配つて、そりやもう大騒ぎ」

「いつ、いやそういう意味じゃなくて。とりあえずアンナちゃんに『知らない人について行っちゃダメ』つて、教えてあげた方がいいんじゃないのかな？へタしたら「うまい棒」で誘拐されそうなんだけど」

「まあ、そこらの日本人男がアンナちゃんに勝てるわけもなく……」  
「目標カレリンだから？」ボクが尋ねた。

「カレリンだから」陽向ちゃんがキツパリと断言した。カレリンなら仕方ない。

「お待たせしました、カリーニン様。『攻殻機動隊 初回限定版「草薙素子」フィギュア付きBD BOX』ですね。38000円になります」

「38000円だあ、バカじゃねえのか親父」颯太君が叫んだ。

「ああ君、ポイントカードがあるのでポイント分値引きを頼む」颯太君を無視してアンナパパが言った。

「かしこまりました。えーっと、すると合計で12000円になります」

す」

「こんな店のポイントカード持ってるだけで呆れかえってるってのに、16000円も割引されるだけポイント貯めてるって、どんだけ買い込んでたんだ、あんたは」

「君が何を興奮しているのかわからんが、心配するな。教材費として部た・・・学校の経費で落ちる」

「そんなこと言ってるんじゃない。あんたの学校とやらは一体何を教えてるんだ」

「ところで君、『進撃の阪神』のBD BOXは、何時ごろ発売になる予定かね？」アンナパパは颯太君を完全に無視して店員さんに尋ねた。

「いや、バース、掛布、岡田の時代の話ですからねえ。BDにはならないんじゃないですか」店員が答えた。

「誰が阪神タイガース黄金時代の話をしてるんだ。この親父のことだからアニメの話だ・・・たぶん」意味がわからなそうなアンナパパに代わって、颯太君が律儀にツッコんだ。

「冗談ですよ。BDって言われても放映中のアニメですからねえ。まだ第1巻すら出てないですよ。BOXが出るとしたら再来年くらいじゃないですかね」この店員さんの対応力もさすがにプロだと感心した方がいいんだろうか？

## 第21話

ボクたちはアンナパパと颯太君を置いて、アンナちゃんといつの間にか姿を消していた宗介君を探すべく各階を探索した。

宗介君は3階のDVDコーナーで両手にDVDを持って、2秒ごとに首を振りながらそれぞれを見つめていた。あまりにも早い速度で首を振っているものだから、他のお客さんが気味悪がってその通路に近寄ろうとはしなかったくらいである。

「宗介君、何してんだろう？」ボクが近づいて後ろから覗き込んでみると、左手に「ポケモン劇場版DVD」を、右手に「クレヨンけんちゃん劇場版DVD」を持って声もかけられないほど真剣に見比べていた。

「なんか怖いくらいに真剣だね」

「どっちを買おうか悩んでいるんだろね。あたしがお姉ちゃんとして両方買ってあげてもいいのに」

「陽向ちゃん、そのお姉ちゃん設定かなり気に入ってるんだね。宗介君はしばらくあのままだろうから、先にアンナちゃんを探そうか」

「たぶんアンナちゃんは、またファイギュアのところで黒人少年状態になっていると思うよ」陽向ちゃんが言った。

そこで4階のファイギュアの売り場へと向かったら、やはりそこにアンナちゃんがいた。決してボクたちの期待を裏切らない娘だ。さすがにガラスにへばりついてこそいかなかったけど、頬に右手を当てて何かに感動している様子で微動だにせず、ファイギュアを見つめていた。「・・・ハアツ、やっぱり触手は日本文化の真髄デス」アンナちゃんがため息をつくようにウツトリと言った。

「・・・陽向ちゃん、アンナちゃんは一体何を言っているの？」

「触手が日本文化だって」

「いや、それは聞こえたんだけど触手って、タコとかイカの足のことだよね？何であれが日本文化なの」

「あたしもそんなに詳しいわけじゃないけど『触手もの』というディープなジャンルがあつて、お好きな方にはたまりまへんなあ状態らしい



よ」そこまで深くダイブされては、もはやアンナちゃんを普通人へレスキューすることは深海救助艇を使つたとしても無理だろう。

というよりこの娘をこのままロシアに帰しては日本の国益が損なわれる気さえしてきたんだけど。

「ちなみに陽向ちゃんは、その知識は誰から教わつたの?」

「ユカリんがマコちゃんに力説してた」あの子は普通に優等生だと思つてただけど、ちよつと認識を改める必要があるかも知れない。

「マコちゃんの反応はどうだった?」

「なんだかルーベンスの絵の前でパトラツシユと一緒に冷たくなつたネロを見つけた神父さんのような目でユカリんを見てたよ」ユカリんはマコちゃんにどれだけ可哀想な子だと思われたんだろうか。ユカリんの力の入つた説明がマコちゃんには「パトラツシユ、ボクもう眠くなつちやつたよ」とすら聞こえたのかも知れない。

「アンナちゃんほどの美人が『ワタシの趣味は人形を集めることデス』って言えば、男の子はイチコロなんだろうけどなあ」とボクが言った。

「・・・触手ものでも?」

「どんな人形が好きなのは人に詳しく言わないようにアンナちゃんに注意しておいてあげるとして・・・ところでさつきから気になつていたんだけど、このフロアってなぜか人がいないね」

「そりゃあ、アンナちゃんみたいなスタイルバツグンの美人がこんなエリアに入ってきたんだから普通の男の子だったら逃げるって」

「そういうもんなの」

「そうだよ。例えば男の人がコンビニの日本コーナーで買う雑誌を物色してる時に、隣の棚に女の人が来てもそのまま日本読み続けられると思う?」

「康太なら脇目も振らずに没頭していて、ボクが隣に立つて怒りの炎を背中から出しても気が付かないとは思うけど・・・」

「いやまあ、そういう特殊事例はとりあえず別にして一般論としての話だよ」

「要するにアンナちゃんがここにいるだけで営業妨害ってことだね」

「そう、お店もお客さんも大迷惑」

「でもアンナちゃんは気にしないと思うけど」

「そういうのは男の人の方が気にするんだよ、愛ちゃん」とキツパリと言いつつ陽向ちゃんがとても大人に見えた。

2人を見つけたことを報告しに1階に戻ったら、カウンターの前で颯太君がアンナパパを羽交い絞めにしていた。本当にちよつと目を離すと何をやりだすのかわからない連中だ。

「ちよつと、颯兄。お店の中で何やってんのさ」陽向ちゃんが怒鳴った。

「おお、お前ら。いいところに戻ってきた。この親父を止めろ。いい歳してよりにもよって「Kーおん」のBD BOXを買おうとしてやる」

「うちの生徒たちのバンドの参考資料にするために購入するつもりなのに、君はなぜ止めるのだね」アンナパパが悪びれずに言う。

「なんで日本の女子高生バンドの萌えアニメが、ロシア人の特殊部隊のバンドの参考になるんだよ。っーか、あのアニメって音楽よりもほとんどお茶飲んでケーキ喰ってるだけだぞ」

「そこが問題点なの？」

「何を言うのだ、青年。唯など、エリック・クランプトンにも劣らないテクニックと才能を……」

「なるほど同じミュージシャンとして一理あることは認めよう……で、あんたは誰が好きなんだ？」

「私の一押しは「かずニヤン」だが」アンナパパは気持ちいいくらいにキツパリと言いつつ切った。

「結局、あんたのために買うんじやねえか、いい歳した親父が「かずニヤン」なんて言ってるんじやねえよ。」

とてもじゃないがこの連中の仲間だとは思われたくない。ボクと陽向ちゃんは、こっそりとその場を離れた。

「ところで陽向ちゃん。ここらで状況を整理してみようよ」ボクは陽向ちゃんに提案した。

「えーつと、萌えアニメを買おうと言い張っている190cm髭で強面

の特殊部隊の少佐殿と、『ポケモン』と『クレヨンけんちゃん』のD Vのどっちを買おうかと悩んでいる同じく特殊部隊の10歳の軍曹殿と触手フィギュアに魂を奪われている一流ファッション雑誌の美人読者モデル様で構成されているロシア人一家が、このビルの各階で騒動を引き起こしています」

「……………」

「……………」

「ねえ、陽向ちゃん。ちょっとボクから提案があるんだけど」

「なにかな、愛ちゃん？」

「ボクたち、このまま帰っちゃった方がいいんじゃないかな？」

「奇遇だね、あたしも同じこと考えてたよ。でもそんなことしたらあの一家の帰宅が何日後になるかわからないよ」

「はあ〜〜」ボクと陽向ちゃんは大きなため息をついた。颯太君とアンナパパはカウンターの前でまだ大騒ぎをしていた。

## 第22話

「で、今日の日本観光はアンナちゃんのご家族にご満足いただけただけのかしら？」裕ちゃんが言った。

「ええ、多分この上なく満足してもらったと思います」あれを日本観光の範疇に入れていいのかは疑問だが、カリーニン家御一行様全員がキラキラした目をしているところを見ると満足したことは間違いないだろう。

アンナパパ・・・半年も前にロシアから予約した『攻殻機動隊 初回限定版「草薙素子」ファイギュア付きBD BOX』と最終的に颯太君を振り切って購入した『Kーおん 1st BD Box』  
宗介君・・・陽向ちゃんに買ってもらった『ポキモン 劇場版DVD』と『クレヨンけんちゃん劇場版DVD』

アンナちゃん・・・乙女ロードで買った袋一杯の雑誌とゲームストで購入した大きな箱群。中身が何なのかを聞く勇氣はない。尋ねたが最後、小一時間はアンナちゃんのそれに対する蘊蓄と愛情をタツプリ聞かされるハメになるから。というか裕ちゃんの前で触手フィギュアなんか出された日にはフォローのしようがない。一流ファッション雑誌の読者も、自分たちのお金が、こんなものを買うのに使われたと知ったら、さぞ嘆き悲しむだろう。同情を禁じ得ない。

以上がこのロシア人一家の購入した品物だ。全員何かを成し遂げたかのような満足そうな顔をしている。アンナパパと宗介君はてつきりアンナちゃんの結婚話をツブしに来たんだと思っただけで、実は本当に予約したBDを買いにわざわざ日本まで来たのだろうか？

「で、皆さん何をお買いになっ・・・」

「お母さん、あたしお腹すいちゃった。晩御飯にしようよ」裕ちゃんの質問を陽向ちゃんが遮った。

「なんです、お行儀の悪い。わたしはカリーニンさんに何を買ったのかとお尋ねしているの。で、カリーニンさん、今日は何をお買いになっ・・・」

「いや、アンナたちもお腹が空いてるんじゃないか？すぐに晩飯にしよう」今度は、颯太君がカットに入る。何しろ今日はボクたち3人で、丸1日この一家をオールコートマンツーマンでディフェンスしてきたのだ（最もあの一家の圧倒的な攻撃力の前には、何の意味もなかったけど）、連携はバツチリだ。裕ちゃん言うところの日本観光が、実はオタクロード巡礼の旅で、買ったのが「やおい本」を筆頭とするオタクグッズだとバレた日には、裕ちゃんにどんな目に会わされるかわからない（主に颯太君が）。

「本当に羨のなつてない子ばかりで申し訳ありません、カーリーニンさん」

「いえいえ、お構いなく」

「とは、言うものの予想より早く帰ってきたから、まだ準備もしてないのよね。どうしましょう」

「それなら、ワタシがボルシチ作りマス」アンナちゃんが言った。

「「「「「「えっ」「「「「「「一同が驚いた。って、何でアンナパパや宗介君まで怯えているんだろう？」

「いや、アンナ君。2日続けてボルシチというのは、いかがなものかな」颯太君が言った。

「ワタシのことなら心配しなくても大丈夫です」

「俺たちのことを心配しているんだ、バカもの。あれを2日も続けられてたまるか。人間の免疫力にも限界があるわ」颯太君がよくわからないことを言っただけど、さすがに2日続けて同じ料理というのもどうかと思う。

「そうだよ、アンナちゃん。さすがに同じ料理を2日はキツイよ。じゃ、今日はボクが手料理をパパたちにご馳走してあげるよ」ボクが言った。

「「「「「「えっ」「「「「「「一同が更に驚いた。心なしかさつきより声が大きかったのは、気のせいだろうか？

「……愛子、お前が作るのか」康太が言った。

「うん、せっかく日本に来てくれたんだから、和食でもご馳走してあげようかと思つて」

「愛ちゃんも今日は観光で疲れているだろうから、無理しなくていいよ」陽太君が言った。

「大丈夫だよ。こう見えても水泳鍛えてるから体力はバッチリだよ」

「いや、そつちの体力がバッチリでも、俺の体力が落ちてるんだが」颯太君が何かモゴモゴ言っていたが、よく聞こえなかった。

「何とかしろ、陽向。こんな疲れているところに愛ちゃん料理じゃ、抵抗力どころか確実にとどめを刺されるぞ」

「あたしに何とかしろって言われても。張り切っている時の愛ちゃんは、アンナちゃんレベルに人の話聞かないし……」

「それならワタシも手伝いマス」アンナちゃんが嬉しそうに言った。

「おい、なし崩し的に最悪の展開になってるぞ。どんな料理になるのか検討もつかん」

「……肉じゃが作ろうとしてビーフシチュー作り上げたコンビだからな。鶏の唐揚げ作ろうとして豚の丸焼きくらいは出てくるかも知れん」

その騒ぎを黙って見ていた母親が言った。

「そうね。じゃ、今日はすき焼きにしましょう」と宣言した。

「さすがお袋だな。愛ちゃんたちが手を出しても間違えようがない料理を選んだぞ」

「甘いよ、颯兄。愛ちゃんだったら醤油の代わりにウスターソースくらい使いかねないよ」

「……塩の代わりに砂糖という手もある」

「ネギの代わりに玉ネギ、春菊の代わりにパクチーとか買って来る可塑性もあるな」陽太君が言った。

「よし、陽向。お前は愛ちゃんたちの買い物に付いて行って、とんでもないもの買わないように監視しろ。その間に俺たちはすき焼きに必要な調味料は全て隠す。他に懸案事項はあるか？」

「あ……何話しているんですか？」ボクが尋ねた。

「いつ、いや何でもないよ、愛ちゃん。じゃ、悪いけど買い物に行ってくれるかな。その間に家の準備をしておくから」颯太君が言った。

「はあ、いいですけど……」何となく不愉快な気配を感じる。

「じゃ、愛ちゃんとアンナちゃんと陽向はすき焼きの買い物お願いね」  
裕ちゃんがニツコリ笑って宣言した。

## 第23話

「大丈夫か、陽向」颯太は疲れきった様子の妹に声をかけた。

「つつ、疲れたよ。一人で二人をディフェンスするのはキツかった」陽向が息も絶え絶えに言った。

「…………それは大げさじゃないのか？」康太が言った。

「あのね、康兄。あの二人は「若奥さん」とか「颯太ちゃんの奥さん」とか声をかけられると勧められているものが何であれkg単位で買おうとするんだよ。危うくすき焼きにブロッコリーやワラビやパプリカが入るところだったんだから」

「想像したくもないな」

「商店街の連中もそれを知ってるもんだから、寄ってたかつて何でも売りつけようとするし、それを阻止するのにあたしがどれだけ苦労したか」

「すき焼きとは別物の料理になるところだったわけだな。ともかく陽向よくやった」颯太が陽向を労った。

「甘いよ、兄貴。まだ調理という山場が残っているんだ」陽太が言った。

「すき焼きにそれほど複雑な調理過程はないし、そんなに問題はないだろう」

「……………」

「……………」

「……………」

「お前たちの意見はよくわかった。調理の時にもディフェンスが必要だということだな」颯太が宣言した。

「あの、なんでこの位置取りなんですか？」愛子が言った。

「位置取りとは？」颯太が尋ねた。

「いや、何でボクの両側に陽太君と康太がいて、アンナちゃんの両脇に颯太君と陽向ちゃんがいるのかってことなんですけど」

「うむ、これはダブルチームと言って、陵南の仙道を止めるために湘北の流川と桜木が用いたという由緒正しき戦法だ。それだけ愛ちゃん



とアンナの攻撃力が認められたということだな」

「何言っているのかよくわからないんですけど……」

「まあ、康太や俺だけでは愛ちゃんアンナの攻撃は抑えられないということから採用された作戦ということだ」

「よけい分かりません。一体、ボクやアンナちゃんから何を守ろうつて言うんですか?」

「いや、それは……(大きく言えば俺たちの命で、具体的にはすき焼きの鍋からなんだが)」

「はい、お待たせ」そこへ裕ちゃんが具を載せた大皿を持って現れた。

「あつ、じゃボクが油を……」

「いやいや、愛ちゃん買い物で疲れているだろう。ここは僕が」と陽太君が牛脂を取り上げて鍋に広げていった。

「……」

「じゃ、先にお肉焼いてね」裕ちゃんが言った。

「じゃ、ワタシが焼きマス」

「何を言うんだ、アンナ君。嫁入り前の大事な体だ。ここは陽向に任せよう」

陽向ちゃんが手早く肉を広げて焼いた。いや、陽向ちゃんだって嫁入り前の体なはずなんだけど。

「……」

「もうお肉焼けたみたいね」

「じゃ、味付けはボクが……」

「じゃ、味付けはワタシが……」

ボクとアンナちゃんが、それぞれ醤油と砂糖に手を伸ばしたら、颯太君と康太に横から奪われた。

「ははは、今日は土屋家の味付けを見せてやろう」颯太君が言った。

「……すき焼きは男の料理」康太が偉そうに言った。

「……」

「……」

気のせいだろうか? ねぎらしいの言葉とは裏腹にボクたちの行動が

邪魔されているような気がしてしょうがない。

「なんで料理な得意なボクたちに任せてくれないんですか？」

「(おい、なんかスゴいこと言い出したぞ)」

「(・・・あいつの自信は一体どこから湧いてくるんだ?)」

「まあ、得意は得意なのかも知れないな。人に受け入れられるかは別にして)」

「(愛ちゃん的には美味しくできてるのかもね。ほら、フグは自分の毒じゃ死なないって言うし)」

「ははは、気にするな、愛ちゃん。ほら肉が焼けたから食べなさい」颯太君が肉を取ってボクとアンナちゃんの皿に分けてくれた。

「あの、お父さんたちも良ければ」陽太君が、アンナパパと宗介君の皿に肉を入れた。

「おお、これが有名なすき焼きですか。アンナが料理すると聞いて一時は野宿も覚悟していたのですが」アンナパパどうやらまた焚き火でマシユマロを焼いて食べるつもりだったらしい。

「また、逃げ出すつもりだったのか、オツサン」

「まあ、危うく肉屋で豚ひき肉2kg買わされるところだったんだけどね」

「ひき肉ですき焼きつてのはかなり高難度だな」

「しょうがないよ。アンナちゃんが「颯ちゃんの奥さん」と呼ばれて、反射的に「2kg下サイ」って言ったんだから」

「かなり舞い上がったたよね、アンナちゃん」ボクが思い出し笑いした。

「笑っている場合じゃないよ。愛ちゃんだって「若奥さん」って言われて「そのキャベツ全部」とか言っていたんだから」

「あつ、あれはギャグだよ」

「八百屋のおじさんのガッツポーズが忘れられないよ、あたしは」

「一体、俺達は今晚何を食わされそうになったんだ」颯太君が言った。

「それをディフェンスしながら、ちゃんとした買い物をしてきたんだから、兄たちはあたしをもっと褒めてもいいと思うんだけどなあ」

「まあ、とりあえず好き焼きになったんだから、陽向ちゃんご苦労様」

裕ちゃんが褒めてくれた。

一方、颯太と陽向、陽太と康太のダブルチームは愛子やアンナが「味が薄い」だの「甘さがたりないだの」つぶやくたびに先んじて調味料を奪い、一度も主導権を愛子とアンナに渡すことなく食事を終えた。

## 第24話

すき焼きは本当に美味しかったけど、ボクの胸に何か釈然としないものが残るのはなぜだろう？

「……」アンナちゃんが黙りこんですき焼きの鍋を見つめている。「アンナちゃん、どうしたの。すき焼きは口に合わなかったのかな？」とボクが尋ねた。

「イエ、とつても美味しかったデス。ロシア風すき焼きにするにはどうすればいいか考えていまシタ」アンナちゃんが答えた。

「お前たちの○○風というのはイヤな予感しかしないんだが、何を考えているか言ってみろ」颯太君が言った。

「ハイ、具体的にはココアパウダーと味噌をどのタイミングで入れればいいのかという……」

「おい、親父。ロシア料理ってのは、何にでもココアパウダーと味噌が入ってるのか？」颯太君がアンナパパに怒鳴った。

「いや、ロシア料理というよりは私の妻、つまりアンナの母の味だな」アンナパパが答えた。

「それを再現してアンナに教え込んだのは、あんただろうが」  
「私が教えたのはボルシチだけだ」

「それを喰うのを嫌がって昨日野宿しやがったクセに何を威張ってやる。はた迷惑なもの再現しやがって」

ボクたちが大騒ぎしている間に、宗介君が静かに立ち上がりそとリビングから出て行くとした。

「ソースケ、どこへ行きマスカ？」もちろんフルスイングのブラコンであるアンナちゃんがそんな宗介君の行動を見逃す訳がない。

「あつ、いや。ご飯も食べたし先に風呂に入ろうかと思つて」

「ソースケは甘えん坊デスネ。そんなに早く姉さんとお風呂に入りたいのデスカ」

「いや、一人で入りたいから抜けだそうとしたのだが」宗介君が必死に言い訳をする。

「照れなくてもいいデス。シスコンは個性だと偉い人も言ってます」

「姉ちゃん、もう高校生なんだからいいかげんに人の話を聞くという技能を習得してくれ」

「じゃ、一緒に入りましょうか」

「言い方が悪かった。頼むから人の言うことを徹底的に自分の都合のいいように解釈する機能を脳から外してくれ」

「本当にソースケはお姉ちゃんのことが好きなん德斯ネ」アンナちゃんはおご機嫌である。

「ヒナ姉、助けてくれ」アンナちゃんに言っても埒があかないと思ったのか、宗介君は陽向ちゃんに助けを求めた。

「なに？あたしと一緒に風呂に入りたいの？別にいいけど」

「お前も人の話を聞け。なんで他人と2人で一緒に風呂に入らにやならんのだ」

「2人じゃないよ。ケンも一緒だし」

「ワン！」

「立ち上がるんじゃない、バカ犬」宗介君が怒鳴った。

「まあ、舎弟の背中を流してやるのも、姉貴分の仕事だよね」

「おい、ソータ。あんたの妹に何とか言ってくれ」

「うん？と言われても陽向はもうお前の管轄下だしなあ」颯太君がお茶を啜りながら人事のように言った。

「あんたが妹を俺に厄介払いしたただけだろうが。高校生が他人と一緒に風呂に入ることの問題視しろ」

「ははは、何だそんなことを心配しているのか。大丈夫、陽向は幼児体型だからヌリカベと一緒に入っているとさえ思えば恥ずかしくも……」

グワ」颯太君の顔面に分厚い雑誌が命中した。

「あたしは本当は中学生なんだから、まだ未来の可能性があるんだからね」陽向ちゃんが怒鳴った。

「……そうはいうが陽向、胸の大ききつてのは、ほぼ遺伝で決まるらしいぞ。お袋を見ている限りはあまり過大な期待は……」颯太君の顔を掠めて菜箸が後ろの壁に突き刺さった。

「あら、おごめんなさい。手が滑っちゃったわ。何か遺伝がどうたらとか……」裕ちゃんが微笑みながら言ったが、目が全然笑ってな

いのが怖い。

「いやだなあ、ママン。そのお歳でスーパーモデルのようなスレンダーな体型を維持しているのを褒めただけじゃないですか」

「(よくもまあ、瞬間的にあれだけの口から出まかせが出るもんだね)」  
ボクは感心して康太に囁いた。

「(・・・子供の頃からお仕置きされ続けているからな。言い訳の才能だけが伸びたらあなる。四馬鹿全員そうだ)」

「(伸びた才能がケンカと言い訳のスキルって。普通に勉強してりやいい大学行けたんじゃないの?)」

「(・・・進化論で言うところの環境適応の好例だな)」

「(随分壮大に話が広がったけど、セコイ環境適応だね)」

「じゃ、ヒナタ。3人でお風呂にはいりまショウ」アンナちゃんが名案とばかりに言った。

「ああ、それはいい案だね。姉弟でお風呂で親睦を暖めようか」陽向ちゃんも同意した。

「バカいうな。俺はいやだぞ。一人で入るんだ」宗介君が怒鳴った。

もちろんアンナちゃんと陽向ちゃんがそんな叫びに耳を貸すはずもなく、宗介君の首根っこを2人でひっ捕まえてお風呂に引きずって行くのを、ボクたちは見送るだけだった。

## 第25話

お風呂一つ入るのにも大騒ぎしないと気が済まないのかと呆れつつも、久しぶりに会ったんだから嬉しいのだろうとボクは思った。

問題は、アンナちゃんが超絶ブラコンぶりを発現させてしまった状態で宗介君を大人しくロシアに帰してくれるのだろうかという心配があることだ。アンナパパはアウト・オブ・眼中のようだからどうでもいいとしても、宗介君を文月学園に転校させると言い出しかねない。

スペツナズという学校は入学を認めてくれたかも知れないけど、日本の教育委員会は10歳児を高校に入学させてくれるほど甘くはないだろう。いや、陽向ちゃんが戸籍まで偽造して無理やり転校してきただことは考えると、教育委員会どころか日本の法制は意外と甘いのかも知れない。

ボクは大きな背中を小さくしながら空港の廊下をトボトボと一人で去っていくアンナパパの姿を想像して思わず涙ぐんだ。

「……何でお前はいきなり涙ぐんでいるのだ？」康太が尋ねた。「いつ、いや何でもなしよ。父親っていろいろと辛いんだなっと思っで」ボクは慌ててごまかした。

「愛ちゃんはいきなり何を言い出したんだ？」颯太君が言った。「よくわからないが、結構失礼なこと考えているような気がするんだけど……」陽太君までそんなことを言う。

「陽太ちゃんまでそんなことを……とにかくみんなアンナパパには優しくしてあげようよ」ボクたちができることはそれくらいしか無いのだから。

「おい、すき焼き喰った感想が「アンナの親父に優しくしよう」ってのは、どういう訳だ？」

「……あいつの発想を常人がトレースするのは不可能」

「(生卵にでも当たったのかな)」

「(生卵に当たって頭に影響が出るのか?)」

「……いや、だから考えるだけ無駄だと言っている。どうせ大

したことは考えてはいない」

「(どれだけ発想が飛躍すれば、あの結論が出てくるんだろうな?)」

「そこ、ゴチャゴチャうるさいよ。ボクが言ったことちゃんと分かったの?」

「いや、分からないから揉めているんだよ、愛ちゃん」陽太君が言った。

「なんでこんな簡単なことが分からないのかなあ。人情つてものがないんだよね、この兄弟は。大体いつもいつも……」

「(おい、なんか言い始めたぞ)」

「(……既に最初の発言の趣旨からズレているんだが)」

「(俺たちへの批判に力点を置くことにしてみたんだな)」

「康太なんて彼女のボクにプレゼントの一つもくれないし、これじゃいつまでたつても理想のカップルには……」

「(どうでもいいが、お前たちの痴話ゲンカに巻き込まれているだけじゃないのか、これは?)」

「(……俺を責められても困る。というかまだあの設定を諦めないのかあいつは)」

「(なんですき焼きの感想から痴話ゲンカに話が発展するんだ?)」

三人はしばらくの間、ボクの説教を静かに聞いていた。

「そうは言うがな、愛ちゃん」ボクの気が済んだところで颯太君が言った。

「これだけ説明してあげてもまだ理解できないの?」

「いや、愛ちゃんがクリスマスデートはどこでしたいとか康太のバースデーは手料理でもてなす計画を持っているというのは、よく理解できました。なんで俺や陽太までそれを知る必要があるのかはともかくとして」

「じゃ、何が問題なのさ」

「いや、そもそも最初から何が問題なのかが分からないのは既にもうどうでもいい事なんだが、俺がああ親父に優しくしてやらなきゃならんのか?」

「最初からそう言ってるじゃない」

「……そう言ってるのは最初だけだ」



「うん、ほとんど愛ちゃんの「理想のカップル計画」を聞かされていただけだったような気がするな」

「いや、お前たちは少し黙ってる。愛ちゃん、俺たちは今日1日ずっと一緒にあの連中と行動してたよな」

「そうだね。いろいろと普通じゃ体験できないというか、体験したくもなかったことを体験させてもらったね」

「それじゃ、今日1日で俺がああ親父に何回頭に銃を突きつけられたか知ってるよな」

「いや、途中から見慣れちゃって注目もしていなかったけど・・・」

「24回だ、24回。あのロシア人どもは、煙草吸うよりも気軽に人の頭を銃を突きつけてやがるんだ。そんなトンデモ親父に優しくしろと？」

「・・・颯太君」ボクは優しく声をかけた。

「何でそんな可哀想な子を見るような目で俺を見てるんだ？」

「想像してみようよ。将来、アンナちゃんとの間に女の子が生まれるんだよ」

「・・・そんなとこまで決定事項なのか？」

「康太、うるさい。今いいところなんだから、黙ってる。想像した？」

「いや、想像もしたくないんだが」

「その娘がアンナちゃんにそっくりな美人に育って、異国の地に留学したしたら父親としてどう思う」

「アンナにそっくりな女の子が娘で、外国に留学？」颯太君がつぶやいた。

「そう、性格もアンナちゃんにそっくりで素直ないい子なの」

「そこまでそっくりなのか。俺の遺伝子が欠片も入ってないような気がするんだが」

「娘っていう設定だからね。美人でスタイルがよくて素直ないい娘が外国に留学しているんだよ。しかも、そこで彼氏見つけたから結婚するって言い出したとしたら、颯太君なら父親としてどうするの？」

「アンナそっくりな娘が、外国留学してそこで結婚すると言出す・・・」颯太君が遠くを見るような目で何かを想像しているよ

うだ。

「そう、もうアンナちゃんがもう一人いるようなそっくりな娘。それが外国人と結婚すると言いつ出した時の父親としての気持ちを考えてみてよ」

「そうだったら、俺ならその国に乗り込んで……」

「ウンウン、そうだね。それでどうするの……」

「その男の首根っこ押さえつけて……」

「いいよ、いいよ。本当の父親の気持ちに近づいているよ。それで、それで……」

「有無を言わさず婚姻届にサインさせて、俺が直接役所に提出してくるな」

「帰国させない気満々なんだね」

## 第26話

「そうは言うがな、愛ちゃん」颯太君が諭すように言った。

「家にアンナが二人も居てみる。俺の精神が持たん」

「どうして？あんな美人でスタイルがいい女の子が二人もいるんだよ」

「二人でも大概持て余しているのに、二人になったら俺の精神が加速的に崩壊する。多分、家に帰らなくなるぞ」

「帰宅拒否症のサラリーマンみたいだね。家に帰らずにどうするの？」

「どうするって、俺はバンドマンだぞ。練習するに決まっているじゃないか」

「歌なんてどこでも歌えるじゃん」

「もちろんあいつら四人も呼び出すに決まっているだろう」颯太がキツパリと言い切った。

「1日に15時間も練習すりゃ、移動時間が2時間、風呂で1時間として家にいるのは、寝る時の6時間だけで済むな」

「随分とリアルな数字出してきたね。食事時間が全然ないんだけど」

「コンビニの握り飯だったら5分で食える」

「それにあの四馬鹿も付き合わせるんですか？」

「ああ、俺達は一心同体。喜びも悲しみも幾年月と誓い合った仲間だからな」

「最大限に好意的な解釈をしても、単に巻き添えくっっているだけにか思えないんですけど」

「じゃ、娘が生まれたら、そのままAtsushiの嫁にするってのはどうかかな」

「颯太君、日本には法律っていうのがあっては知ってます？」

「中学時代に四馬鹿と暴れ回っていたお陰で少年法と刑法だけは詳しく教わったが……」

「いや、それだけじゃなくて日本には他にも法律がいっぱいあるんですよ。で、女の子は親の許可があれば16歳から結婚できるんです」

「父親の俺が積極的に許すと言っているんだから、0歳からでもいいじゃないか」

「すいません、ボクが悪かったです。分かるように言い直しますね。親の許可があっても16歳までは結婚できないんです」

「はっはっは、やっぱり愛ちゃんは子供だなあ。世の中には「内縁の妻」というのがあるんだよ」

「どこの世界にオムツも取れない目も開いてない内縁の妻がいるんですか」

「だが、本人たちが愛しあっている以上、父親として止めるわけにもいかんだろう」

「止めるどころか積極的に押し付けているんですけど。じゃ女の子じゃなくて、男の娘《こ》。だったらどうします?」

「男だったら、俺のようになるようにビシビシと鍛えるぞ。特に人の話を聞くという能力を最大限に伸ばすように……」

「いや、顔も声も性格もどこから見てもアンナちゃん。だけど男の子。それを「男の娘」と言うんです」

「それはYou……に押し付けるわけにもいかんか」

「ピヨピヨピヨ……」その時、愛子の携帯の着信音が鳴った。「誰だろ?……ああ、優子?どうしたのいきなり。えっ?何か呼ばれた気がしたって」

「友達かい、愛ちゃん?」

「同じクラスの木下優子って子でBLとかシヨタとか言う漫画が好きらしいんですけど……いや、別に変な話なんてしてないよ。お兄さんの将来の子供の話で盛り上がっていただけで」

「俺には全く覚えがないんだが、盛り上がっていたのか、そんな話?」

「(……いつもの暴走)」

「(愛ちゃん的には、盛り上がっていたんじゃないのかな?)」

「(しかし、愛ちゃんの中ではいつの間にか俺とアンナの結婚は熱力学第一法則のように不変なものになっていて、今は子供の話か。半年たった俺は孫の名前考えなきゃならなくなるんじゃないか?)」

「……すでに愛子とアンナの頭の中のレールには乗っていると思う)」

「すいません、で何の話でしたっけ？」電話が終わった愛子が尋ねた。「いや、俺にももう何の話をしているのかわからなくなっているんだが」

「あ、子供の話でしたね。とにかくアンナちゃんとの間に子供ができるんですから、もう少し父親としての自覚を持つてください」颯太の顔をビシッと指さして、愛子が断言した。

「何もしていないのにそんな自覚持てるか」颯太がたまりかねたように言った。

「……父親どころか彼氏としての自覚もない」

「なんだかアンナちゃんとの結婚から逃げ場がないようだな、いろいろと」

「まだ、そんなことを言っているんですか。アンナちゃんも裕ちゃんも圭君もアンナパパもみんなその気なんですよ。どこに問題があるっていうんですか？」

「俺の意見はどうなっているんだ？」

「まあ、それは些細な問題として……」

「一番の当事者の意見を些細な問題で片付けんてくれ。一番大事だぞ」

「颯太君がアンナちゃんと裕ちゃんを説得できるんなら聞いてあげてもいいですけど」愛子がシレっとして言った。

「……いつ、いやそれはだな」それが不可能なことは、颯太が誰よりも知っていただけに口をつぐむしかなかった。

「父親っていうのは辛いんですよ色々」と愛子が諭すように優しく言った。

「あいつの夫というだけで、大概罰ゲームなのにその上更に辛いことなんて想像もできんのだが」

「とにかく、みんなでアンナパパに優しくしてあげればいいんです」愛子が断言した。

「具体的に何するんだい、愛ちゃん」陽太が尋ねた。

「そりやあもう……いろいろと優しくですよ」愛子が口ごもりながら答えた。

「……要するに何も考えてないんじゃないか、お前は」康太が呆れたように言い放った。

## 第27話

ボクたちがアンナパパに優しくしてあげようとしてそっちの方を見ると、アンナパパと裕ちゃんが向い合ってお茶をすすりながら談笑していた。

「……ホツホツホ、というわけでお嬢様は私どもに任せて、はやくロシアに帰られたらどうでしょうか」

「……(ピキッ) いやいやいや、アンナはロシアの広大な土地で育った娘です。このような小さなお宅ではお邪魔でしょう」

「……(ピキッピキッ) いえいえ、本当に気配りの効く娘さんで、とても大雑把なロシア人とは思えないほどですわ……」

「……(ピキッピキッピキッ) いえいえ、もう大雑把な娘で、せこましい日本人には合わないんじゃないかと心配してます」

「……(ピキッピキッピキッピキッ)」

「おい、二人とも顔が笑っている割には異様な緊迫感が漂っているんだが、一体何が始まったんだ？」 颯太君が尋ねた。

「達人同士の組手争いと言ったところじゃないかな？」 ボクが答えた。「なんか、最初に会った時もこんなことやっていたよな」 陽太君が思い出したように言った。

「…… 本当は相性が最悪なのは」 康太が言った。

「つかみ合いにならないうちにレフリーストップした方がいいんじゃないですかね」 ボクが提案した。

「「誰が？」」 三馬鹿兄弟が口を揃えて言った。本当にこんな時だけ息がピッタリ合う兄弟だ。

「誰って、そりゃ第三者が入る訳にはいかないと思いますから、ご家族の方が」

「ふむ、よし陽太行ってこい」

「いやいや」

「康太の方がいいのか？」

「とんでもない。もっとピツタリの人材がいるでしょう」

「…… アンナはまだ風呂だぞ」

「兄貴、いい加減に現実逃避は止めた方がいいと思うぞ」

「……さつさと認めるべき」

「何で俺なんだ」

「何でって、実母と義理の父が言い争っているんだから、関係者として止められるのは颯太君しかいないでしょう」ボクが最後通牒を突きつけた。

「あんなトンデモ親父を義理の父にした覚えはねえ」颯太君が叫んだ。「いや、「覚えはない」とここで叫ばれても、あの人がアンナちゃんのパパである事実は変えられないわけで……」

「ちよつと待て、愛ちゃん。そこがそもそもおかしくないか？あの親父がアンナのパパだと、なぜ俺の義理の父親になるのだ」

「まだ、そんな往生際の悪いこと言っているんですか？颯太君以外の誰も反対していないから問題ないでしょう」不思議な事を言う颯太君だ。

「本人が反対しているのが一番の大問題だろう」颯太君が更に叫んだ。「いいからトットと止めてこないとバトルが始まっちゃいますよ」ボクは颯太君の尻を押して裕ちゃんとアンナパパの方へ追いやった。

「え、お話が弾んでいるところ申し訳ありませんが……」颯太君が2人に恐る恐る話かける。

「何、颯太。今、カリーニンさんとお話が弾んでいたところなのにお行儀の悪い」

「それ以上弾ますなという愛ちゃんの命令なんだよ」

「おお、ソータ。ちようど君に話があったんだ。2人きりになれるところに行こうか」

「いや、お父様と2人だけというとは、とてもデンジャラスな予感が……」

「ははは、遠慮するな……」アンナパパはそういうと颯太君の首根っこを掴んで玄関へと引きずって行った。人の話を聞かないところはアンナちゃんにそっくりだ。

「外連れていかれちゃいましたね」

「何するつもりなんだろう？」



「……リンチじゃないか？」後に残されたボクたちは好き勝手言っていた。

「心配ね。愛ちゃん、ちよつと様子見てきてくれる？」裕ちゃんが言った。

「わかりました、ケンカしないように見張つてきます」ボクが速攻で答えた。

「ううん、それはどうでもいいんだけど、花壇のチューリップの芽が出てきたばかりなので、踏み潰さないように」

「心配はそこなんですか？」

「骨は折れてもくつつくけど、踏み潰された芽は戻らないのよ」

「そういうワイルドな教育方針から五馬鹿が生まれたんですね」

「愛ちゃん、俺も行こう」陽太君が言った。

「……何をするのか興味がある」康太も言った。

「ワン」一緒にお風呂に入れてもらえなかったケンも嬉しそうに尻尾を振りながら吠えた。

ボクたちは玄関に向かい、ドアをそーつと開けてごんずい玉のように固まってドアから首を伸ばして庭を見た。

月明かりに照らされた庭にアンナ。パパと颯太君が対峙するように立ち尽くしているのが見えた。

## 最終話

月明かりの庭でしばらく二人は睨み合っていた。先に声をあげたのは颯太君だった。

「で、何の話ですか親……おじさん」

「何を緊張しているのかね、ソータ」アンナパパが不思議そうに言った。

「1日24回も人の頭に銃を突きつけるような男と二人きりになつたら緊張もするわ」颯太君が怒鳴った。

「日本人は繊細なのだな」

「日本人とかロシア人とかの問題じゃねえ。あんたの部隊ではいつもそんなことやってるのか」

「ふむ、私の学校では食前食後ことある毎に生徒たちは銃を突きつけて合ってるな」

「まだ引つ張るつもりかその設定、一体どんな学校だよ。つーか、事故が起きたらどうするつもりだ」

「ハッハッハ、心配するな、ソータ。みんな大人だ。理性的だから引き金は引かんよ」

「銃を突きつけ合っている段階で、もう理性なんて欠片もないんだよ」文化の違いだな」アンナパパが涼しい顔で言った。

「それはともかく君に聞きたいことがある」アンナパパが声を落とすと言った。

「アニメのことはあまり知りませんよ」颯太君が答えた。

「いや、そうじゃなくてアンナのことだ。君は一体アンナをどう思っているのかね」

「……ちなみに何とも思っていないと答えたらどうなるんですか?」娘の純情を弄んだ罪を償ってもらおう」

「……結婚したいと言えはどうなります?」

「大切な娘を奪う罪を償ってもらおう」

「……まだ、答えが出せないと言ったら」

「優柔不断な男をはいらんと罪を償ってもらおう」

「どう答えても死亡フラッグじゃねえか」

「ハツハツハ、冗談だ……たぶん」

「ハツキリ否定しろよ」

「まあ、冗談は抜きにして君の本当の気持ちが見たいのだ」

「……」 颯太君が黙り込んだ。

「あれは亡き妻に似て不器用な娘だ。人に合わせてうまくやっていくということができない子だった。私も仕事で留守がちだったこともあるが、いつも一人でいるような子だったのだ」

「……」

「それが日本に来てからは、人が変わったように明るくなった。たぶんこの家や友達、とりわけ君のお陰だと思っている。私へのメールも君の話ばかりだ」

「……はあ」

「そのアンナが結婚したいと言い出した。まあまだ17歳だ、結婚は当分先だろうが、そんな心境になったというのが父親としては驚きでもあり、嬉しくもあった」

「……そうですか」

「君はアンナのことを本当はどう思っているのかね？」

「……」

「いや、アンナの気持ちを無理に押し付ける気はない。一度でもそんな気になれたのならば将来は誰かと結婚してくれるだろう」

「……アンナは」

「ふむ」

「(……タイム、タイム)」 緊張感に耐えられずボクがつぶやいた。

「(どうした愛ちゃん)」 陽太君が言った。

「(どうしたもこうしたも、このSSでこんな緊張感のある場面入れちゃっていいの?)」

「(……お前は何を言っているのだ?)」

「(だって、半ページもギャグが入ってないんだよ。これじゃ「土屋家の日常」じゃない……)」

「(言っていることがよく分からないけど、続きが始まったみたいだ」

よ)」

「アンナはいい子だと思います、でも……」

「……でも、何だね」

「俺が自分に自信がないんです。本当にアンナを幸せにしてやれるのか」

「ふむ」

「25歳にもなって未だにバンドなんかやっている男ですから、将来アンナと家庭を持ってやっていけるのか、自信がないです」

「よく聞け、ソータ。25歳やそこらで将来の自信なんてある奴はいない。「やれる」かじゃなくて「やりたいか」が大事なのだ」

「ソータ」その時、ボクたちを突き飛ばして、バスタオルにわがままバディを包んだアンナちゃんが玄関を飛び出し、颯太君に抱きついた。

「ワタシ、ウレシイデス」Gカップの胸を惜しげもなく颯太君の腕に押し付けている。

横を見ると玄関の床の上に康太がうつ伏せになって血の海に沈んでいた。

「ちよつと目を離すと一体何があったのさ」陽向ちゃんがパジャマを着て髪を拭きながらやってきた。

「アンナちゃんは半裸で飛び出すし、康兄は血の海に沈んでいるし……」

「ワンワンワン」ケンが陽向ちゃんに吠えた。

「え、それで今アンナちゃんと颯兄とアンナパパが対峙しているわけだね」

「ちよつと待て陽向。ケンは3回しか吠えてないのに、そこまで詳細な事情が説明できたのか?」

「それよりアンナちゃんたちはどうなったの」陽向ちゃんがドアから顔をだす。

うーん、アンナちゃんたちも気になるけど、彼女としては康太も気になるんだよね。一応自分の鼻血で溺れないように仰向けにしておいてあげよう。

「ちよつと待て、お前その格好は何だ」

「風呂あがりデスネ。それよりソータの本当の気持ちがあつと聞けて嬉しいデス」アンナちゃんが胸をさらにグリグリと押し付けた。

「……青年」額に血管を浮かべたアンナパパが低い声で言った。「遺言があれば聞いておこう」

「アンナ、離れる。一体何しに来た」

「パパからソータを守りにきまシタ」

「お前が来たから危険度がMAXをオーバーしたんだ、バカ者」

「青年、私は気が長い方だ。3秒やる。お前の罪を数えろ」アンナパパが銃を颯太君に向けて言った。

「アンナ、離れる。ドワツ」アンナちゃんに更に抱きつかれて颯太君が重心を崩した。

「1……ドギューン」颯太君の頭があつたはずの場所を銃弾が通過して行つた。

「親父、3秒待つんじやなかったのか」颯太君が叫んだ。

「男は1だけ覚えていれば生きていけるのだ」

「どこの警察庁長官だ、あんたは」

「ソータ、ワタシ嬉しいデス」

「それは分かつたから、俺の上からどけ……ていうかバスタオルが、バスタオルがあゝ」颯太君の叫び声が庭中に響いた。

ハラリ。アンナちゃんのバスタオルがはだけた。

「動きが止まつたね……」

「止まつたな」

「止まつちやつたね」

「ワン」

「……(血だまりの中)」

翌日、アンナちゃんの宇宙CCCでボコボコにされたアンナパパと憔悴しきつた宗介君(お風呂場で何があつたんだろう?)の二人は口シアへと帰って行つた。

「ソータは?」アンナパパが言った。

「すみません。何があつたのか昨夜から40度の熱を出しちやつて」裕ちゃんが言った。

「いえ、構いません。今度はキッチンと話しをつけるとお伝え下さい」  
「何のお話か知りませんが、何でしたらロシアの方に派遣しますわ」  
裕ちゃんが言った。

こうしてアンナパパと宗介君はボクたちを引っかき回すだけ引っかき回してロシアへ帰国した。

「ねえ、康太？」ボクは康太に尋ねた。

「……なんだ」

「結局、あの2人何しにきたの」

「」「」「そういえばそうだ」「」「」

結局、アンナパパたちが何のために日本に来たのか誰も知らないの  
であった。

## 16. 刺激とマンネリとランダムデート 第1話

日曜日の午後いつものまったりとした時間を土屋家ご一同様はケーキと紅茶で過ごしていた。

「刺激なんだよ……」突然、少女が立ち上がって拳を握りしめながら叫んだ。

「……」一同があっけに取られた。

「（また愛ちゃんは唐突に何を主張しだしたんだ？）」颯太がケーキを頬張りながら言った。

「（相変わらず言っていることがよく理解できないな）」陽太が紅茶を啜りながら言った。

「（……俺に振られても困るのだが）」康太が困惑しながら言った。

「……あれ？反応が薄いね」少女が本意そうに周囲を見渡しながらか言った。

「……反応が薄いも何も、お前の話はいつもホップ・ステップを省略してジャンプの着地部分だけ話すから誰もついてこれんだ」

「あのね、康太」少女が憐れむような目で少年を見ながらか言った。

「……その可哀想な子を見るような目はやめろ」

「青春真っ盛りの男女5人と青春が終わった1人のカップル3組が毎週毎週日曜の午後にお茶会をしているなんて、これじゃご町内の老人会の寄り合いだよ」

「青春が終わった一人とはもしかして俺のことか？」颯太が陽太に尋ねた。

「年齢はともかくとして、アンナちゃんに捕まった時点で兄貴の青春は終わっているだろう」陽太が答えた。

「失敬な。俺はまだ青春とやらを1秒たりとも使った覚えはないぞ」颯太が憤慨して言った。

「それはそれで問題がある気がするけど、とりあえずお袋とアンナちゃんを説得してから青春とやらを謳歌してくれ」陽太が面倒くさそ

うに言った。

「あの二人説得するくらいなら、サルに数学を教える方が早いわ」

「……その前に兄貴が数学勉強しないと」康太が言った。

「バカ者。数学は俺の得意科目だ。いつも3だったぞ」

「それは得意科目って言っているレベルなのかなあ？」陽向が容赦なく突っ込んだ。

「その他の科目は、ほとんど1と2で……いや、俺の成績の話はどうでもいいんだ」

「あの、みんなボクの話聞いてくれます？」少女が尋ねた。

「アイコ、刺激が欲しいならワタシの100万Vのスタンガンを貸してあげマス」アンナが言った。

「何でそんな物騒なもの持ってんだ、お前は」颯太が尋ねた。

「日本に来る時に護身用にと貰いまシタ」

「誰がプレゼントしたかが容易にわかるな」

「いや、アンナちゃん。気持ちは嬉しいけどボクが言っている刺激ってのは、そういう熊も倒せるような種類のものじゃないんだよね」

「……つまり、何が言いたいのだお前は」

「つまりボクが言っているのは、これだけ付き合いが長いとデートもマンネリ化して、カップルの倦怠や奥様のイライラ、ひいては離婚の危機を招くと言うことなの」

「結婚もしてないのに、奥様のイライラの心配までせにやならんのか？」颯太がツブやいた。

「デートと言えば、ランチでシャイゼリア、映画と言えば大嫌いなホラーばかり」少女が拳に力を込めてワナワナと震わせた。

「……いや、それはお前のリサーチ不足というか、余計なことしたからというか不運が重なったせいではないのか？」

「シャラップ、康太。あの映画館はボクにホラーしか観せないと決めていると思えないよ」

「……そこまで嫌なら映画を観なければいいだけの話ではないのか？」

「映画はデートの定番でしょう。外せないよ」



「デートのマンネリ化を訴えているのに定番って」陽太が言った。

「……どうも、お前のいうことは一々矛盾しているのだが」

「あの愛ちゃん、力説しているところ悪いんだけど私達この間恋愛映画観てきたんだけど」由美子が済まなそうに言った。

「そういう個人の事情はいいんです」

「そうですね、アイコ。ワタシとソータは毎週、バラエティに富んだデートをしています」アンナも同調した。

「まさかと思うが、お前が言っているデートというのは毎週俺を荷物持ちとして引きずっていく八百屋セールとか肉屋バーゲンとか魚屋売り尽くし祭りのことを言っているのか？」颯太がツツコンだ。

「毎週、楽しみデス」

「お前は生きていて楽しそうだな」颯太がしみじみと言った。

「だくかくら、そういう個人的事情は置いておいて、ボクが言っているのは土屋家ファミリーとしてのカップルの危機を訴えているんです」少女が更に力説した。

「(何だか話が広がっているが、要するにお前たちのデートに変化が欲しいと言っているだけじゃないのか、康太?)」

「(どう好意的に解釈しても愛ちゃんと康太の個人的事情だよな)」

「(……そうはいうが、高校生がそう変わったことできるわけない)」

「そのの三人、ゴチャゴチャ話をしない」

「まあ、愛ちゃんの言うことは、何となく分かったとして俺たちにどうしろと言うのだ？」颯太が尋ねた。

「ふふふ、よく聞いてくれました」

「いや、聞かないときっぱり理解できないんだけど」

「つまりですね。このマンネリ化した3組のカップルに刺激を与えようということなんです」

「(別にアンナも由美ちゃんも不満を持つてるわけじゃないんだろう?)」

「(結局、俺達を巻き込みたいんじゃないのか。自分たちで何とかしろ康太)」

「（・・・あいつが何考えているのか理解できないのに、満足何かさせられるわけがない）」

「だからゴチャゴチャと煩いってば、そこの三兄弟」

「ああ、すまん。で、結局愛ちゃんはどうしたいんだ？」

「それはですね。カップルを取り替えてデートするんです」少女がどうだとはかりに胸を張った。

「「「カップルを取り替えるく？」」「」」

「そう、新しいカップルでデートすることによって他の人がどんなデートをしているのかを学び、自分たちのデートに活かす。マンネリ防止の特効薬です」少女は自信満々に宣言した。

## 第2話

「でも愛ちゃん。颯兄とアンナちゃん、陽兄と由美ちゃん、康兄と愛ちゃんはカップルだけど、マコちゃんはあたしとユカリんだよ。ランダムにしたらトリプルデートになっちゃうんだけど？」陽向が言った。「いつ、いや陽向ちゃん達には刺激は必要ないんじゃないかな」愛子が額に汗を浮かべながら言った。

「え、あたしだけ仲間外れなの」

一見非の打ち所のない優等生に見えるが、隠れデュープオタクの様子がチラホラ垣間見られるユカリんとナチュラル・ボーン・爆弾娘の陽向の相手をしているだけで、マコちんの精神は一杯一杯でこれ以上の刺激を与えた日にやあ登校拒否になってしまう恐れがある……とは勿論言えない愛子であった。

「だって、陽向ちゃんが参加したら兄弟とデートだよ。それって嬉しいの？」

「それもそうだね」

我ながらうまい言い訳を口に出せたというか、この家族と付き合い合うようになってからその方面のスキルが飛躍的に伸びた気がするのは気のせいではないだろう。

「じゃ代わりに、あたしがクジを作ってあげるよ」陽向が他愛もなく説得されて、ご機嫌でクジを作り出した。

「(何でランダムデートをすることが既成事実になっているんだ?)」  
颯太が言った。

「(愛ちゃんが決めたことを誰が止められるんだよ)」陽太が言った。

「(……あいつが思いついた10秒後にやることに決まってしまうてるんだが)」康太も言った。

「愛ちゃん、できたよ」陽向が嬉しそうに叫んだ。

「ありがとう陽向ちゃん。じゃ、男性陣にクジを引かせてあげる」愛子が言った。

「……何でこんなことで恩着せようとしているのだ、お前は」康太が答えた。

「うるさいなあ、康太は。デートの主導権を男性に取らせてあげようというボクの好意じゃないか。とつとと引きなよ」

「クジ引くのが主導権を取ったことになるのか？」

「あんまり深く考えない方がいいと思うぞ、兄貴。とつとと引こう」

男性陣がそれぞれクジを引いた。

「俺は、由美ちゃんとデートか」颯太が言った。

「うふふ、お願いします。お兄さん」由美子が嬉しそうに言った。

「俺の相手は、愛ちゃんだな」陽太が言った。

「ふふふ、デートの真髓を教えてあげるよ」愛子が不敵に笑った。

「……男性陣にデートの主導権を取らせるのではなかったのか？」

「本当に細かいね、康太は。じゃ康太の相手はアンナちゃんだね」愛子が言った。

「コータ、義姉としてワタシがデートを楽しませてあげマス」アンナが言った。どうやら宗介が来日した時に吹き荒れた姉貴風が未だ吹きやんでいないようだ。

「ちよつと待て、アンナ。なんで康太がお前の義弟になるんだ？」颯太が言った。

「だってコータはソータの弟デス」

「まあ、そうだな」

「だから義理の弟の姉は義姉デス。ソータはもつと日本語を勉強してください」

「なんでロシア人に日本語を勉強しろと説教されなきゃならんのだ？」

俺が言っているのは、もつと根本的なことなんだが」

「あの、颯太君。そこツッコみ出すと一週間かけても終わらないと思うので、それくらいで」愛子が颯太に言った。

「それもそうだな」颯太がブツブツ言いながら黙った。

「ということ、ランダムデートは「颯太君・由美ちゃんカップル」、「陽太君・ボクカップル」、「康太とアンナちゃんカップル」に無事決まりました」愛子が誇らしげに宣言した。

「まあ、無難と言えば無難な組み合わせだな」颯太が言った。

「しかし、どのカップルにも共通点というのが見いだせない気がする

んだが」陽太が言った。

「……誰となつても同じだ」康太も言った。

「三人ともその消極的な姿勢は何なの？新鮮なカップルだからこそ新しい刺激が生まれ、引いては奥様のイライラも……」

「そのフリーズ、気に入っているんだね」陽向がツッコんだ。

「そうそう。このデートで新しいことを学んで、それぞれの本当のデートに活かすように」愛子が高らかに宣言した。

「二へーい」三兄弟が力なく返事をした。

「じゃ、決行は来週の日曜日ね。細かいことはそれぞれのカップルで決めてください」

「ねえねえ、愛ちゃん。あたしもデートしてもいいんでしょ」陽向が尋ねた。

「陽向ちゃんがデートつて、あの二人と？」

「そうだよ。あたし達は一心同体だからね」陽向がためらいなく答えた。

「いや、別に構わないけど二人の都合はいいの？」

「うん、これから宣言する」

「確認じゃなくて宣言なんだね」

陽向が携帯を取り出すと電話をかけた。

「……あ、もしもユカリん？来週の日曜日にデートすることになったから、いつものところに10時集合ね」

「あんた唐突になにを……」陽向が電話を切った。

「よし、次はマコちんだ」また電話をかけた。

「……あ、マコちん。来週の日曜日にいつもの場所に10時ね」電話の向こう側で怒鳴り声が聞こえたが、なんのためらいもなく陽向は電話を切った。

「これでよし。じゃ、来週はあたしも参加するね」陽向がにこやかに言った。

「ユカリんはともかくマコちんは何が何やら意味がわからないんじゃないかな？」

「大丈夫、それでも必ず来るのがマコちんの良いところだよ」陽向が自

信満々に言った。

「（おい、あれはデートの誘いと言っているのか？）」颯太が言った。

「（マコちゃんとやらに同情を禁じ得ないな）」陽太が答えた。

「（・・・・陽向に目をつけられたのが運のつきだ）」康太が言った。

「（だが、俺達に陽向の被害がこないようになったのは、マコちゃんのお陰だ。みんなで感謝しよう）」

「（陽向を押し付けてるだけじゃないのか？）」

「（・・・・兄貴が相手してくれてもいいんだが）」

「（よし、みんなでマコちゃんにお礼だ）」陽太が慌てて答えた。

マコちゃんの家がどこにあるのかわからないので、三兄弟は東に向かって手を合わせた。

### 第3話

「……ということでは来週の日曜日の10時に、颯兄と由美ちゃん、陽兄と愛ちゃん、康兄とアンナちゃん。ついでにマコちゃんとあたしとユカリんでデートだね」陽向が嬉しそうに宣言した。

「ええ、冷静に考えればどうせデートするなら康太とがいいな、ボク」愛子が言った。

「……」

「おい、イベントのコンセプトが根源から否定された気がするんだが」颯太が言った。

「(なんのためにわざわざクジまで作って引かされたんだ俺たちは？ 康太)」

「(……何で俺のせいになっているのだ。だいたいあいつはシナプスレベルでものを考えているんだから、何かを期待する方が間違っている)」

「(恐竜と同じだね)」陽向が感心したように言った。

「まあ、クジの結果だから仕方ないか。ボクがデートしてあげるよ、陽太君」

「(自分で言い出しておきながら、何か恩にまで着せてるぞ、おい)」

「(俺は感謝しなきゃなんのか?)」

「(……だから俺に振るなど言うのに。ちょうどいい機会だ。普段の俺の苦勞を身にしみつけろ)」

「コータは普段運動不足ですからネ。陸上自衛隊のレンジャー課程に一般参加できないか調べておきます」アンナが嬉しそうに言った。

「(アンナはアンナで楽しそうだが、レンジャー課程なんて一般隊員でさえ参加できないのに、民間人が気軽に参加できるものなのか?)」

「(俺たちにしか刺激がないんだが……)」

「(……基本的な問題として、それは既にデートとは呼ばんだろう)」

「(いや、多分アンナちゃんは、自分も参加するつもりなんじゃないのかな?)」

「あのトンデモ親父のせいで、あいつは既にスペツナズの教官レベルだろうが」

「(レンジャーの教官もいい迷惑だな)」

「(・・・この場合、レンジャーの教官じゃなくて俺の心配をしてくれ)」

「あの、その土屋兄妹はさつきから何をゴチヨゴチヨやっているのかな?」愛子がじれたように言った。

「あ、いや何でもないよ愛ちゃん。デートの傾向と対策をちよつと」颯太が慌てて答えた。

「そういうのはデートの相手とやりなよ。デートの計画を仲良く立てるのもデートの楽しみの一つなんだよ」愛子が両手を腰に当てて言った。

「(・・・その相手が提案してきそうな計画についての対策をしているのだが)」

「(始まる前に既にデートというコンセプトから外れているような気がするな)」

「(というか愛ちゃんと康兄って、そんなにデートしてるの?)」

「(・・・回数で言えば、みんなとそんなに変わらん)」

「(何だかベテランの風格で上から目線なんだが?デート訓練のハートマン先任曹長みたいだぞ)」

「さ、じゃ。それぞれの組に分かれてデートのプランを立てて下さい。いいですか、計画からお家に帰るまでがデートですからね」愛子が嬉しそうに叫んだ。

【颯太と由美子カップルの場合】

「さて、由美ちゃん。君とデートすることになった訳なのだが」

「すいません、私なんかと」恐縮しながらも由美子は嬉しそうだった。何しろ颯太のバンドの時のShuのファンなのである(ちなみに愛子は、颯太とShuは別人と既に割り切っている)。

「いや、それはごつちも同じなんだが、実は大問題が一つある」

「芸能人として、わたしとデートしているのを写真週刊誌に撮られる



「ことが心配なんですネ」

「そんなもん、これが本当のデートだったらこっちが金払って広告出して宣伝してやりたいくらいだ」

「Shuのデート現場はこれだ」なんて広告でたら、ファンはさぞビックリでしょうね」

「ファンのことはどうでもいいが、実はおれは「デート」というものをしたことがない」

「えっ………はいっ?」思いもかけないことを言われて由美子が目をぱちくりさせた。

「自慢じゃないが、まだデートをしたことがないのだ」颯太が堂々と言い切った。

「………たっ確かにそれは何の自慢にもならないと思いますけど、えっと?いつもアンナちゃんとデートしているんじゃない?」

「あいつの日本人離れしたというか常軌を逸した買い物の荷物持ちとして連れて行かれているだけだ」

「この間、映画観に行っただって言ってますでしたっけ?」

「アンナが観たい映画があるというのでな」

「お洋服の買い物にも行っただって聞きましたけど」

「お洋服なんて言う可可愛く聞こえるが、あいつが新しい迷彩服が欲しいというので付き合っただけだ」

「お食事も行ってきたとか」

「あいつのボルシチが間違いだということに気がついてもらわんと、いいかげんにこっちの命が危ないので、本物のロシア料理の店に連れて行った」

「それでもお兄さんはデートをしたことがないと主張しているんですか………?」

「うむ、この歳で言うのも恥ずかしいのだが、「デート」をしたことがまだないのだ」

「………あの、失礼ですけどお兄さん。デートって何なのか知ってます?」

「いや、だから「デート」というものをしたことがないから「デート」

というのが何なのか分からないのだが、何かおかしいこと言っているかな」

「……………」

「例えばバスケットだったら5人チームでボールをカゴに入れる。ステップは何回とかルールが決まっているだろう？それが分かるからみんな「ああ、バスケットなんだな」とわかる」

「はあ、それはそうですが」

「それと同じで「デート」というのも何と何をしてとかルールが決っていると思うんだ」

由美子が頭を抱えた。

「……………映画を観に行ったのは？」

「映画を観に行っただけだ」

「……………お洋服の買い物と一緒に行ったのは」

「迷彩服の買い物に付き合っただけだな」

「……………ロシア料理のレストランに行ったのは？」

「飯喰いに行っただけだな」

どこから説明していいものやら、由美子は途方に暮れた。

「あのですね、お兄さん。落ち着いてよく聞いて下さい。それみんな「デート」です」

「なつなにいく？」 颯太が叫んだ。

「男女が一緒にでかければ、それは世間的にはデートと見なされます」  
「するとこの間ババアの買い物荷物持ちに連れていかれたのは、あのババアとデートしたことになるのか？」 颯太の顔がゆがんだ。

「すいません、少し訂正します。好きあっている男女が一緒にお出かけすればデートなんです」

「いや、俺は別にアソナのことを好きとも何とも思っていないのだが」  
「この際、それは些細な問題です」

「好きあっている男女」ってのが、「デート」の成立条件じゃなかったのか？」 颯太が納得いかない顔で言った。

「誤差範囲と言ってもいいですけど……………」

どうやら由美子まで土屋家の家風に染まってしまっているようだ。

## 第4話

【陽太と愛子カップルの場合】

「という訳でボクが陽太君とデートしてあげることになったわけですが」少女が胸を張って言った。

「なんで言い出しっぺの愛ちゃんがそんなに勝ち誇っているのかよくわからないけど、まあそういうことだね」

「では、さっそく始めましょう」少女が言った。

「始めるって、デートは来週だよ」困惑した顔で陽太が言った。

「ツツツツツ、ボクの話聞いていなかったんですか？計画からがデートですよ」陽太の顔の前で人差し指を振りながら少女が言った。

「ああ、そうだね。じゃ、まず愛ちゃん、どこか行きたいところある？」

「計画の前にまずやる必要があるでしょう」少女が言った。

「計画の前にやること？」

「そうです。まず最初にデートのテーマを決めないと」少女が当然のように言った。

「……デートのテーマ？」いつものこととは言え、この娘は突然に何を言い出すのだろうか。

「そうです。会社だってビジョンがあつて、ミッションがあつて経営がなりたつのです。デートにもテーマがあるからこそ充実したものになるのです」

「僕たちはそこまで壮大なデートはしたことないんだけど、愛ちゃんたちについてもテーマ決めてデートしているの？」陽太が理解できずに質問した。

「もちろんです」少女が何を当然のことを聞くのかとばかりにキツパリと答えた。

まあ、色々なところに変なこだわりのある娘だ。それくらいのことでは当たり前なことなのだろうなと陽太は思った。

「ちなみに初めてのデートのテーマは何だったの？」

「告白」ですね。康太がボクへの愛を告白する予定だったんです」

「あの康太がそんなことできたのかい？」

「それがあの男ときたら、行く先行く先のアトラクションで盛大に鼻血を振りまいて周囲をパニックに陥れてそれどころじゃありませんでした」少女が拳をワナワナと震わせて悔しそうに言った。

「2回目のデートは？」

「憧れ」です」

「それって理想のカップルを目指すとか言っつて、同級生カップルをストーカーしたというあのことかな？」

「ストーカーして失敬な。模倣と言っつてください」

「で、憧れのカップルにはなれたの？」

「それが、ホラー映画のお陰で計画はメチャクチャです」

「えーつと、3回目は何？」

「何言っつてるんですか。陽太君たちとのダブルデートですよ。当然「成就」です」

「そんなテーマがあったとは知らなかったよ（随分引っかけ回してきた、あれのことか・・・）」

「自分でいうのもなんですけど、我ながら最高のデートだったと思います」少女が嬉しそうに言った。

「（それは結果オーライというんじゃないのか？）」と陽太は思ったが、もちろん口には出せなかった。

「まあ、ボクのおかげで今の陽太君と由美ちゃんカップルがあると言っつても過言じゃないと思います」

「4回目は？」

「「思いやり」ですね」

「なるほど、お互いに思いやるってのは大事だと思うが「思いやり」のあるデートってのは？」

「あ、いや。ボクたちの思いやりじゃなくて、2年ぶりに帰ってきた陽向ちゃんを楽しませてあげようという「思いやり」です」陽向に騙されてデートすることになったとは言えない少女であった。

「5回目は」

「やだなあ、クリスマスデートだったじゃないですか。当然、山下達郎の「クリスマス・イブ」に決まっていますよ」

「いや、あれはフラれる歌じゃないのかなあ？」

「えっ、でも、クリスマススの定番の歌ですよね？」少女が不思議そうに言った。

「それで6回目は何？」

「今回のデートが6回目です」

「つまり、愛ちゃんたちは5回しかデートしたことがないということかな？」

「計算上はそうなりますね」

「いや、実際にそうだろう」

「だから、ベテランのボクが陽太君に由美ちゃんを喜ばせるデートのノウハウを伝授してあげようかと」

「(正直、俺と由美ちゃんの方がはるかに多くデートしているんだけど……)」

「なにか言いましたか？」

「いや、別に何も。で、今回も何かテーマを考えているのかな」

「はい、陽太君にピッタリのテーマを考えてあります」

「嫌な予感しかないんだけど」

「フフフ、聞きたいですか？」

「愛ちゃんだけ知っててもしょうがないだろう。僕も知らなきやテーマにならないと思うんだけど」

「今回のボクたちのデートのテーマは……」

「テーマは？」

「ズバリ、「克服」です!!」少女が高らかに宣言した。

## 第5話

「……………克服?」

「そうです、克服です」

「……………。」分らない。結構長く付き合っているが、この娘の発想だけは全く分らない。

「フッフッフ、ボクのあまりにも的確なテーマ選択に感心して声も出ないんですね」

「いや、というか俺は兄貴みたいにアンナちゃんへの気持ちを誤魔化しているということもないし、康太みたいに女性に触れると鼻血が出ることもない。そりゃ、今でも女性は苦手だけど、由美ちゃんだけいればいいし……………何を克服すればいいのかなと」

「さりげにノロケましたね。その考えは甘いです。陽太君には致命的な弱点があります」少女はビシッと陽太の顔を指差して言った。

「弱点?」

「そうです。それは「ホラー映画に弱い」ってことです。男として致命的な欠点です」

「いや、それは愛ちゃんも一緒だろう」

「ボクは女の子だから、そういうところもカワイイんです」

「同じ弱点を、俺は「致命的欠点」で自分は「美点」と主張するところは、実に愛ちゃんらしいが……………。だけど、美点だったら愛ちゃんは克服する必要ないだろう」

「程度問題です。ボクの場合、映画館が暗くなった瞬間から固く目をツブって映画が終わるまで耳を塞いでいますから」

「それを「映画を観た」と言っているのか疑問は残るが、結局どうしたいの」

「ホラー映画に慣れて、ほど良く怖がりつつここぞという場面で「キヤー」と彼氏に継り付けば、父性本能を刺激すると雑誌に書いてありました」

「本音がダダ漏れのテーマだな。俺はどうなわけ?」

「そもそも男が女の子よりも、ホラーに弱いというところが大問題で

すから、陽太君はそれを克服する必要があると思うんです」

「いや、一般論ではそうかもしれないけど、相手はあの由美ちゃんだよ」

「そこが問題なんですけど……」

1週間前のことだった……

「というところで、お友達から聞いた「ここは100%幽霊が出る」っていう廃病院にこの間兄と行ってきたの」由美子が言った。真面目な彼女だったが、意外とオカルト好きで幽霊を見たいと兄である龍一郎と心霊スポット巡りをするのが趣味だという。

「由美ちゃんはともかくとして、龍の奴は一流会社の副社長だろう？ そんなことして崇られて死んだなんていったらスキヤンダルじゃないのか？」颯太が言った。

「それが二人とも今まで一度も、幽霊を見たことがないんですよ。だから今回はとても期待して行ったんですけど」由美子が言った。

「うんうん、それで」陽向がワクワクしながら先を促した。

「三階建ての廃墟を上から一部屋づつ見て行ったんですけど、何もいなくて」

「いなくていいと思うんだけど」愛子が震えながら言った。

「で、地下に降りてみたら正面に「霊安室」って書かれた部屋があったので、そのドアを開けてみると……」

「「「「「（ゴクリ）」」」」一同は息を飲んだ。

「そしたら、部屋の中に白いワンピースを着た髪の毛長い女の人が頭から血を流して立っていたんですよ」

「キヤーっ」愛子が叫びながら耳を塞いだ。

「私もうビックリしちゃって……」

「そっそりや、驚くだろう」颯太の声も震えていた。

「すぐに携帯を取り出して119番したんですけど……」

「「「「「？」」」」」

「地下だから圏外で携帯が通じなくて、兄に見てくれるようお願いして1階に上がって救急車を呼んだんです」

「……」

「で、救急車が来る前に部屋に戻ったら、兄が部屋の中を探しまわっていて、「いや、お前が遅いから一度上まで上がって部屋に戻ったらあの人いなくなっちゃってたんだよ」って」

「……………」

「あんな大怪我で動き回るのは心配だから、兄と二人で病院の中と周囲を探したんだけどどこにも見つからなくて、そのうち救急車が来ました」

「おい、やっぱりここだよ」救急車から降りてきた救急隊員が顔を見合わせた。

「あ、すみません。ケガ人がいたんで私たちが呼んだんですけど、ちよつと目を離れた間にその人いなくなっちゃって」龍一郎が救急隊員に説明をした。

「それはいいんですけど、もしかしてそのケガ人って白いワンピースを着た髪の毛の長い女の人じゃありませんでしたか？」若い救急隊員が尋ねた。

「そうですけど、何で知っているんですか？」

「いや、よくここで見かける人が多いもんですから。救急車まで呼んだのは、あなた方が初めてですけど」救急隊員が言った。

「髪が長くて白いワンピースだと何か崇られてケガするのかしら？よかったわ、私今日はGパンで」由美子が自分の服を見ながら言った。

「……………そういう問題ではないような気がするのだが」康太がツブやいた。

「まあ、とにかくいないんだから戻りましょう。あなた方も早く帰った方がいいですよ」救急隊員が言った。

「でも、こんな場所で女の人ケガなんて、何かの事件じゃないですか？警察にも電話した方がいいんでしょうか？」由美子が尋ねた。

「ああ、私たちが連絡しておきますから大丈夫です。とにかく帰りましょう」救急隊員が二人を急かすように言った。

「わかりました。じゃ、後をお願いします」龍一郎が言った。

「あ、それと。一応、帰ったら家に入る前に体に塩を振りかけておいた方がいいですよ」年配の救急隊員が心配げに言った。



「はい、どうもありがとうございます」二人は車に乗り込むと帰宅路を走りだした。

「ああ、今日も結局幽霊は見れなかったな。由美子の友達の情報も当てにならないな」

「でも、あの女の人为本当に大丈夫なのかしら」

「救急の人に任せたから大丈夫だろう。そういえば何か変なこと言っていたな」

「家に入る前に体に塩を振りかけろ」って、まるでお祓いみたいね」「まあ、この辺の風習なんだろう」

「ああ、今夜も見れなかったわね。幽霊って本当はいないのかしら？」二人を乗せた車は深夜の道を家へと急いだ。

「……おい、どう思う？」 颯太が囁いた。

「(どう思うもこう思うも……)」 陽太が言った。

「(……幽霊も災難だな)」 康太が幽霊に同情するように言った。

「(取り憑かれたりしなかったのかな)」 愛子が震えながら言った。

「(取り憑いたって出てくる度に救急車呼ばれたんじや幽霊だって気兼ねするんじやない?)」 陽向が答えた。

「(そこらの神社の魔除け札より強力だな、この2人は)」 颯太が言った。

「……というような武勇伝を持つ由美ちゃん相手に、いまさらホラー映画が観れるようになったところで、ゴジラにチワワが挑むようなもんじやないのかな？」 陽太が言った。

「だつ、大丈夫ですよ。ホラー映画の10本も見ればスピッツくらいにはなれるんじやないかと」 愛子が由美子の話を思い出して震える声で言った。

「余り意味があるとは思えないんだが」 陽太が納得できないかのよう  
に首をひねった。

## 第6話

「康太とアンナカップルの場合」

「可愛い義弟であるコータのためにワタシがデートの真髓を教えてくださいませ」 どうやら姉さん暴風は未だにおさまる気配はないようである。

「……まあ、お手柔らかに頼む」 康太はあまり気乗りしない様子で言った。

「ただ、残念なお知らせがありませ。陸自ではレンジャー訓練の一般参加は受け付けていないそうデス」 アンナが残念そうに言った。

「……いや、まったく残念でも何でもないが、本当に自衛隊に電話したのか」

「ハイ。しかたないのでグリーンベレーやSAS、Navy Seal sにも電話してみました、全部断られませ」

「……無駄に豊富な行動力だな。なんでそこまで俺を特殊部隊の訓練に放り込みたいのだ、お前は？」

「フッフ、義姉さんの勇姿をみて、コータも義弟として立派な姉萌になるのデス」

「……いや、宗介がシスコンというより、お前が超絶ブラコンにしか見えなかったのだが」

「だけど喜んでくだサイ」 アンナが一転顔を輝かせた。

「……喜ぶというか、嫌な予感しかしないが」 康太の顔が更に暗くなった。

「ワタシのコネクションを最大限に活かして、ロシアのスペツナズの訓練に特別に参加できることなりませ」

「……結局、あのトンデモ親父に頼んだということじゃないか。だいたい、スペツナズが学校という設定はどこへ行ったのだ」

「クラブ活動みたいなものですネ」

「……そこまで生命をかけるクラブ活動は日本にはない。というか訓練期間はどれくらいなのだ？」

「三ヶ月デス」

「……デートの範疇を遥かに超えているのだが、学校はどうするつもりだ。そもそも新婚旅行でもそこまで長くはないぞ」

「でも、ワタシも一緒にやりマスから」

「……二人で参加すれば何でもかんでもデートだと思っくんじやない。速攻で親父に断ってこい」

ブツクサ言いながらアンナがロシア語でどこかへ電話した。

「それでは第2案でいきます」気を撮り直した様子でアンナが言った。

「……そうしてくれると助かる」

「商店街の八百屋夏野菜バーゲンセールへ行きまSHOW」

「……世界規模のデートからいきなり町内会レベルになったな。それはデートなのか？」

「ソータとはしよつちゆうデートしてますネ。バーゲンは女の戦場デス」

「……愛子といいお前といい、一体何と戦っているのだ？で、デートはそれでいいのか」

「その後は、中野、池袋、秋葉原へ……」

「……ちよつと待て。そのコースはお前に引つ張られて何度も行っていて、そういうのに全く興味が無いにも関わらず俺はそこらのオタクより詳しくなってしまうているのだが。大体、今回のイベントのコンセプトを理解しているのか、お前は？」

「馬鹿にしないでください。新しい刺激を得ることデスネ」

「……中野、池袋、秋葉原って、いつものお前の定期巡回コースではないか」

「フッフ、コータは甘いです。中野では「進撃の巨人」のフィギュアが出ていますし、池袋では木上イ憂子先生の新作BL本が発売されているはずデス。秋葉原に至っては新しく「男の娘メイドカフェ」というお店がオープンを……」

「……それは新しい刺激ではなくて、単に新発売というのだ。それに考えてみればお前にしか刺激がないぞ」

「コータも姉萌なら義姉さんと同じ趣味なはずデス」アンナがキツパリと断言した。

「……人に勝手な属性をつけるな。一体お前の日本感はどうなっているのだ？」

この娘が来日してから出かけた街は、大体この3つしかないようである。普通の女子高生なら興味を示すであろう原宿や渋谷など目もくれない。愛子が言った「アンナちゃんをこのまま帰国させたら間違った日本感が広がって国益を損なう」という発言もあながち間違いないような気がしてきた。

「コータはワタシの提案に反対ばかりしてマスネ。これが世間でいうところの性格の不一致ですか？」

「……お前の提案が特殊すぎて賛成のしようがないのだが」

「ソータはちゃんとデートしてくれますネ」

「……いや、そもそもお前は兄貴の発言など最初から聞いちゃいないだろうが」

「それは失礼デス。夫の言うことはチャンと聞いていますネ」

「……そうなのか？」

「ソータの意見を聞いた上でワタシの提案を通してイマス」

「……それを日本語では話を聞いていないと言うのだ」

「日本語は難しいデスネ」

「……お前が強引にマイペース過ぎるのだ」

結局、こちらのカップルも大騒ぎした割りには何も決まらないのであった。

## 第7話

【陽向とユカリんとマコちんのトリオの場合】

「※★♫#?!\$」陽向の右耳に誠が怒鳴った。

「☒☒・?・∇÷!☒》ゞ∩\*ノ”」と左耳に由香も怒鳴っている。

「ちよつとちよつと二人とも落ち着いてよ。何をそんなに怒っているのかよくわからないけど、一緒に怒鳴られても聞き取れないし、それに二人とも地球上の言語じゃなくなっているよ」陽向が悠然と二人に向かつて言った。

「なんで怒っているのかわからんところが、そもそも問題だ!!」

「昨日のあれは何なのよ!!」二人が同時に叫んだ。

「昨日のあれって……ああ、デートのお誘いのこと?」

「どこがお誘いよ。一方的に宣言しただけじゃないの」

「俺に至っては集合場所と時間しか聞いてなくってたつた今デートだということを知ったんだが、なんでお前とデートしなきゃならんだ」

「マコちん、そういう発想がひいては奥様のイライラを引き起こし、離婚の原因に……イタタタ」シビれを切らした由香が陽向にウメボシをくらわした。

「訳のわからない話はいいから、人間に理解できるように説明しなさい」

「いやね、愛ちゃんが……」陽向は経緯を二人に説明した。

「要するに、また工藤先輩の思いつきなわけね。というか家庭の問題は家庭内で解決して欲しいんだけど」由香が呆れたように言った。

「おい、アホ。今すぐ2年のクラスに行つて、あの人から電池を抜いてこい。」誠が言った。

「あつ、愛ちゃんつて電池駆動だったの?」

「そんなことはどうでもいい。あの人が何かろくでもないことを思いつくたびに俺たちが被害にあつてるじゃないか」

「まあまあ、マコちん。物は考えようだよ。ユカリんとデートすると思いなよ」陽向が言った。

「何で俺が城ヶ崎とデートしなきゃならんのだ」

「なによ、竜崎。わたしじゃ不満な訳？」由香が傷ついたように誠を睨んだ。

「そつ、そういう意味じゃ・・・いや、そういう問題じゃねえだろう」誠が少しどもりながら言った。

「ユカリんもマコちんとのデートだと思えば・・・」

「はあ？何でわたしが、竜崎とデートを・・・」

「俺に何か不足でもあるのか」誠が半目になって言った。

「そつ、そんなこと言ってないでしょ」由香が少し頬を染めて言った。

「ほらね。新しい刺激があるでしょ」陽向が勝ち誇ったように言った。

「それで、あなたはどうするのよ？」由香が少し慌てた様子で弁解した。

「あたし？あたしは二人のお目付役としてお供を・・・」

「それじゃ、結局いつも同じじゃねえか」二人のゲンコが陽向の脳天に炸裂した。

「あいたたた。あのね、二人ともいつも気軽にポンポンと人の頭殴っているけど、あたしが二人を護るためにどれだけ苦労していると思っているのさ」陽向が少し涙目になりながら、抗議した。

「あなたがわたし達を護ってるですって？」

「お前に護ってもらった覚えなど全くないぞ」二人が首をひねりながら言った。

「日頃、あたしと仲良くしてもらっているからって、お礼に愛ちゃんが二人をもてなしてあげたいって言ってるんだよ」陽向がドンツと机を叩きながら叫んだ。

「あなた、何言ってるの？」

「あの先輩がそんな愁傷な心を持っていたとは意外だったが、おれ達を護るって話はどこ行っただ？」

「だから、愛ちゃんが二人にご馳走したいって言ってるんだってば」

「それは嬉しいことじゃないの？」

「護るといふよりも、工藤先輩の好意を妨害しているだけじゃないのか、お前は」

「だって、カレーだよ。カレー」陽向が更に力説する。

「別にカレーは嫌いじゃないわよ」

「俺はカレーは大好物だぞ。どんなカレーでも美味しいと思っただが」

「二人とも愛ちゃんカレールの恐ろしさを知らないから、そんなにノホンとしていられるんだよ。しかもシーフードカレーなんだよ」

「あなたが言うことって本当に理解できないわね？」

「カレーって、世間で言うところのカレーライスのことだろう？」

「それ以外にどんなカレーがあるのさ？」陽向が尋ねた。

「いや、あの先輩のことだから「シーフードカレイだよ」とか言っ、カレイの煮付けを、飯の上に乗つけて出すくらいのはしかねんと思っ、てな」

「マコちん、普段から愛ちゃんのことをどう思っているのさ」

「普段は別に意識したことはないが、とにかくはた迷惑な人だとは思っている」

「まず、二人ともシーフードカレーという具に何が入っていると思ってる？」

「普通はエビとか白身魚じゃないの？」

「あの先輩ならタラバ蟹丸ごと入れかねんな」

「近いけど惜しい。愛ちゃんシーフードには鰯の干物が丸ごと入ります」

「全然、近くないじゃないの」

「しかも各人に一匹ずつ」

「まあ、あの先輩ならそれくらい素っ頓狂なことをしてもおかしくないが、干物をシーフードの範疇に入れる人間は日本広しと言えどあの人くらいだろうな……」

「いや、愛ちゃんカレールの真の恐ろしさはそんな些細なところにあるんじゃないんだよ」陽向が怖いものを思い出したかのように震えながら言った。

「シーフードカレーに干物入れるのを些細って……どうでもいいけどあなたなんでそんなに怯えているのよ」

「カレーというのは、そんなに作るのが難しいハイパーテクニカルな料理だったか？」二人は再び首をひねった。



## 第8話

「結局のところ不味いカレーということなんだろう」誠が尋ねた。

「不味いかって……ウーン？」陽向が考え込んだ。

「美味しいの？」陽向の反応を見て由香が尋ねた。

「美味しいかと言われれば……ウーン？」陽向が更に考え込んだ。

「一体、どっちなのよ」由香子がイライラしながら尋ねた。

「俺はカレー好きだから大概のカレーは喰える自信はあるぞ」誠がジレったそうに言った。

「いや、正直言うとも味なんて覚えてないんだよね」

「味なんて感想であって覚えるもんじゃないでしょうが」

「ユカリんはそう簡単に言うけれどもさ。愛ちゃんカレーって美味しいとか不味いとかう次元とは別のところに位置していてね。味にまで感想が回らないんだよ」

「いや、普段にもましてお前が何を言っているのか理解できんのだが」誠が言った。

「えーっと、まあ具体例をあげた方がわかり易いかな」陽向が答えた。

「フムフム」

「初めて愛ちゃんカレーを食べた時にはね。最初の一口を口に入れた瞬間に急に周囲が暗くなって……」

「……」

「気がついたらいつの間にか河原に立ってたんだよね。で、川の向こう岸に初代から十五代目の土屋正蔵がズラっと並んでいて「まだ、こっち来るな」ってあたしに向かって石投げつけたの」

「それって人間として渡っちゃいけない川だったんじゃないか？」

「そもそも土屋正蔵って誰よ」由香が尋ねた。

「ああ、うちは伊賀の忍者の頭領の家系だから、頭首は代々土屋正蔵を名乗るんだよ。今はお祖父ちゃんが土屋正蔵を名乗っているの」

「なんで、その人たちが歴代土屋正蔵だってわかったんだ？」

「一番左端にいた人が十五代目土屋正蔵で、写真で見たことがある曾祖父ちゃんだったんだよね。ちなみに祖父ちゃんが十六代目の土屋

正蔵だから、マコちゃんは十七代目の土屋正蔵ってことになるわけ」「ちよつと待て。何で俺が十七代目の土屋正蔵になるんだ？」誠が尋ねた。

「それはお父さんが後を継ぐのがいやで伊賀を逃げ出したから、マコちゃんは祖父ちゃんの次だから十七代目になるんだよ」陽向が教え諭すように言った。

「代の数が合わねえっていう話をしてるんじゃないやねえんだよ!!」誠が怒鳴った。

「で、仕方ないから川と反対側に歩いていたら、気がついたらリビングに倒れたところで意識が戻ったの」誠の怒声を華麗にスルーして悪びれもなく陽向が言った。

「人様に対してスゴい人生設計してくれているわね、あなたは」由香が呆れた顔で言った。

「大丈夫だよ。ユカリんにはちゃんと十九代目「お華」の座を用意してあるから」

「今度は一体誰の話なのよ？」

「二応、頭領の家系だから血を絶やしちやいけないっていうことで、歴代土屋正蔵には正式に側室がいたんだよね。その人たちは代々「お華」の名を継いで来たんだよ」

「要するに代々お妾さんがいたってことね。それはともかく土屋正蔵が十六代でお華が十八代じゃ数が合っていないじゃないの」

「うん、祖父ちゃんに側室を置くのを祖母ちゃんが断固として反対したから、十六代目から十八代目の「お華」は、祖父ちゃんの家で飼っている猫が継いでいて……イタイ」由香のゲンコが炸裂した。「なんで、あたしがあなたのお祖父さん家の猫の名前を継がなきゃならないのよ」

「とまあ、これくらい恐ろしいカレーなんだよ」

「強引にカレーに話を引き戻したわね。カレーよりもあんたの方が怖いわよ」

「カレーの恐ろしさとかお前の一族のアホさ加減しか伝わってこないのだが」

「おかしいなあ、じゃこの話の方がいいのかな？」陽向が首をひねりながら言った。

「まだ、あるのか」

「というか、工藤先輩に料理させないという選択肢はないわけ」

「いや、もうできるだけ料理をさせないように、話を逸しつつ兄妹4人でマークデイフェンスしているんだけど、湘北の流川並のカットインで台所に入られちゃうんだよ」

「あなたのマークすらかわせるなんて、NBAに入れるんじゃないの？」

「愛ちゃんが台所に入っちゃったら、マークデイフェンスから作戦を変えなきゃならないから大変なんだよ」

「阻止するのに作戦まで立てなきゃならん料理なのか」

「今度はどんな作戦に変わるわけ？」

「誰かが逃げ出さないように、それぞれを見張るという作戦の180度変更を……」

「前から疑問に思ってたんだが、お前ら兄妹は本当は仲悪いんじゃないのか？」

「仲悪いというか、自分だけ不幸になってたまるかという人間としての当たり前の心理の現れというか」

「そんな極悪心理を一般論にしないでちょうだい」

「一度なんか颯兄が二階の窓から飛び降りようとしたのをみんなですら死に止めて」

「自殺まで考えるのか？」誠が呆れたような顔で尋ねた。

「2階から飛び降りても死ねないでしょう」由香が冷静に言った。

「みんな颯兄を窓枠からひっぺがして、料理ができるまで逃げられないように簀巻きにして、罰としてカレー特盛りにしてやったけど」

「何の話を聞いてもろくでもない結末しか出てこない兄妹だわね。ご両親は何て言っているわけ？」

「それが二人とも、愛ちゃんが料理を作る日に限っていないんだよ。

お父さんは経理部なんだけど急遽接待とかで帰ってこないし、お母さんは「お母様会」の会合とか言って出かけているし」

「軽く家庭崩壊しているじゃねえか」

「二人とも一応忍術の修行はしていたから、何らかの殺気を感じるんだろうね。あたしは修行が足りないからまだそこまでカンが働かないんだけど」

「なんで、たかが飯を喰うために殺気を感じる能力まで磨かにやならんのだ」誠が呆れたようにツブやいた。

## 第9話

「カレーで殺気をまき散らすわけ」

「それは本当に料理なのか？」

「まあ、それはともかくとして2回目に愛ちゃんカレーを食べた時にはね」

「1回で懲りなさいよ、あなた達は」

「だって、しようがないんだよ。土屋家家訓の第一条が「愛ちゃんを泣かしてはいけない」なんでもん」

「家訓とか言って仰々しい割には、最近できたんじゃないのか、それ？」

「ちなみに第二条は「アンナちゃんがボケたらツツコマなければならぬ」なんだけど」

「わざわざ家訓にする意味が全く理解できないんだけど」

「とにかくカレーを口に入れた途端周囲が暗くなつて……」陽向が思い出しながら言った。

「今度は、縄文人の祖先が河原に並んでいたというオチじゃないでしょうね」

「いや、作り話じゃないんだってば。何か妙に体が軽いなあと思つたら、あたしが天井から下を見下ろしていて、リビングにスプーンを持ったまま倒れていた自分が見えたの。で、天井のあたしと倒れているあたしが光る紐みたいなもので繋がっててね」

「カレーというか食事の時の反応じゃねえだろうそれは」

「で、ビュンビュンって音がするから何だろうなあと思つてリビングの隅をみたら、黒いフードを被った骸骨が大鎌で腰の入った素振りしていたんだよね」

「……………」

「何となく、あれが近づいてきたらヤバいと思つて軽い体で一生懸命平泳ぎして倒れている身体に戻つただけで、戻る瞬間に骸骨の鎌が髪の毛をかすつただよ。一体何だったんだろうね、あれ？」

「あなた、それって……………」

「世間一般では、死神と呼ばれているものじゃないのか、そいつは」  
「あたし危なかったの？」

「というかそれはもう食事とかいう範疇を超えて、兵器のレベルだろうが」

「そういや、なんだか家に自衛隊化学学校の入学案内書が届いたって愛ちゃん不思議がってたね」

「軍事機密レベルな料理なわけね」

「だいたい、たかがカレーでそれだけの威力を持つってのは、何か変な薬でも入ってるんじゃないのか？」

「いや、それが買ひ物から作るころまでずっと一緒にいて監視してたことがあるんだけど、普通の食材で普通に料理しているだけなんだよ。ちよつと個性的な材料を使うけど」

「それで何でそれだけ破壊力があるのよ」

「それが土屋一族七不思議のベスト1位たる由縁なんだよね」

「何だその土屋一族七不思議ってのは？」 誠が尋ねた。

「いや、土屋一族600年の歴史に伝わる伝説なんだよ」

「どうせまたろくでもないこと言い出しそうな気がするんだけど……」

「そうは言うけどね。愛ちゃんカレーが1位になるまでは「なぜ六代目土屋正蔵は150歳まで長生きすることができたのか」っていうのが、400年間ずくと1位の座に君臨していたんだよ」

「それをたかがカレーで蹴落としたのか？」

「ちなみに2位は「なぜアンナちゃんはあるなに大食いなのにスタイルがいいのか」というもので……」

「伊賀忍者ってのは、実はあんまり大したことやってなかったんじゃないのか？」

「今は七不思議を愛ちゃんとアンナちゃんが独占していて、400年1位に君臨してきた「六代目土屋正蔵の謎」は、7位圏外に転落しちゃったんだけど……」

「あなたのところのストコドツコイな一族が600年も頭領として続いているっていうことの方が遥かに不思議だわ」

「ということ、あたしはそういう危険から二人を護ってきたんだから、ちよつとくらいお礼を言われてもいいと思うんだけど」陽向が二人に向かって勝ち誇ったように言った。

「何だか、そこまで自信満々に言い切られるとお礼しなきゃいけないような気になってくるわね」

「俺たちの全く知らないところで、勝手に生命の危機に立たされた上に護ってもらったことに対して、お礼を強要されているような気がするんだが」二人は考えこんでしまった。

「でも、あたし少し反省しているんだ」陽向が声の様子を落として言った。

「あなたが反省？ 珍しこともあるものね」由香が驚いたように言った。

「お前に反省という語彙があつたことの方が不思議だな」

「いや、二人を愛ちゃんカレーから護るよりも最初のうちで食べさせておけばよかつたんじゃないかと思つて」

「最初は不味いというだけだったのね」

「最初の方だと、致命傷だけで済んでいたと思うんだけど……」陽向が済まなそうに言った。

「致命傷というのは、「だけで済んでいた」ですまされる問題なのか？」

「そのどことが反省なのよ」

「その後、愛ちゃんが研鑽に研鑽を重ねちやつたから……」陽向が言いにくそうに言う。

「じゃ、改良されていいことじゃないか」

「研鑽の結果、少なくとも食べられる程度にはなつたつてことでしよう」

「いや、今や一口でコンビニに行く位のライト感覚で軽く臨死体験できてるくらいにまで腕が上がっちゃつて」

「何で研鑽して状況が悪化しているんだ」誠が怒鳴つた。

「マコちゃん。上達つてのは、いい方向への上達と悪い方向への上達があるんだよ」陽向が教え諭すように言った。

「なに偉そうにドヤ顔しているんだ」誠は陽向の頭にコブシを叩き込んだ。

「即刻、台所を封鎖しなさい！」由香も怒鳴った。

「あ、そういえばマコちゃんにはお祖父さんが3人とお祖母さんが5人いたことになってるから、愛ちゃんに聞かれたらそう答えてね」

「お前は何を言い出すんだ？父方母方含めても祖父さん祖母さんは2人ずつだろうが」

「いや、それが愛ちゃんが二人のもてなしの話を出すたびに「マコちゃんには法事でこれないみたいだよ」って言い訳してたんだよね。そしたらこの間「ねえ陽向ちゃん。計算してみたらマコちゃんってお祖父さんが3人とお祖母さんが5人いることになるんだけど」って聞かれちゃつてさ。あたし焦っちゃったよ」

「お前が後先考えずに法事を言い訳にするからだだろうが、それにうちの祖父さん祖母さんは、まだ両方共生きとるわ」

「勢いだけで生きてるところこういうことになるわけね」

「それとユカリんはT大理Ⅲを目指していることになってるから、よろしくね」

「はあ？あたしは普通に音大志望なんだけど」

「仕方ないんだよ。愛ちゃんが話だす度に「ユカリんは塾の模試で忙しいみたいだよ」って言い訳していたら、「そんなに勉強してどこ受けるんだろう」って言われたから「T大の理Ⅲだよ」つとでも言わなきゃ、理屈に合わなくなっちゃって」

「勝手に人の進路ネジまげるんじゃないわよ。猫の名前継がそうとした女が」由香のコブシも炸裂した。

「いたたた。いや、別に本当の話してもいいんだけど、そうしたらカレパーティだよ」

「ジャイアンのリサイタルに招待されたのび太のような気分だな」

「まさか夢に見ていた高校生活が2学期で終わるなんて」二人は悲観の涙に暮れた。

「だから、とりあえず3人でデートして、愛ちゃんが付け入る隙を見つけないようにしようってわけなの」

「いや、それは」

「それともカレーの方がいい？誰か会いたい人いるんだったら、会え



るよ。死んだ曾祖父ちゃんとか」

「城ヶ崎君。今度の日曜日のイベントを調べてくれ」誠が言った。

「もうやっているわ」由香は必死にスマホでいろいろと検索をしていた。

## 第10話

【吉井明久と玲カップル?の場合】

「アキ君。ちよつとここに来てください」姉さんが僕を呼ぶ声がした。だが、今は長時間かけたゲームのラスボス戦の真つ最中だ。そもそも姉さんが僕を呼んでロクなことがあつた試しがないので無視することにした。

「アキ君、聞こえないのですか?」おつと、ボスの攻撃を何とか交わす。「その3代目PSさんがご臨終になりそうな気がします」

「なんででしょうか、お姉さま」この人は、僕が言うことを聞かないと大人の階段を昇る参考書の次に大事なPSを躊躇無く踏みつぶすのだ。この際命の優先順位は3番目になってしまいが、それは些細な問題だとして4代目を購入するはめになった日には向こう半年間塩と水の生活になってしまう。しかたなく僕はいつものように姉さんの前に土下座した。

「なぜアキ君は土下座をしているのですか?」姉さんが不思議そうな声で尋ねた。

「いや、姉さんが呼ぶといつも土下座させられるからだけど」僕は答えた。

「失礼なアキ君ですね。姉さんが可愛い弟にいつもそんな屈辱的なポーズを取らすとも思っているのですか?」

「じゃ、土下座はしなくていいんだね」

「五体投地をしてください」

「いや、それ屈辱度がランクアップしているから。大体、姉さんの話を聞くのに何でそんなポーズをしなけりゃいけないのさ」僕が当然とも思える抗議をした。

「アキ君が土下座していると、可愛いお尻をスパニングしたくなります」姉さんが頬を染めて答えた。いや、そんなところを恥ずかしがられても困るのだが。

とりあえず五体投地は床に身体が伸ばせて気持ちがいいなあ。

「ということ、来週のデートの計画なのですが・・・」

「ちよつと待つて姉さん、いろいろと文脈がおかしい。前触れもなく  
「ということだ」と言われても何のことやら」

「アキ君はデートというのを知らないのですか？」

「いや、単語だけは知っているけど、やったことはないし」

「今までずつと皆様から「美人なだけでなくグラマーでスタイル抜群  
な上に性格もよくて素っ頓狂」とご好評を頂いている自慢の姉さんが  
初デートの相手というのは、アキ君も姉萌冥利につきますね」

「素っ頓狂と言われているのを自慢するような姉を相手にデートする  
のを嬉しいと思う弟はいないと思うんだけど。あとその変な属性は  
なに？」

「それなんですけど「素っ頓狂」という単語の意味がわからなくて、オツ  
クスフォード大辞典から、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシ  
ア語、中国語からスワヒリ語、タミル語に至るまで、いろいろな辞典  
を調べたのですが載ってないのです。一体どういう意味なんでしょ  
うか？」姉さんは、僕の質問を華麗にスルーして一人語りを始めた。

「いや、日本人なんだから、まず最初に国語辞典を引こうよ」

「私の中のゴーストがそれを引いてはいけないと囁いたのです」

「本当は意味わかっててピンポイントで避けてるよね、それ」

「アキ君は時々本当に意味不明のことがありますね」

困った。この姉の場合、本気なのかとぼけているのか判別ができな  
いのだ。これまでの経験上99%以上本気なのが、さらに困る。残り  
の1%は寝ぼけている時だから、とぼけている可能性は0%なのだ  
が。

「まあ、それはともかくとしてどうしていきなりそんな事を言い出し  
たのさ」

「渋谷に新しいホテルができたので、アキ君と行ってみたいと思っ  
たのです」

「なんで渋谷にホテル？」

「とても安かったので、ぜひアキ君と一緒にと思ひまして」

「いくら安いって言っても、渋谷に旅行する必要なんてあるのかな？」  
「だって、3500円ですよ」

「それは確かに安いね」

「しかも二人で」姉さんが自慢げに言った。

「それは幾らなんでも安すぎるんじゃないのかな？」開店サービス料金なんだろうか。

「アキ君は本当に世間知らずですね。世の中にはご休憩フリータイム料金というプランがあるのでですよ」

「ちよつと待って、姉さん。「ご休憩」の意味を知っていて言っているの？」僕は嫌な予感がした。

「アキ君は、ハーバードまで出た姉さんの国語力をバカにしているのですか？ご休憩というのは、仕事や運動などを一時やめて、休むことや休息のことです。10時から17時までご休憩することができてとつてもお得なプランなのです」

「ちなみになんていう名前のホテルなの？」

「確か「Hotel Love Affair」というホテルでした」

「どう考えてもラブホテルじゃないか」僕は叫んだ。

「ラブだなんて、私とアキ君にピッタリですね」姉さんがニツコリと微笑んで言った。

世間の皆様から例外なく素っ頓狂とご好評を頂いているらしいこの姉に「休憩」と「ご休憩」の違いを今のうちに教えてあげておいた方がいいんだろうか？

この調子だと男友達と遊びに行つて、喫茶店で休みたいと思つた時に「ちよつとご休憩して行きませんか？」などと言いかねない。もつと問題なのは「休憩」と「ご休憩」の違いを説明した場合、「ますます私たちにピッタリですね」とか言つて、僕の首根っこを引きずつて連れ込まれかねないということろだ。

よし、見たことも聞いたことも会つたこともない姉さんの男友達なんかの心配よりも自分の身の安全を最優先にして説明しないことにしよう。大体、素っ頓狂な姉さんの男友達が素っ頓狂でないはずがないし、姉さんと友人であるということはこれくらいリスクは覚悟しているはずだ。自己責任という言葉の意味を身を持って理解してもらおう。

ということでは僕は会ったこともない姉さんの男友達に事態を丸投げすることにした。

友達……そういえば男友達以前に姉さんの友達の話を聞いたことがないんだけど、この人には友達がいるんだろうか？

「ねえ、姉さんは友達っているの？」

「突然に失礼なことを聞きますね、アキ君は。もちろん姉さんにだって普通に友人はいますよ」

「いや、いつも家と学校の往復だけだし、電話とかしている様子もないから」

「角の鈴木さんちのマルちゃんとか、魚屋のタマちゃんとか庭の木に住んでいるカナブンの悦夫さん陽子さんご夫妻とか……」

「姉さん、友達はせめて霊長類までにして。というか昆虫類にまで交友範囲広げても友人が4人（匹）って少なすぎ。大体カナブンって1年で死ぬんじゃないの？」

「ええ、今のご夫妻は19代目です」

「……小学校の時から友達がいなかったのか」まあ、無理もないと思う。この人とともに付き合える人は、かなりの確率でまともな人じゃないはずなのだ。

「世間の人は、皆さん人見知りなんです」

「世界が姉さんから孤立しているね」

「そういうアキ君には、姉さんをバカにできるほどお友達が多いのですか」

「そりや僕にはたくさん……」

ここで僕は自分の交友関係を思い浮かべてみた。

雄二は友人どころか明白な怨敵だ。ムツツリー二は敵対9割陰悪1割というところだから友人と言うのは難しいだろう。秀吉や姫路さんは女友達と言っていいかも知れないが、女友達というだけで姉さんから虐待を受けてしまうので紹介できない。FFF団の連中は論外だ。

結局のところ僕の友人は……美波だけじゃないか。昆虫類まで友人の範疇に入れてしまう姉さんよりも、友達が少なかつたとはこ

れはビックリ、衝撃の事実だ。僕も節足類あたりまで範囲を広げて友人を作るべきなのだろうか？

それも人間として努力の方向が間違っているような気がしないでもないが、あの姉さんより友達が少ないということに比べれば、大した問題ではない。

「ご休憩」の話がいつの間になら「人間としての尊厳をかけた闘い」と言った様相を呈してきた。

## 第11話

「わざわざ渋谷まで「ご休憩」しに行かなくてもいいんじゃないかなあ」僕はできるだけ姉さんが変なことに感づかないように婉曲に言った。余計なところで異常にカンが働くとてもはた迷惑な姉なのだ。

「アキ君は何を心配しているのですか？大丈夫ですよ、姉さんはその日はちゃんと危険日ですから」

「一体何をするつもりなの、姉さん」

もうやだこの人。ちゃんと「ご休憩」の意味を知っているんじゃないか。もし、僕が「ご休憩」の意味を知らなかったら何をしでかすつもりだったのだろう。というか、そういうセリフを弟に言っているかという大問題はこの際置いておいて、僕の持っている参考書では「安全日だから大丈夫」というセリフはよく出てきたけど、そもそも日本語的に「危険」という単語と「大丈夫」という単語を結びつけていいものなのだろうか？

「カソリックは避妊禁止なのです」

「いや、本当に何を言っているのかわからないんだけど」

おかしい。確か去年のクリスマス前に我が家はシスコニュース派という怪しげなキリスト教派で、弟は姉にプレゼントする義務があるとか全くよけいなカミングアウトしてくれた上に、恐ろしいことにこの姉は僕の1年分の小遣いに相当する指輪のプレゼントを強要したのだ。おかげで僕は危うく腎臓を1個売りとばされかけたはずだ。

「カソリックって、我が家がシスコニュース派だという話はどうなったのさ」

「あれは12月限定教派なのです」

「そんな年末バーゲンセールみたいな教派って存在する意味があるの？」

「シスコニュース派は懐が広いと教えたはずですが」

「懐が広いにも程がありすぎ。大体姉さんにしかメリツトがない教派だよな、それ・・・殺気」僕は危険を感じて素早く上体をひねった。

「ドシンっ」一瞬遅く姉さんの足が、さつきまで僕の頭があつたところを踏み抜いていた。本気《マジ》だ。本気で殺る気だぞ、この人は。「アキ君はいつから、そんな聞き分けのないいけない子になったのですか」

「世界の全方位各方面の皆様方から素つ頓狂と評価されている姉にラブホテルに連れ込まれそうになって、抵抗しない弟はいないと思うんだけど」

「わかりました」姉さんがシユンとした様子で言った。

「いや、わかってくれればいいんだ。僕も強く言い過ぎたかもしれないね」

「つまり、アキ君はお家でする方がいいと言っているんですね」

どうしてだろう。日本語で会話をしているはずなのにお互いの言っている意味が全く通じていないような気がする。ここは落ち着いて一歩ずつお互いの認識を確認しあうべきだろう。コガネムシのご夫妻をお友達として会話しているというような人と意志の疎通ができるのかは、とても不安なのだけど。

「ちよっとお互いの認識に食い違いがあるようだから、最初から話しあおうよ。まず、姉さんは渋谷のホテルに行きたいわけだね」

「はい、お二人様3500円のご休憩プランがとてもお得なのです」

一見、お得だから行きたいということを強調しているが裏にある本音が見え隠れしてしようがない。

「うん、で「ご休憩」の意味を姉さんはどう思っているの？」

「アキ君はそんなに記憶力が悪かったですか。さつき、説明した通り仕事や運動などを一時やめて・・・」

「ストップ。よし、ここまではお互いの認識は一致しているね。それでその次は？」

「姉さんは危険日だから大丈夫ですよと・・・」

「そこだあああ!!」僕は大声で叫んだ。

「何ですか、アキ君。急に大声を出したらビックリするじゃないですか」姉さんが驚いたように言った。驚いたのは僕の方だ。

「いや、そこにフォッサマグナというか、次元の断層並の亀裂を感じる



んだ。姉さんの言う「ご休憩」と「危険日」とどういう関係が……」  
「アキ君はあんなにエッチな本を集めている割には、何も知らないの  
ですね」

「ちよつと待って、姉さん。どうしてそんなことを、いやこの際それは  
どうでもいいとして」

単独で発生していたとしたら1つだけでも僕にアイデンティティ・  
クライシスを起こしかねないほどの大問題が次々と露呈しているに  
も関わらず、雄二の命の危機並に軽いレベルで後回しにされてしまっ  
ていく。とにかくこの巨大な溝を埋めなければ、僕のいろんなものが  
失くなってしまいそうな気がする。

「危険日じゃないと受精しないじゃないですか」姉さんがシレつと  
言った。

「なんで受精する必要があるのさ」

「だって、受精しないと赤ちゃんができないのですよ。アキ君は普通  
の勉強だけじゃなくて、保体も成績が悪いのですか？」

「それはムツツリーニというエキスパートがいて……いや、問題  
はそこじゃなくて、何で姉さんと僕で赤ちゃんを作らなければいけな  
いのさ」

なんだか人間の倫理としてのもっと大きな問題があるような気が  
するのだが、この歳で父親にされようとしている今の僕の立場では、  
そんなことに構っている場合じゃない。

「まさか、アキ君は忘れたというのですか」姉さんが両手で口を覆って  
驚いたように目を丸くして言った。

「忘れた？」

「そうです。アキ君は、姉さんと結婚すると約束したのですよ」

「ちよつちよつと待って……」

僕は必死に記憶をたどってみた。この2年間は姉さんは留学して  
いたから、そんなことはなかったはずだ。3年前は……姉さ  
んが留学の準備で、荷物として僕を運ぼうとトランクに詰め込まれ  
た。5年前は……「アワ踊りの練習をしましょう」と風呂場に連  
れ込まれてとあれやこれやを。7年前は……思い出せば思い出

すほど、記憶の奥底に封印してあったトラウマが蘇ってくるような気がするんだが。だが、この姉さんとの結婚の約束なんて原爆級のトラウマなら、自我と集合的無意識の境界面くらいの奥底に閉じ込めてあるのかも知れない。

「ごめん、姉さん。全然記憶にないんだけど、いつそんな約束したの？」僕は正直に言ってみた。

「本当に忘れてしまったのですね」心なしか寂しそうな表情で姉さんが言った。

「いや、本当に思い出せないんだ。ごめん」

「よく思い出してごらんさい。あれはアキ君が生まれて、父さんに連れられて初めて病院に面会に行った日でした」姉さんが遠い目をして言った。

「??」突然何を言い出すのだろうか、この人は。

「新生児室のベッドにいた可愛いアキ君を見た姉さんは「将来は姉さんをお嫁さんにしてくれますか？」と尋ねたのです。その時、アキ君はしっかりと頷いてくれましたよ」

「いや、約束を覚えているどころか自分が生まれたことにすら気がついてないんじゃないかな、その日数だと」

さすが素っ頓狂という評価に絶対的安定感のある姉さんだ。そんな小さな頃から全く変わっていない。

まさか、生後数日の赤ん坊との結婚の約束（たぶん僕は何かの拍子で顔を動かしたただけだと思っただけ）を今まで信じていたなんて。

## 第12話

「話し合いでわかってもらえて姉さんも嬉しいです。では、来週の日曜日デートということでもいいですね。」

「話し合いつて僕の意見は1mgも聞いては……殺気」

僕は再び上体を捻って、姉さんの足の一撃をかわした。

「アキ君には穏便に済ましてあげようという姉さんの心遣いがわからないのですか？」

いや、2度も僕の頭を踏みつぶそうとした行為を「心遣い」と表現するなら、日本には傷害罪という罪はなくなってしまはずだ。しかしこれ以上姉さんの要求を拒めば姉さんの足が僕の頭を踏みつぶそうとタツプダンス状態になってしまうことは火を見るよりも明らかだ。かといつて「ご休憩」も色々な意味でマズいと思うんだ。なによりにマズいのは美波にこの事を知られた日には、僕の全身の関節が全て逆方向に曲げられてしまうことだろう。そもそもよく考えてみたらデートというのは、こんなに色々な危険を犯さなきゃならないものだったのだろうか。世のカップルは何を好き好んでデートなんかしているんだろう。

「アキ君、わかってくれましたか？」 姉さんが尋ねる。

「姉さんは、「ご休憩」がしたいんだよね」

「そうです。お二人様3500円で5時間の「ご休憩」でとてもお得なのです」

この期に及んでもお得感を強調しているところは、我が姉ながらなかなか大した根性だと思う。待てよ、5時間とな。つまり5時間逃げ切れば、「危険日」とやらの危険性から逃れられるということだ。ホテルの部屋に入ると同時にトイレに駆け込んで鍵をかけて5時間籠城すれば、なんとかなるんじゃないだろうか。暇をツブすためにPSPでも持ち込んでいれば5時間くらい何とでもなるだろう。姉さんには、部屋を探しまわって、蜘蛛の安藤さんという新しい友人でも見つけてもらえばいい。

「わかったよ、姉さん。たまには姉さん孝行すべきだよね」警戒させて

はいけない。

「アキ君なら、そう言ってくれると信じていました」姉さんはニツコリと微笑んで言った。

「いやあ、僕も日ごろ姉さんにはお世話になっっているから」我慢しろ僕の皮膚。鳥肌を立てるんじゃない。

「じゃ、姉さんはこれからデートのためにウエディングドレスの準備をしておきますね」

「ちよつと待ったあゝ!!」一難去つてまた一難だ。

「アキ君は本当に落ち着きがないですね。なんでそう大声をあげるのですか」

「姉さんが大声上げさせるようなことばかり言うからだ。今、何て言ったの」

「ドレスの準備をと」姉さんがキョトンとした顔で答えた。

だめだ、この人。何を問題にしているのか全く理解できていようだ。よく考えれば、電車の中で平気でバスローブに着替えるような人だ。昼間のデートにドレスを着ていくくらいは何でもないことなのかも知れないが、そのドレスの種類が問題だ。

「いや、その前」

「これから準備をと」

「わざと言っているね。その間。何とかドレスとか言っていたような気がするんだけど」

「ウエディングドレスと言いましたけど、アキ君はウエディングドレスを知らないのですか」

「それくらいは知っているけど、何で弟とのデートでウエディングドレスを着ていく必要があるのさ」

「だって、姉さんも初めてなんですよ」姉さんは頬を少し赤らめてはにかんだように言った。

「初めてって何するつもりなの」そんなことを恥じらうより、人間としてもっと恥じらうべきポイントがあると思うんだけど。

「アキ君は本当に心配性なんですな、大丈夫ですよ」

この姉が大丈夫と言って大丈夫だった試しがないのだが。姉とラ

ブホテルに行くというだけでも大問題なのに、その姉がウエディングドレスを来て渋谷の繁華街を通ってラブホテルに入る以上の大問題があるだろうか？

「大丈夫って、何が大丈夫なのさ」僕が食い下がった。

「ちゃんとアキ君の分もお揃いのウエディングドレスを準備してありますから。パールツクですよ」姉さんはとても嬉しそうに微笑んだ。

ふむ、僕もまだまだだな。最悪の事態だと思っただけにその上があつたなんて想像もしなかった。「最悪の事態を想像しろ。奴らはその斜め上に行く」というセリフが頭に浮かんだ……なんて、悠長に反省をしている場合じゃない。何で日曜の昼間に実の姉とパールツクのウエディングドレスを来て、渋谷のラブホテルに行かなきゃならないんだ。ヘタをしたら全国ニュースレベルの話だ。

「いや、そもそも男がウエディングドレスっておかしいでしょう」何だかもう色んな問題が大きすぎて、どこから解決したらいいものやら見当もつかない。

「心配ありません。サイズはアキ君にピッタリです」

「サイズの心配してるんじゃない」もうやだ、この人。どこまで僕を追い詰めるつもりなんだろう。

「ウエディングドレスはとても似合うと思うの。アキちゃー吉井君」どこかで聞いたことのあるような声が聞こえた気がした。

「今、なんか女の子の声が聞こえた？」

「女の子？ 姉さんには何も聞こえませんでしたが、もしかしてアキ君は姉さんに隠れて家に女の子を連れ込むようなふしだらな子だったのですか」姉さんの目がスツと細くなった。

危ない。あれは最大の危険信号だ。姉さんがあの目をした時には、僕の命は風前のともしびどころか、ハリケーンの中のマッチ売りの少女のマッチレベルのはかなさだ。僕の中の生命警報装置が最大音量で鳴り続けている。もはや、ウエディングドレスなんて些細な問題にこだわっている場合ではない。

「いいいや、きつと空耳だよ。ははは、来週は姉さんとデートか楽しみだなあ」



「うん、雄二がそこに来週あたりに行ってみたいと言っていたんだ」  
「……雄二は本当に恥ずかしがり屋さん。私に直接言ってくれればいいのに。わかった、ありがとう吉井」  
「じゃ、頑張ってるね」

僕は電話を切った。これで少しは気も晴れたのだが、よく考えてみたら僕の状況は何一つ改善していないことに気がついた。

すまない雄二、いたずらに被害を拡大させてしまったようだ。





「曲は一つも知らんが似顔絵は描けるぞ」

「はっ、はい？それは結局好きなんですか嫌いなんですか？」

「いや、中学の時に音楽室に飾ってあったモーツアルトの絵にマジックで落書きをしたら、音楽教師が理不尽にも怒りだしてな」

「それは理不尽でも何でもないような気が・・・」

「罰としてモーツアルトの似顔絵をソラで描けるまで描かされたのだ」

「なんでそんな罰を・・・？」

「いや、他に思いつかなかったんじゃないかな。曲鑑賞とかだったら数秒で寝るし。ちなみにA t s u s h iがバツハでG o nがベートベン・・・」

「要するに、皆さんで絵に落書きしたわけですね」由美子が呆れながら言った。

「俺とクラシックの接点といえばそれくらいしかないのだが、ここで君は俺に何をしろと」

「いや、ぜひタコ&ライスの音楽にもモーツアルトの要素を取り入れて欲しいなあと」

「無茶言うな。音楽というくらいしか繋がりが無いぞ。球技という繋がりで、野球のテクニックをサッカーに活かせと言っているようなもんだ。そもそも、どうやってビジュアル系ロックバンドにモーツアルトの要素を取り入れればいいんだ？」

「お兄さん、音楽に違いはないんですよ」由美子が真顔で言った。

どうもこの娘は土屋家関係者ではブッチ切りで一番の常識人だと思っていたのだが、幽霊の話とどこか一般人と感覚がかけ離れているような気がする。育ちがいいせいなのか、常人離れした呑気さなのか？それはともかくとして、いま一つ確認しておかなければならないことがあったのだ。

「ところで三宮由美子くん」颯太が改まった様子で言った。

「また、フルネーム？何ででしょうか？」

「デートプランを君に丸投げして、どこに行くのかと聞かなかった俺にも非はあることは認めよう。だが、「初デートに何を着ていけばい

「いいのよ」という俺の質問に、君は「アンナちゃんといつもデートしているような格好でいいですよ」と答えたね」颯太がやや問い詰めるような口調で言った。

「はい、確かにいいましたけど、それがその格好なんですか？」由美子が上から下まで視線を走らせて言った。

「そうだ」颯太が言った。

「いや、お兄さん。彼女とのデートでジャージの上下にスニーカーとというのはどうかと思いますよ」由美子が諫めるように言った。

「あいつは彼女じゃないという問題はとりあえず別にして、映画観に行く前日に「明日は特別な日ですカラ、一張羅のお洋服を着ていきますね」と言っつて、SASデザートパターン迷彩服を誇らしげに見せびらかす奴を連れて、そんなにいい格好できるか」

「それでそのジャージなんですか？」

由美子は迷彩服を着たアンナとジャージ姿の颯太がデートしている風景を想像してみた。なかなかシニールというか、溢れんばかりの不審感に満ちたカップルである。まあ、出かけているところはどうせ中野か池袋か秋葉原くらいだろうから、それほど変な格好でもないかも知れないなどとオタクの皆様には大変失礼なことを考えていた。

「そうだ、俺が迷彩服を着たあいつを連れて恥ずかしい思いをしているんだから、あいつもジャージ姿の俺と一緒に恥ずかしい思いをさせてやろうと思っつてな」

「いや、それ何の問題解決にも報復にもなっつてないというか。少なくとも恥ずかしい格好という認識はあつたわけですか？」

「俺がこれだけ恥ずかしいんだから、あいつはもつと恥ずかしがればいいのだ」

どの当たりから説明したらいいのだろうかと由美子は悩んだ。颯太の主目的がアンナちゃんへの報復に移つているのでは、それはもうデートと呼べる行動ではないと思うのだが。

「というか、そんなに恥ずかしいのなら一緒に行かなければいいんじゃないかという疑問も浮かばないではなかったものの、颯太の本当の気持ちとアンナちゃんのマイペース度合いを考えれば、そういう発

想は浮かばないし、たとえ浮かんでもそもそも聞いてはもらえないの  
だろう。

「たぶんですけど、アンナちゃんはお兄さんがどんな格好しようとも  
何とも思わないと思うんですけど……」

「うむ、冷静に考えたらそういう気もしてきた。単に俺が内と外の両  
方向から恥ずかしいだけじゃないのか？」

「お兄さんだけにダメージがあるというか、盛大な自爆という  
か……」

「くっそう、どうりでアンナが文句を言わないはずだ」颯太が頭を抱え  
た。

## 第14話

「それはともかくとして由美ちゃん。こういうクラシックコンサートって高いんじゃないかい？」颯太が尋ねた。

「いえ、それほどでも」

「それにしても座席が最前列だしな。指揮者が入って来た時に俺と目があつて、俺の格好を上から下まで眺め回した後で、額に血管が浮かぶところまでよく見えたぞ」

「ジャージの観客が初めてだったんでしょね、きつと」

「ちなみにこの席はいくら位なんだい？」

「アリーナ席ですから三万くらいです」由美子が平然と言った。

「さつ三万だとおく！」颯太が大声をあげた。

「ウィーンフィルは人気ですし、それくらいですよ」

「いや、ちよつと待ってくれ。恥ずかしい話だが俺はそんなに金を持っていないぞ」

「大丈夫ですよ、三宮グループが主催しているコンサートですから、タダ券を兄からもらつて来ちゃいました」

「心臓が口から飛び出るかと思つたぞ。しかし、龍の奴もこんな連中を呼ぶ金があつたら俺たちのコンサートの切符でも買つてくれりやあいいのに」

世界のウィーンフィルハーモニー交響楽団も、最前列でジャージ上下で座っている男に「こんな連中」呼ばわりされていることを知ったら、コンサートキャンセルして帰国しかねないような発言をした。

「あつ、あのお兄さん。そういうことを兄に言わない方がいいですよ」由美子が慌てたように言った。

「何だ？仕事とプライベートは別だとか言つて怒りだすのかい」

「いえ、なんというかその。やっちゃうんです」

「やっちゃうって何を」

「だから切符の買い占めをです」

「良いことじゃないか。全部売れるんだろう？」

一体この娘は何を心配しているのだろう。切符が売れて心配する

プロモーターはいない。どこに「やっちゃやう」要素があるというのか。「前にお友達とガラ・コンサートをやった時に、兄に一言「切符買ってね」と言ったら、全席買い占めちゃって」

「切符は売れたわけだろう?」

「切符は売れても人はいませんから、コンサートホールに父と母と兄の3人の観客の前で演奏という恐ろしい目に……」

「限度を知らんのかあの男は……」 颯太が呆れたように言った。

「ですから、タコ&ライスの東京ドームコンサートでも埼玉スーパーアリーナコンサートでも兄だったら切符買い占めちゃいます」

「……」

「あの広いドームでお客さんが土屋家関係者と兄だけということになっちやいますけど」

「高校の文化祭のアマチュアバンドに観客動員数で負けるプロってのもそうはいないぞ」

「そういうことですから、あんまり兄にコンサートの話はしない方がいいと思います」

「よし、分かった。じゃ由美ちゃんこのことは二人だけの秘密ということで。このことがうちの事務所の鬼社長にバレたらアリーナツアー丸ごと龍に売りつけかねん」

「社長さんって鬼なんですか?」

「鬼とか人でなしとか守銭奴とか悪魔とか……」  
颯太がここぞとばかりに日頃の恨みを吐き出し始めたので、由美子が慌てて遮った。

「具体的にはどういう風な……」

「まず、俺たちは給料をもらってない」 颯太がキツパリと言った。

「……はい?」 由美子が理解できないといった声を漏らした。

「いや、給料をもらってないのだよ」

「それって何でまた……」

「正確には「お小遣い」として月7万円もらっている」

「給料とお小遣いは違うんですか?」

「大の大人が一月働いて給料7万なんて言ったら転職しているわ。お

小遣いと思うから我慢しているんだ」

「それで自分を騙せるのもスゴいとは思いますが、別の事務所に移ればいいんじゃないでしょうか？」

「それが奴は狡猾な上にバツクに恐ろしい組織がついている、というかその組織から俺たちを監理するために派遣されてきたようなもんだ」

「芸能界の暗闇という奴ですね」

「もつと恐ろしい組織だ。社長に逆らったらこっちの命が危ない」

いつもアンナちゃんと漫談していて楽しいお兄さんだと思っていたのだけど、こんな暗い現実を背負っていたなんて知らなかった。本当に本当に今までそんな陰など一度も感じたことはなかったのだけだ。

「そもそも何でそんな事務所に入ったんですか？」

「いやあ、ある日奴が来て「つべこべ抜かさずにこの書類にサインしなさい」というから、よく分からんがサインしたら、奴の事務所との契約書だったという話なんだが」

「お兄さんたちは、実印とか作らないようにしましょうね。というか書類の内容くらい読みましようよ」

「それが、いろいろとややこしい法律用語が一杯あって面倒くさくなっていたら「さっさとしなし」と怒鳴られて、しかたなくサインしたのだ」

「絵に書いたような自業自得ですね」

その時、開演のブザーがなって場内の証明が暗くなった。

「それはとりあえずおいておいて、今はコンサートを楽しみましよう」  
由美子が言った。

## 第15話

.....

.....

.....

.....

「.....あの.....」

「.....ウムム.....」

「.....あの、お兄さん。そろそろ起きてください」由美子が遠慮がちに颯太の肩を揺すった。

「.....うん？何で由美ちゃんが俺の部屋に？」

「随分豪快に寝ぼけてますけど、コンサート終わりましたよ」

「.....コンサート？」

「今はいちおうデート中なんですけど.....」

「おお、コンサートだったな。ちゃんと覚えているぞ。ベルリン・フィルハーモニー交響楽団のバッハコンサートだったな」

「なんでそう自信满满と中途半端に間違えきれるんですか？ウィーンフィルのモーツアルトコンサートです。最初の音が鳴った瞬間にREM睡眠に突入してましたよ」由美子が呆れたように言った。

「失礼なことを言う由美ちゃんだ。ちゃんと最初の曲くらいは覚えているぞ」

「それは逆に言うと最初の曲以外は寝ていたということなのでは？」

「いやー、それにしてもモーツアルトってのは結構最近の人だったんだなあ」

「.....最近？まあ18世紀の人ですから最近といえれば最近かもしれないですけど」

「この人はこの期に及んで急になにを言い出すのだろうか」と由美子は思った。

「ん？明治時代くらいの人じゃないのか？」

「一体なんでそういう勘違いをしたのか想像もつかないんですけど」

何の話をしているのだろうか？やっぱり理解できない。さすがに

あのアンナちゃんとは絶妙のコンビを組める地上唯一の人だけはある。「だって一曲目は「お掃除の歌」だろう。おそらく文部省唱歌かなにかだと思うんだが」

「……………」お掃除の歌」？」

由美子が記憶をたぐってみた。一曲目は確か……………」

「おっそおっじの時間だ。みっつなでさあやろう。雑巾、モップ、ほうき……………」うちの学校では、掃除の時間にあの曲が流れてみんな歌いながら掃除をしていたのだが」

「あのですね、お兄さん。あれは「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」という曲で……………」

「ほう、ドイツ語ではそういうのか。すると元はドイツ語の歌ということか」

「いえ、アイネは女性形の不定冠詞、クライネは「小さな」という意味で、ナハトムジークは夜の意味のナハトと音楽の意味のムジークの合成名詞で、全部合わせると「小さな夜の曲」という意味です。「小夜曲」とも言われています」

「ドイツでは夜に掃除をする風習でもあるのか？」

「いい加減にお掃除から離れて下さい。それ多分お兄さんの学校の音楽の先生が誰かが作った替え歌です」

「なにいく、うちの学校では掃除の時間にこれを流してみんなで歌いながら掃除をするというのが代々の風習だったのだが」

「ある意味、スゴい学校だとは思いますが……………」

まさかモーツアルトも死後200年以上も経ってから、存在も知らない国の中学校でお掃除のテーマソングとして使われるようになるとは想像もしなかつただろう。

「まあ、コンサートも終わったことだし食事にも行くか。由美ちゃん何でも好きなものを言いなさい「トゥール・ダルジャン」でも「数寄屋橋次郎」でも」

「お小遣い7万で大騒ぎしていた人のセリフとはとても思えないですね。じゃ「数寄屋橋次郎」のお鮎を……………」

「すいません、自分ちよつと見栄はつてみたんですが、まさかマジレス



がくるとは思いもしませんでした。よし、陽太の名前で予約だけはおいてやるから、腹いっぱい喰ってくるといい」

「わたしもそうくるとは思いもしなかったです。お兄さんの好きなものでいいですよ」

「どうもこの家の男たちは仲がいいのか悪いのかさっぱりわからない。」

「うーむ、かと言って俺のレベルに合わせて大変なことになりそうな気もするんだが・・・いつものシャイゼリアにするか?」

「でも、何かまた全員集合になりそうな気がしますけど。別なところに行きませんか?」

「別なところと言われてもなあ・・・」

「あのくお兄さん。わたし前から行きたかったんですけど勇気がなくてなかなか行けなかった店があつて」

「ゆっ由美ちゃんですら入るのに勇気がいる店だと!俺のお小遣い3ヶ月分で足りるのか?」

「そんな婚約指輪みたいなお店じゃないですよ」

「ただ、格好がこれだしなあ」颯太はジャージを眺めて言った。

「大丈夫ですよ」

「一体何を食いたいのだ?」

「吉田屋の牛丼というのを一回食べてみて」

「吉田屋くあ?何であんなものを」

「ほら、女の子だけじゃなかなか入れないじゃないですか。かと言って陽太くんとデザートで入る店でもないし。一回食べてみたいなあと思つてたんです」

「よし、由美ちゃんにはお兄さんが奢つてあげよう。特盛りセットにサラダをつけるという豪華版だ。何だったら納豆を追加してもいいぞ」

吉田屋と聞いた途端にお大尽気分で恩着せがましく奢ると言い出す颯太であつた。

## 第16話

【陽太と愛子のカップルの場合】

「くくくくそお〜」

少女は拳を握りしめながら映画館の前に立ち尽くしていた。なんだか知らないが、この娘は映画館に来る度に映画館の前で睨みつけているような気がする。

「どっどっどっしたのかな、愛ちゃん？」

「どうしたもこうしたもないですよ。見て下さいこの上映品目を。ボクたちがホラー映画を観ると決めてやって来た時に限って、コメディからラブロマンス、感動物にいたるまで多彩なラインナップを上映しているんですよ。この映画館の支配人は絶対ボクに何かの恨みを抱いているとしか思えませんよ」

「恐ろしいほどの逆恨みだと思うけど。で、結局何をみるのか決めたのかな」

「ふふふ、聞いただけで身の毛もよだちますよ」

「その笑いの方が怖いんだけど」

「なんと「3D貞子2」です。3Dで2と来た日にゃあ、3?2で怖さも6倍です」

「スゴい計算だな。それじゃあ「13日の金曜日 part13」だったら、13?13で169倍の怖さになるのかな？」

「そういう揚げ足取りはいいんです」

「.....」

うん、わかっていたんだ。この娘に常人の理屈は通用しないっていうことは。

「ところで今回のデートのテーマを覚えてますか、陽太君」

「ああ、余りにも衝撃的だったから忘れようがないよ。「克服」だったよね」

「そうです。そこでボクは考えたんです」

この娘はこれから絶対にロクでもないことを言い出すに違いないという確信が陽太の胸に芽生えた。

「たかが映画を見るのにこれ以上何か考えることがあるのかな？」

「その認識は甘いです。相手はあの由美ちゃんですよ」少女を陽太の顔をビシッと指さした。

「なんでいつの間にか由美ちゃんと戦っていることになっているんだ？」

「あの由美ちゃんですよ。廃病院の地下霊安室で血まみれの幽霊と出会ったら救急車を呼ぶような人を相手にボクと二人でホラー映画を見ただけで太刀打ちできると思いますか？」

「いや、それは計画の当初から言っていたことであって……」

もちろん陽太の発言なぞに聞く耳を持っていないはずもなく、有無を言わさずホラー映画を観ると決めたのはこの娘だったはずなのだが。

「そこで少しでも試練を多くすべきではないかとボクは考えたわけです」

「えーと、つまりどういうこと？」

「古来より獅子は我が子を千尋の谷に突き落とし、上から岩を投げつけると言います」

「いや、そんな器用な獅子はいないと思うんだけど」

「そこでボクも心を鬼にして陽大くんを試練を与えようかと……」  
「……試練？」

「はい、陽大くんはこの映画を一人で観てきて下さい。そして、ホラー映画を克服して由美ちゃんに頼れる陽大くん像を見せてあげるんです」

「愛ちゃん。君がそんなに俺たちのことを考えてくれていたなんて、感動したよ……」で、本音は？」

「ボクは「金魂 一國傾城編」を見てこようかと」

つくづく感動しなくてよかつたと思った。どうせこんなことだと思っていたんだが、まさか本当にそのままだとは思わなかった。

「さっ、寝言を言い終わって気がすんだら「3D貞子2」を観に行こうか」陽太は少女の首筋をムンズと掴んだ。

「待つて、待つて。金魂は今日までなんですよ」少女が必死に訴えた。

「DVDがレンタルされたら見ればいいじゃないか」

「DVDが出て、旧作になるまで待つてたら1年以上かかっちゃう」

「いや、別に新作で見ればいいんじゃないの？」

「だって、旧作だったら1000円でレンタルできるのに新作は390円って勿体無いじゃないですか」

「映画で1800円出そうとする娘が、何でそこで300円をケチるかなあ？」

本当にこの娘の考えは理解できない……………

## 第17話

「あの、陽太くん。猫じゃないんだからいい加減に首根っこから手を離してくれませんか」

「だめ、手を離したら愛ちゃん逃げちゃうだろう」

「行きますよ。ボクが貞子を観に行けば満足なんでしょう。行きますとも」

「なんで僕がそこで逆ギレされなきゃならないんだ？」

「ううっ、ボクの金魂・・・今日までなのに」

「いや、そもそもこのイベントを言い出したのも、デートのテーマを考えたのも愛ちゃんだっということを忘れてないかい？」

「そうでした。ボクにはホラー映画に慣れて程よく怖がりつつ、ここぞというところでキヤーッと康太に抱きつくという野望があったんです」

「何回聞いても本音ダダ漏れのいじましい野望だね」

冷静に考えてみれば、この娘の野望とやらのために自分が付き合わされているだけなのではないかという気もしてきたのだが、男として由美ちゃんにみつともないところは見せたくないという意地もある。例えそれがチワワがゴジラに挑むようなものだとしても。

「よし、じゃあ行きましよう。虎穴に入らずんば虎児を得ずです」本来の目的を思い出し俄然やる気を見せる少女だった。

「虎児って言うけど雄虎の巣穴に乗り込むようなもんだから虎児はいないような気がするんだけど・・・」

「そんな些細な問題に構っている場合じゃないです」

「いや、本質的な問題点だと思っただけ」

思考回路は全く理解できないが、行動は非常にわかりやすい少女なのであった。

「・・・じゃ、覚悟はいいですね」

「・・・うっ、うん」

「わかっていると思いますけど、もう一度確認しますよ。」3D貞子2」で怖さ6倍ですからね」

「その計算がどうしても理解できないんだけど」

「なんでT大の物理学科に入っていないながら3? 2 || 6の一桁の掛け算ができないんですか」

「いや、それを掛け算するという発想が理解できないんだよ、愛ちゃん」

「今更そんなこと言っている場合じゃないです。テーマは？」

「……………克服」だね」

「それさえわかっていれば十分です。さあ、行きますよ」

とても映画を観に行くとは思えないような意気込みで館内に突入していく二人だった。

……………二時間後

ロビーのソファアに力尽きたようにうつ伏せに突っ伏している二人の姿があった。

「……………」

「……………」

「あ……………ちゃん」

「……………」

「……………愛ちゃん、大丈夫かい」

「……………まら、ダメれふ」

「そつ、そうか。頑張ったんだね」

「ええ、ほりやもう精神力の限界を超えて頑張りました」

「そうか、本音丸出しとは言え野望のために頑張ったんだ。で、どの辺まで観たんだい」

「波が岩にブチ当たって砕け散っている辺りまでは覚えています」

「それは、映画会社のオープニングじゃないのかい？」

洋画で言えばサーチライトが照らし回っていたり、ライオンが吠えているようなところまで観て、映画を観てきたという人間はあまりいないと思うのだが。

「陽太くんはそう簡単に言いますけどね。今までのボクだったら映画館が暗くなると同時に固く目をつぶって両手で耳を塞いでいたんですよ」興奮のあまり少女が起き上がってまくし立てた。

「いや、僕にそれを言われても困るんだけど。映画を観ないという選択肢は浮かばないのかな？」

「何を言っているんですか。デートで映画を観ないなんて、もはや犯罪行為ですよ」

うむ、全くわからん。なんでこの娘はあれほど行動がわかりやすいというのに、これほどまでに思考が理解できないのだろうか？

「それをこの映画館と来たら毎回毎回ボクにホラー映画ばかり観せて。どこの世界にクリスマスにホラー映画祭りなんてやる映画館があるっていうんですか」

「どこの世界と言われても、この映画館がやったとしか言えないんだけど」

「やっぱり支配人に一般観客の生の声を聞かせてやらないと・・・」  
コブシを握りしめながら少女が立ち上がった。

「いや、愛ちゃん。それは完全無欠な言いだから」陽太が慌てて愛子を抑えた。

「離してください。ここの支配人に顧客マーケティングに基づいた映画館経営というものを教えてやらないとボクの気が済まないんです」

自分がホラー映画が嫌いということをここまで理論立てて正当化した上に、支配人に映画館経営まで説教できる女子高生はそうはいないだろう。大物という言葉はこの娘のためにあるに違いない。

## 第18話

【康太とアンナのカップルの場合】

「コータ、いい加減にしてください。歩いて10分の商店街まで1時間かけてもまだたどり着きません」

腰に両手をあててロシア娘は怒っていた。

「……お前こそ何度、腕を組むとか、むっ胸を押し付けるなど言えばわかるのだ」

腕に輸血の針を指して寝そべったまま少年が力なく答えた。

「デートならこれくらいは当たり前です。そんなに鼻血ばっかり出して飽きないんですか？」

「……人が趣味で鼻血を出しているような言い方をするんじゃない。女に触れるとこうなると何度説明すれば理解できるのだ、お前は」

「そこまで姉萌だと、ワタシも嬉しいデス」

「……別に姉だから鼻血が出るわけではない」

それにしても家からここまであっちこちに血溜まりができていくのだが、問題にはならないのだろうかときすがの超絶天然ボケのロシア娘ですら心配になった。

「ところでコータ、この血どうすればいいんですか？連続通り魔事件レベルにあっちこちで血溜まりになってマス」

「……心配いらん。町内の人間なら「あら、また土屋さんとの康太ちゃんだわ」で済ませてくれる」

「この町内はどれだけ治安が悪いんですか。ヨハネスブルグやデトロイトだって、これだけたくさん血溜まりつくっていたら、連続殺人事件で警察が飛んで来ますネ」

「……警察ならこの間うちに来た」

「さすがに事件になったんですネ」

「……いや、いつもより血の量が多かったから身体は大丈夫かと心配して見に来てくれたのだ」

「警察ですらそんなことしか問題にしないんですか、通り魔はこの町



内を狙うべきですネ。ところでなんでその時だけ血の量が多かったんですか？」

「……愛子のバカが、俺を脅かそうと後ろから抱きついてきたの……ブーツ」

その時のことを思い出して、少年は輸血しながら再び鼻血を吹き出した。

「思い出し鼻血という技は初めて見ました」アンナが感心したように言った。

「……だから技でも趣味でもない……ああ、その輸血パックを一つ取ってくれ」

「軍隊でもこれだけの輸血パックを常備していません」アンナが輸血パックを渡しながら言った。

「……写真用具と輸血パック代だけで、ムツツリ商会の収益はトントンなのだ」

「ワタシの写真を売れば、大儲けできますネ」

平然とアンナが言った。別に自慢気でもなく淡々と事実を述べているだけと言った風情が更に腹が立つ。いや、確かにアンナの写真は売れ筋で売上には大部貢献してくれている。だがそれ以上にこの娘は風呂あがりにバスタオル1枚巻いたままで歩き回るなどしてくれるものだから、被害はそれ以上なのだ。

「お袋、アンナにバスタオル巻いただけで家を歩き回るなど注意してくれ」と颯太がたまりかねて母に言ったことがあった。

「それもそうね。あの、アンナちゃん。バスタオルだけだと寒くて風邪引いちゃうわよ」

「そこを注意しろという意味じゃない」

「大丈夫ですよー。ロシアでは-20℃からを「寒い」と言いマス」

「人類のカテゴリーから外れて、マイペースで進化している民族は黙ってる」

「それ以外に何の問題があるのよ」母が不思議そうに尋ねた。

「問題大ありだろうが。この家には年頃の男が3人も揃っているんだぞ」

「そのどこが問題なの？アンナちゃんってばスタイルいいんだから、あんた達も眼福じゃないの」

「それが母親のセリフか！俺たちだって男なんだ。いつ狼になるかわからんぞ」

「はっ」母が鼻先で笑い飛ばした。

「このババ……ママン、その沸騰した鍋から手を離して。鼻先でお笑いになりやがりましたね」敬語がメチャクチャになっていた。

「いいこと教えてあげるわ。陽太は由美ちゃん一筋だから問題なし。康太は愛ちゃんが怖いからこれも問題なし。で、一番問題になりそうなのはあなたなんだけどね」ここまで言って母はため息をついた。「ママン、なぜため息なんでしょうか？」

「あんたが狼なるくらいに甲斐性があったら、あたしも来年には孫が抱ける予定だったはずなのに。アンナちゃんをホームステイさせた意味がないじゃない、本当に何の役にも立ちやしないったらありやしない」

「なにい、俺だって中学の頃は狂狼と不良どもから恐れられていた男だぞ」

「はいはい、確かに男相手のケンカは強かったわね。何度学校に呼び出されたことか」

「狼じゃねえか」だんだん話のポイントがズレてきたような気がするのだが、とりあえず話を合わせることにした。

「あのねえ、あんたお母様会で何て呼ばれているか知ってる？」母が尋ねた。

「ジェード・ロウに後ろ姿が似ているとか、右斜め上39°・28°の角度からみるとジョニー・デップの雰囲気を彷彿させることもある可能性が否定出来ないという意見を人から噂で聞いたことがあります」「それは似ていないということを婉曲に表現しているだけじゃないの？」

「いや、俺のことはいいから、お母様会でなんて呼ばれているんだ」

「お母様会じゃ、あんたは「羊の皮被った山羊」って呼ばれているの」「皮被る意味あるのか！」

「アンナちゃんが寝ぼけて夜這いした時、あなたどうしたからしら」  
「は、クリスチャンとして貞節を守るべく身体を固くして身を守っておりましよ」

「いつからクリスチャンになったのか、面倒くさいからきかないけど。自分よりも8歳も年下の女の子から夜這いかけてきたのよ。やることやらないや男じゃないでしょ」

「ママン、さきほどから保護者として不適切な発言が飛び交っているような気がするんですが」

だめだ、この母は既にアンナに洗脳されている（というより颯太の信用が全くないというのが真相なのだ）。俺がなにを言おうがアンナとの結婚は2人の間では既定路線になってしまっていて、自分の意見をいう隙がない。かと言ってこのままだとトンでもないことになるのは火を見るより明らかだ。颯太は10分間考えて理論武装をし、反論を想定してそれにたいする対抗案までシミュレートした」

「ちよと待て、俺にだって言いたいことがあるんだ」

「何よ、披露宴の食事は苦手の中華は抜いといてあげたわよ」

「そりや助かる……いや、そういう話じゃなくて、俺の意見も聞きやがれ」

「時間の無駄ね」母が声だけかけるとアンナとの話し合いにもどった。漏れ聞こえてくる話に耳をすますと、既に新婚旅行を通り越して新居の位置や付近の保育園情報についての話にまで進んでいる。いい加減に止めないと本当に逃げ場がなくなってしまう。

「ちがう。俺の話をちゃんと聴けと言っているんだ。俺には言論の自由はないのか」

「高校中退だから知らないだろうけど、不本意ながらあなたにも基本的人権としてそんな風なものはあるわね」

「じゃ、俺にも発言させろ」

「ただ、憲法の規定は言論の自由までであって、言論の後の自由は保証されていないんだけど、そこまで命かけて訴えたいことが何かあるの？」

「いえ、どうぞご歓談をお楽しみ下さい」

この時に颯太の運命は、老後の年金生活のやり方まで決まってしまうことは、まだ本人は知らない。

## 第19話

誠はいつもの駅のいつもの場所でイライラしながら待っていた。

「ねえ、陽向。そろそろ出て行かなくていいのかしら。竜崎はそろそろ我慢の限界みたいよ」由香が陽向に向かって言った。

「まだまだだよユカリん。愛ちゃんのデート作法によれば最低15分は待たさないよ」

「あんまり工藤先輩の言うことは、真に受けない方がいいと思うんだけど」

誠が意を決したかのように身体を反転させると、陽向たちが隠れている柱に向かって歩き出し裏に隠れている陽向の頭にゲンコを喰らわせた。

「痛いなあ、何すんのさマコちゃん」

「何すんのさじゃねえ。黙って待っててやりやいつまで待たせやがるんだ、このアホ」

「気がついてたの竜崎」由香が言った。

「気がつくも気がつかないも、毎回同じことやってるだろうがお前らは。着いた時から柱の影に隠れているのは知ってたわ」

「デートのルールだって愛ちゃんが……」陽向が頭を撫でながら言った。

「お前のアホにあの先輩の変なこだわりまで加えられた日にアホさ加減にターボが……ちよつと待て。お前、持っている金を全部出してみる」

「いきなりなにさ。カツアゲ？」陽向が抗議の声を上げた。

「カツアゲじゃねえ。あの先輩の妙なこだわりのお陰で去年のクリスマスにお前らの分まで金払わされて小遣い2ヶ月分が吹っ飛んだのを思い出したんだよ」

「デートは男の子が全部払うもんなんだよ」

「つべこべ抜かさずとつと出せ」

「全くマコちゃんは、男としての器が小さいんだから」陽向がブツクサ言いなながら所持金を誠に渡した。

「城ヶ崎由香くん」誠が陽向を睨みながら由香に話しかけた。

「なっ、なによ。いきなりフルネームで」

「今日の僕たちの目的は何だったかな？」

「陽向言うところのデートでしょ。お得感もドキドキ感も全くないけど」

「そうか、デートだったか。ところで土屋陽向くん」

「何かなマコちゃん？」

「何かなじゃねえ。この金は一体どういう見だ」誠の手のひらには500円硬貨が乗っていた。

「あたしの所持金の全額だけど？」陽向が臆することなど何もないとばかりに

胸を張って答えた。

「人を無理やり呼びつけた上にタカる気マンマンなのかお前は」

「だって、デートは男の子が払うものだって愛ちゃんが言うから、あたしが財布持つてる必要ないじゃん」陽向が悪びれずに言った。

「つまり確信犯だな。ふふふ、そうそう俺がお前の思いどおりになると思うなよ」

「どういう意味さ、マコちゃん」

「お前がタカりに来ると見越して俺も財布を置いてきた。これが俺の全財産だ」

誠が突き出した掌には500円硬貨が1枚と100円硬貨が2枚乗っていた。

「それが女の子とデートする男の態度なの」陽向が抗議の声を上げた。「うるせえ。最初から人の財布をあてにしている奴に言われたかあねえ」誠が答えた。

「ちよっ、ちよっと待ちなさいよ、あなたたち。2人して1200円で何しようっていうの」

「だってマコちゃんが・・・イタツ」

「このアホガ・・・グオツ」

二人に由香の怒りの鉄拳が炸裂した。

「全くあんたたち二人は揃いも揃って。しようがないから今日のとこ

ろは私が立て替えてあげるから、明日返しなさいよ」

「・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・おお」

「まったくやつぱり来るんじゃないわ・・・・・・・・あれ？」 由香がバッグの中を一生懸命探しだした。

「あの、ユカリん。どうしたのかな？」

「どうなさったんでしょうか、城ヶ崎さん」

「財布忘れて来ちゃったみたい、てへ」 由香がごまかし笑いを浮かべた。

「今どき「てへ」でごまかせるつもりだなんて、ユカリんも大概いい神経してるよね」

「それより俺たちが殴られたのは何だったんだ？」

「うるさいわね。私のは不可抗力。あなたたちみたいに確信犯じゃないの。それに小銭入れはあるみたいだから大丈夫よ」

由香が小銭入れを開けて中身を出してみたら、かろうじて1000円になった。

「3人で2200円・・・・・・・・」 陽向がつぶやいた。

「映画も見れないな・・・・・・・・」 誠も言った。

「いや、そんなことの前に帰りの電車賃の心配しなさいよ。とりあえず帰りの電車賃をそれぞれ取って」

それぞれの電車賃を確保したところ、残高が1260円になった。

「一人頭420円だね・・・・・・・・」

「コンビニ弁当も買えんぞ」

「おにぎりとお茶だったらなんとかなるよ」

「なんでデートって呼び出されておにぎり食べて帰らなきゃならないのよ。交通費の方がはるかに高いじゃない」

1年生トリオのデートはサバイバルの様相を呈してきたのであった。

## 第20話

「それにしても一人当たり420円で何すりやいいのよ」由香が考えこむように言った。

「なあ、俺もう帰ってもいいか？」誠は既に逃げ態勢に入った様子だった。

「ふふふ、心配ないよ二人とも」陽向が自信ありげに二人に向かって言った。

「あなたの断言に根拠があった試しがないんだけど、一体何をやらかすつもりなの？」由香が尋ねた。

「釣りをすればいいんだよ」

「あのね、陽向。そりや伊賀ではどこでだって釣りができたかも知れないけど、この都会で何を釣ろうってつもりなの？大体、海も川もないわよ」

「ユカリんって伊賀をどれくらい田舎だと思っているの？そのうち伊賀の人に本気で訴えられるよ」

書いている人の方がヒヤヒヤしているのであるから、ユカリんも少しは口を慎んで頂きたいものである。読者に伊賀の方がいないことを切に願う書いている人であった。

「別に魚を釣ろうってんじゃないよ」陽向が言った。

「相変わらずお前の言うことはサツパリわからんな。じゃあ一体何を釣るつもりなんだ？」

「不良が匂だし、ちよつと釣ってお金をいただこうかと」

「不良に匂なんてあるの？それにそれは立派な恐喝でしょうが」

「ユカリん、『カツアゲをしいのは、カツアゲをされる覚悟がある者だけだ』という諺もあるんだよ。カツアゲを仕事にしている以上、自分がカツアゲされることも覚悟しているはずだよ」

「いや、別にあいつらはカツアゲを仕事にしているわけじゃないと思うが」

「まあ、似たようなもんだよ」

「あつさり丸めたわね。というかわざわざ不良から恐喝しようなんて



考えるのは、あなたくらいのものよね」由香が呆れたように言った。

「だって一般人からカツアゲしたら犯罪だし……」

「不良から恐喝したって立派な犯罪なのよ」

「心配しないで大丈夫だよ。あたしとマコちんの二人でヤクザの組なら5つ位はニキビよりも簡単にツブせる計算だから」陽向が自信ありげに言った。

「勝手に俺を巻き込むな。大体その程度ならお前一人で十分だろうが」

「あたしにだって死角ができる時があるかも知れないから、その時にマコちゃんが必要なんだよ」

「俺を盾にする気マンマンじゃねえか」

「まあ、あたしとマコちゃんの二人でそこらの不良相手なら、中学校の新人バスケットボール地区予選大会にマイケル・ジョーダンが出るようなもんだね」

「よくわからない例えね」

「え、マイケル・ジョーダン知らないの？シカゴ・ブルズ全盛期のシューティング・ガードで、ダンクの時の滞空時間の長さから『エア・ジョーダン』と呼ばれ……」

「マイケル・ジョーダンの解説をしろって意味じゃないわよ」

「それに不良ならカツアゲされても、警察に訴える心配もないし」

「相変わらずどれだけ腹黒いんだ、お前は」誠が呆れたように言った。

既に不良釣りに意欲満々な陽向に向かって由香が言った。

「意気込んでいるところに水を差すようだけど、この辺りじゃ不良ってほとんど見ないわよ」

「やだなあ、ユカリん。不良ってのは一匹いたら三十匹は隠れているんだよ」

「ゴキブリみたいな連中なのね。わたしもよく知らないんだけど、十年ほど前に伝説の女裏番とその配下の五人衆で区内の不良を絶滅させたそうよ」

「その組み合わせに心当たりがイヤというほどあるんだけど」陽向の表情がこわばった。

「ああ、俺も噂で聞いたことがあるな。そのお陰でここらの不良は五人衆に目を付けられないように、髪を七三に分けて塾通いしているらしいぞ」

「それって普通に優等生なんじゃないの？」

「まあ、自覚の問題だからなあ。本人が不良だと思っていれば不良なんじゃないか？不良連中がそんな格好しているせいで、優等生は不良に間違われなないように髪を金髪に染めたりしているらしいぞ」

「もしかしてこの区の学生って、みんな馬鹿なんじゃないの？」

「お前（あなた）が言うな!!」由香と誠のコブシが陽向の頭に炸裂した。

「Wコブシは止めてっば。本当に痛いんだから」陽向が涙目で抗議した。

「あなたは身体に覚えこまさないと覚えないでしょ」

「まあ、身体に叩き込んでやっても三步で忘れる奴だがな」

「そうか、不良はいないのか。となると……」

「何かまたロクでもないこと言い出しそうね」

「奇遇だな俺もそう思う」

「この辺にヤクザの組はあるかな？」陽向が良いことを思いついたという様子で晴れ晴れとした顔で言った。

「じゃ、二人ともまた明日ね」由香が背を向けて言った。

「ああ、俺も一緒に帰るわ」誠も後を追って言った。

「待って待って二人とも。冗談だっば」陽向が慌てて言った。

「あなたが言う冗談に聞こえないのよ。恐喝から殴りこみにグレードアップしているじゃない」

「絶対に本気で言っていたろうが、お前は」

「とりあえず420円で『安全に合法的に』できることを考えましよう」由香が言った。

「デートの時に出てくる言葉じゃねえよなあ」誠がツブやいた。

## 第21話

「うーん、安全かつ合法的にかあ。いきなりハードルが高くなったね」  
陽向が考えこむように言った。

「そもそも普通のデートにやそんなハードルなんかねえんだよ。なん  
でお前とそんな『俺たちに明日はない』みたいなデートをせにやなら  
んのだ」誠が言った。

「マコちゃん古いなあ。そこは『ナチュラル・ボーン・キラーズ』って言っ  
てくれないと」

「やかましい。人を無理やり呼びつけといて、どれだけデンジャラス  
なデートさせるつもりだ、お前は。それにあの映画も大概古いだろう  
が」誠が怒鳴った。

「だって、お金がないのにユカリんってば『不良からのカツアゲも駄  
目、ヤクザの事務所に殴り込みも駄目』って無茶なことを言うんだも  
ん。あとはコンビニに押し入って借りるくらいしか思い浮かばな  
い……イタイイタイ」由香が陽向のこめかみにウメボシを喰  
らわした。

「わたしは『安・全・に・合・法・的・に』って言ったのよ。犯罪レベ  
ルを『強盗』にアップグレードしてどうするのよ」

「ユカリん痛いつてば、だから借りるだけだから犯罪じゃないって」陽  
向が必死に訴えた。

「『押し入る』って言ってる段階で犯罪だと思ってるでしょうが、あん  
たは。伊賀には法律って制度はなかったの?」

「おい、城ヶ崎。毎朝、隣の家から卵ドロボウをしてバアさんに鎖鎌振  
り回されていた奴にそんなこと言っても無駄だと思うぞ」誠が由香を  
止めた。

「そうだよ。多分、ここらのコンビニには鎖鎌は常備してないはずだ  
から『安全』だよ」陽向が勝ち誇ったように由香に言った。

「『合法的』って言葉を気持よくスルーしてるじゃないの。あなたに良  
いことを教えてあげるわ、土屋さん。確かに刑法には「強盗してはい  
けません」とは書いてないけれど、「強盗したら5年以上の懲役って書

いてあるの。今後の人生のためにしつかりと覚えておくといいわ」由香が眉間を揉みながら言った。

集合から20分経つても、集合場所から一步も移動していない一年生トリオなのであった。

「こうしていてもしょうが無いわね。街にでてウィンドウショッピングでもしましょうか。お金もかからないし」由香が提案した。

「ユカリんの家ってリフォームでもするの？」陽向が尋ねた。

「まあ、それしかないだろうな」誠も同意した。

「さすがに都会は違うよね。『窓屋』なんてあるなんて」

「一回りしたら時間もツブせるでしょう」

「ねえねえ、やっぱりバルコニー付きの窓がいいよね」

「土屋さん、ちよつと質問していいかしら？」由香が陽向に尋ねるよう  
に言った。

「何かな、ユカリん？」

「ツツコんで欲しいのかしら、殴って欲しいのかしら？」

「ええ、何で？ユカリんが自分から窓を買いに行くって言ったんじやない。でも窓なんて420円で買えるものなのかな？」陽向が心外そうに言った。

「ウィンドウショッピングを『窓買い』何て勝手に訳するんじゃないわよ。どこの世界に窓だけ売っている店やそれを買うに行く高校生がいるのよ」

「Windowは窓で、Shoppingは買い物だから、どこも間違いはないと思うんだけど」陽向が不思議そうに言った。

「あなたが一年の総代っていうのは、うちの学校の教育システムに何か致命的な欠陥があるとしたか思えないわね」由香がため息をつきながら言った。

「おい、アホ。ウィンドウショッピングってのは、窓をかうっていう意味じゃなくてショーウィンドウを見て回ることだ」

「へえ、東京じゃそういう意味なんだ」陽向が感心したように言った。

「伊賀を除いた世界中で同じ意味だよ」

本当にこれ以上、伊賀をdisるのは止めて頂きたいと心から願う

書いている人なのであった。

とりあえずこれ以上ここにいても埒が明かないので街に出ることにした。

「それにしても人が多いね。一体どこから湧いてくるんだろう」

「まあ、日曜だからな。カップルとか家族連れとかが多いんだろう。こんなアホな理由で出てきたのは俺たちくらいだと思っただけだな」

「そういう時に500円程度しか持ってこないのも、あなた達くらいだと思っただけだね」由香が冷たく言った。

「だって、愛ちゃんが……」陽向が言い訳するように言った。

「このアホのせいで……」誠も負けずに言い返した。

「二人ともいい加減に黙らないと、またゲンゴ喰らわせるわよ」由香がコブシを握りしめながら二人を睨みつけた。

「何か上から目線だけど、ユカリんだって結局1000円しか持ってなかったんだよね」陽向が声を潜めて誠に囁いた。

「(デートに行くのに財布を忘れる奴も滅多にいないと思うぞ)」誠が答えた。

「内緒話ならもつと小さい声でしなさい。丸聞こえだわよ。わたしのは不可抗力だって言っているでしょうが」由香が二人を怒鳴りつけた。

「いくら渋谷とは言え、異常に人が多くないか？」誠が不思議そうに言った。

「人が密集しているわね。何かテレビのロケでもやっているのかしら？」由香が答えた。

「あたし様子を見てくるよ」

陽向がそう言い残すと人混みの中にスルスルと消えていき、しばらくして戻って来た。

「何だったんだ？」

「事故でもあったの？」

「何かよくわからないんだけどお揃いのウェディングドレスを来たカップルがスクランブル交差点を道玄坂の方に歩いていて、みんな気味悪がって近寄らないもんだから渋滞していたみたい」

「ウエディグドレスのカップルう？何かの罰ゲームなんじゃないか？」

「テレビの撮影だったんじゃないの？」

「いや、別にカメラはなかったしそんな感じじゃなかったよ。それにカップルの小さい人の方になんか見覚えがある気がするんだよね」

「また、伊賀の人なの？」

「ユカリん、本当に伊賀をどんなどころだと思っっているの？あんなに目立つ忍者はいないよ」

「忍者がいるってだけで、十分普通じゃないわよ」

だから伊賀を……（以下略）

「お前に伊賀以外の知り合いはいないだろう」誠が身も蓋もないことを言った。

「いや、何か学校で見たことがある気がするんだけど……」

「あんたがいるだけで十分変な学校だとは思うけど、日曜の渋谷にカップルでウエディングドレスを着て歩く生徒がいるほどじゃないでしょ」

「くしゅん」

「アキくん、どうしました？風邪でもひいたんですか？」姉が優しく尋ねた。

「いや、何か噂されているのかな」

「噂されるほど、アキくんは学校で有名なのですか？」姉の目が厳しく光った。

「そうでもないけど、明日には全国区で有名になっていると思うんだ」

こんな姿を学校の連中に見られたら、失踪するしかないと思う明久であった。

## 第22話

「ほら、二人とも起きて起きて」陽向が二人に声をかけた。

「いきなり何を言い出すんだ、お前は」誠が不思議そうに言った。

「なんで寝てたことになってるのよ」由香も続けて言った。

「いや、二ヶ月も待機してたんだから冬眠してたのかなあと」陽向が答えた。

「どこの世界に渋谷の真ん中で2ヶ月も冬眠する人間がいるのよ」

「さつきから1分も経ってないぞ」

「えっ、そうなの？あたしの体感時間じゃ2ヶ月くらい経過していたんだけど」

由香と誠が顔を見合わせた後で、陽向に言い聞かせるように説明した。

「あのね、陽向。あたしたちはあんたの呼び出しでお得感もドキドキ感も全くない」「デート」とやたらに呼び出されて渋谷にいるのよ」

「おまけに1人当たり420円しかないから、ウィンドウショッピングしようとしているんじゃないか」

「二人とも説明的なセリフをありがとう。お陰で思い出したよ」

「人を無理やり呼び出しておいて、数秒で設定忘れてるんじゃないわよ」

「なんだその体感時間ってのは？」

「いや、ちよつと別の世界線に意識が飛んでいたみたいで2ヶ月くらい経過していた感じがしたんだよね」

「こんな人混みの中で器用な真似するわね、あんたは」

「なんで2ヶ月なんだ」

「いや、あたしも良くわからないんだけどね。ある男が2月に東京に転職が決っているのに、12月に胆石の手術で2週間入院して、1月には虫歯が化膿して抜歯するハメになっても15日まで勤務した後で、残り日数で東京に引っ越したんだけど、2月から新会社で働きだしたらいきなり45年ぶりの大雪とやらで、原付でコケて肋骨にヒビを入れたお陰であたし達の時間軸が2ヶ月停止してしまうという影

響が出たという……」

「随分言い訳めいた説明だが、それが俺たちに何の関係があるのかわからんな」

「それにしても、たった3ヶ月の間にそんな目に会うなんて、一体前世でどれだけ悪行を重ねればそんなことが起きるのかしらね」由香が呆れたように言った。

「そんなことないよ。「品行方正」・「人畜無害」・「諸行無常の響きあり」とご近所でもご好評を頂いているはずな人だよ」

「なんでお前が言い訳してるんだ？おまけに評判が願望じゃねえか」最後の褒め言葉じゃないと思うんだけど」

世の中には、大人の事情というか一介の高校生には知り得ない世界というのがあるのである。

「じゃ、これまでの状況説明も終わったことだし、デートの続きをしようか」陽向が言った。

「あんた、誰に何の説明をしたのよ」由香が訝しげに言った。

「いいからいいから、色々と事情というのがあったよ。ユカリん」

「それはそうと俺は前々から気になっていることがあるんだが」誠が首を捻りながら言った。

「何かな、マコちん」陽向が朗らかに答えた。

「今、何月なんだ？」

「……」

「……」

陽向と由香の顔が曇った。

「何で二人とも黙りこむんだ？」

「……」マコちん、それは触れてはいけなタブーなんだよ」

「少しは書いている人の事じよ……、いや空気を読みなさいよ、竜崎」

「何で俺が怒られなきゃならんのだ」

「あのね、そもそも「プロットくらい書け」と怒られて「そんな物はまだ食べたことがない」なんて答えるレベルの人が書いているんだよ」

「いや、書くとかかって何の話をしているんだ、お前は」思わぬ反撃に誠がウロたえたように言った。



「大体、デート1日の話書くのに半年以上かかっているのよ」何やら由香も怒っている様子である。

「勢いだけで2年も前にクリスマスデートの話書いちゃったもんだから、これからどうしようかと途方にくれているというのに……」

「ただできえネタが無くて困っているのに、そんなこと言うなんて……」由香が呆れたように言った。

「お前らの話は全く理解できん」誠がたまりかねたように言った。

「あのね、マコちゃん」陽向が教え諭すように言った。

「今度は何だ一体」

「日本の創作物はあまねく「サザエさん時空」という特殊世界に属しているね。時間の流れが止まるどころか、同じ歳を何度も繰り返すという規則なんだよ」

「そんな世界に生きてきた覚えはない」

「書いている人なんか、昔はカツオ君より年下だったのにいつの間にかマスオさんよりも歳上になっちゃったという恐ろしい現実が……」

「そんな個人の事情なんか知らんというか、個人情報ポロポロ公開しているんじゃないか」

「とにかく、マコちゃんにはクリスマス、正月、バレンタインとエロゲーイベントをこなしてフラッグ立てまくってもらわなきゃならないんだからね」

「エロゲー言うな。というか何でお前とそんなイベントこなさなきゃならんのだ」

「それには同意するわね。あんたと竜崎と二人でやってちょうだい」由香が言った。

「ユカリんもだいたい腹黒くなってきたね」陽向が感心するように言った。

「とにかく!!この世の崩壊を招くような発言は謹んでね」陽向がビシッと誠に指を突きつけて言い放った。

・・・・・・かくして世界はリセットされた。

だが今何月なのかはプロットを書かずに出オチだけの書いている人にもわからないのである。長門さんがいてくれたらと切に願う書いている人なのであった。

## 第23話

「それにしてもイヤになるくらいに人が多いな」誠がややイラついたように呟いた。

「日曜日の渋谷なんてこんなもんじゃない?」

「昔の「国民優生法」ってここにいるような人たちのために作られたんだね、きつと」陽向が楽しそうに言った。

「あんた、随分爽やかに恐ろしい毒吐いているわね」由香が呆れ返ったように言った。

「いや、だってさ。明日ここに原爆としたとしても世界に何の影響もないよ、きつと」

「それ以上言うとな権団体から訴えられるからやめとけ」誠が慌てて止めた。

「変な人が多いみたいだし、ウインドウショッピングよりもここで人を見ていた方が面白そうだね」

「変な人間なら学校でウンザリするほど見てるわよ」由香がため息混じりに言った。

「ああ、2年のFクラスの黒ミサの人たちや3年の高城先輩のことだね。あれはさすがの渋谷でも滅多にお目にかかれないよね」

「多分、城ヶ崎が言っているのは、ピンポイントでお前のことだと思うぞ」誠が憐れむように陽向に向かって言った。

「えー、だってあたし学校じゃ普通の制服だよ。別に変じゃないと思うけど」

「格好じゃなくて行動と性格のことを言っているのよ!!」由香が怒鳴りつけた。

「まあ、それはそれとしてこれからどうしようか?」陽向が全く意に介せずに答えた。

「馬耳東風って言葉を作った昔の人って偉かったと思うわ」由香が眉間を揉みながら呟いた。

「まあ、昔からこういうアホはいたってだけじゃないのか?」

「あたしだったらその場で絞め殺して、そんな言葉が存在する余地は

残さなかつたと思うもの」

「お前も大概すさまじい毒吐いているぞ」

三人がいつもの調子で会話をしながら道を歩いていると、前から来たチャラチャラした2人組の男がなれなれしそうな調子で由香に声をかけた。

「ねえ、彼女一人？俺たちいい店知ってるんだけど飯でも喰いにいかない？」ロン毛の男がニヤニヤ笑いながら言った。

「マコちゃん、あたしの身体もしかして透き通ってないかな？」陽向が横にいた誠に尋ねた。

「ああ、残念ながらハッキリと見えるな。それにしても三人で歩いている女に「一人？」って声をかけるってのも良い度胸だな」

「あたし達はアウト・オブ・眼中なんだね・・・ってマコちゃんは何でそんな浮かない顔してんのさ。やっぱユカリんの事が心配なのかな？」陽向が冷やかすように言った。

「いや、というかあの二人組に同情しているんだ」

「なんでナンパ男に同情しているのさ」

「オチが見えているからな。連中は今、生肉を持って草原を歩いているたらサフエリパークのど真ん中に迷い込んでしまっているという状況に気がついてないんだろうと思うと、同情を禁じ得ない」

「何を言ってるのかよくわからないんだけど？」

「まあ、好きにしろ。あまり大騒ぎ起こすなよ」

「いえ、あたしはその・・・」由香が明らかに動揺した様子で言った。

「いいじゃん、ちようどお昼時だし一緒に食事して親交を深めるということで」金髪の男が言った。

「あたし、あまりそういうこと・・・ムグ」由香の後ろに回り込んだ陽向が手を回して口を塞いだ。

「あなた、いきなり何するのよ」由香が陽向の方を振り向いて怒鳴った。

「まあまあ、ユカリん。せっかく優しいお兄さんたちが食事を奢ってくれるって言っているのに断つちゃ失礼だよ」陽向が由香を宥めるように言った。

「何だ、このガキ。いきなりどこから湧いてきやがった」ロン毛が怒鳴った。

「三人で歩いていたのにユカリんしか目に入らなかった集中力を褒めるべきなのかな？」陽向が由香に囁いた。

「知らないわよ。とにかく早くこいつら追っ払いなさいよ」由香が小声で答えた。

「とにかく俺たちはこの女に用があるんだよ。どっかに行きな」金髪がスゴんだ。

「にやは、あたしたちお金がなくて困ってたんですよ。食事奢ってくれる優しいお兄さんたちに会えて良かったなあ」

「なんで俺たちがチンチクリンのキューピ体型のガキに……グワツ」金髪の身体が2mほど後ろに吹っ飛んだ。

「やだ、あたししたら。手を振り回したら偶然当たっちゃって、お兄さん大丈夫ですか？」陽向が言った。

「あれ偶然なの？」由香が誠の方を向いて尋ねた。

「俺にはあのアホが正拳で鳩尾を正確に打ちぬいたようにしか見えなかったんだが」

「何をしやがる、このガキ」跳びかかってきたロン毛に向かって身体を沈めて回転しながら足を一閃して薙ぎ払った。足を払われたロン毛は見事に一回転して地面に転がった。

「大丈夫ですか、お兄さん。こんな何もなかったところで転ぶなんて脚氣じゃないですか？」陽向が涼しい顔で言った。

「あれも偶然なわけ？」由香が誠に尋ねた。

「中国拳法では旋風脚という技なんだが、あのアホは相手が自分で勝手に転んだと言い張るんだろうな」誠が確信を持って言い放った。

「倒した人の顔を踏みつぶしても、「あたしの足の下にあの人が顔を滑りこませてきたんです」って真顔で言い張りそうだわね、あの子」由香が呆れ顔でツブやいた。

「お兄さんたち、もっと身体を鍛えないと駄目ですよ。それにはまず食事からです。さあ、行きましょう」陽向が倒れた二人の首根っこを捕まえて引きずって行った。

ファミレスのテーブルに陽向たち三人とその向かい側に哀れな青年二人が向い合つて座っていた。

「これ、美味しいね。ユカリんもマコちゃんも遠慮なく食べなよ」陽向が美味しそうにステーキ&ハンバーグセットを頬張りながら二人に言った。

「なんであんたに遠慮しなきゃならないのよ」

「俺はこの人たちが哀れでな。ドリンクバーでいいわ」

「あの人、お金は払いますから俺たち帰っていいですかね」金髪の方がオズオズと言った。

「何言っているのさ。お兄さんたちが帰ったらただのカツアゲじゃない。一緒にいるから奢りなんだよ」

「これ以上ないくらいの恐喝だわよ」

「こうなるだろうとは思っていたが、やっぱりこうなったな」

「ユカリんもマコちゃんも遠慮深いんだね。こういう時は遠慮する方が失礼なんだよ。あ、お兄さん、あたしデザートにビッグパフェが食べたいなあ」

「どうぞどうぞ」ロン毛の青年が涙目で言った。

## 第24話

「気のせいかしら、また何だか時間が止まっていたような気がするね」  
陽向が言った。

「同じネタ禁止。そんなんだからマンネリだって言われるのよ」由香が遮るように言った。

「お前らは一体何の話をしているんだ？さっきから何分も経ってないと思うが。それはそれとして今度は何があつたんだ。交通事故か盲腸で入院でもしたのか？」誠が答えた。

「事情がわからないとか言っているわりには適切なツツコみいれるね。マコちゃん」

「本当に日頃どういう外道な生き方してればそんな目にあうのかしらね」

「いや、別に事故とか病気とかだったわけじゃないんだよ」

「色々と事情に詳しそうだな、お前は。じゃ、なんで更新が遅れてたんだよ」

「いや、書いている人がたまたま手に入れた本でネット動画を落とす方法を知ったらしくてね」

「それがどうしたのよ」

「書いている人が使っていたコンピュータがネットブックというスベックが低いものだったせいで、DVD1枚焼くのに半日ほどかかるらしくてその間は他の作業ができないという止むに止まれぬ深い事情が・・・」

「そんなアホな事情で2ヶ月も時間が止まっていたのか、しかしネット動画なんてそうはないだろうが」誠がイラ立ちながら言った。

「それがエロアニメ動画を落とすのに夢中になっちゃって・・・」

「ちよつと待ちなさい。その発言は色々危ないわ」由香が慌てて発言を止めた。

「大丈夫だよ、ユカリん。落として焼くのに一生懸命になるあまりに焼いたものは1枚も見えてないらしいから著作権的にも問題はないと思うよ」

「そもそも落とすことが問題なんだ。というかい加減に定年も視野に入ってきた人間がやることじゃねだろうが」誠が呆れたように言った。

「でも話が再開したということは、そういうことに飽きたわけかしら」由香が尋ねた。

「いや、あまりの遅さに業を煮やしてコンピュータを買い替えたらしいよ。CPUがインテルCore i5 ー4590に一気にグレードアップ。おかげで焼く時間が半日から1時間程度になって、バックグラウンドでの作業もラクラクになったおかげで更新する時間もできたという・・・」

「そんなアホな理由でコンピュータ買い替えたと知ったら、ビル・ゲイツも釘バット振り回しそうだな」

「まあまあ、これで少しは話が進むと思えば安いもんじゃないかな」陽向がなだめるように言った。

「そんな人の書いているSSに出されているなんて知ったらうちの両親に転校させられるわよ」由香がため息をつきながら言った。

「でもネタのために個人情報を切り売りする根性は大したもんでしょ」なぜか陽向が誇らしげに言った。

「そんなアホな根性はいらん」誠が吐き捨てるように言った。そして3人は連れ立って渋谷の街を歩き出した。

「あら、このお洋服カワイイわね」由香が洋服屋のウィンドウを見ながら言った。

「・・・・・・・・・・」

「ほほう、この文具は面白そうだな」誠も雑貨屋のディスプレイを見ながらつぶやく。

「・・・・・・・・・・」

「あ、この靴欲しかったの」「ちよつ、ちよつと待って二人とも。見るだけで買わないの?」陽向が不思議そうに尋ねた。

「あなたの頭のメモリって8bitくらいしかないのかしら? 私達にはお金が一人あたり400円程度しか無いって設定なのに何を買



えっっていうのよ」

「そもそもお前の変なこだわりでございまして、どうもご迷惑なところがあるというのを忘れてんじやねえ」

由香と誠が同時に怒鳴った。

「いつ、いや。お金がないなら自分でお店の人におねだりすればいいんじゃない。痛い痛い。ユカリん、ウメボシは止めて」

「何回わたしに「合法的に」って言わせれば気が済むのよ、あんたは。恐喝や殴り込みの次は強請りをするつもりなの？」由香が両拳を陽向のコメカミにグリグリしながら言った。

「いや、強請りじゃなくて「おねだり」だって……本当に痛いから止めて、ユカリん」陽向が涙目で哀願した。

「あんたはやることなすこと非合法なのよ」

「しかし、こいつはよく今まで警察に捕まらずに生きてこれたな」誠が呆れたように言った。

「いや、だってさ。見ているだけだなんて、カタログ集めて喜んでいようなもんじゃん」

「そもそもウインドウショッピングっていうのはそういうものなの」

「そうなの？まあ、カタログ集める方に喜びを感じる人もいるみたいだしね」陽向が納得したように言った。

「いや、そもそもカタログってのは物を買う資料として集めたり眺めたりするもんで、実物よりカタログがいいなんて奴いるのか？」誠が不思議そうに言った。

「えっ、颯兄なんて女の子のカタログ集めるのに一生懸命だよ」

「女の子のカタログって何よ」由香が尋ねた。

「いや、水着とか裸の女の子が出ている雑誌とか何だけど」

「そりゃ、単なるエロ本じゃねえのか？」

「だって、アンナちゃんっていうゴージャスな美人に言い寄られてるのに目もくれないでそんな本集めてるんだよ。カタログの方が好きだと思えないんだけど」

「そういうもんなの、竜崎」由香が誠に尋ねた。

「そこで俺に振るんじやねえ。あんなストコドッコイな兄貴の考え

ていることなんて俺に理解できるわけないだろうが」誠が言った。

「Z軸のある女には期待していない」とか颯兄は言っているんだけど」

「いい歳した大人のセリフじゃないわね」由香が呆れたように言った。「どうか何で兄貴がそんな本持っているなんてお前が知ってるんだ。そういうのは男にとっては最大の秘密だぞ」誠が陽向に尋ねた。

「そりゃ、アンナちゃんが定期的に搜索しているもの。スペツナズのスベックに愛ちゃん仕込みの探知技術まで会得したものだから隠すのは不可能だね」

「相変わらずロクでもないことしかしない家族だわね」

「この間なんて、ビニール袋に入れてトイレタンクの中に隠していたDVDが発見されて大騒ぎ」

「お前の兄貴は麻薬でも売ってるのか？」

「アンナちゃんが激怒しちゃって、颯兄は正座で2時間アンナちゃんに説教されていたよ」

「まあ、彼氏がHなDVDなんて隠していたら怒るのは当然だとは思うけど」

「あつ、いや。怒っていたのはDVDに自分に似ている娘が一人もいないって理由だったんだけど」

「エロDVDそのものじゃなくて、そこが怒るポイントだったのか？」誠が気の毒そうに尋ねた。

「うん、そういうもの自体はアンナちゃん的には問題じゃないみたい。だから颯兄の女の子カタログはアンナちゃんの検閲を受けて見えないと許可をもらう必要があるんだよ」

「17歳の女子高生にHな本を見ていいかの許可を得る25歳男性つても哀れな話だわね」

「うん、だからアンナちゃんの搜索の目をごまかそうと色々無駄な努力しているみたいだけどね」陽向があっけらかんと言った。

「そこまでして見たいものなのかしら」

「頼めばアンナちゃんがいくらでも見せてくれるのにねえ。だから実物よりもカタログの方が好きなんじゃないのかと」

「いや、それは絶対に違おうと思うぞ」男としての同情を感じながら誠が言った。

## 第25話

その日の夕方、「反省会までがデートだよ」という愛子が宣言したおかげで、土屋家には全員が揃うことになっていった。

「何であたし達まで参加する必要があるのよ」由香が呟いた。

「だって愛ちゃんが反省会するっていうから全員集合しなくちゃいけないんだよ」陽向が非難の声を上げた。

「とことんハタ迷惑な人だな。というか全ての問題をお前が一人で起こしてたんだから、お前だけ猛省すりゃいいだけの話じゃねえか」誠も同意するように言った。

「その割には素直についてきたよね、マコちゃん」

「ああ、あの先輩にお前にこれ以上アホな入れ知恵するなっつてことを言い聞かせておかないとな、それと・・・」

「まだ何かあるの?」

「あのアホ兄貴に徹底的に文句言っつてやらなきや俺の気がすまん。赤の他人にこんなハタ迷惑な代物押し付けやがっつて」

「愛ちゃんに対する苦情だったら颯兄じゃなくっつて康兄に言わないと・・・」

「竜崎が言っているのは100%あなたのことだと思っただけど」由香が幼児に諭すように言った。

「兄貴が3人もいるっつてのに「アホ」だけで誰のことかわかるっつてもスゴい兄妹だな」誠が呆れたようにツブやいた。

「土屋一族の間じゃ陽兄は「ヘタレ」で、康兄は「ムツツリ」っつて呼ばれてるんだよ」陽向がなぜか誇らしげに言った。

「あなたのところのストコドツコイな一族の中でも「アホ」っつて呼ばれてるっつてどれだけなのよ」

「全員が彼女の尻に敷かれているっつて時点で「ヘタレ」なんだよ!」

「いやいや、マコちゃん。土屋一族じゃお父さんは一番偉いんだよ」陽向がむきになって反論した。

「ストコドツコイとは言え伝統ある頭領の家柄ともなると男尊女卑なわけね」由香が感心したように言った。

「うん、土屋一族の家庭は立憲君主制だからね。「君臨すれども統治せず」をモットーにしているんだよ」

「とてもそんな立派な思想を持った一族には思えんのだが」誠が首をひねって言った。

「だからお父さんが君臨して、お母さんが「司法・立法・行政」の権限を一手に引き受けるという分業制度が・・・」

「それは「尻に敷かれてる」という状態を婉曲に表現しているだけなんじゃないかしら？」

「なんの話させてもロクでもねえオチしか出てこない一族だな」

「毎年年度末になると翌年度の王室予算の月額10000円の増額を巡ってお父さんとお母さんの間で火花が飛び散るような予算折衝会議があるんだけど、毎年却下されてるんだよねえ」

「ずいぶん壮大な話になってるけど、要するにお父さんが月のお小遣いを10000円上げろってお願いしているだけなんじゃないの？」  
「そりやお袋さんが全権握ってるんだから、即座に却下されるに決まってるだろうに」

「失礼だよ、マコちん。土屋家は民主主義家族だからお父さんやあたしたち兄妹にも議決権はあるんだよ」

「それなら全員上がってもいいんじゃないのかしら？」

「誰かがお小遣いの増額を要求するとお母さんが「上げてもいいんだけど、その分誰のお小遣いを減らせばいいのかしら」ってツブやくだけで、他の人間が全員反対に回るんだよね」

「前からずーっと思ってたんだが、お前ら本当は全員血が繋がってないんじゃないのか？」

「うーん、「他人の幸せは許さない」という考え方は全員一緒だから一応血は繋がっていると思うんだけど」

「自分でも自信がないわけね。そういう外道な思想を持つてる人間ってそうそういないと思うから、あなたたちは間違いなく家族だとわたしも思うわ。なんで一緒に暮らせているのかがわからないけど」

まさか自分が毎日通っている学園に同じドグマを受け継ぎし闇の一団がいるということに思い至らない由香なのであった（ついでに言

えば「相手の不幸を願っている」わけではないものの、結果的に相手を不幸のズンドコに叩き落としてしまう人間が約3人(翔子、愛子、アンナ)ほどいるのだが。

やがて3人は土屋家の玄関まで辿り着いた。

「じゃ、2人とも入って」陽向がドアに手をかけながら言った。

「ねえ、さつきから気になっていたんだけど」由香が尋ねた。

「俺もずっと気になっていた。商店街からの道のあっちこっちに血の跡みたくものがあって、それがこの家の玄関まで続いているんだが」「陽向、何か事件でもあったんじゃないかしら。警察に電話した方がいいんじゃない?」

「ああ、気にしなくていいよ。たぶん康兄の鼻血だから」陽向がこともなげに言った。

「いや、鼻血なんて可愛いもんじゃなくて血だまりになっていたぞ」

「今日の康兄のデート相手は、セクシーダイナマイツのアンナちゃんだからね。いつもより多く鼻血が出たんだと思うよ。でもやっぱり彼女の愛ちゃんに手を握られた時の方がスゴいよ」あくまで気にしない陽向であった。

「やっぱり事件じゃないかしら。警察に電話した方が・・・」由香が心配そうに言った。

「いや、警察に電話した方が家族的には問題なんだよ」

「まあ事件だったら全国ニュースレベルの出血だったしな。巻き込まれると問題なのはわかるが・・・」さすがに誠も心配になったようである。

「警察に電話したら「ちゃんと掃除しておいてください」って怒られるから、面倒くさいったらありゃしない」

「あなたの家庭的にはそっちの方が心配なのね」

「大体この辺でうちに何かしに入る根性のある強盗なんていないよ?ラスボスのお母さん倒そうと思ったなら自衛隊に出動要請出さないと。運悪くお母様会の会合の時なんかに出くわした日にゃあ、強盗が警察に同情されちゃうよ」

「治安はいいかもしれんが、環境は極悪な地区だな」

「まあ、そんな些細なことはどうもいから入ろう。もうみんな待ってるはずだよ」陽向が玄関前のひとときわ大きな血だまりの跡を避けながら玄関のドアを開けた。

## 第26話

「ただいま〜」陽向が元気よくドアを開けた。

「ささ、二人共遠慮無く入って」友達を家に遊びにきたのは初めての経験である陽向は嬉しそうだった。

「とても遠慮したい気分なんだけど」由香がウンザリとした声で言った。

「今さら言ってもしょうがない。さっさと反省会とやらを終わらせて帰ろうぜ」誠はすでに開き直ったようである。

「おお、遅かったな陽向。楽しいデートだったようだな」リビングから颯太が出てきて出迎えた。

「うん、渋谷に言っただけだけど親切な人が多くてさ。食事を3回もご馳走になっちゃったよ」

「ほほう、相変わらず渋谷はいい人が多いんだな」  
「えっ？颯兄も何かあったの」

「うむ、俺達も昔金が無くなるによく渋谷に遊びに行つて色々な人に奢ってもらったもんだ。人を外観だけで判断しちゃいかんぞ陽向。金髪とかタトゥーとかガラが悪そうな人ほど良い人が多いんだ」颯太が懐かしそうな目をしながら言った。

「（それってあのアホと同じように不良殴り倒して無理やり奢らせたってことじゃないのか？）」誠が由香に囁いた。

「（さすが兄妹ね。やってることが全く同じだわ）」由香が感心したように答えた。

「お、そこにいるのはマコちゃんじゃないか。ハハハ気が早いなあ。親父とお袋はいないが、長男として土屋家を代表して許可するぞ」陽向の後ろに二人が立っているのに気がついた颯太が上機嫌で誠に言った。

「いきなり何を言い出してやがる。というかあんたまでマコちゃん言うな」誠が怒鳴った。

「ねえ、陽向。あなたの家庭の公用語は何語なの？あなた以上に何言ってるのかわからないんだけど」由香が途方にくれたような顔で陽



向に尋ねた。

「いやあ、颯兄の考えていることは妹のあたしでも時々何がなにやら」「とりあえず確認するが、俺は今あんたから何を許可されたことになっっているんだ?」

「ん?卒業まで待てないから今すぐ陽向を嫁にくれと言いに来たんだろう?」

「アホかあんたは。俺はまだ高1だという以前に、なんであのアホを嫁にせにやならんのだ?」

「男が女の家に行くつてのは、結婚の許可を貰いに行く以外にないだろう。親父達がいらないから俺が許可してやったんだが」全く動じずに颯太が答えた。

「(ねえ、陽向)」由香が声を潜めて陽向に囁いた。

「(何かな、ユカリん?)」つられて陽向も小声で答えた。

「(あなた達はやっぱり実の兄妹だわ。発想が常人レベルじゃないもの)」

「(いや、それより男の子が女の子の家に来るのが結婚の許可を貰いに以外ないって颯兄は断言しているけど、自分はアンナちゃんと既に同じ家で暮らしてるとって忘れてるんじゃないのかな? km単位で墓穴掘っているような気がするんだけど)」

「いや、なんでと言われても陽向は君に預けたと言ったはずだが?」

「あんたらが一方的にアホの世話を俺に押し付けただけだろうが!!」

「荷物は後で宅配で送ってやるから、さっそく今日からでも家に連れて帰って構わんぞ」

「俺の話聞いて、このアホ兄貴」

「ははは、もう義兄(にい)さんと呼んでくれているのか、気の早いマコちんだ。いやいや、俺は全く構わんぞ」

「アホ兄貴つてのは義兄さんって意味じゃねえ!!」

大声で怒鳴る誠とニコニコと受け流す颯太の会話の様子を見ながら由香と陽向がヒソヒソと話し合っていた。

「(凄まじく話が噛み合っていないわね)」

「(なんだか猫の子をあげるみたいなライト感覚だね)」

「(念のために言っておくけど、話の中心はあんたのことなのよ)」  
「(そりゃわかっているけど、あたしもマコちゃん好きだから別に構わないよ)」

「(あなたの「好き」って言葉の意味を知りたいものだわ。例えばラーメンと竜崎だったらどっちが好きなの)」

「(ユカリん、それはいくら何でもあたしに失礼だよ。ラーメンとマコちゃんが比較になるわけじゃないじゃない)」

「(じゃ、卵かけご飯と竜崎だったら?)」

「(.....ちよつと考えていい?)」

「(そんな予感はしていたけれど、まさか本当にその程度だったとは思わなかったわ)」

「(だってあたし本当に卵かけご飯が好きで、伊賀じゃ身の危険も顧みずに鎖鎌バアさんの家から卵をくすねてくるのが日課で.....)」  
「(そんなんだから、毎朝賛美歌十三番が村中に響きわたっていたんでしょうが!!)」

なぜか由香と陽向の言い争いが始まってしまったのであった。

「ソータ、玄関先でうるさいデス」あまりの騒がしさにアンナがリビングから出てきて言った。

「ああ、アンナ喜べ。マコちゃんが陽向を嫁にもらいに来たぞ」颯太が嬉しそうにアンナに向かって言った。

「だから俺の話聞いてんだろうが、アホ兄貴」

「まあ、それは素敵ですネ。陽向たちもワタシとソータのように幸せな夫婦になればいいですネ」アンナがうつとりしたような顔で言った。

「ちよつと待て、アンナ。何で俺とお前が夫婦ということになっっているんだ」それまでニコニコしていた颯太が慌てた様子で言った。

「ちよつと待て」は俺のセリフだ。人様に妹の面倒押し付けておきながら自分はどんだけ後ろ向きに全力疾走で逃げてやがる」

「死が二人を別つまで陽向とマコちゃん是一緒ですネ」颯太の発言をそよ風のように聞き流しながらアンナが言った。

「ははは、アンナ君なにをバカなことを言っているんだね」颯太がたし

なめるように言った。

「当たり前だ。あんなのと一生一緒にいられるか」

「我が家は仏教徒だからな。輪廻の輪から抜け出るまでマコちゃんには陽向と一緒にいてもらわないとな。ちなみに仏教にチェンジシステムはない」

「あんだ、あれを永遠に俺に押し付ける気だったのか。それとチェンジってのは何だチェンジって」

「それは高校生が知る必要はないシステムだ」颯太が口ごもった。

「ワタシもそれが気になりますネ。チェンジシステムって何ですか？」アンナが一段低い声で颯太に詰め寄った。

「君は黙ってなさい、アンナ君」

「ワタシの妻のカンが最大音量の警報を鳴らしていますネ」

「はた迷惑な機能を実装しやがって。女には関係はないことだし、マコちゃんも大人になればわかるとしか答えようが・・・」

「ソータ、後でお話がありマス」

「ごつ誤解をするな、落ち着くんだアンナ・マリア・カリーニン君」風俗通いがバレた亭主のようにウロたえた様子の颯太が言った。

「やかましい！夫婦喧嘩は後にしやがれ。今はあのアホの飼い主の話だ」誠がたまりかねたように怒鳴った。

「おお、そうだった。何やらマコちゃんは誤解しているようだが、マコちゃんに陽向を永遠に押し付けるほど我々は無責任ではないぞ」

「あれを押し付けている時点で100%無責任なんだよ」

「常識で考えて永遠などと無理を言うことくらいわかるだろうに、弥勒菩薩が降臨するまでのちよつとの間だけ面倒を見てくれればいいのだ」

「で、その弥勒菩薩とやらはいつ降臨してくれるんだ？」

「うむ、浄土経によればおよそ56億7600万年後には・・・」

「それはほとんど「永遠」と同じ意味なんだよ!!」

アンナの登場によって事態は混迷の度合いを更に深めた様子であった。

「(竜崎も文月学園何かに入学したせいで凄い災難に見舞われている

わね」由香がため息をつきながらつぶやいた。

「(本当にどれだけ業(カルマ)を背負ってりや、そんなハメになるんだらうね?)」

「(一応念を押しておくけど、あれはあなたの話なのよ。竜崎もわけがわかんなくなっちゃって、とりあえずあなたを引き取るという前提で面倒をみる期間に話に移っちゃっているわよ)」

「(ユカリさんも参加して一応自分の意見を言った方がいいんじゃない?)」

「(なんで私があなたと竜崎の問題に首を突っ込まなきゃならないのよ)」無意識に距離をおいていることに気がつかない由香であった。

「(だって、ユカリ人にはちゃんと「19代目お華」の座があるわけだし、意見があるなら今のうちに言っておいた方がいいよ。たぶん颯兄にもアンナちゃんにも「人の話を聞く」という機能は実装されていないと思うけど)」

「(それじゃ意味ないじゃない。というかあなた本気で猫の名前を私に継がすつもりなわけ)」

「(お華が嫌なら15代目隴の局の座もあるけど、そっちがいいの?)」  
「わたしをあんたのこのスットコドツコイな一族に巻き込むなって言っているのよ。大体誰なの隴の局 っていうのは」

段々感情が高ぶってきたのかヒソヒソ声からいつしか普通の声に戻っていることに気がつかない由香であった。

「いや、土屋本家の女中頭で正室の腹心の部下なんだけど、その権力は頭首である土屋正蔵をも遥かに凌ぐと言われており・・・」

「女中頭よりも立場が弱いなんて、土屋正蔵ってのは本当に伊賀忍者の頭領なの?」

「本当に失礼だよユカリん。村の全体清掃や山の下草刈りなどのみんなでやる行事の日なんかがある時には、配下の者が表と裏の門を前日から寝ずの番で警護につくくらいに慕われているんだよ」

「行事にあわせてどこから襲撃されるの?今の時代に頭領ってのも大変だわね、警察に任せただ方がいいんじゃない」

「いや、襲われたことはないんだけど、お祖父ちゃんが草刈りの前の夜

に逃げ出した翌年からなぜか警護がつくようになったんだよねえ」

「それは伊賀以外の日本語じゃ「警護」じゃなくて、逃がさないための「見張り」って言うのよ。というか、たかが山の下草刈りで不寝番って伊賀忍者ってのはどれだけ草刈りに命賭けているのよ」

「いや、やっぱり頭領がいないと戦には勝てないから」

「伊賀の雑草は人間でも襲うってのかしら」

「バカだなあ、ユカリん。草が人間を襲うわけがないじゃない。頭領がいないと誰かが逃げ出そうとして……」

「ええ、たぶんバカなことしているんだろなあと想像できるから解説は結構よ。それはそうと隴の局ってのは今は誰が継いでいるわけ？犬の名前なんて言ったら本気で絞め殺すわよ」由香が低い声でスゴんだ。

「親友に犬の名前継がすなんて失礼なことするわけないじゃん」陽向が悪びれずにあっけらかんと答えた。

「その親友に猫の名前継がそうとした女だったのよ、あんたは!!」思わず怒鳴る由香であった。

「14代目隴の局は今町内の婦人会のオバちゃん達が月交代で持ち回っているんだよ」

「15代目に引き継がす必要ないじゃないのよ!!!」

いつしか玄関での怒鳴り合いが2組になっていた。

## 第27話

「こうして人々は生きるためにこの街へ集まって来るのだが、僕にはそれがここで死ぬためのように思える」

「……………ん？あ、これは今書いている「マルテの手記」だった。久しぶりだから書き間違ってしまった。」

「今日、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、僕には分からない」……………これは「異邦人」だね。」

などと盛大な見栄を張って書き間違ったフリをしてみた書いている人だったのであるが、実はここから先を覚えていないので書き間違いに気がついたように無理やり終わらせただけである（そうでなければ「異邦人」を丸ごと写しかねない男なのだ）。

「……………ダツ……………ダカ……………」陽向がかすれた声で言った。「なんでいきなり声が枯れているのよ」

「だってユカリん。半年以上もこの怒鳴り合いを続けているんだよ。いいかげん声だって枯れるよ」

「なに言っているのよ、あんたは？さっきからまだ10分も経ってなわよ」

「ユカリん。人間には体感時間ってというのがあってね。あたしの中じゃ半年以上経過しているんだけど……………」

「だからそういうネタの使い回しがマンネリって言われる原因なのよ」

「どこで言われているのか知らないけど、こんなマイナーSS読んでいる人はそうはいないと思うし、いいかげん読んでくれていた人だって前の話なんて忘れてるよ」

書いている本人ですら前話のヒキを忘れてるほどであるから覚えてくれている人などまずいことを確信せずにはいられない。

一方、誠を置き去りにして颯太とアンナの怒鳴り合いも続いていた。

「ダカラ私は「チェンジシステム」とはナニカということ聞いています」

「おつ、落ち着き給えアンナ・マリア・カリーニン君。これは日本の風ぞ・・・いや、仏教界の深遠なシステムで一言では説明できん。何よりやましいことなぞ何一つないから、君が知る・・・心配する必要はない話だ」

「目をソラすどころか、顔を90度横に向けて言われても信用できません。それに私の中のゴーストが最大音量で問い詰めろと囁いてますネ」アンナが目を細めながら颯太に詰め寄った。

「っただけハタ迷惑なものを色々と装備しているんだ、お前は」

「ソータ・・・」アンナが微笑みながら言った。

「な、なんだ」

「よくあれでアンナさん納得したわね？」二人の様子を見ていた由香が不思議そうに呟いた。

「なんでそう思うのさ、ユカリん」

「だって、さっきまで怒りオーラ全開だったのに、とでもリラックスしている感じだわ」

「甘いよ、ユカリん。一流のプロがリラックスしているというのは最大レベルの警戒体制なんだよ」陽向が元ネタばればれの教えを諭すように由香に解説した。

「日本の高校に留学しているロシアの女子高生が何のプロフェッショナルなのよ」

「まあ、アンナちゃんの場合は颯兄にベタ惚れということと廃人レベルのオタクということを除けば、ほとんど完璧超人だから・・・」

「それってほとんど役立たずと言っているのと同じ意味じゃないの？発揮できる能力なんて10%もないわよ」呆れたように由香が言った。

「お前もたいがいナチュラルに凄い毒をはくな」いつの間にかやら誠が会話に参加した。

「あれ、マコちゃん。こっちに参加することにしたの？」陽向が尋ねた。

「どうもあの二人の戦いが別次元に突入したらしく俺がアウト・オブ・眼中になっっているようだからな」

「ソータ、3秒だけ待ってあげマス。さっさと白状して下サイ」アンナ

が微笑みながら言った。

「いや、白状も何も・・・」

「ヒトーツ」と言った瞬間、アンナの右手が颯太の顔面に飛んだ。

しかしながら、颯太もダテに幼稚園の頃からお母様会にボテ繰り回されてきたわけではない、アンナの意表を突くパンチを紙一重で避けた。

「ナカナカやりますネ」アンナは余裕の表情を崩さない。

「やりますネ」じゃねえ。3秒待つと言いながら1秒でパンチ打ちこんでるじゃねえか」

「男は「イチだけ覚えておけば生きて行ける」とアイコが言っていましたネ」

「じゃ、わざわざ「3秒待つ」なんて言ってるんじゃねえ。それに大体そのセリフは金魂の丸パクリな上に、そもそも愛ちゃんの言うことをまともに受け止めるな」

「なんだか知らないけど随分色んな人に飛び火させるハタ迷惑なケンカだね」由香が冷静に解説した。

「というか今のパンチなんて全然見えなかったぞ。おまえのアホ兄貴よくあれをかわせたな」誠が感心したように言った。

「そりやもう、幼稚園の頃から外に出たら4バカとケンカ、うちに帰ればお母さんに折檻の毎日を20年以上も続けていたら、あれくらいは余裕でかわせるよ」

「普通の人間ならそんな能力が身につく前に反省して行動を改めると思うんだけど」由香が呆れたように言った。



## 第28話

言い争いどころか今や徒手格闘にまで発展した颯太とアンナが玄関先でドタバタやっているのを聞きつけたのか由美子がリビングから姿を見せた。

「あの〜アンナちゃんがお兄さんが遅いから呼びに行くと言っていたはずなのになんで格闘になっているんですか」目の前でアンナの攻撃をかわす颯太を見ながらものんびりとした口調で由美子が尋ねた。

「おお、由美ちゃん一年半ぶりだな」颯太が由美子の方を振り返りながら懐かしそうに言った。

「いえ、お兄さんがリビングから出て行ってから10分も経ってないですし、何より同じネタを3回も引つ張つたらガンジーでも金属バットで夜の校舎の窓ガラス壊して回ると思えますよ」由美子がインド人に聞かれたら宣戦布告をされそうなセリフを心配そうに言った。

「そんな80年代の不良みたいなガンジーはおらん」颯太が答えた。

「とりあえず何をしているんですか」由美子は颯太の言葉をさりげなく聞き流して尋ねた。

「いや、仏教とキリスト教における「赦し」の概念の違いについて、アンナ君と議論していたらつい白熱してしまっただけ」颯太が自信満々と答えた。

「おい、「チェンジシステム」とやらはそんな高尚な話だったのか？」誠が陽向に向かって尋ねた。

「あのお兄さんにしては難しい言葉を知っているわね」由香は失礼な感想を口にした。

「うーん、颯兄のことだから200%意味は理解していないと思うんだけど、口からでまかせでそれらしい言い訳をするスキルは子供の頃から鍛えられているからね」陽向が答えた。

「それで悪さを誤魔化していたわけか」

「でもお母さんは最初から颯兄の言うことなんか聞いちゃいないから、結局殴られるだけで言い訳する意味はないんだけどね」

「何の役にも立たないスキルね」

「でも初対面の人には効くんだよ。2回目からは全く信用されないけど」

「どれだけ底が浅いんだ、お前の兄貴は」

「じゃ、マコちゃんは颯兄の言うこと信じれる？」

「全く信用せん」誠がキツパリと断言した。

「逆の意味でスゴい信頼度だね」由香も納得した様子であった。

「我が家では「颯兄の言っていることは聞き流せ。どうせ大したこと言っていない」というのが家訓になってるんだよ」

「お前の家に家訓が必要な意味がわからん」

「だから伊賀忍者の頭領の家系だから代々の家訓が伝わってるんだってば」

「私が聞いた限りでは家訓のほとんどが忍者とは関係ないことばばかりだったんだけど」

「土屋一族はフレキシビリティが高いんだよ」陽向が胸を張って言った。

「まあ、あなたのとこのスットコドツコイな一族のやりそうなことではあるんだけど」由香は何となく納得したようであった。

「ユミ子、ユミ子は「チェンジシステム」を知ってますか？」アンナが由美子に尋ねた。

「バカ、由美ちゃんまで巻き込むんじゃない」颯太が慌てて言った。

「ユミ子も日本人なら仏教のこのついて知っているはずデス」

「私も仏教について詳しいわけじゃないけどあまり聞いたことはないわね。そもそも「チェンジシステム」って言葉は英語じゃないかしら？」由美子が本質を突く発言をした。

「……ソータ」再びアンナが颯太の方に向き直った。

「おっ、落ち着くんだアンナ・マリア・カリーニン君。俺は神社仏閣巡りが趣味で仏教については由美ちゃんより詳しい。「チェンジシステム」とはサンスクリット語で「仏の無限なる慈悲」という意味で……ウオっ」颯太は無言で放たれたアンナの突きをかわしながら焦ったように答えた。

「お前の兄貴も大概ムチャクチャ言うな」誠が感心したように言った。

「無限の慈悲」なら「チェンジ」なんてしないんじゃないかしら？  
「チェンジシステム」というのが何なのかは知らないけど」由香は呆れたように言った。

「颯兄の言い訳はサッカーで言えば「10-1」システムだから、一度ボールを取られたらほとんどキーパーと1対1になつて得点されるんだよ」

「それはシステムとは言わん。ほとんど口からでまかせじゃないか」誠が怒鳴った。

「スキル向上してそのレベルじゃ元はどれだけ酷かったのよ」

「いや、だから誰も颯兄の言うことはまともに聞いてないから、気にしてないんだけどね」陽向が涼しい顔で言った。

「お前の兄貴は本当に忍者の頭領一族の嫡子なのか？」

「歴代の土屋正蔵がどんな人間だったか大体想像つくわね」

三人は全くの他人ごととして成り行きを冷静に批評しあっていた。

## 第29話

「玄関だけで3話も使っているんですから、そろそろリビングに戻って下さい」今や徒手格闘戦に突入している颯太とアンナに向かって言った。

「3話って……君が何を言っているのかわからないよ、由美ちゃん。ドワツ」颯太がアンナの突きを避けながら答えた。

「そういう小ネタばかり入れているからいつまで経っても話が進まないんです」

「ギクツ」書いている人は10,0000のダメージを受けた。

「陽向ちゃんたちもいつまでもそこに立ってないで、リビングに入ってちょうだい。デートの反省会を始めるそうだから」颯太とアンナの格闘戦を観戦している3人に向かって由美子が言った。

「それもそうだね。じゃ、みんなリビングに行こう」陽向が誠と由香を促した。

「あの修羅場を見ながら全く動じてないな、この人は」誠が感心したようにつぶやいた。

「もう、どうでもいいからサツサと反省会とやらを終わらせて帰りましょう。お父さんに怒られちゃうわ」由香が言った。

まだ、戦いの余韻が冷めやらぬ様子の颯太とアンナを残して3人はリビングに向かい、陽向がリビングのドアを開けた。

「……………」

「おい、アホ」誠が陽向に向かって言った。

「なっ、何かなマコちゃん」陽向が答えた。

「お前、これから何やるって言ってた？」

「今日の楽しいデートの反省会……のはずなんだけど」

「これのどこが「楽しいデートの反省会」をやる会場なのよ」由香も陽向を責めるように言った。

3人の目の前には愛子と陽大が床にうつ伏せに倒れこんでおり、ソファアールでは康太横になつて輸血していた

「デートどころかサバトとか黒ミサとかの怪しい集会でもやってたん

「じゃねえのか？」

「いや、予定ではデートしてきたはずなんだけど」

「一体どんなデートすればこんな瘴気が漂うような雰囲気になるのよ」

「いや、あたしに聞かれても」

「まるで野戦病院だな」

「あら、3人ともどうして入り口に立ったままなの？早く中に入ってちょうだい」由美子が言った。

「いや、中に入れて言われても……」陽向が口ごもった。

「しかし、この人も大概物事を気にしない人だな」誠は更に感心したように言った。

「これ何があつたんですか？」由香が尋ねた。

「たぶんデートで疲れたんじゃないかしら。はしやぎ過ぎたのね、

きつと」由美子が微笑んで答えた。

「(一体、どんなデートすりや輸血が必要になるんだよ)」

「(物事に動じないにも程があるわね)」

「(それより愛ちゃんと陽向がピクリとも動かないんだけど、まだ生きてるのかな?)」

「だからいい加減に忘れろ」

「後で詳しく問い詰めマス」

颯太とアンナが騒ぎながらリビングに入ってきた。

「ん?どうしたお前たち。立ってないで座ったらどうだ?」

「いや、颯兄。これってどうしたの?」陽向が尋ねた。

「これ?何のことだ」颯太が不思議そうに答えた。

「何か変わったことがありますか?」アンナも同調するように言った。

「(おい、誰もこの光景を不審に思っていないぞ)」

「(一体、あなたの家の日常生活はどうなってるのよ)」

「(いや、3人とも細かいことは気にしないタイプだから)」

「(細かいって半分が死にかけてるじゃねえか、気にしないで済まされるレベルじゃねえぞ)」

「(たっ、多分デートがとても楽しかったんだよ)」  
「(クリミアに傭兵で行ったってこんなざまにはならんぞ)」  
「(無事な人たちが誰も気にしていないというのも凄い話だわね)」  
「(とりあえず息はしているみたいだから大丈夫だよ、きつと)」  
「おい、3人とも何をゴチャゴチャ話しているんだ。そろそろ反省会を始めるぞ」 颯太が3人に向かって宣言するように言った。  
「いや、この場の1/3の人間が死にかけているってのに反省会もへツタクレもないだろう」 誠が言った。  
「まあ、疲れているんだろう。そろそろ起こすか」 全く気にする様子もなく颯太が答えた。  
「疲れってレベルじゃねえんだよ。あんたんちの基準で考えてるんじゃないぞ」  
「ハツハツハ、マコちゃんは意外と神経質なんだな」 颯太が笑った。  
「全然、話を通じてないわね」 由香が呆れたように言った。  
「それはまあ、いつものことだからいいとして」 陽向が言った。  
「いいわけあるか!!」 誠が怒鳴った。  
「マコちゃんが何を気にしているのかよくわからんが、何か急いでいるようだからアンナ君、みんなを起こしてあげなさい」  
「起き上がれるの? あれ」 由香がツブやいた。  
「ハイ、みなさんいつまでもノンキに寝ていないでそろそろ起きて下さい」 アンナが3人を揺り起こした。  
「寝ているわけじゃないと思うんだが」  
「…………ピクッ」  
「うっ、動いたぞ」 誠が叫んだ。  
「…………ピクッピク」  
「逃げた方がいいんじゃないかしら? あれに噛まれたらゾンビになりそうよ」  
「…………ピクッピクッピク」  
「バイオハザードじゃないんだから」  
「ウウウウウウっ」とうめき声を上げながら愛子と陽大が床から起き上がった。

「おい、康太もいつまでも血で遊んでないでトツトと起きろ」颯太が康太蹴っ飛ばした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・遊んでいるわけではない」康太がうつすらと目を開けた。